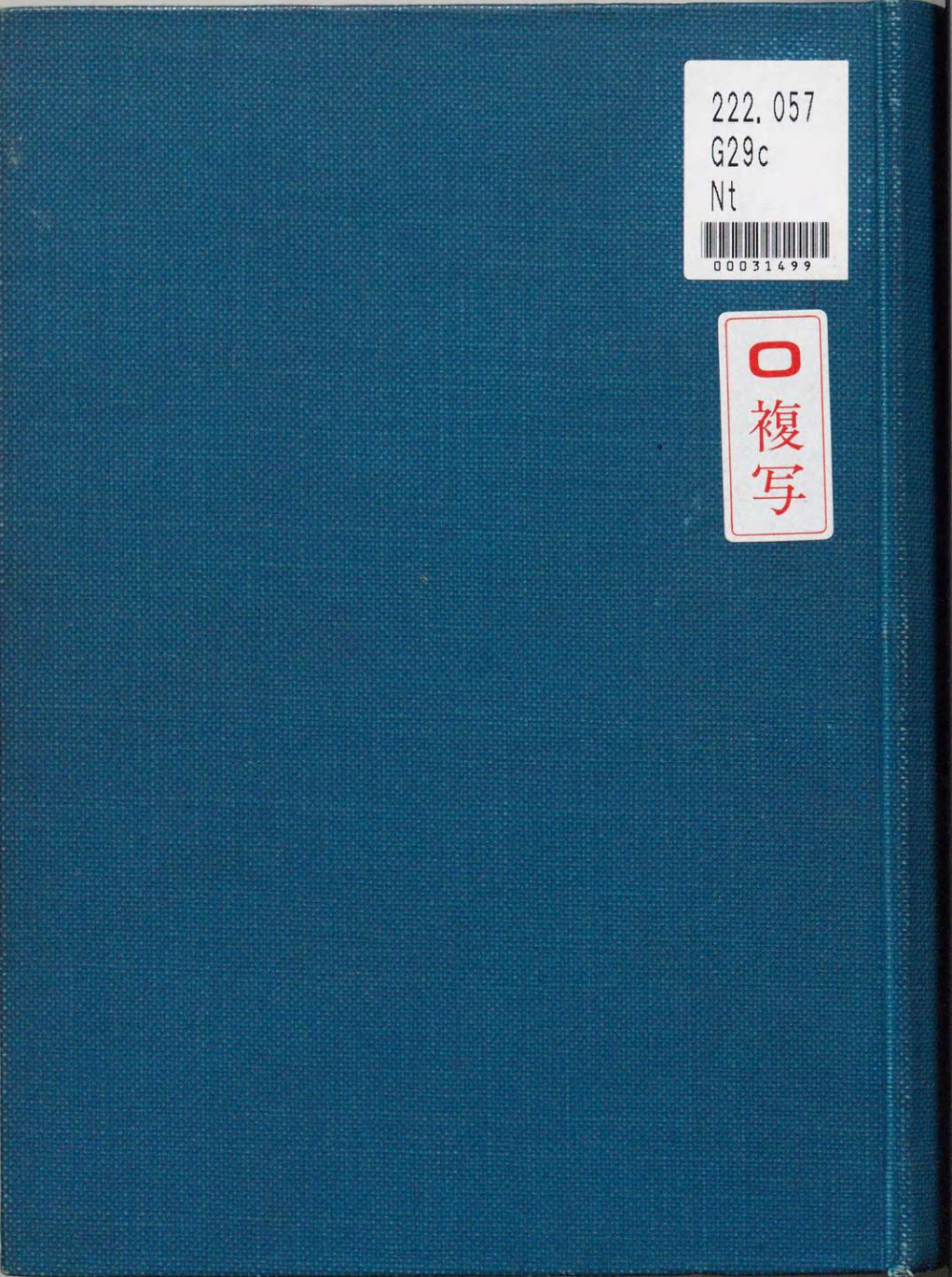


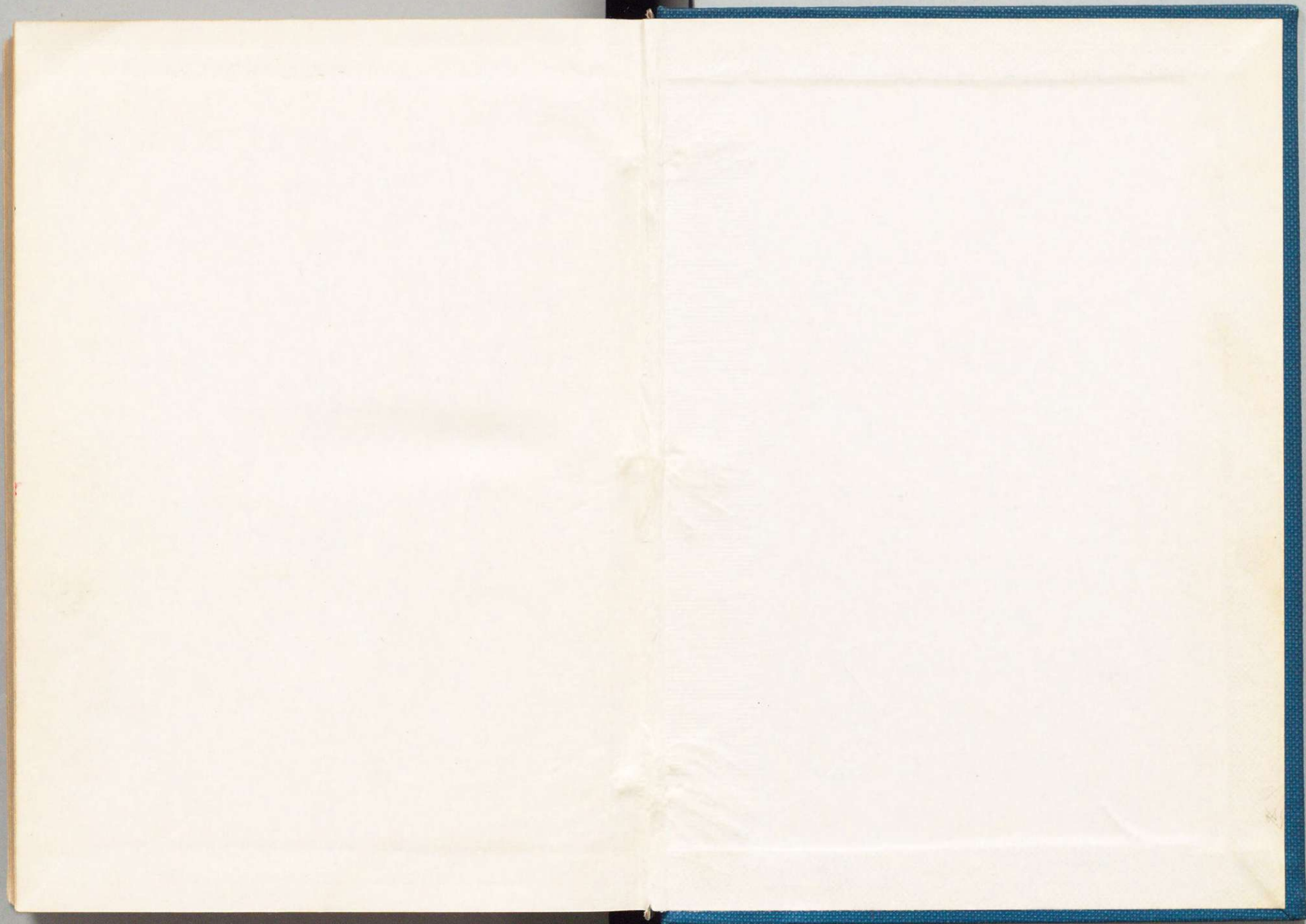


222,057
G29c
Nt



〇
複写





那珂通世譯注

成吉思汗實錄 全

筑摩書房刊

222.057 G29t N

222.057
G29c
Nt

序

恩師那珂通世博士逝かれて茲に三十有四年歲月流るゝが如くにして、當年紅顔の一學生であつた私は、何等爲す所なくいつの間にか博士晩年の壽齡に達した。曾て大塚の覺舎に於て蒙古文字を板書し、新刊の成吉思汗實錄を手にせられつゝ、博士が「この書に魯魚の誤りが一つでもあつたら指摘せよ」と得意氣に述べられたあの俤は、今猶髣髴として眼前に浮び出て來るが、博士の該博なる學問、卓拔せる識見、雄大なる氣魄に對して、餘りにもかけ離れてゐる今の私自身を顧みる時、慙愧として序筆の甚だ進まざるを嘆ずるのは、累を恩師に及ぼすなきかを惧るゝが爲である。

わが國の東洋史學科創設の元勳那珂博士は、嘉永四年盛岡城下に生れ、幼にして聰

成吉思汗實錄の序



31499

敏長じて和漢の學に通じ、養父通高先生が吉田松陰先生と親交ありし感化をも受けられ、二十二歳の時慶應義塾に學び、後十數年教職を轉々して、明治二十二年の頃、四十歳ばかりで支那通史五冊を刊行された。これは劃期的の名著で、支那の太古から宋末に至る迄の政治文化上の重要な史實を、流暢な漢文で敘述されてゐるので、後に支那にも翻刻せられ、今日でも吾等の好參考書として座右に缺く可からざるものであるが、博士は宋に次ぐ元代の研究に於て蒙古語學修の必要を痛感し、一旦史筆を抛つて語學の修養並に根本史料の検討に没頭せられ、晩年遂にその學を大成して本書を著作されたのである。

本書の原文は長篇の序文にも詳敘されてゐる如く、元朝に秘藏されてゐた特殊の史料で、蒙古の太祖成吉思汗の事蹟を主とし、これに祖先の傳説及び子太宗窩濶台の行實を附加したものであり、もと蒙古語を秃兀兒字ツェルで書いてゐたのを、明初に漢字に書き改めたが、その際先づ漢字を音標文字として蒙古語を音の儘に記し、次に各語に漢字の傍訓を施してその意義を示し、別に本文の大意を部分的に漢文に要約せるも

のを附してゐたのである。後に坊間には、右の大意の漢文のみが纂輯されて「元朝秘史」の名に依り行はれてゐるが、人名や事實の誤謬が少くないので、博士は前記の三様の體を具へた「忙豁論 紐察 脱卜察安」モヒハルン ニウサ アトプサア譯して「蒙古の秘史」といふを得て、蒙古語法に基き嚴密に修訂せられたのであり、その内容がわが「古事記」に該當するといふ趣旨から古體の假名交り文に翻譯せられ、これに精緻な注釋を加へて「成吉思汗實錄」と名づけ出版されたのである。

されば本書の編纂中に於ける博士積年の勞苦は、洵に察するに餘りあるのであるが、これに依つて蒙古創業時代の真相が闡明されたことは内外の學者が今に至る迄感謝措く能はざる所で、別に「那珂通世遺書」に含まれてゐる「成吉思汗實錄續編」百五十二頁、校正増注親征錄百四十九頁、及び別冊の「那珂博士校訂元史譯文證補」五百二十六頁等と共に、博士がわが國の蒙古史研究に先鞭を著け、榛莽を披いて大道を築き上げられた學界の偉功は、恰も本書の主題たる成吉思汗の鴻業にも比肩すべきものであらんと謂はなければならぬ。

然るに本書は、初版僅に數百部に限定されてゐたものと見え、出版後兩三年にして早くも店頭に姿を没し、世の篤學者をして披閱の難を嘆ぜしむるもの年既に久しく、近時偶々古書肆の目錄に發見することあるも、數十金を投ぜざれば入手し得られないう程の貴重なものとなつてゐる。時局下蒙古研究の益々勃興せる際、筑摩書房の奉仕的出版に依り、茲に本書の再版を見るに至つたのは、眞に學界の慶事であつて、私は恩師の尊い精神が再び甦つて學術の進歩竝に現今の國策に貢獻せられる所の偉大なるものある可きを、深き感激を以て期待してゐるのである。

昭和十七年(成吉思汗紀元七百三十七年)十月廿八日、

蒙古聯合自治政府建設五周年記念日に當りて

門弟 有 高 巖 謹識

成吉思汗實錄の目錄

序文。

有 高 巖 一より四まで

序論。

一より八六まで

元朝祕史の來歴

皇元聖武親征錄、喇失惕額丁の集史の來歴

一

修正蒙古祕史附けたる蒙古祕史の子孫本支の系圖

二五

蒙古祕史の和文譯本の標題

三二

蒙古の古文と和譯文

四六

元朝祕史の音譯法

五五

卷の一。成吉思合罕の根原、蒼狼白鹿より也速該巴阿禿兒の死まで

四一より四〇まで

蒼狼白鹿の子孫十一世

一

豁哩刺兒の阿闌豁阿を朶奔篋兒干の娶り

三

兀浪罕の貧人の子と鹿の肉との取換へ

七

阿闌豁阿の生める天の子三人

九

李端察兒蒙合黑の佗住ひ

統格里克小河に居る民を李端察兒兄弟の襲ひ取り

札荅喇の札木合の祖

忙豁勒のあまたの支族

合不勒合罕の管き、塔塔兒の主因の民に俺巴孩合罕の虜はれ

也速該巴阿禿兒の妻狩

忽圖刺合罕の即位

帖木眞拙赤合撒兒合赤溫額勒赤帖木格幹惕赤斤帖木倫女の生れ

也速該巴阿禿兒と翁吉喇惕の德薛禪と結べる子女許婚の約

塔塔兒の民に也速該巴阿禿兒の害せられ

卷の二 帖木眞の幼き時より篋兒乞惕の難まで

訶額命兀眞と俺巴孩合罕の二妃とのいさかひ、乞牙惕泰赤兀惕の分離

訶額命兀眞の艱難せる子育て、兄弟の不和、母の厳しき叱り

泰赤兀惕の襲ひ、帖木眞の虜はれ、速勒都思の鎖兒罕失喇父子の助け

母子の再會、桑古兒小河の邊に母子の移住

馬盗人を帖木眞の追駆け、阿魯刺惕の李幹兒出の義侠

翁吉喇惕の李兒帖兀眞を帖木眞の親迎

阿魯刺惕の李幹兒出の來屬

客喇亦惕の脱幹哩勒罕を帖木眞兄弟の訪問、脱幹哩勒罕の喜び

兀児罕の者勒篋の來屬

三種の篋兒乞惕の襲ひ、李兒帖兀眞ら三女の虜はれ

不兒罕獄に救はれたる帖木眞の感謝

卷の三 忙豁勒客喇亦惕札荅喇の合力より成吉思合罕の即位の初まで

帖木眞の求に應ずる脱幹哩勒罕札木合の援け、篋兒乞惕の脱黑脱阿の遁れ去り

帖木眞李兒帖の再會、李兒帖を收めたる赤勒格兒字闊の懺悔

別勒古台の母の逃げ匿れ、三百の篋兒乞惕の殲滅

脱幹哩勒罕札木合に帖木眞の感謝、拾ひ子曲出三將の引上げ

帖木眞札木合三たびし直せる安荅の盟

札木合の異心、帖木眞の分離、拾ひ子別速惕の闊闕出

帖木眞に屬する忙豁勒諸部の眾、巴阿囉の豁兒赤兀孫の神告

九三

九〇

八九

八六

八五

八二

七三

一〇四

七三より

七一

六九

六六

六五

六四

六三

六二

五八

四四

四四

四九

五七

四一

七二より

四一より

三八

三三

三二

三一

二八

二六

一八

一七

一六

一一

忙豁勒諸部の眾に戴かるゝ成吉思合罕
忙豁勒の新庭の政務分任

九八
九九

卷の四

舊臣を勞ひ新附を獎むる諭旨、脱斡哩勒罕の賀辭
札木合のいやみごとより鎖兒罕失喇者別の來屬まで
阿勒壇忽察兒に言ひ遣る札木合のいやみごと

一〇二
一〇五
一〇八

札木合の弟台察兒馬盜人の殺され、答蘭巴勒主惕の(十三翼の戰

一〇六

兀嚕兀惕忙忽惕晃豁塔惕の來屬國來の祝ひ、宴席の狼藉

一〇八

乞塔惕の阿勒壇罕の塔塔兒征伐、成吉思合罕脱斡哩勒罕の應援

一一二

札兀惕忽哩となる成吉思合罕王罕と呼ばるゝ脱斡哩勒罕

一一四

塔塔兒の營より拾はるゝ失乞刊忽都忽

一一六

主兒勤の撤察別乞泰出の滅ぼされ、札刺亦兒の木合里らの來屬

一一六

主兒勤の營より拾はるゝ字囉兀勒訶額倫額客の養ひ子四人

一二〇

主兒勤に屬せし勇猛なる民の緣由、別勒古台に不理字闊の殺され

一二一

札木合を君に戴く十一部の亂、成吉思合罕王罕の出馬、闊亦田の役

一二四

諸部の潰走、兩罕の追撃、成吉思合罕の重傷を者勒篋の看護

一二九

卷の五

帖木眞を喚ぶ合答安鎖兒罕失喇の女、鎖兒罕失喇別速惕の者別の來屬
泰赤兀惕の誅滅、主君を逃がす巴阿驪の納牙阿の明智

一三四
一三九
一三五
一三九

王罕の弟札合敢不の來屬、王罕也速該の昔の親交、客喇亦惕の内亂、王罕の逃げ走り、

父の友に對する成吉思合罕の厚遇

一四四

王罕の弟ども官人どもの王罕を譏り、王罕に辱められ

一四七

成吉思合罕の塔塔兒征伐、答蘭捏木兒格思の戰、阿勒壇忽察兒答哩台の軍法違反

一五〇

四種の塔塔兒の屠られ、密議を漏す別勒古台

一五二

塔塔兒の也速干合屯、その姉也速合屯也速合屯の塔の殺され

一五四

王罕の篋兒乞惕征伐

一五七

成吉思合罕王罕の乃蠻征伐、札木合の離開、成吉思合罕の離れ還り

一五八

乃蠻の名將に王罕の襲はれ、四傑の救ひ、王罕の感謝、父子の盟約

一六二

媾談の不協、札木合らの協議、讒言その子你勒合桑昆の線言に王罕の迷はされ

一六六

成吉思合罕を欺く桑昆の陰謀、晃豁壇の蒙里克額赤格の警告

一七一

不意打の謀を也客扯哩の口走り、成吉思合罕に巴歹乞失里克の密告

一七三

卷の六。

成吉思合罕の東走より客喇亦惕の王罕の敗滅まで

成吉思合罕の東走、王罕の追襲、兩軍の力を較ぶる、王罕、札木合の問答

合刺合勒只惕の沙漠の戦、桑昆の負傷

軍の引上げに、孛斡兒出、孛斡兒、孛斡兒の後悔

塔兒忽惕の合答、安答、都兒罕の情報

合勒合河の行軍、忙忽惕の忽亦勒答兒の死、翁吉喇惕の帖兒格阿篋勒の降附

統格小河の駐營、王罕の背信を責むる、成吉思合罕の二使、王罕の悔痛

札木合を嘲り、阿勒壇忽察兒を責め、速客度の脱斡哩勒に告ぐる使命

桑昆の不孝を誡むる、安答の忠言、桑昆の冥頑

巴勒主納兀兒の駐營、注、飲渾水、即、巴勒主惕の諸説

拙赤合撒兒の逃げ還り、王罕をたばかる、成吉思合罕の二使

者者額兒溫都兒の戦、王罕、桑昆の敗走、忽亦勒答兒の遺族の賞賜

卷の七。

塔孩、巴歹、乞失里克の恩賞より、篋兒乞惕征伐まで

速勒都思の塔孩の恩賞、札合敢不の二女、巴歹、乞失里克の恩賞、捕虜の分配

乃蠻の將に、王罕の殺され、桑昆を棄てたる、闊闊出馬丁の誅せられ

乃蠻にて、王罕の頭の祭、可克、薛兀撒卜、喇黑の慨み、言、塔陽罕の大言

老将の諫に、塔陽罕の忤ひ、注、古惕の緇、背帖、延客、額兒の軍議

韓兒訥兀山の駐營、千戸、牌子頭、六扯兒賓の任命、宿衛侍衛等の選擇、職掌

乃蠻征伐、兩軍斥候の衝突、朶歹、扯兒必の疑兵の謀

敵の鋒を避くる、塔陽罕の協議、父を罵る、古出魯克罕、君を罵る、斡哩速別赤

塔陽罕の奮進、忙斡勒の逆戦、塔陽罕、札木合の問答

札木合の心變り、乃蠻の潰敗、塔陽罕の虜はれ、古出魯克の遁れ

篋兒乞惕の脱黑、脱阿別乞の敗走、答亦兒兀孫の女、忽蘭の拜謁、納牙阿の忠勤

卷の八。

篋兒乞惕の敗滅より、兀嚕兀惕の主兒、扯歹の恩賞まで

韓歌歹の妻となる、篋兒乞惕の婦、合合勒の寨を、沈白の攻撃、脱黑、脱阿父子を、成吉思

合罕の長追、脱黑、脱阿の戦死、乃蠻の古出魯克罕、脱黑、脱阿の諸子の奔竄

兀嚕罕の速別、額台、巴阿秃兒の受くる、鐵軍、窮追の勅

己が従士に、札木合の虜はれ、不忠の臣の誅せられ、舊友を憐む、英雄の寛宥

札木合の懺悔、命に安ずる、善言、成吉思合罕の情あり、義ある處分

韓難河の源なる、第二次の即位、札刺亦兒の木合里の王、號別速惕の者、別の西征

一七七より
二二〇まで

一七七

一八二

一八四

一八七

一八八

一九〇

二〇〇

二〇五

二〇七

二一三

二一七

二二四より
二五四まで

二二二

二二四

二二六

二二〇

二二三

二三七

二三九

二四三

二四九

二五一

二五五より
二九九まで

二五五

二五九

二六三

二六五

二六九

佐命の功臣八十八人、九十五の千戸の官人 二七二

功臣の恩賞、塔塔兒の失吉忽秃忽の愛だれ、太祖の温諭、斷事官の任命 二八五

晃豁壇の蒙力克額赤格の舊恩、羣臣の首位 二八九

阿魯剌惕の孛斡兒出の義俠、忠烈、右手の萬戸 二九〇

札剌亦兒の木合黎の受けたる神告、左手の萬戸 二九三

巴阿囉の豁兒赤兀孫の讖言、三十妻の舊約の履行 二九四

兀魯兀惕の主兒扯歹の數度の戦功、札合敢不の長女亦巴合別乞の下賜 二九五

卷の九。 忽必來を賞する勅より番士の貴重職掌威嚴まで 三〇一

巴魯剌思の忽必來の武功、四狗四駿二先鋒の稱、注意を受くる木匠別都温 三〇一

格你格思の忽難の忠勤、拙赤の下の萬戸、闊闊搠思迭該、豁兒赤と四人の直臣 三〇二

をさななじみなる兀魯罕の者、斡篾父と別に千戸となる晃豁壇の脱命、扯兒必 三〇四

注古兒厨官の巴牙兀惕、統領孛斡忽勒と二人にて食物の給散 三〇六

訶額命兀眞の養ひ子四人の恩返し、拖雷、斡歌歹を救へる孛囉忽勒夫妻の功 三〇六

女子の恩賞、豁兒赤兀孫に賜はる別乞の位 三一〇

忙忽惕の忽亦勒、斡兒捏古思の察罕、豁阿二人の遺族の恩給 三一〇

一千の宿衛、一千の箭筒士、八千の侍衛の長官どもの任命 三一八

侍衛の四班の宿老どもの勤務 三二六

番士の貴重職掌威嚴 三二八

卷の十。 老宿衛大侍衛等の美稱より晃豁壇惕の破滅まで 三三一

老宿衛大侍衛老勇士大箭筒士の稱、愛撫すべき萬の番士 三三一

宿衛の雜務、從征陪審、箭筒士侍衛の屯營、朶朶互扯兒必の殿中取締 三三三

忽必來那顔に合兒魯兀惕の降り 三三六

蔑兒乞惕の遺尊を速別額台巴阿秃兒の追ひ窮め 三三八

乃蠻の古出魯克罕を者別那顔の追ひ窮め 三三九

委兀惕の亦都兀惕の降附、皇女阿勒阿勒屯の下嫁 三四一

皇子拙赤に林の民の降附、斡亦喇惕、汪古惕に皇女の下嫁 三四四

孛囉忽勒那顔の戦死、朶兒伯多黑申の秃馬惕、征服、豁兒赤忽都合別乞の助かり 三五〇

母と子弟とに民の分配、三弟四子の傳

三五二

晃豁塔惕に合撒兒の打たれ、帖卜騰格哩の讒言、母に怒られたる太祖の愧懼

三五五

帖卜騰格哩の横暴、帖木格、斡惕赤斤の泣き訴へ、孛兒帖兀眞の慨み言

三五九

帖卜騰格哩の打取り、死體の失せ、蒙里克額赤格の責められ

三六四

卷の十一。金國征伐の始まりより(今考定太祖西征之役まで)

三六九より
四八五まで

金國征伐の始まり、綽山の戰、居庸關の戰、東昌の不意打ち

三六九

金の丞相の請和の建議、金帝の屈服

三八〇

唐兀惕征伐、駱駝貢獻の願ひ、辛未の一舉に二國の降服

三八三

甲戌の金國再征、灑關の戰(注、撒勒只兀惕の撤木合巴阿秃兒の南侵)

三八六

中都の近郊の駐蹕、塔塔兒の失吉忽秃忽の廉直

三九一

金の質子、拙赤合撒兒の東略

三九四

西域征伐の始まり(注、闊喇自姆の異稱、勃興、鬻端也、遂合屯の建議、太祖の嘉納、拙赤察

三九八

阿歹兄弟の爭察、阿歹の傳、闊搠思の訓諭

四〇七

皇子四人の意見、斡歌歹相續の承諾、太祖の兄弟五人の相續人

四一〇

唐兀惕の徵發、阿沙敢不の直言

四一〇

己卯の出征(注、太祖西征の路順者、別速別額台脫忽察兒三將の速勒壇追擊、脫忽察兒

四一〇

の軍令違反、失吉忽秃忽の敗北(注、西游記の月日の確實、信度河の戰、巴魯安原の駐

四一一

夏者刺列丁を札刺亦兒の巴刺の追驅け者、別ら三將の賞罰

四二九

拙赤察阿歹、斡歌歹の兀兒堅只、拖雷の闊喇散侵掠、斡歌歹の統軍

四三九

斡惕喇兒の落城、ト哈兒薛迷思干の戰(注、二城の名稱、地理沿革集史の敘事、金寨嶺の

四三四

避暑(注、鐵門關の地理紀行、拖雷の凱旋(注、闊搠散諸城の地理)

四四六

三皇子の我儘を太祖の怒り、三大臣の諫め、三豁兒赤の建議、搠兒馬罕の出征

四五二

朶兒朶黑申の出征

四五三

速別額台巴阿秃兒の遠征(注、十一部落の地理、喇失惕多遜喀喇姆津元史の記事)

四六四

答魯合赤の設け、牙刺哇赤馬思忽惕父子の用ひられ

四六八

七年の遠征、巴刺の印度侵掠、太祖の凱旋(注、西游記なる壬午の回駕、角端の奇談、額兒

四七五

的失の駐夏(注、丘長春の歸路、癸未甲申の駐夏、駐冬、乙酉の歸國)

四八七より
五九一まで

(今考定太祖西征之役)

卷の十二。唐兀惕最後の征伐より庚子の大忽哩勒台まで

四八七より
五九一まで

唐兀惕最後の征伐、太祖の負傷、阿沙敢不の暴言(注、阿刺篩額哩合牙額哩折兀の蟹、賀

四八七より
五九一まで

蘭山の戰、雪山の駐夏、元勳の恩賞

四八七

唐兀惕の不兒罕の來降(注、兀喇孩、朶兒篋該の解、元史に委しき征夏の師、不兒罕の貢

獻(注、丸を尙ぶ蒙古の俗、不兒罕の殺され、脱命の恩賞

四九六

唐兀惕の殲滅、太祖の昇遐(注、集史の記事、太祖の崩じたる地と日と、太祖臨終の言、起

鞏谷の所在、太祖紀の滅國四十)

五〇三

太宗の即位(注、多遜の述べたる即位の禮、幼子に産を譲る北狄の俗、元史の考證、番士

國民の交付

五〇九

巴黑塔惕の再征、十一部落の再征、長子出征の定め

五一四

金國征伐の議

五一九

太宗の親征(注、金史、哀宗紀、元史、太祖紀の摘録、山川の神の祟、拖雷の身替り

五一九

金國の平定(注、探馬臣の解、金元兩紀の摘録の續、合喇豁魯木の考證)

五二六

巴黑塔惕の征服、貢賦、十一部落の平定(注、西史なる巴秃西征の摘録、女真高麗の征定、

(注、莎郎合思の稱、元史高麗史の摘録)

五四三

主帥巴秃を不理、古余克の罵り、二人を太宗の怒り、諸王官人の奏議、二人を太宗の叱

り(注、巴秃と古余克不理との永き不和)

五五五

宿衛箭筒士侍衛の舊制の申筋

五六二

羊牝馬の賦、倉庫の設け、營盤の分與、徹勒地方の井掘り、站の設け、察阿歹の協贊、諸王

羣臣の大同(注、元史、站赤の制)

五七〇

太宗の四功、四過(注、訶、倭兒思の引ける太宗の逸事、西人の批評)

五七八

庚子の大忽哩勒台(注、太祖の四つの斡兒朶、遊牧の民に行はるゝ聚會、定宗即位の大

會の盛況)

五八七

元朝祕史關係文獻簡目

索引

那珂博士引用書索引

年表

88 功臣表

諸部の人々

後記

成吉思汗實錄の目錄終り。

一より六まで
三〇一より三九まで
一より七まで

成吉思汗實錄の序論

元朝秘史の來歴

成吉思汗實錄は、余が今翻譯したる元の初の舊史にして、その原本は、東京高等師範學校に藏する元朝秘史の寫本なり。この來歴の中に「此書」又は「今本」こあるは、皆この原寫本を指せるなり。此書は、もと蒙古字の書を漢字に譯したる者にて、その蒙古字の原本の名は、忙豁侖紐察脫卜察安Monggholun Niucha Tokhanと云ひ、譯すれば蒙古の秘史なり。忙豁侖は即ち忙豁勒温Monggholun Niucha、忙豁勒Monggholun Niuchaは蒙古温Monggholun Niuchaの「にて、蒙古の」なり。紐察Niucha即ち你兀察Niuchaは、你兀Niuchaは秘miす、察chaは動詞動詞を形容詞形容詞にする語尾語尾にて、「秘miしたる」秘miさる

直に史臣に命じて書かせたる者ならん。

此書今は蒙古語を漢字にて音譯したる者のみ傳はりたれども、本は蒙古の國書なる委兀兒字にて書きたる者なるべし。蒙古には、もご文字なかりしが、太祖の乃蠻を滅ぼしたる時より始めて委兀兒字を用ひて蒙古語を書く事Naianなれり。元史の塔塔統阿の傳に依るに、塔塔統阿は、畏兀の人にて、その國の文字に委しく、乃蠻の大陽罕Tayang Khanに重んぜられ、その金印金印と錢穀錢穀を掌りしが、乃蠻滅びたる時、塔塔統阿は、その印を懷き逃れんとして擒はれ、太祖に「大陽の人民疆土、悉く我に歸したるに、汝印を持ちて何くにか往く」と詰られ、之を守るは、臣の職なり。故主を求めて之を授けん欲すと云ひたれば、太祖は「思孝の人なり」と感じて、この印は、何にか用ふると問へり。塔

塔統阿は、錢穀を出納し、人材を任用する一切の事に用ひて信驗しんけんとするなり」と對へたり。太祖實にもこて、此人を左右に居き、これよりすべて勅を發するには、始めて印章を用ひ、仍て此人に命じて之を掌らしめたり。又汝は本國の文字を深く知れりや」と問はれて、知るだけを悉く對へたれば、太祖の旨に稱ひ、遂に命ぜられて太子諸王に教へ、畏吾字を以て蒙古語を書く事したる由見ゆ。委兀兒は、唐の回紇にて、捏思脫兒宗の傳道師の教化を受けて、夙くより文字を用ひたりしが、元の太祖四年に、委兀兒國主、蒙古に降りてより、委兀兒の名士の蒙古に事へて文臣ぶんしんとなる者多く、委兀兒字は遂に蒙古の國書こくしょとなれり。されば此書の文字は、もご委兀兒字なりけん。こと疑ひなく、之を書きたる人も蓋委兀兒人ならん。

世祖の時、西蕃の聖僧八思巴に命じて、蒙古新字を作らしめ、天下に頒行したれども、その新字は、不便なる文字にて、遍くは行はれざりし程なれば、此書の原字を書き改むるには、至らざりしなるべし。後に引ける鄭曉の今言の文に據れば、此書の原字の委兀兒字の儘なりしこと甚だ明かなり。

元史察罕Chaghan 察罕二人あり。一人は、卷の百二十なる西夏の人にて、この察罕の傳に「博覽強記、通諸國字、書云云嘗譯貞觀政要以獻帝(宗仁)大悅、詔繕寫、徧賜左右、且詔譯帝範、又命譯脫必赤顏、名曰聖武開天記、及紀年纂要、太宗平金始末等書、俱付史館」こあり。貞觀政要帝範を譯したるは、漢文を委兀兒字蒙古文に譯したるなり。脱必赤顏を譯したるは、蒙古文を漢文に譯したるなり。この聖武開天記は、即ち今の皇元聖武親征錄なること、は後の親征錄の來歴の條に言ふべし。

又虞集の傳に、明宗の命を受けて、經世大典を編修する時、以累朝故事有未備者、請以翰林國史院修祖宗實錄時、百司所具事蹟、參訂翰林院臣言於帝曰、實錄法不得傳於外、則事蹟亦不當示人。又請以國書脱ト赤顏增修太祖以來事蹟、承旨塔失海牙曰、脱ト赤顏非可令外人傳者、遂皆已」こあり。

脱必赤顏も脱ト赤顏も、紐察脱ト赤顏の略稱にて、此書の原本に修正を加へたる者なり。修正したりと云ふ理由は、後修正をば加へたれども、祕史は祕史として、深く内府に藏し、外人に示さざりし故に、世には廣まらざりき。

又虞集の傳に「初、文宗在上都、將立其子阿剌忒納答剌爲皇太子、乃以安歡帖穆爾太子(文宗の兄なる)乳母夫言明宗在日、素謂太子非其子、

黜之江南驛召翰林學士承旨阿隣帖木兒奎章閣大學士忽都魯篤彌實書其事于脫卜赤顏又召集使書詔播告中外二こあり。これは文宗その兄明宗を弑して立ちたる後明宗の長子を誣ひて八不沙皇后が他人に通じて生みたる子なりと云ひその事を祕史に書かしめたるなり。又前の察罕の傳の文を見るに紀年纂要太宗平金始末等の書こあるも脱卜赤顏を譯して成れる趣に聞ゆ其等に依りて思へば祕史の書は太祖太宗の事を録したる者のみならずその後の歴朝の事を録したる者もありしならんが其等の書は後の世には傳はずしてその斷簡殘編を見たる人ありし事をも聞かず。

明の太祖の洪武二年三年宋濂王禕等が勅を蒙りて元史を修むる時には金匱之書悉入於祕府二こありて元代には法不得傳於外二こ

云へる十三朝の實錄も皆北京の祕府より南京の祕府に移りたれば原本祕史も修正祕史も歷朝續修の祕史も皆明人の手に渡りしならん。されども當時の史臣は委兀兒字も蒙古語も解する者なきが故に修史の際蒙古文の書を參考に用ふるこ能はざりき。今太祖本紀の大抵察罕の譯したる聖武開天記即ち今の聖武親征錄に合へるは直に開天記に本づきたるにも由り又成宗の大徳七年に翰林國史院の奏進せる太祖實錄は既に修正祕史に本づき開天記に大に異ならずして元史はその實錄に本づきたるにも由れるなり。

此書は原本の蒙古文を原音のまゝに漢字にて音譯し本文の右側に蒙古語を一語ごとに漢字にて俗語に譯し一段一節の終りに

又は段落の切れざる處にても、文章の長過ぐる處は程善く切りて、本文の大意を漢字にて俗文に譯し、本文よりは三字ほど下げて録せり。故にこの譯本は、委兀兒字の漢字音譯と蒙古語の漢字俗語譯と蒙古文の漢字俗文譯と三様の譯を備へたる珍しき本なり。今の寫本は、全部十二卷を六冊に裝釘し、正集十卷は五冊、續集二卷は一冊となれり。

この翻譯は、明の太祖の史官にて蒙古語に通じたる者の手に成り、元朝秘史の名も、その時に與へられたるなり。明の鄭曉の今言卷の四に、鄭曉の吾學編四夷考「洪武十五年、命翰林侍講火原潔等編類華夷譯語、上以前元素無文字、發號施令、但借高昌書製蒙古字、行天下、乃命原潔與編修馬懿赤黑等、以華言譯其語、凡天文地理人事物類服食器用、靡不具載、復令取元秘史、以切其字、諧其聲音、既成、詔刊布、自是使臣往來朔漠、皆能得其情」とあり。顧炎武の日知錄之餘卷の四を張穆の引きたるには、「洪武十五年正月丙戌」とあり、又馬懿赤黑は、*馬沙亦黑*とあり、その他は大抵同じ。露西亞の僧正帕刺的兀思は、*洪武實錄*に此事見ゆと云へり。明の太祖の實錄は我輩いまだ閱讀の機會を得ず。高昌は、委兀兒の地の古き名なり。借高昌書製蒙古字、とは、委兀兒字を借りて稍増損して蒙古字としたるを云ふ。別に蒙古字を作りたるには非ず。故に元史には畏吾字と云ひて蒙古字と云はず、又その畏吾字を直に國書とも云へるは、畏吾字は即ち蒙古字なればなり。

取元秘史、以切其字、諧其聲音、とは、秘史の蒙古字の音韻を分析し、

漢字を當て、善く諧はしむるを云ふ。蓋華夷譯語の書は、蒙古語の音も義も漢字を以て譯するが故に、その材料を祕史より取らんが爲に、先づ祕史を音譯語譯文譯したるなり。その目的は蒙古の史を考ふるに在らずして、蒙古の語を考ふるに在りき。原文に人の名地の名部落の名などあまた重なる處を、譯文には只その一つを擧げて、その他は只「等」の字又は幾人幾部落などの語を用ひて略きたるここ多きは、これが爲なり。

語譯文譯の中に、音譯の忙豁勒蒙を達達と撒兒塔兀勒中亞細亞の莫哈撻惕教徒を回回と中都金の中都を北平と北京金の北京今の略刺沁右翼を大寧と南京金の開封府を汴梁と譯したるが如きは、明人の譯なることを察するに餘りあり。殊に金の中都なる今の北京を北平と云ひたるは、明の成

祖の遷都の前に限れる名なれば、この譯本は、洪武の史官の手に成れること疑ひなし。又音譯の中にも、二人なる阿兒孩合撒兒と巴刺Arkhai Khassar Balaを一人の阿兒孩合撒兒巴刺と、捏兀歹部の察合安兀汪を或は捏兀歹と察合安兀汪と二人とし、或は捏兀歹察合安兀阿と云ふ一人の名とし、塔塔兒Tatar名部の阿勒赤塔塔兒Alai Tatar分部の名の札鄰不合を塔塔兒の阿勒赤と塔塔兒の札鄰不合と二人とし、翁吉喇惕の迭兒格額Orghitai Dergokenel篋勒を迭兒格額と顯篋勒と二人とし、乃蠻名部の古出兀惕乃蠻Naiman Chuchut Naimanの部の不亦嚕黑罕を乃蠻の古出兀惕と乃蠻の不亦嚕黑罕と二人とし、西域の罕篋力克Bairukh Khanと云ふ人を、音譯には罕と篋力克とを離して書き、罕なる篋力克とし、語譯には皇帝篋力克、文譯には篋力克王としたりたるが如き處甚だ多し。此等は、利仁將軍田村丸を一人と思ひ、田原

藤太藤原秀郷を二人ご思ひ、三宮氏を皇族ご誤れるの類にて、元代の人ならば、かゝる誤りある筈なれども、蒙古の古史に暗き明人なればこそ、是等の讀誤りも有りしなれ。然るに顧廣圻の祕史の跋に、殘元槧本影元槧舊鈔本など云ひ、李文田の祕史の注にも、殘元槧本元槧足本など云ひ、又元代撰訖、殆非一刻、故兩本互異ご云へるは、藏書家の言傳へたるままに、この譯本を元代の物ご信じたるにて、この諸人は、此書の内容を善くも考へざりしご見ゆ。唯何秋濤は、夙く心附きて「祕史蓋係明朝初年。所譯故稱燕京曰北平、博州曰東昌」ご云へり。

明の永樂年中、永樂大典を作り、古今の羣籍を網羅して、韻に依り排纂したる時、元朝祕史も、その選に漏れず、その十二先の元字韻の中に收められたり。但その本は全部十五卷にして、續集の目なく、今本ご分卷同じからず。此書の紙數頗る多きが故に、収録の際、何かの都合にて分割したるなるべし。明の黃虞稷の千頃堂書目に、元朝祕史十二卷を著録し、明の文淵閣書目の字字號に「元祕史一部五册、又一部同」又「祕史續稿一部一册、又一部同」ごあるは、洪武槧刻の原本にて、今の寫本の本書なり。然るに阮元の四庫未收書目提要に、千頃堂文淵閣の祕史を「竝闕佚之本」ご云へるは、その時只十五卷本のみを見て、未六册十二卷の舊本を見ざりし故なるべし。

清の孫承澤が著せる元朝典故編年考の第九卷に、祕史の譯文を載せて、その小序に「元有祕史十卷、續祕史二卷。前卷載沙漠始起之事、續卷載下燕京滅金之事。蓋其國人所編記書、藏禁中（明の文淵閣）不傳、偶從

故家見之錄續卷末以補史所不載云云云へるを、四庫全書提要に評して考其所引竝載永樂大典元字韻中互相檢勘一一相同疑本元時祕冊明初修書者或嘗錄副以出流傳在外故承澤得而見之耳所記大都瑣屑細事且閒涉荒誕蓋傳聞之辭輾轉失真未足盡以為據然究屬元代舊文世所罕觀自永樂大典以外惟見於此書與正史頗有異同存之亦足以資參訂也云ひ又蒙古源流の評に與元朝祕史體例相近云へり祕史を以て傳聞の辭とし僅に蒙古源流に比ぶるがごときは乾隆の史臣も未祕史の眞價を知らざりしを見るべし。

獨嘉定の錢大昕は永樂大典の中より祕史を寫し取りてその敘次頗る實を得たるを喜び跋を作りて元史の太祖本紀の荒謬を指摘し紀所書傾倒複沓皆不足據論次太祖太宗兩朝事蹟者其必於此

書折其衷與云へりその後元史考異元史氏族表を作るに頗るその書を參考せり。

又錢大昕は大典本の祕史を得たる後更に十二卷の舊本あるを聞きその大典本に勝れる眞本なることを悟りたりと見え元和の顧廣圻の祕史の跋に元朝祕史載永樂大典中錢竹汀小詹家所有即從之出凡首尾十五卷後少詹聞桐鄉金主事德輿有殘元槧本分卷不同囑彼記出據以著錄於其元史藝文志者是也とありその藝文志史類の第四雜史類に元祕史十卷續祕史二卷を擧げて不著撰人記太祖初起及太宗滅金事皆國語旁譯疑即脫必赤顏也と云へり國語旁譯とは本文は蒙古語の漢字音譯にて右旁に漢字語譯あるを云ふ。音譯語譯のみを云ひて文譯を云はざるは本文を主として譯文に

重きを置かず、且譯文の事をも旁譯の字に込めたるなるべし。

阮元の四庫未收書目提要に曰く「元祕史十五卷、不著撰人名氏、其紀年以鼠兒、兔兒、羊兒等、不以干支、蓋即國人所錄云云。此依舊鈔影寫國語旁譯記元太祖太宗兩朝事跡、最爲詳備。案明初宋濂等修撰元史、急於蒞事、載籍雖存、無暇稽求。如是編所載元初世系、字端又兒之前、尙有一十一世太祖本紀、述其先世、僅從字端又兒始。諸如此類、竝足補正史之紕漏。雖詞語俚鄙、未經修飾、然有資考證、亦讀史者所不廢也。」十五卷云へば、大典本の如くなれども、舊鈔に依り影寫す云ひて、大典より取れり云はざれば、大典の外にも十五卷の舊鈔本ありしならん。もし古くよりさる本ありしならば、大典は却てその本を收めたるならんか。

阮元は、太祖の先世の事を云云すれども、實は孛端察兒以前の事は取るに足らず。その以後なる祕史の敘事は、事ごとに皆元史の紕漏を補ふに足れり。然るに其等の諸大事を何も言はずして、一例こは云ひながら、孛端察兒以前の事のみを云へるは、只祕史の卷首三四葉を讀みたるのみに非ずやと疑はるゝ程なり。是に於て余は益錢大昕の爛眼に感服せり。

顧廣圻の祕史の跋の續きに曰く「殘本金主事嘗攜至吳門、予首先見之。率率未得寫錄、近復不知歸何處、頗以爲憾。去年授徒廬州府、晉江張太守許見所收影元槧舊鈔本、通體完善。今年至揚州、遂慫慂古餘先生、借來覆影壹部、仍見命校勘、乃知異於錢少詹本者、不特分元朝祕史十卷續集二卷一事也。即如首卷標題下、分注二行、右忙豁命紐察五字、

左脱察安三字、必是所署撰書人名銜而小詹本無之。當依此補正。其餘字句行段亦往往較勝。可稱佳本矣。校勘既畢、記其顛末如此。若夫所以訂明修元史之疏略、少詹題跋洎考異中見其大槩、引而伸之、唯善讀之君子、茲不及詳論云。この跋は、即ち今本の跋にして、便宜の爲に、今の寫本にせり。今本の來歴を述べたる者なれば、今本は、即ち顧廣圻の校勘本なり。書の名を撰人の名と誤れるは、蒙古語を解せざる人に已むを得ざる事として、この完善なる古史を世に傳へたる功は没すべからず。

道光中、平定の張穆は、祕史の譯文を大典より寫し出し、仁和の韓氏より影鈔原本五卷本かを借りて校對し、連筠蓀叢書に入れて出版し、光緒二十年、明治二年、上海の復古書局にて復その本を石印に附し、

長春眞人の西遊記、張穆の蒙古遊牧記、一帙の縮本として賣り出したれば、十五卷本の譯文は得易くなりたれども、顧氏の校勘全本は、益希見の珍書となり、輾轉して國子祭酒宗室盛昱の藏に歸せり。光緒十一年、明治十年、翰林學士萍鄉の文廷式は、盛昱の本を借りて順徳の李侍郎文田と各一部を寫せり。文廷式の序に「於是海內始有三部」云へり。是より先に李文田は、祕史に注せんとし、連筠蓀本を以て主となし、陽城の張敦仁の本を参考に用ひたり。張本は從元槧足本影出、作十卷、又續二卷、云ひ題目の下に忙豁命紐察脱察安なる夾注ありし由なれば、これも顧本の寫しなるべし。李氏は、初に張本を借り用ひ、後に盛昱本を寫し取れるなるべし。李氏の注成れる頃は、盛昱本の寫しも坐右にある筈なれども、今その注を見るに、蒙古

文より裨益を得たりと覺しき所なし。

明治三十二年、文廷式の來遊せし時、鹿角の内藤湖南、東京に居りて、廷式の歸りたらん後に、蒙古文祕史を寫し寄せられんことを求め、余も亦切に望みたりしかば、廷式歸りて間もなく、拳匪の亂起り、音信久しく絶えたれども、三十四年の末に至り、哀然たる六大冊の寫本を人に托して、大阪なる湖南の許に届けたり。湖南は直に鈔胥を備ひて、一部を影寫し、東京に送りこしたるは、今高等師範學校の藏となれり。その後、早稻田大學も、一部を影寫して、その圖書館に備へたり。是に於て我が海内にも、亦始めて三部ある事となれり。

かくてこの全本は、世界に六部限りかこ云へば、さに非ず。猶外に一部あり。その一部は、遙に遠方に在り。その一部は、日本支那にあるよりも遙に大なる裨益を世界の史學に與へつゝあり。其は露西亞の帕刺的兀思本なり。

僧正帕刺的兀思は、支那の京師に居りて、初に連筠蓂叢書より元

Paladius

朝祕史を得て、露西亞文に翻譯し、譯者の序論と注釋と成吉思汗の家系圖を加へて、成吉思汗の古き蒙古物語と題し、西紀一八六六年、同治五年、「北京なる露西亞の傳道使命の報告」の第四卷に載せて出版せり。その後一八七二年、同治十一年、蒙古文を漢字にて音譯せる十五卷の明槩の寫本を偶得て、嘗て譯せる漢文の本は、この蒙古文の摘譯なることを知り、十五卷の明槩の寫本と云へば、阮元の「依舊鈔影寫」と云へる者と同本なるべし。その本は、標題も無く、誤字脱字多しと云へば、十二卷の今本に劣れりと見ゆ。されども帕刺的

兀思は、漢字と蒙古語とを知られる人には、この本を蒙古字の原文に復すこと難からずと云へり。又清人は、十二卷本を元槩と名づけ、錢大昕すら原本譯本の別を混じ、即ち脱必赤顔なるか疑ひて、元の藝文志に入れたる程なるに、獨帕刺的兀思は、逸速く明譯明槩と見定めたり。蒙古史を研究する人に大なる裨益を與ふる古代蒙古文のこの珍書は、今珀帖兒不兒古大學の圖書館の藏書となれり。蒙古語學に熟達せる教授頗自捏也富は、その書の現形のまゝに、即ち蒙古文を漢字にて寫せるまゝに、露西亞文の翻譯注釋を加へて、出版せんことを企て、一八八七年、光緒十三年、明治二十年、その序文と本文即ち蒙古の過半を石印板にて印刷して學生に頒てり。その業成れりや否やは、我いまだ知らず。露西亞は、軍には負けたれども、かゝる研究に掛け

ては、我が日本よりは遙に勝れる國なり。實に軍に内政との失敗を除きては、東方經略の事に善く行届きて、大英國と共に、亞細亞の諸部落を綏懷すべき資格ある大國なり。

聖武親征錄喇失惕集史の來歴

聖武親征錄は、蒙古秘史に關係多き古書なり。四庫全書提要の雜史類存目に「皇元聖武親征錄一卷、不著撰人名氏云云。史記元世祖中統四年參知政事修國史王鶚請延訪太祖事蹟付史館此卷疑即當時人所撰上者」云へるは、只押當に言へるにて、何も旁證すべき事なし。西域の宗王の珀兒昔阿合贊旭烈兀合贊的會孫幹勒齊禿弟合贊に事へたる喇失惕額丁の著せる蒙古集史札米兀惕帖伐哩黑は、詳備せる歴史にして、親征錄の比類に非ざれども、その中の敘事に往往親征錄と符節を

合するが如き處あり。親征録の敘事は、喇失惕額丁の史に於て其に類する敘事を見出さざることなし。又この二書の敘事は、同じく蒙古祕史に本づきたり。見ゆる處甚だ多し。然らば二書は、祕史を閱する機會ある人の作れる者にして、親征録は、提要に言へるが如く外人の作りて上れるには非ざること疑ひなし。察罕の祕史より譯し出せる聖武開天記の名は、後世に少しも聞えず。親征録の名は、元代の書に少しも見えずして、親征録の内容は、祕史に本づきたり。見ゆれば、親征録は即ち開天記にして、傳寫の間に標題を改められたり。見て誤り無からん。清の康熙二十八年に邵遠平の著せる元史類編に、屢今の親征録の文を引きて、聖武親征記と云へり。然らば三名一物にして、元の聖武開天記は、清の初に至り、聖武親征記となり。

なり。親征録は、乾隆中、兩淮鹽運使司にて得て、内府に上り、錢大昕これを寫し取り、それより輾轉鈔寫して、大興の徐松に歸したり。道光中、

平定の張穆は、徐本を寫し取り、大興の翁方綱の家の藏本を借りて對校し、更に光澤の何秋濤に授けて校正せしめたり。光緒二十年、彰南の分巡道芳郭は、何氏の校本を互羨の姚士達に授け、校正元親征録と題して出版せしめたり。又順徳の李文田、嘉興の沈曾植、各何氏の校本を寫し取りて校注し、順徳の龍鳳鏢は、李沈の二注を合せて、何氏校本の出版に續きて出版し、知服齋叢書に收めたり。この錄につきても、露西亞は支那よりも早く、僧正帕刺的兀思は、何校親征録

の鈔本を得て、露西亞文に譯し、西紀一八七二年、明治五年、同
李沈校本の出版より二十餘年前に、東方の記録に入れて出版せり。

喇失惕額丁は、元の定宗二年、後深草天皇寶治元年、西紀一二四七年、哈馬丹に生れ、醫術

を以て合贊汗に仕へ、成宗の大徳二年、伏見天皇永仁六年、西紀一二九八年、王國の尙書

となり、Glazan Khan 翰勒齋禿汗の時も、その職に續き居りき。蒙古の史を集録す

る事を合贊より命ぜられたりしが、大徳十一年、後二條天皇徳治二年、西紀一三〇七年に、

その書成りて、Oghair Khan 翰勒齋禿に上り、仁宗の延祐五年、花園天皇文保二年、西紀一三一八年、讒

に遭ひ、Abu Said Khan 阿不賽徳汗の子に殺されたり。その書は、Persia 珀兒昔阿文にて、

書の名は、Jami 札米兀惕帖伐哩黒元云ふ。札米は集録、兀惕は「屬く」と云ふ

前置詞、帖伐哩黒は歴史にて、歴史の集録と云ふ義なり。下文には集史又は蒙古集史

など書KEVINI。その書は、亞細亞の諸種族の狀態、その地方の形勢、元帝の祖

先の事より始めて、太祖の功業を詳敘し、太宗定宗憲宗三朝の事を

略敘し、世祖成宗二朝は最も略し、Haridai 珀兒昔阿の列王、旭烈兀より合贊

までの事蹟は頗る委し。その自序に據れば、當時亦勒罕の祕府に、蒙

古の文書あまた保存せられて、Altan depier 翰勒齋禿汗より修史の參考に用ふ

ることを許され、殊に阿勒壇迭卜帖兒（黄金の書冊）即ち金冊と云へ

る蒙古の歴史、汗の寶庫に藏して、Bege Kipchak 別克（都邑）の長老の保管し居る者

をも參考に用ひ、又支那、印度、畏兀兒、乞卜察克の學者だち、殊に大官

人、Pahai chinhsank 普刺惕丞相に命じて助けを與へさせられたり。この普刺惕丞相

は、王國の元帥宰相にして、東方の種族の古傳歴史、殊に蒙古の其を

誰よりも善く知れり。云へり。その書は、又阿來額丁、Alai eddin Atta mluk juveni 壓塔木勒克主

費尼の蒙古史にも多く據れり。

主費尼は、主費因の人にて、地の名を以て姓とせり。その父巴海列
 Joveni Jovaini Bahai edin
 丁謨罕默德主費尼は、蒙古に仕へたる故に、憲宗元年、後深草天皇建長三
 Mohammed Joveni
 阿來額丁は、父に従ひ蒙古に到り、憲宗登極の大聚會に會せり。西書
 Alai edin
 の前年の六月なれば、紀年に誤りあらん。元史憲宗紀、この大聚會の續きに

「以阿兒渾充阿母河等處行尙書省事、法合魯丁佐之」とある。法合魯丁

は、即ち巴海勒丁なり。その後阿來額丁は、旭烈兀の西征に従ひ、文牘

を掌り、西域既に平ぎて、地方の大吏に任せられ、世祖の至元二十年

後、宇多天皇弘安六年、西紀一二八三年に没りぬ。その蒙古史は、塔哩黑只罕庫沙亦と名づ

く。塔哩黑は歴史、只罕庫沙亦は世界の征服者なり。その書は、二部に

分れ、前部は、太祖の末十年の事を詳叙し、太宗定宗の事、憲宗即位の

初の事、畏兀兒合喇乞台闊喇自姆の事、太祖太宗の珀兒昔阿征伐の

事を述べ、後部は、旭烈兀西征の事、木剌希答興亡の事を述べ、憲宗の

七年、後深草天皇正嘉元
 年、西紀一二五七年にて終れり。

佛蘭西の朶遜は、喇失惕額丁の集史に本づき、蒙古史を作り、西紀

一八二四年、清の宣宗道光四年、その初版を世に出せり。されども朶遜

は、喇失惕額丁の書を辭のまゝに翻譯したるに非ず、主費尼その外

あまたの舊史に據り、喇失惕額丁を増補改修して、詳備せる新史を

作れるなり。珀帖兒不兒古の教授別喇津は、喇失惕額丁の全部を露

西亞文に譯せん事を企て、その譯の成るに従ひ、珀兒昔阿語の原文

と共に、露西亞の考古學會の記事に載する事とし、東亞細亞に住め

る禿兒克種蒙古種の諸國諸部の事を述べたる第一卷三九二ペー

じは、一八五八年、清の文宗咸豐八年、に出版せり。蒙古の先世より太祖

元年の騰極までを述べたる第二卷は、珀兒昔阿文二三九ページ、翻譯注釋三三五ページにして、一八六八年明治元年、に世に出でたり。一八八七年光緒十三年、出版に取掛れる第三卷にて太祖の事蹟終り、その次に猶三卷出づる積りなりしが、成れりや否やを知らず。喇失惕額丁を翻譯したる人は、別喇津の前にもこれかれ有れども、皆別喇津の譯に敵すること能はず。別喇津は、蒙古集史の善き寫本を、あまた使用したるのみならず、東亞細亞の諸國語に通じたることは、珀兒昔阿人の記録を解するに大なる助けとなれり。

修正蒙古秘史

喇失惕額丁の集史は、あまたの史料に據り集録したる者なれば、元初の史として、その詳備せること、東方の史傳の企て及ぶべき

に非ず。今聖武親征録を以て集史に較べて考ふるに、集史には親征録に少しも言はざる事蹟甚だ多し。その中に、東亞細亞の種族ごも、の事、蒙古の古傳の事の如きは、普刺惕丞相の記憶より出でたる者多からん。太祖太宗の西征、旭烈兀の珀兒昔阿經略の如きは、殆ど皆主費尼の歴史に本づきたり。然らば集史の敘事の親征録ご符節を合するが如き處は、何に本づきたる者なるか。其は、疑ひもなく阿勒壇迭卜帖兒即ち金册より出でたるなり。洪鈞の元史譯文證補に「拉施特自謂親見本朝譜牒史策、依據成書、今以元史親征録、元秘史較之、則尤與親征録符合、用知親征録實由脫必赤顏譯出、當日金匱副本、必然領及宗藩、否則夷夏異文、東西異地、何以不謀而合若此」云へり。本朝譜牒ごは、金册を云ひ、金匱副本ごは、脫必赤顏の寫しを云ひ、脫必

赤顔の寫しは即ち金冊なりと云へるなり。洪鈞の此說允に當れり。然らば金冊は即ち祕史にして、紐察脫卜赤顔は書の実名なり。阿勒壇迭卜帖兒は書の稱號なり。喇失惕額丁の史と察罕の記とは兄弟にして、祕史の二孤子なり。數十年契闊の友忽然として遇へるすら、嬉しさに堪へざるものなるに、數百年の間互に見も知らざりし兄弟の二孤子相攜へて古史を語るを見るは、史學上の一快事に非ずや。

二書は同じく祕史に本づきたりとするれば、その祕史なる者は、今の祕史の原本なりや否や。この間に答ふるは難からず。二書の符合したる處今の祕史に合はば、その祕史は今の祕史の原本なり。合はずば、その祕史は今の祕史の原本に非ず。合ふか合はざるかを見よ。

今の祕史に據れば、太祖の父也速該は塔塔兒人に毒害せられたるを、二書は同じく只死にたりとせり。太祖の母子、泰赤兀惕部人に棄てられてより十三翼の戦まで二十餘年の間、祕史に據れば、訶額倫夫人艱難して諸子を長育したる事、太祖と弟合撒兒と二人にて異母弟別克帖兒を殺して、母に痛く責められたる事、太祖は泰赤兀惕に擒にせられ、困苦して逃れたる事、太祖賊を追へる時、孛斡兒出これを援け、遂に親臣となれる事、翁吉喇惕の德薛禪の女孛兒帖を迎へたる事、太祖往きて父の友王罕に謁し、父と尊びたる事、篋兒乞惕人に襲はれて、孛兒帖虜はれたる事、王罕、札木合二人の援を得て、篋兒乞惕を撃破り、孛兒帖歸りたる事、太祖と札木合と營を共にして居り、既にして分離し、諸部多く札木合を棄て、太祖に歸し、遂に推

戴して成吉思合罕Chinghis Khaghanとなしたる事、これらの大事ありて、卷二卷三の二卷に書けるを、二書は全く略きて、十三翼の戦を以て直に太祖の幼時の事に續けたり。十三翼の戦に、二書は諸將諸部落の名を列記したるに、秘史には無し。十三翼の戦は、秘史にては太祖負け、二書にては太祖勝てり。二書には照烈部長來降の事あれども、秘史には無し。斡難の林の筵會に主兒勤部Oran Khanと争ひ起れる時、秘史には太祖自ら鬪へりとし、二書は其の眾鬪へりせり。泰赤兀惕の潰散Kitizhishi乞濕勒巴失の戦、忽刺安忽惕の戦、土兀刺河の黒林の盟などは、秘史にては、十一部の亂の後にあり、二書にては皆前にあり。十一部の亂に、秘史は十一部の首長の名を擧げたるに、二書は只六部の名を擧げて、首長の名なし。十一部の會盟は、秘史にては一回、二書にては二回なり。闊

亦田の戦は、秘史にては十一部の亂の時にあり、二書にては塔塔兒征伐の後にあり。王罕を詰責する辭、秘史は簡直、二書は繁冗なり。乃蠻の古兒別速を秘史は塔陽罕の母とし、二書は妻とせり。札木合の末路、秘史は甚だ詳かなるに、二書は一語もなし。虎の年騰極の時、秘史には親衛の制度、諸將の恩賞に關する許多の詔勅ありて、一卷半ほごを滿たせり。二書には一語もなし。かくの如き差異、末卷までに猶多し。然らば二書の本づきたる秘史は、今の秘史の原本その儘の者に非ざることを明けし。

然れども二書の敘事行文、今の秘史に合へる處も亦頗る多し。その例は、今一一は擧げず。只その最も著しき者を擧ぐれば、秘史卷十、畏兀兒の使者の太祖に奏したる辭に「雲霽れて母なる日（母の如）」を

見、氷解けて河の水を得たるが如く云云云へるが如きは、二書共にこの句を直譯したるが如き句あり。故に不咧惕施乃迭兒は、喇失惕額丁よりこの句を譯して「この句は、元朝祕史より辭通りに譯したるが如く聞え、而して祕史の作者は、喇失惕額丁と同じ本源よりその聞知を得たり云ふ證據を呈す。その證據は、實にあまたの他の例にて確められ得るなり」と云へり。この辭に少し弊あり。祕史の作者は、祕史の原本の作者を云へるならば、その原本を書き畢へたる太宗の十二年は、集史の成れる成宗の大德十一年より六十七年前に在り。又正集十卷の成れるは太祖の世に在り。すれば、又その二十餘年前に在り。その時は畏吾兒歸服して未だ幾年も經ず、蒙古人始めて畏吾兒字を用ふることを知りたる頃なれば、その書の

の前には蒙古の記録も無かるべく、その書こそは、有らゆる蒙古の記録の本源なりけれ。故に祕史と集史とに相似たる處あるは、本源を同じくするが爲に非ずして、祕史の原本は集史の或部分の本源なるが爲なり。而して集史親征錄の符合したる處にて、祕史に合はざる處あるは、いつの世にか祕史の原本に修正を加へて、二書はその修正祕史に依れるが爲なり。

何故に修正を加へたるか云ふに、二書と祕史と合はざる處を善く見れば、その理由も推料らるゝなり。也速該の毒害は、諱みて刪れるなり。母子の貧しかりし事、弟を殺せる事、擒さなれる事、妻を奪はれたる事を刪れるは、太祖の恥辱を蔽へるなり。王罕に父と事へ、札木合を兄弟として二人の援を得たることを刪れるは、後來の

仇敵を恩人とするを嫌へるなり。太祖始めての大戦なる十三翼の戦に負を勝と改めたる理由は、言はずとも明かなり。幹難の筵會に太祖自ら鬪へるは餘り大人しからぬ故に改めたらん。王罕を詰責する辭を増加したるは、その罪を重くせんが爲なり。札木合の末路を省略せるは、幼時の親交に關する問答あるが爲なり。その外今は略すれども、親征錄證注には一一論じたり。

かゝる修正は、太祖の美を増さんご欲する心より出でたるべけれど、却て大英雄の實傳の眞價を失へり。少時の貧苦敗辱は、後來の成功をして光を放たしむる者なり。何ぞ諱むに足らん。此等の事を氣にして、二十餘年の間の事蹟を隱蔽しては、何を以てか太祖創業の艱難を知ることを得ん。何を以てか宣懿太后の賢明功烈を知

ることを得ん。太祖少時より王罕に父事し、その援助をも受けたる故に、その後王罕讒を信じて之を除かんごしたれども、太祖は誠を推して疑はず。最も英雄の宏量を見るべし。若少時恩を受けたること無かりせば、太祖の親切は、むしろ愚に近からずや。乃蠻の滅びたる時、祕史には札木合執へられ、從容として死に就ける事を敘べ、太祖札木合の問答を委しく載せたり。蓋二人幼くして親友となり、長じて仇敵となり、干戈の間に屢相見えたれども、互に安答(結盟)と呼びて、終身渝らず。張耳陳餘が怨隙一たび開けて、忽ち路人と變じたるに似ず。而して札木合の自らその罪を知り、恥を重んじ命に安んじたるは、亦感ずるに餘りあり。札木合の叛奴を太祖の誅したるが如きは、主君を逃したる納牙阿を褒めたる事と相對し、刑賞兩なが

ら中り、誠に君道に協ひ、漢の高祖の季布を赦して丁公を誅したるに比ぶべし。太祖の札木合を遇する所以に至りては、寛仁大度、義により禮に遵ひ、最漢高の田横を待つに勝れり。是等の美談を修正秘史は悉く刪りたりと見えて、二書には更に無し。親衛の制功臣の賞を定むる詔勅は、蒙古の史にありて典謨に比すべき者なり。是等は何故に刪られたるか。その理由を知ること能はず。然らばその修正は、實に拙陋なる修正なり。その修正秘史の世に傳はらずして、原本秘史の譯本の通體完善に今に保存せらるゝは、史學上の吉祥事にして、太祖の威靈の呵護に頼れるに非ずやと思はるゝ程なり。洪鈞は、別咧津の譯に由り喇失惕額丁の集史を譯し、その親征録に合へるを見て、却て秘史の誤れるを疑へるは、秘史の原本は蒙古史の本源なること、二書の本づきたる者は修正秘史なることを知らざるが故なり。

元朝秘史、聖武親征録、喇失惕額丁の集史等の來歴を一目に見易からしめんが爲に、左の系圖を作れり。

忙豁命紐察脱卜赤顏(蒙古秘史)元太祖時撰
Monggholun Niucha Tochiyan

元朝秘史十卷、續集二卷、明洪武十五年譯

元秘史千頃堂書目十二卷、明文淵閣書目五冊、續稿一冊

元秘史十卷、續秘史二卷、乾隆中、金德興所藏、稱殘元槧本、其譯文載孫承澤元朝典故編年考第九卷

元朝秘史五冊、十卷、續集一冊、二卷、廬州知府張氏所收、稱影元槧舊鈔本

顧廣圻校勘本

宗室盛昱藏本

文廷式鈔本

內藤湖南鈔本

李文田鈔本

沈曾植鈔本

高等師範學校鈔本

早稻田大學鈔本

成吉思汗實錄 那珂通世和文譯

元朝祕史 十五卷永樂大典十先元字韻中所收

錢大昕鈔本

張穆連筠鈔刻本 有譯文、無蒙文

帕刺的兀思露西亞文譯本 Palmer's

上海復古書局石印本

李文田注刻本

元祕史 十五卷依舊鈔影寫見阮元四庫未收書目提要

帕刺的兀思影明槧舊鈔本 十五卷無標題今藏于露京大學圖書館

頗自捏也富露文譯注漢字原書刻本 Podney's

修正紐察脫卜赤顏 元史察罕傳稱脫必赤顏虞集傳稱脫卜赤顏

太祖實錄 成宗大德七年翰林國史院奏進 元史太祖本紀

聖武開天記 仁宗時察罕譯脫必赤顏以成 聖武親征記 邵遠平元史類編所引

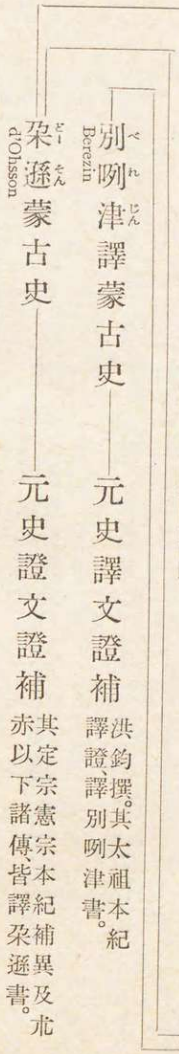
皇元聖武親征錄 兩淮鹽政探進本四庫全書提要存目 錢大昕本

徐松本 張穆校本 何秋濤校本

翁方綱本 帕刺的兀思露西亞文譯本

李文田沈曾植校注本 那珂通世證注本

阿勒壇Altan送depter帖兒Altan (金册)即修正秘史、西域宗王寶庫所藏。
 塔哩黑Tarika只罕庫Jihankustai沙亦Shay (世界征服史)主費尼所撰。
 札米兀惕帖伐哩黑Tamir (集史喇失惕)額丁所撰。



和文譯本の標題

此書の原名は、忙豁命紐察Monggholun Nuchan Toghayun脱卜赤顔Tobchiyanなれども、今和文に譯したる書に蒙古語の名を題しては、耳遠く聞ゆ。明人の當てたる元朝秘史の名は、久しく廣く行はれたる名なれども、元朝云へば、元史の如く一代の事を書きたる者の如く聞えて穩かならず。原名を譯して蒙古秘史とすれば、蒙古の名は元朝よりも廣くして、蒙古源流の如く近世までの事あるが如く聞えて、元朝云ふよりも猶穩かならず。譯書に新しき名を與ふるは、屢例ある事なれば、當らざる舊名を守らんよりは、此書の内容を表すべき佳名あらば、用ひまほしと考へたり。

初は蒙古古事記と名づけんかと思へり。いかに云ふに、我が古事記は、日本最古の古書にして、古傳を古傳のまゝに正直に書き表し、古傳を研究するには最も善き書なるに、日本紀出でて、古傳に文飾を加へ、何事も漢様に書き改めたれば、後の人は、その文の漢めきたるに眩惑して、その眞傳に違へる事を忘れ、後の史書は、日本紀のみ據る事となりたるを、近世に至り古學者起りて、復古を唱へたるより、始めて古事記の貴きことは、世に知れたり。

此書も、さる類にて、蒙古人の始めて文字を知りたる頃の書なれば、據るべき舊記も無く、語部などの語り継ぎ言ひ継ぎたる事をそのまゝに書ける者なり。沙漠の朝廷にも語部などの有りけんことは、此書に韻文の甚だ多きにて、推料らる。徳義の程度卑くして、羞惡の心淺かりければ、後の人ならば諱むべき程の事も、忌憚らず直書せり。恰も我が古事記に當藝志美美命と伊須氣余理比賣命との御事、倭建命の御兄を殺せ給へる事、蝦夷の征伐を命せられて、父帝を怨み給へる事、仲哀天皇の神に忿られて崩り給へる事などを皆古傳のまゝに書きたるが如く、此書にも烈祖の毒殺せられたる事、太祖の囚虜となりたる事などは、言ふまでも無く、宣懿太后は本篋兒乞惕人の妻なるを烈祖の掠め取れる事、光獻翼聖皇后の敵人に汗

されたる事、拙赤太子は敵人の子ならんを疑はれたる事、太祖の弟を射殺せる事、筵會の席にて鬪へる事、忽蘭皇后のまだ處女なりし時、人に姦されたらんと疑ひて、その體を調べたる事などを有のまに書き、更に忌憚る處なし。

然るを修正祕史は、是等の恥づべき事を删除したるは、さもあるべき事なれども、是が爲に事實の聯絡を失ひ、事實の順序を紊し、左右枝梧し、首尾衡決して、前に死にたる人は後に戦ひ、後に敵する人は前に降り、是が爲に英雄の大業も、確實なる詳傳を失ふに至れり。而して喇失惕額丁は之を用ひて集史を作り、察罕は之を譯して開天記を作り、元史の太祖本紀も之に依り、元史類編その外有らゆる史編は皆元史に依れり。朶遜の蒙古史出でて、歐羅巴の史學者は皆

之を以て太祖の實傳とし、洪鈞の元史譯文證補出でて、錢大昕の卓説も「非篤論矣」と誹られたり。然らば修正祕史の勢を得たるは、我が日本紀の如くにして、此書の位置は、前時の古事記に似たり。故に余は、此書の譯本を蒙古古事記と名づけんと欲したり。

然れども此書は、又古事記と異なる處あり。古事記は、千餘年の間に渉れる古傳を今より千二百年前に書ける者なり。此書は、百餘年の間の耳に聞き目に覩たる事を今より六百六十餘年前に書ける者なり。先世の系譜を述べたる處は、我が古事記に善く似たれども、それは篇首一卷にも満たず。古事記は過半神話なれども、此書は殆ど皆實傳なり。故に此書は、上古史に非ずして、近世史なり。古の事を追敘せる歴史に非ずして、當時の事を直敘せる記録なり。之を我が古事記に擬ふるは、僭に非ざれば妄なり。その體裁最も

實錄の書に近きが故に、今は古事記の名を罷めて、實錄の名を取れり。

實錄は、唐宋以來世毎に必ず撰述せらる。天子崩ずれば、嗣帝の世には大抵先朝の實錄の撰修に取掛れり。故に實錄は、史書の中にて、事實の起れる時代に最も近き記録なり。此書の正集は太祖の時に成り、續集は太宗の時に成りたれば、嗣帝の世に撰修せるに非ずして、今帝の事蹟を今帝の世に撰修せるなり。實錄よりは寧起居注に近し。されども起居注は、天子の言動を史官の即時に記録する者なり。蒙古には固より起居注官とても無く、語部などの語れることを後に至りて書き集めたる者なるべければ、起居注には非ずして、猶實錄なり。

實錄云へばこと、事事皆確實なる者には非ず。唐の高祖實錄は、太宗の朝に成りたれば、高祖の徳を抑へて太宗の功を揚げ、宋の神宗實錄は、元祐紹聖の兩黨にて代るく改修せり。元の實錄の疏漏なる、明の實錄の誣罔あるは著しき事なり。この實錄にも誤りあり。南征の役に、者別の居庸關を破りたるは、太祖の八年癸酉なるを、六年辛未九年甲戌の二回とし、九年甲戌の再征は、金の遷都の後なるを、再征に由りて遷都せりとし、拖雷出古二人の奮戰は七年壬申、潼關の戰は十一年丙子なるを、皆九年再征の時とし、潼關の寄手の大將は撒木合なるを、太祖とせり。最も甚しきは、使者主卜罕の殺されたるは、太宗三年の事なるを、この九年の處に記して、再征の役はそれが爲に起れりとせり。西征の役、者別、速別、額台、脫忽察兒の三將を

して西域王を追はしめたるは、不合兒、薛米思堅を降したる後にあるを、この役の初に書き、兀都喇兒、不合兒、薛米思堅を取りたるは、この役の初にあるを、申河(信度)の戰の後に書けり。然のみならず、是等の征伐、世界を震盪せる大征伐の記述は、客喇亦惕、乃蠻などを敵手にせる戰よりも簡略なり。蓋漠北の斡兒朶に仕へたる稗田の阿禮は、遊牧諸國の興亡の物語をば善く記憶すれども、南夏西域の征服の如き世界の大局に關する入組たる事件は、理會すること能はざりけらし。故に太祖太宗兩朝の事迹を論次する者は必ず此書に依りて折衷すべき事は、錢大昕の云へるが如くなれども、南征の事は親征錄、金史、元史に依り、西征の事は、主費尼喇失惕額丁に依りて補はざるべからず。

此書は、太祖の祖先より書き始めて太宗の世まで及べるに、今の譯本の名に唯太祖のみを標するは、何故ぞ。祖先の事を記したるは、一卷に滿たず、太宗の紀も一卷に滿たず。十二卷の内十卷餘りは、皆太祖の紀にして、祖先の紀は、太祖の實錄の發端に過ぎず。太宗の紀も、太祖の實錄の結末に見らるゝが故に、太祖の名を專に用ひて標題とせり。

元太祖實錄と云はずして、成吉思汗實錄と名づけたるは、何ぞや。成吉思汗は、當時通行の尊號なり。太祖は、世祖至元三年の追號なり。數十年の後なる追號を以て題すれば、數十年の後に成れる書の如く聞ゆる嫌あり。且大徳七年に奏進せる太祖實錄は、蓋今の太祖本紀の本源にして、疏漏なりし者に見ゆれば、その疏漏なる書と名を

同じうするここを避け、當時の尊號を以て題したるなり。

成吉思合罕Chinggis Khanと云はずして、成吉思汗Chinggis Khanと云へるは、何ぞや。成吉思合罕は、當時の本號、成吉思汗は、後世の略稱なり。汗は、君なり。可罕は、罕の罕、君の君にして、大君なり。此書には、一たびも成吉思可罕の可を略きたる事なし。然れども太祖の大なる所以は、名に關らず。故に便宜に従ひ略稱を用ひたり。

蒙古の古文と和譯文。

蒙古語は、阿勒泰語族に屬して、我が國語と文法甚だ近く、殊にその措辭法は殆ど同じければ、語ごとに適當の譯語を當て、名詞代名詞の格動詞の言方などを誤らざれば、自ら我が文章と爲る。譯讀するにも、漢文歐文を讀むが如く飛返り跳返る必要なし。

唯名詞代名詞に單複の別ありて、之を譯するに一一區別するこ
 こは頗る煩はし。代名詞の複數は、我等、汝等、此等、其等の如く、大抵「ら」
 を附けたれども、此等の、其等の云へる場合には、往往「この」「その」に
 譯したる處あり。名詞の複數も「ら」「ごも」「だち」などを附けて穩かな
 る處附けざれば意味の明瞭を缺く處は、必ず附けたれども、然らざ
 る處には略けるも有り。姓氏種族の名は、單複共に原譯字のまゝに
 書きて、複數の處には注を加へたり。例へば乞顏氏キリヤンの複數は乞牙惕
 なれば、乞牙惕キヤチの複キリヤンと書けり。

否定の詞は、我にては助動詞なれども、彼にては副詞なり。その否
 定の副詞は、兀祿ウルクと額薛エセとの二つあり。兀祿は漢語の「不」、額薛は漢語
 の「未」なり。例へば幹惕罷カンチハイは去りきにて、兀祿幹惕罷ウルクカンチハイは去らざりきな

り。額薛も殆ど之に同じく、大抵は「いまだ」云ふ副詞を添ふるに及
 ばず。又この副詞は、必ず動詞のすぐ上にありて、漢文の如く間に
 他の詞を挿むこと無し。否定命令即ち禁止の詞も、副詞なり。例へば
 幹惕禿該カンチトガイは去れなり。これの上に禁止の副詞布ブを添ふれば、去るな
 の意イなる幸サイハミに我が古語に勿ナと云ふ禁止の副詞ある故に、それを
 用ひて「勿去り」と譯せり。

持格の代名詞は、大抵必ずは非非す。その屬する名詞の下に入る。我が子
 來キよと云ふことを、子我が來コワガキよと云ひ、汝の父居ニウノチるかカと云ふことを
 「父汝の居るか」と云ふ。此等は、我が措辭法セシに従ひ、語の順序を改めて
 譯せり。主格の代名詞は、大抵これも必ずは非非す。動詞の下に入る。我大オホに喜よろこべ
 りシと云ふことを、大オホに喜よろこべり、我ワレと云ひ、汝我ニウワレと然言シカはざりしかシカを、我ワレ

こ然言はざりしか、汝なんぢ云ふ。目的格の代名詞も、動詞の下に廻さるるここあり。我等力を盡して彼等を助けんを、我等力を盡して助けん、彼等を、又は力を盡して助けん、彼等を我等云ふ。此等は、皆原の順序のまゝに譯せり。又敘事の文に、主格は必ずしも上にあらず。帖木眞を泰赤兀惕執へ往きて、甲の逃げたるを見て乙は急ぎ、甲を乙に追はしめて丙は續き、甲に勧められて乙を丙は云云など。此等は、本のまゝに譯すべきは、云ふまでも無く、すべて主格の位置を場合に由りていづこにも自由に動かし得るは、てにをはを多く用ふる國語の特長にして、我が國語にても、漢文訓讀體の流行らぬ頃までは、蒙古文の如くなりしなり。

又蒙古の古語は、沙漠の外に獨立して、漢語梵語の影響を少しも

蒙らず、純粹清淨なる處女國語なり。支那印度の文物宗教の影響を受けざ

れども、本論の外なれば、こゝには言はず。數千の名詞の中にて、漢語の轉訛と覺しきものは、

兀眞は夫人の轉、大石は太師の轉、領昆は令公の轉の類に過ぎず。外

國の地名人名を呼ぶにも、大抵蒙古名あり。支那人を乞壇、その複乞

塔惕高麗人を莎郎合、その複莎郎合、思金國皇帝を阿勒壇罕宋を趙

官趙家の西夏を合申河西の野狐嶺を忽捏堅居庸關を察卜赤牙

勒龍虎臺を失喇客額兒黃河を失喇木噠又外國の名稱を採

用ひても、何程か音を易へ、又は蒙古の語尾を加ふ。幹惕喇兒を兀都

喇兒兀兒堅只を兀囉格赤欣都人を欣都思惕魯思人を

幹魯速惕乞卜察克人乞卜察兀惕阿昔人を阿速惕中亞細亞の抹

哈篋惕教徒なる撒兒惕人撒兒塔兀勒云ふ。此等は、皆蒙古の音

をそのまゝに譯して、本名を注に擧げたり。

蒙古文の甚だ奇異にして甚だ面白きは、韻文多き事なり。その韻文は、皆巧に頭韻を排べたる者にして、漢文には固よりその法なく、同じ語族なる我が國語にもその例希なり。漢文には雙聲と云ひて、參差、綿蠻、鞠躬、踞踏の如く、發聲(成音の首)同じき字を二つ重ねる詞は多けれども、蒙古の頭韻は、それには非ず。我が古歌に「たきのおこは、たえて久しくなりぬれぞ、なこそながれて、なほ聞えけれ」と云へる如く、毎句の頭又は毎語の頭に、同じ成音を置きて、雙音の如く、父音の音のみ同じき非ず。語調を面白くするなり。この語調は、日本語にては、談話の辭に最も適して聞ゆれども、蒙古語にては、格言、古諺より、喜怒哀樂の情を抒ぶる辭、教訓の辭、詰責の辭、悔謝の辭に至るまで、皆この韻文を用ふ。その中には物語を傳へたる人の作れる文句も多かるべけれども、元來蒙古語にかゝる流行ありし故に、作れる人も作れるなるべし。然らばかゝる文章、特種の修辭を加へたる言語は、蒙古人の文字を知らざりし時より行はれたるなり。日本人は千五百餘年の前、印度人は三千餘年の前、文字に依らずして文章ありし事あるは、文字は無くとも開化の度稍進みたる時なるが、馬の乳を飲み、羊の皮を着、穹廬に住みて、射獵を業とせる純夷の民にも、夙くより文章ありしは、珍しき事なり。

その韻文の例を少し述べん。童男女の眉目清秀なるを形容して「目に火あり、面に光あり」と云ふ。目は你敦、面は你兀兒にて、你を頭韻とせり。火は合勒、光は格咧にて、合と格と聲近きが故に通韻に用ひ

たり。余が譯文に你敦を眼と譯せず、你兀兒を顔と譯せずして、目と面とにしたるは、蒙古の頭韻に眞似たる洒落なり。この句の韻の踏方には非ず、戴方は、隔句韻にて、上句の頭と下句の頭と韻を押し、上句の腹と下句の腹と韻を押し、この隔句韻は、その例甚だ少し。普通の押韻は、上句の語ごもに或韻を重ね、下句の語ごもに他の韻を重ねるなり。例へば耳目の銳き事を、鼪となりて聽き、銀鼠となりて視る。云ふ、鼪は鎖耶合、聽くは莎那思にて、鎖と莎と通じ、銀鼠は兀年、見るは兀者にて、兀を韻とせり。もし之を譯して韻を合はせん。ならば、動物の名を換ふるより外にすべなし。狐となりて聽き、角鴟となりて視る。なごは、いかゞ。又窮乏孑立の狀を、影より外に伴なく、尾より外に鞭なし。云ふ、影は薛兀迭兒、尾は薛兀勒にて、薛兀を韻

とせり。伴と鞭とは韻を成さざれば、隔句韻には非ず、二句を一句として、只一つの韻を押したるなり。日本語ならば、影の外に伴なく、體の外に物なし。なご云ひたし。すべて頭韻ある文は、對句より成り、短きは二句、長きは二節、或は二段なれども、稀には三句又は三節にして、三韻を用ふる。ことあり。又極めて稀には十句もありて、韻も屢換へて對句を成さざるもあり。前に引きたるは、いづれも短き二句の例なれども、不兒罕嶽の神に太祖の感謝したる辭の中段などは、二節づつの二段より成り、前段は不の韻を九つ疊み、後段は合の韻を九つ疊みたり。韻文は、譯すれば、全く興味を失ひて、散文よりも拙くなる故に、譯文の左に原字の韻語を一一書き添へて、その文の拙く語に穩かならざる處あるは、韻文の爲なることを知らしめん。とす。

蒙古語に、猶一つ面白き事あり。そは、梵語にて散提San-tiと稱ふる協韻の法にして、蒙古語のみならず、滿洲語、突兒克語Altaiなど、阿勒泰語族に屬する諸國の言語に行はるゝ一種の音便なり。名詞の接尾語にては、助動詞シなど組立つる下のことばは、上の名詞動詞のおもなる母音の力に依りて、己が母音を變へて、その母音に同じく化するなり。例へば、兄弟を阿合迭兀Alaiと云ひ、兄アも弟イもを阿合納兒迭兀捏兒Alaiと云ふ。納兒も捏兒も「ごも」の意にして、上に合あれば、納ナと云ひ、上に迭あれば、捏ニと云ふ。てにをはの「に」を額エとも阿アとも云ふ。幹難木噠Ken-nan-mu-tai（河難）の帖哩溫Terli-un（源）にシと云ふ時は、帖哩兀捏Terli-unと云ひ、不兒罕合兒敦Burkhan-Khardanにシと云ふ時は、合兒都納Khardanaと云ふ「より」又は「から」と云ふことを阿察アとも額扯エとも云ふ。仙臺Sen-taiよりを仙答牙察Sen-daya-tsa、津輕Tsing-keiよりを津合喇察Tsing-kah-lah-tsaと云ひ、越前Setsumaruよりを

越者捏扯Setsumaru-tsu-tsuと云ふ。此等は、皆阿アと額エとの變りの例なるが、幹カと兀ウこの變りも、これに同じ。この協韻あるが爲に、蒙古文の音讀には一種の興味あれども、譯文には全くその跡形をも失へり。

又蒙古語には、勒レ又は兒エにて始まる詞なし。外國の人の名人種の名などを表せる詞には、まれに刺シ又は喇ラに始まれる名あれども、蒙古の古き詞には、魯ル阿ア又は魯額ルと云ふ名詞の接尾語の外には、詞の頭に勒兒レの音あるもの更になし。魯阿魯額ルは、漢字の與ユの字、日本語の「ご」もに「の」意にして、必ず名詞の尾に接く詞なれば、これも、詞の頭に魯ルの音ありとは言ひ難し。日本の古き詞にも、助動詞のらるゝらむらしの外には、漢字の等の意なる「ら」と云ふ接尾語一つあるのみにて、良行リョウキョウに始まれる詞の更になきは、蒙古語に善く似たり。蒙古

語も、近き世となりては、外國の詞あまた入り交りて、勒兒に始まる詞のふえたるは、日本語に良行の音に始まる詞のふえたるに異ならず。すべて蒙古語も、他の國と同じく、古々今々變遷多ければ、亞細亞の諸國の言語を比較研究せん欲する人は、その古語に依らずばあるべからず。それには、祕史の蒙古文は、最も善き材料なり。

今本は、廬州府の張太守以來、數回の轉寫を経たれども、通體完善にして、誤脱甚だ少し。字の偏旁の誤り、字の左なる音符の脱ちたるなどは、往往あれども、前後にある同じ語を探して比較すれば、改正せられざるこそ無し。稀には、體に脱語脱文ありと思はるゝ處あり。補ひ得る限は、補ひて譯せり。又原文には、脱語なければ、譯すれば語の足らざるこそあり。賴朝の妻政子と云ふべきを、蒙古文にては

賴朝の政子と云ふことあり。其等は、妻の字を補へり。すべて補へる文には、蓋し底この符〔 〕を用ひて、注釋に用ふる括弧の符〔 〕と區別せり。又明の時に已に解しかねたりと見えて、旁譯を施さざる處あり。其等は、解し得らるゝだけは譯し、解せられざる者は、敢てごまかさず、原語をそのままに擧げたり。其等も、今の蒙古語と比較して考へなば、解せられざる事も無かるべければ、他日又試みん。

此書の本文は、處處に段落を切りて、別項に書き出せり。其は、蒙古字の原本に初より然りしには、あらで、明人の譯したる時、譯文を本文の間に挿まんが爲に切りたりと見えて、無理なる處あり。例へば「何何を望み見て言はく云云」とある「見て」にて前段を止め、「言はく云云」より後段の始まるが如き類屢あり。今譯文のみの書にては、この

塔行 たぎやう	牙行 やぎやう	札行 ぢやぎやう	察行 ちやぎやう	沙行 しゃぎやう	撒行 さぎやう	中合行 ちがぎやう	中合行 ちがぎやう	哈行 はぎやう
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄌ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
塔 ta	牙 ya	札 ja	察 cha	沙 sha	撒 sa	中合 gha	中合 kha	哈 ha
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄌ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
帖 te	也 ye	者 je	徹 che	雪 she	薛 se	格 ge	客 ke	赫 he
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄌ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
的 ti	亦 yi	只 ji	赤 chi	失 shi	昔 si	吉 gi	乞 ki	希 hi
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄌ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
脫 to	約 yo	勻 jo	綽 cho	莎 sho	鎖 so	豁 gho	闊 kho	訶 ho
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄌ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
禿 tu	余 yu	主 ju	出 chu	擲 shu	速 su	古 ghu	忽 khu	許 hu
ㄊ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄌ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
禿 tü	余 yü	主 jü	出 chü	擲 shü	速 sü	古 gü	闊 kü	許 hü
ㄎ					ㄌ	ㄎ	ㄎ	
惕 t	y	j	ch	sh	思 s	克黑 g gh	克黑 k kh	h

洼行 わぎやう	刺行 ちぎやう	刺行 ちぎやう	馬行 まぎやう	巴行 はぎやう	納行 なぎやう	荅行 たぎやう
ㄎ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
洼 wa	刺 ra	刺 la	馬 ma	巴 ba	納 na	荅 da
ㄎ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
列 re	列 le	筏 me	別 be	捏 ne	迭 de	
ㄎ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
爲 wi	里 ri	里 li	米 mi	必 li	你 ni	的 di
ㄎ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
羅 ro	羅 lo	抹 mo	字 bo	那 no	朶 do	
ㄎ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
魯 ru	魯 lu	木 mu	不 bu	訥 nu	都 du	
ㄎ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
魯 rü	魯 lü	木 mü	不 bü	訥 nü	都 dü	
ㄎ	ㄎ	ㄌ	ㄎ	ㄎ	ㄎ	ㄎ
兒 r	勒 l	木 m	卜 b	一 n	惕 d	

この表の蒙古字の形は、*Schmidt* 楊の蒙古字引に據れり。一音に二字
づつ書きたるは語の頭に附く形と語の尾に附く形とを書分けた

るなり。變韻の段は、語の尾に附くこと稀なるが故に、その形を略けり。末の段なる母音なき音を表せる字は、語の頭に附くことなければ、中に挾まる形と尾に附く形とを書分けたり。搦米惕の蒙古字引は、今の蒙古語を集めたるものにして、合行の合 か 闊 こ 忽 く を ha ho hu の如く讀ませて、別に哈行の音に始まる語はあらざる故に、この表には、哈行の音を表せる蒙古字を闕きたり。されども秘史には明かに哈行の音を表せる譯字あれば、古代は別に哈行の音ありて、合行の字を以てその音をも表したらんと思はる。この表に依れば、蒙古の音には、撒行の濁音即ち z を父音とせる成音なし。札行の只 ji は、察行の赤 chi の濁音にして、撒行の昔 si の濁音に非ず。又 f を父音とせる輕唇の清音も p を父音とせる重唇の清音 巴行 の 清音 もなし。 h を父

音とせる哈行の音は、唇音に非ず、喉音に屬して、合行の輕き音なり。
合 か 中 中 忽 く 中 合 が 中 豁 ご の四字三字の左に中の字を小く附けたるは、この三字は本哈行の音 xa hu ho なるを合行の清濁音に借用ひたることを示せる符號なり。罕 かん 中 含 かん 中 見 こん 中 渾 こん 中 孩 かい 中 灰 かい など、それに同じ。刺行の六字實は、の左に小舌の字あるは、この五字は、みな刺行の音即ち l を父音とせる音にして、漢字には、er を父音とせる音なきが故に、刺行の字を借りて、捲舌音なることを示せる符號を附けたるなり。闌 らん
藍 らん 連 れん 廉 れん 鄰 りん 零 りん 林 りん 變 べん 倫 りん な ご み な 同 じ。 黑 く 克 く 黑 く 克 く 思 す 惕 てい 惕 てい
ト 木 木 勒 れ の十字七字は、父音のみにて母音なき音を譯したる字にして、此書には、必ず右に倚せて小く書けり。馬行の兀の段に 木 木 の字、變韻の段に 木 木 の字あれども、木 木 木 木 は、大字に書けるが故に、

細字旁書の木^mと混る、ここなし。刺行の兒^{er}も、父音のみなれども、この字の音は、本より母音なきが如く聞ゆる音なれば、右にも倚せず、大字に書けり。

右の表を見ん人は、蒙古字のいかにも同じ形にて異なる音を表せるもの多きここに心附くなるべし。阿の段と額の段とは、阿行合行合行沙行の外はみな同じ。幹の段と兀の段とは、合行合行の外はみな同じく、その二行も、語の頭にては同じ。元來蒙古字の本なる委兀兒字は、失哩亞の文字より出でたるものにして、失哩亞の文字は、母音の表し方十分ならざりしかば、蒙古もその例に倣ひ、母音の符號備はらず。殊に蒙古語には協韻の法ありて、阿と額と互に變り、幹と兀と互に變る故に、阿幹の二段を以て額兀の二段を兼ねること

は、却て簡便なりしならん。又合行の濁音には、濁音の符號を附けたるもあり、附けざるもあり。塔行の濁音は、全く清音に同じく、何の符號をも附けず。我が國にては、古事記日本紀萬葉集など清濁音の區別正しかりしに、後の世の人人は不精になりて、濁點を附くることを厭ひ、歌人などは濁を打たぬを高雅なりと思ふに至れるを見れば、蒙古字の清濁音を區別せざるも怪むに足らず。蒙古字にはかくの如く同形異音頗る多けれども、蒙古語を語り居る人には、之を讀むに何の差支も無かるべし。されども外國人にて、蒙古文を讀み、その發音を誤らざらんことは、甚だ難き業なるに、幸にも此書の音譯は、阿額の二段、幹兀の二段、哈合合の三行にて譯したるの外、塔塔の二行など、皆正しく譯し分けたれば、蒙古の古音を學ぶには、蒙古字の

原文に依らんよりも便善し。只變韻の段は、その音に適當する漢字なき故に、大抵兀の段の字を用ひて譯せり。又明の世には、已に百數十年前の蒙古音を正しく知りかねたるもあり、こ見えて、音譯の前後違へるあり。前に速客該と譯したるを後に速格孩と譯し、前の薛徹を後に撒察前の塔孩を後に荅孩と譯したる處あり。是等は、我が譯本には、誤りの明かなる所の外は、原譯字をそのままに書き、その異同を注したり。

又すべて我が譯本の地名人名などは、此書の譯字をそのままに書きたれば、一一右傍に假名をふりたり。但我が假名には、哈行の許^{gh} 渾^{hun} 灰^{hui} などを表すべきものなきが故に、假にフ^{fu}を用ひ、kh^{kh} こ^{ko} とも、gh^{gh} こ^{ko} とも、假名にては區別なし。又字の左に中の字を添ふるこ

も、植^{sh} 字に不便なるが故に略けり。撒^{sa} 行の昔^{si} と沙^{sha} 行の失^{shi} とは、蒙古字にては區別なし。荅^{da} 行の的^{di} は適當の假名なき故に、札^{cha} 行の只^{ji} に同じき假名をふり、牙^{ya} 行の也^{ye} には、阿^{ah} 行の額^{eh} に同じき假名をふり、丁^{ding} 延^{yen} なども然り。一なる刺^{ci} 行も、同じく我が刺^{ci} 行の假名をふりて、刺^{ci} 行の字の左なる舌^{sha} の字の代りに口^{ku} 扁^{ben} を添へたり。塔^{ta} 行の禿^{tu} 荅^{da} 行の都^{du} は、ツ^{tsu} ツ^{tsu} として、原音に遠^{to} ざかる故に、日本從來の漢音の母音に従ひ、幹^{kan} の段の假名をふり、屯^{tun} 統^{tung} 敦^{dun} などもみなしかせり。黒^{kh} 克^{kh} 黒^{gh} 克^{gh} 思^{si} 惕^{ti} 惕^{ti} ト^{to} 木^m 勒^l 兒^{er} の八字十一音は、父音のみにて、我が成^{sei} 音假名にて表し難ければ、兀の段の假名の段の假名を借りてふりたり。

又此書の音譯は、右の如く譯字を定め置きながら、猶語の意味を

知り、易からしめんが爲に、種種なる異字を用ひたり。河は木連なるを沐漣（むれん）と書き、山の名の不兒罕（ぶゐかん）を不爾罕（ぶゐかん）と書き、貂鼠（てうそ）は不魯罕（ぶろかん）なるを不臚罕（ぶろかん）と書き、馬は抹里（まくり）又は抹鄰（まりん）なるを秣驪（まくり）又は秣麟（まりん）と書き、門は額兀顛（がくうてん）なるを額閼（がくあつ）と書き、弓は訥木（ねつぼく）なるを弩木（ぬぼく）と書き、望（のぞ）は合刺（かかし）なるを合喇（からし）と書き、行くは牙（や）不（ぶ）なるを逐步（てつぽ）と書き、食（く）ふは亦迭（い）なるを亦唾（い）と書ける類なり。今固有名詞（こごうめいし）に其等（それら）の異字ある時は、みな一定の音譯字に改め書けり。

近世史書に用ひらるゝ音譯の内にては、乾隆の勅撰（ていせん）なる遼金元史語解（りやうきんげん）は稍法則（せうぽうそく）あり。その契丹女真蒙古（せつたんじゆんもんこ）の諸國語（しよこくご）の解釋（かいしゃく）には誤り多く、三史の音譯字を悉く改定したるは、殆どみな附會杜撰（ふゐづせん）なれども、一定の音に一定の字を當てたるだけは、從來の史書に勝れり。乾

隆以後の史書は、多くその音譯法に従ふが故に、今祕史の音譯と比較せんが爲に、その音譯字を滿洲字（まんしゆじ）の下に書いて排列（はら）するここ左の如し。

阿行 <small>（あぎやう）</small>	喀行 <small>（かぎやう）</small>	噶行 <small>（がぎやう）</small>	哈行 <small>（はぎやう）</small>	薩行 <small>（さぎやう）</small>
阿 <small>（あ）</small> の段 <small>（だん）</small>	喀 <small>（か）</small> の段 <small>（だん）</small>	噶 <small>（が）</small> の段 <small>（だん）</small>	哈 <small>（は）</small> の段 <small>（だん）</small>	薩 <small>（さ）</small> の段 <small>（だん）</small>
イ<阿 <small>（あ）</small>	イ<喀 <small>（か）</small>	イ<噶 <small>（が）</small>	イ<哈 <small>（は）</small>	イ<薩 <small>（さ）</small>
額 <small>（え）</small> の段 <small>（だん）</small>	克 <small>（け）</small> の段 <small>（だん）</small>	格 <small>（げ）</small> の段 <small>（だん）</small>	赫 <small>（へ）</small> の段 <small>（だん）</small>	色 <small>（せ）</small> の段 <small>（だん）</small>
イ<額 <small>（え）</small>	イ<克 <small>（け）</small>	イ<格 <small>（げ）</small>	イ<赫 <small>（へ）</small>	イ<色 <small>（せ）</small>
伊 <small>（い）</small> の段 <small>（だん）</small>	奇 <small>（き）</small> の段 <small>（だん）</small>	吉 <small>（ぎ）</small> の段 <small>（だん）</small>	希 <small>（ひ）</small> の段 <small>（だん）</small>	錫 <small>（し）</small> の段 <small>（だん）</small>
イ<伊 <small>（い）</small>	イ<奇 <small>（き）</small>	イ<吉 <small>（ぎ）</small>	イ<希 <small>（ひ）</small>	イ<錫 <small>（し）</small>
鄂 <small>（お）</small> の段 <small>（だん）</small>	科 <small>（こ）</small> の段 <small>（だん）</small>	果 <small>（こ）</small> の段 <small>（だん）</small>	和 <small>（わ）</small> の段 <small>（だん）</small>	索 <small>（そ）</small> の段 <small>（だん）</small>
イ<鄂 <small>（お）</small>	イ<科 <small>（こ）</small>	イ<果 <small>（こ）</small>	イ<和 <small>（わ）</small>	イ<索 <small>（そ）</small>
烏 <small>（う）</small> の段 <small>（だん）</small>	庫 <small>（く）</small> の段 <small>（だん）</small>	古 <small>（こ）</small> の段 <small>（だん）</small>	呼 <small>（ふ）</small> の段 <small>（だん）</small>	蘇 <small>（す）</small> の段 <small>（だん）</small>
イ<烏 <small>（う）</small>	イ<庫 <small>（く）</small>	イ<古 <small>（こ）</small>	イ<呼 <small>（ふ）</small>	イ<蘇 <small>（す）</small>
長烏 <small>（ながう）</small> の段 <small>（だん）</small>	長庫 <small>（ながく）</small> の段 <small>（だん）</small>	長古 <small>（ながこ）</small> の段 <small>（だん）</small>	長呼 <small>（ながふ）</small> の段 <small>（だん）</small>	長蘇 <small>（ながす）</small> の段 <small>（だん）</small>
イ<長烏 <small>（ながう）</small>	イ<長庫 <small>（ながく）</small>	イ<長古 <small>（ながこ）</small>	イ<長呼 <small>（ながふ）</small>	イ<長蘇 <small>（ながす）</small>
父音 <small>（ふいん）</small>	克 <small>（く）</small>	□ <small>（た）</small>	h	s
イ<父音 <small>（ふいん）</small>	イ<克 <small>（く）</small>	イ<□ <small>（た）</small>	イ<h	イ< s

この表の滿洲字の形は清文鑑に據り、その發音は三史語解に穆

法行 <small>ふあぎやう</small>	幹行 <small>わぎやう</small>	喇行 <small>らぎやう</small>	拉行 <small>らぎやう</small>	雅行 <small>やぎやう</small>	瑪行 <small>まぎやう</small>	帕行 <small>はぎやう</small>	巴行 <small>はぎやう</small>
フ フ 法 <small>ふあ</small>	ク ク 幹 <small>わあ</small>	ラ ラ 喇 <small>らあ</small>	ラ ラ 拉 <small>らあ</small>	ヤ ヤ 雅 <small>やあ</small>	マ マ 瑪 <small>まあ</small>	パ パ 帕 <small>ぱあ</small>	バ バ 巴 <small>ばあ</small>
フ フ 弗 <small>ふえ</small>	ク ク 沃 <small>わえ</small>	ラ ラ 呼 <small>れえ</small>	ラ ラ 呼 <small>れえ</small>	ヤ ヤ 頁 <small>ええ</small>	マ マ 默 <small>めえ</small>	パ パ 珀 <small>ぺえ</small>	バ バ 伯 <small>べえ</small>
フ フ 費 <small>ふい</small>		ラ ラ 哩 <small>りい</small>	ラ ラ 里 <small>りい</small>		マ マ 密 <small>みい</small>	パ パ 關 <small>ぴい</small>	バ バ 必 <small>びい</small>
フ フ 佛 <small>ふお</small>		ラ ラ 囉 <small>ろお</small>	ラ ラ 囉 <small>ろお</small>	ヤ ヤ 約 <small>よお</small>	マ マ 摩 <small>まお</small>	パ パ 頗 <small>ぽお</small>	バ バ 博 <small>ぼお</small>
フ フ 富 <small>ふ</small>		ラ ラ 嚕 <small>る</small>	ラ ラ 魯 <small>る</small>	ヤ ヤ 裕 <small>ゆ</small>	マ マ 穆 <small>む</small>	パ パ 普 <small>ぷ</small>	バ バ 布 <small>ぶ</small>
フ フ 富 <small>ふ</small>		ラ ラ 嚕 <small>る</small>	ラ ラ 魯 <small>る</small>	ヤ ヤ 裕 <small>ゆ</small>	マ マ 穆 <small>む</small>	パ パ 普 <small>ぷ</small>	バ バ 布 <small>ぶ</small>
f	w	r	l	y	m	p	b

納行 <small>なぎやう</small>	達行 <small>だぎやう</small>	塔行 <small>たぎやう</small>	饒行 <small>じやぎやう</small>	扎行 <small>ぢやぎやう</small>	察行 <small>ぢやぎやう</small>	咱行 <small>ぢやぎやう</small>	擦行 <small>つあぎやう</small>	沙行 <small>しゃぎやう</small>
ナ ナ 納 <small>な</small>	ダ ダ 達 <small>だ</small>	タ タ 塔 <small>た</small>	ジャ ジャ 饒 <small>じや</small>	ヂャ ヂャ 扎 <small>ぢや</small>	チャ チャ 察 <small>ぢや</small>	ヂャ ヂャ 咱 <small>ぢや</small>	ツァ ツァ 擦 <small>つあ</small>	シャ シャ 沙 <small>しゃ</small>
ナ ナ 訥 <small>ね</small>	ダ ダ 德 <small>で</small>	タ タ 特 <small>て</small>	ジャ ジャ 熱 <small>じえ</small>	ヂャ ヂャ 哲 <small>ぢえ</small>	チャ チャ 徹 <small>ちえ</small>	ヂャ ヂャ 則 <small>ぢえ</small>	ツァ ツァ 策 <small>つえ</small>	シャ シャ 舍 <small>しえ</small>
ニ ニ 尼 <small>に</small>	ディ ディ 迪 <small>ぢ</small>	ティ ティ 題 <small>ぢ</small>	ジ ジ 日 <small>じ</small>	ヂ ヂ 濟 <small>ぢ</small>	チ チ 齊 <small>ぢ</small>	ヂ ヂ 資 <small>ぢ</small>		シ シ 實 <small>し</small>
ノ ノ 諾 <small>の</small>	ド ド 多 <small>ど</small>	ト ト 托 <small>と</small>	ゾ ゾ 弱 <small>じよ</small>	ジョ ジョ 卓 <small>じよ</small>	チョ チョ 綽 <small>じよ</small>	ヂョ ヂョ 佐 <small>ぢよ</small>	ツョ ツョ 磋 <small>つよ</small>	ショ ショ 碩 <small>しよ</small>
ヌ ヌ 努 <small>ぬ</small>	ド ド 都 <small>ど</small>	トゥ トゥ 圖 <small>と</small>	ジュ ジュ 儒 <small>じゆ</small>	ヂュ ヂュ 珠 <small>ぢゆ</small>	チュ チュ 楚 <small>ちゆ</small>	ヂュ ヂュ 租 <small>ぢゆ</small>	ツュ ツュ 粗 <small>つゆ</small>	シュ シュ 舒 <small>しゆ</small>
ヌ ヌ 努 <small>ぬ</small>	ド ド 都 <small>ど</small>	トゥ トゥ 圖 <small>と</small>		ヂュ ヂュ 珠 <small>ぢゆ</small>	チュ チュ 楚 <small>ちゆ</small>	ヂュ ヂュ 租 <small>ぢゆ</small>		シュ シュ 舒 <small>しゆ</small>
ン ン <input type="checkbox"/>		ト ト 特 <small>と</small>						
n	d	t	zy	j	ch	dz	ts'	sh

麟德(Möllendorf)の滿洲文法書に據れり。滿洲字は蒙古字に本づきて改正増補したるものにして、蒙古字の同形異音なるものには規則正しく點をつけて區別を明かにせり。擦行咱行饒行帕行法行の字は、蒙古字になかりしものを補へるなり。猶その外にドを父音こせるカ行のㄨㄣ、る稞、ドを父音こせる嘎行のㄨㄣ、嘎、る。郭、ドを父音こせる嘿行のㄨㄣ、嘿、る。豁、syを父音こせるㄨㄣ、四、sy、tsを父音こせるㄨㄣ、此、chi、yを父音こせるㄨㄣ、勅、ch、yi、yを父音こせるㄨㄣ、智、naなどあれども、表には略けり。これらの補へる文字のうち、カ行嘎行擦行咱行咱行饒行の六行を定めて、ㄨㄣ、ㄨㄣ、ㄨㄣ、の四音を譯せんが爲に作れるなり。

失哩亞より傳はれるこの表音字は、委古兒忙豁勒を歴て次第に改正し、滿洲字となりて、字畫は益簡易に赴き、筆の運びも自在になり、字の數は音の數だけ備はりて、重複の字もなく、一字を二音に用ふることもなし。字畫簡易、運筆自在にして、口より出づる音を明確に表すものは、表音字の目的を最善く達したるものなり。こせば、滿洲字は、實にその理想に近づきたる文字なり。されども漢字の力に壓されて、廣く用ひられざるを見れば、文字の流行にも勢と機會とありて、その物の善惡のみには拘らざるを知るべし。

又この表の音譯字の、前の表に同じきものは、字の左に圈を附けたる三十一音二十七字のみなり。訥は、祕史にては納行の兀の段、naなれども、こゝにては額の段、neなり。伯は、祕史にては巴、baの代りにも別、beの代りにも用ひたれども、こゝにては常に別、beに同じ。斡は、

秘史にては阿行の幹の段だん。なれども、こゝにては幹行の阿の段だん waなり。喇行の音おんに口扁くへんをつけたるは、秘史の舌したの字を書けるよりは簡便かんべんなり。克くは、喀行かの額えの段だん keにも父音ふおん kにも用ひ、特とくは、塔行たの額えの段だん tanにも父音ふおん tにも用ひ、穆むくは、瑪行まの烏うの段だん mにも長烏ながうの段だん mūにも父音ふおん mにも用ひ、呼ろは、喇行らの額えの段だん reにも父音ふおん rにも用ひて、父音の場合に細字さいじ旁書ぼうしよの法はふを取らざるが故に、父音ふおん o成音せいおん o常に混れ易し。これは秘史の書方かきかたより劣おとれり。近頃きんきんの人は、大抵おほむね父音ふおんなる勒れ呼ろの代りに爾じの字を用ふる故に、額えの段だんなる勒れ呼ろに混るゝことはなければ、その代りに拉行ら lと喇行ら rとの區別を失へり。

蒙古字滿洲字の書方かきかた用法よしみなどは、この序論じよろんに詳説しょうせつし難く、又詳説すべき限かぎりにあらざれども、余わがが譯本やくほんを讀まん人、明譯秘史めいやくひしに據れる

固有名詞の譯字の、近世通行の書に異なるを怪あやしまんことを想おもひ、又明譯秘史を讀まんことする人、近世通行の音譯法おんやくはふと異なるを知らずして、漢字音譯の蒙古文を音讀する塔都奇たつとぎを得難がたからんことを憂うれへて、その特とく必ひつ奇ぎにもこてかくなん。

成吉思合罕の騰格哩に昇りたる合該只勒より六百七十九年	Chinghis Khabhan tengeri Gakhai Jil
の豁亦納なる秣只勒の納木兒の帖哩兀の撒喇に納喇訥忽札	Horina Morin Jil Nakur Nambu Terhi Ulan Salaru Nalana Khabhan Khabhan
兀兒と稱へらるゝ朶囉納竹克の也客兀魯思の合木渾合罕の也	Uer Jil Dorona Chok Kyeke Ulu Si Gakhuwan Khabhan
客幹兒朶の兀篋兒に當れる阿喀吉溫都兒額朶豁罕豁牙兒の	Kekhan Doru Uner Aqai Gwundu Er Eto Ghorokhan Khabhan
札兀喇なる兀出干格兒にて抹哩幹喀巴刺合孫に生れたる富只	Jalair Uderkagan Muli Kan Khabharai Sun Urewa
洼喇幹孛黒の納喀米赤約額不干書きて畢へたり。	Wala Kan Boku Nakami Syak Eto Kan Shyaku Hei

成吉思汗實錄の序論終り。

成吉思汗實錄卷の一

(蒙古語の名は忙豁論紐察脫卜察安ば蒙古の秘史忙豁論は蒙古の紐察は秘密脱卜察安は實錄なり。委しくは序論の初に言へり。明譯本には、元朝秘史と題してその下に分注二行あり。右は忙豁論紐察の五字なり。左は脱卜察安の四字なるべきを、今の鈔本には卜の字を脱せり。卜は母音なき巴行の音を譯せる字にて、細字旁書なるが故に影寫の際脱し易し。本文にも、卜の字の脱ちたるは屢あり。二行の分注に、右五字にて左三字なる筈なれば、卜の脱ちたりけんこと疑ひなし。)

元太祖在時、漢北文臣無名氏以蒙古文委兀兒字撰述明洪武十五年翰林侍講火原潔等漢字音譯俗語旁譯日本明治三十九年盛岡那珂通世以和文直譯附校注

成吉思合罕の根原

元祖なる狼鹿

上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき。(蒙古字兒帖赤那)

蒙古布爾特齊諾。この注に引ける蒙古源流は、乾隆の史臣の翻譯せる漢文源流布爾特齊諾の本なり。昨年乙巳の九月我が友内藤湖南は盛京の官庫

にて蒙古源流の蒙古文の原本を得て寫し取れる由なり。その書は蒙古文祕史に次ぎて史學文學に益ある珍書なり。その書に據りて漢譯本を考訂せんには恰も蒙古文祕史に據りて明譯俗文の誤謬を正し得るが如くなるべし。その妻なる慘白き牝鹿ありき。語豁埃馬喇勒源流郭瑪喇勒。郭幹は美騰吉思(海又は大)を渡りて來ぬ。幹難木噠(今鄂嫩河)の源に不兒罕合勒敦(不兒罕嶽即史闡關傳)不里罕哈里敦源流布爾干噶拉敦(今大肯特山)に營盤して生れたる巴塔赤罕源流必塔察干ありき。

巴塔赤罕より合兒出まで八世

巴塔赤罕の子塔馬察(蒙古特墨徹克)塔馬察の子豁哩察兒篋兒干(篋兒干は善射者)和哩察爾墨爾根(蒙古源流)豁哩察兒篋兒干の子阿兀站孛囉兀勒(蒙古源流)阿固濟木博郭囉勒阿兀站孛囉兀勒の子撒里合察兀(蒙古源流)薩里噶勒濟固撒里合察兀の子也客你敦(譯すれば大眼。蒙古源流には尼格尼敦譯すれば獨眼、下の都蛙鎖也客你敦の子擣)

合兒出より曾孫まで

鎖赤(蒙古源流)薩木蘇齊(擣鎖赤の子)合兒出(蒙古源流)哈里哈爾楚(合兒出の子)孛兒只吉歹篋兒干(射者蒙古源流)博爾濟吉台墨爾根(忙豁勒眞豁阿女蒙古源流)蒙古勒津郭翰哈屯(云ふ妻ありき)孛兒只吉歹篋兒干の子脫囉豁勒眞伯顏(譯すれば脫富人即ち長都喇勒津巴延)孛兒只吉歹(蒙古源流)黑臣豁阿(蒙古源流)博囉克沁郭翰哈屯(云ふ妻孛兒只吉歹)孛兒只吉歹(蒙古源流)必(蒙古源流)若黨答亦兒孛兒只吉歹(蒙古源流)駱駝馬ありき。脫囉豁勒眞の子都蛙鎖豁兒(蒙古源流)都幹索和爾(蒙古源流)朶奔篋兒干(元史太祖本紀宗室世系表陶宗儀的輟耕錄)脫奔咩哩韃源流多本墨爾根(二人ありき)

都蛙鎖豁兒の獨眼

都蛙鎖豁兒は額の中に獨眼あり。三日程の地を望むなり。

一日都蛙鎖豁兒は、朶奔篋兒干なる弟、不兒罕獄の上に上れり。都蛙鎖豁兒は、不兒罕獄の上より望みて、統格黎克豁囉罕（河元史本紀統急里忽魯源流通格里克呼魯歡）に沿ひ一羣の民起ちて入りて來ぬるを望みて見て、

言はく彼の起ちて來ぬる民の内に、一つの黒き輿ある車の完勒只格（明譯車前）に一人の女子妍（妍）あり與へられず（嫁が）あらば、朶奔篋兒干弟、汝が爲に求めん（云）ひて朶奔篋兒干弟を見に遣りぬ。

朶奔篋兒干彼の民の處に到れば、實にも美しく（蒙語）妍（妍）聲（聞え）名の大きな阿闌豁阿（阿闌媛、豁阿は、美より轉じて、媛即ち譽れ）の大きな阿闌豁阿（美女なり、元史本紀世系表較耕錄）阿闌果火源流阿掄郭幹（阿闌果火源流阿掄郭幹）の名ありて、人にも與へられざる女

子なりき。

彼の羣居る民は、又闊勒巴兒忽眞脫古木（闊勒巴兒忽眞の隘處、親征錄元史本紀）八元忽眞之隘（額兒忒曼は巴兒古臣秃古嚕姆と、巴爾古精地）の主人巴兒忽歹篋兒干（巴兒忽惕部）の女巴兒忽眞豁阿（巴兒忽眞媛、巴兒古源巴喇郭沁郭幹）と云ふ女子を豁哩秃馬惕（喇失惕額丁の流）巴喇郭沁郭幹（巴兒古惕の中の一部落にして、巴兒古臣秃古嚕姆の地に住めりれば、秃馬惕は、巴兒古惕の中の一部落にして、巴兒古臣秃古嚕姆の地に住めりと云ふ）されども下の阿哩黑兀孫（今、伊爾庫河ならば、秃馬惕の地は、拜喀爾湖の西に在るべし、元史兵志に、太僕寺の）官人豁哩刺兒台篋兒干（源流、牧地北踰、火里秃麻とあるは、この地なり）官人豁哩刺兒台篋兒干（源流）郭哩岱默爾根（郭哩岱默爾根）に與へられたりき。豁哩秃馬惕の地にて阿哩黑兀孫にて（阿哩黑の水、阿哩克烏遜、高寶銓の説に、今の伊爾庫河なりと云ふ）豁哩刺兒台篋兒干（妻）巴兒忽眞媛より生れたる阿闌媛と云ふ女子然り。

豁哩刺兒姓の起

成吉思汗實錄卷の一

六

豁哩刺兒台篋兒干は、豁哩秃馬惕の地の内貂鼠青鼠野獸ある地を差止め合ひて(仲間内にて互に禁約して)憂へ合ひて(譯明豁哩秃馬敦地面貂鼠青鼠野物被自火裏禁約不得打捕的上頭煩惱了)豁哩刺兒(征錄元史本紀親火魯刺思)姓となりて、不兒罕嶽の野獸を捕るに好くある地好し(こて)不兒罕嶽の主人不兒罕孛思合黒三晒赤伯顔兀唻孩(譯すれば不兒罕を起したる、名は晒赤長者姓は兀唻孩)の處に起ちて來たりき。豁哩秃馬惕の豁哩刺兒台篋兒干の女にて阿哩黒兀孫に生れたる阿闌媛をそこに求めて朶奔篋兒干の取れる縁故は、かくあり。

朶奔篋兒干の子

阿闌媛は、朶奔篋兒干の處に來て、二人の子を生めり。不古訥台(源流蒙古伯袞德依)別勒古訥台(源流蒙古伯勒格特依)と云へるなりき。

(下文に依れば、不古訥台は弟、別勒古訥台は兄なり。)

都蛙鎖豁兒の四子

都蛙鎖豁兒なる其の(兒干の)兄は、四人の子ありき。然ある程に都蛙鎖豁兒なるその兄は、無くなれり(死に)。都蛙鎖豁兒無くなれる後、その四人の子は、朶奔篋兒干叔父を親族と爲さず、侮りて分れて棄て、起てり。朶兒邊姓となり(朶兒邊は四人なるが故に、四つを以て姓となし)て、朶兒邊(親征錄元史本紀)朶魯班部の民と彼等の(子孫)は爲れり。

兀唻罕より鹿の焼肉を朶奔篋兒干の得たる

その後、一日朶奔篋兒干は、脱豁察黒温都兒(脱豁察黒高地即ち脱豁察黒岡)の上に獸狩に上れり。林の中に兀唻罕(種族の名、即ち前の晒赤)の三人、三歳鹿を殺して、その肋その臟腑を焼きて居るに遇ひて、

成吉思汗實錄卷の一

七

朶奔篋兒干言はく「友よ、焼肉を」云ひき。與へん」云ひて、その肺臟ある腹の皮を取りて、三歲鹿の肉皆を朶奔篋兒干に與へたり。

朶奔篋兒干は、その三歲鹿を馬に駄けて來ぬるに、路にて一人の貧しき人その子を引きて行くに遇ひて、

朶奔篋兒干「何人ぞ、汝」問へば、その人言はく「我は、馬阿里黑（名蒙古）瑪哈賚（伯牙兀歹）伯牙兀歹（元史伯岳吾耕錄伯要歹）困窮して行くなり。その獸の肉より我に與へよ。我この子を汝に與へん」云ひき。

朶奔篋兒干は、その言につき、三歲鹿の片方の腿を折りて與へて、彼のその子を伴れ來て、家の内に使ひて住みたりき。

男なき阿闐媛より三子の生れ

かく住める程に、朶奔篋兒干無くなれり。朶奔篋兒干を無くなしたる後、阿闐媛は、男無きに三人の子を生めり。不忽合塔吉（元史本紀世系表）博寒葛荅黑（蒙古布固哈塔吉）不合秃撒勒只（元史）博合親撒里直（蒙古博克多薩勒濟固）孛端察兒蒙合黑（元史）孛端察兒（孛端察兒）云へるなりき。

母の行ひを前の二子の疑ひ

前に朶奔篋兒干より生れたる別勒古訥台、不古訥台、二人の子は、その母阿闐媛の背處にて言ひ合へらく「この我等の母は、兄弟なる房親の人（兄弟）無く男（外）無くありつゝ、この三人の子を生めり。家の内に猶馬阿里黑、伯牙兀歹の子あり。原文に古溫とありて、語譯には人と譯し、文譯には家人と譯したれども、古溫は子の蒙語なる可溫の誤りなるべし。この三人の子は、彼のなるぞ」母の背處にて噂し合へるを、その母阿闐媛

覺りて、

春の一日臘羊を煮て、別勒古訥台不古訥台不忽合塔吉不
合秃撒勒只孛端察兒蒙合黑この五人の子ごもを列べ坐
て一條づつの箭を折れ「ご云ひて與へたり。一條づつをい
で畱めん折りて去けたり。又五條の箭を一つに束ねて、折れ」
ご云ひて與へたり。五人にて五條束ねたる箭を人ごこに取
りて廻して折りかねたり。

阿闌媛の辯解
そこに阿闌媛なる彼等の母は言へり。汝等別勒古訥台不
古訥台なる我が二人の子よ。我をこの三人の子を生めり。誰
の何の子なるか「ご疑ひ合ひて噂し合へり。汝等の疑ふも是
なり。」

夜ごごに光る黄色の人房の天窓の戸口の明處より入り
て、我が腹を摩りて、その光は我が腹の内に透るなりき。出づ
るには、日月の光にて、黄狗の如く爬ひて出づるなりき。輕率
に何ぞ言ふ、汝等これにて察れば、明かに彼の(光る人)は、皇天
の御子なるぞ。黒き頭の人(謂はゆる黎)に比べて何ぞ言ふ、汝
等合木渾合惕(合木渾罕の複稱)ごならば、民草はそこに覺らん
ぞ「ご云へり。」

又阿闌媛は五人の子を教ふる言に言はく、汝等我が五人
の子は獨の腹より生れたり。汝等は、恰も五條の箭の如し。獨
獨にならば彼の一條づつの箭の如く、誰にも容易く折られ
ん。汝等彼の束ねたる箭の如く、諸共に一つの商量あるごな

らば、誰にも容易くは何ぞならん(何ぞ敗)、汝等らと云へり。かく住める程に阿闐媛なる彼等の母は無くなれり。

家産の分け合ひ

その母阿闐媛を無くなしたる後、兄弟五人にて、馬羣糧食を分け合ふに、別勒古訥台、不古訥台、不忽合塔吉、不合秃撒勒只、四人にて共に取れり。孛端察兒蒙合黑は弱くありて、親族に算へず、分前を與へざりき。

孛端察兒の倍住

孛端察兒は親族に算へられずして、こゝに住みて何と云ひて、脊瘡ある尾短の香黒の青馬に乗りて、死なば彼等の弟死なん。活きは彼等の弟活きんと云ひて、幹難河に沿ひ去りて放ちたり(その身を自)。去りて巴勒諄阿喇(明本語譯には地名、阿喇は、阿喇勒にて、河中島なり。巴勒諄島は、八里屯阿懶之地)に到りて、そこに

草の菴の房を作りて、そこに住み居たり。

黄鷹の育て

かく住める時に、雛なる黄鷹の野雞を捕へて喫ひ居るを見て、脊瘡ある尾短の脊黒の青馬の尾の毛にて套作りて捕へて育てたり。

食物の乏しさ

喫ふ食物なく住めるには、狼の崖にて取巻ける獸を窺ひて射て殺して喫ひ合ひ、狼の喫へる(喫ひ殘)を拾ひて喫ひ、己の喉を又黄鷹を養ひ合ひ、その年過ぎたり。

鷹狩の獲物

春になれり。鴨ごも來ぬる時に、黄鷹を飢ゑさせて放てり。鴨雁ごもを、枯木ごに臭氣を乾ける木ごに腥き氣を聞くまでごに置きたり(明)拏得鶯鴨多了、喫不盡掛在各枯樹上都臭了。

都亦噠(山名明譯)の背より統格黎克小河に沿ひ、羣民起ちて來ぬ。李端察兒彼の民の處に黃鷹を放ち往きて、晝は馬乳を求めて飲みて、夜は草の菴の房に來て寝ぬるなりき。

彼の民、李端察兒の黃鷹を求むれども、與へざりき。彼の民、李端察兒に誰のごも何のごも問ふこと無く、李端察兒も彼の民に何民ご問ひ合ふこと無く行ひ合へり。

不忽合塔吉なるその兄は、李端察兒蒙合黑弟をこの幹難河に沿ひ去れり。こて尋ね來て、統格黎克小河に沿ひ起ちて來にける民に「かくかくの人、かゝる馬あるなりき」とて問へば、

彼の民の告げ

彼の民言はく「人も馬も、汝の間へるに似たるあり。黃鷹あ

るにぞある。日ごごに我等の處に來て、馬乳を飲みて去れり。夜は蓋いづくにか宿りけん。西北より風起れば、黃鷹に捕らせたる鴨雁どもの翎毛は、飄る雪の如く散りて刮かれて來るなり。こゝに近くあるぞ。今來る時ごなれり。暫く待て」と云へり。

弟を兄の伴れ歸り

暫くありて統格黎克小河に浜り一人の人來るあり。到りて來ぬれば、李端察兒なりき。不忽合塔吉なるその兄見ること(蒙語、元者額惕、見てすぐに、又は見るや、否やの意にて、稍輕し。以下すべ)認め(て動詞の下に額惕なる後置詞ある時は、犬抵云云するとして譯せり。)認め、引き伴れて、幹難河に浜り馬を驅りて去りて放ちたり(自由の身に)。

頭と領との譬

李端察兒は、不忽合塔吉兄の後より隨ひて、馬を驅りて行

譬の意の間

く行く言はく兄、兄身に頭あり衣に領ある善しと云へり。その兄不忽合塔吉は、その言を何とも爲さ(思)ざりき。又その言を言へども、その兄は何とも爲さず、その答は聲せざりき。孛端察兒行きて、又その言を言へり。その言につき、その兄言はく先程よりそれそれ何の言をか言へる、汝と云へり。

襲ひ掠むる議り合ひ

それより孛端察兒言はく、只今の統格黎克小河に居る民は、大小き悪き好き頭蹄(下上)なく齊等なり。容易き民なり。我等は彼等を襲はん」と云へり。

それよりその兄言はく「諾(蒙)者唯とも諾とも善しと)然あらば家に到りて、兄弟ども議り合ひて彼の民を襲はん」と云ひ

合ひて、

家に到ると、兄弟ども談り合ひて馬に乘れり。(蒙)抹哩刺罷。抹哩刺の本義は乗馬なれども、馬に乗りて征伐するを云ふ。以下は出馬出征など譯せり。)その孛端察兒を先驅に奔らせたなり。

孕める婦人の擠

孛端察兒は、先驅に奔りて、孕める婦人を拏へて、何姓の人物ぞ、汝と問へり。その婦人言はく「札兒赤兀惕(名)阿當罕兀噶合姓(兀噶罕)我」と云へり。

虜へ掠め

彼の民を兄弟五人にて虜へて、馬羣糧食家人の召使、住む居處に有付きたり。

札荅喇姓の祖なる札只喇歹

その孕める婦人は、孛端察兒の處に来て子産めり。他人(語)蒙札惕亦兒堅)の子なりとて、札只喇歹と名づけたり。(は札荅喇歹)

歹とも云ふ。あだしの蒙語なる札惕の尾を變わす。元史世挿只來。じたるにて、あだしきの意なり。蒙古源流には、翰濟爾台（元史世挿只來）系表、挿只來、札荅喇の遠祖と、その人（人）は爲れり。その札荅喇歹の子土古兀歹と云へるありき。土古兀歹の子不哩不勒赤嚕ありき。不哩不勒赤嚕の子合喇合荅安ありき。合喇合荅安の子札木合（親錄元史）ありき。札荅喇（源流）翰濟爾台（元史）赤刺歹（親錄元史）姓、彼等は爲れり。

巴阿嚕姓の祖なる巴阿哩歹

その婦人又孛端察兒より一人の子を生めり。孛へ（蒙）語巴哩（親錄）て取れる婦人なり。その子を巴阿哩歹（源流）巴噶哩台（親錄）と名づけたり。巴阿嚕（親錄）霸鄰（元史）八鄰（親錄）の遠祖と、その人（人）は爲れり。巴阿哩歹の子赤都忽勒孛闊（赤都忽勒力土）赤都忽勒孛闊は、婦人多くありき。その子眾多（蒙）捏木（親錄）生れたり。篋年巴阿嚕（阿嚕）

姓と彼等は爲れり。

兄弟五人より出でたる五つの姓

別勒古訥台は別勒古訥惕姓と爲れり。不古訥台は、不古訥惕姓と爲れり。不古合塔吉は、合塔斤（親錄）哈荅斤（元史）姓と爲れり。不合禿撒勒只是撒勒只兀惕姓と爲れり。（親錄）兀部（元史）散朮台（散朮台）孛端察兒は、孛兒只斤姓と爲れり。（元史）曾祖父孛兒只吉歹（源流）博爾濟錦（親錄）て、蒙古游牧記に、博明の西齋偶得を引きて、今の蒙古の元裔は、みな博爾濟吉特氏なりと云へり。

孛端察兒の子合必赤沼喇歹

孛端察兒の通へる婦人より生れたる巴喇失亦喇禿合必赤（元史）八林昔黑刺禿哈必畜（源流）哈必齊巴圖爾（元史）と云へるありき。その合必赤巴阿禿兒（合必赤）の母の從婦（嫁ぎに從）を孛端察兒扯きて居りき。一人の子生れたり。沼喇歹と云へるな

りき。(原書には、沼兀唎歹と書けり。沼兀と書きても沼の一字と音同じき故に、沼の字を略けり。かゝる例は後にもあまたあり。一一には註せず。)
沼唎歹は前に主格黎(明本に、竿懸肉祭天處)に入りたりき。(明

沼唎亦惕姓

李端察兒在時將他做兒祭祀時同祭祀有來。(譯)
李端察兒無くなれる後、その沼唎歹を家には常に阿當合
兀唎合歹(即ち前の阿當)の人住めり。彼のなるぞ云ひて祭天
處より出して、沼唎亦惕姓を爲して、沼唎亦惕(親征錄)照烈(元史)
召烈台(遠祖)の遠祖その一人は爲れり。

篋年土敦の七子

合必赤巴阿秃兒の子篋年土敦ありき。(元史)咩撚篤敦(表)
耕録は、撚を麻とま、哈必齊の孫とせり。篋年土敦の子合赤曲魯克(古
誤れり。蒙古源流瑪哈圖丹孫とせり。篋年土敦の子合赤曲魯克(古
源は、齊庫魯克。元史世系表、撚篤敦は、誤り。合赤曲魯克(古
流哈齊庫魯克。元史世系表、撚篤敦は、誤り。合赤曲魯克(古
合赤兀(表)葛朮虎(敦必乃の長)合出刺(表)葛忽刺急里擔(敦必

第二子)合赤温(表)葛赤渾(敦必乃の第)合喇歹(表)哈喇喇歹(敦
とせり。合赤温(表)葛赤渾(敦必乃の第)合喇歹(表)哈喇喇歹(敦
乃の第四)納臣巴阿秃兒(納臣勇士。元史)納眞(朮赤台)刺眞(畏答兒
子とせり。納臣巴阿秃兒(納臣勇士。元史)納眞(朮赤台)刺眞(畏答兒
眞八)七人ありき。(表)輟耕録の宗室世系は、大抵元史の世系表に同じ。蓋世系
都兒)七人ありき。(表)輟耕録の宗室世系は、大抵元史の世系表に同じ。蓋世系
には、輟耕録をば
必ずしも引かず。

七子の子孫の姓

合赤曲魯克の子海都(元海都)は、那莫命額客(那莫命と)より
生れたるなりき。(元史)本紀は、莫拏倫(海都の祖母とせり。)合臣の子那
牙吉歹(云へる)ありき。官人(蒙語)那顏(ぶる)性ある故に、那牙勤
姓(なれり)親征那也勤(元史)那哈合兒(孫とせり。)合赤兀の子巴
嚕刺台(云へる)ありき。大きなる身にて食物に健(語)巴嚕
ありき。巴嚕刺思(健)姓(氏)なれり。(世系表)八魯刺斯(大小二族あり)合
出刺の子も、食物に健(語)故に、也客巴嚕刺(大)兀出千巴嚕刺

(小巴)名づけて、巴魯刺思姓と爲して、額兒點圖巴魯刺脫朶延巴魯刺が頭たる(トを頭)巴魯刺思と彼等は爲れり。(表)世系大八魯刺斯のみは、葛忽刺急里擔の子孫に(合)合孛歹の子ともは、粥飯(語)不答安を争ひ、腦頭無き(兄弟の間に)故に、不答阿惕(表)博歹阿替姓と彼等は爲れり。合赤温の子阿答兒乞歹と云へるありき。兄弟の間に、閑諜する(語)阿答兒黑故に、阿答兒斤(親征録同)阿答里急)姓となれり。納臣巴阿秃兒の子兀魯兀歹(元史赤兀魯兀台)忙忽台(元史赤台)忙兀、畏答兒(元史赤台)忙兀兒と云へるありき。兀魯兀惕(親征録)兀魯吾(表)兀察兀秃(察は魯に作るべし。輟)忙忽惕(元史)忙兀の姓と彼等は爲れり。納臣巴阿秃兒の通へる婦人より生れたる失主兀歹朶朶刺歹と云へるありき。

海都の子の子孫の姓ども

海都の子、伯升豁兒多黑申(元史)拜姓忽兒(世系表)輟耕録は、姓を拜星呼爾多克申(哈齊庫魯克)察喇孩領忽(領忽は、漢語令公)察刺哈寧昆(輟耕録に察刺罕寧兒とあり)抄眞韓兒帖該(表)獠忽眞兀秃迭葛(秃は、兒の)三人ありき。伯升豁兒多黑申の子屯必乃薛禪(屯必乃賢)敦必乃源流托木巴該徹辰(ありき)察喇孩領忽の子想昆必勒格(世系表)直孛斯(ありき)。(この閒脱文あり。明譯に)想昆必勒格生子名俺巴孩(俺巴孩)元史)咸補海罕源流阿木拜汗(等)は、泰赤兀惕(親征録)元泰赤烏(表)世系)大丑兀秃(源流)岱齊果特(姓)となれり。察喇孩領忽の嫂妻(明)收嫂爲妻(より)生れたる別速台と云へるありき。別速惕姓(元史)抄別速氏(と)彼等は爲れり。抄眞韓兒帖該の子ともは、韓囉納兒(元史)韓刺納兒氏(又韓耳納氏)晃豁

壇(元史伯晃合丹氏)阿魯刺惕(元史阿魯刺氏)阿兒刺氏(元史)雪你惕
合卜禿兒(合思格泥格思)の姓と彼等は爲れり。

屯必乃の子

屯必乃(薛禪)の子、合不勒合罕(合不勒大葛不律寒)源流哈布勒
汗、擣薛出列二人ありき。擣薛出列の子不勒帖出巴阿禿兒

合不勒合罕の子

(親征)奔搭出拔都ありき。合不勒合罕の子七人ありき。その長
は幹勤巴兒合黑(をとめ巴兒合黑顔好きが)策斤八刺哈哈(策斤は窩の
の二字に誤れり)。次は巴兒壇巴阿禿兒(元史八哩丹源流)巴爾達木

巴圖兒(忽禿黑)蒙古兒(卷四に古を列)忽都忙納兒(元史)忽都魯
咩聶兒(忽圖刺合罕)君親征錄(忽蘭可汗)表(世系)忽魯刺罕(忽蘭
世系表)忽蘭(合答安)表(世系)合丹八都兒(脫朶延幹惕赤斤)親征と
端(世系)撥端幹赤斤(幹惕赤斤は竈なり轉じて家産の義となる蒙古の俗
少子は父の遺産を受くる故に幹惕赤斤即ち竈君と

稱す。元史には幹赤斤幹(眞幹噴幹陳など書けり)この七人ありき。

幹勤巴兒合黑の
胤なる禹兒乞姓

幹勤巴兒合黑の子忽禿黑禹兒乞ありき。(この人は卷三にも莎兒
合禿主兒乞とあれば忽禿黑禿は、莎兒合禿の)忽禿黑禹兒乞の子薛
扯別乞(別乞は族長の稱)薛徹別吉(台出)親征錄(元史本紀)大丑二人あり
き。禹兒乞(親征)月兒斤(親征)姓と彼等は爲れり。

巴兒壇の四子

巴兒壇巴阿禿兒の子忙格禿乞顔(乞顔は合不勒合罕の子孫蒙古
端察兒の子孫總體の姓にして我が經基王の子孫みな源氏と稱するが奇渥
如く乞顔はその宗家に限られ我が新田足利徳川の如し元史本紀の)奇渥
濫(は音正しか)蒙古奇渥黒顔(蒙古)源流孟格圖徹辰(捏坤)太石(太石は漢語
の名となれり明本音譯に太子と書けるは譯人の誤りなり蒙古には儲君なし
太子は儲君にしてタイツと呼び音義みな違ふ。後來元帝の諸子を
みな太子と稱するは皇子の義にして太石とは又別なり世系表)聶昆太
司(源流)訥袞泰實也速該巴阿禿兒(親征錄)元史烈祖神元皇帝也速

往く時、俺巴孩合罕は、別速惕の人、巴刺合赤なる使もて言ひて遣るに、合不勒合罕の七子の中なる忽圖刺に言へ、「又我が十子の内合答安太石に言へ、「こて言ひて遣るに、合木渾合罕（普き大君、すめ）國の主人となりて、女を自ら送れることを我により戒めよ。塔塔兒の民に拏へられたり、我五つの指を爪刷すまで、十の指を磨滅すまで、我が仇を報い試みよ」と云ひて遣りき。

也速該の妻紇

その頃也速該巴阿禿兒は、斡難河に鷹を使ひ行く時、篋兒乞惕（元史 篋里乞部）の也客赤列都（蒙古 伊克齊埒圖）斡勒忽訥兀惕（源流 鄂勒郭諾特）の民より女子を取りて送りて來ぬるに遇ひて、偵ひて見れば、顔色の殊なる（殊色）童女貴女なる

阿額侖兀眞の夫別

を見て、家に回り奔りて、捏坤太石なる兄答哩台斡惕赤斤なる弟を率ゐて來ぬ。到れば、赤列都懼れて、「速き淡黄色の馬ありき。―その淡黄色の馬の腿を打ちて、岡を越え躲れたれば、その後より三人にて續き合ひたり。赤列都は、山の鼻を繞り回りにて、車の處に來ぬれば、そこに訶額侖兀眞（元眞は漢語 夫宣懿皇后 月倫 源流 烏格楞哈屯）言はく、「彼の三人の人の人を覺れるか、爾顔顔悪くあり。爾の命を取らん氣色あり。爾の命にあらば、車前（車の室）ここに童女、黒車ここに貴女あらん。爾の命にあらば、童女貴女は得らるゝぞ。爾異なる名のを訶額侖と又名づくべきぞ。爾命を遁れ我が香を嗅ぎて行け」とて、短衣を脱ぎて與へた

るを、赤列都馬の上より探りて取りたれば、三人にて山の鼻を繞りて到りて來ぬれば、赤列都は速き淡黄色の馬の腿を打ちて、急ぎ走りて幹難河に沂り走れり。

三人にて後より追ひて、七つの岡を越ゆるまで走りて、回りて來て、訶額侖兀眞を(明譯補足裏將去)也速該巴阿秃兒韁を牽きて、捏坤太石なるその兄嚮導して、荅哩台幹惕赤斤なるその弟轅に傍ひて來る時、訶額侖兀眞言はく、我が兄語阿合も夫云ふも、赤列都は、風に逆ひ髪を拂はれたるここ無く、荒野の地に腹を飢ゑさせたるここ無かりき。今はいか様に、二つの辮髪を一たびは背の上に遣りて、一たびは懷の上に遣りて、一たびは前に向け、一たびは後に向け、いか様に爲して去れる。

訶額侖兀眞の泣音

ご云ひて、幹難河を波立たするまで、林河原を震動すまで、大聲に哭きて來つる時、荅哩台幹惕赤斤傍ひて行きて言はく、汝の抱ける人は、岬を多く越えたり。汝の哭かる人、水を多く渡れり。叫ぶごも顧みて見ざらん、汝を跡追ふごも、彼の路を得ざらん、汝黙してよ、ご云ひて諫めたり。訶額侖兀眞を也速該は、かくてその家に伴れ來ぬ。訶額侖兀眞を也速該の伴れ來ぬる緣由、かくあり。

俺巴孩合罕の合荅安忽圖刺二人を名ざして遣りたるに依り、普き忙豁勒泰赤兀惕は、幹難の豁兒豁納黑主不兒(豁納黑河原即ち)に聚ひて、忽圖刺を合罕(罕の君、大罕、お可汗)に小河の河原に聚ひて、忽圖刺を合罕(罕の君、大罕、お可汗)になせり。忙豁勒の樂しき踊り筵會樂しくありき。忽圖刺を君

忽圖刺即位の筵會

復讐の戦ひ

に戴くご、豁兒豁納黒の繁れる木の周圍に肋だけの溝、膝
合必兒合 合九魯合 額不都克

だけの窪くぼなるまで踊れり。

斡勤答克

忽圖刺合罕合なるご、合答安太石二人、塔塔兒の民の處

に出馬せり。塔塔兒の闊端巴喇合札里不花二人の處に十三

たび戦ひて、俺巴孩合罕斡復し怨み報いかねたり。

そこに也速該巴阿秃兒は、塔塔兒の帖木眞兀格親征帖木

眞幹怯豁哩不花親征忽魯不花が頭たる（一）を始（二）塔塔兒を

虜へて來つれば、そこに訶額侖兀眞孕みてありて、幹難の迭

里溫孛勒答黒（送里溫孤山）親征錄跌里溫盤陀山源流德里衮布勒塔克

地方捏兒臣思克に居りし露西亞の商人裕唎思奇その地を尋ね得て、鄂居

る時、正にそこに成吉思合罕史太祖法天啓運聖武皇帝號成

送里溫孤山に成
吉思合罕の生れ

也速該の四子一
女

吉思皇帝源流索多博克達青吉斯汗（生れ）生るゝ時、右の手に
髀石（蒙古の羣兒）擲ちて戯れとする玩具、獸失阿（の如き）血塊を握
りて生れき。塔塔兒の帖木眞兀格を率て來つる時、生れたり
さて、帖木眞（親征錄）同鐵木眞源流特穆津（の名）を與へたること、
かくあり。（この年は、我が二條天皇應保二年壬午、宋の高宗紹興）

也速該巴阿秃兒の訶額侖兀眞より、帖木眞合撒兒合赤溫

帖木格この四人の子生れたり。帖木侖（云ふ）一人の女生れ

たり。帖木眞九歳なる時、拙赤合撒兒（元史）本紀哈撒兒（綴耕）潘王（擲）

只哈撒兒（表）擲只哈兒王（撒の字）を脱せ、哈薩兒（七歳）なりき。

合赤溫額勒赤（綴耕）濟王哈赤溫（表）哈赤溫大王（源流）哈濟錦（は）

五歳なりき。帖木格幹惕赤斤（表）鐵木哥幹赤斤國王（源流）諤

楚肯（帖木眞九歳なりき。帖木侖（元史諸公主表）昌國大長公主。帖木侖（元史諸公主表））は三歳なりき。帖木侖（元史諸公主表）昌國大長公主。帖木侖（元史諸公主表）は、繙車（帖木眞九歳なる時は、我が高倉天皇嘉應二年庚寅、宋の孝宗乾道六年、金の大定十年、西紀一一七〇年なり）に在りき。

也速該と德薛禪の
出遇ひ

也速該（巴阿秃兒は、帖木眞の九歳なる時、訶額命額客（訶額命）の外家なる韓勒忽納兀惕の民の處にて、彼（帖木）の母方の舅だちより息女を求めんこて、帖木眞を率て往きたり。往く時、扯克徹兒赤忽兒古二山の閒にて、翁吉喇惕（親征錄）弘吉刺源流鴻吉喇特（德薛禪）史太祖紀送夷（元史）本傳特薛禪源流岱徹辰に遇へり。二山の地は、いまだ考へ得ず。只露西亞の地圖を見るに、呼倫諾爾の西南六十餘里、克魯倫河の北岸に齊克提喇克と云ふ處あり。二山の名と音）

德薛禪也速該の
問答

德薛禪言はく、也速該忽答（也速該なる親、家即ち縁者）誰の處を指してか來つる（こ云ひき）也速該巴阿秃兒言はく、この我が子の母

德薛禪の吉き夢

方の舅なる韓勒忽納兀惕の民の處にて、少女を求めんこて來つ（こ云ひき）德薛禪言はく、この汝が子は、目に火あり、面に光ある子なり。

也速該親家我（この夜）夢を夢みたり。我（白き海青）一種は、日月二つを拏へ、飛びて來て我が手の上に落ちたり。この夢を人に語らく、日月は、望みて見らるゝなりき。今この海青は、拏へて持ち來て我が手に落ちたり。白き鳥は、又（語）察罕保兀罷（察罕は白き、保兀は降り、罷はたりなり。白降りたりにては、意通ぜず。思ふに、保の上に矢の字を脱し、罷は巴の誤讀ならん。失保兀は鳥巴は又なり）何をもてかく善く見せたらん（白き以下を、明譯は、節略し）こ云ひて、ありき。也速該親家、この我が夢は、汝を、只その子を引きて來るを見たるなりき。夢を善く夢みたり。いかなる夢ならん。

汝等乞牙惕(乞顔の復稱。蒙古源流) 卻特(特)の民の吉兆を來て告げたるなりき。

美女を出す國

我等翁吉喇惕の民は昔の日より甥女の姿息女の顔色ある處にて他國部落を争はず、合衆 恩美しき女子らを汝等の大君合衆 となれる者に與へ、合衆 大車に載せて、合衆 黑駝を駕して、合衆 駟せしめて往きて、合衆 妃の位に一つに合衆 坐らせたり、我等部落人民を争はず、合衆 顔好き女子らを育て、合衆 車前ある車に載せて、合衆 青黑駝を駕して、合衆 送りに往きて、合衆 高き位に傍なる側に坐らせたり、我等昔より翁吉喇惕の民は、合衆 妃の團牌(明譯に従ふ。唐團扇の類。貴女の體を蔽ふ者) あり、女子らの奏事する甥女の姿息女の顔色に依る處なりき、我等。

息女を見せに德薛禪の導き

我等の男の子は營盤(譯明家道)を望む。我等の女の子は顔色を見らる也。速該親家。我が家に往かん。我が息女は小くあり。親家見よ。云ひて德薛禪は、その家に導きて、馬より下りたり。

許嫁の約

その女を見れば、面に光あり、目に火ある女子なるを見て、心に入らしめたり。(心に) 帖木眞より一年大きく、十なりき。李兒帖(元史后妃表) 李兒台(蒙古布爾德) 云ふ。夜宿りて、明朝その女を求むれば、德薛禪言はく、合衆 多遍求めさせて與ふれば、合衆 貴ばる。少遍求めさせて與ふれば、合衆 賤めらる。されども、合衆 女人の命(と) なる天に生れたるは、門の内に老ゆること無し。女をも與へん。その子を婿とし置きて往け。云へり。諾なひ合ひて、也速

該巴阿禿兒言はく「この子を壻むすことし置かん。我が子は狗を恐る。親家、我が子を狗に勿驚かせそ。」云ひて、その牽馬ひきうま副馬ふくまを結納なに與へて、帖木眞を壻むすことし置きて去りて、

也速該を塔塔兒の民の毒害

也速該巴阿禿兒は路に扯克扯兒（即ち前の扯克徹兒山）の失喇客額兒（黃なる）にて、塔塔兒の民の筵會し居るに遇ひて、渴きて彼等の筵會の處に下馬せり。彼等塔塔兒認めたりき。也速該乞顔來つ。云ふ。昔の虜へられたる恨を想ひて、陰に謀り害ひて、毒を和せて與へき。路に病み去りて、三宿行きて、家に到る。こ悪くなりて、

也速該の遺言

也速該巴阿禿兒言はく「我が胸悪くあり。傍に誰かある。」云ひて、晃豁壇の察喇合額不堅（察喇合翁親征錄元史）察刺海の子蒙力克

「御前に在り。」云へば、喚びて來させて言はく「我が童子蒙力克よ。子ごもは小さくあり。我が子帖木眞を壻むすことし置きて來ぬる路に、塔塔兒の民に陰に謀られたり。我が胸悪くあり。幼き遺れる者ごも孤（遺）弟（弟）ごも寡婦なる嫂を愛護する。ここを汝知れ。我が子帖木眞をば速かに往きて率て來よ。我が童子蒙力克よ。」云ふ。破りぬ。

成吉思汗實錄卷の一終り。

成吉思汗實錄卷の二。

帖木眞を蒙力克の迎へ歸り

也速該巴阿秃兒の言に違へず、蒙力克往きて、德薛禪に言へらく也速該兒は、帖木眞を甚く想ひて、心を痛めたり。帖木眞を取りに來つと云ひき。德薛禪言はく「親家その子を想ふならば往け。見えて速く來よ」と云ひて、蒙力克額赤格(蒙力克尊稱。元史忠義伯八の傳)明里也赤哥(明里也赤哥は、帖木眞を率て來ぬ)は、帖木眞を率て來ぬ。

祖の祭りに訶額命の後に到り

その春、俺巴孩合罕の合秃惕(妃の蒙語なる)、斡兒伯莎合台(斡兒伯莎合台二女)、只鄰(蒙語)、二つと云ふ(只鄰、二つと云ふ、豁牙兒の女性)は、祖の靈を地に祭り(明本)、地裏燒飯祭

祀しに出いでたる時とき訶額侖兀眞ハエレンウジン往ゆきて、後おそれ到いたりて漏もらされて、
 訶額侖兀眞ハエレンウジンは、韓兒伯莎合台ハンニハシカタイ二女ふたりに言いへらく也ス速す該がい巴阿禿ハハ
 兒こを死しにたりと云いひて、我わが子こどもを、大おほきくならざるに依よ
 り、御祖みおやの御前みまへの班列はんれつより、餘あまれる供物くわつより、胙ひらきより何なんぞ脱はれ
 させたる、汝等なんぢら見みるこ、食くふことを勸すすめず、起たつことになれ
 り、汝等なんぢらと云いひき。

俺巴孩の二妃の
怒り

その言ことばにつき、韓兒伯莎合台ハンニハシカタイ二女ふたりの妃言ききはく、喚よびて與あたへ
 られざる道みちあり、汝なんぢら遇あへば食くふべき理ことわりあり、汝なんぢら請こたじて與あたへら
 れざる道みちあり、汝なんぢら到いたれば食くふべき理ことわりあり、汝なんぢら喚よび請こたずるにも及およば
 俺巴孩あんぱがい合罕かかんを死しにたりと云いひて、訶額侖ハエレンに到いたりつゝ、かく云い
 はるゝことごなれり。

奉赤兀惕に訶額
侖母子の棄てら
れ

「考かんふるに、この母子おやこ等を營盤えいばんの裏うらに棄すてて起たて、汝等なんぢらも勿な
 率ひて行ゆきそ」と云いひ、明日あしたの日ひより泰赤兀惕たいしやくとつの塔兒たつ忽く台たい乞哩きり
 勒禿黑とくく親征しんせい塔兒たつ忽く台たい希憐禿しりんと。喇失惕額丁らしやくがくていの集史しゅうしを額兒がく忒曼ていの譯やくした、
 毒心どくしんと解と塔兒たつ不ふ台たい誤あやりなり。脱と朶と延えん吉兒帖きりてい親征しんせい錄ろく火兒眞かきじん、
 等らの泰赤兀惕たいしやくとつは、韓難河ハンナンカに沿したがひ動うごけり。訶額侖兀眞ハエレンウジン母子おやこ等を
 棄すてて起たたれ、晃豁壇ウワンタンの察喇合翁シャラクカウ往ゆきて止とどむる時とき、脱朶延吉ととえんき
 兒帖言こていごんはく「深ふかき水みづ乾かわきたり、光ひかる石いし碎くだけたり」と云いふと起たち
 けり。察喇合翁シャラクカウをいかに止とどむる、汝なんぢと云いひ後うしろより槍やりにて背そむ
 を刺さしけり。

察喇合翁の負傷

察喇合翁シャラクカウ負傷おひとなりて、家いへに來きて艱なみ臥ふせる時とき、帖木眞見ていもんじん
 に往ゆきけり。そこに晃豁壇ウワンタンの察喇合翁シャラクカウ言いはく、汝なんぢの好よき父ちちの

棄てて起てる民
を訶額命の取戻

收めたる部眾我等のあまたの部眾を率ゐて起たる、時止
めんとしてかく爲されたりと云ひき。その時帖木眞哭きて
出でて去れり。訶額命兀眞は棄てて起たれたる時、蒙語禿黑
北狄の君長の牙旗にして、旄牛又持ちて身づから馬に乗りて、半の
民を取戻せり。その取戻せる民も定まらず泰赤兀惕の後よ
り起ちけり。

艱難なる訶額命
の子育て

泰赤兀惕の兄弟に、訶額命兀眞を、寡婦を、子ども、幼兒ども、
母子等を、營盤の裏に棄てて起たれて、訶額命兀眞は、額篋篋
兒干(即ち)婦人の善射者に生れて、幼き子どもを養ふに、きりりご身
拵へして、塔刺周拵只塔刺拵不薛列周拵帯締めて幹難河を上り下り走りて、李黒杜梨山
櫻の實を拾ひて、晝夜喉を養へり。瞻ありて生れたる兀眞額

帖木眞兄弟の魚
取り

客(夫人)は、福ある子どもを養ふに、檜の木の楸を執りて、人
參赤赤吉納(明旁譯)を剋りて養へり。剛毅なる額客兀眞(母夫)
の野蒜辣合里牙兒孫菹にて養へる子どもは、帝王を望むに至れり。整齊
なる兀眞額客の山丹草の根にて養へる子どもは、法度ある
賢人ごなれり。
美しき兀眞の菹辣菹にて養へる合兀魯合(路又は溝の義ある)
す。子どもは、豁亦喇兀惕(これも譯す)好くなれり。男好くなり
了へて、雄雄しく猛く但爲られたり。(詞のまゝに譯したれ)母を
養はんご話し合ひて、母幹難(母の如き)の岸の上に居て、釣す
る鉤を調へ合ひて、偏眼不具の魚を釣りて、鉤に掛けて、針を
鉤に曲げて、折不格合荅喇(二つ共に)を鉤に掛けて、漁網を結

びて、魚の子魚を撈ひて、却てその母を報い養へり。

兄弟の不和を謂
頼翁の試め

一日、帖木眞合撒兒、別克帖兒（源流伯克特爾）、別勒古台（元別

里古台大王、即ち孛魯古歹蒙古源流、伯勒格德依の異母弟なり、四

人一處に居て、鉤を扯ける中に、一つの光る鎖豁孫（名魚の）入り

（取）けり。帖木眞合撒兒二人より、別克帖兒、別勒古台二人奪ひ

て取れり。帖木眞合撒兒二人家に來て、兀眞額客に言へらく

「二つの光る鎖豁孫、鉤を啣みたるを、別克帖兒、別勒古台、兄弟

二人に奪ひて取られたり、我等こ云へば、兀眞額客言はく、何

するぞや、兄弟ごも何ぞかく爲り合へる、汝等影より外に伴

なく、尾より外に鞭なし、我等、泰赤兀惕の兄弟の苦めをいか

で報いん、我等こ云ひて居るに、昔の阿闌額客の五人の子の

如く、いかに談合無くぞある、汝等止めよこ云へり。

別克帖兒を帖木
眞合撒兒の射殺

それより帖木眞合撒兒二人喜ばずして言はく、先頃一度

雲雀を射取りたるをもかく奪ひて取れりき、今又かくも奪

へり。一つにいかで過さん、我等こ云ふこ、門を開けて出でて

去れり。別克帖兒は、小山の上に、韋毛の驢馬九匹を眺めて居

たるに、帖木眞は後より隠れて、合撒兒は前より隠れて、箭を

抽きて到れる時、別克帖兒見ると言はく、泰赤兀惕の兄弟の

苦めを受けかね（堪へず）、怨を誰か報い得んこ云ひて居る

時、我を何ぞ目の毛、口の梗（こ）を爲せる、汝等影より外に伴なく、

尾より外に鞭なきに、何ぞかく思へる、汝等我が火盤を勿毀

り。別勒古台を勿廢てそ（別勒古台は、別克帖兒と火盤を共に死便

訶額命の殿しき
叱り

死しなん休やすら將をわが我われ別わか勒る古ぐ台たい棄す了るこ云いひ盤あん脚か居かて待まてり帖て木む眞じん
合か撒さ兒る二人ふたりは前まへより後しりより塚ちちまして(射中てて)去されり。

家いへに來きて入いりたれば兀う眞じん額え客けは二人ふたりの子こを顔かほ色いろにて覺さりて言いはく殺ころしたる(蒙)巴は喇ら黑くろ撒さ惕とこの詞ことばは了しへたる棄すてたる

詞ことばにして下したに名な詞ことば代しろ名な詞ことばありと見るなりこゝにては帖て木む眞じんなる名な詞ことば又または

汝なんなる代しろ名な詞ことばありと見て別わか克く帖て兒るを殺ころしたる帖て木む眞じんはと云いへる意いならん

我われが熱あつ處ところよりむくこ出いづる時とき手てに黑くろき血ち塊かたまりを握にぎりて生うまれ

たりき此こゝの(子)胞へい衣いを咬かむ合か撒さ兒る名な狗いぬの如ごとく崖がけを衝つく

合か下げ闌らん名な獸けものの如ごとく怒いかりを抑おさふる能あたはざる獅し子しの如ごとく活いきき

たるを吞のむと云いふ蟒まもの如ごとく己おのが影かげを衝つく海かい清せいの如ごとく聲こゑ無な

しにて吞のむ出い喇ら合か名な魚いさなの如ごとくその子こ駱らく駝たを後あと跟あしより咬かむ

駱らく駝た明めい風ふう雄ゆう駝た風ふう駝たの如ごとく風ふう雪せつに靠より頭とう口こうを害さふ(明)譯やく靠かう風ふう雪せつ

害わざ物ぶつ的てき狼おほの如ごとくその子こどもを追おひかねて(明)譯やく趕かん不ふ動どう兒こ子し

その子こどもを喫くふ鴛う鴦やうの如ごとくその臥ふし處ところを動うかせば黨たう護ごす

る豺さい狼ろうの如ごとく拏とらへて猶た豫よはざる虎この如ごとく妄みだりに衝つく巴は魯ろ思し

名な獸けものの如ごとく殺ころしたり影かげより外ほかに伴ともなく尾おより外ほかに鞭むちなき

に泰たい赤せき兀う惕との兄あ弟にいの苦くめを受うけかね居をるに怨うらみを誰たれか報むくい

んこ云いひて居をるにいかに過すさんこてかくは爲なし合あへる汝なんぢ

等らこてその子こどもを舊ふるき辭ことばを尋たね翁おきな等らの辭ことばを引ひき甚いたく憂うれ

へたり。

かく住すめる程ほどに泰たい赤せき兀う惕との塔た兒に忽く台たい乞き哩り勒と禿と黑くは、その

侍じ衛ゐを率ひりて(俗)雛ひなごも翎は伸のびけん(失魯格惕は、涎くりの)

生お立たちけん(この二句確かならず下の原撤下的帖木眞母子毎、如)

失お別べ哩り主しゅ兀と

成せい吉きち思し汗あせ實じつ錄ろく卷くわんの二

泰赤兀惕の襲ひ

今莫不似飛禽的雛兒般毛羽長了走獸的羔兒般大了（ト）云
 ひて來ぬ懼れて母子兄弟ども繁き林の中に寨作りて別勒
 古台は木を折り引寄せて垣に據りて合撒兒は箭を射合ひ
 て合赤溫帖木格帖木侖三人を崖縫の間に投れて鬪ひ居る
 時泰赤兀惕叫びて言はく兄帖木眞を出せ汝等外の者に用
 なし（ト）叫ばれて帖木眞を馬に載せて逃れん（ト）林の中に走
 りて去れるを泰赤兀惕見て逐ひて帖木眞は帖兒古捏溫都
 兒（帖兒古）の森の中に鑽りて入りたれば泰赤兀惕は入りか
 ねて森を圍み守りて

森の中の九宿り

帖木眞森の中に三たび宿りて出でん（ト）て馬を牽きて來
 る時馬よりその鞍脱れて落ちけり回りに見れば鞍は扳智

したるまゝにて肚帶したるまゝにて脱れて落ちけり肚帶
 は（ト）ごもあれ扳智あるに又いかで脱れたりけん皇天止め給
 へるか（ト）云ひて回りに又三たび宿れり又出でて來つるに
 森の口に帳房ほどの白石口を塞ぎ倒れたりき皇天止め給
 へるか（ト）云ひて回りに又三たび宿れり又九宿り食物なく
 居て名も無く何ぞ死なん出でん（ト）云ひて彼の口を塞ぎ倒
 れたる帳房ほどの白石の周圍に出づれば出でられず木ご
 もを箭削り小刀にて切斷ち馬を滑らして出でたれば泰赤
 兀惕守りて居りき拏へて率て去れり

塵はれを脱けて
水溜の仰ぎ臥し

帖木眞を塔兒忽台乞哩勒禿黑率て去りてその部落の民
 に命令して隣ごごに（ト）一たび宿し廻して行く時夏の首の月

(四)の第十六の紅く照る日に、泰赤兀惕は斡難の岸の上に筵會し合ひて、日落つれば散りたり。帖木眞をその筵會に弱き子人率ゐてありき。筵會の眾を散らしめ、帖木眞はその弱き子より手枷を扯きて取りて、その項を一つ打つこ、走りて斡難の林の内に臥したれども、見られんご云ひて、水の溜に仰ぎ臥して、手枷を水に順ひ流し、面出して臥したり。

斡難の林の人探し

彼の脱したる人、大聲に拏はれ人脱げたりご叫びたるに、散りたる泰赤兀惕、聚ひて來て、晝の如き月明に斡難の林を探したり。水溜に臥して居るを、速勒都思(源流蒙古)、蘇勒德斯(元史月傳)、遜都氏(源流蒙古)の鎖兒罕失喇(親征)、梭嚕罕失刺(源流蒙古)、托爾干沙喇(源流蒙古)、正に過ぎて見て言はく、正に只かく才あるが故に、その目に火

你故合勒

二たび人探し

あり、その面に光ありきて、泰赤兀惕の兄弟に然のみ嫉まるるなりき。汝然(你兀兒格喇)只臥してよ。告げざらん、我ご云ひて過れり。又回り探さんご云ひ合へる時、鎖兒罕失喇言はく、本の路にて見ざりし地を見るご、回り探さんご云へり。然りご云ひ合へり。本の路に依り回り探して、又鎖兒罕失喇過ぎて言はく、汝の兄弟(人)は、口の牙を磨ぎ來ぬ。しか臥し慎めよご云ひて過れり。

三たび人探し

又回り探さんご云ひ合へる時、鎖兒罕失喇又言はく、泰赤兀惕の御子だち、汝等、明るき白き晝に全人脱げたり。今黒き夜に何ぞ得ん。我等又本の路にて見ざりし地を見るご、回り探すご、散りて、明日の晝聚ひて尋ねん。いづくにか往かん、彼

の手枷ある人ひと云へり。然りしか云ひ合ひて、回り探して、鎖兒
罕失喇かんしつら又過ぎて言はく、かく探すたづこ回りて明日尋ねんあす云
ひ合へり。今我等を散らしめ了へて、母弟ははどもを尋ね去れ。我
を見たりみ人に見られば見られたりみ勿語りなそ云ひて
過れり。

鎖兒罕失喇の家
を帖木眞の塚に
住き

彼等を散らしめ了へて、帖木眞てつぼくじん心に考へて、先頃隣に廻し
て宿したる時、鎖兒罕失喇かんしつらの家に宿りたれば、沈白ちんぱく(親征 闖拜)
赤老温せくらん(親征 蒙古源流)齊拉袞せいらん云へる彼が二人の子は、胸の心
を痛めて、夜我を見て、我が手枷を取りて放して宿らしめた
り。今又鎖兒罕失喇かんしつら我を見て告げず過りたり。今只彼等は我
を救はんぞ云ひて、鎖兒罕失喇かんしつらの家を尋ね、斡難河おくだんがに沿ひ
去れり。

鎖兒罕失喇の家
に帖木眞の塚ま
はれ

家の記號しるし(目印には非)は、生馬乳せいばにゅう(馬のな)を注ぐそ(大甕にて)その
熟馬乳じゆくばにゅう(馬乳)を夜日出づるまで搔廻すかきまはこなりき。その記號
を聴きて行きたれば、搔廻す聲を聴きて到りて、その家に入
りたれば、鎖兒罕失喇かんしつら母弟ははどもを尋ね去れ云はざりしか、
我何ぞ來ぬる、汝なんぢ云へり。沈白ちんぱく赤老温せくらんなるその二人の子言
はく、雀すずめを土咻台とすいだい(明龍多兒 一種)叢くさむらに逐ひ入るれば、叢は救ひ
き。今我等の處ところに來つるを何ぞ然云へる、爾なれこて父の言を喜
ばず、その手枷てがしを脱して火に焼きて、後の羊毛ひつじのけある車くるまに載せ
て、合荅安かたあん云へる妹いもに生きたる人ひとには勿語りなそ云ひて
傳かたかしめたり。

第三の日に、泰赤兀惕は二人匿したるぞ云ひ合ひて、已等が間を捜し合はん云ひ合ひて捜し合へり。鎖兒罕失喇の家、車床の下に至るまで捜して、後の羊毛ある車に上りて、口にある羊毛を拖出して、奥に至る時、この鎖兒罕失喇又かかる熱さに羊毛の内に何ぞ耐へん云へば、捜す者ども下りて去れり。

帖木眞の救はれ
歸り

捜手ども去りたる後に、鎖兒罕失喇言はく我等を灰の如く搔立て危かりき。今母弟どもを尋ね去れ云ひて、口白き駒生まぬ甘草黄の牝馬(語蒙忽刺黑臣、青黄色にて)に乗らしめて、肥えたる羔(語蒙帖勒忽哩罕、明の二母乳的羔兒)を煮て、皮桶大皮桶を調へて、鞍を與へず、火鎌を與へず、弓を與へて、二條

の箭を與へたり。かく調へて遣りぬ。

乞木兒合小河の
母子の再會

帖木眞かく去るご、垣して楯籠りたる地に到りて、草の踏分跡に依り、幹難河に沂り跡つけて、西より乞木兒合豁囉罕入りて來るありき。(乞木兒合小河、水道提綱の呼馬拉堪河、内府輿圖の流入れて濟爾夏朗河となり、齊母爾略河にして克魯倫河源の東南より出で東北に流れて鄂嫩河に入る。)かく沂り跡つけて、母ご弟ごも、乞木兒合小河の別迭兒豁失溫(別迭兒の鼻)の豁兒出恢孛勒荅黑(豁兒出)に居るに遇ひ合へり。

桑古兒小河の邊
の青湖の移住

そこに會し合ひて、去りて不兒罕嶽の前(南面)なる古咧勒古(山の名。曲鄰居山、今の巴)の内なる桑古兒豁囉罕(桑古兒小河、水道親征錄)の邊の合喇只嚕堅(小山)の闊闊納兀兒(青き)に營盤(内府輿圖)して居る時、土撥鼠(語蒙塔兒巴)合惕(塔兒巴罕の複稱、唐書の鼯鼠本)

塔刺不歡本草の苔刺不花みな塔兒巴罕の轉なり。穴居の小獸にして形は獺の如し。肉は食ふべく皮は裘とすべし。黑龍江外紀に獺爾とあるも是なるべし。元史語解に「塔爾巴噶爾」の野鼠を殺して食ひ居りき。

驕馬の盗人を帖木眞の跡つけ

一日葦毛の驕馬八匹家の前に立ちて居るを盗人來て見つゝ盗みて去れり。徒の者ども見て後れたり。別勒古台は尾脫の栗毛の馬（蒙語驕馬の）に乗りて土撥鼠を捕へに往きてありき。夕に日の落ちたる後別勒古台は尾脫の栗毛馬に土撥鼠を荷つけて身を搖がしつゝ歩み牽きて來ぬ。葦毛の驕馬どもを盗人取りて去れり。云へば別勒古台言はく「我追はん」と云へり。合撒兒言はく「汝能はず我追はん」と云へり。帖木眞言はく「汝等能はず我追はん」と云ひて尾脫の栗毛馬に帖木眞乗りて葦毛の驕馬どもを草の踏分に依り跡つ

李幹兒出の授け

けて三たび宿りて朝早く路にて多き馬羣の中に一人の爽快なる子人馬の乳を擠り居るに遇ひて葦毛の驕馬どもを問ひたればその子言はく「この朝日出づる前に葦毛の驕馬八匹こゝを走りて去れり。彼等の路を我告げて與へん」と云ひて尾脫の栗毛馬を放たしめて帖木眞を脊黒の青馬に乗らしめたり。己は快き淡黄色の馬に乘れり。家にも往かず。大皮桶皮斗に野にて蓋して（明著草蓋了）置けり。伴よ。汝こそは甚く艱みて來にけれ。丈夫の艱みは一つなるぞ。我汝に伴こならん。我が父は納忽伯顔と呼ばる。（納忽長者元史博爾朮の傳の姓阿嚕刺）我はその獨子。我は李幹兒出（親征錄元史博爾朮源流博郭爾濟）と云ふなり。と云ひて葦毛の驕馬どもの路に依り跡つ

けて三たび宿りて夕に日岡を拍ち居る時、一團蒙古古哩延、本
 羣明譯園子の民の處に到れり。韋毛の驢馬八匹、その大團の邊
 に草食みつゝ立ちて居るを見たり。帖木眞言はく「伴よ、汝こ
 こに立て。我、韋毛の驢馬ごもは彼等なり、追ひて出でん」と云
 へり。李幹兒出言はく「伴よ、ならんごとて來ながら、我こゝに何
 ぞ立たん」と云ひて、同じく驅けて入り、韋毛の驢馬ごもを追
 ひて出でたり。(閣復の撰れる廣平王玉昔帖木兒の碑文に)

帖木眞の逆へ戦
ひ

後より人ごもぞろぞろと語、兀不兒速不兒(明譯)追ひて來
 ぬ。一人の白馬の人套馬竿を執りて、獨にて追附きて來ぬ。李
 幹兒出言はく「伴よ、弓箭を我におこせよ。我射合はん」と云へ
 り。帖木眞言はく「我の故に汝害せられん。我射合はん」と云ひ
 たり。
 て、逆へ回り射合ひたり。彼の白馬の人套馬竿にて指して立
 たり。後方の伴等追附きて來ぬ。日落ちて去れり。(日去れ)黃昏
 となりて來ぬ。後方なる彼の眾は、暗くなられて立ちて残り
 たり。

李幹兒出の廉潔

その夜行き通し、三日三夜行き通して到りぬ。帖木眞言は
 く「伴よ、我、汝の助に依るより外に、この馬ごもを得べきあら
 んや、分け合はん。幾つを取らん」と云ふか、「と云へり。李幹兒出
 言はく「我好き伴を汝を、艱みて來ぬ」と云ひて、好き伴に助こ
 ならんごとて、伴となりて來ぬ。我、外財と云ひて取らんや。我
 が父は、納忽伯顔と云ふ者なり。納忽伯顔の獨子にて我あり。
 我が父の貯蓄は、我に任せあり。我は取らず。私の助となりた

り（年な）送り來つる德薛禪は、路にて客魯噠の兀喇黑噶勒の隅より回れり。その妻孛兒帖兀眞の母は、搠壇（搠壇は、女を送りて、古喇勒古の内なる桑古兒小河に帖木眞等居る處に致して來ぬ。）

李幹兒出の來屬

搠壇を回らしむる（帖木眞は、別勒古台を李幹兒出を伴（原文には到らしむるとあり。すべて蒙古語には、日本語にて受動に云ふべき所を令動に云へること多し。日本語として穩かならざる處は、受動に改）その父に語らず、拱脊の栗毛の馬に乗り、青き毛衣を馬に駄けて、別勒古台と同じく來ぬ。かく伴（この後長く）事ふる緣故、かくあり。

不見吉岸の移住

桑古兒小河より起ちて、客魯噠河の源なる不見吉額兒吉

客喇亦揚の王罕に帖木眞兄弟のまみえ

（不見吉が不魯吉崖に營盤せん（馬より）て、搠壇額客の引出物（蒙失惕忽勒譯上見公姑的禮物）として黒き貂鼠の裘を持ち來てありき。その裘を帖木眞合撒兒別勒古台三人持ちて往きて、前（也速該罕額赤格）の日也速該罕額赤格（也速該罕なる父也）とならざりき。（こゝに罕と）客喇亦揚の民（親征克烈部、元史には、克云へるは、追王の義ならん）客喇亦揚の民（親征克烈部、元史には、克怯烈怯列亦怯里）王罕（親征汪可汗、元史汪罕、哈刺哈孫の傳、伯汪可汗、本紀汪罕、八の傳、王可汗）は、安達（安達は、親交なり。元史太祖紀、安答の注に、交物之）我（安達は、親交なり。元史太祖紀、安答の注に、交物之）が父に安達（安達は、親交なり。元史太祖紀、安答の注に、交物之）云ひ合ひたりき。（安達は、親交なり。元史太祖紀、安答の注に、交物之）我（安達は、親交なり。元史太祖紀、安答の注に、交物之）が父に安達（安達は、親交なり。元史太祖紀、安答の注に、交物之）云ひ合ひたるは、父の如くあるぞ（土兀刺は、河の名なり。親征錄、元史も同じ。唐書鐵勒の傳に、獨樂河、回鶻の傳に、獨邏水、元史、巴而朮阿而忒的斤の傳に、兪忽刺水、張德輝の紀行に、獨渾刺河とあり。今の土拉河、また圖拉河なり。合喇屯は、黒林にて、今の昭莫多、即ち東庫倫の地、または）王罕の處に帖木眞到り、今の庫倫の南なる汗山、即ち汗阿林的地なり。

王罕の喜び

て言はく「前の日我が父に安達と云ひ合ひたりき、爾父にも
 等しくあるぞ」と云ひて、妻を下ろして被せ奉る、舅姑への禮
 物^{ぶつ}を爾^{なむち}に持ち來ぬとて、貂鼠^{せうそ}の裘^{かほころも}を與^{あた}へたり。王罕^{わんかん}甚く喜^{よろこ}び
 て言はく「黒き貂鼠^{くろせうそ}の裘^{かほころも}の返禮^{へんれい}に、離^{はな}れたる汝^{なんぢ}の部眾^{ぶしゆう}を集^{あつ}め
 合^{あひ}喇^らとて與^{あた}へん。貂鼠^{せうそ}の裘^{かほころも}の返禮^{へんれい}に、散^ちりたる汝^{なんぢ}の部眾^{ぶしゆう}を纏^{まと}め合^{あひ}ひ
 合^{あひ}喇^らとて與^{あた}へん。腰^{こし}の尖^{さき}に腔子^{かうし}の胸^{むね}に存^あれ^して忘^{わす}れじ」と云へり。
李可剛 李克薛 扯客喇 扯額只 不合喇 不合察 不合飛 不合協 不合合

者勒篋の來屬

そこより回^{かへ}りて不兒^{ぶに}吉岸^{きがん}に居^をる時^{とき}不兒^{ぶに}罕^{かん}嶽^{たけ}より兀^う嘍^{りやん}罕^{かん}
 の人^{ひと}札兒^{ちやに}赤兀^{ちやくわう}歹額^{だいえく}不堅^{ぶけん}（札兒^{ちやに}赤兀^{ちやくわう}歹額^{だいえく}不堅^{ぶけん}は、鍛冶^{かねぢ}の風^{ふう}匠^{じやう}を
 負^おひて、者^げ勒篋^{れきやう}（元^{げん}史^し親^{しん}征^{てい}錄^{ろく}折^{ちや}里^り麥^め源^{げん}流^{りゆう}濟^{せい}拉^ら瑪^ま）と云へる子^こを引^ひき
 て來^きて、札兒^{ちやに}赤兀^{ちやくわう}歹額^{だいえく}言^いはく「鞞^か難^{なん}の迭^で里^り溫^{うん}孤^こ山^{さん}に居^をる時^{とき}帖^て木^ぼ
 眞^{ちん}生^{うま}れたる時^{とき}貂鼠^{せうそ}の襁褓^{せうき}（蒙^{もう}語^ご捏^ね兒^に克^く明^{めい}譯^{やく}裏^り）を與^{あた}へたりき、我^{われ}。

訶額命母を密阿
黒臣嫗の喚び起

馬上の男女九人

この子^こ者^げ勒篋^{れきやう}をも與^{あた}へたりき、我^{われ}小^{せう}しとて伴^{たづな}れて去^されりけ
 り。今^{いま}者^げ勒篋^{れきやう}に鞍^{くら}を置^おかせ、門^{かど}を開^あけさせよ」と云ひて與^{あた}へた
 り。
 客^{きやく}魯^ろ噠^た河^がの源^{みなもと}に不^ぶ兒^に吉岸^{きがん}に下^{くだ}りて居^をる時^{とき}一^{ひと}朝^{あさ}早^{はや}く、白^{しろ}み
 黄^きばみ明^あけんとする時^{とき}訶額命^{かえくめい}客^{きやく}の家^{いへ}の内^{うち}に働^{はたら}ける豁^こ阿^あ
 黒^{くろ}臣^{ちん}額^{えく}篋^め堅^{けん}（臣^{しん}嫗^{えん}黒^{くろ}）起^おきて言^いはく「母^{はは}、母^{はは}、疾^とく起^おきよ。地^ち搖^ゆげり。
 震^と聲^{こゑ}聞^きえたり。嘗^{かつ}て脅^{おび}したる泰^{たい}赤^{ちやく}兀^{わう}惕^と來^きつるならん。母^{はは}、疾^とく
 起^おきよ」と云へり。

訶額命^{かえくめい}客^{きやく}言^いはく「子^こどもを疾^とく喚^よび覺^させ」と云ひて、訶額
 命^{かえくめい}客^{きやく}も疾^とく起^おきたり。帖^て木^ぼ眞^{ちん}等^らの子^こどもも疾^とく起^おきて、馬^{うま}
 どもを執^とりて、帖^て木^ぼ眞^{ちん}一^{ひと}つの馬^{うま}に乗^のれり。訶額命^{かえくめい}客^{きやく}一^{ひと}つの

馬うまに乗のり。合か撒さ兒に一ひつの馬うまに乗のり。合か赤ち溫えん一ひつの馬うまに乗のり。帖て木む格げ斡お惕て赤ち斤げん一ひつの馬うまに乗のり。別べ勒る古ぐ台たい一ひつの馬うまに乗のり。孛は斡お兒に出い一ひつの馬うまに乗のり。者げ勒る篋め一ひつの馬うまに乗のり。帖て木む命めんをば、訶は額え命めん額え客け懷たいに駄つけたり。「帖て木む眞げんのみは、」
(原文に脱ちたるを)一ひつの馬うまを牽ひ馬うまに備そなへたり。孛は斡お兒に帖て兀う眞げんに
は、馬うま闕かけたり。

車くるまに乗のれる孛は斡お兒に
帖て木む阿あ黑くわ臣しん

帖て木む眞げん兄あに弟あにも馬うまに乗のりて、夙すに即すち不ぶ兒に罕かんに上のれり。豁こ阿あ黑くわ臣しんは、孛は斡お兒に帖て兀う眞げんを匿かくさんご、一ひつの黒くろき輿こしある車くるまに乗のらしめて、腰こし花はな牛ぎゆう (腰こしに花はな紋もん)に引ひかせて、騰てん格げ里り豁こ囉ら罕かんに (騰てん格げ里り豁こ囉ら罕かんに)里り小せう河か卷けん一ひつの統とう格げ黎り (統とう格げ黎りと異いなり)。沂いり動うごきて來きつる時とき曙あけぼのの灰ほかに明あくる時とき向むかひより軍いくさの眾しゆう馬ばを走はしらして旋めぐりて到いたりて來きて、何なに人びとぞ汝なんぢと問とへ

り。豁こ阿あ黑くわ臣しん言いはく我われは、帖て木む眞げんのなり。大だい家かの内うちに羊ひつじの毛けを剪きりて來きつ。己おのが家いへに回かへりて來きるなりと云いへり。それより
(彼かれ等ら言いはく)帖て木む眞げんは家いへにありや。家いへは、いかに遠とほきと云いへり。
豁こ阿あ黑くわ臣しん言いはく家いへは、近ちかくあり。帖て木む眞げんには、有あり無なしには、
心こゝろ附つかざりき。家いへの後うしろより起おくると來きつ。我われと云いへり。

孛は斡お兒に帖て木む阿あ黑くわ臣しん等ら三さん女によの
慶うらはれ

彼かの軍いくさ人びとも、かくて驅かけ去されり。豁こ阿あ黑くわ臣しん言いは、その腰こし花はな牛ぎゆうを鞭むち打うつと、疾とく行ゆかんとして、車くるまの軸たてを折をり去されり。軸たてを折をられて、徒ちにて林はやしに走はしりて入いらん。と云いひ合あへる時とき續つきて
彼かの軍いくさ人びとも、別べ勒る古ぐ台たいの母ははを疊たか騎せせしめ (尻しつ馬ばに)て、その二ふた
つの足あしを垂たれさせて、驅かけて到いたりて來きぬ。この車くるまの内うちに何なにを
載のせてあるかと云いへり。豁こ阿あ黑くわ臣しん言いはく毛けを載のせてあり

ご云へり。彼の軍人の兄ども言はく「弟ども子ども下りて（馬りり）見よ」ご云へり。彼等の弟ども子ども下りて、戸ある車の戸を取れば、内に妃らしき人居て、その人を車より拖きて降して、豁阿黒臣ご二女に疊騎せしめて率あるご帖木眞の後より草の踏分に依り跡附けて不兒罕に上れり。

不兒罕獄の三繞り

帖木眞の後より不兒罕嶽を三たび繞りて獲かねたり。這廂那廂に急ぎ廻れば、陥る泥通れぬ林あり、飽ける地（草木の繁に鑽り入れれば、入られずして險しく密く、その後より隨ひて獲かねたりき。彼等は三つの篋兒乞惕なりき。兀都亦惕篋兒乞惕。親征録。兀都夷篋里乞）の脱黒脱阿（親征録。脱脱）兀注思篋兒乞惕の歹兒兀孫、合阿惕篋兒乞惕の合阿台荅兒麻刺。この三

三つの篋兒乞惕のし返し

つの篋兒乞惕は、前の訶額命額客を赤列都（卷一の也）より奪ひて取られき。今その怨を霽しに來つるなりき。彼の篋兒乞惕言ひ合へらく「訶額命の讎を報いんご、今彼の婦人ごもを取り。讎を報いたり、我等ご云ひ合ひて、不兒罕嶽より降りて己が家家に回りましたり。

不兒罕獄に救はれたる帖木眞の感謝

帖木眞は、彼の三つの篋兒乞惕實に己が家家に回れりや。伏したりやご、別勒古台孛斡兒出者勒篋三人を、篋兒乞惕の後より偵ひ、三たび宿り隨はせて、篋兒乞惕に離れさせて、帖木眞は、不兒罕の上より下りて、その胸を椎ちて言はく「豁阿黒臣額客が、（姫の大功ありし故に）鼪（鎖耶合）となりて聽きたる故に、銀鼠（九年）となりて見たる故に、本の身を（不吉牙）躲れんご、絆せる（足繫ぎて）

馬にて鹿の徑を徑りて、不兒合孫楡の條の家を家作らんこ、不兒罕の上合赤喇に上りき、我、不兒罕の御嶽合赤喇に、李額速如き命を匿されたり、我、獨の命を惜まんこ、合赤喇一つの馬にて、罕荅孫合赤喇(名獸)の徑を徑りて、柳の枝の家を家作らんこ、御嶽の上合赤喇に上りき、我、御嶽不兒罕に、合赤喇蟻の如き命を救はれたるぞ、我、甚く恐れさせられたり、我不兒罕の御嶽を朝合赤喇ごに祭れ、日合赤喇ごに禱れ、我が子孫の子孫合赤喇覺え居れ合赤喇こて、日を迎へて、帶を項に掛けて、帽を合赤喇手に持ち添へて、手合赤喇(手右)に胸を椎ちて、日に向ひ合赤喇九たび跪きて、灌奠合赤喇(譯明將馬妳子灑奠)祈禱を捧げたり。

成吉思汗實錄卷の二終り。

成吉思汗實錄卷の三。

王罕の救を求め
に帖木眞等の合
喇屯往き

かく陳べて帖木眞合撒兒別勒古台三人は、客喇亦惕の脱幹哩勒親征、脱憐元史太祖紀、脱里哈孫の傳、脱幹璣王罕の處に、土兀刺木噶刺土兀の合喇屯林に居る處に往きて言はく、三つの篋兒乞惕に、意はず居る處合赤喇に來て、妻子を虜へて取られたり、我が罕額赤格合赤喇(罕父)妻子を救ひて與へよこて來ぬ、我等合赤喇こ云へり。その言の返辭合赤喇に、脱幹哩勒王罕言はく、我去年汝に云はざりしか。貂鼠の裘を我に持ち來つるに、父の時に安荅合赤喇こ云ひ合ひたるは、

王罕の返辭

父の如くあるぞとて被せられたれば、そこに我言はく「貂鼠の裘の返禮に、散りたる汝の部眾を纏め合ひて與へん」不塔喇「貂鼠の裘の返禮に、離れたる汝の部眾を集め合ひて與へん」合禮兀とて、腔子の胸合禮兀に存れ、腰の尖合禮兀に存れと云はざりしか、我今彼の言に従はんぞ、貂鼠の裘の返禮に、都ての篋兒乞惕を滅すまで、汝の孛兒帖兀眞を救ひて與へん、我黒き貂鼠の裘の返禮に、普き篋兒乞惕を打破りて、汝の妃孛兒帖を回らせて伴れ來なん、我等汝は、札木合迭兀合禮兀勒に札木合なる弟、年少傳言して遣れ。札木合弟は、豁兒豁納黒主不兒豁兒豁納黒河に居るぞ。我は、此處より二萬人にて右の手となり出馬せん。札木合弟は、二萬人となりて左の手となり出馬せよ。我等の約會會合の場（所時日）

は、札木合より爲よと云へり。

札木合の救を求むる帖木眞の使

帖木眞合撒兒別勒古台三人は、脱斡哩勒罕より回りて家に到りて、帖木眞は、札木合の處に、合撒兒別勒古台二人を遣り、札木合安答に言へ（帖木眞と札木合と幼き時安答と）とて、言ひて遣るには、三つの篋兒乞惕に來て座を空豁兒豁納に爲されたり、我（妃を奪はれたり、この豁は、音ホにて幹に通ず）扣子（二物を結び合）一つのもの（離れざ）ならずや、我等離（離れざ）をいかにか復さん（離れざ）懷（離れざ）を半（離れざ）にせられたり、我（この含は、音ハンにて下）肝（肺腑）の親族（肺腑）ならずや、我等怨（怨）をいかにか報（報）いん、我等と云ひて遣りぬ。札木合安答に言ひて遣りたる言、かくの如し。又客喇亦惕の脱斡哩勒罕の言へる言を札木合に言ひて遣るには、前の日、我が也速該罕額赤格（也速該罕）に

札不合の返辭

助を好く爲されたるを想ひて、伴ならん我二萬人となりて右の手となり出馬せん。札木合弟に傳言して遣れ。札木合弟は二萬人にて出馬せよ。相合ふ約會は、札木合弟より爲よご云へり。この言ごもを盡させ畢へて、札木合言はく帖木眞安荅を、座空になれり。告知りて、我が心痛めり。懷半になれり。告知りて、我が肝痛めり。讎を復しに、兀都亦惕兀洼思篋兒乞惕を滅して、夫人孛兒帖を救はん。怨を報いに、普き合阿惕篋兒乞惕を打破りて、妃孛兒帖を回らせ救はん。今彼の鞍轡を拍つ時鼓の音ごなして遽て驚く。脱黑脱阿は、不兀喇客額兒に居るぞ。不兀喇原駝原親征錄不刺川倫の南に布拉河あり。西に流れて色楞格河に入る。露西亞の地圖には、ブレン河とあり。不兀喇原はこの布拉河の邊の原野なるべし。蓋ある箭筒を搯閃す時

反り走る歹兒兀孫は、今幹兒桓薛涼格二河の閒なる塔勒渾阿喇勒に居るぞ。幹兒桓河は今の鄂爾坤河にして、唐書回鶻の傳に昆河、涼格河は今の色楞格河にして、唐書回鶻の傳に仙娥河、元史巴而朮阿而忒的斤の傳に薛靈哥水、耶律鐸の雙溪醉隱集に錫蘭河、契氏家傳に幹爾汗河などあり。薛習靈靄河などあり。塔勒渾阿喇勒即ち勇婦の島は、兩河合流の處にある出島なり。蓬に風戦ぐ時、黒き林を争ふ。合阿台荅兒馬刺は、今合刺只客額兒に居るぞ。合刺只客額兒、高寶銓の說に、今の哈拉河の今我等は直に乞勒豁木噠乞勒豁河、水道提を横ぎるに、猪鬃草は何處にも有れ。篋組みて入らん。彼の遽て驚く。脱黑脱阿の天窓の上より入りて、彼の緊要なる帳房骨を倒すべく衝きて、彼の妻子を盡くるまで虜へん。彼の福神の帳房骨大黒柱と云を折るべく衝きて、彼の都ての部眾を空しくなるまで虜へん。

札木合又言はく「帖木眞安答、脱斡勒罕阿答（脱斡勒罕なる兄）一人に言へ「合喇阿秃言はく我には、遠く見ゆる麤を祭れり、我、黒き強牛の皮にて張りたる、不哩克先麤襲たる音ある鼓を打てり、我、黒き快馬に乘れり、我、硬き衣裳を被たり、我、鋼の鎗を執れり、我、挑皮ある箭を扣けたり、我、合阿惕篋兒乞惕の處に戰ひに出馬合惕忽せん、便ち言へ、長き遠く見ゆる麤を祭れり、我、牛の皮にて張りたる、濁れる聲ある鼓を打てり、我、脊黒の快馬に乘れり、我、革被せたる鎧を被たり、我、柄ある環刀を執れり、我、扣子ある箭を扣けたり、我、兀都亦惕、兀洼思、篋兒乞惕の處に死に合はん（死戦）、便ち言へ、脱斡勒罕兒出馬するには、不兒罕嶽の前より帖木眞安答を過ぎて來て、斡難河の源に孛脱罕孛

斡兒只に約會せん。此處より出馬するには、斡難河に浜り、安答の部眾此處に在り。安答の部眾より一萬人、我、此處より一萬人、二萬人となりて、斡難河を浜り、往きて、孛脱罕孛兒只に約會の地に會し合はん、言ひて遣りぬ。
札木合の此の言を、合撒兒別勒古台二人來て、帖木眞に言ひて、脱斡勒罕に傳言を致せり。脱斡勒罕は、札木合の此の言を致さるゝと、二萬人にて出馬せり。脱斡勒罕出馬するに、不兒罕嶽の前なる客魯噠の不兒罕吉岸を指して來ぬ。帖木眞は、不兒罕吉岸に居たるに、路（脱斡勒罕の路）の處にあり。移りて、統格黎克（卷一の統格黎克小河と名同じけれども、彼は斡らず、却て卷二の騰格里）に、（難の源に在り、是は客魯噠の源に在りて同じか）小河に同じきに似たり。浜り起ちて、塔納豁兒歡（塔納小河、内府輿圖

の^{上流}に流^れ入る小河^ににて不^兒罕^嶽の前^にに下^馬して帖^木眞^は、そこより軍^を起^{して}脱^幹哩^勒罕^は一^萬人[、]脱^幹哩^勒罕^の弟^札合^敢不[（]親^征錄[）]札^阿紺^李）は一^萬人[、]二^萬人^にて乞^木兒^合豁^兒歡^の（^元史[）]は豁^囉罕^に同^じ）阿^亦勒^合喇^合納^に下^馬して居^るに會^ひ下^馬せり。

王罕の後れたる
を札木合の替め

帖^木眞^脱幹^哩勒^罕札^合敢^不三^人一^つになりて、そこより動^{きて}幹^難の源^{なる}李^脱罕^李幹^兒只^に到^りぬれば、札^木合^は約^會の地^に三日^前に到^りてけり。札^木合^は、この帖^木眞^脱幹^哩勒^札合^敢不^等の軍^{ごも}を見^るこ、札^木合^は、二^萬の軍^を整^へて立^ちけり。この又^帖木^眞脱^幹哩^勒罕^札合^敢不^等も、その軍^{ごも}を整^へて到^り合^ひて、さて認^め合^ひて、札^木合^言は

く「風^雪になるこも約^束には、雨^{になる}こも聚^會には勿^後れそ、語^り合^はざりしか、我^等忙^豁勒^{には}者[（]諾^{する}聲^{にて}、我^等の）[）]は誓^{した}るに異^{なら}んや、者^{より}後^{れた}る者^は、班^列より出^{さん}こ語^り合^ひきこ云^へり。札^木合^の言^{につ}き、脱^幹哩^勒罕^言はく「約^會の地^に三日^後れて立^てりこ、罰^ふこご咎^むるこを札^木合^弟知^れ」こ云^へり。約^會の咎^めは、かく言^ひ合^ひて、

三將の斃兒乞揚
打破り

李^脱罕^李幹^兒只^{より}動^{きて}、乞^勒豁^河に到^りて筏^組みて渡^るこ、不^兀喇^原に、脱^黑脱^阿別^乞（^別乞^は、^族）の天^窓の上^{より}緊^要なる帳^房骨^を倒^すべく衝^き入りて、彼^の妻^子を盡^くるまで虜^へたり。彼^の福^神の帳^房骨^を折^るべく衝^{きて}、彼^の都^忽亮^忽亮^忽亮^忽亮

ての部眾を絶ゆるまで虜へたり。脱黑脱阿別乞に、睡りて居る程に到るべきを、乞勒豁河に居る魚取貂鼠取野獸取散りたる者ども、敵來ぬとて夜通し走り報告を致し去りき。その報告を致さるゝと、脱黑脱阿兀注思篋兒乞惕の歹兒兀孫二人合ひて、薛涼格河に沿ひ巴兒忽眞(今の巴爾古、精河の邊)に入り、僅にその身を走り遁れけり。

帖木眞李兒帖の再會

篋兒乞惕の部眾薛涼格河に沿ひ夜走りて行く時、我が軍走りて行く篋兒乞惕を夜又追掛けて虜へ掠め行く時、帖木眞は走りて來る民に、李兒帖李兒帖と喚びて行く時遇ひて、李兒帖兀眞は、その走る民の中に居りき。帖木眞の聲を聽きて認めて車より下りるゝ走りて來て、李兒帖兀眞豁阿忽臣

二女は、帖木眞の轡繩手綱を夜認めて執りけり。月明ありき。見れば、李兒帖兀眞なるを認めて、抱き合ひに驅寄りたり。其處より帖木眞は、脱幹哩勒罕札木合安答二人に本夜便ち言ひて遣るには尋ぬる所用を得たり。我夜は勿夜徹しせ。此處に下馬せん我等云ひて遣りぬ。篋兒乞惕の部眾走りて來るを、夜すがら散りて來る間に、その其處に下馬して宿れり。李兒帖兀眞にかく遇ひ合ひて、篋兒乞惕の民より救ひたる緣故、かくあり。

李兒帖を収める赤勒格兒の讎

初先に兀都亦惕篋兒乞惕の脱忽脱阿別乞兀注思篋兒乞惕の歹兒兀孫(合阿惕篋兒乞惕の)合阿台答兒馬刺、この三つの篋兒乞惕三百人は、日の前(の)日脱黑脱阿別乞の弟也客赤

列都より也速該巴阿秃兒に訶額命額客を奪ひて取られき
 ごと、それに復し報いんご往きけり。帖木眞を不兒罕嶽を三
 たび繞らせて、孛兒帖兀眞をそこに獲て、赤列都の弟赤勒格
 兒孛闊(兒力士)に收容せしめたりき。かく收容したるまゝに
 住みて、赤勒格兒孛闊反り走りて出づる時言はく「黒き老鴉
 は、残れる皮を食む命分ある者なるに、雁鴝鵒を食まんご望
合里速可哩速
 みたりき。外貌悪き赤勒格兒我妃兀眞に逼るごなりて、普き
合塔兒
 篋兒乞惕に禍ごなれり、我賤男なる悪き赤勒格兒は黒き頭
合老温 脱忽喇温
 に「禍」至らるべくなれり。獨の命を逃れ暗き隘處に鑽り入ら
合黑察罕
 ば、障蔽に誰にか爲らるゝごあらん我忽刺都(鳥の名)なる悪
合勒合
 き鳥は、鼠小鼠を食む命分ある者なるに、天鷲鷓鴣を食まん
忽魯罕 忽出脱

合阿台答兒馬刺
 の處はれ
 別勒古台の母の
 逃げ匿れ

ご望みたりき。服裝悪き赤勒格兒我福あり幸ある兀眞を收
忽納兒
 めて來るごなりて、都ての篋兒乞惕に禍ごなれり、我豁乞兒
豁脫刺
(譯す)悪き赤勒格兒は、濁れたる頭に「禍」至らるべくなれり、
能はず
 我羊糞塊の如き命を逃れ、黒く暗き隘處に鑽り入らば、羊糞
豁兒豁孫
 塊の如き我が命に院子ご誰にか爲らるゝごあらん我院子
豁囉潭 合囉亮 合囉忽 合ト察勒
は、明譯に従へり。院にご云ふご、反り逃げ去りき。
匿まはるゝ意ならん
豁囉牙安
 合阿台答兒馬刺を獲たり。率る來て、板の枷を帶ばしめて、
合塔孫
 御嶽不兒罕に向はしめたり。別勒古台の母、彼の隣にありご
合勒敦
 告げられて、別勒古台、その母を取りに往きて、彼の房に別勒
 古台は、右の門より入れば、その母は、破衣羊皮の衣にて左の
 門より出でけり。外なる他人に言へらく「我が子ごもは、合惕

篋兒乞惕の勦滅

(復稱)になれりご告げられたり我此處に悪き人に配きて今
 子ごもを面をいかで見ん我ご云ひ走りて密き林に鑽り入
 りきかくて尋ねて得られざりき別勒古台那顔(別勒古)は篋
 兒乞惕の只骨ある人(ふ人)に「我が母を伴れ來よ」云ひて
 は骸頭箭にて射殺すなりき不兒罕嶽を圍み合ひたる三百
 の篋兒乞惕を子孫の子孫に至るまで灰を吹拂ふが如く滅
 せり残れる彼等の妻子は抱くべき者ごもをば抱けり門に
 入らしめらるべき者ごもをば門に入らしめたり(明他的其
 餘妻子每可以做妻的做了妻做奴婢的做了奴婢)
 脱幹哩勒罕札木合二人を帖木眞感謝みて言はく我が罕
 額赤格札木合安荅二人に伴ご爲られて皇天后土に力を添

罕罕札木合に帖木眞の感謝

敵營に遣れる幼兒曲出

へられて稜威ある皇天に名のりて母なる土地に到らしめ
 て(云へり。到らしむは到らしめらるの意なるべし)男の怨ある篋兒
 乞惕の民を彼等の懐も空になしたり彼等の肝も半にした
 り我等彼等の位も空になしたり親族の人をも失はしめた
 り我等彼等の残れる者ごもを掠めたるぞ我等篋兒乞惕
 の民をかく壊りて退かんご云ひ合へり。
 兀都亦惕篋兒乞惕逃ぐる時貂鼠の帽ある牝鹿の蹄皮の
 靴ある粉皮と水の貂鼠と接ぎたる衣ある五歳なる曲出の
 名あるその目に火ある幼兒を我等の軍人ごもは營盤の内
 に遣りたるを得て伴れ來て訶額命額客に給事に率て與へ
 て去れり。

帖木眞てむぢん脱とつ幹かん哩り勒れ罕かん札木合ぢあむか三人さん一ひとつになりて、篋あ兒る乞き惕との奥おく向むきの房むらを推おし倒たふして、和わ合がふせる婦をんな人を掠かすめて、幹かん兒る罕かん（即すなはち前まへの）純兒罕薛せりやん涼りやう格げ二に河かの塔た勒れ渾こん阿あ喇ら勒れより退しりぞくに、帖木眞てむぢん札木合ぢあむか二人ふたりは、一ひとつとなりて、豁こ兒る豁こ納な黑く河が原はらを指さして退しりぞけり。脱とつ幹かん哩り勒れ罕かん退しりぞくには、不ぶ兒る罕かん嶽たけの背せより訶は闊こ兒る禿と主しゅ兒る不ぶを過すぎ、（兒こ不ぶ字じ倒たふ置おせる）合あ察さつ兀う喇ら禿と速す卜ふ赤ち惕と忽と里り牙や禿と速す卜ふ赤ち惕とを過すぎ、そ

帖木眞札木合効
き時二たびの安
答

の野獸げだものを圍まき獵がして、土と兀う刺ちの黑くろ林はやしを指さし退しりぞきたり。
帖木眞てむぢん札木合ぢあむか二人ふたりは、豁こ兒る豁こ納な忽と河が原はらに會あひ下げ馬ばして、曩なまの安あん答だと爲なり合あへるを想おもひ合あひて、安あん答だを爲なし合あひて親したし合あひはんと云いひ合あへり。最もと前まへに安あん答だと爲なり合あへるには、帖木眞てむぢん十一じふ歳さいなる時とき札木合ぢあむかは麕かの（麕かの骨ほねに）髀せき石いしを帖木眞てむぢんに與あた

へて、帖木眞てむぢんの銅どう灌くわんの（銅どう灌くわんの）髀せき石いしと換かへ合あひて、安あん答だに爲なり合あひて、安あん答だと云いひ合あひたるは、幹かん難なんの冰こほりの上に髀せき石いしを打うつ時とき、其その處こに安あん答だと云いひ合あひたりき。（阮えん葵き生せいの蒙もう古こ吉き林りん土ど風ふう記きに曰いく手て擲ちやく擲ちやく爲なす戲ぎ視し其その偃えん仰やう横こ側わき爲なす勝かち負ひ小せう者しや以もつ麕か大だい者しや以もつ鹿か瑩えい澤たく如ごと玉ぎよく兒こ童どう婦ふ女にょ圍い坐ざ攤たん擲ちやく以もつ相あひ樂らく以もつ薄はく圓えん擊げき之の則すなはち曰いく怕お格げ又また有あ較けう遠えん之の戲ぎ趣すう冰こほり上うへ以もつ中ちゆう爲なす勝かち名な曰いく撒さ罕かんと云いへり。撒さ罕かんは骨ほねなる蒙もう語ご撒さ合がふの轉てんなり。帖木眞てむぢん札木合ぢあむかの冰こほりの）その後のちの春はる木き作つくの弓ゆみにて箭やを射い合あひて居ゐる時とき、札木合ぢあむかは二に歳さい牛うしの二ふたつの角つのを粘ねりて孔あなをあけて聲こゑある響なり骸かぶら頭あたま（鎗あや鳴な）を帖木眞てむぢんに與あたへて、帖木眞てむぢんの柏かしらの頭あたまある鎗あや矢やと換かへ合あひて、安あん答だに爲なり合あへり。二ふたたび安あん答だと云いひ合あひたる緣こと故もとかくあり。

曩なまに老人としやうだちの言ことばを聞ききて、安あん答だのひと命いのち一ひとつにて棄すて合あはず、命いのちの護まもりなるなりとて、親おとみ合あへる緣こと故もとかくあり。今いま

又安荅を爲直して親まんご云ひ合ひて帖木眞は、篋兒乞惕
 の脱黑脱阿を掠めて取れる黄金の帶を札木合安荅に繋け
 させたり。脱黑脱阿の久しく交尾せざる鬣黑馬に札木合
 安荅を乗らせたり。札木合は、兀洼思篋兒乞惕の歹兒兀孫を
 掠めて取れる黄金の帶を帖木眞安荅に繋けさせたり。又歹
 兒兀孫の角ある子羊の如き白馬に帖木眞を乗らせたり。豁
 兒豁納黑河原の忽勒荅合兒の崖の前に繁れる木の下(忽圖
 罕の即位したる處)に安荅ご云ひ合ひて親み合ひて、筵會し歡び樂み
 合ひて、夜は衾一つに臥し合ひたりき。

疑はしき札木合
 の言ひ出し

帖木眞、札木合二人親み合ふこと一年次の年の半まで親
 み合ひて、その住める營盤より一日起たんご云ひ合ひて起

てるは、夏の首の月の第十六の赤く照る日に起ちたり。帖木
 眞、札木合二人共に車の前に歩みて來つるに、札木合言はく
 「帖木眞安荅、山に挨り下馬せん。我等の馬飼ごもは、帳房
 に有附かん。湖に挨り下馬せん。我等の羊飼ごもは、忽哩合赤楊
 喉(ふ食物)に有附かん(譯明)咱每如今挨著山下放馬的得帳房住
 挨著湖下放羊的放羔兒的喉嚨裏得喫的」ご云へり。帖木眞
 は、札木合のこの言を覺りかねて、黙し立ちて後れて起つ間
 車ごもを待ちて起たんごし、帖木眞は、訶額命額客に「札木合
 安荅は言へり。山に挨り下馬せん。我等の馬飼ごもは、帳房に
 ありつかん。湖に挨り下馬せん。我等の羊飼ごもは、忽哩合赤楊
 喉(ふ食物)に有附かん」ご言へり。我は、彼のこの言を覺りかねて彼

李兒帖兀眞の額
悟

への答を何とも言はざりき。我母に問はんとて來ぬ。我云
へり。訶額命額客の聲せざるに、李兒帖兀眞言はく、札木合安
荅は、厭き易しと云はるゝなりき。今我等を厭く時ごなれり。
只今の札木合安荅の語れる語は、我等を便ち圖らんごする
言ならん。我等は勿下馬せそ。この動きたるに依り爽かに離
れ、夜通し掛けて動かん便ちと云へり。

別速惕の家に遺
れる闊闕出

李兒帖兀眞の言にて善しとして下馬せず、夜通し動きて
來つる間に、途に泰赤兀惕を過ぎたり。泰赤兀惕も驚きて、本
夜便ち指し向きて札木合の處に動きたり。泰赤兀惕の伴な
る別速惕氏の營盤に一人の小さき闊闕出と云ふ子を營盤に
遺したるを、我が眾取りて來て、訶額命額客に與へたり。それ

從ひ來ぬる諸部
の眾

を訶額命額客養へり。

その夜夜通しして、日明くれば見れば、札刺亦兒(親征錄 札
刺兒部、元史や剌伊而部)の合赤溫(合赤溫、忽喇溫、合喇孩、脫忽喇溫、
合喇勒歹、脫忽喇溫、この三人の脫忽喇溫兄弟、夜通しし合ひ
て來たりき。又塔兒忽惕の(所出詳か)合荅安荅、勒都兒罕兄弟、
五人の塔兒忽惕も來たりき。又蒙格秃乞顔の子翁古兒等も、
徹失兀惕(所出詳か)巴牙兀惕(卷一なる馬阿里黑、伯牙兀歹の裔、
蒙古七十二種の中の伯要歹氏、元史の伯
岳吾氏又)と共に來たりき。巴嚕刺思より忽必來(親征錄 虎必來、
伯牙吾氏)忽都思、兄弟も來ぬ。忙忽惕より哲台、多豁勒忽徹兒必、
徹兒必、
官名なり。後に任ぜられたる官の名を以)兄弟二人來ぬ。李兒帖兀眞出の
弟幹歌連徹兒必(元史食貨志の幹闊烈闕里必)も、阿嚕刺惕(元史博爾阿

兒刺氏(るらうじ)より離れて、その兄孛斡兒出(おおはあに)に合ひに來ぬ者勒篋(ちやく)の弟(おと)(蒙語迭兀、單稱の弟にて、察兀兒罕)察兀兒罕(ちやくわん)速別額台(すべつえつたい)巴阿禿兒(はあつご)(親征)速不台(すふたい)拔都(はつと)元史速不台(げんしすふたい)は兀朮罕(わつじくかん)(元史兀朮合)より離れて、者勒篋(ちやく)に合ひに來ぬ。別速惕(べつそつてき)より迭該窟出(てつかいこくしゅつ)古兒兄弟(こにふたに)二人も來ぬ。速勒都思(すよくとすい)(元遜都思氏)より赤勒古台(せきりくこたい)塔乞(たき)泰赤兀(たいしやくわ)兄弟(にふたに)ごもも來ぬ。札刺亦兒(しやくしやく)の薛扯(せつてつ)抹黒(まくく)も、阿兒孩(あにがひ)合撒兒(あさ)巴刺(はしやく)なる二人の子(ふたりのこ)來ぬ。晃豁壇(けいこつたん)より雪亦客(せつやく)禿兒(とく)必(かなら)も來ぬ。速客(そく)虔(けん)の者該(けい)晃答(けい)豁勒(こつりく)の子(こ)速客(そく)該者(けい)溫(ゐん)も來ぬ。捏兀(ねつ)歹察(たいしやく)合安兀(あはんわ)注(わ)も來ぬ。(捏古思氏の察合安兀注、捏古思氏は赤那思氏とも云ふ。喇失惕額丁に依れば、察刺孩領忽の二子堅都赤那烏魯克真赤那の裔なり。)幹勒(かんりく)忽訥兀(こつねつ)惕(てき)の輕吉牙(けいきや)歹(たい)豁囉刺思(こつらし)(卷一なる豁囉刺思の復稱、親征錄元史火魯刺思)より薛赤兀兒(せつしやくわ)朶兒邊(たにべん)より抹赤(まくしやく)別都(べつと)溫(ゐん)も來ぬ。亦乞喇思(やくきらし)(親征

亦乞喇思(やくきらし)元(げん)亦乞列思(やくきりくし)の不圖(ふと)(親征錄元史)孛徒(はつと)元史(げんし)孛禿(はつと)も、こゝに塔(た)こなりに行くに依り來ぬ。(不圖は、帖木眞の妹帖木命の夫となれり。)那牙勤(ながきん)より種(ちゆ)索(そく)も來ぬ。幹囉納兒(かんらな)(元史幹刺納兒、幹耳納幹魯納台氏)より只兒豁安(しやくあん)も來ぬ。巴嚕(はら)刺思(しやくし)より速忽薛禪(すくせつせん)も、合喇察兒(あしやく)なる子(こ)來ぬ。(この合喇察兒は馬の五世)又巴阿嚕(はあら)の豁兒赤兀孫(こつしやくわん)額不堅(がくふけん)(裕兒赤)闊闊(くわくわく)搆思(たいし)も、あまたの巴阿嚕(はあら)一團(いちだん)來ぬ。

豁兒赤(こつしやく)來て言はく孛端察兒(はつたんしやく)孛黑多(はつくわ)(孛端察兒賢人)の拏(な)へて取れ(と)る婦人(ふにん)より生れたる我等(われら)の祖(おや)は、札木合(しやくまが)の祖(おや)と腹一つ(はらひとつ)の胞(ほう)漿(じやう)一つ(ひとつ)の者(もの)なりき、我等(われら)札木合(しやくまが)より離れざるものなりき、我等(われら)神告(しんこく)(神告御告)降りて、我が目(め)に見せたり。慘白(なまじろ)き乳牛(ちゆぎう)來て、札木合(しやくまが)を繞りて行き、その家車(いけぐるま)に觸るゝ、札木合(しやくまが)に觸れて、片

方の角を折りて、片角となりて、我が角をおこせと云ひ云ひ、
 札木合の處に吼え吼え土を揚げ揚げ立ちたり。角無き慘白
 き牡牛は大なる帳房の牀を上うへに擡もたげて、駕がして拽ひきて、帖木
 眞まの後しりより大車路おほくるまぢに依より吼え吼え來くるに、皇天后土議かり合
 ひて、帖木眞せんを國くにの主人うしと爲なれと云ひ、國くにを載のせて持ちて來
 たりと云ひ、神告みづけを目めに見みせて我わに告つげたり。帖木眞せん汝たぢ國くにの
 主人うしと爲ならば、我わがかく、吾わげたる故ゆゑに、いかに樂たのまし
 むる、汝なむと云へり。帖木眞せん言いはく、實まことにかく國くにを知らしめば〔管
めせし〕萬戸ばんこの官人くわんにんと爲なさんと云へり。豁ご兒ち赤あは、多おほき理り由ゆを告
 げたる人ひとを我わを萬戸ばんこの官人くわんにんと爲なすとも、何なにの樂たのみか有あらん。
 萬戸ばんこの官人くわんにんと爲なして、國くにの美うつくしき好よき少をとめ女めらを自じ在ざいに取とら

豁兒赤の欲望

しめて、三十人さんじゅうにんも婦人むにやあらしめ、又何またにても我わが語かたることを
 迎むかへ聽きけと云へり。〔前段に豁兒赤兀孫を翁と云へるは、後に與へたる
 尊稱を以て追記せるなり。婦人をあまた望みたる
を見れば、この時はまだ壯かりしならん。〕

札木合より離れ
來ぬる諸部の眾

忽く難なんを頭かしらとせる格ぐ你に格げ思すの一團いちだんも來きぬ。又また荅だ哩り台たい幹かん惕つ赤
 斤ぎんの一團いちだんも來きぬ。札荅ぢやだ欄らんより木勒むらく合か勒らく忽くも來きぬ。又また溫うん眞ま〔親征
嫩眞部〕撒さ合か亦い惕てい〔親征錄ろく撒さ合か夷い部ぶの一團いちだんも來きぬ。札木合ぢやむかよりか
 く離はなれ動うごきて、乞き木む兒ゐ合か小せう河がの阿あ亦い勒らく合か喇ら合か納なに下げ馬ばして
 居をる時とき、又また札木合ぢやむかより離はなれて、主ちゆう兒ゐ勤きん〔即ち卷一の
兒乞〕〔即ち卷一の忽〕子こ撒さ察さつ別べつ乞き〔即ち卷一の〔即ち卷一の〕〕泰たい出しゅつ〔即ち卷一の
の一團いちだん、又また捏ね坤こん太たい石せきの子こ忽く察さつ兒ゐ別べつ乞き〔親征〔元史〕〕火か察さつ兒ゐの一團いちだん、又
 忽く禿と刺そ罕かん〔卷一の忽〕の子こ阿あ勒らく壇たん幹かん惕つ赤あ斤ぎん〔阿勒壇の一團いちだん是これ等らは

二たび古喇勒古の青湖の札營

又札木合より離れ動きて帖木眞に乞木兒合小河の阿亦勒合喇合納に下馬して居る處に會ひ下馬せり。其處より起ちて古喇勒古山の内なる桑古兒小河の合喇主嚕堅(卷二の合)の闊闊納兀兒(湖水)に下馬せり。

成吉思合罕推戴の盟

阿勒壇忽察兒撒察別乞等議り合ひて帖木眞に言へらく「汝を罕と爲さん。帖木眞を罕となさば我等は多き敵に先鋒に奔りて顔好き少女妃を帳殿の房に入りて得て伴れ來て與へん我等(汪格)他國民の顯美しき妃少女を臂節好き驢馬に騎らしめて伴れ來て與へん我等(合哩亦兒堅)野の獸を卷狩せば先驅して與へん我等(語と較ぶるにこゝにも一句脱ちたるに似たり)曠野の獸の腹を一竝に寄せて與へん。懸崖の獸の腿を一竝に寄せて

新庭の政務分任
裕兒赤

與へん我等(合惕忽)戰ふ日に汝の號令に違はば我等の家業より妃婦人より離れさせて我等の黒き頭を地の土に棄てて去れ。平けき日に汝の協議を壞らば我等の男ごもの家業より妻(昂容)子より別れさせて主なき地に棄てて去れ。かく言を定め合(可兀)ひてこれより盟して帖木眞を成吉思合罕(強盛な)と名づけて罕としたり(帖木眞の汗となれるは蒙古源流に據れば己酉の年に治五年宋の淳熙十六年金の大定二十九年西紀一一八九年なり)

成吉思合罕罕と爲るに孛斡兒出の弟斡歌來徹兒必(前の連徹)箭筒を帶べり。合只溫脱忽喇溫(前の合赤溫)箭筒を帶べり。哲台多豁勒忽徹兒必兄弟二人箭筒を帶べり。(箭筒を蒙語に筒を帶ぶる者を豁兒臣又は豁兒赤と云ふ元史塔察兒の傳に)火兒赤者佩囊鞬侍左右者也(はこれ

巴兀兒赤

豁你赤

抹赤即木匠

（な）汪古兒（古兒）雪亦客禿徹兒必合荅安荅勒都兒罕三人言
（馬納合兒）はく朝の飲物を勿缺かせそ夕の飲物を勿慢りそこて巴兀
（赤と云ふ元史兵志に）爾赤（とあるは）迭該言はく二歳の羯羊を渴かして朝に勿
（養古造 豁那黑）缺きそ寝ぬる時に勿後れそ花の色（羊を牧して）車底に満
（管只牙孫）さん黄色の羊を牧して圈子（養古造 豁那黑）に満さん貪食は悪くありき我
（羊を牧して）羊を牧して白腸を食はん我（こて）迭該は羊を牧せり（羊を豁
（ひ羊飼を豁你臣又は豁你赤と云ふ元史兵志の火你赤はこれなり）その弟古出古兒（出古兒）言はく鎖
（ある車をその轄を勿倒れしめそ）車軸ある車（車路の上に）勿壞れしめそ
（帖兒喇兀勒）（前に見え）は家の内の婢僕（ごも）を統べん（こ）云へり忽必來赤

兀勒都赤

阿黑塔赤

阿都兀赤

勒古台合兒孩（脱忽喇温）前（の合喇孩）三人（に）合撒兒（共）に刀を
 帯びて勢ふものはその首を斬れ荒ぶるものはその臂を刺
（古出兒格昆）せ（こ）云へり（刀を兀勒都赤と云ふ元史兵志に）侍上帶刀及弓矢者曰
（云都赤）とあるは別勒古台合喇勒歹脱忽喇温二人（に）驢馬を
（執れ）馬官（阿黑）と爲れ（こ）云へり泰赤兀歹忽圖抹哩赤（前に見え）
（木勒合勒忽三人に）馬羣を牧せよ（こ）云へり（馬羣を蒙語に阿都
（と云ふ）阿兒孩合撒兒塔孩（前の塔乞）速客該（前の速客）察兀兒罕四人
（に）遠き豁幹察黑（名）近き幹多喇（名）こなれ（こ）云へり（巡警討
（の事を掌れるならん官）速別額台巴阿都兒言はく鼠（こ）なりて聚
（牙勒都速 合喇）め合はん黒き老鴉（こ）なりて外（に）ある物を收め合はん馬覆
（ひの毛氈）こなりて覆（ひ）合はん（こ）試みん風除の毛氈（こ）なり

成吉思汗實錄卷の四

阿勒壇忽察兒に
言はしむる札木
合のいやみ

阿兒孩合撒兒察兀兒罕二人を札木合の處に使に遣りた
れば、札木合言はく「阿勒壇忽察兒二人に言へて、言ひて遣
るには阿勒壇忽察兒汝等二人は、帖木眞安荅と我と二人の
間に、安荅の腰窩を戳して、肋骨を攫みて、何ぞ離れしめたる、
汝等安荅我二人を離れしめず一處に居る時帖木眞安荅を
罕に何ぞ爲さざりし汝等今何を只心に思ひてか罕ごなし
たる汝等阿勒壇忽察兒汝等二人は、言へる言に従ひ、安荅の

心を安からしめて、我が安荅に善くも伴となりて與へよと云ひて遣りて、

盗みしたる札木合の弟の殺され

撒阿里の原のありか

その後札木合の弟台察兒(親征錄元史)秃台察兒(山の名)の前なる斡列該不刺黑(親征錄元史)玉律哥泉(親征錄)に住めるに、我等の撒阿里客額兒に居る拙赤荅兒馬刺(親征錄)只塔兒馬刺(元史)只(擲)の馬羣を盗みに往きけり。(撒阿里客額兒は、撒阿里の原にて、親征錄元史に薩里川とあり。薩里河ともあるは、非なり。河にはあらず、廣き谷なり。川なれば、谷の義にも用ふ。元史明宗紀に據るに、天曆二年正月和寧の北に即位し、三月潔堅察罕の地に止まり、五月四日、斡耳罕水、斡兒桓河の東に至り、二十三日秃忽刺河、王兀刺河の東に至り、六月十五日撒里怯兒の地に至り、二十一日闊朶傑阿刺倫に至り、それより南に進みて上都に向へり。撒里怯兒は、即ち撒阿里客額兒なり。闊朶傑阿刺倫は、此書の末に見ゆる闊迭額阿喇勒にして、客魯噠河の中洲なり。西より進みて闊迭額島より前に撒阿里原に至れるを見れば、撒阿里原は、客魯噠河の上流の地なるべし。金幼孜の北征錄に、雙泉海、即撒里怯兒、元太祖發跡之所、舊建宮殿、山川環繞、有二海、徒子西北有三關口、通飲馬河、土拉河とあり、その宮殿は、即ち太祖紀に薩里川哈老徒の行宮とある處なれば、二海子の一つは、必ず哈老徒の海子、今の噶老台の池

なら)台察兒は、拙赤荅兒馬刺の馬羣を盗みて率て去りき。拙赤荅兒馬刺は、馬羣を盗みて去られて、從者どもに心臆せられて、拙赤荅兒馬刺のみ追ひて往きて、夜その馬羣の邊に到りて、己が馬の鬣の上に腹にて伏して到りて、台察兒の脊梁を折るべく射て殺すに、馬羣を率ゐて來ぬ。

荅爾巴勒主楊の戦

「弟台察兒を殺されたりとて、札木合が頭ごなれる札荅喇は、十三部伴なひて三萬人となりて、阿刺兀兀惕(明譯文は)土兒合兀惕(二山の名)阿刺烏秃刺烏(二山)に依り越えて、成吉思合罕の處へ出馬して來ぬとて、亦乞喇思より木勒客脫塔黑(親征錄)慕哥秃(元史)磨里秃(元史)孛囉勒歹(親征錄)卜樂台(孛秃)波樂歹(二)人、成吉思合罕に古喇勒古に居る處に報告を送り來ぬ。この

報告しらせを知るし。成吉思合罕ちんぎすかかんは、十三團じふさんだんありき。(團は蒙語古哩延
惕なり。親征錄に十三翼と譯し)亦三萬人またさんまんじんとなりて、札木合ぢやむかの迎むかへ
たるは支那風に書きたるなり)に出馬しゅつばして、荅闌巴勒たらんぱれ主惕しゅてい(親征錄
元史)荅闌版朱思之野たらんばんしゆししののに立ち合あ
ひ(對戰)て、成吉思合罕ちんぎすかかんは、札木合ぢやむかにそこに動うごかされ(敗ら)て、幹
難の哲唎捏合ぢえれねかト赤孩せいかい(哲唎捏
の隘處)に遁のがれたり。札木合ぢやむか言いはく、幹難かんなん
の哲唎捏に遁のがれしめたり、我等われら云いひて、回かへる時とき、赤那思せくなしの子こ
ら(一家の子)を七十しちじふの鍋なべに煮にて、捏兀歹ねぐたふ察合安兀洼せかあんぐわの頭かぶを斬きり
て、馬の尾に拖ひきて去さりき。(赤那思氏は唎失惕額丁に依れば、察刺孩額
堅都赤都は牡狼烏魯克真赤那は牝狼の義にして、赤那思は狼なる赤那の複稱
なり。親征錄の撰者は修正秘史を譯するに當り、赤那思の姓氏なることを知ら
ず、半途爲七十二竈
烹狼爲食と譯せり)

そこに札木合ぢやむかを其處そこより回かへらするこ、兀魯兀惕ぐろぐてい(元史兀赤
台の傳)

兀魯兀台氏ぐろぐたいしの主兒しゅえ扯歹ちえふ(元史
本傳)兀赤台ぐてい、畏答兒ゐたがえ、兀徹帶ぐていは、兀魯兀
惕(親征
錄)兀魯吾部ぐろごぶを率ひきゐ、忙忽惕まごつてい(畏答兒
の傳)忙兀氏まごていの忽余勒答兒ごよれたがえ
(兀赤台
傳)忽因答兒ごいんたがえ、畏答兒ゐたがえは、忙忽惕まごつてい、忙兀部まごぶを率ひきゐ、札木
合より離はなれて、成吉思合罕ちんぎすかかんの處ところに來きぬ。晃豁壇ごうかくたんの蒙力克額赤
格(蒙力克
なる父)は、そこに札木合ぢやむかの處ところに居ゐりて、蒙力克額赤格まごりくごちかく、その
七人の子こ、札木合ぢやむかより離はなれて、そこに成吉思合罕ちんぎすかかんに合あひに
來ぬ。札木合ぢやむかより此等これらの民たみ來きぬこて、成吉思合罕ちんぎすかかんは、己おのが處ところに
國來きぬこ喜よろこびて、成吉思合罕ちんぎすかかんは、訶額侖兀眞合撒兒かごれんごしんかさえ、主兒勤しゅえきんの
撒察別乞ささべき泰出たいしゅつらこ共ともに、幹難かんなんの林はやしの裏うちに筵會うたげせんこ云いひ合あ
ひて筵會うたげしたるに、成吉思合罕ちんぎすかかんに、訶額侖兀眞かごれんごしんに、合撒兒かさえに、撒
察別乞ささべきになじ首はじめとして、一つの甕ひつ(馬乳酒を入
る)、革かわの囊ふくろを傾かたむけけり。又また撒

ち合ひて、主兒勤チヂンに勝ちて、豁哩眞合屯カハルジンカエン、忽兀兒臣合屯クワウエリチンカエン二人を奪ひて取れり。却て彼等に睦ムツひ合はんと云はれて、豁哩眞合屯カハルジン、忽兀兒臣合屯クワウエリチン二人を還して、睦ムツひ合はんとて使ツカヒし合ひて居る時に、乞塔惕キタテの民の阿勒壇罕アラクタンカン（金の章）は塔塔兒タタエの篋古眞ケコジン薛兀勒圖セウケルク（親征録）篋兀眞ケウジン笑里徒セウリト等に、その命に從はれず、王京ワンキョウ丞相シヨウシヤウ（王京は、金の國姓なる完顔の轉。金史）に軍を整へて、勿蹶踏ムケツひそ、便スナハち言ひて遣りき。（金史の紀傳を見るに、この役は、金の章宗承安元年成吉思汗三十五歳の時なり。）王京丞相ワンキョウシヨウシヤウは、篋古眞ケコジン薛兀勒圖セウケルクが頭たる塔塔兒タタエを、兀勒札河ウケルサカ（金史内族の傳）幹里札河カンリサカ、今の烏爾載河ウルクサイカに沂シり、馬羣糧食バクンリョウシキごめに追捲りて來ぬとて、噂ウザを知れり。その噂ウザを知るご、

完顔裏の塔塔兒
征伐

成吉思汗王罕の
塔塔兒夾み攻め

成吉思汗チギシヤン合罕カカン言はく、前の日より塔塔兒タタエの民は、御祖オヤなる父を失ひたる讎ウラナある民なりき。今この機會キカイに力合チカラアヒはせん。（金の夾み攻）我等ワレガ言ひて、脱幹哩勒罕トクカンリレカンの處トコロに阿勒壇罕アラクタンカンの王京丞相ワンキョウシヨウシヤウは、塔塔兒タタエの篋古眞ケコジン薛兀勒圖セウケルクが頭カシラたる塔塔兒タタエを兀勒札河ウケルサカに沂シり追捲りて來ぬと云へり。我等ワレガの御祖オヤなる父を失ひたる塔塔兒タタエを夾み攻めん。我等ワレガ脱幹哩勒罕トクカンリレカン額赤格エキカク疾イキく來よとて、この傳言デンゴンを致イダしに使ツカヒを遣りぬ。この傳言デンゴンを致イダさるゝと、脱幹哩勒罕トクカンリレカン言はく、我が子は、勻卜ユフ（丁度善し、善き機會なり）と云ひておこせたり。力合チカラアヒはせん。我等ワレガ言ひて、第三ダイサンの日に軍士イクシを聚めて、軍を起して、脱幹哩勒罕トクカンリレカンは、速すみやかに赴おもむきて、成吉思汗チギシヤン合罕カカン、脱幹哩勒罕トクカンリレカン二人は、主兒勤チヂンの撒察別乞ササベキ、泰出タイシュが頭カシラたる主兒勤チヂン（親征録）月兒斤グヱツエチンに

言ひて遣るに「前」の日より我等の御祖なる父を失ひたる塔
 塔兒を今この機會に夾み攻めん諸共に出馬せん」と云ひて
 遣りぬ。主兒勤に來らるゝことを六日待ちて「待ちかねて、成
 吉思合罕、脱斡哩勒罕二人諸共に軍を起して、兀勒札に沿ひ、
 王京丞相と力合はせに來つる時、兀勒札の忽速秃失秃延、納
 喇秃失秃延（親征録、納刺秃失圖）に塔塔兒の篋古眞が頭たる塔
 塔兒は、そこに寨に據りき。成吉思合罕、脱斡哩勒罕二人は、か
 く楯籠れる篋古眞、薛兀勒圖をその寨より拏へて、篋古眞、薛
 兀勒圖をそこに殺して、彼の銀の繡車、東珠ある衾を成吉思
 合罕そこに取りき。

札兀惕忽哩の官
 王罕の號

篋古眞、薛兀勒圖を殺したりとて、成吉思合罕、脱斡哩勒罕

二人（この二人の名は上の篋古眞の上又は）王京丞相は、篋古眞、薛兀
 勒圖を殺しけり。と知る。甚だ喜びて、成吉思合罕に札兀惕
 忽哩の名を與へたり。（親征録、察兀忽魯。札兀惕は、百なる札温の複稱
 哩牙、聚會と云ふ。忽喇勒などの語根なれば、牧長の義あり。）客唎亦惕の脱斡
 り勒に王の名をそこに與へたり。王罕の名は、王京丞相の名
 づけたるに依り、その時より爲れり。王京丞相言はく、篋古眞
 薛兀勒圖を汝等が力合はせて殺したるは、阿勒壇罕に最大
 きなる助を爲せり。汝等汝等の此の助を阿勒壇罕に奏し上
 げん。我、成吉思合罕に此より大きな名を加ふることを、招
 討の名を與ふることを、阿勒壇罕知しめさん。と云へり。王京
 丞相は、そこよりかく喜びて退けり。成吉思合罕、王罕二人は、

そこに塔塔兒を虜へて分け合ひて取り合ひて、家家に回りにて下馬せり。

塔塔兒の寨に遺れを幼児失乞刊忽都怒

塔塔兒の楯籠れる納喇禿失禿延に下したる營盤の内を掠むる時、一人の小さき幼児を棄てたるを我等の軍士ども營盤より得けり。金の環の鼻環ある、金絲の布に貂鼠にて裏附けたる腹掛ある小き幼児を伴れ來て、成吉思合罕は、訶額額客に給事にて與へたり。訶額額客言はく、好き人の子なるぞ。家系善き人の胤なるぞ。五人の子には、弟第六にて子ごなさん。失乞刊忽都怒ご名づけて母育へり。(後の文には失吉刊の字なし。親征錄元史に忽都怒、元史太宗紀に胡土虎ともあり。)

主兒勤の殺掠を聞ける成吉思汗の怒

成吉思合罕の老營は、哈哩勒禿納兀兒に在りき。(哈哩勒禿

哈連徒澤。露西亞の地圖に、克魯倫河の南流の東に折る、處より西南に當り、露國東方經營圖には、哈里隆湖なく、それより東に倚りて、ハラリオル泊あり。哈哩)老營に残れる者を、主兒勤は、五十の人の衣服を剥ぎけり。十の人を殺しけり。主兒勤に然爲されたり。さて、我等の老營に残れる者ども、成吉思合罕に告げたれば、この報告を聽く。成吉思合罕甚く怒りて言はく、主兒勤にいかでかく爲されたりし。我等、幹難の林に筵會せる時、厨官失乞兀兒をも、彼等打ちたり。別勒古台の肩をも、彼等斫りたり。睦び合はん。云はれて、豁哩眞合屯、忽兀兒、臣二女を還して與へたり。我等、その後曩の讎あり。怨ある我等の御祖なる父を失ひたる塔塔兒を、夾攻に出馬せん。さて、主兒勤を六日待ちても來られざりき。今又敵に倚り、敵に彼等も

爲れり」と云ひて成吉思合罕は、主兒勤の處に出馬せり。主兒勤を、客魯噠の闊朶額阿喇勒の朶羅安孛勒荅兀惕に居る彼等の民を虜へたり。(闊朶額洲は卷十五に闊迭兀阿喇勒とも闊迭額阿て七つ岡なり。親征録にしど朶羅盤陀山。卷十五の末に朶羅安孛勒荅兀惕は孤山なり。中島の小山にして、後に成吉思汗の)撒察別乞泰出二人は、僅に身を遁れたり。彼等の後より襲ひて、帖列格禿阿馬撒兒に(帖列格禿南に當り、租里格圖と云ふ處ありて、内蒙古に往く路に當れるは、帖列格禿の轉似たり)馳せ至りて、撒察別乞泰出二人を拏へたり。拏へて成吉思合罕は、撒察泰出二人に言へらく、前の日我等は何言ひ合ひしか」と云はれて、撒察泰出二人言はく、言へる言に我等は從はざりき。我等の言に從はしめよ」と云ひて、その言を

撒察泰出の捕り殺され

知らせて、任せ(頸を)て與へたり。彼等の言を知らせられて、彼等の言に從はしむべく片付け(殺)て、直に其處に棄てたり。(前の言とは、成吉思汗を立てたる時の盟の言を云へるなり)

札刺亦兒の人模合里等の降附

撒察泰出二人を片付くるこ、回りに來て、主兒勤の民を動かする時、札刺亦兒の帖別格禿伯顏(帖別格禿の長者)の子古溫兀阿(元史木華黎傳)孔溫窟哇(赤刺溫孩赤)(元史忙哥赤傳)赤老溫愷赤(者卜客黎の傳)三人は、その主兒勤の處に居りき。古溫兀阿は、模合里(親征錄)木華黎(不合)(蒙韃抹歌)なる二人の子伴れにて見えて言はく、爾の戸口の奴李莎合 李幹勒こなさん。爾の戸口より逃廻らば、彼の脚筋を断れ。爾の門額兀額 希出の近習の奴不勒只こなさん。爾の門より離れば、彼の肝額兀額 赫亦魯を割きて棄てよ」と云ひて與へたり。赤刺溫孩赤も、統格合失格揚額揚客

なる二人の子を成吉思合罕に見えしめて言はく爾の金の戸口を守りて居よとて奉れり我爾の金の戸口より外に去らば彼の命を絶ちて棄てよ爾の寛き門を擡げて上げよ阿朮壇 昂吉答を踏みて棄てよと云へり者ト客をば合撒兒に與へたり者ト客は主兒勤の營盤より孛囉兀勒親征錄 元史 博羅渾 本傳 博爾忽と云へる小き幼兒を伴れ來て訶額侖額客に見ゆべく與へたり。

主兒勤の家より得たる幼兒孛囉兀勒

訶額侖の養子四人

訶額侖額客は、篋兒乞惕の營盤より得られたる古出卷三の曲出と云ふ幼兒を、泰赤兀惕の内なる別速惕の營盤より得られたる闊闊出と云ふ幼兒を、塔塔兒の營盤より得られたる失

吉刊忽秃忽と云ふ幼兒を、主兒勤の營盤より得られたる孛囉兀勒と云ふ幼兒を、この四人を家の内に養ふに、訶額侖額客は、子ごもの爲に、晝は視る目、夜は聽く耳と誰に爲らしめんかとて、家の内に養へり。

主兒勤の民の緣由

この主兒勤の民の緣由主兒勤と爲るには、合不勒罕の七人の子の大兄幹勤巴喇合黑ありき。其の子莎兒合秃主兒乞ありき。主兒勤と成るには、合不勒罕の子ごもの兄と云ひて、その民の中より擇びて、肝はに膽ある、拇指おほゆびにて善く射る、肺はい亦兒堅亦兒堅、滿みつる心こゝろある胸に肺の口くち滿みつる大聲を發する剛氣かうきある男ごこに技わざ能のうある猛き氣力きりよくあるを擇びて、與へて、剛氣あり膽あり勇あり抗さかふ者もの無なき蒙拙兒ちひ乞き篋め思す譯あは但有あは去ゆく處ところ皆みな攻ぶ破やぶ無な人ひと能のう敵てきが

故に主兒勤云はれたる緣由かくあり。かゝる勇ある民を成吉思合罕は降服はせて、主兒勤姓ある者を滅せり。彼等の民を部落を成吉思合罕は己が呢近の民こなしたり。

別勒古台に殺さるゝ不哩李可

成吉思合罕は一日不哩李可(前の不哩李關)別勒古台二人に搏ち合はしめん(相撲取)云へり。先に不哩李可は主兒勤の處に居たりき。不哩李可は別勒古台を片手にて拏へて片足にて撥ねて倒して動かせず壓着けたりき。不哩李可は國の李可(士カ)そこに別勒古台不哩李可二人を相撲せしめたり。不哩李可は勝たれざる人なれども殊更に倒れて與へたり。別勒古台は壓着けかね肩把りて、臂の上を上りて別勒古台顧みて、成吉思合罕を見れば、合罕は下唇を咬めり。別勒古台悟り得

て、彼の上に馬乗して、彼の二つの領を交へ扼へて彼の脊梁を膝に据ゑて折りて遣りたり。不哩李可は脊梁を折られて言はく別勒古台に勝たれ(け負)ざるなりき。我合罕を恐れて伴り倒れ猶豫ひて命を取らせたり。我云ふこ死にて去りぬ。別勒古台は彼の脊梁を扯き折るこ引摺りて除けて去りぬ。合不勒罕の七人の子の兄斡勤巴兒合黒ありき。次に巴兒壇巴阿秃兒ありき。その子也速該巴阿秃兒ありき。(明譯この間に下句あり)也速該子即是太祖(巴兒壇)の次に忽秃黒圖蒙列兒(卷一の忽秃黒圖蒙列兒)ありき。その子不哩ありき。取り合ひ(争物を)て巴兒壇巴阿秃兒の子より隔たり、巴兒合黒の勇ある子らに伴こなれるが爲に、不哩李可國の李可別勒古台に脊梁を折られて死にたり。

その後雞の年(我が土御門天皇建仁元年辛酉金の章宗泰和元年宋の寧宗嘉泰元年西紀一二〇一年成吉思汗四十歳の時)
 合塔斤撒勒只兀惕(元史親征錄) 哈荅斤散只兀(元史) 一つになりて合塔斤の巴忽擲囉吉が頭たる合塔斤撒勒只兀惕の赤兒吉歹巴阿禿兒が頭たる撒勒只兀惕は朶兒邊(元史親征錄) 朶魯班(元史) 塔塔兒に睦び合ひて朶兒邊の合只溫別乞が頭たるもの塔塔兒の阿勒赤塔塔兒(塔塔兒の分部の元史親征錄) 案赤塔塔兒の札隣不合が頭たるもの亦乞喇思(元史親征錄) 亦乞刺思の土格馬合が頭たるもの翁吉喇惕(元史親征錄) 弘吉刺の迭兒格克額篋勒(元史親征錄) 帖木哥阿蠻(明は二人とせり今親征錄喇失惕の集史の一人とせるに従ふ) 阿勒灰等豁囉刺思(卷一の豁囉刺兒は魯刺思の綽納黑察合安が頭たるもの乃蠻より古出兀惕乃蠻(乃蠻の分)の不亦嚕黑罕(元史親征錄) 盃祿可汗(元史) 不魯欲罕(魯欲は欲魯)の誤りなり)

篋兒乞惕の脱黑脱阿別乞(親征錄) 脱脱別吉の子忽禿(親征錄) 和都(親征錄) 火都(親征錄) 韓亦喇惕(元史親征錄) 韓亦刺(親征錄) 忽都合別乞(親征錄) 忽都花別吉(親征錄) 泰赤兀惕の塔兒忽台乞哩勒禿黑(親征錄) 塔兒忽台希憐禿(親征錄) 豁敦幹兒長(親征錄) 忽敦兒章(親征錄) 阿兀出巴阿禿兒(親征錄) 阿忽出拔都(親征錄) 阿忽出巴哈都兒(親征錄) 等の泰赤兀惕此等の部落は阿勒灰不刺黑(阿勒灰の元史) 阿雷泉(阿雷泉の元史) に聚ひて札荅囉の札木合を君に戴かんごとて牡馬牝馬を腰斬に斬り合ひて盟ひ合ひて其處より額兒古捏木噠(額兒古捏河朔方備乘の額爾古訥河) に沿ひ起ちて刊木噠(刊河親征錄) 犍河(召烈台抄) 河(龍沙紀略の根河中) の額兒古捏に注ぐ出島の角(元史) 禿律別兒河岸(抄兀兒忽蘭也兒吉赤崖即) にて札木合を其處に古兒罕(普君すめらぎ合木) 局兒可汗(元史) 局兒

豁哩歹の急報

罕はんに戴いたきたり。古兒罕こゑはんに戴いたく。成吉思合罕せいしあいはん王罕わんかん二人ふたりの處ところに出馬しゅつばせん。云いひ合あへり。出馬しゅつばせん。云いひ合あへるを。豁囉刺思くわつらさしの豁くわつ哩ら歹たい。（親征 火力台）は。成吉思合罕せいしあいはんに古唎勒古こらにれこに居をる處ところに。此この報告ほうこくを致いたして遣やりき。この報告ほうこくに來こらる。成吉思合罕せいしあいはんは。王罕わんかんにこの報告ほうこくを致いたして遣やりたれば。王罕わんかんは。報告ほうこくを致いたさる。軍いさぎを起おこして。急いそぎ成吉思合罕せいしあいはんの處ところに。王罕わんかん到いたりて來きぬ。

兩軍先鋒の呼び合ひ

王罕わんかんに來こらる。成吉思合罕せいしあいはん王罕わんかん二人ふたり一つになりて。札木合ちやくまがひの迎むかへに出馬しゅつばせん。云いひ合あひて。客魯噠河きゃくろたいがに沿したがひ出馬しゅつばするに。成吉思合罕せいしあいはんは。阿勒壇あにたん忽察兒こくさち。答哩台たたりたい三人ふたりを先鋒せんほうに行ゆかしめたり。王罕わんかんは。桑昆さんこん。（王罕の子。親征錄。元史。朮赤台の傳。鮮昆）。札合敢木ちやくあかんぼ。必勒格ひれく

別乞べいき三人ふたりを先鋒せんほうに行ゆかしめたり。この先鋒せんほうより前まへへ又また斥候しやくこうを遣やるに。額捏堅歸列禿なつねんけんきりつと。（親征 捏干貴因都。捏の上額の字を脱。一録）。坐まの斥候しやくこうを放はなちたり。其そのの彼方かなた徹克徹兒てつかくてつゑ。（卷一卷二の扯徹兒。親征錄。徹兒山兒山）。一坐ひとまの斥候しやくこうを放はなたしめたり。其そのの彼方かなた赤忽兒せこゑ。（親征 赤忽兒黑山）。一坐ひとまの斥候しやくこうを放はなたしめたり。我等われらの先鋒せんほう阿勒壇あにたん忽察兒こくさち。桑昆さんこん等ら。兀惕乞牙うていきがに到いたりて。下馬げません。云いひ合あひ居をる時とき。赤忽兒せこゑ忽こに放はなてる斥候しやくこうより人ひと走はしりて來きて。敵てき來きぬ。云いふ報告ほうこくを送おくり來きぬ。その報告ほうこく來きる。下馬げませず。敵てきの迎むかへに。（敵を迎）。報告ほうこくを取とらん。（偵察）。て。行ゆきて。近ちかづきて。報告ほうこくを取とり。（偵察）。て。備そなありや。探されば。札木合ちやくまがひの先鋒せんほうは。忙豁勒まんくわつれより阿兀出把あうしゅつぱ。阿禿兒あくとゑ。乃蠻ないまんの。不亦嚕黑罕ふいらくくわい。篋兒せつゑ。乞惕いきていの。脱黑脱だつくわい。阿別乞あべいき

の子忽秃、幹亦喇惕の忽都合別乞、この四人、札木合の先鋒に
行きけり。我等の先鋒は、彼等の處に呼び合ひて叫びて、晩に
なられて、あす戦はん」と言ひて、退きて大軍に合ひ宿れり。

風雨の呪

明日行かして、近づきて闊亦田(元史親征錄)、闕亦壇(元史)に對陣し
て、下りつ上りつ挑み合ひ勢揃し合ひて居る時、彼等不亦嚕
黑罕、忽都合二人、呪(蒙語)札荅(蒙語)を知りて居りき。呪したるに、風雨
能はずして溝の裏に倒るゝと、上帝に愛まれざりき。我等「こ
言ひ合ひて潰えけり。(札荅の事は、較耕錄卷四に「往往見蒙古人之禱雨者、惟取淨水一盆、浸石子數枚而已。其大者若雞卵、小者不等。然後默持密呪、將石子淘漉玩弄。如此良久、輒有雨。石子名曰鮮荅、乃走獸腹中所產。獨牛馬者最妙。恐亦是牛黃狗寶之屬耳。金幼孜の北征錄に「永樂八年五月二十八日、發雙清源、午至河、縛筏渡水、得木板、上有虜字、譯史讀之、乃祈雨之言也。虜語謂之札達華言云、詛風雨、蓋虜中有此術也。東華錄に載せたる康熙五十六

諸部の潰走

年の勅諭に、書冊所載、所謂雷斧雷楔、大約得自深林者、皆石、得自平原者、皆銅、朕所得最多。將小石一塊、置於泉水、攪之、即可祈雨。蒙語謂之查達齊書冊則曰查達也。方觀承の松漠草詩の注に、蒙古西域祈雨、以橙達石、浸水中、呪之、輒驗。橙達生駝羊腹中、圓者如卵、扁者如虎脰、在腎似鸚鵡嘴者、良色有黃白。駝羊有此、則漸羸瘠。生剖得者、尤靈。などあり。この迷信は、古に起りて、今も變らずにありと見ゆ。

乃蠻の不亦嚕黑罕は、阿勒台山の前なる兀魯黑塔黑(親征

兀魯塔山)を指し、離れ動きけり。(阿勒台山は、古の金山、清一統志の阿爾泰山にして、綿互二千餘里、その最

大幹は、烏布薩諾爾の西北に在り。清露兩國の界をなし、科布多城の北に當れり。古出兀惕乃蠻の王庭のありし兀魯黑塔黒の地は、阿勒台山の前、即ち南に在り。と云へば、即ち今の科箆兒乞惕の脱黑脱阿の子忽秃は、薛涼格河を指し、動きけり。幹亦喇惕の忽都合別乞は、林を争ひ、失思吉思を指し、動きけり。泰赤兀惕の阿兀出巴阿秃兒は、幹難河を指し、動きけり。札木合は、己を君に戴きたる民を虜ふるに、額兒古捏河に沿ひ、札木合は、回り動きけり。彼等をかく潰やし

成吉思汗の重傷
兀惕追擊

て、王罕は額兒古捏河に沿ひ札木合を追ひたり。(この時、札木合は蓋王罕に降り)成吉思合罕は、鞏難河の處に泰赤兀惕の阿兀出巴阿秃兒を追ひたり。阿兀出巴阿秃兒は、その部落の處に到るに、部衆を急がし動かして、阿兀出巴阿秃兒豁敦鞏兒長等の泰赤兀惕は、鞏難河のかなたの邊にあまたの楯(蒙語)秃刺思(明譯方牌)もてる軍士を整へて戦はんこと整へて立ちけり。成吉思合罕到るに、泰赤兀惕と戦へり。頗る返す返す戦ひて、晩になられて、その戦へる地に抗ひ合ひて宿れり。部衆も急ぎて來て又そこに軍士どもご一つに團をなして宿り合へり。

成吉思汗の重傷
を者勒篋の看護

成吉思合罕は、その戦ひの中に頸脈を傷けられて、血を止むれども止まらず、惱まざるゝ時、日落ちて、すぐ其處に抗ひ

裸盜人

合ひて下馬して、塞がれる血を者勒篋吮ひ吮ひ口を血まみれにして、者勒篋は他の人に頼らず、守り合ひて居て、夜半になるまで塞がれる血を口に満たし嘔みては吐きて、夜半を過ぐれば、成吉思合罕心醒めて言はく、血乾きて了へり。喉渴けり、我ご云へり。そこより者勒篋は帽靴上衣下衣都てを脱ぎて、只禪ある赤裸にて、抗ひ合ひて立てる(陣ど)敵の内に走りて、かなたに團をなせる民の車に上りて、馬乳を尋ねて得ずして……敵は急げる時、騾馬を乳擠らずに放ちたるなり。馬乳を得かねて、一つの大なる蓋桶の乳酪をその車より取りて擡げて來ぬ。その間往くにも來るにも人に見られざりき。上帝は只護り給ひたるぞ。乳酪の蓋桶にあるを持ち來

て、その者勒篋自ら水を尋ねて持ち来て、乳酪を調合して合
 罕に飲ませたり。三たび休みて飲みて、合罕言はく「我が心眼
 明るくなれり」と云ひて、欠し起きて坐わりつゝ、日明けて明
 るくなりて見れば、その坐われる周囲は、者勒篋の吮ひ吮ひ
 塞がれる血を吐きたる周囲は泥濘ひぢりとなれりけり。成吉思合
 罕見て言はく「こは何となれる。遠く吐かばいかにありけん」
 と云へり。それより者勒篋言はく「爾の惱まざるゝ時、遠く去
 らば爾より離れんことを怕れて、急ぎて嘔むをば嘔みて、吐
 くをば吐きて、遽てて我が腹にも幾ばくかは入りぬ」と云へ
 り。成吉思合罕又言はく「我がかくなりて臥し居る程に、赤裸
 にて何ぞ走りて入りたる。汝捕へられば、我をかあるを告

げざらんや」と云へり。者勒篋言はく「我が心には、赤裸にて往
 きて、もし捕へられば、我汝等に投ずる心ありき。覺りて捕へ
 て殺さんこて、我が衣服都てを脱ぎて、只禪を脱がざるに忽
 ち遁れて、汝等の處にかく馳せて來ぬ。我言はん「考へ」なり
 き。我を實まこととなして、衣服を我に與へて世話するならん。我馬
 に乗りにて見つゝ、かゝる閒あひだに來ざるこごあらんや、我しか思
 ひて、合罕の渴き惱める心を愈さんこて、眼黒く膽太かく思
 ひて往きけり。我言はく「成吉思合罕言はく「今何をか云へ
 る。前の日三つの篋兒乞惕來て、不兒罕嶽を三たび遶らしめ
 たる時、我が命を一たび持ち出てたりき。汝今又乾きてあ
 る血を口にて吮ひて、我が命を開きたり。汝又渴きて惱み居

者勒篋の三つの
思

る時、命を棄てて、敵人の處に眼黒く入りて、入物足りて我が命を入らしめ(とりめ)たり、汝、汝がこの三つの恩を我が心の内に存せん」と勅ありき。

日明けたれば、抗ひ合ひて宿れる軍士ども、夜便ち潰えたりき。團をなしたる民は、逃るゝ能はずこて、團をなしたる地より動かざりき。走れる部眾を止めんこて、成吉思合罕は、宿れる地より出馬して、走る民を止めつゝ、行く時、峠の上に一人の紅き上衣の婦人、帖木眞よこて大聲に喚び、哭きつゝ、立てるを、成吉思合罕自ら聽きて、いかなる人の妻にてかく喚びたる「ご問はせに人を遣りぬ。その人往きて問ひたれば、その婦人言はく、鎖兒罕失喇の女、我合荅安と云ふもの。我が夫

帖木眞を喚べる
合荅安

後れて來ぬる鎖
兒罕失喇

をこゝに軍士ども拏へて殺したり。夫を殺さるゝ時、帖木眞を、我が夫を救ひ給へこて、叫びて喚びて哭きたり、我「ご云へり。その人來て、成吉思合罕にこの言を述べれば、成吉思合罕この言を聽くこ馬を走らして到りて、成吉思合罕は、合荅安の處に下りて抱き合へり。彼の夫をば我等の軍士ども先に殺したりき。かの民を引戻すこ、成吉思合罕の大軍は、すぐ其處に下馬して宿れり。合荅安を召びて來させて傍に坐るたり。明くる日鎖兒罕失喇者別(親征錄 哲別 元史また遮別折不哲伯 元史また闊別栢柏など)二人(即ち)泰赤兀惕の脱朶格の家人なるその二人も來ぬ。成吉思合罕は、鎖兒罕失喇に言へらく「頸の上の重き木を地に去てさせたる衣領の上の枷の木を免れさせたる汝等父子

札合

札合必牙勒

札合亦剌兀勒

古生澤

坤都

闊薛兒

ごもの恩ありしぞ、汝等いかでか後れたる、汝等云へり。鎖
 兒罕失喇言はく「我心に見在倚仗に思ひて居りき。いかんぞ
 急がん、我急ぎて先に來ば、我が泰赤兀惕の官人等、我が殘れ
 る妻子馬羣糧食を灰の如く廢滅せん、彼等云ひて急がず、
 今合罕の處に合はんご追掛けて來ぬ、我等云へり。語り了
 ふれば、善しと云へり。

戰馬を射たる者
 別那顏

又成吉思合罕言はく「闊亦田に對陣して挑み合ひ勢揃し
 合ひて居る時、彼の嶺の上より箭來て、我が戰ふ口白き黃馬
 の鎖子骨を折るべく、誰か射ける、山の上より云へり。その
 言につき者別言はく「山の上より我射けり、今合罕に死なし
 められれば、掌の如き地を汗して殘らん。恩賜せられれば、合罕の

前に、深き水を横ぎり、光る石を碎くべく衝きて與へん。到れ

ご云ふ地に、青石を破り、出でよと云ふ地に、黒石を裂くべく

衝きて與へん。云へり。成吉思合罕言はく「敵となりたる人

は、殺したることを敵對したることを、身を隠して、話を諱み

て、怖るゝなり。この事こそは云へば、却て殺したることを、

敵對したることを諱まず、却て告げたり。伴ごすべき人なり。」

只兒豁阿歹云ふ名なりき。我が戰ふ口白き黃馬を鎖子骨

を射たる故に、者別ご名づけて戰はしめん、彼をこて、者別ご

名づけて「我が前に行け」と勅ありき。戰ふ口白き黃馬蒙語に、者別列古阿蠻

察罕、忽刺。者別列古は戰ふ、阿蠻は口、察罕は白き、忽刺は黃馬なり。者別列古

を賜ひたるなり。然るを、明譯文に、者別軍器之名也とあるは、本文の意に非し。者

ざる上に、俗文譯の文體に似ず。後人のさかしらに、加へたるものなるべし。

別、泰赤兀惕より來て伴ごなれる緣由かくあり。

成吉思汗實錄卷の四終り。

成吉思汗實錄卷の五。

成吉思合罕は、そこに泰赤兀惕を虜へて、泰赤兀惕の骨ある人を、阿兀出巴阿秃兒（親征錄は、前後に阿兀出拔都と云ひ、こゝには忽朱巴哈都兒と云ひ、こゝには昂忽兀忽出と云ふ。その實は同じ人なり。元史は阿兀出を省きてたゞ沈忽と書きたれば阿兀出とは益遠ざかれり。）豁團幹兒昌（卷四の豁團幹兒長）忽都兀荅兒（親征錄）忽都荅兒（親征錄）等なる泰赤兀惕を、子孫の子孫に至るまで、灰の如く刮き拂ひ誅滅せり。彼の部落の民を動かして來て、成吉思合罕は、忽巴合牙（親征錄）忽八海牙山（忽八海牙山）に冬籠せり。

主君を撃へたる
失兒古額禿翁

成吉思汗實錄卷の五

一四〇

你出古惕巴阿嚙(中の一部)の失兒古額禿翁不堅(失兒古額禿翁親征錄)

元史失力哥也不干(伯顔の傳)は阿刺黑(親征錄)伯阿刺(親征錄)納牙阿(親征錄)

乃牙なる子ごもご泰赤兀惕の官人塔兒忽台乞哩勒禿黑林

に入りて居るを讎ある人なりきご云ひて馬に乗ること能

はざる(明からたことざるあたはるしう)馬塔兒忽台を拏へて車に載せて失兒

古額禿翁は阿刺黑納牙阿なる子ごもご塔兒忽台乞哩勒禿

黑を拏へて來る時塔兒忽台乞哩勒禿黑の子ごも弟ごもは

奪ひて取らんごて追驅けて來ぬ彼の子ごも弟ごも追驅け

て來るご失兒古額禿翁は起つご能はざる塔兒忽台を車

の上に上りてその仰むける上に跨り坐して刀を出して言

はく爾の子弟らは爾を奪ひて取りに來ぬ爾を我が主君を

塔兒忽台の子弟
の追殺

失兒古額禿翁の
脅迫

手に掛けたりご云ひて殺さずごも主君を手に掛けたりご

て殺さん殺すごも亦只殺されん我但その死の中に償ひを

取り死なん(明)我殺你也死不殺你也死不如先殺了你我然後

死(しるるに)ご云ひて跨りて大なる刀にて彼の喉を切らんごする

時塔兒忽台乞哩勒禿黑大なる聲にて弟ごも子ごもに叫び

て言はく失兒古額禿翁は我を殺さんごす殺し了へば死にた

る命なき我が身を取りて去りて何かせん汝等我を殺さざ

るに疾く回れ帖木眞は我を殺さじ帖木眞を小き時に眼に

火あり面に光ある子(ご)なりきごて主なき營盤の裏に遣りて

ありごて取り去りて伴れ來て習はせられたれば習ふ如くなり

ごて新しき三歳二歳の駒を習はす如く習はし教へ行きた

成吉思汗實錄卷の五

一四一

り死なしめんご云へごも、死なしむる能はざりき、我今彼の情に入りてあり、彼の心は開けてあり、言はるゝなり。帖木眞は我を死なしめじ、汝等我が子ごも、弟ごも、疾く回れ、然らずば、失兒古額禿は、我を殺して遣らん、ご云ひて、大なる聲にて叫べり、彼の子ごも、弟ごも、言ひ合へらく、父の命を救はん、ごて來ぬ、我等失兒古額禿彼の命を死なしめ了へば、空しき命なき彼の身を何かせん、我等却て殺さざるに疾く回らん、ご云ひ合ひて回れり、彼等を去らしめ、(彼等去り)たる時、阿刺黑納牙阿なる失兒古額禿翁の子ごも、離れたる者ごも來ぬ、其等に來らるゝご、動きて來るに、途に忽禿勒訥兀(忽禿勒の隅)に到れば、そこに納牙阿言はく、我等この塔兒忽台を拏へて到ら

塔兒忽台の子弟のたいもどり

納牙阿の明智

ば、成吉思合罕は、我等を、正主の君を手に掛けて來ぬ、ご云ひ、成吉思合罕は、我等を、正主の手に掛けて來ぬるもの、何ぞ倚信すべき人ならん、此等は、我等の處に、いかにぞ伴ごならん、伴ごなる無き人、正主の君を手に掛けてたる人をば、斬らしめん、ご云て、斬らしめられんか、我等却て塔兒忽台を、此處より放ちて遣りて、我等身を以て、成吉思合罕に力を與へに來ぬ、我等ご云ひて、往かん、塔兒忽台を拏へて來つ、正主の君を廢てかねて、視るごい、いかにぞ死なしめん、ご云ひて、放ちて遣りて、我等、誠實に力を與へん、ごて來ぬ、我等ご云はん、ご云へり、納牙阿のこの言を、父も子ごも、善しごし合ひて、塔兒忽台乞哩勒禿黑を、忽都忽勒の隅より放ちて遣りて、その失兒古

額秃翁は、阿刺黑納牙阿なる子ごもこ來ぬれば、いかで來て
 こ云へり。(のては、つる)失兒古額秃翁は、成吉思合罕に申さく「塔
 兒忽合乞哩勒秃黑を拏へて來らるに、却て正主の君を視る
 こ、いかんぞ死なしめん」こ云ひて、廢てかねて、放ちて遣りて、
 成吉思合罕に力を與へんこて來ぬ」こ云へり。その時成吉思
 合罕言はく「君を塔兒忽合を手に掛けて來つるならば、正主
 の君を手に掛けてたる人を汝等を族を擧げて斬らしめらる
 るなりき、汝等正主の君を廢てかねたる汝等の心善くあり」
 こ云ひ、納牙阿を恩賞せり。

納牙阿等の心を
成吉思汗の慶賞

札合敢不の來降

その後成吉思合罕の處に、客唎亦惕の札合敢不(親征錄元
史本紀)札
 阿紺孛(札哈堅普)は、帖兒速惕(卷六の忽兒班帖
列速惕親征錄)塔刺速野(塔刺速野)に居る

王罕也速該の安
答の交り

處に伴こなりに來ぬ。彼の來ぬる時、篋兒乞惕戰ひに來つれ
 ば、成吉思合罕、札合敢不は、便ち戰ひて退けたり。その時土綿
 秃別干(萬の秃別干
部親征錄)土滿土伯夷部(元史完澤の
傳土伯燕氏)斡鑾董合亦惕(たの
董合亦惕部
親征錄元史董哀部)潰えたる客唎亦惕の民も、成吉思合罕に投
 じて來にけり。客唎亦惕の王合罕(即ち王罕。
親征錄)汪可汗(こそは先
王罕也速該の安
答の交り)に也速該合罕の時に、中好く平かに住み合へる頃也速該罕
 こ安答こ云ひ合ひたりけれ。彼の安答こ云ひ合ひたる緣故
 は、王罕はその父忽兒察忽思不亦嚕黑罕の(親征
錄)忽兒札胡思
 盃祿可汗(元史は、可汗の
二字を省けり)弟ごもを殺すの故に、古兒罕(親征
錄)菊兒
 可汗(元史)なる叔父と敵に爲り合ひて、合刺溫合卜察勒(合刺
溫の
隘處親
征錄)合刺溫隘(元史、哈
刺溫隘)に鑽り入りて、百人にて出でて、也速該

罕の處に來つれば、也速該罕は、彼に己が處に來られて、己が軍にて出馬して、古兒罕を合申(錄河西の轉親征)の地に逐ひて、彼の人民住具を王罕に取りて與へたる故に、安荅を爲り合へること然り。

客喇亦惕の内亂

王罕の逃げ走り

その後王罕の弟額兒客合喇(親征錄元史)也力可哈刺は、王罕兄に殺さるゝを逃れて去りて、乃蠻の亦難察罕(親征錄元史)亦難赤可汗(元史部長亦難赤喇失惕に依れば、乃蠻の亦難察罕の父)の處に投じけり。亦難察罕は、軍士ごもを遣りて、さて王罕は、三つの城(三城は、即ち三國にて、唐忽惕畏忽惕合兒魯兀惕)に沿ひ去りて、合喇乞荅惕(合喇乞丹の複稱、即ち西遼親征錄元史契丹、元史また)の古兒罕(親征錄元史)菊律可汗(元史曷思麥里の傳、西遼主鞠兒可汗、即ち西遼の葛兒罕直魯古)の處に往きたりき。(札合敢不等の成吉思汗に)そこより背きて、畏忽惕(元

父の友に對する成吉思汗の厚遇

兒の複稱、唐書の畏吾兒(唐書の黨項)の城を過ぐるご、五匹回紇、親征錄元史、の粘癩を拘へて、乳を擠り合ひて、駱駝の血を刺して飲み、困窮して古薛兀兒納兀兒(古薛兀兒、湖親征錄元史)曲薛兀兒澤(來つれば、成吉思合罕は、先に也速該罕と安荅と云ひ合ひたる緣故にて、塔孩巴阿秃兒(卷三の塔孩、親征錄元史)速客該者溫(親征錄元史)雪也垓(二人を

王罕の部下の怨言

そこに王罕の弟ごも官人ごも便ち言ひ合へらく、我等の此の罕阿合(罕兄)は、乏しき性あり、臭き肝を懷きて行くなり。

兄弟を殺せり。合喇乞答惕にも入りたり。又部眾をも苦めたり。今これをいかに爲ん、我等先の日を云へば、七歳なるを篋兒乞惕の民虜へて去りて、黒き花紋の粘纏の裘を着せて、薛涼格の河邊の不兀喇客額兒にて篋兒乞惕の確を擣きたり。忽兒察忽思不亦嚕黑罕なる彼の父は却て篋兒乞惕の民を破りて、その子をそこに救ひて來つれば、又塔塔兒の阿澤罕は、十三歳なるを母ごめに又虜へて去りて、駱駝を牧はしめ行く時、阿澤罕の羊飼を率ゐて逃れて來たるぞ。又その後乃蠻より怕れて躲れて、撒兒塔兀兒（中亞細亞の抹哈篋惕教徒なる撒兒惕人の地なる垂木噠（垂河、唐書の碎葉河、西遊記の吹河、今の吹河））に合喇乞答惕の古兒罕の處に往きたるぞ。そこに一年を盡さず、却て背き動きて、委

士卒を誑れる人の縛られ

兀惕（前の畏）唐兀惕（前の唐）の地に沿ひて行くに、困窮して、五匹の粘纏を拘へて乳を擠りて、駱駝の血を刺して飲み、一つ盲（目）の黒鬣の黃馬（蒙語）合哩溫抹鄰（明旁譯黒鬣尾黃馬）にて、困窮して帖木眞なる子の處に來つれば、科斂を斂めて養へるぞ。今帖木眞なる子の處にかく行きたるを忘れて、臭き肝を懷きて行くなり。いかに爲ん、我等云ひ合へり。かく言ひ合へる言を、阿勒屯阿倏黒（親征錄案敦阿述）は、王罕に訐きけり。阿勒屯阿倏黒言はく、我もこの相談に入り合ひたりき。却て己が君を爾を捨てかねたり。云ひて、そこに王罕は、かく言ひ合ひたる額勒忽秃兒（親征錄元史）燕火脫兒（親征錄）渾八力（阿鄰大石（親征錄）納隣太石（後に阿隣））など、弟ども官人どもを拏へさ

せけり。弟おともより札合敢あか不おは躲のがれて、乃蠻ないまんに入りけり。（札合は、王罕の西遼に走れる時、成吉思汗に降りしが、王罕歸）彼等かれらを繩なは繫かけ房へに入いらしめて、王罕わんかん言いはく、我等われら委う兀惕唐兀惕とんたつの地ちより來きつる時とき、何なにこか云いひ合あひし。汝等なんぢらの如ごとく何なにをか思おもはん、我われは「こ云いひて、彼等かれらの面おもてに唾つばして、彼等かれらの縛しばりを解とかしめたり。罕かんに只唾つばせられて、房へに居をる人ひと都すべてにて起たちて唾つばしけり。

四部の塔塔兒の征伐

その冬ふゆ籠こもりして、狗いぬの年とし。（我が建仁二年壬戌、金の泰和二年、宋の嘉泰二年、西紀二一〇二年、成吉思汗四十一歳の時）
 の秋あき、成吉思合罕せいしあかんは、察阿安塔塔兒しやくああんたたに。（親征録）察罕塔塔兒しやくかんたたに。（喇失惕兒）
 阿勒赤塔塔兒あれるしやたたに。（元史）案赤塔塔兒あんしやたたに。（親征録）都塔兀惕塔塔兒とたつとつたたに。（喇失惕兒）
（喇失惕兒、秃克魯、魯惕塔塔兒）阿魯孩塔塔兒あろがいたたに。（朶遜、別勒奎塔塔兒、額兒忒曼也勒奎塔塔兒）それらの塔塔兒たたに、（魯惕塔塔兒）阿魯孩塔塔兒あろがいたたに、（親征録）答蘭捏木兒哥之野たらんねむにのに對陣たいじんして戰たたかふ。

答蘭捏木兒格思の戦

ふ前に、成吉思合罕せいしあかんは、軍法ぐんぽうを言いひ合あへらく、敵人てきじんに勝かたば、財たからの處ところに勿な立ちそ。勝かち了をへば、その財たからは、我等われらの物ものなるぞ。分わかち合あふぞ、我等われら敵人てきじんに退しりぞけられれば、初はじめての衝つきだしたる地ところにて回かへり戰たたかはん。初はじめての衝つきだしたる處ところにて回かへらざる人ひとをば斬きらしめんとて、軍法ぐんぽうを定まめ合あへり。答蘭捏木兒格思たらんねむにのに戰たたかひて、塔塔兒たたにを動うごかせり。勝かちて、兀勒灰失魯格勒わくがいしるく只惕しやとにて、彼等かれらを、彼等かれらの國くにに集あつめて虜とらへたり。（兀勒灰河と失魯格勒只惕河、と合流する處、親征録、元史）兀魯回失連わろくわいしれん、（親征録）兀魯回失魯出兒わろくわいしるしゅ、（親征録）只惕河しやとがは、（水道提綱）據よるに、蘆河ろがは土名どなは、烏南うなんに流ながれ、烏爾穆秦うるもせい左翼さよくの東ひがしを經へて、西にしに折まれ、色野爾濟河しよにるせいに合あひ、右翼うよくの界かいに入いりて、涸かわる。烏爾穆秦うるもせい一統志いつとうしの圖ずに、吳兒灰河ごにがはとあり、即すなはち兀勒灰河わくがいなり。色野爾濟しよにるせいは、即すなはち索岳爾濟さくたつにるせいにして、山やまの名なも、河がはの名なも同じ。この色野爾濟河しよにるせいは、即すなはち失魯格勒しるく、只惕河しやとなり。魯ろと惕てきとを失うひ、格かくは野のに轉まじて、失野勒しつよれ、即すなはち色野爾濟しよにるせいとなれり。露西亞ろしやの地圖ちずには、烏爾灰うるがひを烏拉圭うらけいとし、色野爾濟しよにるせいを蘇攸勒奇そけいれきとし、二河合ふたがはあ流ながして、昌克圖布利圖湖しやうかくとふりんとこに入りて止とまり、烏珠穆沁うしゆもせい右翼うよくの界かへは流ながれ、往むかはず。成

阿勒壇忽察兒答
哩合の軍法違犯

吉思汗の勝ちて進みたる處（察罕塔塔兒（前の察阿）阿勒赤塔塔兒都
はその湖水の北なるべし。塔兀惕塔塔兒、阿魯孩塔塔兒、重要なる民をそこに滅して、軍
法を言ひ合ひたる言に、阿勒壇忽察兒答哩合（親征錄 族人案
彈火察兒答力台（三人、言に遵はず、財の處に立ちけり、言に遵
はざりき（こて、者別、忽必來（親征錄 虎必來、折別）二人を遣りて、掠
めたる馬羣、何にても取りたる都てを取らしめたり。

塔塔兒屠戮の密
議

塔塔兒を滅して虜へ了へて、彼等の部落人民を如何せん
こて、成吉思合罕は、大評議を一族にて一の房に入りて議り
合へり。議り合へらく、先の日より塔塔兒の民は、御祖なる父
を失ひたるなりき。御祖なる父の讎復して、怨報いて、車轄に
比べて屠りて殺して與へん（明可將他男子似車轄大的盡誅

別勒古台の密議
漏し

了。絶ゆるまで屠らん。残れるを奴婢させん。各に分け合は
ん（こて、評議定め合ひて、房より出づれば、塔塔兒の也客扯噠
は、別勒古台に、いかに評議を議り合へる（こ問ひけり。別勒古
台言はく、汝等を都てを車轄に比べて屠らん（こ云ひ合へり）
こ云ひき。別勒古台のこの言にて、也客扯噠は、塔塔兒の處に
傳説を放ちて、寨に據りき。寨に據りたる塔塔兒の處に我等
の軍士ども攻むる（こなり、甚だ損失しけり。寨に據れる塔塔
兒を辛苦して降して、絶やささん（こ車轄に比べて屠る時、塔塔
兒言ひ合へらく、人（ここに袖の裏に刀を袖にして、償ひを取
り死なん（こ云ひ合ひて、又甚だ損失しけり。かく塔塔兒を車
轄に比べて屠り了へて、そこに成吉思合罕あり、我等一族

にて大評議を定め合ひたるを別勒古台の告げたる故に、我等の軍士ども甚だ損失せり。この後大評議の處に別勒古台勿入り。評議畢ふるまで外にある者を治めよ。治めて鬪殿の事を盜賊詐譎に係る事を裁斷せよ。評議畢らば、進酒を飲みたる後に、別勒古台、荅阿哩台（前の荅哩台、卷一卷三）二人そこに入れ、勅ありき。

そこに塔塔兒の也客扯噠の女也速干合屯（元史后妃表）也速干皇后を成吉思合罕はそこに取れり。寵でられたる故に、也速干合屯言はく、合罕恩賜せば、我を罕の一人に物になして畜ひ給へり。我よりは、姊也遂云ふもの我より高く、罕の人に適へるものなるぞ。この頃壻を壻ごりたりき。今は蓋この

也速干合屯の姊
思ひ

騷動の裏いづくにか去れらん。云へり。この言につき、成吉思合罕言はく、汝の姊、汝より善くあるならば、尋ねさせん。姊を來なば避けて與へんか。汝（明譯）肯將你位子讓與麼。云へり。也速干合屯言はく、可罕恩賜せば、姊を只見ば、姊を避けん。云へり。この言により、成吉思合罕は、勅を傳へて尋ねさせたれば、妻されたる壻と共に林に入りて行けるに、我等の軍士ども遇ひき。彼の夫は走りき。也遂合屯（元史后妃表）也速皇后をそこに取り來ぬ。也速干合屯は、姊を見るに、先に言へる言に遵ひ、起ちて坐れる位に坐ゑて、その己は下に坐れり。也速干合屯の言に倣ひて、成吉思合罕は、情を入れて、也遂合屯を取りて、列位に坐ゑたり。

塔塔兒の民を虜へ畢へて、一日成吉思合罕は、外に坐りて酒飲み合ふに、也遂合屯也速干合屯二女の間に坐りて酒飲み合ひ居る時、也遂合屯大に歎きたり。そこに成吉思合罕は、心に想ひて(明疑惑了)、孛斡兒出、木合里等官人眾を喚びて來させて言はく、汝等此の只聚れる人都てにて部落部落に立て己より別なる部落の人を別に離れしめよと勅ありき。かく部落部落に立ちたれば、一人の年少き善き爽かなる人、部落ごもより別に立たり。汝は何人なるか、と云へば、その人言はく、塔塔兒の也客扯噠の也遂と云ふ女を與へられたる塔人なりき、我敵に虜へらるゝ時、怕れて逃れて行きて、今鎮れるぞこて來て、あまたの人の中何ぞ認められん、と云ひて

行きけり、と云へり。この言を成吉思合罕に奏したれば、勅あり、只又敵せんと思ひて劫賊となりて行きけり。今何を窺ひにか來し、彼が如き者ごもは、車轄に比べたり。何ぞ疑はん。目の背處(目に見えぬ處)に棄てよ、と云へり。尋で斬らしめたり。

王罕の篋兒乞惕征伐

その狗の年、成吉思合罕の(このは原文に「を」を「た」塔塔兒の民の處に出征したる時、王罕は、篋兒乞惕の民の處に出征して、脱黒脱阿別乞を、巴兒忽眞脱窟木(親征錄元史)、巴兒忽眞之隘(卷一の闕勒巴)に逐ひて、脱黒脱阿の、大子脱古思別乞(親征錄)、土居思別吉を殺して、脱黒脱阿の、忽秃黑台察阿、諭二女なる彼の女ごも、(親征忽都台察勒渾二哈敦の、女の名を合屯)彼の妃ごもを取りて、忽圖赤刺溫(親征錄)、和都赤刺溫二人なる彼の子どもを、民ごめに虜

へて、成吉思合罕に何も與へざりき。

成吉思汗王罕の
乃蠻征伐

その後成吉思合罕王罕二人、乃蠻の古出古惕(乃蠻の分部の古出古惕)の亦魯黑罕の處に出征して、兀魯黑塔黑(親征兀魯塔山)の鎖豁黑兀孫(鎖豁黑の水親征錄)莎合水(今の科布多河の上流なる索果克河)に居る處に到りて、不亦魯黑罕は對陣する能はずして、阿勒台山(今の科泰の東南なる阿爾)を越え動きたり。鎖豁黑水より不亦魯黑罕を襲ひて、阿勒台山を越えさせ、忽木升吉兒の兀嚨古河(劉郁の龍骨河、西域水道記の烏隆古河)に沿ひ追ひて行く時、也廸土卜魯黑(親征錄也的)脱孛魯(云ふ)彼等の官人斥候に行きて、我等の斥候に追はれて、山の上(やまの上)に走らんごし、肚帶(はらおび)を斷たれて、そこに拏(とら)へられき。兀嚨古河(湖、親征錄元史)に沿ひ追ひて、乞失勒巴失納兀兒(乞失勒巴失の黒)

辛八石之野(西使記の乞則里八寺水道提綱の奇薩爾巴思鄂模、西域水道記の噶勒札爾巴什淖爾、また赫色勒巴什淖爾)に馳せ到りて、不亦魯黑罕をそこに窮(きま)めたり。

王罕の心變り

そこより成吉思合罕王罕二人回りて來る時、乃蠻の戰(善く)可克薛兀撒卜喇黑(親征錄、元史)曲薛吾撒八刺(巴亦荅喇黑)別勒赤兒(巴亦荅喇黑の納)拜荅刺邊只兒之野(水道提綱、貝德勒克、蒙古遊牧記、拜達里克河の庫倫伯勒齊爾、この伯勒齊爾は拜達里克河と查克河との落合なり)軍を整へて戰はんごしけり。成吉思合罕王罕二人は戰はんごて軍を整へて到りて、夕暮(ゆふぐれ)になられて、朝(あした)に戰はんごて陣列(ちんれつ)にて宿(やど)れり。そこに王罕その陣處(ちんじよ)に火を燒かせて、夜便(よるすまは)ち合喇薛兀勒河(親征錄)に哈薛兀里河(哈の下、刺の字脱ちたり)、沂(まがほ)りて動きけり。

札木合の讒言

そこに札木合(關亦田の戰に敗れ、額兒古捏河にて王罕に)王罕(降りてより、王罕の伴となりて居たれば)王罕(王罕)

共に動き合ひて行く時、王罕に札木合言へらく「帖木眞なる我が安答は先より乃蠻の處に使聘ありき。今は來ず。罕罕居る白翎雀にて我はあるぞ。渡る告天雀にて我が安答はあり。乃蠻に往きしぞ。投ぜんとして後れたり」と云ひき。（親征時札木合在幕下、日出望見汪可汗立旗幟非舊處馳往問之曰王知悉否我昆弟如野鳥依人終必飛去余若白翎鵲也棲息幕上寧肯去乎我嘗言之矣。元史札木合言於汪罕曰我於君是白翎雀他人是鴻雁耳。白翎雀寒暑常在北方。鴻雁遇寒則南飛就暖耳。意謂帝心不可保也。白翎雀合余嚙合納。明譯白翎雀兒訶渥兒斯の孩兒合納、鵲と譯し、果勒思、孩兒合納、海鷗と譯せり。今元史に從へり。駁耕錄雌雄和鳴自得其樂と必勒都兀兒、明譯告天雀兒、訶渥兒斯の重譯野鷺即ちあり。告天雀は蒙語、必勒都兀兒、雁類洪鈞の重譯寒暑異棲之鳥、明の茅元儀の武備志なる韃靼方言に「叫天兒を賓堵兒と云ふとある。賓堵兒は即ち必勒都兀兒なり。爾雅の釋鳥に「鵲、天鵲、その郭注に「大如鵲、雀色似鵲、好高飛、作聲、江東呼爲天鵲、正字通に「鵲、俗呼告天鳥、其鳴如禽、形醜、善鳴、聲高、多韻、至順鎮江府志に「噪、天文名、告天、似雀而稍大、愈鳴則飛、愈高、力乏、則自空投地、伏於草中、方濬頤の夢園叢說に「叫天子、栖海濱、叢草之中、遇天中晴朗、飛鳴直上、雲霄連綿不已、翻身而下、終朝若是、吾天雀も叫天兒も天鵲も天鷗も噪天も告天も叫天子もみな鵲の異名にして、我がひばり即ち雲雀なり。元史の鴻鴈訶渥兒斯）札木合のこの雁類にても文義は通ずれども原語の意とは異なり。」 札木合のこの言につき、兀ト赤黒台（喇失惕の集史）兀ト赤兒（紅果の名古鄰顔赤きが）古鄰巴阿禿兒（親征錄）曲憐拔都言はく「詔ひて何ぞ彼の善き兄弟を讒し言へる」と云へり。

白翎雀と告天雀

成吉思汗の離れ還り

成吉思合罕、夜はすぐ其處に宿りて、戦はんこて明日の朝日明けて王罕の陣處を見れば、無くなられて、此等は我等を燒飯としけり。（明）他將我做燒飯般撒了。（喇失惕の史には、我今火坑中在るを王罕棄てたり。親征錄には、此輩無乃異志乎）と云ひて、そこより成吉思合罕は動きて、額迭

成吉思汗實錄卷の五

兒阿勒台の納(即ち)にて渡りて(親征)也迭而案臺河(この河の名の東北幹山なる唐努嶺の東麓より出づる伊第爾河また額德爾河に同じく、その河股は額德爾河と齊拉圖河との落合を指せるに似たり。されども色楞格河の上流の地はこの時乃蠻の塔陽罕に屬して、その勢未だ衰へざれば蒙古の兵そこを通るに由なし。又その地は拜達里克河の河股の北三度ほどにあれば拜達里克河より土拉河の方に向はんとする時道を曲げてそこを通るべき筈なし。されば名の同じきは偶然の事にして、成吉思汗の渡れる河は他の處にあるし。)その動きたるに依り動きて、撒阿哩客額兒に下馬せり。

(親征)撒里川(客額兒は原にて川も河を中にせる原な)それより成吉思合罕合撒兒二人は、乃蠻の大槩を視て人ご算へざりき。

可克薛兀撒卜喇黑は、王罕の後より襲ひて、桑昆の妻子人民を住具ごめに虜へて率ゐて、王罕の帖列格禿阿馬撒兒(帖列格禿)にある一半の人民馬羣糧食を虜へて率ゐて回りき。列帖蒙古の南に在り、此の地は客喇亦惕の西に在れば同名の異地なるべし。すべて

可克薛兀撒卜喇
黒に王罕の襲は
れ

蒙古地方には、同名の地甚だ多し。帖列格禿の口も、この二處に限らず。露西亞の地圖に科布多城の西に帖列克特山あり。その山の北に帖列克特山口と云ふ所あり。これも阿馬撒兒なるべし。されどもその地は、古出兀惕乃蠻の腹地に在りて、客喇亦惕の民の居るべき所に非ざれば、本文なる隘口は今考ふべからず。
その戰の中に、篋兒乞惕の脱黑脱阿の忽圖赤刺温なる二人の子そこに居り、その民を率ゐて離れて、その父に合はんと、薛涼格河に沿ひ動きけり。

王罕桑昆を救へ
る四傑

可克薛古撒卜喇黑(前の可克薛兀撒卜喇黒)に掠められて、王罕は成吉思合罕に使を遣りき。使を遣るに、乃蠻に人民住具を妻子を虜へられたり、我子(なる汝)より汝の朶兒邊曲魯兀惕を(四つの史兵志また木華黎の傳に「撥里班曲律猶言四傑也」とあり)求めて遣りぬ。我が人民住具を救ひて與へよと云ひて遣りき。成吉思合罕は、そこに孛斡兒出、木合里(卷三の模合里)、孛囉忽勒(卷三の孛囉兀勒)、赤刺温、巴阿禿兒(卷二の赤老

王罕の感謝

博爾朮那顏、木華黎國王、博羅渾那顏、赤老溫拔都(この四傑を軍を整へて遣りぬ。この四傑を到らする前に、忽刺安忽惕(征)忽刺河山(に)にて桑昆は對陣となり、その馬腿を射られて捕へられんとして居る處へ、この四傑到りて救ひて、人民住具妻子都てを救ひて與へたり。そこに王罕言はく、曩に彼の善き父にかくの如く去り畢へたる部眾を救ひて與へられき。今又その子に去り畢へたる我が部眾を四傑に來て救ひて與へられたり。恩を報さんことを皇天后土の祐護知しめせご云へり。

王罕成吉思汗の父子の盟約

又王罕言はく也、速該巴阿禿兒なる我が安荅は、去りたる我が部眾を一たび救ひて與へたり。帖木眞子は、又去りたる

盟約の辭

我が部眾を救ひて與へたり。この父子二人、去り畢へたる部眾を我に收めて與へたるは、誰が前に(誰が)收めて與へんご骨折りたらん。我も今老いたり。我老いて高き處(天)に上らば。古りたり。我古りて山崖(地)に上らば、普き部眾を誰か管かん。我が弟ごもは、德行無くあり。我が獨子、無きが如き桑昆獨あり。帖木眞子を桑昆の兄ごなして、二人の子あるごなりて、休はんご云ひて、成吉思合罕ご、王罕は土兀刺の合喇屯(親征錄、土兀刺河上)に會して、父子ご云ひ合ひたり。父子ご云ひ合へる理由は、先に前の日也、速該罕額赤格ご、王罕は安荅ご云ひ合ひたる緣故にて、父の如しご云ひて、父子ご云ひ合ひたる理由かくあり。言(誓)の言ひ合へらく、多き敵の處に奔るには、共に

翰藥

包兀魯哈

一つに奔らん野の獸の處に圍獵するには、一つに共に圍獵せん。云ひ合へり。又成吉思合罕王罕二人言ひ合へらく我等二人を妬みて、牙ある蛇に咬されば、彼の咬しに勿入りそ。牙にて口にて言ひ合ひて信ぜん。大牙ある蛇に離閉せられば、彼の離閉を勿取り合ひそ。口にて舌にて證し合ひて信ぜん。云ひ、かく言を極め合ひて、親みて住み合へり。

姻談の不協

親しき上に重ねて親しくならん。成吉思合罕は思ひて、拙赤（成吉思汗の長子、親征録元史）朮赤（朮赤の子、親征録元史）に桑昆の妹察兀兒別乞（親征録、汪可汗之孫、秃撒合、元史）抄兒伯姫（親征録、汪可汗之孫、秃撒合、元史）を索むるに、桑昆の子秃撒合（元史は孫を子と誤れり）に我等の豁眞別乞（元史）火阿眞伯姫（元史）國大長公主火臣別吉（元史）を換ひ合ひて與へん。さて索むれば、そこに桑昆は己を大きく思ひて言

はく我等の親屬、彼等の處に往かば、門後に立ちて專に正面を望むなり。（明）俺的女子到他家阿、專一門後向北立地を云ふ。彼等の親屬、我等の處に來ば、正面に坐りて門後を望むなり。（明）他的女子到俺家阿、正面向南坐を云ふ。さて己を大きく思ひて、我等を見下し言ひて、察兀兒別乞を與へず、親まざりき。その言にて、成吉思合罕は、心の内に王罕、你勒合桑昆（桑昆、親征録）亦刺合鮮昆（二人に心後れけり）（心進まず協は）

札木合等の協議
讒言

かく心後れたるを札木合覺りて、猪の年の年（我が建仁三年癸亥、金三年、西紀一二〇三年、成吉思汗四十二歳の時）の春、札木合、阿勒壇、忽察兒、合兒、答乞、歹、額、不格眞、那牙勤（合兒、答乞、歹以下三名は、明譯に皆種族の名と）雪格額、台、脫幹、哩勒（親征）脫憐（成吉思汗の祖先の家奴）合赤溫、別乞（成吉思汗の弟なる合赤

温と異 彼等共に一つの協議をなして、起ちて往きて、者額 額
兒温都兒 者額親 兒の徹 徹兒 運都山元史折 折運都山明史韃 韃靼の傳な
の東北なる 徹徹 山に音は の陰に別兒 客額列 惕漢 親征錄沙 別里怯
似たれども いかゞあらん。の陰に別兒 客額列 惕漢 親征錄沙 別里怯
沙陀 に你勒合桑昆の處に往きて、札木合讒して言はく「帖木
眞なる 我が安荅は、乃蠻の塔陽罕の兄 親征錄太陽 可汗元史太
の處に 傳言あり使あるなり。彼の口には父子と云ひて居り、
彼の 性行は別なり。倚信して居るなり。汝等先圖らずば、汝等
に何ぞ 從はん。帖木眞安荅の處に出馬せば、我は横より入り
合はん と云ひき。阿勒壇忽察兒二人言はく「我等は、訶額命額
客の子を 兄をば殺して、弟をば棄てて與へん」と云ひき。額不
格眞 那牙勤合兒塔阿惕前の合兒 荅乞歹乞と阿 言はく「彼の手
合兒 荅乞歹乞と阿 言はく「彼の手
手取り 手取りて、彼の足を足取りて與へん」と云ひき。脱斡勒言は
く 思ふに、往きて帖木眞をその部眾を取らん。部眾を取られ
ば、部眾無くならば、何をかせん。彼等と云ひき。合赤温別乞言
はく「你勒合桑昆なる子。汝何をか思はば、長き梢深 底に
到り 合はん」と云ひて、
古嚙勒 批速
此等の 言を言はれて、你勒合桑昆は、父に王罕に彼等の言
を 撒亦罕脱迭親 延錄 寨罕脱脱干もて 言ひて遣りき。此等の
言を 言はれて、王罕言く「我が子を帖木眞を何ぞかく思へる、
汝等 今まで世話に彼より爲りて居て、今我が子をかく悪く
思は ば、上帝に愛まれざらん。我等札木合は、走作の言ある人
なり き。ごやかかくや語 勻不兀塔不兀言 ふなり明 札木合的 言

桑昆の線言に迷へる王罕の優柔

手取り 手取りて、彼の足を足取りて與へん」と云ひき。脱斡勒言は
く 思ふに、往きて帖木眞をその部眾を取らん。部眾を取られ
ば、部眾無くならば、何をかせん。彼等と云ひき。合赤温別乞言
はく「你勒合桑昆なる子。汝何をか思はば、長き梢深 底に
到り 合はん」と云ひて、
古嚙勒 批速
此等の 言を言はれて、你勒合桑昆は、父に王罕に彼等の言
を 撒亦罕脱迭親 延錄 寨罕脱脱干もて 言ひて遣りき。此等の
言を 言はれて、王罕言く「我が子を帖木眞を何ぞかく思へる、
汝等 今まで世話に彼より爲りて居て、今我が子をかく悪く
思は ば、上帝に愛まれざらん。我等札木合は、走作の言ある人
なり き。ごやかかくや語 勻不兀塔不兀言 ふなり明 札木合的 言

語誑誕不可信親征札木合巧言寡信人也不足信云ひて、
 喜ばずして遣りき。又桑昆言ひて遣るに「口あり舌ある人言
 ひ居るに、何ぞ信ぜられざらん」とて繰返し言ひて遣りて、聽
 かれずして、己身づから往きて言く「且爾がかくある時すら、
 我等を何ごも爲さざるなり」明你如今見存他俺行不當數。
 誠に又罕額赤格爾を白く捨かば、黒く噎ばば詞どほりに譯し
 合合阿速 撒察阿速 合喇答 合合阿速
 ず。蓋上の句は、病むを云ひ、下の句は、死ぬるを云ふならん。明譯には「若父親老了呵」忽兒察忽思不亦嚙
 黒罕なる爾の父の辛苦してかく收めて居たる爾の部眾を
 我等に管かしめんや。誰にも何ぞ管かしめんや」と云へり。そ
 の言に王罕言く「我が童我が子桑昆をいかに捨てん。今まで
 世話に彼より爲りて、悪く思はば善からんや。上帝に愛まれ

だましうちの際

ざらん、我等」と云ひき。その言に彼の子你勒合桑昆は憂へて、
 門を出でて去りき。却てその子桑昆の心を憐みて、喚びて來
 させて、王罕言く「上帝に蓋愛まれん、我等の子をいかに捨て
 ん」と云へり。汝等能く但取計らへ。汝等知れ明天莫不愛護
 麼。兒子行您怎生要棄捨您但去做可以勝得他的事您自知者」
 と云ひき。元史忠義伯八の傳に、王罕を怯列
 王可汗と桑昆を先覺と書けり。
 それより桑昆言はく「彼等こそは、我等の察兀兒別乞を索
 めたりけれ。今許婚の饗語不兀勒札兒元史布渾察兒許親酒原注にを
 喫ひに來よとて、日を約して喚びて來させてそこに拏へん」
 と云ひ合ひて、然りて協議を極め合ひて、察兀兒別乞を與
 へん。許婚の饗を喫ひに來よとて遣りぬ。喚ばれて、成吉思合

罕は、十人にて往くに、途にて蒙力克額赤格（親征、篋里哥、た、篋力也、赤可、里也、赤哥）の家に宿れば、そこに蒙力克額赤格言はく「察兀兒別乞を索むれば、彼等こそは、我等を見下して與へざりけれ。今いかんぞ特に許婚の饗を喫ひにこて喚びし。己を大きくなせる人特に柰何ぞ與へんこて喚びたりし。ごやかくやの心あり。我が子氣を附けて往くべし。春になりぬ。我等の馬羣瘦せたり。馬羣を養はん」こて辭みて遣らん。云ひて、成吉思合罕は「往かず、不台台乞喇台二人を許婚の饗を喫へ」云ひて遣りて、（録は、不花台乞察に遣りたる使とせり）成吉思合罕は、蒙力克額赤格の家より回りぬ。不台台乞喇台二人に到られたれば、覺られたり。我等。明日の朝圍みて拏へん」こ

云ひ合へり。

掩襲の謀を漏せる也。客扯噠の輕率。

かく圍みて拏へん」こて言を極め合ひたるを、阿勒壇の弟（阿勒壇は、忽圖刺合罕の子也。客扯噠は、忽圖刺の弟。忽圖也。客扯噠の子なれば、兄弟に非ず。弟は、從弟の義なり）也。客扯噠（親征也。可察合蘭）は、家に來て言へらく「明日の朝帖木眞を拏へん」云ひ合へり。この言を帖木眞に言傳を致し往く人をば、いかに但爲さるべき。云ひき。かく言へるにより、その妻阿刺黑亦惕（録は、親征の子とせり）言はく「その根無し。爾の言（明那泛濫言語、録、此無據之言）何なるらん。家人も眞ご爲さん」云ひき。かく噂せる時、その馬飼巴歹（親征、木華黎の元史、把帶、傳拔台）は、馬乳を送りに來て、この言を聽きて回りぬ。巴歹去りて、同役の馬飼乞失里黑に扯噠の言へる言を言ひき。（乞失里黑は、卷一の乞失黎黑）

なり。親征錄元乞力失と書き、失力を倒にせり。哈刺哈孫の傳には、曾祖啓昔禮史は誤りて、乞力失と云ひて、幹刺納兒氏なりとあれば、抄眞幹兒帖該の長子の裔) 乞失里黒言はく「我又往きて察せん」と云ひて、家に往きぬ。扯噠の子納鄰客延は、(親征察合蘭次子納隣。察合蘭の子としたり故に、納隣) 外に居て、箭を磋き居て言はく「只今我等は何を言ひ合へる。舌を取られん。誰が口を止めん」と云ひき。かく言ふに、納鄰客延は、又その馬飼に乞失里黒に言へらく「篋兒乞歹察合安(篋兒乞惕の白)阿蠻察合安客額兒(口白き驢馬)二匹を取りて引き來て手綱つけてよ。夜早く出馬せん[我]」と云ひき。乞失里黒去りて、巴歹に言へらく「只今汝の話を慥めたり。眞ごなりたり。今我等二人、帖木眞に報告を送り去らん」とて、言を極め合ひて、篋兒乞惕の白馬、口白き驢馬二匹を取りて來

巴歹乞失里黒の密告

て手綱つけて、夕に便ち房の内に一匹の子羊を殺して、床もて煮て(明譯將床木煮熟、親征拆臥榻煮熟) 篋兒乞惕の白馬、口白き驢馬二匹、目前手綱つけたるに乗りて、夜去りて、成吉思合罕に夜到りて、家の北(後即ち)より巴歹乞失里黒二人申して、也客扯噠の言へる言彼の子納鄰客延の箭を磋き居て言へる。ここ、篋兒乞惕の白馬、口白き驢馬二匹の驢馬を取りて手綱つけよと云へる言、都てを申して上げたり。又巴歹乞失里黒二人申さく「成吉思合罕恩賜せば、疑ひ無くあり。圍みて拏へん」とて言を極め合へり」と云へり。

成吉思汗實錄卷の五終り。

成吉思汗實錄卷の六。

成吉思汗の逃げ
走り

かく言はれて成吉思合罕は、巴歹乞失里黒二人の言を信じて、夜便ち近處に居る頼るべき者に話を爲して、輕き何物をも棄てて遁れ、夜便ち動きたり。卯温都兒（惡しき高運都兒地親征錄）山の陰に依り動くに、卯温都兒の陰にて兀帳罕（者勒篾豁阿に頼りて、者勒篾豁阿は、即ち者折里麥。豁阿は、媛なり。者勒篾は、何故阿に頼りて、勒篾なり。親征錄元史）折里麥（媛と號したるか知らず。）後方に殿をなし、斥候を放ちて動きて、かく動けるに依り、翌日の日の内に日傾ける頃、合刺合勒只惕額列惕に到りて憩

合刺合勒只惕の
沙漠の休息

はんご下馬せり。(この額列揚即ち沙漠は、名高き戰場か、蘭只之野、台の傳なる哈刺哈真沙陀は、地名を誤りて人名とせり。)憩ひて居る時、阿勒赤歹(成吉思汗の弟合赤温の子、元史世系表の濟南王按只吉歹)の驢馬を野飼せしめたる赤吉歹、牙的兒(親征太出也迭兒、別喇津、集史泰出勤黑歹、牙都兒、洪鈞は、秘史奪泰字音親、路路青草に驢馬を野飼しつゝ行征錄奪吉歹音と云へり)忽刺阿卜魯哈(誤りて二山)過ぎ來る敵の塵を見て、敵到れり云ひて、驢馬を趕ひて來て、成吉思合罕は、敵到れりと云はれて、見れば、卯温都兒の前に依り、紅き榆林を過ぎ、塵を上げて、王罕かく襲ひて來るなりと云ひて(云は)そこより成吉思合罕は、塵を見ると、驢馬を拏へしめて、馱して上馬せ

兩軍の力を較べたる王罕札木合の問答

り。かく見ざりせば、不意打なりけん。その來る時、札木合は、王罕と共に來合ひて來るなりき。そこに王罕は、札木合に問ひき、帖木眞子の處に、善く戰ふ程のもの、誰かあると問ひき。札木合言はく、そこに兀魯兀惕忙忽惕て彼の民あり彼のその民は善く戰へるぞ。轉ずる度毎に陣勢好くあり旋る度毎に次序好くあり小きより環刀鎗の裏に慣れたる民彼等は、黒色花色の纛もあり彼等は、用心すべき民なるぞと云ひき。その言につき、王罕言はく、かくあらば、我等は彼等を只兒斤(親征錄朱力斤部)の勇士どもに合答黒に任せ、只兒斤の勇士どもに衝かせん。只兒斤の後援には、土綿土別干の阿赤黒失喩(親征錄阿赤失蘭)に衝かせん。土別干の後援には、斡纒董合

亦惕(元史親征錄董哀部)の勇士どもに衝かせん。董合亦惕の後援には、王罕の千の侍衛を率ゐる豁哩失列門太石(元史親征火力失烈門大石火力失烈門部)衝け。千の侍衛の後援には、我等大中軍にて衝かんぞ。云ひき。又王罕言はく、札木合弟我等の軍を汝整へよ。云ひき。その言につき、札木合別に離れて出でて、その從者に言へらく、王罕は、この軍を我に整へよ。云へり。安荅には、我敵すること能はず行きたるに、この軍を我に整へよ。云へり。王罕は、越えて我より彼方に在りき(我よりも)。酌中の伴なり。(酌中蒙語察黑圖明解り得ず。姑く)安荅に報告を入れん。安荅戒愼せよ。云ひて、札木合は陰に成吉思合罕に報告を入れて言ひて遣るには、王罕は、我に問へり。帖木眞子の處

成吉思汗に密告する札木合の心

に、善く戰ふ程のもの、誰かある。と問ひたれば、我言はく、兀嚙兀惕忙忽惕を頭とす。と言へり。我、我が言にて、彼等は、只兒斤を頭として、先鋒とし、整へ合へり。只兒斤の後援には、土綿土別干の阿赤黑失喩を云ひ合へり。土別干の後援には、斡斡董合亦惕の勇士どもを云ひ合へり。董合亦惕の後援には、王罕の千の侍衛の官人豁哩失列門太石を云ひ合へり。彼の後援には、その王罕の大中軍の軍にて立たん。云ひ合へり。又王罕言はく、札木合弟、この軍を汝整へよ。とて、我に委ねん。云ひて、これにて見れば、酌中の伴なり。軍を整へ合ふことは、何ぞ能くせん。前に、我は安荅に敵すること能はずして行きたるに、王罕は、我より彼方に在りき。安荅勿恐れ。戒愼

せよ云ひて遣りき。

合刺合勒只惕の戦

この傳言に來らるゝと、成吉思合罕言はく「兀魯兀惕の主
 兒扯歹伯父（成吉思汗の同族にて、字兒只斤氏の長）汝何ぞ云ふらん。
 汝を先鋒とせん」と云へり。主兒扯歹の聲出す前に忙忽惕の
 忽亦勒答兒薛禪（卷四の忽余勒答兒薛禪は、成吉思汗より賜はれる號なり。元史畏答兒の傳に見ゆ）言はく「安
 答の前に我戰はん。この後我が孤子どもを養はんことを安
 答知しめせ」と云へり。（成吉思汗の忽亦勒答兒と約して安答と見ゆ）主兒扯歹
 言はく「成吉思合罕の前に、我等兀魯兀惕忙忽惕先鋒として
 戰はん」と云ひき。かく云ひて、主兒扯歹、忽亦勒答兒二人兀魯
 兀惕忙忽惕を率ゐ、成吉思合罕の前に整へて立ちたり。立ち
 たれば、敵は、只兒斤を先鋒として到りて來ぬ。來ぬれば、兀魯

兀惕忙忽惕迎へ衝きて只兒斤を敗れり。敗りて往く時、土綿
 土別干の阿赤黑失諭衝きたり。衝きて、阿赤黑失諭は、忽亦勒
 答兒を刺して落しき。忙忽惕どもは、忽亦勒答兒の上に翻り
 き。主兒扯歹は、兀魯兀惕にて衝きて、土綿土別干を敗れり。敗
 りて動かしめて往く時、幹樂董合亦惕迎へ衝きたり。主兒扯
 歹は、又董合亦惕を敗れり。敗りて往く時、豁哩失列門太子千
 の侍衛にて衝きたり。主兒扯歹、又豁哩失列門太子を退かし
 めて敗りて往く時、王罕に相談も無く、桑昆は迎へ衝かんこ
 し、赤き腮を射られて、桑昆すぐ其處に倒れき。桑昆を倒され
 て、客唎亦惕都にて桑昆の上に翻りて立ちたり。彼等を敗
 りて、落つる日丘の上に拍ちつゝある時、主兒扯歹は、我等の

桑昆の負傷

軍に翻りて、忽亦勒答兒を倒れたる傷あるを伴れ回りて、成吉思合罕は我等の軍を收めて、王罕より戰へる地より離れて、夕に動きて離れ宿りり。

大戦の翌朝の點

立ちて宿りて、日明けさせ點視すれば、斡闐歹(元史本紀に、太は窩闐台太祖の第三子なり)、孛囉忽勒、孛斡兒出三人無かりき。成吉思合罕言はく「斡闐歹と共に頼るべき孛斡兒出、孛囉忽勒二人後に残りき。生きても死にても何ぞ離れん、彼等」云へり。我等の軍は、夜その駟馬を執りて宿りて、成吉思合罕言はく「我等の後より襲ひて來ば、戰はん」とて、整へて立ちたり。日明るくなるとして見れば、後より一人の人來りて來れば、孛斡兒出なりき。孛斡兒出に到りて來らるゝと、成吉思合罕言はく「長生の

孛斡兒出の後に到り

上帝知しめせ」と云ひて、その臂を椎ちたり。孛斡兒出言はく「衝く時馬を倒るべく射られて、歩み走りて行く時、その客例亦、傷ごもが桑昆の上に翻り立てる鬪ひの隙に、荷ある馬その荷を歪めて立ち居るを、その荷を斷ちて、その單鞍に乗りて出でて、我等の離れ出でたる路踏み行きて、得てかく來ぬ、我」云へり。

斡闐歹孛囉忽勒の後に到り

又暫くありて、又一人の人來りて來る時、彼の下に脚を垂れて來れば、獨の人の如くあり。來畢れば、斡闐歹の後より孛囉忽勒、疊騎(尻馬に)て、口の脛にて血を流して到りて來ぬ。斡闐歹は、頸脈に箭を中てられて、その血凝りたるを、孛囉忽勒口にて吮ひて、塞れる血を脛にて流して來ぬ。成吉思

合罕かかん見て、眼まなこより涙なみだを流ながして、心惱こころなごみ、火ひにて疾とく燒やかせ、熱あつを透とほらするご、韓かん闊くわ互ごに飲物のみのもの（明あきら止とど渴かわ的てき物もの）を尋たづねさせて與あたへさせて、敵てき來きたば、戰たたかはんご云いひて居をりき。孛囉はら忽く勒る言いはく、敵てきの塵ちりは、彼か方たに卯溫まうん都兒どゑの前まへに依より、忽く刺ち安あん孛囉はら合か惕と（前まへの忽く刺ち安あん）の方かたに塵ちり長ながく出いでて、彼か方たに去きりたりご云いへり。孛囉はら忽く勒るのその言ことばにつこき、成せん吉ぎ思す合か罕かんは「來きたば戰たたかふべきなりき。敵てきに逃にげ動うごかれば、我われ等らは軍いくさを整ととのへて、後のちに戰たたかはんぞ」ご云いひて動うごきたり。動うごくに、兀勒うろ灰かい失し魯格ろく勒る只ち惕と河がに沂まかり動うごきて、答た闌らん捏ね木む兒ゑ格げ思すに入いりたり。（この河がは前まへに云いへるが如ごとく南みなみに流ながる、河がなれば、沂まかると追おひ附つかれて起たれるこの名な高たかき合あ戰せんは、その河がの下した流ながる、即すなはち塔た塔た兒ゑ四し部のぶの輿う魯ろの在ありし處ところ、即すなはち今いまの烏う珠しゆ穆もく沁しん左さ翼よくの地ちにて起たれるなり。この古ふる戰せん場ばを尋たづねんと欲ほする人ひとは、その地方ちかにて求もとむべし。）

合答安答勒都兒罕の報告

そこに後しりより合か答た安あん答た勒ら都ど兒ゑ罕かんは、妻つま子こより離はなれ來きぬ。（この人は卷四に見えたる如く、既に成吉思汗に降りたりしが、今度の變まに）來きて、妻子と共に王罕に降り若しくは虜へられて、今逃げ回まわりたるなり。）來きて、合か答た安あん答た勒ら都ど兒ゑ罕かんは、王罕の言ことばにて言いはく、王罕は、その子桑昆さんこんを兀う出しゅ馬ま（種しゆの名な）にて赤あかき腮はを倒たふるべく射いられて、彼かれの上うへに翻かりて、そこに言いひき、惹ひくべからざるに惹ひきたり、鬪たたかふべからざるに鬪たたかひこなり、可惜あつち我が子の腮はに釘くぎを釘くぎ打うたしめたり。子の命いのちを失うしなふまで衝つき戰たたかはん、譯あきら就に我わが兒子このいのち性命あまのいのち有ある時とき可べ再ふたたび教おし衝つご云いへば、その時とき阿あ赤ちく黑く失し喻えん言いはく、罕かん罕かん、止やめよ。背か處げに在ある子こ（生なれき）を求もとむるに、祈いのり願ねがひをなして、阿あ備び巴は備び（譯あきら得とす）にて求もとめ願ねがひたり、我等われらこの生なれ畢をへたる子桑昆さんこんを介かい抱ほうせん（明あきら未し生うま兒子こ時とき禱はな祈いの著あきら要よ子し嗣し將しやう這こ既す生な了なるの兒子こ桑昆さんこん擡たい擡せん擡せん）

忙豁勒の多數は、札木合と共に、阿勒壇忽察兒と共に、我等の處に在り。帖木眞と共に背きて出でたる忙豁勒は何處に去らん、彼等馬に乗りきりにて、木に蔽はるゝここに爲りぬ、彼等(明譯)每人止騎著一匹馬、夜裏必在樹木下宿、彼等を來ずば、往きて馬の乾糞の如く包みて持ち來んぞ、我等は彼等を「云へり、阿赤黒失喻の此の言につき王罕言はく然り。さあらば、子艱むらん、子を動かさず介抱せよ」と云ひて、戰へる地より回り退けり」と云へり。

合勒合河の行軍

其處より成吉思合罕は、荅闌捏木兒格思より合勒合河(今車臣汗部東邊)に沿ひ動くに、數(人)を數へ合へり。數へ合へれば、二千六百となれり。一千三百は、成吉思合罕率ゐて、合勒合河

の西の邊に依り起ちぬ。一千三百は、合勒合河の東の邊に依り、兀嚕兀惕忙忽惕(親征)兀魯吾忙兀二部(部)率ゐて起ちぬ。かく起ちて來る時、行糧(野)を圍獵しつゝ、行く時、忽亦勒答兒は、その創瘡えざるに、成吉思合罕止むれども肯かず、獸を衝きたれば、再發して破りぬ。そこに成吉思合罕は、合勒合河の幹兒訥兀山(親征)幹兒努兀の半崖(蒙語)客勒帖該合勒都惕(親征)遣忒哥山岡に彼の骸を放た(ら)しめたり。

忽亦勒答兒の死

帖兒格阿篋勒等の降附

合勒合河の不余兒納兀兒(親征)盃而之澤(湖)に注ぐ源(湖頭)に、帖兒格阿篋勒(卷四の迭兒格克額篋勒親征)等の翁吉喇惕あり。こ知りて、主兒扯歹を兀嚕兀惕を領て遣りぬ。遣るに翁吉喇惕の民は、前の日より女甥の姿にて、息女の顔色にて「云はば、

和するぞ。彼等は、彼等(我)の敵と云はば、戦ふぞ、我等(明翁吉喇百姓)每想著在前(姻親)呵(投降)來者。若不(肯)投降(呵)便(断殺者)云ひて遣りたれば、主兒(扯歹)に降り入りき。降り入りき。降り入られて、成吉思合罕は、彼等の何をも動かさざりき。

統格小河の駐營

王罕の背信を責むる成吉思汗の二使

そこに翁吉喇惕を降らしむるに、往きて統格豁囉罕の(統格小河)卷一の統格黎克小河とは異なり。明譯董哥澤脫兒合火兒合は、董哥澤文は誤りて統格黎克小河と譯せり。親征錄董哥澤脫兒合火兒合は、董哥澤納兀兒にて、脱兒合火兒合は、統格豁囉罕の訛なり。蓋この小河は湖と接して、湖と名同じきなり。今因果峇河に入る小河に唐嘴河あり、巴勒主納湖に近して、東に下馬して、阿兒孩合撒兒(親征錄)阿里海、速格該者温(卷三客該)二人に傳言せさするには、統格小河の東に下馬せり、我等(その)草も好くなりき。我等の驢馬も肥えたり。我が罕額赤格(罕父)に言へて言はく、我が罕額赤格、何の怒にて我

忽刺安忽惕の盟

を恐れさせたる、爾、恐れさせるならば、悪しき子ども、悪しき婦ごもを安眠せさせて何ぞ恐れさせざる、爾、坐れる床を低げさせて、上り出づる煙を散らして、何ぞかく恐れさせたる、爾(親征)與其(驚)畏我、何不使我(眾)揚鬬而息、安榻而臥、使我(癡)子癡婦得寧(寢)乎。我が罕額赤格、傍の人に刺されたらん、爾、横の人に驚かされたらん、爾、我が罕額赤格、我等二人は、何と云ひ合ひたりし。勻兒合勒渾山(親征)卓兒完忽奴之(山)の忽刺阿訥兀惕(卷五)忽惕(李)勒荅兀惕(孤山なる)李勒荅兀惕(黒の)複稱、親征錄、忽刺河班荅兀にて、我等言ひ合はざりしか。牙ある蛇に咬されば、彼の咬しに勿入りそ。牙にて口にて證し合ひて信ぜん。云ひ合はざりしか。今我が罕額赤格は、牙にて口にてやは證し合ひて離れた

也速該と安苔に
なれる王罕の感
謝

くごて來られて、泰赤兀惕より、忽難巴合只(親征)泰赤兀都兒
吾難巴哈只(都兒は敦の誤りなり。泰赤兀敦は、泰赤兀惕の集史も兀都兒を人
の名と)二人を率ゐて、爾の部眾を救ひて與へんごて軍を整
へて往きて、忽兒班帖列速惕(卷五の帖兒は、速惕親征錄塔刺速野)に居る古兒
罕を二十三十の人を合申に(元史 河西 河西の轉なり)逐ひて、
爾の部眾を救ひて與へたるぞ。そこより來て、禿兀刺河の黒
林に、我が罕額赤格は、也速該罕ご安苔になり合ひて、そこに
王罕なる我が父は感謝みて言はく、爾のこの恩の報いを爾
の子孫の子孫に報い回さんことを皇天后土の祐護にて知
しめせごて感謝みて居りしぞ、爾。その後額兒格合喇(前の額兒
客合喇)
は、乃蠻の亦難察必勒格罕より軍を索めて、爾の處に出馬し

困窮せる王罕に
對する成吉思汗
の厚遇

て來つれば、爾は命を助かり、部眾を棄てて、少き人にて走り
て出でて、合喇乞答惕の古兒罕の處に垂河に撒兒答兀勒の
地に往きたるぞ、爾。一年を盡さず、又古兒罕より背きて出で
て、委兀惕唐兀惕の地に由り困窮して來るに、五匹の粘灘を
拘へて乳を擠りて喫みて、駱駝の血を刺して喫みて、偏盲の
黒鬚の黃馬(蒙語合里温抹。嚙明旁譯。黑鬚。黃馬。文譯。沙馬。高寶銓曰。西北
域記曰。狐毛短而齧者。曰。沙狐。齧音天。黃白色。沙馬。蓋毛色黃白者。)
にて來ぬるぞ、爾。罕額赤格の爾を、かく困窮して來ぬご知り
て、先に也速該罕なる我が父ご安苔ご云ひ合ひたる故ご思
ひて、塔孩速容該二人を爾の迎へに使に遣りて、又我自ら客
魯噠河の不兒吉岸より迎へ往きて、古薛兀兒の湖(親征 曲笑
兒澤)に遇ひ合ひたるぞ、我等爾を困窮して來ぬご云ひ、科斂

を斂めて爾に與へて、先に我が父と安荅と云ひ合ひたる縁
 故にて、土兀刺河の黒林にて我等二人の父子と云ひ合へる
 縁故は、かくあらずや。その冬爾を團營の内に入れて養ひた
 るぞ。冬冬籠りして夏過して、その秋篋兒乞惕の民の脱黒脱
 阿別乞の處に出馬して、合廸黒里黒你嚕温（合廸黒里黒は嶺親征録、哈丁黒
 山、元哈丁里）の木魯徹薛兀勒（親征録、元史、莫那察山、親征録、また木奴又
 里察克）に戰ひて、脱黒脱阿別乞を巴兒忽眞脱古木に逐ひて、
 篋兒乞惕の民を虜へて、彼等のあまたの馬羣宮室、彼等の田
 禾都てを取りて、罕額赤格に與へたるぞ。我爾の飢ゑたるを
 日の晝に至らしめざりしぞ。爾の瘦せたるを月の半に至ら
 しめざりしぞ。我（親征録）使汝饑不過日午、羸不過月望、又我等は、

木魯徹薛兀勒の
戰

兩汗の乃蠻征伐

古出古兒台（乃蠻の古出古惕、乃蠻の分部の名）不亦嚕黒罕を兀魯黒塔黒の莎豁
 黒兀孫（莎豁黒の水卷五）より阿勒台山を越えしめ追ひて、兀嚕
 古河に沿ひ往きて、乞赤勒巴石納兀兒（乞赤勒巴石の湖卷五）に窮
 めて取りしぞ。我等そこより回りに來る時、乃蠻の闊克薛兀
 撒卜喇黒（親征録、曲薛吾撒八刺）拜荅喇黒別勒赤兒（拜荅喇黒）に
 軍を整へて對陣したる時、夕暮になられて、明日の朝戰はん
 こて、整へ合ひて宿れば、我が罕額赤格爾は、その陣處に火を
 燒かせて、夜合喇薛兀勒河に沂りて動きたるぞ。爾、明日の朝
 見れば、その陣處に無く爲られ、爾に動かされて、此等は、我等を
 燒飯としけり。と云ひて、我も動きて、額迭兒阿勒台的泊にて
 渡りて來て、撒阿里客額兒に下馬したるぞ。そこに爾を可克

可克薛兀撒卜喇
黒の追襲

薛兀撒卜喇黑は襲ひて、桑昆の妻子人民住具都てを取り、罕額赤格の爾の帖列格禿阿馬撒兒(禿列格)にある一半の人民馬羣糧食を虜へて去れば、篋兒乞惕(親征錄蔑力乞滅里)の脱黒脱阿(親征脱脱の子、忽都、卷五の)赤刺温(親征錄火)二人、その人民住具と共に爾の處にあるが、その戰の中に、その父に合はんと、巴兒忽眞に入らん。爾の處より背きて動きしぞ。そこに我が罕額赤格、爾は、乃蠻の可克薛兀撒卜喇黑に人民住具を虜へられたり。我が子朶兒邊曲魯兀惕(四)を與へて來よ。云ひて來つれば、爾の如くは思はず。そこに我は孛斡兒出木合里孛囉忽勒赤刺温、巴阿禿兒この四傑を軍を整へて遣りたれば、我がこの四傑の先に、忽刺安忽惕にて桑昆は對陣

四傑の救ひ

講和の望み

なり、その馬腿を射られて捕へられん。こして居る處へ、我がこの四傑到りて、桑昆を救ひ、妻子人民を住具ごめに都てを救ひて與へたれば、そこに我が罕額赤格は感謝みて言はく、「子なる帖木眞に去り畢へたる人民住具を四傑をおこせて救ひて與へられたり」と云ひて居りき。爾今我が罕額赤格は、いかんぞ我を怒りに怒れる。爾怒る理由(理由を)爲に使をおこせよ。おこするには、忽巴哩忽哩亦都兒堅二人をおこせよ。二人をおこせずば、第二(第二の人)をおこせよ。云ひて遣りたれば、(親征錄に可遣案敦阿速渾八力二人來報、否、則遣一人とあり。この二人は卷五の阿勒屯阿侯黑忽勒巴哩にして、喇失惕も親征錄に同じ。忽勒巴哩は忽巴哩忽哩と名似たるに由り、修正秘史の誤れるなるべし。)

この言につき、王罕言はく「嗚呼息苦しきかな」(蒙家)語咲莎亦魯

王罕の悔痛

史もこれに同じ。親征録は八兒合拔都と改め、元史は、我伯祖八刺哈けり。八兒合も八刺哈も、即ち幹勤巴兒合黒なり。また子は孫に作るべし。云ひ但し孫をも子と云へるかも知れず。元史は、八刺哈之裔と書けり。云ひて、撒察、台出(元史)、親征録、薛徹大丑(元史)二人を、汝等合惕(元史)と爲れ。云ひて、能はざりしぞ、我、汝等を合惕(元史)と云ひて能はずして、汝等に、汝罕(元史)となれ。云はれて、管(元史)行きたるぞ、我、汝等に合惕(元史)となりたるならば、多(元史)敵に先鋒(元史)に走らせられれば、上帝に祐護せられれば、敵の人を虜(元史)ふる時、腮美(元史)しき少女、妃婦人(元史)を、臂節(元史)好き、駙馬(元史)を取り來て與ふるなりしぞ、我、野の獸(元史)に先驅(元史)せさせられれば、崖の獸(元史)は、その前脚(元史)を一竝(元史)に寄せて與ふるなりしぞ、我、懸崖の獸(元史)は、その後脚(元史)を一竝(元史)に寄せて與ふるなりしぞ、我、曠野の獸(元史)は、その腹(元史)を一竝(元史)に寄せて與ふるなりしぞ、

蒙古の臣道

金帝の察兀惕忽哩

蒙古の興れる三河の源

我(元史)親征録に、假汝等爲君、吾當前鋒、俘獲輜重、亦歸汝也。使我從諸君、敗我、亦將遮(元史)きたる。今我が罕額赤格(元史)に善きに伴(元史)なりて與へよ。厭(元史)易し。云はれんぞ、汝等、察兀惕忽哩(元史)の扶植(元史)のみなり。きこ勿云はれそ。明、您如今卻離了我、在王罕處、您好生做伴(元史)著、休要有始無終、教人議論、你每全倚仗、著帖木眞、無帖木眞呵、便不中用了。蒙古の合罕は、小部落の酋長に過ぎずして、金の官爵を榮譽(元史)としたる。三河(元史)、(疑、汝爲察兀惕忽魯之族、而累汝、即汗、交人、易服、於我、尙爾、況汝輩乎、遣りぬ。)親征録に、三河之源、我祖實興、毋令他人居之。汝若事吾父、汗、可汗、勿使(元史)縱然、今夏、豈能到來、冬、矣とあり。察兀惕魯の事は、祕史と意違ひ、又二人の厭(元史)易(元史)きことを王罕の事に移せり。元史には、三河、祖宗肇基之地、毋爲他人所有、汝善事(元史)汪罕。汪罕性無常、遇我尙如此、况汝輩乎。我今去矣、我今去矣と云ひて、文は麗しくなりたれども、意味は全く親征録に因れり。我今去らんの二語は、進むことか、退くことか、面白き様なり。

脱幹哩勒を弟と云へる緣故

又成吉思合罕は都幹哩勒(親征脱隣)なる弟に言へて言
 く弟云へる緣故は屯必乃察刺孩領忽(親征察刺合令忽統)
 必乃二人の幹黑蒼(親征塔塔)奴に依り起りて來しぞ幹黑蒼
 奴の子速別該(親征雪也哥)奴ありき速別該奴の子闊闊出乞
 兒撒安(親征闊闊出黑兒思安)ありき闊闊出乞兒撒安の子也
 該晃塔合兒ありき(親征折該晃脱合兒)蓋卷三の者該晃蒼豁兒に同
 者温と兄弟にし也該晃塔合兒の子都幹哩勒汝誰が部眾を王
 罕に與へんごて詔ひ行ける汝我が部眾は阿勒壇忽察兒二
 人誰にも管かしめぬぞ汝を弟云へる緣故は我が高祖父
 (屯必)の戸限の奴我が曾祖父(合不)の門の近習の奴なりしに
 由るご我が云ひて遣ることかくあり。

桑昆の不孝を諷むる安蒼の忠言

七人の使皆二人づつ

又成吉思合罕は桑昆安蒼(親征鮮昆案蒼)に言へて言は
 く衣服ありて生れたる子にて我はありしぞ裸にて生れた
 る子にて汝はありしぞ我等の罕額赤格は我等二人を齊等
 に養ひたりき間に入らるゝより桑昆安蒼は我を嫉みて逐
 ひたるぞ汝今我等の罕額赤格の心を艱まさず夕に朝に入
 りて出でて慰めて行け舊の心(明你舊嫉妒的心)を放たず罕
 額赤格を命ある内に罕ならんごて我等の罕額赤格の心
 を艱まして勿苦ましめそご云ひて桑昆安蒼我に使をおこ
 せ來るには必勒格別乞脱朶延(親征必力哥別吉脱端)なる二
 人の從士をおこせよご云ひて遣りぬ我に使來るには罕額
 赤格は二人の使をおこせよ桑昆安蒼も二人の使をおこせ

よ。札木合安塔も、二人の使をおこせよ。阿勒壇も、二人の使をおこせよ。忽察兒も、二人の使をおこせよ。阿赤黑失喻も、二人の使をおこせよ。合赤温（卷五の合赤温別乞）も、二人の使をおこせよ。阿兒孩合撒兒速格該者温二人をもてかゝる言ごもを傳言せしめて遣りぬ。この言ごもをかく言はれて、桑昆言はく「幾たびも罕額赤格云ふなりき。殺し好きの翁こやは云はざりし。我を幾たびも安塔云ひたりき。脱黑脱阿師巫撒兒塔黑（撒兒塔兀）の羊の尾に續きて行けりこやは云はざりし。此にて言ごもの計略は覺られたり。戦はんの首なる言なり。必勒格別乞脱朶延二人戦ふ。驢を立てよ。驢馬ごもを肥やせよ。疑ひ無くあるぞ」と云へり。（脱黑脱阿云は當時かゝる師巫ありてかゝる風をなしたるなり。委しき事）

桑昆の實蹟

速格該の居残り

は、今知るべからず。明譯 我行也幾會説是安塔來。只説脱黑脱阿師翁續著回回羊尾子行有は、彼の世にても已に意味を解りかねたりと見えて、親征録には刺失惕を譯し、彼は我を安塔と呼べども、又常に我を罵る（と約めて、自注に「下に脱忽布惕の一語あり、篋兒乞惕の脱克塔の事ならん、語意解し難し」と断れり）かくて王罕より阿兒孩合撒兒回時、速格該者温の妻子は、そこに脱幹哩勒の處に居りき。去る心になりかねて、速格該者温は、阿兒孩より後れき。阿兒孩來て、この言ごもを成吉思合罕に言へり。

巴勒主納湖の駐營

かくて成吉思合罕は、去りて巴勒主納兀兒に下馬せり。（巴勒主納の湖は、幹難河の北にて、露西亞の咱拜略勒州なる赤塔の南にあり。秃喇河それより流れ出でて因果塔河に入る。その地は、林木多くして、駐夏に宜しく、蒙古人は今もその地を指して、成吉思汗の難を避けたる處なりと云ひ傳ふと云ふ。親征録は河の名とし、喇失惕は地の名として、そこに小河どもありと云ひ、他の西史は録の如く河の名とせり。秃喇河を昔は巴勒主納河と云へるにや。又は別に湖に注ぐ巴勒主納河ありしかも知れず。親征録、元史、雪不台の傳

班朱泥河。太祖本紀札八兒火者速不台鎮海哈散納阿朮魯紹古兒の傳には、朮赤台の傳に班真海（子とあるのみなり。）そこに下馬する時、撾韓思察罕（名）豁魯刺思

（姓）正にそこに遇ひ合へり。それらの豁魯刺思（親征錄）火魯刺部は鬪はずに降り來ぬ。汪古惕（親征錄）王孤部（元史汪）の阿刺忽

失的吉惕忽哩（親征錄）阿刺忽思的乞火里（元史阿刺兀）の處より阿三撒兒塔黑台（撒兒塔黑人）白き駱駝ある千の羯羊（千の羯羊に

まじ）を趕ひて、額兒古捏河に沿ひ、貂鼠青鼠を買ひて取り來る時、成吉思合罕に巴勒主納に水飲みに入る處に遇へり。こ

水飲みは名高き巴勒主納の濁水の誓なり。秘史の文は、簡略太祖なるが故に參考の爲に紀傳に見えたる叙事を下に引かん。本紀帝既遣使於汪罕、遂進兵虜弘吉刺別部溺兒斤以行至班朱泥河。河水方

渾。帝飲之以誓眾。有亦乞烈部人孛徒者爲火魯刺部所敗。因遇

巴勒主納の水飲み即ち濁水の誓

飲渾水即ち巴勒主納の諸説

太祖本紀の飲渾水

帝與之同盟。哈撒兒別居。哈刺渾山。妻子爲汪罕所虜。挾幼子脫虎走糧。絕探鳥卵爲食。來會于河上。時汪罕形勢盛強。帝微弱。勝

敗未可知。眾頗危懼。凡與飲河水者。謂之飲渾水。言其會同艱難也。この文は、全く親征錄に據りて、只河水方渾と時汪罕以下の三十七字とを

加へたるなり。溺兒斤は、即ち親征錄前文の帖木哥阿蠻にして、不余兒湖の頭にありと秘史に記せる帖兒格阿篋勒なり。帖兒格阿篋勒の降りたるは、成吉

思汗の合勒合河に沿ひ動ける時にあるを、親征錄は重ねてこゝに溺兒斤を虜ふと記せるは、誤りなり。元史は、又前の降附の事をば、怯里亦都人、遂棄汪罕來降と改めて、溺兒斤を虜へたることは、親征錄のまゝに書けり。されども、統格小河より巴勒主納湖に遷るに、何ぞ不余兒一札八兒火者

一夕汪罕潛兵來倉卒不爲備。眾軍大潰。太祖遽引去。從行者僅十九人。札八兒與焉。至班朱尼河。餼糧俱盡。荒遠無所得食。會一

野馬北來。諸王哈札兒射之。遂刳革爲釜。出火于石。汲河水煮而啖之。太祖舉手仰天而誓曰。使我克定大業。當與諸人同甘苦。

札八兒火者の傳なる馬くひ

尢赤台の傳なる
班眞海子

速不台の傳なる
班朱尼河

苟渝此言有如河水。將士莫不感泣。水飲渾水の如くも開ゆれど
 へるなり。濁水の誓に非ずして、馬肉の誓なり。然るにこの傳は誤りだらけにて、
 信じ難し。札八兒は西域の族長なるに西域征伐の十餘年前に蒙古に仕へて克
 烈征伐の役に加はれるは、已に怪むべく、又居庸關の戰は者別等紫荆關より入
 りて居庸の南口を破れるを、札八兒の前導にて居庸の閑道より軍を進めたり
 としたるなど、疑はしきこと多し。尢赤台の傳 從征怯列亦、自罕哈啓行歴
 班眞海子、閒關萬里、每遇戰陳、必爲先鋒。罕哈は合勒合河なり。班眞
 勒合河より巴勒主納湖に至れるを閒關萬里と云へるは、形容に過ぎたり。この
 傳にも誤り多し。合勒合勒只惕の戰を敘べて、怯列亦哈刺哈眞沙陀等帥眾來侵
 と書きたれども、單騎には非ず、兀嚕兀惕を率ゐたり。射殺には非ず、腮を傷けたる
 のみなり。客喇亦惕の亡人なる札哈堅普を乃蠻の主とし、速不台 太祖在班
 朱尼河時、哈班嘗驅羣羊以進、遇盜被執、忽魯渾與速不台繼至、
 以槍刺之。人馬皆倒、餘黨逸去、遂免父難、羊得達於行在所。事の
 後に關赤檀山の戰、赤は亦の誤りにて、即ち關赤田の戰あれば、この事は、成吉思
 汗の巴勒主納に到りし時には非ずして、客魯噠の上流なる不見吉岸又は古喇

鎮海の傳

哈散納の傳

阿朮魯の傳

紹古兒の傳

勒古に居たる時の事なるべし、速不台の傳の 太祖初建興都于班朱泥
 復出なる雪不台の傳にも、この事を載せて、
 河今龍居河也。と云へり。泰定帝紀に癸巳、即皇帝位於龍居河とありて、その
 裏坐了也と云へれば、泰定即位の處は、客魯噠河の關迭額洲の大幹兒朶なるべ
 く、龍居河は、金史完顏奴申の傳なる龍駒河、長春の西遊記の陸局河にして、即客
 魯噠河なり。然らば班朱尼も班朱泥も客魯噠の誤りにして、興都 鎮海、
 とは客魯噠河の上流なる成吉思汗駐營の地を稱したるなり。 鎮海の傳、
 怯烈台氏初以軍伍長從太祖、同飲班朱尼河水。ハ散納の傳、
 怯烈亦氏太祖時從征王罕有功。命同飲班朱尼河之水、且曰、與
 我共飲此水者世爲我用。阿朮魯の孫なる 懷都、幹魯納台氏、
 班朱尼河之水、扈駕親征有功。阿朮魯の傳にも、 懷都、幹魯納台氏、
 祖父阿朮魯與太祖同飲黑河水、屢從征討。とあり。幹魯納台は、祕史
 魯の傳に蒙古氏とあるは、蒙古幹魯納台氏と云ふべきを脱し、紹古兒なり。阿朮
 したるなり。黑河は河の名に非ず、水の濁れるを云へるなり。 紹古兒、
 麥里吉台氏事太祖、命同飲班朱尼河之水、扈從親征。饑兒乞惕氏、

子^こを也^え古^ぐ (元史世系表 世祖紀也 古耶律 耶魯哥の傳也 苦玉珣の傳也 忽也 松格^史 世系表 移相哥大王 憲宗^と 禿忽^と 親征錄 元史太祖紀 脫) なる三人の子を
 王罕^{わんかん}の處^{ところ}に捨てて、僅^{わずか}に身^みにて、從者^{とも}を伴^つれて出^いでて、兄^{あに}をこ
 て成吉思^{ちんぎす}合罕^{かかん}を尋^{たづ}ね、合喇^か溫^{うん}只敦^{ちとん} (親征錄 哈刺^は 刺^ら 渾^ん 只敦^{ちとん} 元史 哈
 嶺^{みね}ごもに縁^よりて、得^うる能^{あた}はず、困窮^{こんきう}して、牛皮^{うしのかは}ご筋^{すぢ}ごを喫^くひて
 行^ゆきて、巴勒^は主^{しゅ}納^なに成吉思^{ちんぎす}合罕^{かかん}に合^あへり、合撒^{かつかさ}兒^に來^こらるゝ
 喜^{よろこ}びて、成吉思^{ちんぎす}合罕^{かかん}は、王罕^{わんかん}に使^{つか}を遣^やらんご謀^{はか}りて、沼^{ちやう}咧^{れい}亦^い
 惕^との合里^か兀^り荅^だ兒^る (親征錄 哈柳^{はり} 荅^だ 兒^る 兀^り 唃^り 罕^{かん} の 察^{ちや} 忽^く 兒^る 罕^{かん} 卷三の 察^{ちや} 兀^り
 抄^{ちやう}兒^る寒^{かん}二人もて言^いひて遣^やるに、罕額^{かん}赤格^{ちか}に合撒^{かつかさ}兒^るの言^{こと}こて
 言^いへ^こて言^いはく、二^{ふた}兒^にを望^{のぞ}みて、彼^{かれ}の影^{かげ}を失^{うしな}へり、踏^ふみて彼^{かれ}の路^{みち}
 を得^えかねたり。叫^まびて、聲^{こゑ}を聽^きかれざりき。星^{ほし}を望^{のぞ}みて、土^{つち}の枕^{まくら}
合亦刺 合喇 合亦 合兀魯合

成吉思汗のたばかり

にて臥^ふしたり、我^{われ}が妻^{つま}子は、罕額^{かん}赤格^{ちか}の處^{ところ}にあり。信賴^{たより}を望^{のぞ}
 み得^えば (譯明 若^も 差^さ 一^{ひと} 箇^つ 可^べ 倚^た 仗^よ 的^{てい} 人^{ひと} 來^こ 阿^あ) 罕額^{かん}赤格^{ちか}の處^{ところ}に往^ゆか
 ん、我^{われ}ご言^いへ^こ云^いひて遣^やりぬ。又^{また}言^いはく、我^{われ}等^らは、汝^{なんぢ}等^らに續^つき動^{うご}
 きて、客魯^{きゃくろ}噠^だ河^がの阿兒^あ合勒^か苟^{かう}吉^ぎに約^{やく}し合^あはん。汝^{なんぢ}等^らそこ來^こ
 よご約^{やく}し合^あひて、便^{すなは}ち合里^か兀^り荅^だ兒^る察^{ちや}忽^く兒^る罕^{かん}二人を遣^やるご、主^{しゅ}
 兒^ち扯^え歹^だ阿兒^あ孩^{かい}二人を先^{さき}驅^がして、巴勒^は主^{しゅ}納^な兀^り兒^るより成吉^{ちんぎ}
 思^す合罕^{かかん}續^つき起^たち合^あひて、出^いで出馬^{しゅつば}したるまゝに客魯^{きゃくろ}噠^だ河^がの
 阿兒^あ合勒^か苟^{かう}吉^ぎに到^{いた}りぬ。

王罕金帳の筵會

合里^か兀^り荅^だ兒^る察^{ちや}忽^く兒^る罕^{かん}二人、王罕^{わんかん}の處^{ところ}に到^{いた}りて、合撒^{かつかさ}兒^るの言^{こと}は
 こて、此處^{こゝ}より言^いひて遣^やりたる言^{こと}を言^いひき。王罕^{わんかん}は、金^この天幕^{てんまく}
 を起^{おこ}して、不意^{ふい}にて筵會^{うたげ}して居^をりき。 (金の天幕 阿勒^あ 壇^{だん} 帖^て 兒^る 篋^め

宋の彭大雅の「其金帳柱以金製故名」と云ひ徐霆の疏證「即是草地中黑韃事略に」大氈帳上下用氈爲衣中間用柳編爲窗眼透明用千餘條索拽住闕與柱皆以金裹故名中可容數百人二時の製を述べたるなれども王罕の金帳も合里兀荅兒察忽兒罕二人の言につき王罕言は「然あらば合撒兒來よ」と云ひて頼るべき亦秃兒堅（前の兒堅親征錄）を遣らん（遣り合ひき）共に遣りきかくて來るご約會の地に阿兒合勒苟吉に到れば形影大なるを見て亦秃兒堅なる使回り走りき合里兀荅兒の馬は速くありき合里兀荅兒追驅けて捕ふる心遂げずして彼の前後を横ぎり行く時察忽兒罕の馬は遅くありき後より箭の到る先にて（箭の達する距離にて）亦秃兒堅の金の鞍ある黒き驕馬の臀の根を坐

亦秃兒堅の捕はれ

るべく（尻をつく）射たりきそこに亦秃兒堅を合里兀荅兒察忽兒罕二人捕へて成吉思合罕の處に率て來ぬ成吉思合罕は亦秃兒堅に話し合はず合撒兒の處に率て往け合撒兒知れ（云へり）率て往きたれば合撒兒は亦秃兒堅に話し合はず（すぐ）其處に斬りて棄てたり。

成吉思汗實錄卷の六

合里兀荅兒察忽兒罕二人成吉思合罕に申さく王罕は不意にてあり（明不隄防）金の天幕を起して筵會してあり速く支度して夜夜夜通し行きて襲ひ圍まん（云へり）この言を善し（こして）主兒扯歹阿兒孩二人を先驅せしめて夜夜夜通し到りて者折額兒溫都兒（卷五の成吉思汗實錄）の折兒合卜赤孩（折兒）の口に居るを圍みたり三夜三日禦がれ圍

合答黑勇士の働

みて立ちたれば、第三の日窮迫して、彼等降れり。王罕桑昆二人は、夜いかに出でたるを知られざりき。この禦ぎ合ひたる者に、只兒斤の合答黒巴阿禿兒(前の合答黒)ありき。合答黒巴阿禿兒降りて来て言はく、「三夜三日禦ぎ合へるに、正主の君を見るご、拏へていかんぞ殺さしめん」と云ひ、廢つる能はずして、「命を助かり逃去れ」と云ひ、挑み鬪ひ禦ぎ合ひたり。我今死なしめられば、死なん。成吉思合罕に恩賜せられば、力を與へん」と云へり。成吉思合罕は、合答黒巴阿禿兒の言を善しとして、勅あるに、「正主の君を廢つる能はずして、命を助かり逃去れ」と云ひ、禦ぎ合ひたる丈夫にて、彼はあらずや。伴なるべき人なり」と云ひて、恩賜して死なしめず。忽亦勒答兒の命(戰死)

忽亦勒答兒の遺族の賞賜

故に、合答黒巴阿禿兒を百人の只兒斤を忽亦勒答兒の妻子(妻)に與へ、彼等に力を與へよ。男の子生れば、忽亦勒答兒の子孫の子孫に至るまで、隨ひて力を與へよ。女の子生れば、その父母は己が意にて勿嫁がせそ。忽亦勒答兒の妻子の前後に仕へよ」と恩賜し、勅ありき。忽亦勒答兒薛禪の口を先開きたるが故に、成吉思合罕は恩賜して勅あるに、「忽亦勒答兒の子孫の子孫に至るまで、忽亦勒答兒の功の故に、遺族の賞賜を取り居よ」と勅ありき。(姚懿の牧庵文集に、平章忙兀公博羅驪の碑あり。本書忽亦勒答兒の曾孫にして、世祖の朝の平章政事なり。畏答而與兒畏翼、俱事太祖。時太疇盛彊、畏翼謀往歸之。畏答而苦止曰、帝何負汝而爲是。竟去、追之不復。雪泣而歸、請獨宣力。帝武之曰、汝兒與眾皆往、獨留何爲。乃折矢誓曰、所不終事帝、有如此矢。帝感其誠、易名屑廬、約爲按答帝。與王罕陳於曷刺真、彼眾我寡、勅兀魯一軍、先發其將、尤徹帶、玩馬、斃不應。屑廬請曰、戰猶難也。匪斧不入。我先爲斃、願帝訣曰、臣萬一不還、三黃頭兒將軫聖慮者。辰入疾戰、大敗其軍、晡猶逐北。勅使止之、乃旋師、免胄爲

畏答兒の傳の原據

殿、腦中流矢、帝親爲傳、葯、寢與同帳、踰月而卒。帝曰、寔只里吉爲敵將、實禦、屑塵、其以只里吉民百戶、屬屑塵子世世、歲賜勿絕、其族散亡者、收完之、卽封北方萬家。元史畏蒼兒の傳は、全くこの文を採り、只畏蒼而を改めて畏蒼兒とし、屑塵を薛禪とし、按蒼を按達とし、易刺眞を哈刺眞とし、尤徹帶を尤徹台とし、只里吉を只里吉實と誤れり。又太疇は泰赤兀惕兀魯は兀魯兀惕、易刺眞は合刺合勒、只惕、尤徹帶は主兒扯歹なり。只里吉は、卽ち只兒斤なるを、誤りて敵將の名とせり。又この戰は、日暮に始まりて、霎時にして決したるを、辰より晡に至るとせるは、非なり。合蒼黒勇士を忙兀惕氏に賜はれる事につきて、李文田は、以其忠誠、衛上、使忽亦勒蒼兒家、得其死力也、と云へり。然るに元史は、この碑文に據り、只里吉の抗敵したるが爲に賜はれりと書けるに由り、高寶詮は、之を駁して、刺忽亦勒蒼兒下馬者、初非只兒斤、且太祖方嘉合蒼黒、可以倣伴、則其所以與忽亦勒蒼兒家者、李說爲長。元史云、淺矣、と云へるは、甚だ當れり。

成吉思汗實錄卷の六終り。

成吉思汗實錄卷の七。

かく客唎亦惕の民を屈服せしめて、各分けて虜へさせた。り。速勒都思の塔孩巴阿禿兒(塔孩卷三)の功の故に、一百の只兒斤を與へたり。又成吉思合罕勅あり、王罕の弟札合敢不に二女の息女ありしその姉女亦巴合別乞を(卷八の末に)成吉思合罕自ら取り、妹女莎兒合黑塔泥別乞を拖雷に與へたり。(元紀に、憲宗桓肅皇帝、諱は蒙哥、睿宗拖雷の長子なり。母を莊獻太后怯烈氏、諱は峻魯禾帖尼、峻魯和帖尼妃子、怯烈氏追諡莊聖皇后、また顯懿莊聖皇后とあり。拖雷は、本傳に、睿宗景襄皇帝、諱は拖雷、太祖の第四子、太宗の母弟なりとあり。)その縁に依

りて、札合敢不を彼に従ふ昵近の民も圓全第二の轅を爲れ
ご云ひて、恩賜して虜へさせざりき。

巴歹乞失里黒の
恩賞

又成吉思合罕勅あるには「巴歹乞失里黒二人の功の故に、
王罕の金の天幕鋪陳したる金の酒局の器皿を取扱ふ人ご

めに與へん。」汪豁只惕客喇亦惕は、（汪豁只惕姓の客喇亦惕人。汪豁只
眞は親征録の嫩眞別喇津の弘豁彼惕にして、弘豁彼惕は、即）彼等の番士

ち汪豁只惕なれば、温眞は温豁眞の中略又は缺脱なるべし。

ご爲れ箭筒を帶ばしめて、喝蓋せしめて、（明のむさけるときまたゆるしかれにあい
譯）飲酒時、又許他喝

蓋、子孫の子孫に至るまで自在に快樂せしめん。多き敵に

奔らば財を得ば得たるまゝに取れ。野の獸を殺さば殺した

るまゝに取れ。勅ありき。（喝蓋は蓋を乾かすと云ふ意にて、筵會の時
阿不惕）天子凡宴饗一人執酒觴立於右

喝蓋の禮

階一人執拍板立於左階。執板者抑揚其聲贊曰、（贊は、
阿不惕）斡脱克

其聲和之曰、打弼則執板者節一板從而王侯卿相合坐者坐、合

立者立。於是眾樂皆作、然後進酒詣上前。上飲畢授觴眾樂皆止、

別奏曲以飲陪位之官。謂之喝蓋。蓋沿襲亡金舊禮、至今不廢。諸

王大臣非有賜命不敢用焉。斡脱打弼彼中方言。未暇考其義。

斡脱は、即ち斡脱克にして、打弼は、宜しなり。板を執れる者酒を進めよと云へば、
觴を執れる者宜しと應ふるなり。酒を飲む時にこの禮を用ふることは、諸王大

臣にても、合罕の特許を得たる）又成吉思合罕勅あるには「巴歹乞失

里黒二人の「我が命の間に功を致せる故に、長生の上帝に祐

護せられて、客喇亦惕の民を屈服せしめて、高き位に到りた

るぞ。この後我が子孫の子孫に位に居て、かくの如く功を致

せることを継ぎ継ぎに省みさせん」と勅ありき。客喇亦惕の

客喇亦惕の民の
分配

民を虜へて、誰にも缺けざるまでに撒し合へり。萬の秃別延（卷五の士綿秃別干元）を撒し合ひて、引受けつゝ取り合へり。多き（史完澤の傳士伯燕氏）董合亦惕を（秃格額勒都）整ふる日に到らず虜へさせたるぞ。血ある物（生人）を剝ぎ要ふる只兒斤の勇士どもを開きて分けて、共に到る能はざらしめたり。客喇亦惕の民をかく滅して、その冬は阿卜只阿闊迭格兒（親征阿不札闊忒哥兒之山）に冬籠したり。

王罕の殺され

王罕、桑昆二人、身を以て反りて出でて去る。的克的克撒合勒の捏坤兀孫（親征錄）捏羣烏孫河（親征錄）にて王罕喉乾きて入りたるに、乃蠻の斥候豁哩速別赤（親征錄）火里速八赤の處に入りき。豁哩速別赤は、王罕を拏へけり。我は、王罕なりと云へども、

闊闊出馬丁に桑昆の養てられ

認めず信ぜずして、そこに殺しけり。桑昆は、的克的克撒合勒の捏坤兀孫に入らず外に去りて徹勒に入りて水求めたるに、（徹勒は、唐書の勒勒鐵勒の音に似たり。鐵勒の故地又は故地の一部に古名の残れるなるべし。卷十二に徹勒の地に井を穿てる事あり。廣き地方の名に似たり）野馬（蒙語）忽刺惕（黃にして）畜に刺されて立てるを、桑昆馬より下りて覷ひけり。桑昆の從者闊闊出と云ふ馬丁に妻ありて、桑昆と三人にてありき。馬を闊闊出馬丁に執らしめけり。闊闊出馬丁、その驢馬を牽く。回り走りき。その妻言く「金あるを被る時、滋味あるを食ふ時、桑昆は我が闊闊出と云ふなりき。己が君を桑昆をいかんぞかく捨てて投りて去りたる爾」と云ひて、その妻立ちて残りけり。闊闊出言はく「桑昆を男にせん」とてなるぞ。汝と云ひき。その言につき、その妻言

馬丁の妻の忠言

君を棄てたる馬
丁の誅せられ

はく「婦の人は狗の面あり」と云はるゝぞ、我彼の金の盃をも
與へ、水も汲みて飲ませよ」と云ひき。そこより闊闊出馬丁は、
彼の金の盃を取ると、後に向き棄てて走りき。かくて來る
と、成吉思合罕の處に闊闊出馬丁來て、桑昆をかく徹勒に棄
てて來ぬ。我「さて、そこに言ひ合へる言を都てをみな申して
上ぐれば、成吉思合罕勅ありて、その妻を恩賞して、その闊闊
出馬丁をば、正主の君をかく棄てて來ぬ。かゝる人今誰に伴
ごならば、倚信すべけん」と云ひて斬りて棄てたり。

王罕の頭を乃鏝
にての祭

乃鏝の塔陽罕（親征太陽可汗、元史太祖紀太陽罕）の母古兒別速
録（親征菊兒八速、塔陽罕の妻）言はく「王罕は、前の老たる大なる罕な
りき。彼の頭を持ち來よ。其ならば祭らん、我等」と云ひて、豁哩

塔陽罕を譏る可
克薛兀撒卜喇黑
の慨言

速別赤の處に使を遣りて、彼の頭を斷ちて持ち來させて、認
めて白き毛氈の上に置きて、媳婦ごもに媳婦の禮を行はし
めて、喝蓋せしめて、樂器を弾かしめて、蓋を執りて祭りき。そ
の頭かく祭らるゝ時、笑ひけり。笑へり。さて、塔陽罕は、碎くべ
く踐みけり。そこに可克薛兀撒卜喇黑言ひき。死にたる王者
（蒙古古温、罕の頭を爾等又斷ちて持ち來て、次には爾等又
碎きて、何の善き事か。我等の狗の吠ゆる聲、悪しく爲れり。亦
難察必勒格罕言ひき。妻少く、夫なる我老いたり。この塔陽を
祈禱に依りて生れさせけり。嗚呼、孺く生れたる我が子は、久
後あまたの下等なる悪しき部眾を撫てて持ち能はんや。こ
云ひき。今狗の聲は、禍の近づける吠えを吠えたり。我等の合

塔陽罕の大言

敦古兒別速の法度は鋭く爲れり。我が罕懦き塔陽は弱くあり。爾は鷹を使ふこと圍獵すること二つより外に心も技も無し。云はれてそこに塔陽罕言はく「この東に此の忙豁勒あり。云はれたり。彼の民は老いたる大なる前の王罕を箭筒にて威して反らしめて死なしたり。今その罕を爲らんとしてあり。彼等天の上には日月二つ耀く光となれ。日月二つは有るぞ。地の上に二つの合揚(罕の複稱)にはいかでか爲られん。我等往きて彼の忙豁勒を持ち來ん」と云ひき。(明天の上)止有一箇日月地上如何有兩箇主人。如今咱去將那達達取了。日月二つを一箇と譯したるは違へり。修正祕史はこの言を汪古惕部に言ひ遣りたる言に入れたりと見えて、親征錄には使者の言として「日月在天了。然見之。世豈有二王哉」と譯し、一つとも云はず、耀く光をば了然にてごまかせり。訶渥兒斯の重譯には天に日二つ、一つの鞘に刀二つ、一つの目に眼二つ、一つ

天無二日地無二王

思ぎ忙豁勒

の天下に二人の王あるべけんやとあり。これは修正祕史の原文に拘らずして増飾したるなり。洪鈞の重譯は刀眼の譬を省き、我知天上惟一日一月地下亦不容有兩王と譯して、親征錄の文に近寄せたり。元史の「天無二日、民豈有二王邪」と書けるは、祕史の文とは違へども支那の古語にも合ひ、文意簡明にして筆力雄健なり。その時その母古兒別速言はく「いかにせんぞ、彼等を忙豁勒の民は氣息悪しく衣服黒暗なりき」(宋の黄震の古今紀要逸)韃鞨其遠於漢者、曰生韃鞨。生韃鞨有二、曰黒曰白。皆事女真。黒韃鞨至武沒真叛之。自稱成吉思皇帝。云孟珙の蒙韃備錄に「韃鞨始起之地處契丹之西北。其種有三、曰黒曰白曰生。今成吉思皇帝及將相大臣皆黒韃鞨也」と云ひ、又彭大雅の黒韃鞨略に「黒韃鞨之國號大蒙古」と云へり。黒韃鞨は漢人の蒙古を呼べる名にして、之を黒と云へるは蓋衣服の黒きに由れり。然れども黒韃鞨事略に「其服右衽而方領。舊以氈毳革新以紵絲金線色用紅紫紺綠紋以日月龍鳳無貴賤等差」と云へば、黒衣の黒韃鞨も太宗の世に至りては、既に外に遠ざかりて居れ。彼等の清き媳婦ごも息女ごもを若くは取り來させて、彼等の手足を洗はせて、牛羊の乳を若くは擠らしめん、只云ひき。その時塔陽罕言はく「かくあらば、何か有らん。彼等忙豁勒の處に往

老將の諫を聽かざる塔陽罕の狂愚

きて、彼等の箭筒を必ず取り持ち來ん」と云ひき。

この言につき、可克薛兀撒卜喇黑言はく、嗚呼、大なる言を言ふかな、爾等、嗚呼、懦き罕宜しからんや、祕密にせよ、（明）你不

可説、（大）話、（這）話、（你）你再休説、（と）云ひき。可克薛兀撒卜喇黑に勸め

られ、（諫）め、（ら）れ、（め）てあるに、脱兒必塔失（と）云ふ使を汪古惕の阿刺忽

石的吉惕忽哩に言ひて遣るには、この東に些の忙豁勒あり

と云はれたり。汝は右の手となれ。我はこゝより力を并せて

彼の少しの忙豁勒の箭筒を取らん」と云ひて遣りき。その言

に、阿刺忽石的吉惕忽哩答へて言はく、右の手となること能

はず、我（と）云ひて遣りて、阿刺忽石的吉惕忽哩は、月忽難（と）云

ふ使もて成吉思合罕に言ひて遣るには、乃蠻の塔陽罕は、爾

鞭背を誤らざる汪古惕

の箭筒を取りに來ん。我に右の手となれと云ひて來ぬ。我は

爲らず。今我爾に警告して遣りぬ。（明）譯、（若）不隄防、（來）て箭筒を

取られん、爾（と）云ひて遣りき。（汪）古惕の阿刺忽石的吉惕忽哩は、親征

本紀に白達達部主阿刺忽思、本傳に阿刺兀思、別吉忽里、汪古部人とあり。白達達

は、汪古惕の漢名にして、即ち古今紀要、蒙韃備錄の白韃韃なり。親征錄に曰く、乃

蠻太陽可汗遣使月忽難、謀於王孤部主阿刺忽思、乞火里曰、近聞東方有稱王者、

日月在天了、然見之、世豈有二王哉、君能益吾右翼、奪其孤矢、阿刺忽思即遣使、

必塔失、以是謀先告於上、後舉族來歸、我之與王孤部親好者、由此也。乃蠻の使、

必塔失を汪古惕の使と誤り、汪古惕の使、月忽難を乃蠻の使と誤れり。又元文類

碑に、閼復の駙馬高唐王闊里吉思の碑あり。闊里吉思は、阿刺忽石の曾孫なり。その

起朔方、併吞諸部、有國西北、曰帶陽罕者、遣使卓忽難、來謂曰、天無二日、民無二王、汝

能爲吾右臂、朔方不難定也。阿刺兀思料太祖終成大事、決意歸之、即遣麾下將禿里

必答思、齎酒六榼、送卓忽難於太祖、告以帶陽之謀、時朔方未有酒醴、太祖祭而後飲、

舉爵者三、使還、酬以馬二千、蹄羊二千、角（と）の碑文も、使の名を誤ること、親征錄

に同じ。元史阿刺兀思の傳は、この碑（と）正にその時、成吉思合罕は、帖篋

延客額兒、（駱）駝が原、親（て）帖麥該川、（親）征錄（また）に圍獵して、禿勒勤扯

駱駝が原の圍獵

兀惕を圍みて居る時阿刺忽石的吉惕忽哩の遣りたる月忽
 難なる使この報を致し來ぬ。この報につき圍獵の上にて便
 ちいかにかせん我等と云ひ合へれば多くの人言はく「我等
 の驕馬ども瘦せたり。今何かせん、我等と云ひ合ひき。その時
 幹惕赤斤那顔(即帖木格)言はく「驕馬ども瘦せたり。いか
 んぞ辭まれん。我が驕馬どもは肥えたり。かゝる言を聞きて、
 いかんぞ坐られん」と云へり。又別勒古台那顔言はく「生きて
 居る間に家人箭筒を取られれば、生きて何の詮か有らん。生れ
 たる丈夫死なば又箭筒弓と骸と一つに臥さば善からずや。
 乃蠻の民は國大く民多し。さて大なる言を言ひたり。我等、こ
 の彼等の大なる言に倚り、出馬して往きて、彼等の箭筒を取

乃蠻征伐の評議

らば難きことあらんや。往かば、彼等のあまたの馬羣は止ま
 りて残らざらんや。彼等の宮室は空になりて残らざらんや。
 彼等のあまたの部眾は、高き處に遁れて上らざらんや。彼等
 にこのかゝる大なる言を言はしめて、いかんぞ坐られん。出
 馬せん、便ちと云へり。

幹兒訥兀山の半崖の駐營

別勒古台那顔の此の言を善しとして、成吉思合罕は圍獵
 を罷めて、阿卜只合闊帖格兒(前の阿卜只)より動きて、合勒合河
 の幹兒訥兀山の半崖に下馬して、(半崖は)客勒帖該合答卷六の
 該合勒都惕と義同じ。即ち忽亦勒答兒を葬りたる處なり。親征錄には哈勒合河
 建忒垓山元史には建忒該山とありて幹兒訥兀なる山の名を脱し、半の蒙語な
 る客勒帖該を山の名とせり。喇失惕も親征錄に同じ。この句に依りて考ふれば、
 成吉思汗の圍獵したる帖篋延客額兒も冬籠したる阿卜只阿闊迭格兒も測り
 りて王罕の不意打を食ひし者額兒温都兒もみな今の車臣汗部の東南境にあ
 りて王罕は合刺合勒只惕の戦の後に未だ土兀刺の黒林の舊庭に還らざりし

千戸百戸牌子頭
六扯兒賓の任命

なり。洪鈞はこの哈勒合河は、必ず東方の哈勒合河に非すと云へれども、秘史の
 下文に、客魯噠河に浜り撒阿哩客額兒に到るとあれば、東方の地なること何の
 疑ひか。數(人)を數へ合ひて、千をそこに千とし(千人組として)て、千
 戸の官人、百戸の官人、十戸の官人をそこに任したり。(元史兵
 初典兵之官、視兵數多寡爲爵秩崇卑、長萬夫者爲千戸、千夫者爲百戸、百夫者爲十戸、又千人爲一牌、設牌頭とあり。この牌頭は後文にはみな牌子頭と云へり。然れば千戸の官人は漢語にては只千戸と云ひ、百戸の官人は、百戸と云ひ、十戸の官人は、牌子頭と云へるなり。蒙韃備錄にも韃人生長鞍馬、問起兵數十萬、略無文書、自元帥至千戸百戸牌) 扯兒賓(侍從)をもそこに任したり。朶歹扯兒必(卷三の多)朶豁勒忽扯兒必(卷三の多)斡格列扯兒必(卷三の斡歌連)斡脫忽扯兒必(黎の傳、斡脫忽斡兒必、斡脫の字一つ多し。元史木華必晃合丹氏、明里也、赤哥の子、別喇津は蒙格里克の子、斡脫忽斡兒必と云へり。明里も蒙格里克も、晃豁壇) 不察、斡扯兒必(前には)雪亦客禿扯兒必(卷三の亦客禿) 徹兒必) この六人の扯兒賓をそこに任したり。千を千とし、百

番士の新設

を百とし、十を十とし(千人百人十人)畢へて、八十の宿衛(語)客帖兀勒七十の侍衛(語)土兒合兀惕(明譯)をそこに番士(番直の語)客失克田(明譯)護衛(語)怯薛(互)に選びて入らしむるに、千戸百戸の官人どもの子ども、弟どもを次に自身の人の子ども、弟どもを入らしむるに、技能あり身材好き者どもを選びて入らしめたり。そこに阿兒孩合撒兒に恩賜して、勇士どもを選びて千夫させよ。戦ふ日には我が前に立ちて戦へ。多くの日は我が侍衛の番士となれ。勅ありき。七十の侍衛には、斡歌列扯兒必、長となりて居れ。忽都思合勒漣(卷三なる忽都思)と議り合ひて居れ。と云へり。

親軍千夫の長なる阿兒孩合撒兒

侍衛の長なる斡歌列扯兒必

侍衛宿衛等の職掌

又成吉思合罕勅あるには、箭筒士(蒙譯)赤帶弓箭的(明譯)史

兵火兒赤（塔察兒の傳、火兒赤者）侍衛番士（侍衛の番士）厨官（語蒙）巴兀兒赤（元史、兵志、親烹飪以奉）門者（語額兀顛赤）馬官（語阿黑塔赤）ごも、晝は番直（語蒙、失克）に入りて、日落つる前に宿衛に擲して、馬官は驢馬の處に―出でて宿衛（明、帶弓箭的人、并散班護衛）厨子把門人等、教日裏入班來、至日落時、將管的物交付與宿衛的、出去宿者若管馬的、守著馬（宿衛は、夜室の周圍に臥すものには、臥させて、門に立つものには、輪直して立たしめよ。箭筒士侍衛は、その翌朝我等湯を飲まば、宿衛に告げて、箭筒士侍衛厨官門者ごも、只只その職分を行へ。その居處に居よ。宿衛は、三夜三日番直する日を盡して、只又法に依り三夜宿り（下宿）合ひて、替り合ひて、夜宿衛して居れ。周圍に臥して宿

れ、勅ありき。かく千を千とし畢へて、扯兒必を任して、八十の宿衛七十の侍衛を番士に入らしめて、阿兒孩合撒兒に勇士ごもを選び（選ば）て、合勒合河の幹兒訥兀山の半崖より、乃蠻の民の處に出馬したるに、

乃蠻征伐の首途

鼠の年（我が土御門天皇元久元年、甲子、宋の嘉泰四年、金の時）夏の首の月の第十六の日の紅き光に、霧を祭りて出馬したるに、客魯噠河に沂り、者別忽必來（親征錄、虎必來哲別）二人を先鋒とし、て行き、撒阿哩客額兒に到れば、康合兒罕山の頂に、乃蠻の斥候そこ（康合兒罕山は、露西亞の地圖に見ゆる、布爾林達班嶺なも、その嶺の東なる古の撒阿哩客額兒の地を、衰古魯台草地と云ひ、その嶺の西南を、渾呼魯台戈壁と云ひ、衰古魯も渾呼魯も、康合兒に近ければ、古はその嶺又はその嶺の一部を、康合）我等の斥候と逐ひ合ひて、我等の斥候よ

兩軍斥候の衝突

衆歹扯兒必の疑
兵の謀

り、一匹の青馬に悪しき鞍あるを、乃蠻の斥候に取られき。乃蠻の斥候は、その馬を取りて語り合へらく、忙豁勒の驢馬瘦せたり。云ひ合ひけり。我等の軍は、撒阿哩客額兒に到りて、そこに止まりて、いかにせん。云ひ合へば、そこに衆歹扯兒必は、成吉思合罕に建言すらく、我等は但少くあり、少きが上に疲れて來ぬ。かくも止まりて、驢馬どもを飽かせつ、この撒阿哩客額兒に廣がり下營して、命あるだけの人毎に（この男のと譯すべき語あり。文）五處に火を燒きて、火にて嚇さん。乃蠻の民は多し。云はれたり。彼等の罕は家より出でざりし弱き人。云はれたり。火にて惑はする間に、我等の驢馬どもも飽けらんぞ。驢馬どもを飽かしめ、乃蠻の斥候を逐ひて追逼

りて、彼等の中軍に合はしめ、その亂の裏に戦はば成らんか。と建言したれば、この言を善しとして、成吉思合罕勅あるに、かく便ち火を燒かしめよ。さて、軍士どもに號令を傳へたり。かくて撒阿哩客額兒に廣がり下營して、命あるだけの人毎に五處に火を燒かしめたり。夜乃蠻の斥候は、康可兒罕山の頂より夜あまたの火を見て、忙豁勒を少し。云はざりしか。星より多き火あり。云ひ、塔陽罕に悪しき鞍ある青馬の小馬を送りて遣りて、忙豁勒の軍士ども撒阿哩客額兒に滿つるまで下營したり。晝の内に増したらんか。星より多き火あり。云ひて遣りき。

斥候のこの報に到られて、塔陽罕は、康孩山（親征杭海山史

敵の銃を避くる
塔陽罕の協議

狗の鬪ひ

太祖紀沆海山、世祖紀十四康里脫脱の傳、杭海、今の杭愛山の合池兒兀孫（合池兒の水親征錄、哈只兒兀孫河）にありしが、この報を致さるゝこ、古出魯克罕（親征錄、屈出律可汗、又曲出律可汗）の傳、曲書律（抄）なる子の處に告げて遣るには、忙豁勒の驢馬（思の傳、曲書律）も瘦せたり。星より多き火あり云へり。忙豁勒多く有り。今我等合ひ畢へば、離るゝこ難くならんか（明）今若與他連兵後必難解（合）合ひ畢へば、その黒き目を瞬き做さず、その腮を刺さるゝこも、黒き血出づこも、避くるこも無き剛なる忙豁勒に合はば、成らんや。忙豁勒の驢馬（合）も瘦せたり云はれたり。我等は、部眾に阿勒台山（親征錄、案臺）を越えさせ退かせ動きて、軍を整へて、彼等を誘ひて行きて、阿勒台山の下に到るまで、狗の鬪ひを鬪ひて行きて、我等の驢馬（合）もは肥えてあり。

父を罵る古出魯克罕

り、腹を引起させ、忙豁勒の驢馬（合）もを疲れさせ、彼等の面上に水注けん、我等と云ひて遣りき。（阿勒台の東南、幹山は、東に向稽思泊の北を繞り、又東南に向ひ、白勒克那克科依山となり、又東して、杭愛山の陽に接す。白勒克那克科依山の南麓に、今烏里雅蘇台城あり。塔陽罕は、蓋その邊に駐牧せり。こゝに阿勒台山と云へる。）その言につき、古出魯克罕言はく、彼等にかく、婦人塔陽心怖ぢて、この言を言へり。忙豁勒の多きは、いづこよりか來けん。忙豁勒の大半は、札木合（合）こゝに我等の處にあり。孕婦（合）の更衣の地に出でたるこも無き、車下の犢の草喫ふ處（合）に到れるこも無き婦人塔陽は、心怖ぢて、この言を言ひておこせたるに非ずや。さて、使に依り、父を痛むるまで、疚むるまで、言ひて遣りき。この言につき、塔陽罕は、己を婦人（合）とせらるべく言はれて、塔陽罕言はく、力あり。

君を罵る監理速別赤

勇ある古出魯克到り合ひ殺し合ふ日に必ずこの勇を勿失ひそ。到りあひ合ひ畢へば離るゝここ必ず難くあるぞ。云へり。その言につき、塔陽罕の下を管れる大官人豁哩速別赤(親征録元史)言はく、亦難察必勒格罕なる爾の父は、同等の敵に男の背驕馬の臀を見せざりき。今爾朝早く便ちいかんぞ心怖ぢたる、爾(朝氣銳、畫氣憤、暮氣歸と孫子曰へり。今早朝)爾をかく心怖づるを知りたらば、合屯の人にもあれども、爾の母を古兒別速を伴れ來て軍を治めしめざらんや(親征録昔君父亦年可汗使、人見也。今何怯邪。果懼之、何不令菊兒八速來。この譯は、簡にして實なり。元史は修飾を加へ先王戰伐勇進不回。馬尾人背、不使敵人見之。今爲此遷延之計、得非心中有所懼乎。苟懼之、何不令后妃來統軍)嗟惜けくも可克薛兀撒卜喇黑に老いられたり。いかにも我が軍の法度は怠慢になれり。

忙豁勒の天時氣運こそ爲れるに非ずや。嗚呼、儒き塔陽臆病の如くのみあり、爾(なむち)云ひて、その箭筒を打ちて別れ驅け去れり。

塔陽罕の奮進

その時塔陽罕怒りて言く、死ぬる命苦む身は、すべて一なるぞ(苦まんとの意)。しかあらば戦はん(明人死的性命辛苦的身軀都一般)。恁那般說呵、咱迎去與他厮殺(譯)云ひて、合池兒の水より動きて、塔米兒河(水道提綱の他米勒河)に沿ひ行きて、韓兒桓河を渡りて、納忽の崖の東の裾を過ぎ、察乞兒馬兀惕に到りて來つる時、成吉思合罕の斥候見て、乃蠻到りて來つ。云ふ報を致したれば、この報を致さるゝ。成吉思合罕勅あるには、多きよりは多く、少きよりは少く、損失になるぞ(乃蠻)

逆戦の勅

叢行き海立合ひ
鏖戦ひ

古には死傷多く、寡き蒙^{（一）}と云ひて、彼等の迎へに出馬して、彼等の斥候を逐ひて、軍を整ふるに、叢の如き行きを行きて、海^{（二）}の如き立合ひを立合ひて、鏖^{（三）}の如き戦ひを戦はん^{（四）}と云ひ合へり。

乃蠻の退き蒙古
の進み

（叢行きは、廣がり行くこと、海立合ひは、廣がれる陣立、鏖戦ひは、烈しき突撃なり。黒韃事略に、其行軍、常恐衝伏、雖偏師亦必先發、精騎四散而出、登高眺遠、深哨可盈百里と云へるは、即ち謂はゆる海立合ひなり。摧堅陷陣、全藉前鋒、狂革當先、例十之三と云ひ、又、交鋒之始、每以騎隊徑突敵陣、二衝纒動、則不論眾寡、長驅直入、敵雖十萬、亦不能支と云へる。）かく云ひて、成吉思合罕自ら先鋒となりて、合撒兒に中軍を整へさせて、斡惕赤斤那顔に従馬を整へさせたり。乃蠻は、察乞兒馬兀惕より退きて、納忽の崖の前なる山の裾に縁りて立ちき。かくて乃蠻の斥候を我等の斥候は逐ひて、納忽の崖の前なる後等の大^{（一）}中軍に遇ふまで

塔陽罕札木合の
問答

人肉にて養へる
四狗

逐ひて到りき。かく逐ひて到れるを塔陽罕見^{（一）}て、札木合はそこに乃蠻と共に出陣して來合ひて、そこに居て、塔陽罕は札木合に問ひけり。彼等はいかに多き羊を狼追ひて、圈に到るまで追ひて來るが如きは、これらはいかなる人かかく追ひて來ぬる^{（二）}と問へり。札木合言はく、我が帖木眞安荅、四つの狗を人の肉にて養ひて、鎖つけて繋ぎて、居るなりき。彼等、我等の斥候を追ひて來ぬるは、彼等なるぞ。彼等、四つの狗は、銅の額あり、鏖^{（三）}の嘴あり、鏖^{（四）}の舌あり、鐵の心あり、環刀の鞭あり、露を喫みて、風に乗りて行く。彼等、殺し合ふ日は、人の肉を喫ふ、彼等、到り合ふ日は、人の肉を糧^{（五）}とす。彼等、鎖を解かれて、今繋かれずして居るを喜びて、かく涎垂れ來ぬ。彼等と云ひき。そ

れら四つの狗誰誰はそれらか云へば者別忽必來二人者
 勒篋速別額台二人それら四人なり云ひき塔陽罕言はく
 但それらの下人より遠く立たん云ひて退り引きて山を
 負ひて立てりその後より躍りて繞りて來ぬるものごもを
 見て又塔陽罕は札木合に問ひき彼等はいかに朝に放てる
 駒母の乳を嘔ひて母の廻りを疾く走る駒の如くいかんぞ
 かく繞り來ぬる彼等と問ひき札木合言はく彼等は鎗ある
 男を追ひて血あるもの(生きた)を剝ぎに剝ぐ環刀ある男を
 逐ひて倒して殺して財を剝ぎ取る兀嚙兀惕忙忽惕云は
 る彼等今繋がれずして居るを喜びてかく躍りて來ぬ彼等
 云ひきそれより塔陽罕言はく但しかあらばそれらの下

躍り繞る兀嚙兀惕忙忽惕

食る鷹の如き帖木真

人より遠く立たん云ひて又退り山に登り立てりその後
 より來ぬる食る鷹の如く涎垂れて前みて來ぬるは誰なる
 塔陽罕は札木合に問ひき札木合言はくこの來ぬるは我
 が帖木真安荅彼の總身は銅にて鍛へられたるもの錐を刺
 すに隙間無く鐵にて疊みあげたるもの大針を刺すに隙間
 無き我が帖木真安荅食る鷹の如くかく涎垂れ來ぬるのみ
 見たりや汝等乃蠻の眾は忙豁勒を見ば子羊の蹄皮も餘さ
 じ云ひたりき汝等見よ云へり(親征錄に汝等見案荅舉止英
 皮猶貪不捨豈能當之と云へるはこゝの語を譯して修飾を加へたるに似たれ
 ども文は甚だ蹇拙なり元史に乃蠻初舉兵視蒙古軍若殺糝蓋兒意謂蹄皮亦不
 畱今吾觀其氣勢殆非往時矣とあるは親征錄の文に似ずして却て秘史の文に
 似たり蓋元史のこの條は親征錄に據らずして太徳七年に成れる太祖實錄に
 據りその實錄は修正秘史の文をこの言につき塔陽罕言はく但畏

大蟒の如き拙赤合撒兒

し。山に登り立たん云ひて、山に登りて立ちけり。又塔陽罕は、札木合に問ふに、又その後より厚く（大衆を率るて）來ぬるは、誰なる（と）問へり。札木合言はく、訶額額客は、一人の子を人の肉にて養ひてありき。三尋の身あり、三歳の頭口を喫ひ、三重の甲を被て、三匹の強牛を拽きて來るぞ。箭筒ある人を都てを嚙むとも、喉を碍へられず。全き男を呑むとも、心臟に障らず。怒れば、昂忽阿（名箭の）の箭を拽きて放てば、山を越えてある十人廿人の人を穿つほごに射る。鬪ふ敵を曠野を隔ててあるものを客亦不兒（名箭の）の箭を拽きて放てば、連ぬるほごに穿つほごに射る（明將人連穿透）。大に拽きて射れば、九百尋の地に射る。滅し拽きて射れば、五百尋の地に射る。人人より遠

肝ある幹揚赤斤

ひ、古喇勒（古一蟒の）なる蟒に生れたる拙赤合撒兒云はる、は、彼なるぞ云ひき。それより塔陽罕言はく、但然あらば、山の高みを争はん。上へ登れ云ひて、山に登り立てり。又塔陽罕は、札木合に問ふに、彼の後より來ぬるは、誰なる云ひき。札木合言はく、彼は、訶額額客の末の子幹揚赤斤、肝あり云はる、なり。早く睡り曉に起き、黒闇よりも後れたるここ無く、立處（巴亦答勒）よりも後れたるここ無し云ひき。塔陽罕言はく、然あらば、山の頂の上に上らん云ひけり。

札木合は、塔陽罕にこの言をかく言ふこ、乃蠻より離れ、別れて出でて、成吉思合罕に報告を入れて遣るに、安答に言へて、言ひて遣るに、塔陽罕は、我が言に昏みて、上り争ひ驚き

て上れり。口にて殺されて、怕れて山に登り上れり。安荅戒慎
 せよ。彼等は、山に上れり。この人ごもは、逆ふる氣色なし。我こ
 そは、乃蠻より離れたれ。云ひて遣りき。成吉思合罕は、日晚
 になられて、納忽の崖の山を取巻き軍立して宿れり。その夜
 乃蠻は、躲れ動かんごし、納忽の上より墜ちて、上に上に重な
 り合ひて、骨髪を碎き倒れ合ひて、爛木の如く立つまで壓し
 合ひて死に合ひけり。その明朝塔陽罕を窮めて拿へたり。古
 出魯克罕は、別に居たるにより、僅の人にて背き動きて、追驅
 けらるゝ時、塔米兒河に駐營しけり。その團營を立てかねて、
 動きて走りて出でて去れり。乃蠻の民の部落を阿勒台山の
 前に窮めて收めたり。札木合居たる札荅喇合塔斤、撒勒只

塔陽の崩はれ古
 出魯克の走り諸
 部落の降り

乃蠻の潰敗

古兒別速の召き
 れ

兀惕朶兒邊、泰兀惕翁吉喇惕等、そこに又降れり。元史は火力
 を敍べたる次に「太陽罕怒、即躍馬索戰、帝以哈撒兒、主中軍、時札木合從、太陽罕來、
 見帝軍容整肅、謂左右曰、云遂引所部兵遁去。是日帝與乃蠻軍大戰、至晡禽殺太
 陽罕、諸部軍一時皆潰、夜走絕險、墜崖死者不可勝計。明日餘眾悉降。於是朶魯班塔
 塔兒哈荅斤散只兀四部亦來降」と云へり。これは太祖實錄と親征錄即ち聖武開
 天記とに本づきて、修飾を加へたるものにて、文は甚だ雅健なれども、事實は原
 本秘史と稍違へり。來降の部落の名にも誤りあり。塔塔兒の諸部は、前に已に殲
 滅せられたれば、この中に加へず。塔陽の母古兒別速を成吉思合罕は、
 伴れ來させて言はく、汝は、忙豁勒の氣息惡しと云ひて居ら
 ざりしか。今いかで來ぬ。汝と云ひて、成吉思合罕は娶りけ
 り。

その鼠の年、秋、合喇荅勒忽札兀兒合喇荅勒の源、親征錄、迭兒惡河源、別
 津塔親征錄に、篋兒乞惕親征錄、蔑兒乞部親征錄の、脫黑脫阿別乞親征錄、成
 吉思合罕對陣して、脫黑脫阿を動かして、撒阿哩客額兒に彼

篋兒乞惕の勦討

蒼亦兒兀孫の女
忽蘭合屯の拜謁

の人民住具部落を虜へたり。(この撒阿哩原は蒙古の舊庭の地と異なるに似たり。塞北には同名の地甚だ多し。親征錄には迭兒惡河。)脱黒脱阿は、忽都赤刺温なる子ごもご、源不刺納矮胡之地とあり。脱黒脱阿は、忽都赤刺温なる子ごもご、僅の人にて、身を以て逃れて出でたり。かく篋兒乞惕の民虜へらるゝ時、豁阿思篋兒乞惕(卷二卷三の兀注思篋兒乞惕)の蒼亦兒兀孫(元史親征錄)は、息女忽蘭合屯(親征錄忽蘭哈敦元史后妃表忽蘭皇后)を成吉思合罕に見せまつらん。さて伴れて來ぬるに、路にて軍士ごもに妨げられて、巴阿嚙の納牙那顔(卷五なる你出古惕)に遇ひて、蒼亦兒兀孫言く「この息女を成吉思合罕に見せまつらん。さて來ぬ、我ご云ひき。そこに納牙那顔言く「汝の息女を我等俱に見せまつらん。さて止めけり。止むる時、蒼亦兒兀孫に汝獨にて往かば、路にて軍士ごも亂るゝ時に、汝をも活さず。汝

納牙阿の忠謹

の息女をも亂すべし」と云ひて、三日三夜止めけり。そこより忽蘭合敦ご共に蒼亦兒兀孫を率ゐて、共に納牙那顔は、成吉思合罕に致せり。それより成吉思合罕は、納牙に「いかに妨げて居たる、汝ごて甚だ怒りて、嚴しく仔細を問ひて、法にあてん」とて問ひつゝある時、忽蘭合敦言はく「納牙阿は言ひき。
成吉思合罕の大官人なり、我は我等俱に汝の息女を合罕に見せまつらん。路にて軍士ごも亂さん」とて勧めけり。今納牙阿より別なる軍士ごもに遇はば、亂に「又は正に入りけんか(明譯)若不遇著納牙畱住阿、如今也不知如何」。この納牙阿に遇ひたるは、我等の幸ごなれり。今納牙阿を問ひ給ふに、合罕恩賜せば、上帝の命にて父母の生みたる皮膚を問ひ給はばご

奏さしめけり。納牙阿は問はるゝ時合罕より外に我が面は
 「向ふこご無くあるぞ。外國の民の肥美しき女子妃臀節好き
 駙馬に遇へば大君のもの合曲も「ご云ひて居りしぞ、我合屯合兒これ
 より外に我が心あらば死なん、我合罕ご云ひき。成吉思合罕は、忽
 闐合敦の言上を善しこして、その日に便ち審べ試みれば、忽
 闐合敦の奏したるに違はずして、成吉思合罕は、忽闐合敦を
 恩賞して愛みたり。納牙阿の言違はずして、成吉思合罕は「善
 しこして、實の言ある人合人なりき」ご云ひ、大なる勾當を委ねん
 ごとて恩賞せり。

成吉思汗實錄卷の七終り。

成吉思汗實錄卷の八。

斡歌歹の妻とな
る朶唎格捏

峯の寨の攻撃

篋兒乞惕の民を虜へて、脱黒脱阿別乞の太子忽都の合秃
 惕合屯の復稱朶該朶唎格捏二女より朶唎格捏元史后脱列哥那六
 皇后乃馬眞氏追諡昭慈皇后をそこに斡歌歹合罕卷六の合
 與へたり。篋兒乞惕の半の部眾反きて峯の寨蒙語合勒豁兒
 合語譯山頂寨子文譯台合勒山に據りき。そこに成吉思合罕勅あ
 合寨親征録泰安寨元史泰寒寨に據りき。そこに成吉思合罕勅あ
 りて、鎖兒罕失喇の子沈白親征録赤老温を官人として、左手の
 軍にて、寨に據れる篋兒乞惕を攻めさせに遣りぬ。脱黒脱阿

は、忽都赤刺温なる子ごもご共に、僅に身をもて背きて出でたるを、成吉思合罕追驅けて、阿勒台山の前に冬籠して、牛の年（我が元久二年乙丑宋の寧宗開禧元年金の泰和五年西紀一二〇五年太祖四十四歳の時）春、阿喇嶺により越えて往けば、乃蠻の古出魯克罕は、部眾を取られて、かく背きて出でたるにより、僅の眾にて、篋兒乞惕の脱黑脱阿と二人合ひて、額兒的失河の（額兒的失河は、親征録元史太祖紀に也兒的失河など見え、水道提綱には額勒濟斯河、西域水道記には額爾齊斯河、露西亞の地圖には伊兒齊斯河とあり。上流の二源を庫伊兒齊斯、喀喇伊兒齊斯と云ふ。庫は黃、喀喇は黒なり。二水合ひたる後も、喀喇伊兒齊斯と云ふ。阿勒泰山の東南幹山の西南麓の諸水を合せて齋桑諾爾に入り、諾爾より北に流れ出でてより伊兒齊斯河と云ふ。不黑都兒麻河は、西域水道記の布克圖爾瑪河にして、露西亞の地圖には布合塔兒瑪河とあり。科布多の西北なる阿勒泰山頂の西麓より出で、北緯四十九度の北を西河の上流なる索果克河の源より阿兒古特嶺の南端を踰ゆる路順なれば、阿喇

嶺は即ち阿兒古特嶺（成吉思合罕到りて對陣したれば、脱黑脱阿などの古名なるべし）成吉思合罕到りて對陣したれば、脱黑脱阿はそこに流箭に射られて倒れき、彼の子ごもは彼の骸を取りにかねて、彼の身を持ちて去りかねて、彼の頭を斷ちて持ちて去りき。そこに乃蠻篋兒乞惕共に會して對陣する能はずして、逃れ動く時、額兒的失河を渡る時、溺れて多數を水に死なしめき。僅に出でたる乃蠻篋兒乞惕は、額兒的失河を渡り畢へて、離れ動きけり。乃蠻の古出魯克罕は、委兀兒台（卷三）乃蠻の古出魯克罕の親征録元史畏吾兒、唐の回紇の遺種にして、その都は唐の北庭都護府の址なる別失八里城今の濟木薩の稍北にあり、その地は天山の南北に跨り、布合塔兒瑪河の源より委兀兒の地に往くには、その河に沿ひて西に下らずして、喀喇略巴河に沿ひ南に下りて、喀喇伊兒齊斯河を渡り、猶南に進みて、委兀兒の西境に入。合兒魯兀惕を過ぎて、（合兒魯兀惕は、親征録元史本紀唐書の葛邏祿にして、國は今伊梨の西）撒兒荅兀勒の地に垂河に居

る合喇乞荅惕の古兒罕に合ひに往きけり。篋兒乞惕の脱黑脱阿の子ども忽都合惕赤刺温が頭となれる篋兒乞惕は、(忽赤刺温は前に見えたり。忽都合は速不台の傳に霍都、土土哈の傳に火都とあり。合惕は下文に合勒とあり。元史巴而朮阿而忒的斤の傳には脱脱之子火都赤刺温馬札兒秃薛干四人とありて、合惕又は合勒に似たる名なし。元史類編に親征記を引きて脱脱の四子の名を擧げたるは巴而朮の傳と同じけれども、今の親征録には、只脱脱之子四人とありて、その名なし。洪鈞の別喇津を譯したるには、忽都合、赤刺温、赤攸克、呼圖罕、蔑兒根とあり。その呼圖罕を多遜は庫圖罕と書けり。不喇惕、擲乃迭兒は、別喇津を引きて、脱克塔の六子の名を擧げたるに、呼圖罕を呼勒圖罕と書けり。合惕は、呼圖罕又は庫圖罕の下略にて、下文の勒は誤寫ならんか。又は合勒は、呼勒圖罕の下略) 康鄰を欽察兀惕を過ぎ去りけり。
(康里欽察の名は、元史に屢見えたり。康里は、漢代の康居の遺種にして、康克居りし人種なり。欽察は、下文には正しく乞卜察克ともあり、康里の) 西隣にて今の露西亞の南部佛兒戛河の左右に廣がりし人種なり) そこより成吉思合罕は回りに阿喇嶺により越えて舊營に下馬せり。沈白は峯の寨に據れる篋兒乞惕を窮めき。そこに篋兒乞惕

蔑兒乞惕の誅滅

惕をば成吉思合罕勅あり、彼等の皆殺しを殺さしめて、(皆殺の意なり。) 彼等の残れるをば軍士どもに虜へさせたり。又先に降りたる篋兒乞惕は、舊營より反き起りき。舊營に居たる我等の家人ども、彼等を敗りき。そこに成吉思合罕勅あるに「聚りて居らしめん」と云ひしに、彼等只反きけり。さて、篋兒乞惕を各に盡くるまで分けさせたり。

鐵車の勅

その牛の年成吉思合罕勅ありて、速別額台を鐵の車にて(親征録には、以鐵裹車輪とあり、洪鈞は以鐵) 脱黑脱阿の忽都合、赤刺温等なる子どもを追はしめに遣る時、速別額台に成吉思合罕勅ありて、宣らするには「脱黑脱阿の忽都合、赤刺温等なる子どもは、去り驚きて、回りに射合ひて、套竿を帯びたる野馬、

箭やに中あたれる鹿しかとなりて去されり。彼等かれらを翹つぎあるものとなりて、
 飛とびて天てんに上のぼらば、汝速別額台なんぢすべえたいは、海青かいせいとなりて飛とびて捕とらへ
 ずや。土撥鼠どはつそとなりて爪つめにて爬はひて地ちに入いらば、鋏くはとなりて
 鑿ほりて尋たづねて追おひ上げずや。魚うをとなりて騰吉思てんきしの海うみに入いら
 ば、汝速別額台なんぢすべえたいは、旋網拖網めぐりあみひきあみとなりて撈すくひて收をめて取とらずや、
 汝なんぢ、(何秋濤の朔方備乘に、この條の明譯文を約め、何秋濤なんしゅうたうの朔方備乘しやくほうびじやうに、この條このじょうの明譯文めいぎやくぶんを約やくめ、
 汝なんぢ、て下の如く極めて簡古なる漢文に譯せり。)て下したの如ごとく極ごくめて簡古かんこなる漢文かんぶんに譯やくせり。篋兒きやくじ乞き吾深仇也わがふかきあだなり敗而やぶれて
 遠遁えんてん、如馬帶竿ごまおび、如鹿負箭しかおびや、若飛ごとくと、汝なんぢ作鷹たか、若入穴ごとくい、汝なんぢ作鋤すき、若入海ごとくい、
 汝なんぢ作網あみ與とも汝鐵車なんぢてつぐるま、以堅もち汝志なんぢし。又また高たかき峠たうげを越こえ、寬ひろき河かはを渡わたり
 に遣やりぬ、汝なんぢを地ちの遠とほきを想おもひて、軍いくさの馬うまも瘦やせざるに撫いたは
 れ、糧かゝひを盡つくさざるに惜をしめ、驕馬せんば瘦やせ畢をへば、撫いたはることも成ならず。糧かゝひ
 盡つくし畢をへば、惜をしむことも成ならず。汝等なんぢらの路みちに獸けだもの多くあるぞ。過すぎ

んご思おもひて行ゆく時ときは、軍いくさの人ひとを獸けだものに勿な走せらせそ。限かぎり無く勿な圍ま
 獵がせそ。軍いくさの人ひとに糧かゝひを添そへ、櫓蓋りがいとなりて圍獵まきがせば、限かぎりりて
 圍獵まきがせよ。(櫓蓋の蒙語汪格古解り得ず。明譯に従へ。)限かぎりある圍獵まきがより
 外ほかは軍いくさの人ひとの鞍くらの鞅しりひを勿な繫かけさせそ。轡くわを搭かけず、口くちを聞しめ
 ずして行ゆけ。かく定さだめ合あひて行ゆけば、軍いくさの人ひと馬うまを驅かるこことい
 かで出で來きん。かく定さだめて、便すなはち法度ほふどを越こゆるものを拿とへて打う
 て。我等われらの勅みことを越こゆるものを、我等われらに認みとめらるゝ如ごときものを、
 我等われらに與あたへておこせよ。我等われらに認みとめられざるあまたをば、只ただ
 そこに便すなはち斬きらしめよ。河かはのあなたに相離あひはなれん、汝等なんぢら、只ただ道理だうり
 によりて行ゆけ。山やまのあなたに相別あひわかれん、汝等なんぢら外ほかをば別ことに勿な想おも
 ひそ。長生ちやうせいの上帝あまつかみに力勢ちからいきほひを添そへられて、脱黑脱阿とくくわくたあの子こどもを

救すべからざる
深き鍾

手に入れば我等に持ち來るまでも何あらんそこに汝等棄
てよこ勅ありき速別額台に又成吉思合罕言へらく汝を出
征せさするは我小き時に三つの篋兒乞惕の兀都亦惕に不
兒罕合勒敦を三たび繞らせて怕れさせられたりき我か
る讎ある民を今又口舌を放ちて去りき長き梢に深き底に
到り合へよ（明譯）我欲教你追到極處（兀兒禿因兀主兀兒古語）さて追はしむる極端ま
で鐵の車を造りて牛の年出征せしめたり我等を背處にあ
りても對面の如く遠きにありても近きが如く思ひて行か
ば上なる天帝にも祐護せられんぞ汝等（亦別）と勅ありき（額赤担）（この鐵
は卷十なる速別額台の篋兒乞惕を窮むる處に書くべきものなり親征録も喇
失惕の史も速別額台の鐵車の遠征をこの年より十二年後なる丁丑の年に載
せたり卷十なる速別額台の遠征は年を掲げざれども即ち丁丑の役なるべし
蒙古人は年を繰るに十二支の象のみを用ひて十干を用ひざりし故に年紀誤

り易し秘史の作者はこの勅を牛の年と記憶したるに由り偶誤りて十
二年前の牛の年即ち太祖即位の前年なる乙丑の年に載せたるなり）

從士に捕はれた
る札木合

〔成吉思合罕は乃蠻篋兒乞惕を窮め畢へたれば札木合は、
乃蠻に居りてそこに部眾を取られたれば但五人の從者あ
る賊となりて儼魯山（元史地理志）唐麓嶺（阿勒泰山の東北幹）の上の上
りて獐羊を殺して焼きて喫ふ時そこに札木合は從者ども
に言ひき誰が子どもぞこの日獐羊を殺してかく喫へるこ
云ひきその獐羊の肉を喫ひ居る間に五人の從者は札木合
を手に掛けて捕へて成吉思合罕の處に伴れ來ぬ札木合は、
從者どもに捕へて來られて合罕安答に白さく黒き老鴉は、
黒鴨眞鴨を捕へたり下郎の奴は君に手を致したり大君な
る我が安答はいかんぞ差らん青き忽刺都（鳥の類の名）は孛兒

不忠の臣の誅せ
られ

臣ちん莎しや那の種の名の一種を捕とらふるご爲なれり。奴やつこなる家人けじんは、本もとの主あんどを圍かこみて襲おそひて捕とらふるご爲なれり。賢かしこき我わが安あん荅だは、いいかんぞ差あやら
 ん李勒ご言いへば、札ちや木わ合かのその言ことばにつつき、成ちん吉ぎ思す合か罕かん勅とあるには
 「正せい主しゆの君きみに手てを致いたせる人ひとをいいかんぞ存あらせられん。かゝる
 人ひとは、誰たれにか伴ともならん。正せい主しゆの君きみに手てを致いたせる人ひとをば、その
 族うからに至いたるまで斬きらしめよご勅みことありき。すぐ札ちや木わ合かの面まへ前あたりに
 て彼かれを手てに掛かけたる人ひとごもを斬きらしめて與あたへたり。成ちん吉ぎ思す
 合か罕かんは、札ちや木わ合かに言いへごて言いはく、今いま我われ等ら二ふた人たり合あへり。伴ともごな
 らん。片かた方かたの轅ながごなり合あひて過すぎたれば、別べつになり離はなれんご
 思おもへり、汝なんぢ今いま一ひとつに合あひ住すみて、忘わすれたるを心こころ附つけ合あひて、睡ねむ
 りたるを覺さし合あひて住すまん別わかれて外ほかに行ゆけごも、福さいはひあり吉きち
翰額列 兀わ馬ま兒じ塔た 斡お勒れ深しん

舊友を憐む成吉
思汗の寛厚

事じある我わが安あん荅だなりき。實まことに死し合あふ戰日ひには、心こころを痛いためた
 りき、汝なんぢ外ほかに別わかれて行ゆけごも、殺ころし合あふ日ひには、肺はい心こころを痛いためた
 りき、汝なんぢいいつご云いへば、客け唎れい亦い惕との民たみご合か刺ら合あ勒れ只ただ惕との沙さ漠ぼく
 に戰たたかへる時とき、王わん罕かんなる父ちちに言いへる言ことばを告つげておこせたるは、
 汝なんぢの恩おんなるぞ。又また乃な蠻まんの民たみを言ことばにて死しなしめ、口くちにて殺ころして
 怕おそれさせたるを比ひ較かくせよご云いひて、報ほう告こくを汝なんぢのおこせたる
 は、恩おんごなりしぞご

札木合の慚悔

言いへば、札ちや木わ合か言いはく、先まの日ひ小ちひき時ときに、豁こ兒ご豁こ納な黑く主しゆ不ぶ兒ご
 に罕かん安あん荅だご共ともに安あん荅だご云いひ合あへる時とき、消しょう化われざる食く物ぶつを食く
 ひ合あひて忘わすられざる言ことばを言いひ合あひて、衾ふすまを分わけ合あひて住すま
 れしぞ、傍かたの人ひとに唆そされて、横よこの人ひとに戳つかれて、離はなれ畢まへて、緊きん
斡多列都 斡お勒れ只ただ兒じ忽と 合あ勒れ只ただ兒じ忽と 斡お勒れ只ただ兒じ忽と 斡お勒れ只ただ兒じ忽と

情あり義あり禮ある處分

く爾の子孫の子孫に至るまで護りて與へん。幸はふる[鬼]となるぞ。我。根原の別なる生殖あるものなりき。我。[端察兒の裔に非ず、孛兒只斤氏と異なるが]許多の生殖ある安苔の威靈に壓されたるぞ。我。我が言へる言を忘れず、早く想ひて語り合へ。今我を疾くせよ。と言へば、これに依り彼の言に成吉思合罕言へらく、我が安苔は外に行きても、我等を口一杯に謂ひ[譏]て命に害を彼の考へたることを聞かざりしぞ。學ばるゝ人なりき。然れども彼肯かず。[明]是可學的人、他不肯活待教他死。死なしめん。云へば、卦に入らず。[已むを得ず殺さんとしと云ふこと、卦に現れず、蒙韃備錄に「凡占ト吉凶進退殺伐、毎用羊骨、扇以鐵椎火椎之、看其兆、斥以決大事、類龜ト也」と云ひ、黑韃事略に「其占筮、則灼羊之枚、子骨驗其文理之逆順、而辨其吉凶、天棄天子、一決於此、信之甚篤、謂之燒琵琶、事無纖粟必占、占不再、四不已」と云へるは、蒙古のト法なり。耶律楚材の傳にも「帝每征討必

命楚材ト、帝亦自灼羊胛以相符應とあり。]理由なく命に害を爲さば善からじ。重き道理ある人なり。この必ず[このは理由に、必ず]彼の[殺さるべき]理由を言へ。前に擲只荅兒馬刺、台察兒二人の馬羣を奪ひ合ひたる故に、札木合安苔、汝は直に敵對して來て、荅蘭巴勒主傷に戰ひて、者唎捏の隘に追ひ入れて、我をそこに怕れしめざりしか。汝。今伴ならん。云へば、肯かず。汝の命を愛めば従はざりき。汝。と言へ。今汝の言により、血を出さず逝なせん。と言へ。云ひて、血を出さず逝なせて、彼の骨を面前に勿棄てそ。善きに取れ。勅ありき。札木合をそこに逝なせて、彼の骨を取らしめたり。[明]仍以禮厚葬了。

幹羅河の源なる二たびの即位

かく毛氈の帳裙ある國民を平げて、虎の年[我が土御門天皇建永元年丙寅宋

紀一〇六年太祖四十五歳の時、（親征録元史みな九旌の白旗とあり、喇失惕を洪釣は之を打消して、白き馬の尾九つを旌纛とせるにて、旗に非ずと云へり、脚とは白旄の垂れたるを云へるにて、旌に非ず、蒙古源流に、九人の烏爾魯克即ち九猛將の稱ありて、親軍九隊の帥を云へり、訶渥兒斯は、これに依りて、天なる纛を建て、白旄九つを重ねて、繫けて、九烏爾魯克を表したるなり）と云へり。されども九烏爾魯克の稱は、他の贈物にも九を用ふ。その制は、突兒克より出でたり。とあれば、白旄の九つなるも、ただめ、成吉思汗に、罕の號をそこに奉れ

り。（これにて成吉思汗は、二たび合罕の位に陞れり。元史本紀に、元年丙寅帝大、會諸王羣臣、建九旌白旗、即皇帝位於斡難河之源、諸王羣臣共上尊號曰成吉、思皇帝、蓋已久矣、其後遣使詣責案、彈火察兒等、謂昔者吾國無主、汝等推戴吾爲之主者、正指此事也、先稱合罕者、一部之主、後稱皇帝、乃爲羣部之主、豈可略稱罕一節而不書乎、と云へるは、洵に卓見なり。但錢氏は、前後の名號を合罕と皇帝とに分けたれども、この丙寅の即位も皇帝と稱したるには、あらで、前と同じく合罕と云へるなり。親征録元史のみならず、宋人の記録などにも、成吉思皇帝とあるは、當時蒙古に仕へたる漢臣等の漢譯したるに本づきたるにて、蒙古にてしか稱

したるには、非ず。先後の合罕の異なる所は、先には蒙古部の主となり、今は迭列該天下の主、即ち眞の合木渾合罕となれるなり。すべて創業開國の君にして二たび即位の禮を行へるは、珍しき事に非ず。晉の代の羣雄には、初に天王の位に即き、後に皇帝の位に即きたる人甚だ多し。後魏の道武帝は、初に魏王と稱し、登國と建元し、後に皇帝となれり。遼の太祖は、初に契丹可汗の位を嗣ぎ、後に天皇王となりて、神冊と建元せり。清の太祖は、初に金國汗の位に即き、天命と建元し、太宗その位を繼ぎ、天聰と改元し、後に大清國皇帝となりて、崇徳と改元せり。これらほみな初に小國の主となり、後に大國の主となれるにて、成吉思汗の二たびの即位もその類なり。また初の即位は、合罕とは稱すれども、金朝に貢賦を納め、金の封爵を榮とし、小國の主なることを自らも認め居れども、後朝の即位に至りては、天下の主となれる積りなれば、元史にこの寅の年を太祖の元年と立てたるは、至當の事なり。されども建元と云ふ事は、蒙古人の知れることに非ず。この寅の年より後も、祕史と喇失惕の史とは、十二支の象を用ひ、親征録は、甲子を用ひて、元年二年など云へることなし。黑韃事略に、其正朔、昔用十二支辰之象、今用六甲輪流、皆漢人契丹女真教之。若韃之本俗、初不理會得。只是草青、則爲一年、新月初生、則爲一月、人問其庚甲若干、則倒指而數、幾青草と云へり。彭大雅のこの書を著せるは、太宗の時なるに、その言猶かくの如くなれば、太祖の朝に建元の事なきこと知るべく、この年を太祖の元年と名づけたるは、後の世に、大方は世祖の朝に追定したる事なるべし。また蒙古源流に、戊戌年、特穆津年十七歲、布爾德哈屯甫十三歲、遂爾匹配、特穆津年二十八歲、次己酉、子克魯倫河北郊、即汗位、稱源流の外に據るべきものなし。亭兒帖の十三歲は、祕史に、帖木真より一歲大

木合黎の王號

をそこに又賜ひたり。(月詔封太師國王承制行事贈誓券黃金印曰子孫傳國世世不絶とあり。丁丑は太祖十二年なり。親征錄蒙古集史は皆十三年戊寅の事とすれば修正秘史に然ありしにて原本秘史の作者はこゝにても虎の年を十二年前に誤れるに似たり。然れども元史百官志に太祖十二年以國王置太師一員とあるは國王は前よりありてそれをその年に太師にしたるが如くも聞ゆれば修正秘史は却て誤りて十二年)者別を乃蠻の古出魯克罕年後の虎の年としたるも知るべからず。を追はしめにそこに又出征せしめたり。忙豁勒の國を定め畢へて成吉思合罕勅あるには國を立て合ひ行ひ合ひたる者(諸共に國を立て事)には千を千として千戸の官人を任して恩賜の言を言はん。勅ありき千戸の官人を任し名させる

佐命の功臣

者別の西征

蒙力克

李幹兒出

木合黎

翁兒赤

亦魯該

主兒扯歹

忽難

者勒篋

秃格

脱纒

は蒙力克額赤格(晃豁壇氏察喇合額不干の子、卷一より見えたり。親征錄里也赤哥晃合)李幹兒出(阿嚕刺惕氏納忽伯顔の子、四傑の一人、卷二より見丹氏とあり)木合黎(古温兀阿の子、四傑の一人、卷四の子とあり)翁兒赤(孫額不干、巴阿の子とあり)蒙古源流には阿爾)木合黎國王(札刺亦兒氏帖列格秃伯顔の孫拉特の子とあり)蒙古源流に札拉伊爾の摩和賽とあり)豁兒赤(孫額不干、巴阿の子とあり)亦魯該(功臣の第五に列する程なれば、名高き人なるべきに、他功勞多き人なるに、功臣の中に見えざるも訝し、卷十に阿兒孩合撒兒を阿兒孩とのみ書き、親征錄元史本紀にも阿里海とあるを見れば、この亦魯該は阿兒孩の誤りにあらずやと思はる。蒙古字にては、アと)主兒扯歹(兀嚕兀惕氏、卷四イと形混らはしく、カイとガイとも誤り易し)忽難(格你格思氏、卷)忽必來(巴嚕刺思氏、四狗の誓に與れり、元史本傳に)赤台兀魯兀台氏とあり)者勒篋(兀嚕罕氏、札兒赤兀歹額不堅の子、四狗の一人、紀には虎必來とあり)秃格(即ち統格、札刺亦兒氏帖列格古源流には烏梁庫特の濟勒墨とあり)脱纒(即ち脱倫、扯兒必、晃豁壇氏、蒙力木合黎の從弟、卷)送該(別速惕氏、卷三)四に見えたり。

汪古兒
出勒格台
李囉忽勒

失吉忽秃忽

古出
闊闕出

豁兒豁孫

許孫

忽亦勒答兒

失魯孩

元史忠義傳に伯八の父脫倫閣里必（汪古兒）翁古兒乞顏氏巴兒壇巴阿見合丹氏明里也赤哥の子とあり。（汪古兒）秃兒の孫蒙格秃乞顏の子卷三より見え、親征錄に（雍）出勒格台（思氏卷三に見えたり）李囉忽勒（即ち李古兒寶兒赤とあり）出勒格台（即ち赤勒古台速勒都）李囉忽勒（即ち李宣懿太后の養子、四傑の一人、卷四より見えたり）元史本傳に博爾忽許兀慎氏とあり、錢大昕の考異に元明善の淇陽忠武王の碑には許慎氏に作り、李尤魯獅の河南淮北蒙古軍都萬戶府の増修公廨の碑には旭申氏に作り、と云ひ、輟耕錄の蒙古七十二氏の中には忽神と書けり、その名も太祖紀に博羅渾李羅歡鉢魯完など書き、蒙古源流には（失吉忽秃忽）失吉忽秃忽（即ち失乞刊忽都忽塔塔兒の人、宜烏古新の博羅郭勒とあり）失吉忽秃忽（懿太后の養子、卷四より見えたり）親征錄には忽都忽那顏蒙古源流（古出）古出（即ち曲出、篋兒乞惕の人、宜懿太）闊闕出（別速惕氏、宣懿太后の養子）豁兒豁孫（卷十に豁兒合孫とあり、元史撒吉人な）許孫（元史列傳に哈散納、怯烈亦氏と云ひて、濁水の誓に與れる人なり、るべし）忽亦勒答兒（即ち忽余勒答兒、忙忽惕氏、卷四より見え、元史本傳に禪ともあり、合刺合勒只惕の戦に傷を負ひて已に死にたれば、このたびの任命は贈官にして卷九なる勅語に依れば、千戶の職はその子孫に襲がせたるなり）失魯孩（元史麥里の傳に麥里、徹兀臺氏、祖雪里堅、那顏、從太祖、與王罕戰、同飲班真河水、以功授千戶とある、雪里堅はこの失魯孩の轉なるべし）

者台

塔孩

察合安豁阿

阿刺黑

鎖兒罕失喇

不魯罕

合喇察兒

闊可搦思

乃牙阿

者台（即ち哲台、忙忽惕氏、卷三より見えたり、卷三なる帖木真即位の條に哲台多豁勒忽徹兒必兄弟二人、箭筒を帶べりとあるは、哲台徹兒必多豁勒忽徹兒必二人と云ふべきを略きたるなり、その後文に多歹扯兒必は奴婢を統ぶとあるは、別なる人の如く聞ゆれども、卷七なる扯兒必六人任命の處に朶歹扯兒必多豁勒忽扯兒必と連書して、その後哲台の）塔孩（即ち塔乞、速勒都思氏、名見えざれば、多歹朶歹は即ち哲台なるべし）塔孩（赤勒古台の弟、卷三より見え、元史阿塔海の傳に阿塔海、遜都思人、祖塔海、拔都）察合安豁阿（即ち兒、驍勇善戰、嘗從太祖、同飲黑河水、以功爲千戶とあり）察合安豁阿（兀歹、察合安兀洼捏兀思氏、又赤那思氏、卷三より見え、答闌巴勒主惕の戦に死にたり、これも贈官にして、卷八なる勅語に依れば、その子納斡脫幹、哩兒にその職を襲がせた）阿刺黑（你出古惕巴、阿鄰氏、失兒古額、額不堅の子、卷五に見え、元史がせた）阿刺黑（伯顔の傳に伯顔、蒙古八隣部人、曾祖述律哥圖、事太祖、爲八隣部左千戶、祖阿刺襲父）鎖兒罕失喇（速勒都思氏、四傑の一人なる、赤老溫の職、兼斷事官とあり）鎖兒罕失喇（父卷二より見え、蒙古源流に蘇勒都斯の托爾干沙喇とあり、九十五の千戶の中に、赤老溫の名見）不魯罕（元史忽林えざるは、その父猶存して、現に千戶となれるが爲ならん）不魯罕（元史忽林）忽林失、八魯刺、解氏、曾祖不魯罕、割、事太祖、從平諸國、充八魯刺、合喇察兒（巴思千戶とあり、罕割は、一種の稱號なるべし、その義は考へ得ず）合喇察兒（巴刺思氏、速忽薛禪の子、卷三）闊可搦思（見え、卷十に闊客搦思ともあり）速亦客秃（即ち雪亦客秃、徹兒必、晃豁）乃牙阿（即ち納牙阿、你出古惕巴、阿鄰氏、弟

家率
古出古兒
巴刺幹囉納兒台

荅亦兒

木格

不只兒

卷五に見) 家率(即ち種索卷三に見えたり。卷三の譯文) 古出古兒(即ち窟
別速惕氏迭該の弟卷三に見えたり。卷九の勅語に依れば古出古兒) 巴刺幹
囉納兒台(札刺亦兒の巴刺に別たんが爲に、姓を加へたり。錢大昕の元史氏
羅台氏にして、その曾祖八郎は千戸となれり。とあり) 荅亦兒(元注思篋兒乞惕
二より見えたり。豁兒赤兀孫も、只豁兒赤とのみも云へば、荅亦兒兀孫も、只荅亦
兒とも云へるなるべし。初は敵なれども、女忽闌合屯を獻じて寵せられたる故
に、外戚を以て功臣の列に入りたるならん。親征録には、元花思蔑兒乞部長帶兒
兀孫已に降りて復叛き闡拜等に討ち平げられたりとあれども、秘史には荅亦
兒の叛けること見えず、叛けるものは、篋兒乞惕の他の部眾なり。又喇失惕) 木
額丁の部族考に客喇亦惕の人荅亦兒あれども、この荅亦兒とは異なり) 不
格(卷十に蒙客とあり。元史李蘭奚の傳に「李蘭奚、雍吉烈氏世居應」) 不只兒
(元史に布智兒と書きて、短き傳あり。蒙古の脫里台氏、紐兒傑、拔都の子にし
て、父子ともに太祖に事ふと云へり。脫里台も塔塔兒なるべし。憲宗紀に憲
宗即位の初、以牙刺瓦赤不只兒某等充燕京等處行尙書省事とある。不只兒は、
即ちこの人にして、本傳には憲宗以布智兒爲大都行天下諸路也。可札魯忽赤印
造寶鈔とあり。大都は即燕京、札魯忽赤は斷事官なり。世祖紀に「憲宗令斷事官牙
老瓦赤與不只兒等總天下財賦于燕」とありて、不只兒等の濫刑を世祖の責めた

蒙古兀兒
朶羅阿歹

李堅

忽都思
馬喇勒
者卜客

余嚕罕

闊闊

者別

兀都台
巴刺扯兒必
客帖

速別額台

ることを記せり。昔里鈴部布魯海牙、月) 蒙古兀兒(卷十に蒙客) 朶羅阿歹
乃合三人の傳には皆卜只兒と書けり) 蒙古兀兒(兀兒とあり) 朶羅阿歹
(外には) 李堅(元史忽都の傳に「忽都、蒙古兀羅帶氏、父李罕事太祖備宿衛云」
(見えす) 李堅(云とある。李罕なるべし。兀羅帶氏は、輟耕錄に兀羅歹とあり)。
忽都思(巴嚕刺思氏、忽必來の弟、卷三に見) 馬喇勒(外には) 者卜客(札刺
氏帖列格禿伯顔の子、古温兀阿の弟、卷四に見え。卷十にも見ゆ。卷四には、者卜客
を合撒兒に與へたり」と云ひ、親征録に、韃河の會の前に、哈撒兒その麾下、哲不哥
の計に従ひ、弘吉刺部を掠めて、太) 余嚕罕(元史奧魯赤の傳に「祖朔魯罕とあ
祖に深く責められたりとあり) 闊闊(元史に篋兒乞惕より降附せる闊
罕は、後に野狐嶺の戰に戰死せり) 者別(別速惕氏、四狗の一人、卷四よ
年僅に四十とあれば、この闊闊には非ず。闊闊不花の不花を略きたるにもある
まじ。元史に「闊闊不花者、按攤脫里氏、爲人魁岸有膂力、以善射知名」とありて、太
祖太宗に事へて戰功多く、その殺を嗜ま) 者別(別速惕氏、四狗の一人、卷四よ
ざるは塔塔兒人などに珍しき人なり) 兀都台(外には) 巴刺扯
蘇特の哲伯諾顔とあり。元史には紀傳處處にその) 兀都台(見えす) 巴刺扯
兒必(即札刺亦兒の巴刺、薛扯朶抹黑の子、阿兒孩合撒兒の弟、卷三) 客帖(十
に) 速別額台(元嚕罕氏、四狗の一人、卷三より見えたり。元史速不台の傳に
の) 速別額台(は、元良合氏、合赤温の孫、哈班の子、忽魯渾の弟とあり。蒙古源

秃亦迭格兒
薛潮兀兒

者迭兒

斡刺兒駙馬
輕吉牙歹

不合駙馬

忽哩勒

阿失黑駙馬

只乃（元史列傳の按竺邇と音似たれども、按竺邇は汪古惕氏にして、世世雲中祖に歸したりとありて、辛未は、この年より五年後なれば、この阿只乃に非ず。太祖に從ひ、黑河の水を飲み、元史に傳ある斡魯納台の阿朮魯も、阿只乃と音や、近し。）秃亦迭格兒（これも）薛潮兀兒（即ち薛赤兀兒、斡刺兒思氏、卷三に見し。）兀兒（兀兒爲必閣赤とある薛微兀兒）者迭兒（卷六の初に、卯温都兒山の前を過ぐ兒もこの薛潮兀兒なるべし。）斡刺兒古咧堅（古咧堅は駙馬なり、こゝ輕吉牙歹の兒、親征錄に也迭兒とあり。）斡刺兒古咧堅（斡刺兒古温兀阿の子、木合黎の弟、卷四（卷三に見えたり。）不合古咧堅（札刺亦兒氏古温兀阿の子、木合黎の弟、卷四（元勳乃成吉思、太師國王、沒黑肋者、小名也、云、弟二人、長曰抹歌、見在成吉思處爲護衛、次曰帶孫、郡王、每隨侍焉とあり、抹歌は即ちこの不合なり、元史木華黎の傳には、帶孫ありて不合なし、不合の駙馬となれるを見れば、元明善の東平忠憲王の碑に、親連、天家世不婚姻と云へるは、誤れり、札刺亦兒は、孛兒只斤の同族に非ず、その皇室と婚したる人少）忽哩勒（斡難河の戰に、泰赤兀惕の一將、親征錄と云ひて、戰敗れて乃蠻に奔れる人と名同じけれども、蒙古の功臣に列することとはあるまじ、憲宗の元年に前の阿勒赤即ち阿里出等と同じく諸王を誘ひて亂を爲せりとて誅せられたる）阿失黑古咧堅（後文に塔該阿失黒の管す曲憐は、この忽哩勒なるべし。）

合歹駙馬

赤古駙馬

阿勒赤駙馬

阿失黒は、速勒都思の合歹古咧堅（元史公主表、延安公主位の處に、火魯公塔該と同族なるべし。）合歹古咧堅（主適哈答駙馬とある哈答なるべし、親征錄癸西南征の役に、怯台哈台二將、圍中都とあり、その怯台は、兀瞻兀惕の客台にして、哈台はこの合歹なり、また本書卷十二太宗の時に、合歹は宿衛の番直の官人八人の中に加はれり、また多遜の史に、庫余克汗、定宗、疾ありて、政事は大、臣鎮海、喀答克二人に委ねたりしが、忙古汗、憲宗即位の初、諸王叛を謀りて、黨與の誅せられし時、二人も殺されたりとありて、憲宗紀にも、諸王を亂に誘へりとて、誅せられし諸臣の内に、合答あり、合答は、即ち哈答にて、又即ち合歹なるべし、火魯公主は、公主表に、誰の女とも云はず、食貨志に、大雷公主と云へり。）赤古古咧堅（親征錄赤渠駙馬、元史太祖紀駙馬赤駒、太宗紀駙馬赤苦、公主表、鄆國公主位の處に、秃滿倫公主、適赤窟駙馬とありて、何帝の女とも何姓の人とも云はざれども、喇惕額丁の史には、太祖の第四の女、秃馬命は、翁吉喇惕の阿勒赤那顏の子、赤古古兒干に嫁ざたりと云へり、阿勒赤は、德薛禪の子、光獻皇后の弟、元史に國舅、按陳那顏と云へる人にして、赤古は、按陳の長子、斡陳納陳等の兄なるべし、又蒙韃備錄に、三公、主曰阿五、嫁尙書令、國舅之子と云ひて、その尙書令のことは、按赤那邪、見封尙書令、爲成吉思正后之弟とあれば、太祖の女にして、阿勒赤の女に嫁ざたるものあるを證すべし、洪鈞曰く、特薛禪傳、但言按陳子、斡陳尙書令、女、必是史官失載、阿五異名無）阿勒赤古咧堅なる三つの千戸の翁吉考、或備錄有訛字と云へり）

喇惕氏（親征錄に、弘吉剌部安赤那顏三千騎、元史太宗紀に、按赤那顏、成宗紀元貞元年の條に、皇國舅、按赤那顏、劉伯林の傳に、按眞那延とあり、特

不禿駙馬

阿剌忽失的吉惕忽哩駙馬

薛禪の傳に曰く子曰按陳從太祖征伐凡三十二戰云歲丁亥賜號國舅按陳那顏云云丁酉賜錢二十萬緡有旨弘吉刺氏生女世以爲后生男世尙公主每歲四時孟月聽讀所賜旨世世不絶と云ひ公主表魯國公主位も魯國大長公主也速不花容宗女也適皇國舅魯忠武王按嗔那顏子幹陳駙馬魯國公主薛只干太祖孫女適幹陳弟納陳駙馬より始まりて阿勒赤の皇女を娶れることは元史に見えずされども多遜の史に阿赤の本の名は答兒吉古兒干なりしが人は皆阿赤那顏と云ふとありて阿赤は即ち阿勒赤古兒干は即ち古喇堅なれば國舅の號を賜はれる前は古喇堅と呼ばれて太祖の駙馬なりしを本傳も公主表も書き漏せるなり不禿古喇堅なる一の千戸の亦乞喇思氏(即ち不圖卷三より見征録に亦乞列思氏善騎射太祖妻以皇妹帖木倫皇妹薨復妻以皇女火臣別吉と云ひ公主表魯國公主位の處に昌國大長公主帖木倫烈祖女適昌忠武王李禿主薨繼室以太祖女昌國大長公主火臣別吉と云へり帖木倫は卷一巻二にも喇失惕の史にもみな帖木倫とあり火臣別吉は卷五に裕真別乞親征録に火阿真伯姬喇失惕の史に長女火真別吉とあり蒙韃備錄に成吉思皇帝女七人長公主曰阿真驚拽今嫁豹突駙馬とある阿真驚拽は)汪古惕の阿剌忽失的吉惕忽哩即ち裕真別乞豹突は即ち不禿なり汪古惕の阿剌忽失的吉惕忽哩

古喇堅なる五の千戸の汪古惕氏(この名は卷六より見えて今始め其部眾昔之異議者所殺長子不顏昔班併死之其妻阿里黑攜幼子李要合與姪鎮

阿剌合別乞再醮の説

國逃難夜遁至界垣告守者縋城以登因避地雲中太祖既定雲中購求得之賜與甚厚以其子李要合尙幼封其姪鎮國爲北平王鎮國薨子聶古台襲爵尙容宗女獨木千公主略地江淮薨于軍李要合幼從攻西域還封北平王尙阿刺海別吉公主公主明容有智略車駕征伐四出嘗使留守軍國大政諮稟而後行師出無內顧之憂公主之力居多と云ひ公主表趙國公主位の初に趙國大長公主阿刺海別吉太祖女適趙武毅王李要合とあり然るに蒙韃備錄には二公主曰阿里黑百因俗曰必姬夫人曾嫁金國亡臣白四部死寡居今領白韃韃國事日逐看經有婦女數千人事之征伐斬殺皆自己出と云ひ多遜の史には成吉思汗第三の女阿刺海別吉を阿剌忽失的斤忽哩に妻せんとしたるを年老いたりして辭みて兄の子鎮古に妻せられんことを願ひ阿刺海は鎮古に嫁ぎて訥古台を生み訥古台は拖雷の女を娶れりと云へり洪鈞思へらく據孟珙言則元史所謂留守乃是掌汪古部事非太祖本部太祖西征幹赤斤居守元秘史西游記可證別無阿刺海居守之語作此傳者誤會也史言李要合幼從征西域歸乃封王尙公主而孟珙之使蒙古作蒙達備錄在辛巳歲正太祖在西域追札蘭丁之時不應即云公主夫死寡居今案西域書之鎮古即鎮國之訛訥古台即鎮國子聶古台尙容宗女語同元史反覆推求必是公主先適鎮國夫死遂自領汪古部事繼而弟從弟李要合自西域還尙公主鎮國子聶古台爲公主出而李要合之三子則公主進姬妾以生西域書但言其前元史但言其後而蒙達備錄則適當其中蒙古不諱再醮理宜然也とて三書の異なる處を巧に解釋せり又黑韃事略に蒙古の十七頭項の名を擧げてその一人なる白駝馬の原注に二名白駝下即白韃僞太子忒沒真塔僞公主阿刺罕之前夫とあり洪鈞はこの文を引きて公主再醮の確證とし白駝下即白四部亦即史之鎮國何以二名不得其考と云へり洪鈞又曰く西域書謂太祖欲以女適阿剌兀思剌吉忽里辭以年老請

阿刺合別乞三醜の説

以兄子訂婚阿刺兀思之兄先爲汪古部主汪古部爲金守長城邊界兄死弟嗣而金主仍禮遇其兄子蒙達備錄所以云金國亡臣也汪古之義爲邊牆云是契丹語蓋即金語史言金源氏曠山爲界阿刺兀思以一軍守其衝要語同西域書紀阿刺兀思死難之故與元史異語繁不載又云阿刺海別吉年歲在窩關台拖雷之間則是太宗妹睿宗姊と云へり洪鈞の此等の説は考證甚だ精にして確なり余これに依りて猶考ふるに阿刺海別吉は祕史卷十なる阿刺合別乞にして前に鎮國に嫁ぎたるのみならず猶その前に阿刺忽失に嫁ぎたるなるべし多遜は阿刺忽失の辭みたることを云へども辭みたらんには古喇堅即ち駙馬と呼ばるべき筈なし卷十に阿刺合別乞を汪古惕に與へたりとあるは阿刺忽失に與へたるなり蒙韃備錄に阿里黑百因とあるは即ち阿刺合別乞の訛なれば元史に阿刺兀思の妻阿里黑と云へるは即ちこの阿里黑又即ち阿刺合なり蒙古は再醮三醜を諱まざるのみならず父死してその後母を妻とし兄死してその嫂を妻とするは匈奴突厥を初として塞北の俗皆然り李要合は蓋阿刺合の生めるにはあらで、前妻の子なるべし阿刺忽失の殺されたる時は李要合なほ幼かりし故に阿刺合は夫の姪なる鎮國に嫁ぎ鎮國死して後に我が子の如き李要合を夫としたるなり蒙古源流に滿都古勒汗の寡婦滿都該徹辰哈屯は節を守りて他族に嫁がず夫の從曾孫姪の孫なる達延汗を育ててその哈屯となれる奇談あり漢人ならば潰倫と云ふべきことを蒙古にては貞烈とするほどなれば阿刺合の三醜などは珍しきことに非ず然るに閻復の駙馬高唐王闍里吉思阿刺忽失の曾孫の碑に至りては曾祖母と祖母と同じ人なりとは直書しかねて阿刺忽失の妻をば曾祖妣阿里黑李要合の妻をば祖妣皇曾祖姑阿刺海別吉と書きて別人の如くし阿里黑は何姓とも誰の女とも云はず只まぎらかせり元史の本傳は、

九十五の千戸

全くこの碑文に本づける故に筆執れる人も阿林の民より外なる忙里黒の即ち阿刺海なることを知らざりしなり）
 豁勒の國の千戸の官人を成吉思合罕の名ざしたる九十五の千戸の官人成れり。（林の民とは幹亦喇惕乞兒吉速惕などを云ふ。卷人は三人にて十の千戸となりたれば千戸は九十五なれども功臣は八十八人なり明譯に除駙馬外復授同開國有功者九十五人為千戸とあり駙馬を除くも九十五人も皆譯し誤りなり又元史朮赤台の傳に朔方既定擧六十五人為千夫長とある六は九の誤寫又は誤刻にしてこれも千戸の數九十五なるを功臣の數と誤解し）

八十八の功臣

功臣の恩賞

古喇惕駙馬なる古一處なる人人に（この句の意明かならざ馬を除きて九十五の功臣ありと誤解せり蓋この句の意は駙馬を込めたる諸功臣にと云ふことにて功臣の外なる駙馬を加へると云ふことには非ず）
 又成吉思合罕勅ありこの名ざしたる九十五の千戸の官人に千戸を任したるその内にて功ある者に恩賞を與へんこと成吉思合罕勅あり（この句は原本にては功ある者の上に在り恐らくは傳鈔の間に起れる錯誤ならん今假にこい

者死故莫敢詐僞雖無字書自可立國（一）又見其法最好說謊者死（二）とあり。説は、詐僞なり。札兒忽を掌る者を札兒忽赤と云ひ漢語に譯すれば斷事官と云ふ。失吉忽秃忽は初任の斷事官なり。馬祖常の撰れる月合乃の碑に「國朝天造之始總裁庶政悉由斷事官」と云ひ元史百官志一に「元太祖起自朔土統有共眾部落野處非有城郭之制國俗敦厚非有庶事之繁惟以萬戶統軍旅以斷事官治政刑任用者不過一二親貴重臣耳」と云ひ元史紀事本末に「太祖時設官甚簡以斷事官爲至重之任位三公上ともあり又百官志三に「國初未有官制首置斷事官曰札魯忽赤會決庶務凡諸王駙馬投下蒙古色目人等應犯一切公事及漢人姦盜詐僞蠱毒厭魅誘掠逃驅輕重罪囚及邊遠出征官吏每歲從駕分司上都存留住冬諸事」又普悉掌之」とあるは漢地を并せたる後の職掌をも兼ね擧げたるなり。

青册

民の割附を割附けたる事を裁斷を裁斷したる事を青き迭卜帖兒（冊）に書物に書きて記録して子孫の子孫に至るまで失吉忽秃忽の我に謀りて論ひて青き書物白き紙に記録したるを勿改めそ改むる人は罪あるごなれと勅ありき。失吉忽秃忽言はく我が如き末の弟は一樣に齊等に分前をいかんぞ取らん恩賜せば土の牆ある城より賜はらん事を合

失吉忽秃忽の謙讓

罕の恩賜にて知しめせと奏しけり。（土の牆ある城とは乞塔惕唐と信長公に申したるに意同じ）この言につき己が身を汝は斟酌せり（身の程を善く考へたり）汝知れ（自ら取りて支配せよ）と宣へり。失吉忽秃忽は己にかく恩賜せしめ了へて出でて孛斡兒出木合黎等の官人を喚びて入らしめけり。

蒙力克の功

そこに成吉思合罕勅ありて蒙力克額赤格に宣はく生るるご共に生れたる長くるご共に長けたる福ある慶ある汝の功助は幾ばくもありしぞ。その内王罕額赤格桑昆安荅二人我を賺して喚びたる時往く間に蒙力克額赤格の家（宿りたれば）蒙力克額赤格汝止めざりせば渦ある水の裏に紅なる火の裏に入れらるゝなりしぞ。彼の功を善く想ひて

成吉思汗實錄卷の八

は、子孫の子孫に至るまでいかんぞ忘られん。彼の功を想ひて、今坐次は、この隅の根に坐ゑて、年に月に議りて給與賞賜を汝に與へん侍奉きて過さん、子孫の子孫に至るまでこ勅ありき。

又成吉思合罕は李幹兒出に宣はく「小き時に、韋毛の駟馬八匹を盗まれて、路に三たび宿りて追ひて行ける時に遇ひ合ひたるぞ。汝そこに言はく「艱みて來つる伴に伴なはん」と云ひ、家に父にも話なく、騾馬の乳を擠り居たるに、その大皮桶皮斗に野にて蓋して、尾脱の栗毛馬を放たしめて、我を脊黒の青馬に乘らしめて、汝自ら速き淡黄色の馬に乗りて、その馬羣をば主なく放ちて、急ぎて野より便ち我と伴なひて、

又三たび宿り追ひて、韋毛の駟馬どもを盗みたる團の處に到れば、團の邊に立てるを奪ひて追ひて逃げて將ち來しぞ。我等二人、汝の父納忽伯顔は「富人にて」ありき。(明譯に「你父納忽」)のを見れば、原文「ありき」汝は、彼の獨子、何を知りてか我に伴なひたりし。(譯「明你父納忽伯顔有家財、只你一子爲甚肯教與我作伴」とあるは、原文の「心の傑れたるにより伴なひたるぞ、汝」)閻復の撰意とや、異なり。王玉昔帖木兒の碑に「祖博爾朮、諡武忠、武忠志意沈雄、善戰知兵。太祖聖武皇帝在潛義均同氣、初要兒斤部卒盜吾牧馬、武忠共往追之、時年十三、知其眾寡不敵、乃爲出奇、從旁夾擊之、寇捨所掠而去」とあるは、即ちこの事にして、元史博爾朮(朮)の傳は、この碑に據れり。要兒斤は、秘史の兩兒乞、また主兒勤なり。その後想ひて行きて、我は別勒古台を遣りて、伴ならん云へば、汝は拱脊の栗毛馬に乗りて、青き毛衣を馬に駄けて、伴となり來つれば、三つの篋兒乞、惕我等の處に來て、不兒罕を

三たび繞らしめたる時、共に繞りたるぞ、汝又その後塔塔兒の民に荅闌捏木兒格思にて對抗して宿りたれば、雨は晝夜斷えず霖降りたる時、夜我を睡らせんごとて、毛氈の表衣を覆ひたるにより、我が上に雨を漏らさず、夜盡くるまで立ちて、片方の足を只一度換へたりき、汝の傑れたる效なりしぞ。

(元史博爾朮の傳に「嘗潰圍於怯列、太祖失馬、博爾朮累騎而馳、頓止中野、會天雨、雪失牙帳所在、臥草澤中、與木華黎張氈裘以蔽帝、通夕植立、足蹟不移。及旦、雪深數尺、遂免於難」とあるは、闌復の廣平王の碑に據れるなり。潰圍於怯列とは合刺合勒只惕の戰を云へるにて、累騎の事は幹闕台と孛囉忽勒との事を誤り傳へたるなり。氈裘の覆ひの事も、塔塔兒との戰を客例亦惕とし、雨を雪とし、孛囉兒出一人を木合黎と二人としたるは、皆傳聞の異辭なり。)それより外は、いかで汝の傑れたることを言ひて盡さん。孛囉兒出木合黎二人は、我が善き事をば行くまで拽きて、我が善からぬ事は立つまで止めて、この位に到らせたり。今眾の上に坐

に坐て、九度の罪に勿罪なひそ。孛囉兒出は、右の手の阿勒台山に凭れる萬戸を知れ、勅ありき。(蒙めでは、本の義は知るにて、が古言のしるに同じ。古の知太政官事今の府縣知事などの知も、同じ意)なり。管する意に用ひたる、箋迭を知る、と譯したるは、皆古言のしるなり。)

又木合黎に成吉思合罕宣はく、我等、豁兒豁納黒主不兒なる忽秃刺罕を戴ける部眾の踊りける繁れる樹の下に下馬したれば、木合黎に皇天の神告を告げ給へる言明なる故に、我そこに古溫豁阿(卷四なる)を想ひて、木合黎に言を了へたりき。(約束を定めたりき。この事は、前に見えず。豁兒豁納黒の下馬は、札木合りき。)と同居せる時なり。この言に依れば、木合黎等はその頃已に太祖と内約ありて、その後主兒勤の亡びたる時、先約に従ひ服屬したるなり。それに依り坐に上りて坐りて、木合黎の子孫の子孫に至るまで眾民の國王となれ、さて國王の號を賜ひたり。木合黎國王は、左の手の合喇溫只敦に凭れ

る萬戸を知れ合喇溫只敦の所在確ならず。王罕の少き時叔父に逐はれて逃げ込みたる合喇溫の陰に勅ありき。合喇溫只敦の邊にありて、これと異なり。巴勒主納の水飲の時、太祖を尋ねて合喇溫只敦の嶺どもを合撒兒の辿りたるはこの山なるべし。興安嶺の山脈の内なる一峯の名なるべしとは誰も考ふることなれども、李幹兒出の阿勒台山と對して擧げられたるを見れば、興安嶺の一峯の名には非ずして興安嶺全體を呼べる舊き名なるべし。闊復の廣平王の碑に「國初、官制簡古、置左右萬夫長、位諸將之上、首以武忠居右、東平忠武王居左、翊衛長極、猶車之有軸、身之有臂、電掃荒屯、鼙奠九土、拄天之力、競矣」と云へり。武忠は李幹兒出、忠武は木合黎なり。

豁兒赤の讖言

成吉思合罕、豁兒赤に宣はく、讖言して明你會說先兆的言語、我が年少くあるより今まで久しく濡るゝに濡れ合ひ、

寒きに寒え合ひて、福の神となりて行きたるぞ、汝豁兒赤は、かの時に言はく、讖言實ならば、上帝に心に適はれば、我に三十人の妻有らせよ讖言實と云ひき、汝今實なるなりたる故に、恩賜して、これらの降れる民の好き婦人を好き處女を見て、三

三十妻の舊約

林民の萬戸

十人の妻を選びて取れ合に勅ありき。又豁兒赤に三千の巴阿鄰の上に、塔該即ち速勒都、阿失黑即ち阿失二人と共に、阿荅兒斤の赤那思出でたり。赤那思は喇失惕額丁に據れば、察喇孩領忽の子なる堅都赤那兀嚕客真赤那の裔なり。赤那思氏分散して阿荅兒斤に屬し居たる故に阿荅兒斤の赤那思と云へるなり。脱幹列思帖良古惕脱幹列思は、卷十に脱額列思蒙古集史に秃刺思とあり。帖良古惕は、卷十に田列克親征錄に帖良兀集史に帖連郭惕とあり。共に謙河の源に居たる林を合せ萬合にして、豁兒赤知りて、額兒的失河に傍へる林の民に至るまで營盤を自在に營盤して、林の民を鎮むべく、豁兒赤萬戸を知れ合に勅ありき。豁兒赤に相談無くては、林の民は、ごにかくに勿行ひそ。相談なくて行ふものをば、何ぞ猶豫はん合に勅ありき。

主兒扯歹の合刺合勒只楊の戦功

又成吉思合罕は、主兒扯歹に宣はく、緊要なる汝の功は、客

喇亦惕レ合刺合勒レ只惕レの沙漠ニに戰フ時ニ愁ヘテ居ル時ニ忽亦レ兒レ安レ荅レは、口ヲを開キたるニ彼ノ從シ事ヲを、主レ兒レ扯レ歹レ汝レは、從シ事シたるニ從シ事スル時ニ主レ兒レ扯レ歹レ汝レは、突シ進シしてレ只レ兒レ斤レを、禿レ別レ干レを、董レ合レ亦レ惕レを、忽レ哩レ失レ列レ門レ（卷六の斡）を、千ノ侍レ衛レを、緊レ要レなるニ軍ヲを、都テを、敗リて、大ニ中ニ軍ニに、到リて、桑レ昆レの、紅キ腮ヲを、兀レ出レ馬レ（名ノ箭ノ）に、射タるニ故ニに、長シ生ノ上ニ帝ニに、門ノ手ヲ綱ヲを、引キ開ケられたるニぞ。桑レ昆レに、傷ケず、あらば、いかに、かもなりけん、我レ等ヲ。主レ兒レ扯レ歹レの、緊レ要レなるニ大ニ功ニに、それハは、做リたるニぞ。かくテ離レれて、合レ勒レ合レ河ニに、沿ヒ起ツ時ニ主レ兒レ扯レ歹レを、高キ山ノの、遮レ護ノの、如ク思ヒて、行キたりキ我レ。かくテ去リて、巴レ勒レ主レ納レの、湖ニに、水ヲ飲ミに、到リたるニぞ。さて、巴レ勒レ主レ納レの、湖ヨリ出マするニ時ニ主レ兒レ扯レ歹レ

高山の遮護

第二次の戦功

を先ニ鋒トとして、客レ喇レ亦レ惕レに出シ征シして、皇ニ天ニ后ニ土ニに、力ヲを、添ヘらレれて、客レ喇レ亦レ惕レの、民ヲを、窮メて、虜ヘたりニ緊レ要レなるニ國ヲを、滅サれテ、乃レ蠻レ篋レ兒レ乞レ惕レは、顔ヲ色ヲを、挫キて、立チ合ヒ（對陣）か、ねテ散ラされたるニぞ。篋レ兒レ乞レ惕レ乃レ蠻レを、散ラしたるニ戰ノ内ニに、客レ喇レ亦レ惕レの、札レ合レ敢レ不レは、二ニ女ノの、女ノ縁ニに、依リ己ノの、從ル部ヲ眾ニに、圓ニ全ニ住ミたりシぞ。二ニたニび、敵ニになりテ離レれたるニを、主レ兒レ扯レ歹レ誘ヒて、計ヲ略シて、札レ合レ敢レ不レを、離レ畢ヘたるニを、手ニに、掛ケて、拿ヘて、事ヲ了ヘたりシぞ。かくテ札レ合レ敢レ不レの、部ヲ眾ヲを、二ニたニび、滅シ虜ヘたりシぞ。主レ兒レ扯レ歹レの、第二ニ次ニなるニその、功ハ、かくテありシぞ。二ニ宣ヒき。殺シ合フ日ニに、命ヲを出シたるニ故ニに、死ニに、合フ日ニに、鏖シ戰シたるニ故ニに、成レ吉レ思レ合レ罕レは、亦レ巴レ合レ別レ乞レ（札合敢不の長女。元史尤赤台の傳。嬪御木八哈

亦巴合別乞を賜ふ時の勅諭

成吉思汗實錄卷の八

別吉ベキ木キは亦モの誤アヤマり阿卜哈合屯アハカヘンを主ヌシ兒扯歹チヤエに恩賜オンシして與アタふる時トキ亦モ巴合バカヘに宣ノリはく汝ナンヂを厭いとひ汝ナンヂの智懷チヤウワイなく見みえ容惡カタチアしご云いはざりしぞ我われ懷ふところに脚あしに入りたる列つらに列つらりて坐あたる汝ナンヂを主チヤ兒扯歹チヤエに恩賜オンシするは大おほなる道理だうりを思おもひて主チヤ兒扯歹チヤエの戰たたかふ日ひに楯たてとなりたる敵てきなる人ひとに防ふせぎとなりたる離はなれたる部ぶ眾しやうを聚あつめたる散ちりたる部眾ぶしやうを纏まとめ合あひたる彼かれの功いさをを考かんがへて汝ナンヂを與あたへたり久後すま我が子孫しそんは我等われらの位くらゐに坐あてかくの如ごとき功いさををなせる道理だうりを想おもひて我が言ことばに違たがひなさず子孫しそんの子孫しそんに至いたるまで亦モ巴合バカヘの位くらゐを勿斷なちそこ勅みことありき又また成吉思チヤギシ合罕カハンは亦モ巴合バカヘに宣のりたまはく札合敢チャカガン不ななる汝ナンヂの父ちちは汝ナンヂに二百人ひやくにんの驂うま臣しんを（蒙引者思婦人の嫁ぎに隨ひ往きて仕）汝ナンヂに阿失黑帖木アシクテム

遺念の驂臣

四千の兀嚙兀惕の長

兒る厨子カシハデ阿勒赤黑厨子アルチクカシハデ二人ふたりを與あたへてありき今いま兀嚙兀惕ウヤウチの民たみに汝ナンヂ往ゆくには遺念カタミとして我われにその驂臣ウマシんより阿失黑帖木アシクテム兒る厨子カシハデを一百人ひやくにんを與あたへて往ゆけこ宣のりたまひて取とれり又また成吉思合罕チヤギシカハンは主チヤ兒扯歹チヤエに宣のりたまはく亦モ巴合バカヘを汝ナンヂに與あたへたり四千の兀嚙兀惕ウヤウチを汝ナンヂ知しりて居をらずこて恩賜オンシして勅みことありき（元史朮赤台始從征怯列亦自罕哈啓行歷班真海子間關萬里每遇戰陣必爲先鋒帝嘗諭之曰朕之望汝如高山前日影也賜嬪御木八哈別吉引者思百俾統兀魯兀四千人世世無替と云へるはこゝの文の意を約めたるなり高山前日影は高）

成吉思汗實錄卷の八終り。

成吉思汗實錄卷の九

忽必來の力

四狗

四駿

又成吉思合罕は、忽必來に宣はく、力ある項力士の臂を壓
 けてくれたるぞ、汝此等忽必來者、勒篋者、別速別格台(即ち速、
 古出 古主温李可 李克薛)
 汝等四人の狗を、思ふ處に向けて遣れば、到れ云ふ處に岩
 を碎き、引け云ふ處に崖を破り、光る石を碎き、深き水を斷
坎谷論 合勒 合合論 超駭 超論 扯額勒 你秃論
 切りたりしぞ、汝等忽必來者、勒篋者、別速別額台、汝等四人の
 狗を指したる地に遣りて、孛斡兒出、木合黎、孛囉忽勒、赤刺溫
 巴阿秃兒、これら四人の駿馬(蒙語)、朶兒邊曲、魯兀惕(と)を側に置け

二先鋒

ば、(元史木華黎の傳に與博爾朮博爾忽赤老溫事太祖俱以忠勇稱)戰ふ日
ごなれば、主兒扯歹、忽亦勒答兒二人を、兀嚕兀惕忙忽惕を率
ゐて前に立たしむれば、都て心安くありき、我ご宣へり。(元史

十功臣

黎の傳に、木華黎薨じて子孛魯嗣ぎたる後、丙戌、太祖二十一年夏、詔封功臣、戸口
爲食邑、曰十投下、孛魯居其首、と云ひ、畏答兒、博羅歡の傳にも十功臣の目見えたる
るは、この十人を)汝、忽必來は軍の事務都てに長こして居らず

注意せらるゝ別
都温

やごて恩賜して勅ありき。又別都温の拗けたる故に、我怪み
て行きて、千戸を與へざりき。汝は彼に好くあるぞ。汝ご共に
千戸ごなりて議り合ひて行かれんご宣へり。又この後別都
温に注意くるぞ、我等ご宣へり。(別都温は、即ち卷三の抹赤、別都温なり。
抹赤は木匠にして、名は別都温なり。)

忽難の忠勤

又成吉思合罕は、格你格思の忽難につきて、宣はく、汝等孛
斡兒出、木合黎が頭たる官人ごもに、朶歹、朶豁勒忽等の扯兒

賓に、この忽難、黒き夜は雄狼、明き晝は黒き老鴉ごなりて、起

くる時は休まさりし、休む時は起きざりし、歹き人ご共に非

き面して居らざりし、讎ある人ご共に別なる面して居らざ

りし、忽難、闊朮思二人に相談無くて、勿事を做しそ。忽難、闊

闊朮思二人に相談して事を做せご勅ありき。我が子ごもの

兄にて拙赤はあるぞ。忽難は、格你格思に頭ごして、拙赤の下

に萬戸の官人ごなれご勅ありき。(元史世系表に、太祖皇帝六子、長朮

疏略なるが、洪鈞の元史譯文證補に補傳あり、また、説の二字) 忽難、闊朮思

送該、兀孫額不干(即ち巴阿鄰の)この四人は、見たる事を諱まず、

聞きたる事を匿さざりき。云云にて、これら四人はありしぞ。

(脱文あり、明譯には、但曾聞見的事、不曾隱諱、便來對我說了、この一

成吉思汗實錄卷の九

謀臣忽難闊朮思

拙赤の傳となる
忽難

忠直なる四臣

をさななじみの者勅度

節は明譯に「又説とある如く太祖の勅語なるべし。」

又成吉思合罕は、者勅度に宣はく「札兒赤兀歹翁は、風匣を負ひて、者勅度は搖車の内より擧げられて、不兒罕合勅敦より下りて來る時、斡難の河邊の迭里溫孛勒答黑に「我が母、我を生みたる時、貂鼠の襪襪を與へてありき。かくて伴となりたるに依り、闕の奴門の近習となりたるぞ。者勅度の功は多くあるぞ。生るゝと共に生れたる、長くるゝと共に長けたる、貂鼠の襪襪なる根源ある、福ある慶ある者勅度、九次の罪を犯すゝも刑に勿入れ、そと勅ありき。」

父と別に千戸となれる脱命扯兒必

又成吉思合罕は、脱命（卷八）に宣はく「父と子と別に千戸をいかでか知りたりし、汝、國民を聚め合ふ父に片方の翅を

なり、拽き合ひて國民を聚め合ひたる故に、扯兒必の號を與へたるぞ。今己の得たる置きたる「民」に依り己千戸となりて、秃嚙罕に議り合ひて居らずや、汝と勅ありき。（秃嚙罕の名は、前に兄弟多ければ、その兄弟の一人なるべし。）

狼羅を共にせる汪古兒

又成吉思合罕は、汪古兒厨官に宣はく「三人の脱忽喇兀惕（脱忽喇温の複稱）五人の塔兒忽惕、蒙格秃乞顔の子、汝、汪古兒敵失兀

惕、巴牙兀惕を率ゑ、汝等我に一つの團となりて、汝、汪古兒は、霧の裏に迷はざりしぞ、汝、亂の裏に離れざりしぞ、汝、濡るゝに濡れ合ひて、寒きに寒え合ひて行きたりしぞ、汝、今いかなる恩賞をか要むる、汝と宣へば、汪古兒申さく「恩賞を擇ばしめば、我が巴牙兀惕の兄弟は、部落部落ごとに散りたり。恩賜

汪古兒に屬する巴牙兀惕部

汪古兒孛囉兀勒
食物の給散

せば、巴牙兀惕の兄弟を聚らしめんと申せば、然り。かく巴牙
 兀惕の兄弟を聚めて、汝千戸を知れと勅ありき。又成吉思合
 罕勅あるには、汪古兒孛囉兀勒二人は、右左の側にて汝等二
 人の厨官は、食物を配る時、右の側に立てるもの坐れるもの
 に缺けさせず、左の側に列れるもの未なるものに缺けさせ
 ず、汝等二人にてかく給散すれば、我が喉嚢ばず心安くあり。
 今汪古兒孛囉兀勒二人は、馬に乗りて行きて、食物を多くの
 人に給散せよと勅ありき。坐に坐る時は、大なる酒局の右左
 の側に食物を掌りて坐れ。脱命等と共に北に向ひ坐れと坐
 を告げて與へたり。

訶額命の育てた
る葉兒四人

又成吉思合罕は、孛囉忽勒(即ち孛囉兀勒)に宣はく、我が母は、失吉

合兒吉勒失喇に
拖雷の盜まれ

忽秃忽、孛囉忽勒、古出闊出、汝等四人を、民の營盤より地よ
 り得て、脚の處に入れて、子とし育てて、養ふに、汝等の項を引
 きて、人古温と齊しくならしめて、汝等の肩を引きて、男と齊しく
 ならしめて、子ごもなる我等に伴額駙となり、影ならしめんご
 て、養ひたるぞ、汝等を養へる徳に、我が母に蓋幾ばくかは報
 い恩を廻したり、汝等、孛囉忽勒は、我に伴なひて、劇しき出征
 に、雨の夜忽喇乏しく宿らしめざりしぞ、汝抗合ひて居る敵の處
 に、湯なく宿らしめざりしぞ、汝、又御祖なる父を失ひたる、讎
 あり怨ある塔塔兒の民を屈服せしめて、讎復し、怨報い、塔塔
 兒の民を車轄に比べて根絶しに夷ぐる時、殺されたるに、塔
 塔兒の合兒吉勒失喇賊となり出でて、却困窮して飢ゑて入

りて來て、母の處に家に入りて、善く尋ねさすること有り、我
 と云ひて、善く尋ねさすること有らば、そこに坐れ、と云はれ
 て、(明)他説是尋衣食の、母親説既是尋衣食の時、那裏坐、西邊
 の床の門後に端に坐りて居る時、拖雷五歳なる外より入り
 て來て、却走りて出でて去りたるを、合兒吉勒失喇起ちて、幼
 兒を腋に夾みて出でて行きて去りながら、刀を引きて抜き
 つゝ、行く時、孛忽勒の妻阿勒塔泥は、母の家に東に坐りて
 居りき。母叫びて、子を失へり、と云へる。と共に、阿勒塔泥續き
 合ひ走りて出で合ひて、合兒吉勒失喇の後より趕ひて、彼の
 辮髮を拏へて、次の手にて、刀を抜きてある彼の手を拏へて、
 扯く。と共に、その刀を落しけり。家の北に哲台者勒篋二人、角

勇婦阿勒塔泥の
働き

哲台者勒篋に盜
人の殺され

頭功の争ひ

なき黒牛を食はん。と殺して居る時、阿勒塔泥の聲にて、哲台
 者勒篋二人、斧を執りて、拳を赤くして、走りて來て、塔塔兒の
 合兒吉勒失喇を斧にて刀にて、刀にてすぐそこに殺しけり。阿勒塔
 泥、哲台者勒篋三人、子の命を救へる頭功を争ひ合ひたれば、
 哲台者勒篋二人言はく、我等無かりせば、疾く走りて到りて
 殺さざりせば、阿勒塔泥は、婦の人、いかにありけん。子の命に
 害を致したりけん。頭功は我等のなるぞ、と云へり。阿勒塔泥
 言はく、我が聲を聞かざりせば、汝等いかで來にけん。我走
 りて趕ひて彼の辮髮を拏へて、刀を抜きたる彼の手を扯き
 て、刀を落さざりせば、哲台者勒篋二人到りて來るまでに、子
 の命に害を致さずや、はありけん、と云へり。言ひ畢へたれば、

阿勒塔泥のとな
れる頭功

幹歌歹を救ひた
る李囉忽勒

頭功は、阿勒塔泥のとなれり。李囉忽勒の妻は、李囉忽勒に第二の轅となり、拖雷の命に功となり。又李囉忽勒は、容唎亦惕と合刺合勒只惕の沙漠に戦へる時、幹歌歹は頸脈を箭に射られたれば倒れたれば、李囉忽勒は、上に下り合ひて、凝りたる彼の血を口にて唾ひて、夜宿り合ひて、明朝馬に乗りしめて、坐りかぬるを、尻馬に乗りて、幹歌歹の後より抱きて、塞れる血を唾ひ唾ひ口の縁を赤くして、幹歌歹の命を安らかに送りて來てありき。我が母の養へる勞りたるに報い、我が二人の子の命に功となりたるぞ。李囉忽勒は、我に伴なひて、招ぎ喚びに、聲應後れたるこそなかりしぞ。李囉忽勒は、九次罪を犯すとも勿罪なひそと勅ありき。

女子の恩賞

別乞とせらるゝ
豁兒赤兀孫翁

又女子家族に恩賞を與へんと宣へり。

又成吉思合罕は、兀孫翁(豁兒赤)に宣はく、兀孫、忽難闊、闊、思迭該、この四人は、見たる事聞きたる事を諱み匿さず告げ居たりき。心附きたる事考へたる事を語り居たりき。忙豁勒の體例には、官人の制に別乞となる法ありき。巴阿嚙は、兄の子孫なりき。(巴阿嚙の遠祖巴阿哩歹は、李端察兒の長)別乞の制は、我等の内にて上より爲る法なれば、別乞に兀孫翁爲れ。別乞に戴く、白き衣を着せて、白き驢馬に乘らしめて、位の上に坐らせて、侍きて、又年月に議りてかく有れと勅ありき。(別乞は、稱號なり。蒙古の諸部長往別乞と稱する者あり。薛徹別乞は、合不勒合罕の長子の孫にして、禹兒斤の長なり。忽察兒別乞は、也速該の兄の子なるが故に、別乞と稱せり。兀都亦惕、篋兒乞惕の脱黑脱阿別乞、その長子脱古思別乞、朶兒邊の合只温別乞、幹亦喇惕の忽都合別乞は、皆その一族の長なり。王罕に事へたる必勒

別乞の稱號

格別乞も或一族の長なるべし。但太祖の女斡真別乞、阿剌合別乞、桑昆の妹察兀兒別乞、札合敢不の二女亦巴合別乞、莎兒合、黑塔泥別乞の如く女子にして別乞と稱するは、美稱に用ふるのみにて、族長の別乞とは異なり。又輟耕錄の白道子の條に「國俗尙白、以白爲吉」とあれば、別乞の白衣を被るは優禮に出でたるなり。黑韃事略に蒙古の衣服の事を述べて「色用紅紫紺綠、以日月龍鳳無貴賤等差」と云ひて、白衣の事を少しも云はざるを見れば、この優禮を受くるものは極めて稀なりし。

まづ口を開きたる忽亦勒答兒の遺族の恩賞

又成吉思合罕宣はく、忽亦勒答兒安答は、戦ふ時に命を差出して先口を開きたる功の故に、子孫の子孫に至るまで孤兒の恩給を受けて居れ、と勅ありき。

札木合に殺されたる察罕豁阿の遺子の恩賞

又成吉思合罕は、察罕豁阿（卷四の察合安兀阿）の子納斡、脱斡、哩勒、巴勒、主惕に戦へる時、札木合に殺されき。今脱斡、哩勒は、父の功にて孤兒の恩給を受けよ、と宣はれて、脱斡、哩勒申さく、恩

賜せば、我が捏古思の兄弟は、他の部落ごとに散りたり。恩賜せば、その捏古思の兄弟を聚めて、んご申せば、成吉思合罕勅あるには、しかあらば、捏古思の兄弟を聚めて、汝は子孫の子孫に至るまで知りて居らずや、と勅ありき。（捏古思氏の人、元傳に「徹徹、担古思氏」とあるを、錢大昕の氏族表に「担亦捏之譌」と云へり。）

鎖兒罕失喇父子の舊恩

又成吉思合罕は、鎖兒罕失喇に宣はく、我を小き時に泰赤兀惕の塔兒忽台乞哩勒、秃黑兄弟に嫉みて拏へられ、たれば、そこに兄弟に嫉まれたり、とて、鎖兒罕失喇は、赤刺溫、沈伯なる子ごにも、合答安なる女に世話せしめて、匿して居て、我を放ちて遣りたるぞ、汝等、汝等の彼の恩好きを想ひて、黒き夜の夢の裏に明き晝の宵の裏に、想ひて行きたるぞ、我、汝等は、

薛涼格の營盤自在の願

却て我に泰赤兀惕より遅く來しぞ。今我汝等に恩賜せば、いかなる恩賜をか欲する汝等と宣へり。鎖兒罕失喇は、赤刺溫沈伯なる子ごもご共に申さく「恩賜せば、營盤自在ならん。篋兒乞惕の地なる薛涼格を營盤として自在ならん。又別に恩賜せば、成吉思合罕知しめせ」と申せり。その時成吉思合罕宣はく「篋兒乞惕の地なる薛涼格を營盤として、營盤又自在なれ。子孫の子孫に至るまで、箭筒を帶ばしめて、喝蓋せしめて、自在なれ。九次の罪に刑に勿入り」と勅ありき。又成吉思合罕は、赤刺溫、沈伯二人に恩賜して「前に赤刺溫、沈伯二人の言へる言を想ひては、いかなぞ忘れん汝等を」赤刺溫、沈伯、汝等二人、心に言ふことあらば、不足を求むることあらば、聞の人

直に願を言ひ得る詩し

鎖兒罕失喇巴歹乞失里黑三人の答兒罕

に勿語りそ。己身にて口にて我に汝等自思へることを語れ。不足を自ら求めよ」と勅ありき。又鎖兒罕失喇、巴歹、乞失里黑、汝等は自在なれ。又自在なるには、多き敵に馳りて、財を得たるに依りて取れ。野の獸を圍獵せば、殺したるに依りて取れ。ご勅ありき。鎖兒罕失喇と云へば、泰赤兀惕の脱迭格の家人なりしぞ。巴歹、乞失里黑二人と云へば、扯嘩忽闌巴阿秃兒の子也客扯嘩の馬飼なりしぞ。今は我が信臣、箭筒を帶ばしめて、喝蓋せしめて、自在に快活なれ」と勅ありき。自在なるは答兒合刺忽得たる官人を答兒罕龍飛日朝廷草創官制簡古惟左右萬戶次及千戶而已丞相順德忠獻王之曾祖啓昔禮以英材見遇擢任千戶錫號答刺罕至元壬申世祖錄勳臣後拜王宿衛官襲號答刺罕とあり答刺罕は即答兒罕啓昔禮は即乞失里黑忠獻王は世祖成宗の朝の名相哈刺哈孫なり。

正主を廢てかねたる納牙阿の恩賞

又成吉思合罕は納牙阿に宣はく「失兒歌禿翁(卷五の失兒古額禿翁)は、阿刺黑、納牙阿なる子ごもご(即汝等)、塔兒忽台乞哩勒禿黑を我等の處に拏へて來る時路にて忽禿忽勒の隅に到りて、そこに納牙阿言はく「正主の君をいかで廢て、拏へて往かん、我等」云ひて、廢てかねて放して遣りて、失兒歌禿翁は、阿刺黑、納牙阿なる子ごもご來て、そこに納牙阿必勒只兀兒(必只兀兒は、雲雀なり。納牙阿の號か)言はく「正主の君を塔兒忽台乞哩勒禿黑を手(り。納牙阿の號か)に掛けて來ぬるに却て廢てかねて放して遣りて、我等は、成吉思合罕に力を與へんご來ぬ。その君を手(り)に掛けて來なば、正主の君を手(り)に掛けたる人、久後いかなぞ倚信せられん、此等の「人」云はれんご云ひき。その君を廢てかねたり」云へ

右左中の萬戸

者別速別額台の封戸

迭該の封戸

古出古兒木勒合勒忽の封戸

ば、そこに正主の君を廢てかねたる理は大なる道理を思ひけり。さて、彼等の言を善しとして「一つの句當を委ねん」云ひき。今孛斡兒出に右手の萬戸を知れ、知らしめ、木合里に國王の號を與へて左手の萬戸を知らしめたり。今納牙阿は、中の萬戸を知れ、勅ありき。又者別速別額台二人は自得たる置きたる「民」に千戸なれ「ご宣へり。又迭該なる羊飼に、(卷三に、迭該は羊を牧する)埋れたる「明無籍的百姓」を聚めて千戸を知らしめたり。又古出古兒木匠は、(卷三に、古出古兒は家車の修造を)民缺けて、こゝよりそこより收めて、札荅欄より木勒合勒忽親しきに

依り伴なひき。古出古兒木勒合勒忽二人は、一つに千戸ごなりて議り合ひて居れご宣へり。

親衛を萬に滿た
する勅

國を共に立てたる共に艱難したる者ごもを千戸の官人ごなして千を千ごして千戸百戸十戸の官人を任して、萬を萬ごして萬戸の官人を任して、萬戸千戸の官人ごもに恩賞を與ふべき者には恩賞を與へて、恩賞の勅ある者には有りて、成吉思合罕勅あるには前に八十の宿衛あり、七十の侍衛の番士有りたりき。今長生の上帝の力にて天地に力勢を添へられて、普き國民を匡して、獨の調度の内に入れたる時、今我が處に番直する侍衛を千戸千戸より選びて入れよ。入るゝには、宿衛、箭筒士、侍衛に入るゝには、萬に滿たせ入れよ。

番士を選び弟と
從士とを隨へし
むる勅

ご勅ありき。又成吉思合罕は、番士を選びて入るゝことを勅を千戸千戸に傳へけらく、我等の處に番士を入るゝに、萬戸千戸百戸の官人の子ごも、白身の人の子ごも入る時、技能あり、狀好き者を、我等の前に行くべき者を入れよ。千戸の官人の子ごもを入るゝには、十人の從士あり、彼の第一人を隨へて來よ。百戸の官人の子ごもを入るゝには、五人の從士あり、一人の弟を隨へて來よ。十戸の官人(即牌子頭)の子ごもを入るゝにも、白身の人の子ごもを入るゝにも、三人の從士あり、亦一人の弟を隨へて、初より乘馬氣力を調へて來よ。我等の處にて前に行かしまるゝことを勵ますに、千戸の官人の子ごもには、十人の從士を本の千戸百戸より科斂して與へよ。そ

の父與へたる分民あらば彼の身自得たる置きたる人口驕馬幾ばくか有らば、昵近の分民より外にて我等の限りたる限りに依り科斂して、かく科斂して整へて與へよ。百戸の官人の子ごもに五人の従士を、十戸の官人の子ごもに自身の子ごもに三人の従士を、只亦法に依り彼の昵近の分民より外にて、只かく科斂して與へよ。と勅ありき。千戸百戸十戸の官人眾の人、我等の此の勅を致さしめて、聞きてありながら越えたる人は罪あるごなれ。我等の處に番直に入れられたる人にて避けて爲らざる人、我等の前行くごを難しごせば、別なる人を入れて、その人をば罪なひて、眼の陰(力の及ば)に遠き地に遣れ。と勅ありき。我等の内裏に前に行き

勅を越ゆる罪

千宿衛の長也客捏兀鄰

て學び合はんご云ひて我等に來る人を勿妨げそ。と宣へり。成吉思合罕の勅ありたるに依り、千戸より選びて、百戸十戸の官人の子ごも、その勅に依り選びて出して來て、前に八十の宿衛ありしを八百に爲したり。八百の上に千に満たせよ。と云へり。宿衛に入る者を勿妨げそ。と勅ありき。宿衛には也客捏兀鄰長となりて、千夫を知りて居れ。と勅ありき。(宿衛を也客捏兀鄰統べてと譯すべきなれども、統ぶるの蒙語阿合刺は、阿合即長となると云ふ義なる故に「宿衛を」のををにと改めたり。下皆これに準ふ也客捏兀鄰は、何人なるか知らず。見裕壇の)前に四百の箭筒士を選びたり。選びて「箭筒士に者勒篋の子也孫帖額長となりて、秃格の子不吉歹ご議り合ひて居れ。と云へり。(也孫帖額は、憲宗紀に葉孫脱等と共に「務持兩端、坐誘諸王爲亂、並伏誅とあり。者勒篋の子孫の顯れざるは、也孫帖額の誅せられたるが爲ならん。秃格は、即卷四なる統格木合黎の從弟にし

箭筒士四班の長也孫帖額不吉歹
豁兒忽答忽刺卜
刺合

千箭筒士の長也
孫帖額

八千侍衛の長八
人

幹格列扯兒必

不合

て九十五の千戸の第十に列せり。その子不吉歹は太祖に代りて許侍衛の
婚の饗に赴きたる不合台と音近けれども同じきか否か知らず。侍衛
共に箭筒士の班に入り合ふ時也孫帖額は一班の箭筒士
に長となりて入れ。不吉歹は一班の箭筒士の長となりて入
れ。豁兒忽答黒は一班の箭筒士に長となりて入れ。刺卜刺合
は一班の箭筒士に長となりて入れ。(豁兒忽答黒は卷十二にも見
あり。) 箭筒を帶ぶるものに侍衛の班に貼く箭筒士にか
く長となりて入らせよ。箭筒士を千に満たせて也孫帖額長
となりて居れ。勅ありき。

前に幹格列扯兒必ご入りたる侍衛の上に千に満たせて
「孛斡兒出の親族より幹格列扯兒必(孛斡兒)は知れ」ご宣へり。
「木合里の親族より不合(木合里)は一千の侍衛を知れ」ご宣へ

阿勒赤歹

朶歹扯兒必

孕豁勒忽扯兒必

察乃

阿忽台

阿兒孩合撒兒

り。亦魯該の親族より阿勒赤歹に一千の侍衛を知れ。ご宣へ
り。(阿勒赤歹は卷六に見えたる合赤温の子阿勒赤歹と名同じけれども、異な
る人なり。元史憲宗紀に按只得とあり。憲宗即位の年葉孫脫等と共に諸王
を亂に誘へり。) 一千の侍衛を朶歹扯兒必知れ。一千の侍衛を
朶豁勒忽扯兒必知れ。ご宣へり。一千の侍衛を主兒扯歹の親
族より察乃知れ。一千の侍衛を阿勒赤の親族より阿忽台知
れ。(阿勒赤は即阿勒赤古喇堅。元史の國舅按陳那顔なり。阿忽台と云へる人は、
老温迤東塗河潢河の間火兒赤納慶州の地を住所として賜) 一千の侍衛を
はれること見ゆ。その火忽は阿忽台の訛略にはあらずや。) 一千の侍衛を
阿兒孩合撒兒知れ。二千の選びたる勇士を知りて、多くの日
は侍衛ごなれ。戦ふ日は前に立ちて勇士ごなれ。ご勅ありき。
(卷八なる九十五の千戸の處に、亦魯該は阿兒孩ならんと云ふ疑ひを陳べた
れども、ごいに亦魯該の名ある續きに又阿兒孩合撒兒あるを見れば同じ人
とも思はれず。) 千戸千戸より選びて來つるもの、八千の侍衛ごなれ

萬の番士よりなれる大中軍

り宿衛は、箭筒士と共に二千になれり。三つ(宿衛、箭筒、土侍衛)并せて萬の番士となれり。成吉思合罕勅あるには「我等の身に貼ける萬の番士を勵まして大中軍となり居れ」と勅ありき。

番直の宿老四人 不合阿勒赤歹朶 歹朶豁勒忽

又成吉思合罕勅ありて、侍衛の四班の宿老たる者に任し「不合は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。阿勒赤歹は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。朶豁勒忽、兒必は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ」とて、四班の宿老を任して、番直に入る勅を傳へ「番直に入るには、番直の官人、己の處に番直する番士を點檢して、番直に入りて、三たび宿り合ひて、代り合へ。番直ある(番直に)人番直を脱さば、その番直を脱

番士の點檢

缺勤の罰

勅の言ひ聽かせ

したる番士に三つの筈を與へよ。その番士又二たび番直を脱さば、七つの筈を與へよ。又その人、身に病なく、番直の官人等に相談なく、又その番士三たび番直を脱さば、三十七の筈を與へて、我等の處に行くことを艱しとしたれば、(眼の陰に)遠き地に遣らんと勅ありき。(番直の宿老、蒙語に客失昆幹、脱古と云録に曰く、國朝有四怯薛大官、怯薛者分宿衛供奉之士、爲四番番三) 番直の宿老は、第三、第三の番直に(當番の三日)この勅を番士に聽かせよ

(明)掌護衛的官人、凡換班時、將這言語省會一遍。聽かせずば、

番直の宿老罪となれ。勅を聽きてありて越えば(犯さ)、勅の旨に依り、番直を脱さば、番士は罪となれ」と勅ありき。番直の宿老は、長こなられたりこのみ云ひて、同等に入りたる我が番

宿老番士の同等

士を我に相談無くして勿責めそ。法度を動かさば、我に告げよ。斬らしむる理あるならば、我等は斬らしむるぞ。打たるゝ理あるならば、臥さしめて打つぞ。長さなれりこのみ云ひて、同等の我が番士を己が手足を致して答打たば、答の報に答を亦拳の報に拳を亦回さん」と宣へり。

千戸より上にある番士

又成吉思合罕勅あるには、外に居る千戸の官人より我が番士は上に在るぞ。外に居る百戸十戸の官人より我が番士の家人は上にあるぞ。我が番士に、外に居る千戸ごも、同等となりて竝びて、我が番士と殴ち合はば、千戸の人を罪せん」と勅ありき。

箭筒士侍衛厨官の勤方

又成吉思合罕勅ありて、班班の官人ごもに勅を傳ふるに

「箭筒士侍衛等、番直に入りて、晝の行ひを各その道道に行ひて、日の光あるに宿衛に譲りて、外に出でて宿れ。我等の處に夜は宿衛宿り居れ。箭筒士は箭筒を、厨官は器皿を宿衛に渡して去れ。外に宿れる箭筒士侍衛、厨官は、我等湯を飲むまで、聚馬處に坐りて、宿衛に届けて、湯を飲み畢へば、箭筒士は箭筒の處に、侍衛は坐の處に、厨官は器皿の處に復り合へ。班班に入る者は、只只道理に依りこの體例に依りかく爲せ」と勅ありき。日落ちたる後、斡兒朶の後より前より越え行く人を拏へて、宿衛は拏へて宿りて、明朝宿衛は彼の言を聞け。宿衛は、番直に代り合ふには、その符を渡して入りて來よ。代りて出づる宿衛も、渡して出でて去れ」と宣へり。宿衛は、夜斡兒

宿衛の勤方

宿衛の威嚴

朶の周圍に臥して、門を壓へて立てる宿衛は、夜入る人をば、
 その頭を打割り、その肩を落つるほど斫りて去けよ。急ぎの
 話ある人夜來なば、宿衛に話して、帳房の北より宿衛一處
 に立ちて話さしめよ。宣へり。宿衛より上の坐には、誰も勿
 坐り。その宿衛より言なくては、誰も勿入り。その宿衛の上を誰も
 勿行き。その宿衛の閒を勿行き。その宿衛の數を勿問ひ。その宿衛の
 上を行く人を宿衛は拏へよ。閒を行く人を宿衛は拏へよ。數
 を問へる人をば、宿衛は、その人を、その日乗れる驕馬鞍あり
 轡あるを、被たる衣服ごめに宿衛は取れ。ご勅ありき。額勒只
 吉歹は、信任ある人なるに、夕に宿衛の上を行けるありて、宿
 衛にいかんぞ拏へられける。(額勒只吉歹は、合赤溫の子阿勒赤歹、即
 世系表に按只吉歹とある人と名似た)

れども異なる人なり。後文にも元史にも屢見ゆ。八十八功臣の中には見えず。か
 の名前の内に阿勒赤と云ふ人あり餘り名の聞えぬ人なり。阿勒赤吉歹の吉歹
 を脱したるにあらすやとも疑はる。(

成吉思汗實錄卷の九終り。

成吉思汗實錄卷の十

老宿衛

成吉思合罕宣はく雲ある夜我が天窓ある房の廻りに臥
額元列
 して靜に睡らしめてこの位に到らせたる老功の我が宿衛
額元列
 星ある夜我が帳殿の房の周圍に臥して蒲團の内を驚かさ
額元列
 ざりし慶ある我が宿衛は高き位に到らせたり變動し居る
額元列
 風雪に顛かし居る冷氣に瀉ぎ居る雨に我が編壁ある房の
額元列
 周圍に休を爲さず立ちて心を安からしめたる誠の心ある
額元列
 我が宿衛は快活なる位に到らせたり亂れ居る敵の中に我
額元列

成吉思汗實錄卷の十

が土堤亦兒格ある家の周圍希兒篋思に瞬亦楊合もせず勸亦楊合めて立ちたる頼亦帖格勒ある我が宿衛兀亦勒孫樺皮忽必思の箭筒密只楊を動忽必思し爲せば後密只楊れて立たざりし快忽兒敦く行忽兒敦く我が宿衛兀亦勒孫慶忽必思ある我が宿衛兀亦勒孫ごもを老宿衛宿衛士（宿衛兀亦勒孫功忽兒敦）ご云へ。幹忽兒敦歌列忽兒敦扯兒忽兒敦必忽兒敦ご入りたる七十忽兒敦の侍衛忽兒敦ごもを大侍衛忽兒敦ご云へ。阿忽兒敦兒忽兒敦孩忽兒敦（即忽兒敦ち阿兒忽兒敦）の勇士忽兒敦ごもを老勇士忽兒敦ご云へ。也忽兒敦孫帖額忽兒敦不吉忽兒敦歹忽兒敦等忽兒敦の箭筒忽兒敦士忽兒敦ごもを大箭筒忽兒敦士忽兒敦ご云へ。ご勅忽兒敦ありき。

大侍衛
老勇士

大箭筒士

愛撫すべき萬の番士

「我が九十五忽兒敦の千戸忽兒敦より身に貼忽兒敦く近臣忽兒敦に選忽兒敦びて來忽兒敦つる萬忽兒敦の親近忽兒敦なる我が番士忽兒敦を久後忽兒敦我が位忽兒敦に坐忽兒敦りたる子忽兒敦ごも、我が子孫忽兒敦の子孫忽兒敦は、この番士忽兒敦を遺念忽兒敦の如忽兒敦く想忽兒敦ひて、怨忽兒敦みしめず、善忽兒敦く扱忽兒敦へ。この萬忽兒敦の番士忽兒敦を我がめでたき福忽兒敦の神忽兒敦ご云忽兒敦ひて居忽兒敦らずや。ご宣忽兒敦へり。

宿衛の掌る雜務

又成吉思汗忽兒敦合罕忽兒敦宣忽兒敦はく、幹忽兒敦兒忽兒敦朶忽兒敦の侍女忽兒敦（蒙忽兒敦ちえる賓忽兒敦幹忽兒敦乞忽兒敦惕忽兒敦の女忽兒敦）家忽兒敦僮忽兒敦（語忽兒敦格忽兒敦諭忽兒敦可忽兒敦兀忽兒敦惕忽兒敦子忽兒敦）駱駝忽兒敦飼忽兒敦（語忽兒敦帖忽兒敦篋忽兒敦額忽兒敦臣忽兒敦者忽兒敦曰忽兒敦帖忽兒敦蔑忽兒敦赤忽兒敦に牧忽兒敦駱駝忽兒敦）牛忽兒敦飼忽兒敦（語忽兒敦蒙忽兒敦忽忽兒敦客忽兒敦臣忽兒敦）を宿衛忽兒敦は取締忽兒敦めて、幹忽兒敦兒忽兒敦朶忽兒敦の房車忽兒敦を調忽兒敦へよ。鼙鼓忽兒敦朶忽兒敦囉忽兒敦（明本語譯には下とあ）鎗忽兒敦を宿衛忽兒敦調忽兒敦へよ。器皿忽兒敦をも宿衛忽兒敦調忽兒敦へよ。我等忽兒敦の飲物忽兒敦食物忽兒敦を宿衛忽兒敦支度忽兒敦せよ。稠忽兒敦き肉忽兒敦の食物忽兒敦をも宿衛忽兒敦支度忽兒敦して煮忽兒敦よ。飲物忽兒敦食物忽兒敦不足忽兒敦ならば、支度忽兒敦せられたる宿衛忽兒敦に尋忽兒敦ねよ。ご宣忽兒敦へり。箭筒忽兒敦士忽兒敦に飲物忽兒敦食物忽兒敦を配忽兒敦るに、支度忽兒敦したる宿衛忽兒敦に相談忽兒敦無忽兒敦くて勿忽兒敦配忽兒敦りそ。食物忽兒敦を配忽兒敦るに、まづ宿衛忽兒敦より始めて配忽兒敦れ。ご宣忽兒敦へり。幹忽兒敦兒忽兒敦朶忽兒敦の房忽兒敦に入り出忽兒敦づるを宿衛忽兒敦整忽兒敦へよ。門忽兒敦には宿衛忽兒敦の門者忽兒敦（語忽兒敦蒙忽兒敦額忽兒敦兀忽兒敦迭忽兒敦臣忽兒敦）家忽兒敦に倚忽兒敦りて立て。宿衛忽兒敦より二忽兒敦人忽兒敦入りて大酒局忽兒敦を執忽兒敦りて居忽兒敦れ。ご宣忽兒敦へり。宿衛忽兒敦より營盤忽兒敦官忽兒敦（語忽兒敦蒙

嫩禿兀臣（元史）行きて斡兒朶の房を下せ（据）宣へり我等鷹使ひ圍獵する時宿衛は我等と共に鷹使ひ圍獵しに行け車（元史）に獲物の半を分けて置き（元史）宣へり（元史）車馬廬帳府庫醫藥卜祝之事悉世守之雖以才能受任使服官政貴盛之極一日歸至內庭則執其事如故至於子孫無改非其親信不得預也（元史）

宿衛の軍を出さざる理由

又成吉思合罕宣はく我等の身軍に出でずば宿衛は我等より外に軍に勿出でそ（元史）宣へりかく云はれて勅を越えて宿衛を嫉みて軍を出すものあらば軍を知れる扯兒賓罪ある（元史）こなれ（元史）と勅ありき宿衛の軍はいかんと出されざる（元史）云へるぞ汝等宿衛は但我等の金の命を守るなり鷹狩圍獵に行く時働き合ふなり斡兒朶を預けられて起つ時靜なる時車を調ふるなり我が身を守りて宿衛（元史）こ容易からんや家

車大老營を起つ時居る時調ふる（元史）こ容易からんやかく重き離れ離れの働（元史）きある（元史）こを云ひて我等より外に別に軍に勿行き（元史）そ（元史）云へるはかくある（元史）ぞ（元史）宣ひき

宿衛の陪審また雑務

又勅あるには失吉忽禿忽の裁斷に宿衛より人を出して裁斷を共に聽け（元史）と宣へり宿衛より箭筒弓甲器械を調へて配り合へ駟馬を調へて網索を駄けて行け（元史）と宣へり宿衛より扯兒賓（元史）と共に段匹を配れ（元史）と宣へり箭筒士侍衛の營を告ぐる（元史）（定む）には也孫帖額不吉歹等の箭筒士阿勒赤歹斡歌列阿忽台等の侍衛は斡兒朶の右の邊に行け（元史）と宣へり豁兒忽答黒刺卜刺合等の箭筒士不合朶歹扯兒必多豁勒忽扯兒必察乃等の侍衛は斡兒朶の左の邊に行け（元史）と宣へり阿兒孩の

斡兒朶の右左前なる箭筒士侍衛の屯營

殿中を監視する
朶歹扯兒必

勇士ゆうしどもは、斡兒朶おんじらの前にまへに行けゆ。宣のりたまへり。宿衛しゆくゑいは、斡兒朶おんじらの家いへ車くるまを調ととのへて、斡兒朶おんじらの前の左ひだりの邊はたに行けゆ。宣のりたまへり。(明譯は帳殿根前左右の字脱ちたるなるべし。)許多あまたの番直ばんちやくする侍衛じゑいを、斡兒朶おんじらの周圍まわり、斡兒朶おんじらの家いへ僮こを、馬飼うまかひ、(蒙語)阿都兀臣あとうちん、羊飼ひつじかひ、(蒙語)豁你臣くわつにちん、元史えんしに「牧ま羊者曰い火くわ」駱駝らくだ飼かひ牛飼うしかひを、常つねに朶歹扯兒必おんじら氣きを付つけて居ゐれ。ご任とんし給たまへり。朶歹扯兒必おんじらは、常つねに居ゐて、斡兒朶おんじらの後うしろより枯草かれくさを喫くひて、乾糞かんぶんを燒やきて行ゆけ。ご勅みことありき。(末の一語は、掃除せよとの意なるべきか。確ならぬ兼ねて殿中監の職務をも執れるなり。この職務は太祖始めて合罕となれる時「家の内の婢僕どもを統べん」と云へるに同じ。)

合兒魯兀惕の降
附

忽必來那顏おんじらに合兒魯兀惕おんじらを征せいけさせたり。合兒魯兀惕おんじらの阿兒思闌罕あにせんかんは、忽必來おんじらに降くだり來きぬ。忽必來おんじら那顏あにせんは、阿兒思闌罕あにせんを率ひきゐ來きて、成吉思合罕おんじらに見まえさせたり。敵對てきたいせざりきこて、

成吉思合罕おんじらは、阿兒思闌あにせんを恩賞おんじやうして、女むすめを與あたへん。ご勅みことありき。

合兒魯黒の異文

喀牙里克の君を
兼ぬる合兒魯黒
罕

(合兒魯兀惕は、合兒魯黒の複稱、唐書の葛邏祿なり。葛邏祿は、鐵勒諸部の一にして唐の世に北庭の西北金山の西に居り、その盛なる時は碎葉、怛邏斯の諸城をも有ちしが、宋の世に至りて國衰へ、西遼の屬國となれり。烏古孫仲端の北使記元史鐵邁赤の傳に合魯親征錄太祖紀沙全の傳儒學伯顔の傳に哈刺魯哈刺解の傳に哈魯也罕的斤の傳に匣刺魯とあり。輟耕錄の色目三十一種の中には哈刺魯とも匣刺魯とも書けり。珀兒沙の亦思塔黑哩の書には喀兒列怯普刺諾喀兒闌尼の紀行には科囉刺と云へり。元史地理志の西北地附錄には柯耳魯とありて、經世大典の圖に柯耳魯は阿力麻里即ち阿勒馬里克今の伊犁の西北に載せたり。親征錄に「辛未春、上居怯連河時、西域哈刺魯部主阿昔蘭可汗來歸、因忽必來那顏見上」とあり。元史も太祖六年辛未の條にこの事を記せり。多遜は、主吠尼の史を譯して、突兒克喀兒魯克の酋長にして喀牙里克の君なる阿兒思闌汗、阿勒馬里克の君なる斡兀兒二人とも合喇乞台の古兒汗の臣なりしが、一二年來て成吉思汗に從ひ、成吉思汗は、阿兒思闌に宗女を與へたり」と云へり。喇失惕の記載は、秘史に同じくして、只皇女をば主吠尼と同じく宗女とし、「阿兒思闌汗の號存すべからざるに依り、撒兒惕の號を賜へり」と云へり。合兒魯兀惕の罕は、喀牙里克の君を兼ぬるとあれば、その國は、喀牙里克の邊、即ち巴勒喀什湖の東南にあるべし。喀牙里克は、嚙朶嚙克の紀行に、喀亦刺克と云ひ、元史憲宗紀二年夏分遷諸王於各所の條に、海都於海押立地」とありて、太宗の孫なる海

世元の駙馬

都の分地となり、海都の亂に世祖の兵は阿勒馬里克に進み、阿刺套山を隔てて相對し居たり。大佐裕勒はその地は今の關帕勒に近しと云へり。一八五七年、ある塔兒人、關帕勒の古墳より古き金環を寶石と共に發見し、その金環に突兒克字にて阿兒思關と刻みてありしは、珍らしき掘出物なり。露西亞の地學協會の報告、一八六七年第一編第二百九十一頁に「諸公主表に「脱烈公主、適阿爾思蘭子也。先不花駙馬」とありて、皇女とも宗女とも云はず。又表には阿兒思關を駙馬と云はざれども、諸書みな阿兒思關に妻せたりとあれば、これも先に阿兒思關に配し、後にその子に配したるを、公主表は諱みて後、駙馬のみを擧げたるならん。又脱烈公主の次に「八八公主、適也先不花子忽納答兒駙馬。某公主適忽納答兒子刺海涯里那駙馬」とあれば、阿兒思關の後には曾孫までも世元の駙馬しとなり。」

篋兒乞惕の遺孽の勦滅

速別額台巴阿秃兒は、鐵の車にて、篋兒乞惕の脱黑脱阿の

丁丑の年なる嶺河の戰

忽秃赤刺温等なる子どもを追ひに出征して、垂河に追詰めて窮めて來ぬ。(親征錄に曰く、辛未、遣將脱忽察兒、率騎二千出哨西邊戎、丁丑、上遣大將速不台、拔都、以鐵裹車輪、征蔑兒乞、還と云ひ、喇失惕も、この戰を記して、牛の年の事とし、嶺河を真河と書けり。元史本紀は三年戊辰の也兒石河の戰に討蔑里乞部滅之と書きて、十二年丁丑には速不台の征戰を載せず。速不台の傳に曰く、滅里吉部強盛不附。丙子、帝會諸將於秃兀刺河之黑林、問

康都に奔れる忽

誰能爲我征滅里吉者、速不台請行。帝壯而許之。乃選裨將阿里出領百人先行、覘其虛實。速不台繼進。云云。己卯、大軍至嶺河。與滅里吉遇。一戰而獲其二將。盡降其眾。其部主霍都奔欽察。速不台追之。與欽察戰于玉峪。敗之。丙子、十二年丁丑の河と書き、その戰を一二一六年即ち丙子の事とせり。諸書を合せ考ふるに、蓋子の年に軍を出し、丑の年に垂河に戰ひ、卯の年に餘孽悉く平ぎたるならん。親征錄の嶺河、喇失惕の真河、多遜の哲姆河、速不台の傳の嶺河は、秘史の垂河と同じきか異なるか、知らず。霍都の欽察に奔れることは、卷八にも、忽都合惕赤刺温等の篋兒乞惕は、康都、欽察、兀惕を過ぎ去りきと云ひ、土土哈の傳には、太祖征蔑里乞、其主火都奔、欽察、欽察國主亦納思納之。太祖遣使諭之。云云。亦納思答云云。太祖乃命將討之とあれども、西域の諸史には、更にその事なし。喇失惕は、忽都合惕察克に奔らんとしたるを、蒙古の軍に捕へ殺されたりと、別例津卷一第七十三頁に云ひ、多遜の史には、篋兒乞惕の會秃克脱干は、蒙古に逐はれ、眾を率ゐて甞滅ぼせりとあれ、篋兒乞惕の走りて、康都の地に入りたるは、實らしけれども、欽察に奔れりと云へるは、傳聞の誤りなるべし。

古出魯克罕の勦滅

者別は、乃蠻の古出魯克罕を追ひて、撒哩黑昆に追詰めて、

古出魯克を窮めて來ぬ。(親征錄戊寅、太祖十三年、木華黎國王南征、の次に別遣大將哲別、攻曲出律、可汗至撒里桓地、克

古出魯克の西遼篋奪

之とありて、その簡略なること、秘史と同じ。遼史天祚紀の末に、西遼の興亡を附記し、遼の徳宗、耶律大石の自立より、大石の妻、感天太后塔不煙、その子仁宗、夷列

夷列の妹承天太后普速完を歴て、夷列の子直魯古に至り、直魯古即位、改元天禧、在位三十四年。時秋出獵、乃蠻主屈出律以伏兵八千擒之、而據其位、襲遼衣冠、尊直魯古爲太上皇、皇后爲皇太后、朝夕問起居、以侍終焉。直魯古死、遼絶とあり、屈出律は即ち古出魯克にして、その西遼に奔れるは、親征録主吠尼に據るに、太祖三年戊辰、西紀一二〇八年にあり、古出魯克の西遼を篡へるは、錢大昕の考證と主吠尼の史とに據るに、太祖六年辛未、西紀一二〇一年にあり、直魯古の死は主吠尼喇失惕の書に據るに、國を奪はれて憂悶し、二年を歴て病死したるなり。長春の西遊記に、自金師破遼、大石林牙領眾數千走西北、移徙十餘年方至此地云云。延袤萬里、傳國幾百年、乃滿失國、依大石、士馬復振、盜據其土、繼而算端西削其地、天兵至、乃滿尋滅、算端亦亡と云へり。林牙は學士を呼ぶ契丹語にして、耶律大石の舊官なり。乃滿失國、依大石とは、乃蠻の古出魯克逃げて大石の立てたる國に依れるを云ふ。算端、西削其地とは、闊喇自姆の君速勒壇抹哈篋惕、西遼の舊境、失兒河以南を取れるを云ふ。乃滿尋滅は、古出魯克の滅びたるなり。算端亦亡は、この戊寅の年より二年後にあり、撒哩黑昆は、集史に撒哩黑庫勒とあり、今は撒哩庫勒と呼び、葉兒羌河の上流にあり、西は直に露西亞の領地に接す。古出魯克の事蹟は、主吠尼喇失惕の二書に詳なり。元史には、只曷思麥里の傳に、曷思麥里、西城谷則幹兒朶人、初爲西遼闊兒罕近侍、後爲谷則幹兒朶所屬、可散八思哈長官、太祖西征、曷思麥里率可散等城會長迎降、大將哲伯以聞、帝命曷思麥里從哲伯爲先鋒、攻乃蠻克之、斬其主曲出律、哲伯令曷思麥里持曲出律首往、徇其地、若可失哈兒押兒牽、幹端諸城皆臨風降附とあり。谷則幹兒朶は大城の義にして、垂河今の楚河の濱に在りし西遼の都なり。遼史天祚紀に、虎思幹耳朶、金史粘割韓奴の傳に、骨斯訛魯朶、耶律楚材の西遊錄に、虎司窩魯朶と書けり。或は古思を略きて、幹兒朶との

曷思麥里の傳の考證

みも云へり。元好問の大丞相劉氏先塋の碑、元史郭寶玉の傳に、訛夷朶とあるは、兒を夷と誤りたるなり。闊兒罕は、秘史卷五の古兒罕、親征録の菊律可汗なり。遼史に記せる如く、大石林牙即位して、葛兒罕と號してより、子孫みなその號を襲ぎたるなり。可散は、西遊錄に可傘と書き、經世大典の圖には、柯散と書き、察赤(今の塔什干)の東南に在り。露西亞の地圖には、塔什干の東南に今も略散城あり。曷思麥里は、者別に降れるにて、この時太祖は、未だ親征せざれば、傳に太祖西征とあるは、誤れり。可失哈兒は、今の和闐なり。

委兀惕降附の使

委兀惕の亦都兀惕は、成吉思合罕に使を遣りき。(この事は、親征録集史元

史、みな秘史より委し。親征録にまづ「己巳太祖四年春、畏吾兒國主亦都護、聞上威名、遂殺契丹主所置監國沙監」とあり。亦都護は、即ち亦都兀惕、委兀惕の王號にして、集史には、亦的庫惕と云へり。この亦都兀惕の名は、巴而朶阿而忒的斤と云ひ、元史に傳あり。哈刺赤、亦北魯の傳には、八兒出阿兒忒、亦都護とあり。契丹は、合喇乞塔惕、即ち西遼にして、岳隣帖穆爾の傳には、西契丹とあり。西遼の畏兀を威制したること、畏兀の叛きて、その監國を殺したる事情は、哈刺赤、亦北魯、岳隣帖穆爾二人の傳に見ゆ。さて親征録に、監國を殺したる處へ、太祖の使二人至り、たれば、亦都護喜び、使二人を遣り、降附の意を奏さしめき。この時、蔑里乞の脱脫より、使至りたるを、亦都護はその使を殺し、又脱脫の子四人は、父を失ひ、也兒的、石河を涉りて至りたるを、崩河にて禦ぎ戦へり。この戦は、秘史卷八の初にあり、不黑都兒麻の戦に續きて、額兒的失河にて多數溺れてより、西に奔るまでの間にありし事なり。崩河は、巴兒朶の傳に、稽河とあり、古の昌八里に傍ひて流る

親征録なる亦都護降附の始末

警雲開見日冰洋
得水

金帶之星裝袞衣
之餘纒

る昌河即ち今の昌吉河にして委兀惕の都城の西にあり。太祖十二年丁丑に速不台の戦へる崙河、速不台の傳に崙河とあるものとは名同じくして實は異なり。この戦の後、亦都護は使四人を遣り、蔑里乞の事を告げれば、太祖は又前の使二人を遣り、亦都護は復使を遣り、珍寶方物を奉れり。これら、太祖の事を皆太祖四年の事とせり。阿惕乞喇黑（親征録に乞力吉思の二使の一人を阿忒黑刺と刺黑と云へば、修正秘史は委兀惕の使に似たり）。答兒伯（喇失惕は太祖の二使の一人を阿惕黒を乞兒吉思の使と改めたるに似たり）。答兒伯（喇失惕は太祖の二使の一人を阿惕黒と答拜とあるは兒の字を落せるなり。後に答兒班とあるは、拜を班と誤れるなり。これも委兀惕の使を太祖の使に混らしたるなり）。二人を使つかひとせし、奏して遣るには、雲霽れて母なる日（母の如）を見たるが如く、氷解けて河の水を得たるが如く、成吉思合罕の名を聲こゑを聞きて甚歡べり。成吉思合罕恩賜せば、金の帶の締しめ金より大紅衣の帛片より得ば（分與せられば）、爾の第五の子となりて力を與へん（親征録はこの辭を二章に分けて、辭句を遣りたる時の辭とし、後章は太祖六年に亦都護の入朝したる時の辭とせり。その前章は臣國聞皇帝威名故棄契丹舊好方將遣使來通誠意躬自效順豈料遠辱

亦都兀惕の來朝
賞獻

天使降臨下國、警雲開見日、冰洋得水、喜不勝矣。而今而後、盡率部眾爲僕爲子、竭犬馬之勞也。と云ひ、その後章は陛下若恩賜、臣使遠者悉聞、近者悉見、綴袞衣之餘纒、摘金帶之星裝、誠願在陛下四子之亞、竭其力也。と云へり。喇失惕も、殆ど之に同じ。その言につき、成吉思合罕恩賜して答へ、宣ひて遣るには、女をも與へん。第五の子となれ。金銀眞珠東珠金欄總金欄段匹（おがしつかねしら）、珠東珠段匹、金欄總金欄段匹（おほたま）、持ちて亦都兀惕來よ。と宣ひて遣れば、亦都兀惕は、恩賜せられたり。とて喜び、金銀眞珠東珠段匹、金欄總金欄段匹（おほたま）、持ちて亦都兀惕來よ。と成吉思合罕に見えたり。親征録は、寶を持ち來よ。と太祖云へり。とは云はず、太祖を奉れり。とあり。かくて、それより二年を歴て、辛未（太祖六年）の春、哈刺魯部主阿昔蘭可汗の來朝と同じ時に、亦都護來朝して、彼の袞衣金帶の辭を陳べたれば、（上説其言使尙公主）。成吉思合罕は、亦都兀惕に恩賜して、阿勒阿仍序第五（とあり）。成吉思合罕は、亦都兀惕に恩賜して、阿勒阿勒屯（元史巴而兀阿而忒の傳は、全く親征録に本づきたれど、其犬馬之力、帝威其言使尙公主也、立安敦、且得序於諸子）とありて、袞衣金帶の語

阿勒阿勒屯の下
嫁

を略きたれば、亦都兀惕の辭命として秘史に載せられたる面白き韻文は、骨拔泥鱗となれり。公主表高昌公主位の處に也立可敦公主、太祖女、適亦都護巴而述阿兒忒的斤とあり。可敦は安敦の誤也。立安敦は、即ち阿勒阿勒屯なり。喇失惕は正后の出にあらすと云へり。阿

拙赤の北征

兔の年（我が土御門天皇承元元年丁卯、宋の開禧三年、金の泰和）拙赤を

右の手の軍にて林の民の處に出征せしめたり。不合は嚮導

して往きたり。（親征録には、この年遣案、彈不兀刺二人、使乞力吉思部とあ

りて拙赤北征の事なし。拙赤北征の事は、この年より十一年後なる戊寅の年、太祖十三年、哲別の曲出律を滅したる次に記し、先吐麻部叛

上遣徵兵乞兒吉思部不從、亦叛去、遂先命大太子往討之、以不花爲前鋒、とあり。集

史もほゞ同じ。不花は即ち不合、八）幹亦喇惕の忽都合別乞（前に十一部

十八功臣の中なる不合駙馬なり）幹亦喇惕の忽都合別乞（前に十一部

る人）は、秃綿（萬）幹亦喇惕の前に降り入りて來ぬ。來て拙赤を

引きて、秃綿幹亦喇惕の處に導きて、失黒失惕に入らしめた

り。（親征録には、丁卯の年乞力吉思部降附し、その翌年戊辰の冬、二たび脱脫曲

至也兒的、石河云云とありて、拙赤に降れる忽都合を脱黒脱阿征伐の軍に降れ

りとせり。喇失惕も同じ。洪鈞の尢赤補傳の自注に曰く、本紀幹亦刺之降在三年

幹亦喇惕不哩牙
揚諸部の降附

而乞力吉思之附在二年。考之西圖、應從秘史。（拙赤は、幹亦喇惕不哩牙惕

先定幹亦刺由東而西、軍程乃合と云へり）拙赤は、幹亦喇惕不哩牙惕

巴兒渾兀兒速惕合ト合納思康合思秃巴思を降して、（喇失惕

「客母河の上流に八河ありて、幹亦喇惕はその左に居り、その近き東に兀喇速惕

帖連郭惕客思的米なる林の民は、拜喀勒湖の西に居りて、幹亦喇惕乞兒吉思と

鄰り合へり、また拜喀勒湖の東に庫哩秃刺思不哩牙惕馬惕四部あり、都て巴

兒古惕と云ふと云へり。巴兒渾は、即ち巴兒古惕にて、卷一にその部の人、巴兒忽

歹篋兒干あり。太祖紀に八刺忽とあるも、巴兒古惕なり。喇失惕は、四部の總名と

すれども、こゝに不哩牙惕と並べ舉げられたれば、一部の名にも用ひたるなり。兀兒

速惕は、即ち兀喇速惕なり。合ト合納思は、元史類編なる尢赤の傳に大方通鑑を

引きて憾哈納思とあり。親征録に憾哈思とあるは、納の字を脱せるなり。元史地

理志には、憾合納、劉哈刺拔都魯の傳には、憾哈納思と書けり。その地の事は、元

史譯文證補の地理志西北地附錄釋地の下に詳なり。康合思秃巴思は、知らず。）

秃綿乞兒吉速惕の處に到れば、（乞兒吉速惕は、乞兒吉思の複稱なり。

廣く、安噶喇河の西、阿勒台山の北の東より居り、乃蠻はその南東にあり、客母

乞兒吉速惕の降
附

乞兒吉速惕の官人也。迪亦納勒阿勒迪額兒幹列別克的斤な

る乞兒吉速惕の官人ども降り入りて、白き海青ども白き駙

馬ばども黒くろき貂じょう鼠そどもを持ち來きて、拙ちつ赤しやくに見まえたり。(親征錄には遺案彈不に刺二人使を力吉思部其長幹羅思亦難及阿忒里刺二人借我使來獻名鷹とありて本書と異なり。別喇津は喇失惕を譯して阿勒壇不刺の二人乞兒吉思に使し、まづ一部に至り)と云ひて、部の名も酋長の名も文字見えずと注し、次の一部を也迪幹命酋長を兀嚕思亦納勒と云ふ。二酋厚くもてなし、阿里克帖木兒阿惕黑喇黑二人を遣して白き獵鳥を獻れり)と云へり。錄の亦難紀の亦納里は亦納勒の訛なり。多遜は喇失惕を引きて、亦納勒は、乞兒吉思にて酋長を稱する號なり)と云へば、也迪亦納勒は也迪部の酋長と云ふことにて、兀嚕思又は幹囉思はその名なるべし。名の見えざる酋長は阿勒迪額兒ならん。元史は二つとも人の名を部の名に誤れり。阿里克帖木兒は額兒篤曼の譯に阿里別克帖木兒とあり、即ち幹列別克的斤なり。秘史に無き一使を阿惕黑喇黑と云へるに據れば、錄の阿忒里刺は、黒を里に誤りたるにて、秘史の委兀惕の使を修正、秘史は乞兒吉思に移せるなり)失し兒び客け思す的ち音い巴は亦い惕と禿と合か思す田てん列れ克く脫と額え列れ思す塔た思す巴は只ち吉ぎ惕とより這こ廂やなる林はの民たみを拙ちつ赤しやく降くだして、乞き兒る吉ぎ速す惕との萬ばん戸こ千せん戸この官くわん人じんどもを林はの民たみの官くわん人じんどもを伴つれ來きて、成ちん吉ぎ思す合か竿かんに白しろき海かい青せいども白しろき驢る馬ばども黒くろき貂じょう鼠そどもをもて見まえ

失必兒以南林民の降附

昔別哩亞の名の起り

させたり。(失必兒は今の昔別哩亞なり。喇失惕は乞兒吉思の事を述べて、それと云ひ、元史玉哇失の傳に與海都將某某等戰於亦必兒失必兒之地とあり。殘撒列克阿刺卜撒兒第十四世紀の前半の人は昔必兒即阿必兒と書き亦奔阿喇卜沙は乞魄察克は北は阿必兒即昔必兒に界すと云へり。合塔蘭地圖の北邊の薛不兒は明に昔必兒を表せり。西紀一三九四年より一四二七年まで亞細亞の諸國に遊び、帖木兒大王の遠征にも伴ひし失勒篤別兒格兒の書きたるものには、亦必思昔不兒と云ふ國の名あり。然れどもこの昔必兒の名は直に今の昔別哩亞となれるに非ず。第十六世紀の頃、亦兒的石河の濱にて今一五八一年に脱孛克思より四里餘り河上に昔必兒と云へる塔塔兒の城ありて、一五八一年に脱孛克思より取られ、その後嚕西亞人はその名を採りて北亞細亞の總名に推廣めたり。客思的音は親征錄に克失の迷とあり、即喇失惕の客思的米なり。田列克は卷八に帖良古惕親征錄に帖良兀とあり、即喇失惕の帖連郭惕なり。不喇惕施乃迭兒は帖連古惕は唐書の鐵勒より出でたるならんと云へり。脱額列思は卷八に脱額列思とあり、即喇失惕の禿刺思なり。巴亦惕禿合思塔思巴只吉惕は、未考へず。親征錄なる戊寅亦北征の條には、以不花爲先鋒追乞兒吉思至亦馬兒河而還。大太子領兵涉謙河冰順下、招降不困克兒爲思憾哈思帖良兀克失的迷火因亦而干諸部とあり。亦馬兒河は知らず。謙河は即客姆河今の也尼塞河の上流なり。不困克兒爲思は讀み難し。恐らくは誤脱あらん。火因亦而干は、秘史には槐因亦兒堅とあり。槐因は林の亦兒堅は民にて林の民なり。即諸部の統名にして、部の名に非ず)韓かん亦い喇ら惕との忽く都ど合か別べ乞きを迎むかへ、先まに降くだり禿と綿めん韓かん亦い喇ら惕とを

巴只吉惕は失必兒の西にある部落なり卷十一なる速別額台西征の條に注あり

韓亦喇惕の駙馬兄弟

脱喇勒赤と哈蒼との同異

牽ひきゐて來きぬこて恩賜おんしして、彼かれの子こ亦納勒赤あいなろちに扯ち扯ち亦干あいかんを與あたへたり。亦納勒赤あいなろちの兄あに脱喇勒赤とられちに拙赤ちよちの女むすめ豁雷罕かふいかんを與あたへたり。（喇失惕は成吉思汗の第二の女扯扯干は忽秃合別乞の子脱喇勒赤に嫁げり。云へり。扯扯干は即扯扯干なれども、脱喇勒赤は亦納勒赤に非ずして、却てその兄脱喇勒赤に似たり。公主表もそれに同じく延安公主位の處に關干公主適脱亦列赤駙馬とあり。然らば豁雷罕の夫を亦納勒赤とするかと云ふに、然らず。關干公主の前に、火魯公主、適哈蒼駙馬とありて、火魯は豁雷罕の下略に似たれども、哈蒼は亦納勒赤にも脱喇勒赤にも似ず。錢大昕の氏族表は、祕史と元史とを折衷し、哈蒼、一作脱劣勒赤、尙太祖孫女火雷公主、二脱亦列赤、一作亦納勒赤尙太祖女關干公主と書きたれども、哈蒼は八十八功臣の内に既に合歹古喇堅とありて、卷十二にも合歹あり、親征錄の哈台、憲宗紀の合蒼、多遜の哈蒼克など、みなこの哈蒼なるべく、脱喇勒赤は八十八功臣の定まりたる後に降附して駙馬となれる人なれば、その別人なること明なり。然れども、哈蒼合歹を脱喇勒赤に非ずとし、火魯火雷を豁雷罕に非ずとすれば、又不都合なることあり。火魯公主は、關干公主と共に、公主表延安公主位の初に擧げられ、その次に公主三人ありて、未だ延安公主適延安王也不干とあり、食貨志には火雷公主位、丙申年、分撥延安府九千七百九十六戸とあり。關干は、即扯扯干扯扯赤干にして、幹亦喇惕の忽都合別乞の子に嫁ぎたること確なる上は、延安王の家は、即忽都合の子孫にして、火雷公主は、始めてその家に嫁ぎたる人なれば、その夫は必ず幹亦喇惕の首領なるべし。然らずば、延安公主位を火雷公主位とも云ふべき筈なし。然らば、哈蒼合歹は、果して脱喇勒赤阿刺合別乞（元史の阿刺合別乞、この疑ひはいかに考へても解き得ず。）阿刺合別乞（元史の阿刺合別乞）を汪古惕（汪古惕の阿刺忽失）に與あたへたり。（この事につきては、卷八に委れども、後の稱號に依り、古喇堅と書きたるなり。）成吉思合罕（成吉思合罕）は、拙赤ちよちを恩賞おんしょうして、宣のたまはく、我が子こどもの兄あになる汝なんぢは、家いへより纔わづかに出いでて、道みち好よくある（遠き）往ゆきたる地ところに、男驕馬めうせうばを傷きずけず、苦くめずして、福さいはひある林はやしの民たみを降くだして來きぬ。民たみを與あたへん（と）勅みことありき。

汪古惕の駙馬

拙赤初陣の功

李囉忽勒の秃馬楊征伐

勇婦李脱灰

又また李囉忽勒りくろく那顔のんげん （親征錄博羅渾那顔）を豁哩秃馬惕かふりまていの民たみの處ところに出征しゆつせいせしめたり。（豁哩秃馬惕は、卷一に見えたり。豁哩は、善と云ふ。美稱麻部、元史本紀には秃滿部とあり。）秃馬惕まていの民たみの官人くわんにん歹都忽勒たよどくろく莎豁しゃかく兒死りしにたれば、その妻つま李脱灰りたふい塔兒渾たふいこん （勇婦、李脱灰）は、秃馬惕まていの民たみを知りて居をりき。（歹都忽勒、莎豁兒は、明譯文に歹都秃勒とあり、忽を秃に誤り、莎豁兒を略けり。倭勒甫の書に塔秃刺克速略兒とある）

李囉忽勒の殺され

は音稍近けれども、刺克は忽勒を倒にせるに似たり。親征錄に都刺莎（合兒とあるは都の上歹又は塔を脱し刺の下克の字を略けるなり）李囉忽勒那顏到りて、三人にて、大軍より前へ歩み往きて、夕暮に覺えず難き林の中に徑に依り歩みたれば、彼等の斥候に後より脅されて、徑を阻みて、李囉忽勒那顏を拏へて殺しけり。秃馬惕は李囉忽勒を殺せりと知りて、成吉思合罕甚く怒りて、自ら出馬せんとしたれば、李幹兒出木合黎二人は、成吉思合罕を止まるまで諫めたり。却、朶兒別惕（朶兒邊の複稱）の朶兒伯多黒申（元史朶魯伯）に任し、軍を嚴に整へて、長生の上帝に禱りて、秃馬惕の民を降さんご試みよご勅ありき。朶兒伯は、軍を整へて、前に軍の行きたる、斥候の守りたる路徑の口口に、虚しき勢を張りて、紅き強牛（野牛の一種）の行きたる路に依り、軍士

朶兒伯多黒申の秃馬惕征服

拏へられたる二將の助かり

ごもに號令し、軍の數ある（數に具はれる）人心臆せば、打たんが爲に、人ごごに十の筈を負はせて、斧鑕（蒙古語兀哈里義を知らず、明譯に従れども、これ）鋸鑿なる人毎の（人ごと）器械を整へさせて、紅き強牛の行きたる路に依り、路に立てる樹ごもを斷ち斫らせ、て、鋸らしめて路をなして、山の上を上りたれば、秃馬惕の民の天窗の上より、不意にて筵會して居る處を虜へたり。前に豁兒赤那顏忽都合別乞二人は、秃馬惕に拏へられて、李脱灰塔兒渾の處にそこにありき。豁兒赤の拏へられたる理由は、秃馬惕の民の女子ごもは美しくあり、三十の妻を取れご勅ありたるにつき、秃馬惕の民の女子ごもを取らんごて往きたるに、前に降りたる民は、却て敵となりて、豁兒赤那

三將の恩賜

顔を拏へたりき。豁兒赤は秃馬惕に拏へられたり。成吉思合罕知りて、林の民の行は、忽都合知れるぞ。宣ひて遣りたれば、忽都合別乞又拏へられき。こたび、秃馬惕の民を降し畢へたれば、孛囉忽勒の骨の故に百の秃馬惕を賜へり。(孛囉忽勒の遺族に賜はり)豁兒赤は、三十の女子を取れり。忽都合別乞に孛脱灰塔兒渾を賜へり。(親征録は、秃馬惕征伐を丁丑太祖十二年に移し、簡短顔都魯伯二將討平之、博羅渾那顏卒於彼と記せり。元史は、それよりも簡略にて、たゞ是歳、秃滿部民叛命、鉢魯完朶魯伯討平之とありて、鉢魯完の殺されたる事も云はず。蓋四傑の一人なる)

母と子弟とに民の分配

成吉思合罕勅ありて、母に子どもに弟ごもに民を分けて與へん。こて與ふる時、國民を聚むるに艱難したるは、母なるぞ。我が子ども兄は、拙赤なるぞ。我が弟ごもの末は、斡惕赤

斤なるぞ。こ宣ひて、母には斡惕赤斤の分前こなして萬の民を與へたり。母は、不足に思ひて、聲をなさざりき。拙赤に九千の民を與へたり。察阿歹に八千の民を與へたり。斡歌歹に五千の民を與へたり。脱雷に五千の民を與へたり。(元史の宗室世帝六子、長朮赤太子、次二察合台太子、次三太宗皇帝、次四拖雷、即睿宗也。次五兀魯赤、無嗣。次六闊列堅太子とあり。拖雷まで四人は、光獻翼聖皇后の子なり。兀魯赤闊列堅は、庶子にして、かつ合撒兒に四千の民を與へたり。阿勒赤歹に二千の民を與へたり。別勒古台に一千五百の民を與へたり。)王、世系表に、烈祖神元皇帝五子、長太祖皇帝、次二、斡只哈兒王、次三、哈赤温大とあり。斡只哈兒は、太祖紀に、皇弟哈撒兒、食貨志に、斡只哈撒兒大王とあり。表の哈兒は、撒の字を脱したり。合赤温は、早く死にたる故に、その子に民を與へたり。この阿勒赤歹も、亦魯該の親屬なる阿勒赤歹も、卷九なる額勒只吉歹とは、名稍異なり。元史にも、太宗紀に、按赤帶、定宗憲宗世祖紀に、按只帶とありて、阿勒赤吉歹と云へる事無ければ、世系表なる按只、答阿哩台、(卷一の答哩台、斡惕赤斤、吉台の吉の字は、恐らくは衍字ならん。)答阿哩台、(太祖紀、答力台、世系表、答

答阿哩台の處分

里眞食貨志太祖（叔荅里眞官人）は、客喇亦惕に與したりきて「眼の背處に黜けん」（宣へば、）李幹兒出、木合黎失吉忽禿忽三人言はく「己が火を滅すが如く、己が家を壞るが如く、爾の善き父の遺念は、獨爾の叔父残りてあるを、いかにぞ棄てん。彼の氣を附けざりしことを勿_{（おぼ）}想_{（おぼ）}ひ」（爾の好き父の末弟に營盤の煙を立てさせ合ひて居れ）「云はれて、鼻より煙捨くまで明かに話され（意明ならざれども、明本合巴兒忽泥康失）」（語譯に從へり、文譯には、太祖心下辛酸）「諾へり」（合合思）て、好き父を想ひて、李幹兒出、木合里失吉忽禿忽三人の話にて静まりたるぞ（明譯）怒遂息了（好き父以下は、敘事の文なり、原文に太祖の語氣として、我の字を末に加へたるは誤りならん）

母に幹惕赤斤に萬の民を與へて、官人どもより古出闊闊出種賽豁兒合孫（七十八の功臣の中にて第十）四人を傳けたり。拙

赤には忽難蒙客兀兒客帖（功臣の第七第）三人を傳けたり。察阿歹には合喇察兒蒙客亦多忽歹（功臣の第二十九第）三人を傳けたり。又成吉思合罕宣はく「察阿歹は、猛くあり細なる性あるなり。闊客搠思（即闊搠思、功）は、晩く早く（朝夕）前に居て、思へる事を語りて居れ」（勅ありき）明又説、察阿歹性剛、子細教闊客搠思早晚根前説話者衍字にて、細なる性あるは、闊客搠思に係る詞ならん。（幹歌歹には亦魯格魯該迭該）二人を傳けたり。拖雷には哲歹（功臣の第二十）巴刺（功臣の第三十五なる巴刺、搠囉納兒）二人を傳けたり。合撒兒には者卜客（功臣の第四十四第）を傳けたり。阿勒赤歹には察兀兒孩（功臣の第五十八第）を傳けたり。

晃豁塔惕（晃豁壇の複稱）の蒙力克額赤格の子ども七人ありき。七

晃豁塔惕に合撒兒の打たれ

人の中に闊出帖騰格哩(闊出とありき。元史憲宗紀の初に氏、歲戊辰十二月三日、生帝時、有黃忽答部知天象者、言帝後必大貴、故以蒙哥爲名、蒙哥、華言長生也。とあり、黃忽答は即晃豁塔惕にしていはゆる天象を知る者、は、即この帖ト騰格哩なり、歲戊辰は太祖即位の三年なれ)その七人の晃豁壇は合撒兒を黨して打ちたりき。合撒兒は七人の晃豁壇に黨して打たれたり。成吉思合罕に勦へたれば、成吉思合罕は別の事にて怒りて在せる間に申したる故に、成吉思合罕は怒の裏に合撒兒に宣はく「命あるものに勝たれざる人」なりき。汝(明) 譯「你平日説人不能敵」。いかにぞ勝たれたる汝。云はれて合撒兒涙を墮し起ちて去りて、合撒兒憂へて三日來ざりき。そこに帖ト騰格哩は、成吉思合罕に白さく「長生の上帝の勅にて罕を定むる」神告を宣へり。一次は帖木眞國を

帖ト騰格哩の讒言

太祖の性急

取れ「と宣へり。一次は合撒兒を「と宣へり。合撒兒を圖らずば、〔事〕知られずあるぞ」と云はれて、成吉思合罕は、その夜出馬して、合撒兒を罕へに往きたれば、古出闊出二人は合撒兒を罕へに往きたり。母に告げけり。母知る、夜便續きて、白き駱駝に引かせて黒き車にて夜通し行きて、日出づる頃、到れば、成吉思合罕は、合撒兒の袖を縛りて、その帽帯を褫ぎて、その言を問ひ居る處に、母に到られて、成吉思合罕驚きて母を畏れたり。母怒りて到りて車より降り、母自合撒兒の縛れる袖を解きて放し、その帽帯を合撒兒に與へて、母怒りて氣(怒)を壓へかね、盤脚坐て兩の乳を出して、兩の膝の上にのせて言はく「見たりや汝の乳(乳)を飲みたる乳(房)は、此なり。この尋

母に怒られたる太祖の愧懼

合若論

ね追ひて、胞衣を咬みたる、臍帶を斷ちたる合撒兒は、何をか爲たる。(合撒兒は、猛き野犬の名を采りて名づけたるなり。故にその野犬の猛く生れたるさまを韻語に云ひて合撒兒の勇猛なるに譬へたり。)帖木眞は、我が此の一つの乳を盡したりき。合赤温、幹惕赤斤は、二人となりて一つの乳を盡さざりき。合撒兒こそは、我が兩の乳皆を盡して、我が智寛になるまで休ましめて、智を寛になしたりき。それが爲に技能ある我が帖木眞は、智云云。(こに脱文あり、補)技能ある我が合撒兒は、射る力技能ある故に、合兒不察合兒不察きて(語譯に交參とあれど)出でたるを鏑矢射て降らしめたりき。合兒不察驚きて出でたるを遠箭射て降らしめたりき。今敵の人を窮めたりと云ひて、合撒兒を見る(用ふる)能はざるなり、汝と云へり。母を休ましめ畢へて、成吉思合罕宣はく、母に怒られて、

暴 帖ト騰格哩の横

畏れも畏れたり、羞ぢも羞ぢたり、我と宣ひて、退かん、我等と宣ひて退きたり。母に知らしめず陰に合撒兒の民を取りて、合撒兒に千四百の民を與へたり。母知りて、心に憂へ(原文にるを、明譯に依)早く老いたる理由はかくあり。札刺亦兒の者ト客は、そこに驚きて、巴兒忽眞に入り逃れたり。その後九種の方言ある民、帖ト騰格哩の處に聚りて、成吉思合罕の聚馬處より多く帖ト騰格哩の處に聚ることなれり。かく聚れる時、帖木格幹惕赤斤に屬へる民は、帖ト騰格哩の處に去りき。幹惕赤斤那顔は、去りたる民を索めに、莎豁兒と云ふ使を遣りき。帖ト騰格哩は、莎豁兒使に言へらく、幹惕赤斤、汝等二女使となりきと云ひて、(この言意通ぜず、二女とは、莎豁兒と馬とを云ひ、莎豁兒を馬に比べ

女に比べて辱め) 莎豁兒使を打ちて歩ませてその鞍を負はせたるならんか) 莎豁兒使を打ちて歩ませてその鞍を負はせて回らしめき。韓惕赤斤は、莎豁兒使を打ちて歩ませ致せられて明朝韓惕赤斤自帖卜騰格哩の處に往きて言はく「莎豁兒使を遣りたれば、打ちて歩ませ致せき。今我民を索めに來つ」云はれて、七人の晃豁壇は、韓惕赤斤をこゝよりそこより圍みて「莎豁兒使を汝の致せたるは、善く有り」云ひて、(明) 你如何敢差人來取百姓の副詞脱ちたるならん) 拏へんこ打たんご做さるゝに懼れて、韓惕赤斤那顔言はく「使を我が致せたるは、善からず」云ひき。七人の晃豁壇言はく「善からずあらば、懺悔して跪け」云ひて、帖卜騰格哩の後より跪かせけり。民をも與へられずして、韓惕赤斤は、明朝早く成吉思合罕に、

韓惕赤斤の泣き訴へ

起きざるに寢床の内に在す處に入りて、哭き跪きて申さく「九種の方言ある民は、帖卜騰格哩の處に聚られて、我に屬へる民を帖卜騰格哩より索めに莎豁兒ご云ふ使を遣りたるに、我が莎豁兒使を打ちて歩ませ鞍を負はせて致せられて、我自索めに往けば、七人の晃豁壇に、こゝよりそこより圍みて懺悔せしめて、帖卜騰格哩の後より跪かせられたり」云ひ哭きたり。成吉思合罕、聲を出さざるに、孛兒帖兀眞は、寢床の内に起きて坐りて、衾の領にて臂を蔽ひて、韓惕赤斤の哭けるを見て、涙を墮して言はく「何をかする晃豁壇ぞ、彼等は、先頃合撒兒をも黨して打ちてありき。今又この韓惕赤斤をいかにぞ後より跪かせたる。いかなる道理か有りし。況この

孛兒帖兀眞の概み言

檜松ひのきのことの如ごとき爾なが弟おとだちをかく害わざひ合あへり。實まことに又また久く後ご老おい木きの如ごとき爾なが身み傾かたむき去さらば麻あ穰がらの如ごとき爾なが國民くんにを誰たれにか知しらしめん彼かれ等ら。柱はしらの如ごとき爾なが身み倒たふれ去さらば羣むら雀すずめの如ごとき爾なが國民たみを誰たれにか知しらしめん彼かれ等ら。檜松ひのきのことの如ごとき爾なが弟おとだちをかく害わざふ我が家け人は三人みたり四人よたりの我わが小ちひ弱よわきものごも成せい長ちやうするまではいかんぞ知しらしめん彼かれ等ら。何なにをかする晃こん豁こ壇たんなりし彼かれ等ら弟おとだちを彼かれ等らにかく傲なさしめていかんぞ見みておはせん爾なと云いひて孛は兒る帖て兀う眞んは涙なみだを墮おしたり孛は兒る帖て兀う眞んのこの言ことばにつき成ちん吉ぎ思す合か罕かんは韓かん惕てつ赤ち斤しんに宣のたまはく帖て騰てん格げ哩り今いま來こん爲なし得うることをいかにも行おこなひ合あはば汝なんぢ知しれと宣のたまへり。その時とき韓かん惕てつ赤ち斤しん起たちて涙なみだを拭ぬぐひ出いでて三人みたりの力りき士しを

帖て騰てん格げ哩りの打うち取り

備そなへて立たてり。暫しばらくありて蒙もん力りく克く額え赤ち格げは七なな人たりの子こごもこ來きて七なな人たり皆みな入いりて帖て騰てん格げ哩りは酒しゆ局きよくの右みぎの邊はたりに坐すわる。韓かん惕てつ赤ち斤しんは帖て騰てん格げ哩りの領えりを拏とらへて昨きのふの日われ我われを懺ざん悔げせしめたり。汝なんぢ試なげみ合あはん。と云いひて彼かれの領えりを拏とらへて門かどの處ところに拖ひきたり。帖て騰てん格げ哩りは韓かん惕てつ赤ち斤しんを迎むかへ領えりを拏とらへて搏うち合あへり。帖て騰てん格げ哩りの帽ぼうは搏うち合あふ時ときに火ひ盤ばんの上うへに落おちたり。蒙もん力りく克く額え赤ち格げは、その帽ぼうを取とりて嗅かきて懷ふしに置おきたり。成ちん吉ぎ思す合か罕かん宣のたまはく出いでて力りき士しの力ちからを争あひ合あへと宣のたまへり。韓かん惕てつ赤ち斤しんは、帖て騰てん格げ哩りを拖ひきて出いづる時とき門かどの闕あひだに先さきに備そなへたる三人みたりの力りき士し迎むかへて帖て騰てん格げ哩りを拏とらへ拖ひきて出いでて彼かれの脊せ梁はを折ひりて左ひだりの邊はたりの車くるまの端はしに去すてて韓かん惕てつ赤ち斤しん入いりて言いは

く帖卜騰格哩は、我を懺悔せしめたりき。試みんご云へば、肯
 かず欺きて臥したり。尋常の伴なりきご云へば、蒙力克額赤
 格覺りて涙を墮して言はく、大なる地に土塊の然有りしよ
 り海なす河に小川のしかありしより、伴ごなれり、我譯我自
 皇帝未起創之先、做伴當到今日ご云ふごひごしく、六人の
 晃豁壇なる彼の子ごもは、門を塞ぎて、火盤の周圍に立ちて、
 その袖を挽かれて、成吉思合罕恐れて追られて、躲れ出でん
 ご宣ひて出づれば、成吉思合罕の周圍に箭筒士侍衛等繞り
 て立てり。帖卜騰格哩を車の端に脊梁を折りて去てたるを
 成吉思合罕御覽して、後方より一つの青き帳房を持ち來さ
 せて、帖卜騰格哩の上に被はせて、駕車に我を入らしめよ。起

たんご宣ひて、そこより起したり。

帖卜の死體の失
 せ

帖卜哩の略稱を被ひたる帳房の天窗に蓋して、門を壓へ
 て人に守らせたれば、第三の夜、日黄なる時明將曉、天窗開
 けて身ぐるみ出でけり。審むれば、實に帖卜彼の出でたるは、
 そこに審められたり。成吉思合罕宣はく、帖卜騰格哩は、我が
 弟ごもに手足を致したる故に、我が弟ごもの間に、跡形なき
 讒言の故に、上帝に愛まれずして、命を身ぐるみ持ちて去ら
 れたるぞご宣へり。成吉思合罕は、蒙力克額赤格をそこに責
 めけらく、子ごもを性行を制せず、我ご齊しからんご思へる
 故に、禍は帖卜騰格哩の頭に到りぬ。汝等汝等のかゝる性行
 を覺れるならば、札木合、阿勒壇、忽察兒等の如き理由あるも

蒙力克額赤格の
 責められ

のこ做さるべきなりき、汝等たたらと宣のたまひて、蒙力克額赤格モンリクエチケを責めて、責め畢へてさて朝あしたに言へるを夕ゆふべに變かへば夕ゆふべに言へるを朝あしたに變かへば恥はぢ（恥づべ）と必かならず云はれん。只前ただまに言を定められたるぞ、彼の事を（明）因よつて在先さだめゆをよんせのしなたり説定免（ト）汝死有來罷（ト）とて、恩賜おんしして怒を息めたり。違越ちがひする性行せいかうを引締ひきしめたりせば、蒙力克額赤格の子孫しそんに誰たれか齊ひとしき者ものあらん（ト）宣のたまへり。帖卜騰格哩テブテンゲリを無くなす（ト）、晃豁壇クワンカクタンの顔色がんしよくは消失きえせけるぞ。（こゝにて秘史正集十卷は終れり。次の二卷は續集なり。卷八に虎の年丙寅の即位を記してよりこの卷の初までは、功臣の恩賞、親衛の制度を定むる詔勅を列ね、次に合兒魯兀惕の降服、篋兒乞惕、古出魯克の勦滅、委兀惕の親附を記し、次に兔の年丁卯と年を掲げて、朮赤の北征、朮赤の征服、皇族の分民、傅相の事を記し、晃豁壇の敗滅を以て終れり。さればこの集は太祖二年丁卯に終れるが如くなれども、古出魯克の勦滅は、太祖元年に非ずして、實は十三年戊寅にあること甚確なれば、篋兒乞惕の勦滅も、親征錄集史の十二年丁丑とせるに従はざるべからず。續集は、太祖六年辛未の征金の役より始まりたるに、この集に已に十二年丁丑、十三年戊寅の事を載せたるはいかにと云ふ

に、そは怪むべき事に非ず。蓋この集の成れるは、征金の役の起れる後なれども、征金の役は、未事竣らざりし故に、後の記録に譲りてこの集には載せず。篋兒乞惕古出魯克の勦滅は、卷三の篋兒乞惕征伐より、卷五卷七の乃蠻征伐より引續きたる、戡定の大業なるに由り、その局を結ばんが爲に、太祖騰極の續きに、年をも掲げず（十餘年後の）に、附記したるなり。

成吉思汗實錄卷の十終り。

成吉思汗實錄卷の十一

(明譯本の原の名は、元朝祕史續)

元太宗十二年漢北文臣無名氏以蒙古文委兀字續撰明洪武十五年翰林侍講火原潔等漢字音譯俗語旁譯日本明治三十九年盛岡那珂通世以和文直譯附校注

金國征伐の始まり

國交の破裂

その後成吉思合罕は羊の年(我が順徳天皇建曆元年辛未宋の寧一一年太祖五十歳の時なり)乞塔惕の民の處に出征せり撫州を

取りて(撫州は金の西京路の一州にして張家口の外今の鑲黃旗等四旗の紀に元年丙寅帝始議伐金初金殺帝宗親威補海罕帝欲復讎會金降俘等具言金主環肆行暴虐帝乃定議致討然未敢輕動也)木華黎の傳に金之降者皆言其主環殺戮宗親荒淫日恣帝曰朕出師有名矣又太祖紀に五年庚午春金謀來伐築烏沙堡帝遣遮別襲殺其眾遂略地而東初帝貢歲幣于金金主使衛王允濟受貢於靜州

太祖五年庚午の出兵

帝見允濟不爲禮。允濟歸欲請兵攻之。會金主璟殂。允濟嗣位。有詔至國。傳言當拜受。帝問金使曰。新君爲誰。金使曰。衛王也。帝遽南面唾曰。我謂中原皇帝。是天上人。做此等庸懦。亦爲之耶。何以拜爲。即乘馬北去。金使還言。允濟益怒。欲俟帝再入。真就進場。害之。帝知之。遂與金絕。益嚴兵爲備。と云ひ。金國志にも大安元年敵入。金主新立。而喜曰。彼老懦無能。不足畏也。遂決意南侵。と云へり。豐端開けたる後。金國の事情は。兩朝綱目備要に。允濟遣眾分屯山後。欲襲殺鐵木真。然後引兵深入。會金之亂軍。有詣蒙古告其事者。蒙古遣人伺之。得實。遂遷延不進。と云ひ。金史衛紹王本紀に。天安二年九月丙午。京師戒嚴。上日出巡撫。百官請視朝。不允。是歲禁百姓不得傳說邊事。續通鑑綱目に。金納哈買住守北鄙。知蒙古將侵邊。奔告于金主云。金主以其擅生邊隙。囚之。また蒙古數次掠金西北之境。其勢漸盛。金人皇皇。遂禁百姓傳說邊事。とあり。畢沅の續資治通鑑は。金史續綱目の文に據り。金承平日久。驟聞蒙古用兵。人情恒懼。流言四起。九月丙午。中都戒嚴云云。既而知蒙古未嘗大舉始解嚴。旋禁百姓不得傳說邊事。と書けり。諸書を參考するに。蒙古の南征は。實に五年庚午より。始まりたれども。但烏沙堡を取れるは。親征録も。金史獨吉思忠の傳承裕の傳も。皆明年辛未の事とす。れば。元史の五年に載せたるは。誤れり。かくて六年辛未には。親征録に。秋。上始誓眾南征。克大水。濼。又拔烏沙堡。及昌桓撫等州。大太子朮赤。二太子察合台。三太子窩闊台。破雲內東勝武宣寧豐靖等州。金人懼。棄西京。とあり。續綱目には。蒙古侵擾雲中。九原。連歲不休。嘉定四年。遂破大水。濼。以進。金主始恐。四月。釋買住。而遣西北路招討使粘合打。求和。蒙古主不許。金主命平章政事獨吉千家奴。參知政事完顏胡沙。行省事于撫州。西京。畱守紇石烈。胡沙虎。行樞密院事。以禦蒙古。乘勝破白登城。遂攻西京。凡七日。胡沙虎懼。以麾下棄城。突圍遁去。蒙古主以精騎三

太祖六年辛未の親征

元史の敘事の眞倒復沓

千馳之。金兵大敗。追至翠屏口。遂取西京。及桓撫州。と書けり。この文は。金國志。金史本紀。獨吉思忠。即千家奴。承裕。即完顏胡沙。紇石烈。執中。即胡沙虎の傳に據り。擧括したるものなれば。親征録よりは。委しく。元史。太祖紀。よりは。確實なり。只破白登城。遂攻西京。凡七日。と云へるは。察罕の傳なる。野狐嶺の戰に。圍白樓七日。拔之。とあり。歲在庚午。天啓宸衷。決志南征。辛未之春。天兵南度。不五年。而天下略定。此天授也。非人力所能及也。と云へれば。太祖の親征は。春にして。秋にあらす。親征録の「秋。上始誓眾南征。は。固より非にして。衛紹王紀の。大安三年四月に始めて。太祖の來征。を書きたるも。未是ならず。これのみは。太祖紀の。六年辛未。春。二月。帝自將南伐。と云へるに。從ふべし。蓋太祖の親征は。春にあり。金帝の和を求め。邊に備へたるは。夏にあり。西京諸州の取られたるは。秋にあるなり。然るに。太祖紀の。二三年の間の敘事は。眞倒復沓にして。その失數ふるに。暇あらず。まづ二月。帝自將南伐。敗金將定薛於野狐嶺。取水。濼。豐利等縣。金復築烏沙堡。秋七月。命遮別。攻烏沙堡。及烏月營。拔之。とある。野狐嶺の戰は。豐利等縣。即撫州を取れる後にあるを。その前に記して。明年壬申に至り。復野狐嶺の戰を記し。撫州を取れるは。烏沙堡を取れる後なるを。その前に記して。明年復それを記し。烏沙堡を抜くは。今年一たびなるを。已に去年に記し。今年に至り。金復築烏沙堡。の一句を加へて。復記したり。その病の本を尋ぬるに。太祖紀は。親征録。金史。金國志等の諸書を。雜へ採り。咀嚼融會せずして。筆に任せて。列記したるに。由れるなり。故に。烏沙堡を取れる事は。或書に據りて。五年春に記し。親征録に據りて。復六年秋に記せり。撫州。即豐利等縣。桓撫等州。をば。七年春に據りて。六年春に記し。親征録に。六年秋として。記せる。取昌

野狐嶺の戦

據りて、六年春に記し、親征錄に六年秋として記したる獯兒犛即野狐嶺の戦を據りて、七年春にまはせり。獯兒犛の戦に續きたる會合堡の戦は金史承裕の傳に據れば、七年八月に記し、地名も宣平の會河川として、親征錄には據らず。親征錄に據る七月に記し、德興府を抜くをば、金國志に據りて、六年九月に記し、又或書に據りて、七年九月に記し、その異名を用ひて奉聖州と云へるは、金國志に據れるにも似たり。さて後に親征錄の文を探りて、八年七月克宣德府の次に又記し、親征錄の後、金人復收之、癸酉八年秋、上復破之をば、削れり。重複の最驚くべきは、哲別の居庸關を破りたる事にて、金國志、金史、本紀に據りて、早くも六年九月に記し、八年七月に至り、親征錄に據り、懷來居庸の戦を記せり。これらの重複あることを悟らずして、元史を讀まば、何が何やら、少も分らず、恰も（きんたうけ）狐峙に依り越えて、（蒙）忽捏堅荅巴（は）、忽捏堅は、狐荅巴は、峠なり。漢名は野狐嶺と云ひ、直隸宣志に、勢極高峻、風力猛烈、雁飛遇風輒墮地とあり。この峠は、たゞ越えたるに非ず。親征錄に、上之將發、撫州也。金人以招討九斤監軍爲奴等、領大軍、設備於野狐嶺。又以參政胡沙率軍爲後繼、契丹軍帥謀謂九斤曰、聞彼新破撫州、以所獲物分賜軍中、馬牧於野、出不虞之際、宜速騎以掩之也。九斤曰、此危道也。不若馬步俱進、爲計萬全。上聞、金馬至、進拒獯兒犛。この間に金の使石抹明安の降れることを記せり。遂與九斤戰、大破之。其人馬蹂躪死者不可勝計。因勝、彼復破胡沙軍於會合堡。金人精銳盡沒於此とあり。九斤は、太祖紀に、紇石烈九斤、察罕の傳に、定薛とあり。爲奴は、喇失惕の史に、幹奴とあり。胡沙は、金史列傳の承裕なり。獯兒犛は、野狐嶺の北の口

會河堡の戦

にあり。會合堡は、金史本紀の會河堡にして、今の萬全縣の西に在りき。金國志には、灰河、承裕の傳には、會河川、木華黎、耶律阿海の傳には、澮河と書けり。木華黎の傳は、この戦の功を專に木華黎に歸して、金兵號四十萬、陣野狐嶺北、木華黎曰、彼眾我寡、弗致死力、戰未易破也。率敢死士策馬橫戈大呼、陷陣、帝麾諸軍並進、大敗金兵。追至澮河、殪尸百里と云へり。會河堡の戦は、金史本紀に、大安三年八月、千家奴、胡沙自撫州退軍、駐宣平。九月、敗績于會河堡。承裕の傳に、八月、大元兵至野狐嶺、承裕喪氣、不敢拒戰、退至宣平。云云。其夜南行。大元兵躡擊之。明日、至會河川、承裕兵大潰。承裕僅脫身入宣德とあり。宣平は、金の西京路、宣德州の屬縣にして、今の直隸宣化府懷安縣の東北にありき。撫州、野狐嶺、會河堡の戦は、親征錄、蒙古集史、金國志、金史本紀、諸傳みな、太祖六年辛未にあるを、元史本紀は、會河の戦のみを正しく六年辛未に記し、撫州、野狐嶺の戦は、みな誤りて、六年辛未七年壬申の二所に記し、速不台、石抹明安の傳は、誤りて壬申の年とし、木華黎の傳に至りては、壬申の年にある宣德、德興の戦を辛未として前に記し、辛未の年にある撫州、野狐嶺、澮河の戦を壬申として後に記せり。耶律阿海の傳に、烏沙堡、宣平、澮河の戦を辛未としたるは、善けれども、その年の内に、癸酉、拔宣德、（せんたうけ）宣德府を取りて、親德興の前に、（せんたうけ）遂出居庸、耀兵燕北と書けるは、非なり。宣德府を、（せんたうけ）錄に、壬申、太祖七年、破宣德府、至德興府、失利引卻。四太子也、可那顏、赤渠、駙馬、率兵盡克德興、境內諸堡、而還。後、金人復收之。癸酉、太祖八年秋、上復破之とあり。宣德府は、金の西京路、宣德州にして、元の初、陞せて宣寧府とし、世祖の時、宣德府と改めて、上都路に隸せり。今の直隸、宣化府なり。太祖のそれを破れるは、未府とならざりし時なれば、府と云ふべき筈なし。喇失惕の史に、宣德州と云へるを見れば、修正秘史には、州とありけんを、親征錄の撰者は、當時の稱に依り、府と書けるなり。

宣德德興の攻め取り

者別古亦古捏克の先鋒

この秘史の原本にも必ず州とありしならめど、明の譯人は、宣德府の名を聞き慣れ居たるに由り、ふと音譯を誤りたるならん。德興府は、遼の奉聖州にして、今の時德興府と改め、西京路に隸し、元の世祖の時復奉聖州とし、宣德府に隸せり。今の直隸保安州なり。四太子は、第四の皇子拖雷也。可那顏は、大官人の義にして、拖雷の號なり。赤渠駙馬は、（者別古亦古捏克）阿禿兒二人を先鋒に遣りたり。（この戰に者別の次に働きたる旁證として、元史耶律阿海の大捷滄河、遂出居庸、耀兵燕北云云とあり。古亦古捏克は、何人とも知れず。親征錄壬辰、太宗四年の處に、貴由拔都とある人ならんか。もし然らば、元史列傳に、月魯帖木兒、卜領勤多禮伯臺氏、曾祖貴裕、事太祖、爲管領怯憐口怯薛官とある貴裕も、その人なるべし。多禮伯臺は、朶兒別惕にして、卜領勤は、朶兒別惕の分部の名なり。）察卜赤牙勒に到りて、（漢名居庸關、今の順天府昌平州の西）察卜赤牙勒の峠を禦がれて、（昌平州の西北二十四清里に居庸の南口あり、清里に上關あり、上關より十七清里に延慶州の八達嶺あり、嶺の上に城あり、元人はそれを居庸の北口と云へり。即察卜赤牙勒の峠なり。昌平山水記に、自八達嶺、下視居庸關、若建瓶、若闕井。昔人謂居庸之險、不在關城、在八達嶺也。と云へり。金人守禦の事は、親征錄に、時金人塹山築壁、悉力爲備、私八兒火者、傳に、金人恃居庸之險、治鐵鋼關門、布鐵蒺藜、）そこに者別言く、（彼等を誘ひて動かし、

居庸關の禦ぎ

滄山の戰

て來させんごそこに試みんご云ひて回りぬ。回られて、乞塔惕の軍士ごも追はんとて、河山に滿つるまで追ひて來ぬ。宣德府の背（鼻の）に至りて、者別後向き繼れり。奮ひて衝きて、續きて來る敵を敗れり。成吉思合罕の中軍續きて、乞塔惕を動かして、合喇乞答惕（契丹即合喇）主兒扯惕（女真即主兒）主因（卷一に種）の雄雄しく猛き軍を敗りて、察卜赤牙勒に至るまで爛木の積れる如く殺して、（親征錄、癸酉、上復破之、續き、遂進軍、至懷來、不可勝計とあり。帥の上に脱字あり。元史本紀には、金の行省完顏綱、元帥高琪とあり。高琪は、金史の朶虎高琪なり。この時、金軍の總督は、完顏綱にして、完顏綱徒單、益朶虎、高琪の傳に、みな綱行省事於縉山、大敗とあり。高琪は、この時、鎮州の防禦使にて、元帥右都監を權して居たれども、蒙古人は、元帥と云ひたるなり。懷來は、遼の奉聖州の屬縣、金の德興府、縉川縣、元の宣德府、奉聖州の屬縣、今の直隸宣化府、懷來縣なり。錄は、元代の名を以て記せり。北口は、即居庸の北口なり。縉山は、金の德興府の屬縣、今察卜赤牙勒の關を者別取りて、峠ごもを奪

居庸關の攻め破

龍虎臺の駐蹕

ひて越えて、(この文に據れば、北口より南口に出でたる如くなれども、軍拒守、遂將別眾西行、由紫荆口出、金主聞之、遣大將與敦將兵拒隘、勿使及平地。比其至我眾度關矣、乃命哲別率眾攻居庸南口、出其不備、破之、進兵與怯台薄察軍合、とあれば、南口より倒の主兒扯歹の子なり。太祖紀に可忒と書けり。薄察は、太祖紀第五十七、兀嚕兀惕の倒の主兒扯歹の子なり。太祖紀に可忒と書けり。薄察は、太祖紀に薄利とあり。趙柔の傳に、歲癸酉、太祖遣兵破紫荆關、柔以其眾降。行省八札奏聞、以柔為涿易二州長官、佩金符とある。八札なるべしと沈曾植は云へり。紫荆口は、即紫荆關にて、直隸易州の西八十清里、紫荆嶺の上にある。與敦は、太祖紀に與屯とあり。金史章宗紀、紹紹王紀、李英の傳に、烏古孫兀屯とある。人なるべし。元史は、録の文を節録したれ、)成吉思合罕は、失喇迭克に下馬せり。(失喇迭ども、敘事明瞭ならず。)龍虎臺、昌平州の西にあり。昌平山水記に、居庸關南地勢高平、如臺、廣二里、袤三里。元時、車駕巡幸上都、皆駐蹕於此。畿輔通志に、龍虎臺在昌平州西二十里。云云。舊志、臺在舊縣西十里、去京師百里、當居庸關之南とあり。中都を攻めて、(中都は、京にして、遼南京と云ひ、金中都と云ひ、元の世祖大都と改め、明の初北平と云ひ、成祖北京と改め、清の世祖定めて京師とし、俗には今も北京と云ふ。蒙文には中都とあるを、語譯には大都、文譯には北平と書けり。洪武の史臣後の名を用ひて追稱したるなり。親征錄に、既而又遣諸部精兵五千騎、合怯台、哈台、二將圍中都。上自率兵攻涿易二州、即日拔之とあり。怯台は、即兀嚕兀惕の客台、哈台は、即合歹古喇堅、八十八功臣の末より第四に見えたり。涿易は、皆金の中都路の屬州、涿州は、

中都の城攻め

河北山西山東の侵掠

今順天府に隸し、易州は、直隸の直隸州なり。蒙古の關に入りたるは、太祖八年癸酉の秋にして、金史宣宗紀、貞祐元年、即太祖八年十月、大元兵下涿州とあれば、關に入りたる月に、喇失惕の史には、涿州を拔きたるに非ず。また即日二州を抜くは、いかにも速すぎたるに、喇失惕の史には、涿州を攻めて二十日に破れりとあれば、録の即の字は、誤寫な、)郡郡の城ごもに軍を遣りて攻めさせたり。(親征録に、乃分軍為三道、大太子二太子、三太子、為右軍、循太行而南、破保州、中山、邢、沼、磁、相、輝、衛、懷、孟、等州、棄其定威州、境抵黃河、大掠而還。哈撒兒及幹津、那顏、拙赤、解薄、利、為左軍、沿東海、破灤、薊、等城、而還。上與四太子、馭諸部軍、由中道、遂破雄、莫、河、開、清、滄、景、獻、濟、南、濱、棣、益、都、等城、棄東平、大名、不攻、餘皆望風而拔。下令北還。又遣木華黎、回攻密州、拔之。上至中都、亦來合とあり。哈撒兒は、皇弟拙赤合撒兒なり。幹津、那顏は、太祖紀に、幹陳、那顏とあり。翁吉喇惕の阿勒赤、古喇堅の子、德薛禪の孫にして、元史特薛禪の傳に、その名見えたり。拙赤、解薄、利、是、兀嚕兀惕の主兒、扯歹なり。薄利は、即薄察なり。李囉忽勒の從孫、塔察兒、一名、倭蓋は、薄察と音近きに由り。沈曾植は、薄察は、塔察兒ならんと疑ひたれども、いかゞにや。太祖紀は、この三道の軍を敍べて、右軍は、取保、遂安、肅、安定、邢、沼、磁、相、衛、輝、懷、孟、掠、澤、潞、沁、平、陽、太、原、吉、隰、拔、汾、石、嵐、忻、代、武、等州、而還。左軍は、取薊、州、平、灤、遼、西、諸郡、而還。中軍は、取雄、霸、莫、安、河、開、滄、景、獻、深、祁、懿、冀、恩、濮、開、滑、博、濟、泰、安、濟、南、濱、棣、益、都、淄、濰、登、萊、沂、等郡、復命木華黎、攻密州、屠之。云云。帝至中都、三道兵還、合屯大口。是歲、河北郡縣盡拔。唯中都通順、真定、清沃、大名、東平、德、鄆、海州、十一城不下とありて、親征錄より委し。金史宣宗紀を案するに、貞祐元年、太祖八年、癸酉、十一月、大元の兵、觀州を徇へ、金の觀州は、即元の景州なり。又河、開、府、滄、州を徇へ、二年、太祖九年、甲戌、正月、辛未、彰德府を徇へ、金

東昌の不意打ち

元の彰德府は、即古の相州なり。又益都府を徇へ、乙未、懷州を徇へ、二月壬辰、嵐州を徇へたること見えて、末に時、山東河北諸郡失守、惟眞定、清沃、大名、東平、徐邳、海、數城僅存而已。河東州縣亦多殘燬とあれば、三道の侵掠は、癸酉の十一月に始まり、甲戌の二月に終りたるなり。親征録、元史にその時月を明にせざるに由り、金史に據りて考へ見たり。又金史、李英の傳に、貞祐三年三月、英自清州督糧運救中都、宣宗紀にも、その年七月、詔河間、孤城、移其軍民、就粟清州とあれば、清州は未殘破せられざりき。親征録、中軍の破れる諸城の中に、清州あるは非なり。清は滑の誤ならん。元史は、十一城不下の中に、金史は、數城僅存の中に、いづれも清州あり。者別をば東昌の城を攻めさせに遣りたり。東昌の城に到りて、攻めて取りかねて、回りに六宿の地に到りて、油斷せさせて、さて回りに奮ひ、馬を手に牽き、語合兒闊脫、勒壇、明、每人牽一匹從馬、夜兼行して、油斷し居る處に到りて、東昌の城を取りき。(元初の無かりし東昌、修正秘史の東京)

元初の無かりし東昌
修正秘史の東京

東京を攻むる暇なき者別

遼東を經略せる按陳

東京を取れる木華黎

東勝の奇功

復設備、哲別、戒軍中、一騎牽一馬、一晝夜馳還、急攻、大掠之、以歸と云ひ、喇失惕もこれに同じければ、修正秘史には、東京とありしなり。太祖紀には、七年壬申の末に月日まで掲げて、冬十二月甲申、遮別攻東京、不拔、即引去、夜馳還、襲克之と云ひ、吾也而の傳には、逸早くも太祖五年に吾也而與折不那、演克、金、東京有功と云ひ、年月は合はざれども、その東京としたるは、いづれも親征録に本づきたるなり。然れども、東京を取れる人は、實は者別に非ず。耶律阿海の傳に、者別の先鋒となりて、烏沙堡、宣平、滄河の戦より、拔宣德、德興、諸郡、乘勝、次北口、攻下、紫荆關、まで、阿海は常に者別と共に働きたる由見ゆれば、者別は常に大軍に先だちて轉戦したるなり。者別は、いかに戦馬の如く、駿速なりとも、何の暇ありてか、北京路を踰え、て、徑に東京を攻めらるべき。耶律留哥の傳に、歲壬申、太祖七年、太祖命按陳、那衍、行軍至遼東、留哥率所部降之、共破金軍、帝召按陳、還而以可特哥、副留哥、屯其地、癸酉八年春、眾推留哥爲遼王、云云とあれば、始めて遼東を經略したる者は、阿勒赤那顔と可特哥にして、者別は與らず。八年甲戌に至り、木華黎は命を受けて、諸軍を統べて、遼東を征し、九年乙亥に、裨將蕭也先は、計を以て、東京を平定したること、木華黎の傳に見え、蕭也先、即石抹也先の傳にも、木華黎に従ひて、先鋒となり、奇計を用ひて、東京を降したることを委しく、敍べたれば、東京を取れる者は、木華黎也、先にして、者別に非ず。然らば、者別の取れるは、東昌にも非ず、東京にも非ず、いづこなりけん。太祖六年に取れる西京路諸州の内、東勝州あり、その地は、金の西京、今の山西大同府の西北に在りき。者別の奇功を立てたるは、疑らくはその地ならん。蓋秘史の原本には、東勝とありしを、明人は、誤りて、東昌と音譯して、元の初に東昌なきことに、心附かざりしなり。修正秘史は、誤りて、東京とし、親征録、集史、元史、みなそれに依りて、いづれも、東京を取れるは、者別に非ざるこ

とに心附かざりしなり。

完顔承暉の請和の建議

者別は、東昌の城を取りて回りて来て、成吉思合罕に合へり。(親征録に據れば、者別の奇功を立てたるは太祖六年西京路の諸州を取り、れる時なれば、回りて太祖に合へるは西京路の或地にて合へるなり。)中都を攻められて、阿勒壇罕の大官人王京丞相(この阿勒壇罕は、金の宣宗の庶兄豊王珣立てられたり。これを宣宗と云ふ。王京は完顔の轉なり。王京丞相は、親征録元史に丞相完顔福興とあり。金史に完顔承暉として傳あり。承暉、本の親名は福興にして、この時平章政事兼都元帥となり。尋で右丞相に進みたり。)阿勒壇罕に建議しけらく、天地の命ある時、大位の代る時、至れり。忙豁勒甚力あり、来て我等の雄雄しく、猛き合喇乞塔惕主兒扯惕主因の緊要なる軍を敗りて、盡くるまで殺しけり。頼ある察卜赤牙勒をも奪ひて取りけり。今我等再軍を整へて出さば、再忙豁勒に敗れば、必城城にて潰えん。彼等却て

金の宣宗の風服

我等に收めば肯かず、我等に敵となりて、伴ごならざらん。彼等阿勒壇罕恩賜せば、忙豁勒罕に今の内に降らん。相談せん。相談に入りて、忙豁勒を退けば、退けたる後に、復別に考へ、我等そこに議り合はんぞ。忙豁勒の人、騙馬も、地合はずして、疫病し居る。云はれたり。彼等の罕に女子を與へん。金銀緞子財を軍の人に重くい出して與へん。我等の此の相談に入らざるをいかで知られん。建議しければ、阿勒壇罕は、王京丞相の此の言を善しとして、かく便爲れ。さて降らん。成吉思合罕に公主の號ある女子を出して、金銀緞子財もて軍の人に力に知らしむべく、力限中都より出して、成吉思合罕の處に王京丞相致して來ぬ。降りに來られて、成吉思合罕は、彼

太祖九年甲戌の凱旋

等の相談に入りて、郡郡に攻め下りたる軍ごもを回らしめて退きたり。王京丞相は、莫州撫州の名ある背(鼻)の(山)に到るまで成吉思合罕を送りて回れり。緞子財を我等の軍士ごも力限荷に駄けて、熟絹にてその荷を縛りて行きたり。(これは太祖三月の事なり。親征録には「甲戌上駐營於中都北壬甸。金丞相高琪與其主謀曰：聞彼人馬瘦病乘此決戰可乎。」丞相完顏福興曰：「不可。我軍身在都城家屬多居諸路。其心向背未可知。戰敗必散。苟勝亦思妻子而去。」祖宗社稷安危在此舉矣。當熟思之。今莫若遣使議和待彼主還軍更爲之計如何。」金主然之。遣使求和。因獻衛紹王公主。合福興來送上。至野麻池而還。とあり。丞相高琪は、金史高琪の傳に據れば、この時平章政事にして丞相に非ず。金の莫州は、河北東路に隸し、今の直隸河間府任邱縣にして、中都より蒙古に赴く路にあらざれば、この二字誤あらん。親征録の野麻池も、地志に見えず。これも池の名には非ずして、山の名又は地の名なるべし。二書の地名につきて考ふるに、莫州撫州は倒置にて、撫州の莫州と云ふ背とありしを誤り、その莫州は又野麻池の野を脱して、麻池を州の諸將名の如く音譯したには非ずや。元史太祖紀に「九年甲戌春三月駐蹕中都北郊。請乘勝破燕。帝不從。乃遣使諭金主曰：汝山東河北郡縣悉爲我有。汝所守唯燕京耳。天既弱汝。我復迫汝。於險天其謂我何。我今還軍。汝不能犒師。以弭我諸將之怒耶耶。」金主遂遣使求和。奉衛紹王女岐國公主及金帛童男女五百馬三千以獻。仍遣其丞相完顏福興送帝出。

唐兀惕征伐

居庸とあるは、親征録と金史の紀傳とに依りて書けるなり。岐國公主は、金史宣宗紀に公主皇后の稱あり。喇失惕の史に昆主哈屯とある。昆主は公主を詛るなり。

かく出征したるに依り、合申の民の處に去れり。指して到れば、合申の民の不兒罕降らん。爾の右の手となりて力を與へん。と云ひ、察合と云ふ女を成吉思合罕に出して獻れり。

略駝貢獻の願ひ

(不兒罕は蒙古語にては神また佛の義なれども、唐兀惕の國にては國主の稱號に用ひたりと見ゆ。この時の不兒罕は、夏の桓宗李純佑の族弟にして、元の太祖元年に純佑を廢して篡立したる襄宗安全なり。察合は、親征録も集史も元史もみな名を略けり。后妃表第三韓耳朶の察兒皇后は、察合の誤りかとも思はる。しかれども、喇失惕は、唐古惕の人にて名の知れざる哈屯を擧げて、自注に「速哈惕これを得んと願ひ、成吉思汗即贈れり」と附記したれば、后妃の列を脱したる故に表には載せ) 又不兒罕言く「成吉思合罕の名聲を聞きて畏れて居りき、我等今威靈ある爾の身到りて來られて、威靈を畏れたり。畏れて、我等唐兀惕の民は、爾の右の手となりて力

を與へん」と申せり。力を與へんにも、動かぬ營盤ある、築きたる城ある者なるぞ。伴なひて、疾き出征に出征する時、銳き戦ひを戦ふ時、疾き出征に追附くことぞ能はぬぞ。銳き戦ひに戦ふことぞ能はぬぞ。我等成吉思合罕恩賜せば、我等唐兀惕の民は、高き迭喇孫（明語譯、草名）の蔭に長けさせて、多き駱駝を出して、係箱（温都兒）をなして、獻らん。毛段を織りて、段物（合兒合）をなして、獻らん。放つ鷹を馴らして、聚めてその好きを致さしめ、居らん。と奏したり。かく言ひて、その言に遵ひ、唐兀惕の民より駱駝を取立てて、趕ふこと能はぬまで持ち來て獻れり。（この唐伐は、親征錄に據れば、一回の役に非ず。既に太祖即位の前の年に乙丑、征西夏、破力吉里寨、經落思城、大掠人民、多獲橐駝、以還とあり。元史も同じ。駱駝を獲たるは、西夏降服の後なるを、前に繰上げて分捕とせり。次に太祖二年丁卯には、秋再征西夏、冬、克幹羅孩城、三年戊辰には、春、班師、至自西夏、元史も同じ。五年庚午には、

三回の西夏征伐

秋、復征西夏、入李王廟、其主失都兒忽出降、獻女爲好とあるを、元史は、一年前なる四年己巳に繰上げて、帝入河西、夏主李安全遣其世子率師來戰、敗之、獲其副元帥高令公、克兀刺海城、俘其太傅西壁氏、進至克夷門、復敗夏師、獲其將嵬名令公、薄中興府、引河水灌之、堤決、水外潰、遂撤圍還、遣太傅訛答入中興、招諭夏主、夏主納女、請和と委しく記せり。兀刺海城は、即幹羅孩城なり。丁卯の年、克ちて守らず、今再入りたるなり。また西夏書事嘉定四年、太祖六年辛未、五月の處に、塔坦有黑白二種、時黑塔坦王白斡波強盛、兼併諸族、地起兵攻夏、河西州郡安全親率兵拒戰、大敗、失其公主、遣使請以臣禮事塔坦方選、自是國勢益衰とあり。黑塔坦は、即黑韃韃にして、揚吉忽里の姪、鎮國蒙韃備錄の白四部黑韃事略の白斡馬にして、鐵木眞と云ふべきを、何故にか誤れり。又金國志にも、大安三年辛未、春、西夏始爲大軍所攻、遣使求援、金主新立不能援、大軍至興靈而反、夏人恨之、遂叛とあり。西夏の降服は、元史の己巳と親征錄集史の庚午と、金國志西夏書事の辛未と三説ありて、いづれかはなるを知らず。いづれにしても、金の降服よりは前に在れば、祕史の記載の順序は違へる。）

辛未の一舉に二國の降服

成吉思合罕は、かく出征したる時、乞塔惕の民の阿勒壇罕を降して、多き段物を取りて、合申の民の不兒罕を降して、多き駱駝を取りて、成吉思合罕は、羊の年（この卷の初にある）（太祖六年辛未の歲）かく

出征したる時、乞塔惕の民の阿忽台アハタ云へる阿勒壇罕アハタルを降して、唐兀惕の民の亦魯忽不兒罕アハタルを降して、回りて撒阿哩客額兒アハタルに下馬せり。（阿忽台は金の宣宗珣なり。宣宗の國語の名は、金史本紀人の附けたるあだなるべし。亦魯忽は、不兒罕李安全の國語の名なるべし。親征録に失都兒忽とあるは、次の卷に見ゆる末帝李睨の一名を誤り書きたるに似たり。）

太祖九年甲戌の再征

又その後趙官の處（趙官は、宋の蒙語なり。趙家の轉）和親に遣りたる主卜罕（主卜罕を頭とせるあまたの使を乞塔惕の民の阿忽台なる阿勒壇罕に妨げられて、成吉思合罕は、狗の年（我が順徳天甲戌、宋の嘉定七年、金の宣宗貞祐二年、元の太宗五年、西紀一二一四年、太祖五十三歳の時）乞塔惕の民の處に再出馬せり。）を擲せられたる事は、親征録集史みな載せず。元史は、主卜罕（宋假道、宋殺之。復遣李國昌使宋需糧と云ひ、睿宗の傳に辛卯、拖雷總右軍、自鳳翔渡渭水、過寶雞入小潼關、涉宋人之境、沿漢水而下、遣擲不罕、誚宋假道、且約合兵。）

擲不罕の殺され

高寶詮の回護の説

遷都の後なる再征

宋殺使者、拖雷大怒曰、彼昔遣苟夢玉來通好、遽自食言背盟乎。乃分兵攻宋諸城堡、長驅入漢中、遣入四川、陷閬州、過南部而還と云へり。然れば擲不罕即ち主卜罕は、金人に拘へられたるに非ずして、この年より十七年後なる太宗三年の事なり。されども元史は已に誤り多く、且陳桎の通鑑續編には、擲不罕至青野原、金統制張宜殺之とあるに據り、高寶詮は秘史を誤れりとはせず。元史曰、宋殺蓋金殺之而謗爲宋殺也と云ひ、又太宗紀に擲不罕の事を載せたるを、彼紀蓋因遣李國昌需糧追朔太祖時、遣使之事耳。不然豈有假道被殺、復遣使需糧乎と云へり。この考も一説に備ふべし。但甲戌の再征は太祖自ら出馬したるに非ず。太祖居庸關を出でたるを遣して中都を攻めしめたるなり。太祖紀に、九年甲戌、太祖居庸關を出でたる後、夏五月、金主遷汴、以完顏福興及參政抹撚盡忠輔其太子守忠、留守中都。六月、金軍斫荅等殺其主帥、眾來降。詔三摸合石抹明安與斫荅等圍中都。帝避暑魚兒灤。秋七月、金太子守忠走汴とあり。親征録も略同じくして、甚だ委し。又通鑑續編には、五月、金主遷汴、蒙古主聞之、怒曰、既和而遷、是有疑心、而特以和款我耳。復圖南侵とあり。いづれに據りても、甲戌の再征は、金の宣宗の通れたる後に、降り畢へて、趙官の處に遣りたる使をいかでか妨げたること云ひ出馬するに、成吉思合罕は、潼關の口を指して、者別をば察卜赤牙勒に依り進ましめたり。（潼關は、河南陝州閿鄉縣の西六十清里、陝西

潼關の戰

同州府華陰縣の東四十清里に在り。察ト赤牙勒は、居庸關の蒙語、前に見えたり。親征錄元史本紀に據るに潼關を攻めたるは撒兒只兀惕の撒木合巴阿秃兒にして、太祖自ら出でたるに非ず。又甲戌の年者別（成吉思合罕を潼關の關に入りたることも元史親征錄に見えず。）成吉思合罕を潼關の口に依り進みたりと阿勒壇罕知りて、亦列合答豁孛格秃兒三人に軍を統べさせて、軍塞りて、忽刺安迭格連（譯すれば赤きゆる山東）を先鋒とし整へて、潼關の口を争ひ、峠を勿越させそとて、亦列合答豁孛格秃兒三人を軍を急がし遣りき。潼關の口に到れば、乞塔惕の軍は、地を捲きて來ぬ（地の下原文に誤字あり譯し難し意を以て語を作）成吉思合罕は、亦列合答豁孛格秃兒三人と立ち合ひ（對戰）て、亦列合答を動せり。拖雷出古古哩堅（即ち卷八の二人は、横より衝きて、忽刺安迭格連を退けて到りて、亦列合答を動して敗りて、乞塔惕を爛木の積れる如く殺せり。乞塔惕の軍

拖雷出古の奮戰

ごもを殺して畢はれたりと阿勒壇罕知りて、中都より出でて遁れんと南京の城に入りき（金の南京は、古の大梁また）残れる彼等の軍士ごもは、瘦せて死ぬる時已等の間にて人の肉を食ひ合ひけり。拖雷出古古哩堅二人は善き處に働けりて、成吉思合罕は、拖雷出古古哩堅二人を大に恩賞せり。（金史元錄に據るに、潼關の戦には、太祖親ら臨まざるのみに非ず、拖雷出古二人もそれに與りたりとは見えす。二人の相攜へて奮戦したるは、親征錄通鑑續編に據るに、太祖七年壬申、德興府を攻むる時にありき。又潼關の守將は、尼龐古蒲魯虎にして、亦列合答など云へる人も見えす。親征錄に金の通州の元帥蒲察七斤來降（金史元史に據るに、太祖十年乙亥正月の後、丙子太祖十一年の前に、上駐軍魚兒灤命三合拔都帥蒙古軍萬騎由西夏抵京兆出潼關破嘉汝等郡直趨汴梁至杏花營大掠河南回至陝州適河冰合遂渡而北とあり。元史太祖紀は、十一年丙子秋撒里知兀解三摸合拔都魯率師由西夏趨關中、遂越潼關獲金西安軍節度使尼龐古蒲魯虎拔汝州等郡抵汴京而還とありて、親征錄と年違へり。金史はこの戰の始末を敘ぶること最詳なり。今宣宗本紀、必蘭阿魯帶完顏仲元、朮虎高琪、齊鼎、尼龐古蒲魯虎等の諸傳を合せ考ふるに、貞祐四年太祖十一年秋八月丙子、元兵攻延安。九月辛巳朔、元兵攻防州、以簽樞密院事永錫爲御史大夫、領兵赴陝西便宜從事。

撒木合巴阿秃兒南侵の委しき事

冬十月癸未招射生獵戶練習武藝知山徑者分屯陝虢要地命遙授知歸德府事完顏仲元率山東花帽軍盧氏改商州經略使權元帥右都監元兵攻潼關由禁坑出戍卒皆潰西安軍節度使尼龐古蒲魯虎禦戰兵敗死焉禁坑一名禁谷今之潼關應の南にあり元の兵はこの閉道より遠り出でて潼關を破れり戊辰元兵徇汝州仲元軍趨商虢復至嵩汝皆弗及河東南路行省晉鼎聞元兵已越關庚午遣諸州元帥左監軍必蘭阿魯帶領軍一萬孟州經略使徒單百家領兵五千自便道濟河趣關陝自將平陽精兵赴援京師十一月壬午晉鼎入京師拜尚書左丞兼樞密副使乙酉元兵至河池右副元帥蒲察阿里不孫軍潰而逃阿魯帶亦被創元兵過陝州由三門集津北渡而去戊戌華州元帥府復潼關十二月癸亥元兵攻平陽晉鼎遣兵拒戰元兵不利乃去金國志は親征錄の如く誤りてこの役を一年前の事とし真祐三年八月大軍自河東渡河攻潼關不能下乃由嵩山小路趨汝州遇山澗輒以鐵鎗相鎖連接爲橋以渡于是潼關失守金主急召花帽軍于山東十月大軍至杏花營距汴京二十里花帽軍擊敗之大軍復取潼關自三門析津乘河冰合布灰引兵而渡自是不復出とあり年月は金史と違へれども事實は大概合へり攻潼關不能下と云へるは竟に下らざるに非ず禁坑より遠り出でられて戍卒潰えたる故に下に潼關失守とありその由嵩山小路と云へるは潼關を逃れる閉道に非ず潼關を越えたる後に汝州に趨ける山徑なり召花帽軍于山東は完顏仲元に命じて入り援はしめたることなり金史元史に記せる丙子の役と一事なること疑ふべきなし然るに商略の續綱目は金國志親征錄に據り乙亥の年に三合拔都南侵の事を記して潼關失守自是不復出の二句を省き又丙子の年に金史元史に據りて冬十月蒙古兵克金潼關次嵩汝閉云と書きて三合拔都の名を省きたるは金國志の紀年の誤に因り一事を兩事としたるにて謂はゆる誤に因りて

續綱目續資治通鑑の誤

更に誤れるなり畢沅の續資治通鑑も續綱目の誤に襲れりこの二史は人の信用する書なるが故にその誤をかく辨じ置くなりさて又丙子の役は金の腹地を荒したれどもさほどの大捷もなかりしに秘史には金軍の殲滅窮餓の状を事しく敘ぶるを見れば太宗三年拖雷の陝西より入りて汴京に迫りたる三峯山の捷元史に流血被道資仗委積金之精銳盡於此矣とあるものと混じたるに似たり然らば亦列合答は三峯山の敗將移刺蒲阿完顏合達なるべし斡李格禿兒に似たる名は見えず忠孝軍の總領完顏陳和尚の稱號などにてやあらん

失喇客額兒の註

成吉思合罕は河西務を下すこ中都の失喇客額兒に下馬

せり。(河西務は鎮の名今の順天府武清縣の北白河の支流なる新引河の西なるべけれどいづこを指せるか知らず但この文誤れり金の宣宗の遷れる頃は親征錄元史に據るに太祖は塞外に居りて中都の邊に到らざりしなり)

者別の關破り

者別は察ト赤牙勒の關を破りて察ト赤牙勒を守る軍を動して來て成吉思合罕に合へり(この時居庸關には)阿勒壇罕中都より出づるに中都の内に合答を留守こなし任せて去

中都の留守合答

りたりき(太祖紀に)十年乙亥三月金御史中丞李英等率師援中都戰于霸州敗之五月庚申金中都留守完顏福興仰藥死抹撚盡忠棄城走明安

入守之とあり。この時の事は、金史の承暉（即福興）、抹撚（盡忠）、李英、烏古論（慶壽等）の傳に甚委しけれども、合荅の名は見えず。親征錄には金の留守哈荅國和等とあり。衛紹王紀大安三年に西北路招討使粘合打、宣宗紀貞祐三（成吉思合罕）は、中都の金銀財段物何にても數へしめに、汪古兒厨官阿兒孩合撒兒、失吉忽秃忽三人を遣りき。この三人を來ぬとて、合荅は迎へ接けんご、金あり紋ある段物を取りて、中都の内より出でて、迎へに來ぬ。合荅に失吉忽秃忽言へらく、前にこの中都の物即中都は、阿勒壇罕のなりしぞ。今中都は、成吉思合罕のなるぞ。成吉思合罕の物なる段物を背處にて、柰何ぞ偷みて持ち來て與ふる。汝我取らずと云ひて、失吉忽秃忽は取らざりき。汪古兒厨官阿兒孩二人は取りたり。この三人は、中都の物皆を數へて來ぬ。そこに成吉思合罕は、汪古兒阿兒孩

失吉忽秃忽の廉直

忽秃忽三人に合荅は何をか與へたると問へり。失吉忽秃忽申さく、金あり紋ある段物を持ち來て與へき。我言く前にこの中都は、阿勒壇罕のなりしぞ。今は成吉思合罕のとなりたるぞ。汝合荅は、成吉思合罕の物を背處にて偷みて柰何ぞ與ふる。汝と云ひて、我は取らざりき。汪古兒阿兒孩二人は、彼と與へたるを取りきと云へり。成吉思合罕は、そこに汪古兒阿兒孩二人を甚く咎めたり。失吉忽秃忽を大なる道理を考へけり。汝と云ひ、大に恩賞して、視る我が目、聽く我が耳となりて居らずや。汝と勅ありき。（親征錄に）明安太保入據之、遣使獻捷。上時駐海哈撒兒三人、檢視中都帑藏。時金留守哈荅國和等奉金幣為拜見之禮。雍古兒哈撒兒受之、獨忽都忽拒不受。將哈荅及其物北來。上問忽都忽曰、哈荅等嘗與你物乎。對曰、有之。未敢受之。上問其故。對曰、臣嘗與哈荅言、未陷城時、寸帛尺縷皆金主之物。今既城陷、悉我君物矣。汝又安得竊我君物為私惠乎。上正佳之、以為知大體而重責。

雅古兒阿兒海哈撒兒等不珍也。哈答因見其孫榮山而還。是月。避著桓州涼涇。遣忽都忽等籍中都。

金の質子

合撒兒東略の命

阿勒壇罕は南京に入りて親降り頓首て騰格哩云ふ子を百の從者にて成吉思合罕の處に侍衛になれとておこせけり。(金史元史を考ふるに金の宣宗は質子を送りたることなし。太宗四年王守純の子曹王訛可を出して質たらしめ太宗は速不台を留めて還り居庸を出でたることを太祖宣宗の時の事と誤りたるに非ずや。) 彼等に降られて成吉思合罕は退かんとて察卜赤牙勒に依りそこに退く時合撒兒を左手の軍にて海に遵ひて遣る時北京の城に下馬せよ。北京の城を降して彼方主兒扯惕の夫合訥を過ぎ去りて夫合訥反かんこせば打取れ降らば彼の邊なる彼の城をも過ぎ兀刺河訥兀河に沿ひ去りて塔兀兒河

に沂り山越えて大老營に會ひに來よと宣ひて遣りぬ。(金の)

女眞の蒲鮮萬奴

兀刺河納兀河塔兀兒河

大定府は古の奚の地遼中京を建て大定府と名づけ金北京と改め元の至元七年大寧路と改め明大寧衛とせり。清一統志に天甯故城在今内蒙古喀喇沁右翼南百里喜峯口東北四百八十里老哈河之北老哈河は白狼河とも云ふ。水道提綱に白狼河經故大甯城南俗稱巴爾漢城一曰察罕巴爾漢城とあり。主兒扯惕は女眞即主兒臣の複稱金の本國の民なり。夫合訥は蒲鮮の訛ならん。親征錄甲戌太祖九年四月の處に金主の南遷也以招討萬奴爲威平路宣撫復移治於忽必阿蘭至是亦以眾來降仍遣子鐵哥入質。既而復叛自稱東夏王。太祖紀に十年乙亥冬十月金宣撫蒲鮮萬奴據遼東僭稱天王國號大眞改元天泰十一年丙子冬十月蒲鮮萬奴降以其子帖哥入侍。既而復叛僭稱東夏とあり。兀刺は女眞語河なり。黑龍江を薩哈連烏刺と云ひ松花江を吉林烏刺と云ふ。この兀刺は松花江なり。清一統志に打牲烏拉城在吉林城北七十里混同江東岸烏拉之先布顏築城於烏拉河上。洪尼地國號烏拉とある。混同江も烏拉河も皆松花江なり。納兀河は盛京通志の諾尼江水道提綱の嫩泥江龍沙紀略の腦溫江にして今は嫩江と云ふ。高寶詮曰く嫩泥江古名難水亦曰那河元史地理志稱桃溫水特薛禪傳曰櫛木連忽憐傳兒河は水道提綱に洮兒河亦曰桃爾河源出西興安山東麓云至札賴特旗南匯爲納藍撒池猶言日月池也。東流入嫩泥江。黑龍江外紀に唐書他漏河即今拖爾河一作淘兒河其源流千里並在蒙古境內高寶詮曰洮兒河魏書稱太彌河北史曰太岳魯水唐書曰它漏河遼史曰他魯河曰撻魯河金史曰撻魯古河皆即討活兒之對音高氏は元史の桃溫を納兀河としたれども納兀にはあらずして塔兀兒

なる)合撒兒と共に、官人より主兒扯歹阿勒赤脫命扯兒必三人を遣りたり。(この東征の軍は太祖八年癸酉九年甲戌に渉れる三道侵左軍沿東海破濼薊等城而還と云ひ太祖紀に「皇弟哈撒兒及幹陳那顏抽赤解薄利爲左軍遵海而東取薊州平濼遼西諸郡而還」と云へり。哈撒兒は即合撒兒なり。幹陳那顏即幹陳那顏は按陳那顏の子なり。然るに秘史の阿勒赤は幹陳に非ずして即按陳なれば幹陳陳は按陳の誤なるべし。抽赤解は喇失惕の集史に主兒赤歹と云ひて成吉思汗の幼子と注し、陳經の通鑑續編に太祖の六子を擧げて庶子朮兒徹歹あるに由り、洪鈞は集史と蒙韃備錄とを引きて太祖の皇子なることを考證したれども、秘史に官人主兒扯歹と云へるを見れば、やはり兀嚙兀惕の主兒扯歹なりけり。元史親征錄には薄利ありて、脫命扯兒必なし。脫命扯兒必は親征錄乙亥太祖十年北京降服の續に「上遣脫命斡斡兒必帥蒙古契丹漢軍南征」木華黎の傳乙亥北京興中降服錦州の張鯨來降の續に「詔木華黎以鯨總必監張鯨等軍征燕南未下州郡」石抹季迭兒の傳にも「從奪忽闌閣里必徇地山東大名」などあれば、脫命は合撒兒に從はず、又は從へり)合撒兒は、北京の城を取りて、主兒扯惕の夫合訥を降して、路にある城を取る。合撒兒は、塔兀兒河に浜り來て、大老營に下馬して來ぬ。(北京

合撒兒の東略

木華黎に降れる
北京

の降服は、元史に據れば、木華黎の功なり。親征錄には、三合拔都黃河を渡りて北に還れる後、金元帥尹荅忽監軍斜烈以北京來降とありて誰に降れりとも云はず。喇失惕の史に「撒兒主惕の撒木哈、黃河を渡り、西京に趨きたれば、西京の守將因荅兒罕撒兒撒列迎へ降れり」とあるに由り、洪鈞は錄作北京係誤と云ひたれども、太祖紀には、十年乙亥二月、木華黎攻北京、金元帥寅荅虎烏古倫以城降。以寅荅虎爲留守、吾也而權兵馬都元帥鎮之と云ひ、木華黎吾也而石抹也先の傳に、その事詳なれば、北京は誤らずして、西史の西京は却て誤れり。但石抹也先の傳には、北京を降す前に奇計を用ひて東京を降したることを載せたるに、東京の守將を寅荅虎としたるは誤れり。又太祖紀の寅荅虎烏古倫を殿本は烏庫哩伊勒都呼と改め、その考證に、考烏庫哩爲金之著姓、若是兩人不當一稱名而一舉姓、此事宣宗本紀未載、蘇天爵名臣事略載、木華黎攻北京、金守將銀青嬰城自守。其將高德玉等殺銀青推烏古論寅荅虎爲帥、未幾以城降。殷之續通鑑亦同。爲太祖九年事。年月雖不符、而姓名則合。且以下文寅荅虎爲留守、文義考之、其爲名氏顛倒無疑。今據改と云ひ、畢沅の續資治通鑑の考異に疑載筆者未知、烏古論爲姓、寅荅虎爲名、文有顛倒耳、錢大昕の諸史拾遺にも、東平王世家作烏古倫寅荅虎、烏古倫者、寅荅虎之氏、非兩人也。史臣不辨姓名、傾倒其文、遂若別有一人矣と嘲りたり。然れども、史天祥の傳に乙亥、與大帥烏野兒降其北京、留守銀荅忽、同知烏古倫とあり。烏野兒は即吾也、而銀荅忽は即寅荅虎なり。烏古倫は寅荅虎の僚屬なるを、寅荅虎はその姓を略し、烏古倫はその名を佚して、本紀は又烏古倫の官名を脱したる故に、遂に一人ならんと疑はしむるに至れり。明の史臣いかに史事に昧くとも、烏古倫の姓なることを知らざらんや。又續綱目甲戌九月の條に、木華黎攻金北京、北京裨將完顏昔烈高德玉等殺守將銀青云云、木華黎の傳にも、其下殺銀青とあ

寅荅虎の僚屬なる
烏古倫

銀青與屯襲

合撒兒の東略につきての疑ひ

り。錢大昕の考異に、銀青蓋學其官名、謂銀青光祿大夫、非人姓名也と云へり。今金史奥屯襄の傳を見るに、貞祐三年正月、襄爲北京宣差提控完顏習烈所害とあり。習烈は、卽續綱目の昔烈、又卽親征錄の斜烈、奥屯襄は、卽謂はゆる銀青なり。北京の降れるは、元史紀傳みな乙亥の年なるを、續綱目は甲戌の年としたるは、名臣事略に因りて誤れるなり。さて合撒兒の東征は、元史に據れば、遼西諸郡を取れるのみにして、北京を取れるは、木華黎なるを、秘史に合撒兒北京を取ると云へるは、傳聞の異辭なり。むしろ秘史の誤ならん。又遼東の經略も、耶律留哥の傳に「歲壬申、太祖七年、太祖命按陳那衍行軍至遼東、留哥率所部降之」と云ふ。この按陳卽阿勒赤の東略は、卽合撒兒に從ひて行きたるにやとも思はるれども、その年（七年壬申）は、三道侵掠の年（八年癸酉）の前なれば、強ひて牽きはせ難し。又夫合訥を、蒲鮮の訛とすれば、蒲鮮萬奴の降りたるは、親征錄は九年甲戌の四月とし、太祖紀は十一年丙子の十月とし、相去ること二年半にして、いづれも合撒兒に降ると云ふべからず。その詳なることは、今考ふべからず。

西域征伐の始まり

その後、成吉思合罕は、撒兒塔兀勒の民に兀忽納が頭たる百の使を拘へて殺されて、成吉思合罕宣は、金の縻繩を撒兒塔兀勒の民にいかでか斷たしめたりしとて、兀忽納が頭たる百の使の爲に、讎復し怨報いに、撒兒塔兀勒の民の處

輪書勒斡旋を撒勒を三

闊喇自姆の異稱

に出馬せんとして出馬する時、（この撒兒塔兀勒は、闊喇自姆朝を云へるなり。闊喇自姆朝の管内には、撒兒惕人卽抹哈篋惕教徒多きが故に、蒙古人は撒兒塔兀勒の國と云へり。親征錄元史本紀には、西域の汎稱を用ひ、列傳には、回紇回鶻又は回回と云ふ。回回も、回紇の轉なり。唐の回紇の遺種は、實に畏兀兒にして、畏兀兒も回紇の轉なり。元人は回紇の遺種を呼ぶに、畏兀兒の新名を用ふるは、善けれども、回紇の舊名を闊喇自姆朝に當てたるは、誤れり。長春の西游記には、畏兀兒をも撒兒塔兀勒をも皆回紇と云へり。闊喇自姆朝の本土は、鹹海の南、裏海の東に在り、今の希哇の地にして、玄奘の西域記に、貨利習彌伽、隋書西域傳に、穆國、新唐書西域傳に、火尋、或曰貨利習彌、巨過利、元史地理志に、花刺子模と云ひ、西人は合喇自姆とも、闊哇喇自姆とも、忽哇喇自姆とも云ふ。闊喇自姆朝の興亡と、蒙古西征の事蹟とは、主吠尼喇失惕の記載甚詳かなり。北宋の時、薛勒主克王馬里克沙の僕、努施特勤始めて、闊喇自姆部の酋長となり、その子庫惕別丁抹哈篋惕は、闊喇自姆沙と稱し、西遼興朝を滅し、亦喇克阿者姆を取り、巴固答惕の合里發より冊封を受けたり。宋の寧宗慶元六年（西紀一二〇〇年）塔喀施の子阿刺額丁抹哈篋惕嗣ぎ立ち、巴勒黑赫喇惕馬贊迭囉乞兒曼を并せ、乞魄察克を打破り、元の太祖四年（一二〇九年）西遼に叛き、その西境を奪ひ、八年（一二一三年）河間の國（西回紇）を滅し、撒馬兒罕に新都を建て、闊喇自姆の兀兒堅只城を舊都と云へり。又誥兒の國を并せ、その後、噶自納の地を定めたる時、合里發納資兒を廢せんと欲し、大軍を率ゐて西征し、路にしむる密書を得て、大に怒り、納資兒を廢せんと欲し、大軍を率ゐて西征し、路に

闊喇自姆朝の興り

て發兒思阿在兒拜展を降し太祖十三年戊寅(一一八八年)合里發の領地に入りたれども大雪に遭ひ又土兵に襲はれ利あらずして退けり還りて孛合喇に到れば西域の商侶蒙古より歸り太祖の贈物を上り通商を求むる辭を傳へ阿刺額丁はいやいやながらそれを許せり既にして太祖は諸王官人に命じて各賫を出さしめ畏兀兒人四百餘人を發して西域の商侶に従ひ往きてその産物を求めしめたり然るに幹惕喇兒城に到れる時城將亦納勒主克該兒罕は悉く拘へて蒙古より細作を遣せりと王に告げたれば王は命じて悉く殺さしめ惟一人逸げ歸りたり捏撒腓はその中四人は使にて外は皆商人なりそれらを殺せるは亦納勒主克の意にして王の命に非ずと云へり耶律楚材の西游録に「苦蓋西北五百里有訛打刺城此城渠會嘗殺命吏數人商賈百數盡掠其財貨西伐之舉由是也」とあり命吏數人は捏撒腓の使四人と云へるに近く商賈百數は祕史の百の使と數は合へり喇失惕の四百餘人はおまけあるに似たり洪鈞の西域補傳に多遜を譯して太祖聞逸者歸報驚怒而勦免冠帶跪禱於天誓必雪恨其時古出魯克餘孽猶未靖乃先遣西域人巴固喇爲使偕蒙古官二人往詰責云云王篋死巴固喇雜蒙古官鬚釋歸以辱之自聚兵於撒馬兒罕云云この下に蒙古の兵篋兒乞惕の餘眾を逐へるもの合米赤河にて闊喇自姆の兵と衝突せる小戦あり太祖紀には只十四年己卯夏六)そこに也遂合敦は成吉思合罕に建議して奏さく合罕は高き峠を越え廣き河を渡り長き出征し多き國を平げんと思ひ給へり生れたる只命ある

也遂合屯の建議

幹惕喇兒
兀魯思

溫都兒

幹兒堅

兀兒秃

るものに長生なるは無かりき大木の如き爾が身傾き去らば麻穰あきの如き國民を誰にか委ねん柱しらの如き爾が身倒れ去らば羣鳥むらの如き國民を誰にか委ねん生れたる四人の駿れたる子だちを彼等の誰をさか宣ふらん子だちに弟だちにあまたの民草に我儕小人にも心附けてあらまほし心附きたるここを建議したるなり聖旨知しめせ(明)皇帝涉歴山川遠去征戰若一日倘有不諱四子内命誰爲王可令眾人先知)ご奏したれば成吉思合罕勅あるには合敦の人にもあれご(婦人)也遂の言は善きよりも善し誰も弟ごも子ごも汝等も孛幹兒出木合里等もかくは建議せざりき我も先祖の大業を承繼うけつがざるに(承繼ぐべき人)忘れて居りき死ぬることを

兀魯思

兀魯思

兀魯思

拙赤を察阿歹の罵り

得られざるに、温塔喇睡りて居りき。宣ひて、我が子ごもの兄は、拙赤なるぞ。何をか云ふ。汝言へ。宣へり。拙赤聲を出す前に、察阿歹言く、拙赤に言へ。宣ふは、拙赤にや委ねん。宣ふならん。この篋兒乞惕より出でたるものにかんぞ知らしめん。我等云ふと等しく、兒帖兀真の生れたる時の事は、秘史に載せざれども、三人の征伐に乗じて逃げ歸りたる後に生れたる故に、拙赤と名づけられたり。拙赤は蒙古語客なり。洪鈞の朮赤補傳は、喇失惕阿不勒噶資に據り、孛兒台有姊爲汪罕妃、烈祖又嘗有德於汪罕、故聞太祖之訴、即脅蔑兒乞歸、孛兒台未、被掠時、孕已數月、比在歸途、朮赤生、倉卒無襁、兒具乃搏、麪如籃、形置於騎、以載歸、太祖喜曰、此不速之客也。故名曰朮赤。云へり。この事情に依りて、拙赤は起ちて、察阿歹の領にしがみつきて言く、罕額赤格には取分けて言はれざるに、汝は我をいかでか揀分けたる。いかなる技能にて勝れたる。汝た剛情にてのみ蓋勝れたり。汝遠箭を射て汝に

拙赤の怒り

合黑察 察兀

額兒 額兒 恒亮察

闊闊搠思の懇な

る訓諭

勝たれば、赫別該親指を斷ちて去てん。搏ち合ひて汝に勝たれば、倒れたる地に起きざらん。罕額赤格の聖旨知しめせ。云へり。拙赤察阿歹二人領を執り合ひて立ち居る時、拙赤の手を孛兒出扯きて、察阿歹の手を木合黎扯きて居る時、成吉思合罕聽きて、噤みて在せり。そこに闊闊搠思は、左の邊に立ちて言く、察阿歹は何ぞ遽てたる。爾、爾の罕額赤格は子だちの内にて爾に望を掛けて居給ひき。爾だち生るゝ前は、星ある天は、廻り斡兒赤（變動）てありき。多き國民は、反き居りき。臥處にも入らず、掠め合ひたりき。地皮ある地は、斡兒赤翻りてありき。普き國民は、反き居りき。衾にも臥さず、攻め合ひたりき。かゝる時には、互に用心して、外に行かざりしぞ。行けば、出遇ふことこなりし

成吉思汗實錄卷の十一

ぞ「家」に「躲」れて「外」に行かざりしぞ「行」けば「鬪」ふこころなりし
不噯兀揚 不勒合勒都
 ぞ「一」族「親」みて「外」に行かざりしぞ「行」けば「殺」し合ふこころな
阿馬刺 阿刺勒都
 りしぞ「賢」き合敦なる母を「蘇」油に心凝らしめて「馬」乳に心解
蘇油 馬乳
 けしめて「物」言へり「爾」。（醉ひて妄語せり）「温」處よりひよこりこそ
温處 不列延
 の腹より生れざりしか「爾」等「熱」處よりむくご「獨」胞衣より出
熱處 獨胞衣
 でざりしか「爾」等「心」より生れたるその母を「怒」らせば「彼」の「德」
合刺温 合刺揚 合黑察 合忽納黑 合噯
 を「歌」ひて「怒」息ましむこも能はじ。腹より生れたるその母を
歌 怒息 札里喇兀魯 赤馬揚合 赤納兒
 怨みさせば「彼」の「悔」みを消すこも能はじ。（明）「察」阿歹你爲甚忙
格木哩兀魯 格訥額兒 格思格 察額里
 皇帝見「指」望「你」當「您」未「生」時「天」下「擾」攘「互」相「攻」劫「人」不「安」
格訥額兒 格思格 察額里
 生。所以「你」賢「明」的「母」不「幸」被「擄」若「你」如「此」說「豈」不「傷」著「你」母「親」的
格訥額兒 格思格 察額里
 心。爾「だ」ちの「罕」額「赤」格は「帝」國を「立」つるに「黑」き「頭」を「馬」に「載」せ
合喇 帖哩兀 罕土合刺

創業の艱難

鞠育の劬勞

て「黑」き「血」を「皮」桶に入れて「黑」き「眼」を「瞬」もせず「匾」き「耳」を「枕」に
合喇 赤速 南不合刺 合刺 你都 喜兒 篋思 勤 合塔孫 赤乞 迭喇
 も「置」かず「袖」を「枕」きて「襟」を「鋪」きて「涎」を「飲」み（涎に渴）て「失」吉（齒
塔勒賓 罕出 迭喇列 餘兒里 迭不思 失魯孫 温答刺
 間に「挿」ま）を「食」ひ（宿食に）て「額」の「汗」は「脚」底に「到」るまで「脚」底の「汗」
餘納黑刺
 は「額」に「到」るまで「進」み「慎」み「行」く時に「爾」だちの母は「諸」共に「苦」
ひたひ
 み「合」ふに「さ」つばりご「髮」結ひて「裾」紮げ「帶」締めて「し」つかりご
密味塔刺 李黑塔刺周 密刺只塔刺 不薛列周 亦合塔刺
 髮結ひて「身」を「堅」め「帶」締めて「爾」だちを「育」つるに「嚙」む間に「牛」
李黑塔刺周 你都喇塔刺 不薛列周 札勒吉
 を「與」へて「喉」に「咽」びて「都」て「を」與へて「空」しくて「行」きたりき「爾」
餘駱來 餘駱刺 餘駱孫
 だちの「肩」を「扯」きて「男」ご「齊」等に「誰」にならせん「爾」だちの「頸」を
額格木 額格 額明
 扯きて「人」ご「齊」等に「誰」にならせんご云ひて「爾」だちの「不」亦（義）
古温
 を「知」す）を「淨」めて「爾」だちの「踵」を「擡」げさせて「男」の「肩」に「駟」馬の「臀」
額明 額甘 阿黑塔 合兒甘
 に「達」かして「今」爾だちを「好」く「見」んご「思」ひて「居」給はずや「賢」

明なる我等の合敦は、日の如く明なる湖の如く寛き心坐し
 ましき(明譯)你父初立國時與你母一同辛苦將您兒子每養大
 望(譯)你成人你的母如日般明海般深這等賢明你如何可這
 般說(譯)云へり。

太祖の諭し

察阿歹の譲り

それより成吉思合罕宣はく拙赤をいがんぞかく云へる、
 汝等我が子ごもの兄は拙赤に非ずや後はかく勿云ひそこ
 勅ありきこの言につき察阿歹微笑みて言く拙赤の力ある
 技能の答は言ふまじ口にて殺したるは駄すべからず言に
 て死なしめたるは剝取るべからず(悪く言はれても滅り)子ご
 もの兄は拙赤我等二人なるぞ罕額赤格に竝行き力を與へ
 ん逃(逃)げたるをば劈き斫り合はん後れたるをば踵を斷り斫
 若勒否咄黑三 若勒否咄黑三 斫只咄黑三 斫只咄黑三

拙赤の譲り

諸子分封の端

り合はん。幹歌歹のみは敦厚なり、幹歌歹を云ひ合はん(勸進)
 幹歌歹は罕額赤格の前に居て、形影大なる皮帽の訓を奉け
 しめば、可からんぞ云へり。この言につき成吉思合罕宣は
 く拙赤は何をか云ふ言へこ宣へり。拙赤言く「察阿歹已に言
 へり。察阿歹我等二人罕額赤格に竝行き力を與へん。幹歌歹
 を云ひ合はん(明譯)教幹歌歹承繼者」云へり。成吉思合罕勅
 あるには竝行きつゝ何ぞあらん(明譯)你二人不必竝行。土地
 なる母は、廣くあり。河ごも水ごもは多くあり。分つべき營盤
 を廣げ、外國を鎮めさせ分たんと宣ひて、拙赤察阿歹二人は、
 言に遵ひ合へ。民に勿笑はせそ。人に勿嘲らせそ。前に阿勒壇
 忽察兒二人は、かくの如き言を定め合ひて、却てその言に遵

幹歌歹相續のう
けがひ

はざる故に、いかにか爲られし。何をか爲されし。今阿勒壇忽察兒二人の子孫より汝等と共に分け合はん。彼等を見ては、いかなぞ慢られん。汝等譯如今他子孫見在教隨愆每以爲鑑戒。宣ひて、幹歌歹は何をか云ふ言へ。宣へり。幹歌歹言く、合罕額赤格恩賜して言へ。云はるれども、何をか申さん。我能はず。いかでか申さん。出來る限慎まん。申さんぞ。久後若我が子孫に、青草に裏む。牛に喫はれざる。膏に裏む。こも、狗に喫はれざる。もの生れば、麋の如く跳越え鼠の如く順ひ去らしめんか。(辭のまへに譯したれども、さつばり分らず。善くたりと。只恐後世子孫不才不能承繼。だけを譯せり。)これだけをぞ申さん。別に何をか申さん。我。云へり。この言につき成吉

拖雷襲衛の志

太祖の兄弟五人
各一人相續の約

思合罕勅あるには、幹歌歹かゝる言を言ふならば、可きぞ。宣へり。又拖雷は何をか云ふ言へ。宣へり。拖雷言く、我は合罕額赤格の名ざしたる兄に、前に居て、忘れたるを心附けて、睡りたるを喚覺して、然諾の伴赤馬の鞭となりて、然諾より後れず、班列より缺けず、長き出征に出征して、短き劇し戦を戦ひて與へん。言へば、成吉思合罕は善し。勅あるには、合撒兒の子孫一人に、その位を知らしめ、阿勒赤歹の子孫一人に知らしめ、幹惕赤斤の子孫一人に知らしめ、別勒古台の子孫一人に知らしめん。かく思ひて、我が子孫一人に知らしめて、我が勅は、別に爲さず。毀らざれば、違はされ、失はざれ、汝等、幹歌歹の子孫に、青草に裏む。こも、牛に喫はれざる。膏

に裏むごも狗に喫はれざるもの生れば我が子孫の内に一人も善きもの生れずやはあらん」と勅ありて、(合撒兒阿勒赤歹台四人の子孫の相續の事と太祖の子孫即元帝金帳罕察)合台罕亦勒罕の相續の事とは編末の附録に述ぶべし。

唐兀惕の微發

成吉思汗出馬するに唐兀惕の民の不兒罕の處に使を遣り、汝の右の手を爲らん」と云ひたりき。汝撒兒塔兀勒の民に金の縻繩を斷たれて折證せん」と出馬せり。我右の手を遣りて出馬せよ」と云ひ遣りたれば不兒罕聲を出さざるに、まづ阿沙敢不あしかん言く「力足らざる内に罕を爲りつゝ何と云ひて、軍を添へず大なる言を言ひて遣りき。そこに成吉思汗宣はく「阿沙敢不あしかんにいかでかかく言はれたりしと考へ、彼等の處に便翻りて指して往かば、何の難きことかあらん。別に即

阿沙敢不の宣言

人の處に向ひて居る時なるぞ「罷めん」その事を長生の上帝に祐護せられば金の牽掣堅固なるを扯きて來ば、そこに即成就せよ、その事を宣ひて、(この時の不兒罕は夏の神宗李遵頊なる遵頊位を嗣げり、元史太祖紀には十三年戊寅即西域征伐の前年、是歲伐西夏、圍其王城、夏主李遵頊出走西涼とあれども、秘史の趣にては罅隙開けたるのみにて、征伐は無かりし様なり。親征錄集史に)も、その年西夏を伐ちたることを載せず。

忽蘭合屯の隨行 幹惕赤斤の留守

免の年(我が順徳天皇承久元年己卯、宋の嘉定十二年金の宣宗興定)撒兒塔兀勒の民の處に阿喇亦に依り越え出馬するに、成吉思汗合罕は、合屯より忽蘭合屯を伴れ進み、弟たちより幹惕赤斤那顔を大老營に畱せしめて出馬せり。(耶律楚材の西游錄に「戊 師親征、使者の殺されたるは戊寅の年に使者殺され、その冬成吉思汗は幹兒朶の史は、主吠尼に本づきて、二二一八年に使者殺され、その冬成吉思汗は幹兒朶

諸書異辭なき己卯の西征

を發し、弟兀主堅、幹惕赤斤に國の政を委ね、一二一九年の夏、亦兒失の河邊に駐りて、馬を養ひ、軍を整へ、委古兒の君、巴兒主克、阿勒馬里克の君、昔固納克帖勤合兒魯克の阿兒思、闐罕みな會し、秋、師進み、六十萬と云はれたり。闐喇自姆王懼れて、何の計もえせず、蒙古の軍、昔渾河に至るまで、抗敵するもの無かりきと云へり。一二一九年は、即己卯の年なり。丘長春の西游記に、宣使劉仲祿己卯の五月、在乃滿國兀里朶得旨とあるは、太祖親發の前月なり。乃滿國兀里朶は、太祖の四、幹兒朶の一なる乃蠻の幹兒朶、辛巳の六月、長春の立寄りたる處にして、下文に「窩里朶漢語行宮也。其車輿亭帳望之儼然。古之大單于未有若此之盛也」と云へり。耶律楚材の雲中より至りたる行在所も、この幹兒朶なり。乃蠻の幹兒朶を發したるは、己卯の秋、軍を進めたることなり。己卯の西征は、諸書殆ど異辭なし。然るに、喇失惕の史には、兔の年、諸皇子將帥を集めて、西伐の事を議り、軍中の法度を定め、龍の年、亦兒失河に駐夏し、秋、軍を進めて、幹惕喇兒城に至るとあり。諸書に較ぶれば、一年後れたり。親征錄は、己卯、上總兵征西域とは書き出したれども、次に庚辰、上至也兒失河、住夏、秋、進兵、所過城皆克、至幹脫羅兒城と云へるは、全く喇失惕に同じ。蓋、修正秘史の紀年に一年の後れありしと見えて、己卯より癸未まで五年の間の事蹟は、親征錄も、集史も、皆一年づつ後れたり。洪鈞曰く、帝駐也兒失河、應是己卯夏、而西域史、辰年方至也兒失河、與親征錄同。由是而見、脫必赤顏之敘、西伐、誤始龍年、元史既本之、而又考知他書始於己卯、據以增入、於是攻取蒲華、薛迷思干兩城、一事兩記、譯西域史、乃知其病在此。この一事兩記は、錢大昕より疑ひ始めたる難題なりしが、洪鈞の解說にて、その病の根本明になれり。阿喇

修正秘史の紀年の一年後れ

西征の路順

亦は卷八なる阿喇嶺にして、乃蠻の地より不黑都兒麻河の源に赴くに越ゆる所なり。然るに太祖西征の路は、不黑都兒麻河に向はずして、乃蠻の地より阿勒台山の東南、幹山を越えて、合喇額兒失河に出でたれば、阿喇亦を越ゆと云へるは、いかゞあらん。耶律楚材、丘長春の經たる路は、蓋大軍の異なるらざる故に、楚材の西游録と長春の西游記とに依り、太祖の進軍を跡附くるは、頗る興味ある事なれば、語長けれども、こゝに補敘せん。まづ西游記に、辛巳五月中旬、陸局河(客魯噠河)を離れて、より西に行き、六月十四日、長松嶺を越え、西北に行き、平地に出で、石河を見、高嶺に登り、海子に臨み、二十八日、泊窩里朶之東、宣使往奏、稟皇后、奉旨請師渡河。其水東北流、玻璃塔紉は、長松嶺を康該山の東の枝なる温都兒沙納(高き松山)に當て、石河を薛連噶河の南の深水なる赤羅禿石ある河に當て、高嶺の下なる海子を一源なる額帖兒河の流れ出づる察罕諸兒(白き湖)に當て、乃蠻の幹兒朶を薛連噶河の源なる額帖兒河の邊に置けり。次に七月九日、同宣使西南行、五塔紉曰く、尖れる峰は、烏里雅蘇台の東なる康該の雪峰の一なる幹惕桓孩兒罕山なり。その麓、李固丁河の源に一の湖あり。峽より出でたる後、西に流るゝ河は、烏里雅蘇台河なりと云へり。長春は、それより西南に行き、沙場を過ぎ、又五六日、嶺を躰えて南し、田鎮海の城の北を過ぎ、二十六日、阿不罕山の北に鎮海來謁し、八月八日、大山に傍ひて西に行き、又西南約行三日、復東南過大山、經大峽、中秋日、抵金山東北、少駐、復南行。其山高、深谷、長坂、車不可行。三太子出軍、始闢其路、約行四程、速度五嶺、南出山前、臨河止泊。從官連暮爲營。因水草、便以待。鋪牛驛騎數日、乃行。渡河而南。下喇惕施乃迭兒曰く、長春の過ぎたる山口にて、大軍の過ぐる爲に、路の關かれたるを見れば、長春は、成吉思汗耶律楚材と同じ路を行きたるこ

額帖兒河の邊なる乃蠻の幹兒朶

阿勒台の東南幹山

必什巴里克

とうつなし。若必思騰答班の山口は、阿勒台山脈を越ゆる峠の内にて困難少き所なれば、長春等はその山口を過ぎたるならん。然れども又上文の水草の便と河を渡るとの二語に據れば、兀闐答班を越えて不勒昆河(兀侖古河の上流に下れりとも考へらる)これより長春は直に南に進み、白骨甸を度り、沙陀を過ぎ、委兀兒の國に向ひたれども、西征の軍は、金山を越えたる後、馬力を養はんが爲に、西に轉じて合喇額兒的失河に一夏を過したりき。合喇額兒的失河の谷とそ、澤水なる克喇河の谷とは、今も善き牧場として名高しと云ふ。西游録に道過金山云云。金山而西水皆西流入海とあるは、兀侖古河の乞失勒巴什湖に入り合喇額兒的失河の齋桑湖に入るの類を云ふ。次に其南有回鶻城、名別石把云云。城西二百里有輪臺縣。西游記に八月二十七日抵陰山(天山)後翌日沿川西行、歷二小城。西即鼈思馬大城云云。此大唐時北庭端府。其西三百餘里、有縣曰輪臺。九月二日、西行。四日宿輪臺之東。又歷二城、重九日至回紇昌八刺城。記の鼈思馬は、即錄の別石把、元史の別失八里、喇失惕の必什巴里克にて、委兀兒の都なり。克刺普囉惕は、必什巴里克を今の烏嚕木齊に當てて、洪鈞もそれに從ひたれども、かくては昌八刺に接近して、輪臺を置くべき所なし。徐松曰く、唐北庭大都護府治、在今濟木薩之北、端即都護字之合音。輪臺縣治約在阜康縣西五十里と云へる。從ふべし。昌八刺は、元史地理志に彰八里、耶律希亮の傳に昌八里と書けり。程同文曰く、中統元年、阿里不哥反、希亮踰天山至北庭、都護府二年、至昌八里城、夏踰馬納思河、則昌八里在今瑪納斯河之東也。錄に瀚海去(別石把)城數百里、過瀚海、千餘里、有不刺城、不刺南有陰山、頂有池、周圍七八十里。出陰山、有阿里馬城。記に翌日(九月十日)並西南行、約二十里、忽有大池、方圓幾二百里。師名之曰天池。沿池正南下、左右峯巒峭

賽喇姆諸兒

阿勒馬里克

拔。眾流入峽、奔騰洶湧、曲折彎環、可六七十里。二太子扈從、西征、始鑿石理道、刊木爲四十八橋、橋可並車、薄暮宿峽中、翌日方出、入東、西、大、川、次及一程、九月二十七日、至阿里馬城。錄の瀚海は、即記の沙場なり。徐松曰く、晶河城東、至托多克、積沙成山、浮灘難行。東距阜康縣、一千一百里、故云十餘程。不刺は、地理志に普刺、耶律希亮の傳に布拉と書き、喇失惕は、普刺惕と云へり。洪鈞曰く、今城已廢、當在博羅塔拉河左近。南臨賽喇木、淖爾、徐松曰く、自托多克過晶河、山行五百五十里、至賽喇木、淖爾、東岸、淖爾正圓、周百餘里、雪山環之、所謂天池海。並淖爾南行五十里、入塔勒奇山、峽、諺曰、果子溝、溝水南流、勢甚湍急、架木橋以度、車馬、峽長六十里、爲四十二橋、即四十八橋遺趾。記の東西大川は、伊犁河の谷を云へるなり。阿勒馬里克は、元史の阿力麻里、珀兒沙人の阿勒馬里克なり。嚕西亞の薛篋、諾甫は、阿勒馬里克は、庫勒札の西北四十嚕里、伊犁河の谷にありきと云ひ、嚕西亞の庫勒札、領事たりし、教授咱合囉甫は、綏定より七嚕里の所に古城の大なる廢墟あることを聞き、知れり」と云ひき。又錄に、又西有大河、曰伊犁、てあるは、即伊犁河なるを、記には、又西行四日、至答刺速沒、螿、水勢深闊、抵西北流、十月二日、乘舟以濟、とあり。塔刺思河は、伊犁河より遙に西にあり、記を書きたる人ふと誤りたるなれば、これは伊犁河として見るべし。長春の歸路に、癸未三月二十三日、吹沒螿の南岸に至り、又十日、至阿里馬城。西百餘里、濟大河、とある大河は、この伊犁河なり。錄に、其西有城、曰虎司窩魯朵、即西遼之都、附庸城數十。記に十月二日、乘舟以濟、南下、至一大山、阿刺套嶺、又西行五日、云云。西行七日、度西南一山、略思帖克山口、明日至回紇小城。十有六日、西南過板橋、渡河、晚至南山、阿列克散迭兒山脈、下、即大石林牙。其國王遼後也。云云。板橋にて渡れる河は、即吹沒螿、今の楚河にして、合喇乞塔惕の都は、楚河と阿列克散迭兒山脈との間にありしなり。錄に、又西數百里有塔刺思城。記に、十有八日、沿山

西遼の故都

塔刺思城

而西七八日山忽南去一石城當途石色盡赤有駐軍古跡西有大塚若斗星相聯又渡石橋並西南山行五程至塞藍城記を書ける人伊黎河を苔刺速沒磬と誤りたる故にこゝには塔刺思河の名を擧げず然れども渡れる石橋は塔刺思河の橋なるべしト喇惕施乃迭兒曰く長春は今の庫勒札に近き阿勒馬里克を發したる後伊黎河を庫勒札より遠からぬ所にて渡りたりと見ゆそれより蓋今の威兒尼のある所に進みたり阿刺套連山に沿ひ西に行き蓋舊き驛路に由り喀思帖克山口にて連山を越えたり原注威兒尼より塔什肯篤に車の通らるゝ新しき驛路は北に廻り路して關什珀克にて舊路に合ふ楚河をば必ず今の脱克馬克にて渡り阿列克散迭兒山脈の麓に達したるならんそれより今驛路あるこの山脈の麓を西に行き塔刺思河に到り今の奥列阿塔の邊にて河を渡りき賽喇姆城は沁肯惕の東十三英里に今も猶あり奥列阿塔より塔什肯篤に至る驛路は賽喇姆に近く通るなり録に又西南四百餘里有苦蓋城八普城可傘城芭攪城苦蓋西北五百里有訛打刺城苦蓋は失兒苔哩牙の南岸なる關氈篤なり八普曼干の西失兒苔哩牙の北に帕魄とあるはそれなり可傘は地理志の柯散曷思麥里の傳の可散にして納曼干の西北三十嚕里喀散小河の傍にあり芭攪城は速勒壇巴別兒の記録に見えたる康底巴攪にして關氈篤の東にありき康底は城邑巴攪は巴旦杏にして巴旦杏の名高き所なりこの果は支那に無かりし故に珀兒沙語をその儘に用ひたり本草綱目には巴旦杏と書き本草正要には八擔杏と書けり録に芭攪城邊皆芭攪園故以名其花如杏而微淡葉如桃而差小冬季而花夏盛而實と云ひ記にも正月杞攪始華類小桃俟秋採其實食之味如胡桃と云へり芭攪も杞攪も巴攪を聞き誤りたるなるべし嚕西亞の地圖に浩罕篤

巴攪城

關氈篤河

者別等三將の派遣

と關氈篤との間に康亦巴攪と云ふ所あるは即その地なり訛打刺は名高き幹惕喇兒なり後に言ふべし記に十一月五日塞藍にて病死したる門人趙九古を葬り即行西南復三日至一城明日又歷一城復行二日有河是爲霍蘭沒磬由浮橋渡霍蘭沒磬は中世の阿喇必亞地理家の昔渾河今の失兒苔哩牙なり常徳の西使記に忽牽河元史郭寶玉の傳に忽章河明史の西域傳に火站河と云ひ赫兒別羅惕は阿喇必亞人は昔渾河を通俗には納哈兒闊展篤闊展篤の河と呼びたりと云ひ速勒壇巴別兒もこの河をしか呼べりと云ふト喇惕施乃迭兒曰く長春の歴たる二城の一は沙什即塔什肯篤なるべし失兒苔哩牙を渡れる所は蓋撒馬兒罕に至る驛路の通る赤納思なりけん蒙古の軍は幹惕喇兒指して西に進みたりしに長春は賽喇姆より直に西南に行きたれば賽喇姆以往の行程は大軍と同じか者別を先鋒に遣りぬ者別の後援に速別額台を遣らざりぬ速別額台の後援に脱忽察兒を遣りぬ史に脱曷察兒とありて太祖の婿なりと云へり元史世系表なる鐵木哥幹赤斤の孫塔察兒國王を集史に脱曷察兒と云へるに依ればこの脱曷察兒は博爾忽の傳に附記せる從孫塔察兒ならんと考へらる塔察兒の傳に西征に従へることを載せざるは軍令に違ひて太祖に責められたる故にその家傳に諱みて略かれたりしならんこの三人を遣るに外面に往きて速勒壇の彼方に出てて我等を到らしめて夾攻めんのたまひて遣りぬ者別はかく往き

脱忽察兒の軍令
違反

速勒壇の異文

罕に非ざる罕篋
里克
親征錄なる三將
の追撃

て罕篋里克の城ごもを経て動かさず、外面を過ぎけり。その後より速別額台も、その理由に依り動かさず過ぎけり。その後より脱忽察兒は罕篋里克の傍の城ごも侵して彼の田禾を掠めき。罕篋里克は城ごもを侵されたりこて、背き動きて、札刺勒丁莎勒壇に合ひけり。(速勒壇は抹哈篋惕教徒の玉號にして、阿刺額けすに僭稱せり。この時抹哈篋惕已に死し、その子者刺勒額丁即者刺列丁は、速勒壇の位を嗣ぎたり。札刺勒丁莎勒壇は、者刺列丁速勒壇の訛なり。速勒壇は西游録に梭里檀、親征錄に速里壇、西游記元史郭寶玉の傳に箠端郭侃の傳に箠端、巴而朮阿而忒の傳に鎖潭とあり。者刺列丁は親征錄元史本紀に札蘭丁とあり。罕篋里克は、巴而朮阿而忒の傳に罕勉力とあり。喇失惕に據れば、篋兒甫の酋長にして、一國の罕に非ず。親征錄元史本紀に篋里可汗と云ひ、秘史原文に罕と篋力克とを離し、語譯に皇帝篋力克、文譯に篋力克王と云へるは、皆非なり。者別等三將の派遣は、太祖十四年乙卯の秋攻撃の始まりし時の事に非ず。親征錄に據れば、太祖已に失兒河の畔なる諸城を下し、李合喇撒馬兒罕を平げ、拙赤察阿歹、斡歌歹は兀兒堅只に克ち、拖雷は闊喇散の諸城を破り、太祖自ら阿木河を渡り、巴勒黑を破り、壬午、太祖十七年の春、塔列干の寨を破りたる後、是夏避暑於塔里汗寨高原、時西域速里壇、札蘭丁遁去。遂命哲別爲前鋒追之、再遣速不台拔都爲繼。

集史なる三將の
追撃

又遣脱忽察兒殿其後、哲別至蔑里可汗城、不犯而過。速不台拔都亦如之。脱忽察兒至與其外軍戰、蔑里可汗懼、棄城走とあり。この文の大意は、秘史と異ならず。然れども、喇失惕の集史に據れば、三將の派遣は、者刺列丁を追はんが爲に非ずして、抹哈篋惕を追はんが爲なりき。集史の文は甚委し。その略に曰く、蛇の年、太祖十六年辛巳の春、成吉思汗は、李合喇を破り、諸軍を集めて、撒馬兒罕を圍める時、速勒壇已に南方に遁れたり。と聞き、徹別速不台を遣り、各萬人にて追はしめ、脱忽察兒、巴哈都兒にも萬人にて續かしめ、戒めて曰く、彼もし強くはむかひて、汝等力足らずば進まずして、速く我に告げよ。彼遁れば、穴に入るとも窮めよ。過ぐる所にて、降る者は懐け、逆ふ者は壞れ。三年を期とし、迭施惕乞魄察克より、抹古里思壇に回り、我等に遇へ。汝等の後より、我又拖雷に闊喇散の諸城を平げしめ、拙赤察合台、斡歌台に闊喇自姆の都を取らしめん。皇天の祐護に頼り、此等の事を成し畢へば、凱旋せん」と云ひて、三將を遣り、已に撒馬兒罕を陥して、その秋三皇子を闊喇自姆に遣り、成吉思汗は、拖雷と鐵門關を過ぎ、拖雷を遣りて、闊喇散を攻めしめたり」と云へり。抹哈篋惕の追窮を命ぜられたる三將の内、脱忽察兒の名は、その後見えず。徹別速不台は、巴勒黑、你沙不兒諸城を降し、路を分けて西に進み、たれば、抹哈篋惕窮迫し、裏海の小島に入りて病死せり。その子者刺列丁位を嗣ぎ、島より出でて、闊喇自姆に往きたれども、留まること能はず。南に走りて、曠自納に入りたり。馬の年、太祖十七年壬午の春、拖雷は、闊喇散の諸城を平げて還り、成吉思汗と兵を合せて、塔列干の寨を攻め下し、察合台、斡歌台も、闊喇自姆を平げて至り、會し、その夏、塔列干に駐れり」とありて、さて三將追撃の初に遡り、三將の速勒壇を追ひし時、篋兒甫の酋長罕篋里克は、使を遣りて降りたれば、成吉思汗は、もし罕篋里克の地を経ば、侵すべからず」と三將に命じたり。徹別速不

北 失吉忽秃忽の敗

台は命の如く侵さず過ぎたるに、脱噶察兒後れ至り、軍士劫掠したれば、山居の人拒ぎ戦ひ、脱噶察兒陣歿せり。罕篋里克は、脱噶察兒の横暴なることを成吉思汗に告げ遣りて、衣服を贈りて謝したり。然れども懼れて安からず、者刺列丁の嚙自納に奔れるを聞き、使を遣りて屬したり。と云へり。然らば、脱噶察兒の軍士の劫掠は、速勒壇抹哈篋惕を追ひて、巴勒黒より、你沙不兒に向へる時に、喇失惕は、罕篋里克の者刺列丁に屬することを敍べんが爲に、者刺列丁の嚙自納に奔れる後に、至り追殺したるなり。然るを親征録に、札蘭丁を追へるが如く書けるは、誤れり。されどもこの誤は、修正秘史を誤譯したるにも非ず。原本秘史より、已に誤り居たるなり。又多遜の史には、一二〇年、太祖十五年、庚辰の春、李合喇撒馬兒罕を取り、徹別速不台を遣り、抹哈篋惕を追はしむとありて、脱噶察兒の事を云はす。さて、その秋、三皇子をば、兀兒堅只を攻めに遣り、拖雷を闊喇散に遣りて、徹別速不台の後援を爲さしめたり。拖雷は、その冬、姉妹の夫、脱噶察兒を先鋒として、捏撒に遣り、その城を屠りたる後、脱噶察兒は、你沙不兒に至り、その已に降りたるを知らずして、侵掠し、城兵に射殺されたり。一二二一年、太祖十六年、辛巳の春、拖雷の軍は、篋嶠沙希展、即、篋兒甫を降し、你沙不兒を破れる時、脱噶察兒の妻は、萬人を率ゐて、城に入り、人畜を屠りて、夫の仇を報いたり。と云ひて、篋兒甫の酋長、罕篋里克の事は、名も見えず。諸書と異なり。多遜は、多く主、吠尼に本づきたりと云へども、恐らくは、誤あらん。たゞ癸未以前五年の開紀年の正しきは、多遜の「札刺勒丁、莎勒壇罕篋里克二人は、成吉思合罕の迎撃得なり。」に、出馬しけり。成吉思合罕の前に、失吉忽秃忽先鋒に行き

多遜の異説

西遊記の月日の確實

けり。失吉忽秃忽と對陣して、札刺勒丁、莎勒壇罕篋里克二人は、失吉忽秃忽を敗りて、成吉思合罕の處に到るまで勝ちて來つるに、親征録、蔑里可汗懼、棄城走の續に、忽都忽那顔聞之、率兵進襲、時、蔑年壬午の條に、夏、避暑塔里寒寨、西域主、札蘭丁出奔、與、滅里可汗合、忽秃忽與戰不利とあり。集史に、馬の年の夏、太祖塔列干に居りし時、失吉忽秃忽を三萬人にて、者刺列丁を禦ぎに遣りぬ。罕篋里克は、その眾と、康克里人とを率ゐて、者刺列丁に合ひ、勢益振ひ、蒙古の軍と別、瞻安に遇へり。者刺列丁は、自ら中軍を、罕篋里克は、右翼を、賽弗丁阿固喇克は、左翼を率ゐ、終日戦ひて、決せず。明日又戦ふ。者刺列丁眾を勵まして、圍み攻め、失吉忽秃忽敗れ走り、死傷夥しかりき。成吉思汗これを聞き、憂ふる色なく、たゞ勝に狂れて戦を輕することを、誡めたるのみなり。者刺列丁は、虜獲を分てる時、罕篋里克は、阿固喇克と駿馬を争ひ、阿固喇克の面を策もて、搗ちたるを、者刺列丁は、祖母の族人なりとて、止めざりしかば、阿固喇克怒り、部兵を率ゐて、客兒曼の方に去れり。者刺列丁勢弱り、又、蒙古の軍の至らんことを恐れ、嚙自納に退き、信度河を渡らんとせり。とあり。多遜は、一二二一年、太祖十六年、辛巳の秋、成吉思汗は、塔列干を發して、南に行き、失吉忽秃忽を先鋒に遣り、その冬、巴瞻安の戦ありとし、罕篋里克を阿民馬里克に作り、突兒罕合屯の弟なりと云へり。太祖の塔列干を發して、欣都庫施山を越えたるは、多遜の云へる如く、十六年、辛巳の秋にして、親征録、集史、元史の如く、十七年、壬午の夏ならざること、は、長春の西遊記を以て、證すべし。そもそも、西遊記の記事の内に

烏古孫仲端の往還

は辛巳の年太祖十六年客魯噠河の南岸を西に行ける時五月朔亭午日有食之、
 既衆星乃見須臾復明蝕自西南生自東北とあり又邪米思干の人は此中辰時食
 至六分止と云ひ金山の人は已時食至七分と云へりとあるに由りその書の月
 日の確實なることは極印を打たれたるものなりこの日食は金史の天文志に
 も興定五年五月甲申朔日食と記され淮黎は卜喇惕施乃迭兒の支那中世旅行
 者の序にこの日食は一二年五月二十三日倫敦の午前三時四十五分の食
 甚なることを推定して長春の觀察の誤りなきことを云へりさて長春は十六
 年辛巳の十月二日伊犁河を濟りてより西に行くこと十二日にして西南の一
 山喀思帖克嶺を越えたる時逢東夏使回禮師於帳前因問來自何時使者曰自七
 月十二日辭朝帝將兵追算端汗至印度この使者は金の宣宗の使烏古孫仲端に
 してこの年七月の初に塔列干にて太祖に謁し太祖の者刺列丁速勒壇を追ひ
 に出馬したるを見て辭し回れるなり金史宣宗紀に興定四年七月以烏古孫仲
 端等使大元五年十二月丁巳禮部侍郎烏古孫仲端翰林待制安庭珍使北還各進
 一階忠義傳に仲端奉使乞和於大元云云至西域進見太祖皇帝致其使事乃還自
 興定四年七月啓行明年十二月還至とあり金の興定五年は即太祖十六年なり
 劉祁の撰れる仲端の北使記に至五年十月復命とあるは十の下二の字を脱せ
 るなり又北使記に四年十二月初に北界蒙古の地を出で五年四月上旬に西
 遼に至るとあるに據れば仲端は西遼より三月行きて七月の初に行宮に朝し
 辭し回り又三月にして十月中旬に西遼を過ぎて長春に逢ひ又二月にして復
 命したるなり元史太祖紀十六年辛巳の條に金主遣烏古孫仲端奉國書請和稱
 帝爲兄不允とあるはよけれども又十七年壬午の條に秋金復遣烏古孫仲端來
 請和見帝于回鶻國帝謂曰我向欲汝主授我河朔地令汝主爲河南王彼此罷兵汝

信度河の戦

主不從今本華黎已盡取之乃始來請耶仲端請哀帝曰念汝遠來河朔既爲我有關
 西數城未下者其割付我令汝主爲河南王勿復違也仲端乃歸とあるは前年に書
 らるべき勅語をこの年に書き仲端再至とあり者別速別額台脱忽察兒三人
 は札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人の後より入りて却て彼等
 を敗りて殺して不合兒薛米思加卜兀荅喇兒の城に彼等を
 合はしめず勝ちて申木噠に到るまで追ひて行かれ申木噠
 に跳込みて入るこなり多き撒兒塔兀勒をそこに申木噠に
 滅したるぞ札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人は命を助かりて
 申木噠に浜り逃れたり（この時者刺列丁を追ひたるは太祖親らなり。者別速別額台は抹哈篋惕死し者刺列丁南に
 奔りたる後亦喇克以西の地を侵し遂に乞卜察克の地に入り申木噠の戦には
 加はらざれば乞卜に二將を引出したるは大なる誤なり不合兒等の三城は後
 に注すべし申木噠は唐西域記の信度河即今の印度河なり申は信度の下略木
 噠は蒙語河なり親征錄に辛自速河とある自速は目連の誤なり親征錄に上自
 塔里寒寨率精銳親擊之追及辛自速河獲蔑里可汗屠其眾札蘭丁脱身入河泳水
 而遁とあるを元史に帝自將擊之擒滅里可汗札蘭丁遁去と云ひて河の名も云

はざるは、いつもながら餘りに簡略なり。喇失惕の集史には、失乞忽禿忽敗れて歸りたれば、成吉思汗自ら軍を率ゐて塔列干を出で、路を急ぎて飯をも炊かず米を藪みながら行き、別嚕安の戦地に至り、敵味方の陣處を問ひ、地を善く擇ばざりしことを責め、嚕自納に至れば、者刺列丁は、已に十五日前に去りたりき。一將を留めて城を守らしめ、疾く追驅けたり。者刺列丁已に船を備へ、明日信度河を渡らんとする處へ、成吉思汗夜疾く行き、曉に追附きて取圍めり。者刺列丁を生捕らんと欲し、軍士に矢を發たざらしめ、兀克兒古勒札古都思古勒札二將をして敵の後を絶たしむ。古都思古勒札は、秘史卷七卷八に見えたる巴嚕刺思の忽都思合勒渾なるべし。敵兵漸く退き河に至れば、その右翼を二將烈しく攻め破り、罕篋里克を殺せり。者刺列丁は、中軍を率ゐ、晨より日中まで戦ひ、左右兩翼皆破られ、中軍僅に七百人となり、右に左に衝撃す。諸軍は令を奉じて矢を發たざる故に、者刺列丁は、圍を衝破りて出で、胸甲を棄て馬を躍らして、多遜は二丈の崖より、信度河に入り、盾を負ひ、旗を搦へて泳ぎ去れり。成吉思汗威じ入り、諸子を顧みて、誰もかくこそありたけれと云へり」とあり。この戦は、巴嚕安の戦の續にて、親征錄元史集史は、皆壬午の年とすれども、倭勒甫は、一二二一年(辛巳の年)の秋とし、多遜はその年の冬とせり。罕篋里克は、東西の諸史皆この戦に殺されたりとすれば、札刺列丁と共に、成吉思汗合罕は、申木噠に浜り往きて、に逃れたりとせるは、誤ならん。成吉思汗合罕は、申木噠に浜り往きて、

巴嚕安原の駐夏

巴惕客先を掠めて去りて、母小河牝馬小河に到りて、巴嚕安客額兒に下馬して、(巴惕客先の名は、)巴苔黑山に似たり。巴苔黑山は、唐西域記に鉢鐸創那

元史地理志に、巴達哈傷、清人の巴達克山りて、印度河の上流に在らず。又巴苔黑山を平げたるは、多遜に據るに、一二二〇年の秋、帖兒篋惕を取れる後、阿木河を渡る前にあり。巴惕客先は、もしその地ならば、こゝに書きたるは、時違へり。母小河は、蒙古語、額客豁囉罕、牝馬小河、格温豁囉罕にして、土名を蒙古語に義譯し古語、額客豁囉罕は、蒙古語、格温豁囉罕たるなり。明譯に二河を合せ

巴嚕安原の位置

者刺列丁を巴剌の追驅け

て、子母河と譯したるは、牝馬なる格温の子なる可温と誤りたるなり。親征錄に可温、寒集史に、古納温、庫兒干とあるは、皆格温豁囉罕の誤なり。蒙古語に寒を庫兒干と云ひ、小河なる豁囉罕と音近き故に、小河を寒と誤れり。巴嚕安原は、親征錄元史に、八魯灣川、集史に、別嚕安とあり。即失乞忽禿忽の敗北したる所なり。今も略不勒と安迭喇卜の溪との間、欣都庫施山の高き處に、帕兒彎の峽あり。そこに又同じ名の河と小邑とありて、西紀一六〇三年に、僧正誥思は、略不勒より巴苔黑山に至る路にて、そこを通り、第九世紀の人亦奔忽兒答惕必は、已に、珀嚕安を、巴米安に屬する諸邑の中に、擧げたり。速勒壇、巴別兒はその記録に、帕兒彎の峽路は、甚險しく、そこと大谷との間に、小峽七つありと云ひ、(札里牙兒の)帕兒彎の又、略不勒にて、夏吹く風は、帕兒彎の風と名づけらる」と云へり。札里牙兒の

巴剌を札刺勒丁莎兒壇罕篋里克一人を追はしめに遣りて、(札里牙兒は、札刺亦兒の誤なり。札刺亦兒の巴剌は、功臣の第四十七なる巴剌(扯兒必)なり。親征錄に、遂遣八刺那顏將兵急追之。不獲。因大擄忻都人民之半而還。癸未(太祖十八年)春、上兵循辛自速河而北、命三太子循河而南、至不昔思丹城、欲攻之。遣使來稟命。上曰、隆暑將及、宜別遣將攻之。夏、上避暑於八魯灣川、候八刺那顏

因討近敵悉平之。八刺那顏至。遂至可溫寨。三太子亦至。元史に遣八刺追之。不獲。八年癸未夏。避暑著八魯彎川。皇子朮赤察合台窩闊台及八刺之兵來會。親征錄の三太子は。幹歌歹を云へるなり。察阿歹幹歌歹の行宮に會したるは。前年の春にあり。元史に今三皇子の來會を云へるは。錄の三太子亦至を誤會したるに似たり。集史に。者刺亦兒の巴刺那顏を者刺列丁を追はしめ。に印度の上遊に遣り。朮兒伯にも同じく往かしめ。云云。羊の年の春。成吉思汗は。信度河の上遊に遣り。朮兒伯の地を定めさせ。に幹歌台を遣り。き。幹歌台は。嚙自納を掠め。その城を毀ち。別將に攻を攻めんとて命を請ひ。たれば。成吉思汗は。嚙自納を掠め。その城を毀ち。別將に攻めさせんと云へり。夏。別嚙安に暑を避けて。巴刺那顏を待ち。別嚙安の近處を平げたり。巴刺朮兒伯至りて。成吉思汗は。古納。溫庫兒干に往き。幹歌台も至れり。多遜に據れば。一二二年。十七年。壬午の春。成吉思汗は。別刺朮兒台を遣り。信度河を渡りて。速勒壇を追はしめ。云云。者刺列丁未得られず。軍退きて。後嚙自納の叛きたりし。かば。亦勒赤喀歹は。命ぜられて。往き。六月餘りにて。西曆六月十四日。攻め落し。その民を屠れり。成吉思汗は。信度河の西岸に沿ひて。北に行き。者刺列丁の餘黨を平げたり。幹歌台は。已に嚙自納を定めて。昔思壇の城を攻めんと請ひ。たれば。成吉思汗は。極暑の爲に許さずして。呼び返せり。この夏は。別嚙安の野に駐營し。別刺朮兒台の印度より。回れる時。全軍又動き。古納。溫庫兒干の邊にて。幹歌台の軍も。大軍に合へり。嚙自納は。喀不勒の西南にある古城にして。吉自初とも云ひ。元史地理志に。哥疾寧と書けり。唐西域記にある。漕矩吒國の都。鶴悉那城は。即嚙自納なり。宋の世には。嚙自尼朝の速勒壇の宮所なりしが。この朝は。一一八六年。宋の孝宗。淳熙十三年。誥兒朝に滅され。抹哈篋。惕闊喇。自姆沙は。誥兒の國

嚙自納昔思壇の位置

西游記に據りて考へたる太祖行留の年月

を并せ。一二一六年。太祖十一年。嚙自納を取れり。錄の不昔思丹は。即薛亦思壇又昔思壇にして。本書の下文に。昔思田とあり。その都は。李思惕と云ひ。希勒綿篤河の畔にありき。元史地理志に。不悉忒とあるは。これなり。ト喇惕施乃迭兒曰く。不昔思丹は。李思惕と昔思壇とを合せて表はせるに似たり。嚙西亞の大地圖に。朮兒河の希勒綿篤河に注ぐ所に。喀刺必思惕と云ふ地あり。これは。蓋李思惕なり。集史の朮兒伯は。本書の下文に。朮兒伯朮申とあり。多遜の朮兒台は。音訛れり。多遜の亦勒赤喀歹は。本書卷九。卷十二にある。額勒只吉歹なるべし。さて。巴嚙安原の駐夏は。親征錄。元史。集史。皆太祖十八年。癸未の事とせるは。例の一年。後れに。多遜の十七年。壬午としたるのみは。實を得たり。西游記に。辛巳。太祖十六年。閏十二月の末。二太子。察合台の言に。上駐蹕大雪山之東南とあるは。太祖已に者刺列丁を敗り。正に。信度河の西岸に居りし時なり。又壬午正月十三日。阿里鮮は。邪米思干。撒馬兒罕を發し。馳三日。東南過鐵門。又五日。過大河。二月初吉。東南過大雪山。南行三日。至行宮とあり。然らば。阿里鮮の阿木河を過ぎたるは。正月二十日にして。それより。行宮までは。僅に十餘日にして。達したれば。十七年。二月上旬には。行宮漸く北し。大雪山。即欣都庫施山より。三日路の處に至り。已に。珀沙兀兒。喀不勒の間にありき。又長春は。その年三月十五日。路の處に至り。阿木河より。行在に達する。即阿母沒登を濟り。四月五日。行在に達するを得たり。阿木河より。行在に達するに。六日に過ぎざれば。四月上旬には。太祖已に北に回り。欣都庫施山に入り。謂はゆる。母小河。牝馬小河の邊に在りしならん。また。時適炎熱。從車駕。廬於雪山避暑。上約四月十四日。問道。將及期。有報。回紇山賊。指斥者。上欲親征。因改卜。十月吉。師乞還舊館。上曰。再來不亦勞乎。師曰。兩旬可矣。遂に。宣差楊阿狗に送られて。邪米思干に還れり。廬於雪山避暑は。即巴嚙安原の駐夏なり。山賊征伐は。親征錄の討近敵

者別速別額台の恩賞

脱忽察兒の責められ

悉平之、集史の「別嚕安の近處を平ぐるを云ふ。兩旬可矣は、撒馬兒罕より行在ま
 で二十日にて到るべきを云へり。太祖の行雷の年月は唯西游記に由りて委し
 く分りたり。この年八月以後」者別速別額台二人を甚く恩賞して「者
 別汝は、只兒豁阿歹云ふ名なりき。台赤兀惕より來て、者別
 ごなりたるぞ、汝脱忽察兒は罕篋里克の邊の城をも己が
 心に依り侵して罕篋里克を叛かせたり。法に當て斬らしめ
 ん云ひ畢へて却て斬らしめず、甚く責めて、彼の軍を知る
 ことより罰ひて下せり。明只重責罰、不許管軍の頃、は者別速別
 額台は、已に高喀速山を越えて、歐囉巴に入りたれば、太祖のこの賞罰は、この駐
 夏の時の事にあらずして、太祖十五年庚辰の夏、三將續きて罕篋里克の城を過
 ぎ、脱忽察兒の亂暴を罕篋里克より訴へられたる時の事なるべし。かくて脱忽
 察兒は軍を知ること罷めたる故に、者別速別額台の二將のみ西の方に進み
 たり。脱忽察兒は、その時古兒只思壇の山民に殺されたりと喇失惕は云ひ、拖雷
 の先鋒として你沙不兒に戦死せりと多遜は云ひたれども、傳聞の誤ならん。元
 史博爾忽の傳なる從孫塔察兒は、即この脱忽察兒即西史の脱嚕察兒にして、太
 祖崩じて後、太宗に從ひて金を伐ち、五年癸巳金帝を蔡に圍み、六年甲午金を滅

脱忽察兒死せりと云へる誤傳

し、十年戊戌に卒したり。

三皇子の兀兒堅只攻め

阿木荅哩牙の古名

兀兒堅只の所在

かくて成吉思合罕は、巴嚕安原より回りて、拙赤察阿歹斡
 歌歹三人の子だちを、右手の軍にて、阿梅木噠を渡りて兀嚕
 格赤の城に下營せよごて遣りぬ。事の順序違へり。三皇子の派遣を
 命ぜられたるは、太祖の者刺列丁を追ひて南下する前、十五年庚辰の春、撒馬兒
 罕を攻め落したる後、その秋、速勒壇駐夏の地に太祖の駐まりし時の事なり。親
 征録は、庚辰を誤りて明年辛巳とし、是夏、上軍於西域速里壇避暑之地、命忽都
 忽那顏爲前鋒、秋、分遣大太子辛巳、三太子、三太子、左軍攻玉龍傑赤之城と云へり。左
 軍は右軍の誤なり。集史にも右軍とあり。阿梅木噠は、即阿木荅哩牙にて、西游記
 に阿母沒鞏、劉郁の撰れる常徳の西使記に、阿梅木噠は、即阿木荅哩牙にて、西游記
 り。木噠は、河の蒙古語、荅哩牙は、河の突兒克語なり。額篤哩昔の地誌に、哇黑施と
 云へるは、この河の古名にして、希臘人の幹克速思、漢書の嬌水、隋書唐書の烏潛
 水、唐西域記の縛芻河は、皆哇黑施の轉なり。哇黑施の名は、今阿木河の上流なる
 北源の一大河の名に残れり。阿喇必亞人は、只渾河と云ひ、突兒克人は、阿木河と
 云ふ。李合喇の西南に當り、河の左岸、今の察兒錐の邊に、阿抹勒と云ふ城ありし
 に由り、阿木河の名は起れり。阿抹勒を阿木也とも云ひたれば、河をも阿木也河
 と云ひたること、中世の抹哈篋惕教徒の記録に見ゆ。阿梅は、即阿木也の轉なり。
 兀嚕格赤は、親征録元史本紀にも玉龍傑赤とあれども、正しくは兀兒堅只と云

幹惕喇兒の城攻め

罕と共に納黑舍トに往き、帖木兒合魯噶(鐵門)を過ぎ、拖雷罕を闊喇散を平げに遣りたりと云ひて、いづれも辛巳の事としたれども、多遜に據れば一二二〇年(太祖十五年庚辰)の秋なり。**成吉思合罕は、自兀的喇兒の城に下營せり。**(兀的喇兒は、前にも後にも兀都喇兒とあり、正しくは幹惕喇兒なり、耶律楚材の西游錄に訛打刺また訛荅刺、親征錄に幹脫羅兒、元史本紀には訛荅刺とも幹脫羅兒ともあり、地理志には兀提刺兒、賈塔刺渾の傳には幹脫刺兒とあり、その城今は廢れたり、列兒楚の突兒其思壇考古游歴に據れば、失兒荅哩牙の東の深水なる阿哩思河の納の北緯四十三度に近く、その遺址ありと云ひ、嚙西亞の突兒其思壇大圖には阿哩思河の納の東北六英里ばかりにその遺址を標記せり、列兒楚は一八六七年より前にその地を探りたり、さて幹惕喇兒の攻圍は、西亞細亞征服の始なれば、太祖西征の初に書くべき事なるを、本書は誤りてこゝに書けり、喇失惕多遜の二史は據るに、成吉思汗は、幹惕喇兒に到り、全軍を四に分け、察合台、幹歌台の一軍は、幹惕喇兒を攻め、拙赤の一軍は、昔渾河に沿ひ西北に行き、斡延吉肯篤を攻め、阿刺克那顏速客禿脫該の一軍は、昔渾河に浜り東南に行き、闊罷篤別納客惕を攻め、成吉思汗は、拖雷と共に大軍を將るて昔渾河を渡り、孛合喇に進みて敵の援兵を斷ちたり、洪鈞曰く、是時西域王駐撒馬爾于在東、布哈爾在西、其舊都烏爾韃赤更在西北、搗其中、則新舊都呼應不靈、所以斷其援也、先西破布哈爾、返而東攻撒馬爾于、太祖兵法如是、斡篤篤は、元史地理志に斡篤篤とあり、今闊兒忽惕と云ひ、失兒河の右岸に在り、鹹海に近し、延吉肯篤は、親征錄元史に養吉干とあり、失兒河の左河口より一日路の處にその遺址あり、阿刺克那顏は、巴阿鄰の阿刺黑功臣の第二十六、速客禿是、晃豁壇の速亦客禿徹兒必功臣の第三

幹惕喇兒の遺址

四軍の分れ戦ひ

幹歌歹の節制

十一、脱該は、速勒都思の塔孩巴阿禿兒功臣の第二十四なり、闊罷篤は、唐書西域傳に俱戰提、西游錄に苦蓋、西游記に霍闌、元史地理志に忽罷伯顏の傳に忽禪、薛塔刺海の傳に忽纏、西域水道記に霍占とあり、失兒河の左岸、大曲の上に在り、別納客惕は、明の世に沙囉乞牙と云ひ、明史西域傳に沙鹿海牙とあり、失兒河の右岸、大曲の下) **拙赤察阿歹、幹歌歹三人の子だち奏して遣るには、我等の軍ごも揃へり、兀嚙格赤の城に到れり、誰の言に依り行はん**(誰の命に従ひ) **我等奏して遣りたれば、成吉思合罕、刺あり、幹歌歹の言に依り行へ**(宣ひて遣りぬ)。(親征錄に、三皇子攻に遣りたる續に、以軍集奏聞、上有旨曰、軍既集、可聽三太子節制也)とあるは、この文を譯したるなり、喇失惕曰く、者刺列丁兄弟の兀兒堅只より出奔したる時、城内の兵民は、突兒罕合屯の族なる忽馬兒を主將に戴けり、蒙古の前鋒到れる時、城兵出で戦ひ、伏に遇ひ、大敗せり、拙赤等兄弟至り、城の形勢を視察し、招き降したれども、應ぜず、近傍に石なく、礮撃すること能はず、大木を伐りて濠を填め、三千人を河道を截ちに遣りたれば、城兵に圍まれ、皆死し、城兵益元氣旺になり、れり、拙赤察合台素より中惡く、師和せずして、屢城兵に敗られ、七月を経たれども、城下らず、成吉思汗塔列干に在せる時、三皇子より使もて、軍事を告げ遣りたり、成吉思汗その争の事を聞き、怒り、幹歌台に命じて師を統べさせたり、幹歌歹の總帥を命ぜられたる事情は、喇失惕に依りて善く分れり)

兀兒堅只のなが持ち

かくて成吉思合罕は兀都喇兒の城を下して、(この事は前にも云へる如く、

該兒罕の死物狂

太祖西征の初に書くべき事なり。喇失惕曰く、幹惕喇兒の守將は哈亦兒罕にして、都より至りし哈刺札罕は二萬人にて助け守れり。五月の間圍まれて、城民亂れ、哈刺札罕は降らんと云ひたれども、哈亦兒罕は從はず。哈刺札罕は、夜城を出で遁れんとして虜へられたれば、察合台幹歌台はその不忠を責めて殺して、遂にその城を破れり。哈亦兒罕は、親兵三萬を率ゐて内堡を守り、一月の間禦ぎ戦ひ、士卒皆死して始めて擒となり。庫克撒喇に送りて殺されたり。哈亦兒罕は多遜の書に亦納勒主克該兒罕と云ひ、突兒罕合屯の弟にして、太祖の使者を殺したる人なり。元史本紀に「取訛答刺城擒其酋哈只兒只蘭秃」とあり。二つの只の字は、蓋皆亦の誤にて、哈亦兒罕は哈亦兒罕なるべく、亦蘭秃は亦納勒主克の訛なるべし。庫克撒喇は、太祖撤馬兒罕を圍むる時御營のありし所なり。幹惕喇兒の城は、秋の末より始まりて六月を費やしたれば、落城したるは翌年の春の末にて、正に太祖の撤馬兒罕を圍むる時なり。親征録の紀年は喇失惕と同じく、一年づつ後れたれば、庚辰太祖十五年の秋、至幹脫羅兒城、上畱二太子三太子攻守、尋克之とあるは、城攻の始まりを云へるにて、尋克之と云へるは翌年の事を終言したるなり。元史本紀に、十五年庚辰、駐蹕也石的石河、秋、攻幹脫羅兒克之とあるは、親征録に據りたるなれども、尋克之の尋の字を略きたる故に、秋攻めて秋克てることとなれり。又本紀の敘事は多くは親征録に據りながら、又紀年正しき他の書に據りて、帝率師親征の下に直に「取訛答刺城」と書きたる故に、敘事重複せるのみならず、六月師を出して、その月の内に「兀都喇兒の城より動きて、薛米思加卜の城に下營せり。薛米思加卜の城より動きて、不_か合_か兒_かの城に下營せり。」(薛米思加卜は、下文に薛米思堅ともあり、撒亞の地なりと古き名城にして、希臘の阿歴散迭兒大王の至りたる馬喇罕答は、即この地なりと云ふ。漢書西域傳に、大月氏國治監氏城とある。監氏は、撒馬兒罕篤の南有山名伽色那山とあるは、撒馬兒罕篤を國の名として記せる始なり。迷密伽那、唐西域記の弭秣羯霜那なり。唐西域記に、颯秣建國、唐曰康國、周千六七百里、東西長、南北狹、國大都城、周二十餘里、極堅固、多居人、異方寶貨多聚、此國土地沃壤、稼穡備植、林樹蒼鬱、花葉滋茂、多出善馬、機巧之技、特工諸國、氣序和暢、風俗猛烈、凡諸胡國、此爲其中、進止威儀、近遠取則、其王豪勇、鄰國承命、兵馬強盛、多是鶻鶻とあり。唐の初は、西突厥の屬國となりしかども、その猶富強なりしを見るべし。隋書西域傳に曰く、康國者、康居之後也、遷徙無常、不恆故地、然自漢以來、相承不絕。其王、本姓溫、月氏人也、舊居祁連山北、昭武城、因被匈奴所破、西踰蔥嶺、遂有其國、支庶各分王、故康國、左右諸國、竝以昭武爲姓、示不忘本也。都於薩寶水上、阿祿迪城、城多眾居、名爲強國、而西域諸國多歸之。康國と云へるは、撒馬兒罕篤の罕の音を取りて、單名となせるにて、弭秣羯を米國と云ひ、乞史を史國と云ひ、屈霜你迦を何國と云ひ、貨利習穆を穆國と云ひ、漕矩吒を漕國と云へると同例なり。薩寶水は、今の咱喇甫山河なり。匈奴に破られ、云云は、史記大宛の傳に、始月氏居燉煌、祁連山、及爲匈奴所敗、乃遠去、過宛、西擊大夏、而臣之、遂都焉、水北爲王庭」とあるを謂へるなり。焉水、阿木河の北、即失兒阿木兩河の間は、漢の初より月氏に屬したれば、

元史敘事の都合

李合喇撤馬兒罕の戰

撒馬兒罕の名稱地理

て、不_か合_か兒_かの城に下營せり。(薛米思加卜は、下文に薛米思堅ともあり、撒亞の地なりと古き名城にして、希臘の阿歴散迭兒大王の至りたる馬喇罕答は、即この地なりと云ふ。漢書西域傳に、大月氏國治監氏城とある。監氏は、撒馬兒罕篤の南有山名伽色那山とあるは、撒馬兒罕篤を國の名として記せる始なり。迷密伽那、唐西域記の弭秣羯霜那なり。唐西域記に、颯秣建國、唐曰康國、周千六七百里、東西長、南北狹、國大都城、周二十餘里、極堅固、多居人、異方寶貨多聚、此國土地沃壤、稼穡備植、林樹蒼鬱、花葉滋茂、多出善馬、機巧之技、特工諸國、氣序和暢、風俗猛烈、凡諸胡國、此爲其中、進止威儀、近遠取則、其王豪勇、鄰國承命、兵馬強盛、多是鶻鶻とあり。唐の初は、西突厥の屬國となりしかども、その猶富強なりしを見るべし。隋書西域傳に曰く、康國者、康居之後也、遷徙無常、不恆故地、然自漢以來、相承不絕。其王、本姓溫、月氏人也、舊居祁連山北、昭武城、因被匈奴所破、西踰蔥嶺、遂有其國、支庶各分王、故康國、左右諸國、竝以昭武爲姓、示不忘本也。都於薩寶水上、阿祿迪城、城多眾居、名爲強國、而西域諸國多歸之。康國と云へるは、撒馬兒罕篤の罕の音を取りて、單名となせるにて、弭秣羯を米國と云ひ、乞史を史國と云ひ、屈霜你迦を何國と云ひ、貨利習穆を穆國と云ひ、漕矩吒を漕國と云へると同例なり。薩寶水は、今の咱喇甫山河なり。匈奴に破られ、云云は、史記大宛の傳に、始月氏居燉煌、祁連山、及爲匈奴所敗、乃遠去、過宛、西擊大夏、而臣之、遂都焉、水北爲王庭」とあるを謂へるなり。焉水、阿木河の北、即失兒阿木兩河の間は、漢の初より月氏に屬したれば、

康居の後なりと云へるは甚誤れり。月氏の事を敘べたる下文とも自ら矛盾せり。こはたゞ康の字同じきに由り附會したるなり。康居の地は大宛今の弗兒嘎納の西北にありて、今の乞兒吉思曠野なり。舊唐書の西戎傳は隋書に據りて「康國即漢康居之國也」と誤り、又その被匈奴所破を爲突厥所破と改めて更に誤を加へたり。蓋舊唐書の作者は康國は古の康居の國なりと思へるに由り、月氏の所に遷りたるは近世の事ならんと考へて匈奴を突厥と改め、史記漢書に明記せる月氏西遷の事を忘れたるなり。新唐書の西域傳は「康者一曰薩末黠亦曰颯秣建、元魏所謂悉萬斤者」と云ひて、康居なりとは云はざれども、月氏を破れるものを匈奴とせずして突厥としたるは、舊唐書に同じ。高宗永徽時以其地爲康居都督府とあるを見れば、高宗の朝臣も貞觀の隋書を作れる史官の誤を承けて、康國と康居とを混じ居たるなり。又新唐書は史國即羯霜那を康居の小王蘇雍城の故地なりとし、何國即屈霜你迦を康居の小王附墨城の故地なりとし、安國即捕喝を康居の小王罽城の故地なりとせり。されども屈霜你迦は貴霜匿と云ひ、漢書に見えたる大月氏の五翁侯の一なる貴霜翁侯の故地にして、康居の故地に非ず。羯霜那即今の舍勒も、捕喝即李合喇も、皆兩河の間に在りて、月氏の地なるを妄に康居の故地としたるは唐人のでたらめなり。又唐人は捕喝即李合喇を漢の安息に當てて、安國と名づけ、何國と名づけ、顯慶三年遂に安を安息州とし、東安を木鹿州としたり。唐人の地理を誤れることかくの如し。然るに東西の史家は新舊唐書のかく妄なるに心附かず。康居の五小王之故地まで實からしく列記せるを見て、月氏康居の地を考ふるに迷へるもの多きに由り、序ながらこゝに辨じ置くなり。さて撒馬兒罕篤の篤を略きて呼ぶは漢文の常なる

が、馬兒科保羅も漢人より聞きなれたる爲にや。撒馬兒罕と云ひて、篤の音を略けり。中世の基督教の傳道師はこの城を薛米思罕惕と云へり。耶律楚材の庚午元曆を進むる表に「庚辰、聖駕西征、駐蹕尋思干城。西游錄に「訛打刺西千餘里、有大城曰尋思干。尋思干者、西人云肥也。以地土肥饒故以名。甚富庶、環城數十里、皆園林。飛渠走泉、方池圓沼、花木連延、誠爲勝槩。瓜大者如馬首。尋思干乃謀速魯蠻種落、梭里檀所都。蒲華苦蓋訛荅刺城皆隸焉。尋思干の名は早く遼史の天祚紀に見えたり。湛然居士集に又尋思干と書き、尋思干也。虔城也」と譯し、元史郭寶玉の傳には「擣思干とあり。尋思も尋思也。擣思も皆薛米思にて、親征錄元史本紀察罕曷思麥里等の傳に薛迷思干と書き、長春の西游記には前に尋思干、後に邪米思干と書けり。薛米思は突兒克語に肥を謂ひ、罕篤は珀兒沙語に城を謂へば、楚材の解は善く當れり。西游記に辛巳の年仲冬十有八日、過大河、至邪米思干大城之北云云。其城因溝岸爲之。秋夏常無雨。國人疏二河入城、分繞巷陌、比屋得用。方算端氏之末敗也。城中常十萬餘戶。國破而來、存者四之一。其中大率多回紇人。城中有岡、高十餘丈、算端氏之新宮據焉。又壬午の年二月二日、遊郭西、隨處有臺池樓閣、閉以蔬圃。望日復遊郭西、園林相接、百餘里。雖中原莫能過、但寂無鳥聲耳。又瓜を賞して、味極甘香。中國所無、間有大如斗者、十枚可重一擔」と云へり。元史地理志に撒麻耳干、明史西域傳に撒馬兒罕とあり。不合兒は即李合喇にして、これもいと古き名城なり。北史西域傳に「佺密」とあるはこの地なり。隋唐の人は安國と名づけ、新唐書西域傳に「安者一曰布裕、一曰捕喝、元魏謂佺密、西瀕烏濟河」とあり。捕喝と書きたるは、唐西域記なり。西游錄は「蒲華」と書き、尋思干西六七百里有蒲華城、土產更饒。城邑稍多」と云へり。親征錄に「卜哈兒、元史地理志に「不花刺察罕の傳に「李哈里、明史西域傳に「卜花兒」とあり。今嚕西亞人は不哈兒と云ふ。李合喇撒馬兒罕の二城は、

李合喇の異稱
 二古城の沿革

二城の攻め落し

上古より亦喇の國に屬し、漢の初より大月氏に占據せられ、隋の世に西突厥に屬し、唐の高宗の時暫く唐に屬し、中宗の時大食の國に屬し、僖宗の時撒曼朝興りて、李合喇に都し、宋の眞宗の時撒曼朝は西回紇の亦列克罕に滅され、亦列克罕の子孫は撒馬兒罕に都し、北宋の末に西遼興りても、その屬國となりて、河間に殺され、河間の全土は闊喇自姆朝に屬したり。この二城を太祖の平げたるは、撒馬兒罕は後にして、李合喇は前なり。本書の敘事顛倒せり。喇失惕曰く、成吉思汗は既に各軍を分け遣り、その子拖雷を伴れ、沙漠の僻路を行き、翌年の春、李合喇に至りて圍み攻めたり。守將庫克罕等、眾を率ゐて遁れんとし、打ち破られ、城民降を請ひたれども、内堡は猶抗禦し、兵民三萬人皆死せり。春の末、撒馬兒罕に向へり。撒馬兒罕は要害堅固にして、突兒克(即康克里)の兵六萬、塔只克の兵五萬にて守りたれども、速勒壇抹哈篋惕は既に遁れて居らざりき。御營は庫克撒喇に駐まり、拙赤等の諸軍皆至り、五日の間圍み攻めて、城壞れ、兵民多く屠られたり。親征錄に曰く、辛巳、上與四太子追攻、卜哈兒薛迷思干等城皆克之。大太子又攻克、養吉千八兒眞等城、八兒眞は元史地理志に巴耳赤刊とあり。喇失惕は、巴兒合里肯篤と綴りたれども、普刺諾喀兒闊尼は巴兒沁と云ひ、小阿兒篋尼亞の君海團の紀行に、帕兒沁とあるは、巴兒眞の方に音近し。その遺址は確ならねども、列兒出の云へる、巴兒眞の名ある古錢は、その地にて鑄たるものなるべし。喇失惕曰く、拙赤の一軍は昔固納克を屠り、幹自肯篤、巴兒合里肯篤を降し、額施納思を破り、氈篤を取り、兵を分けて、養吉罕篤を取れり。又阿刺克那顏等の三將は別納客惕に克ち、闊氈篤に克てり。昔固納克は海團の紀行に、薛固納黑とあり。列兒出の突兒其思壇考古游歴に據れば、その遺址は失兒河の濱なる主列克砲臺の

右軍の勝利

左軍の勝利

元史の重複

金寨嶺の避暑

東南四十二嚙里、河より十八嚙里離れたる處に在り、今速納克庫兒干と云ふ、幹自肯篤は、失兒河の下流にあり、弗兒嘎納の兀自肯篤と異なり。拙赤の氈篤、養吉罕篤を取れるは、察合台幹歌台の幹惕喇兒を破り、阿刺黑等の闊氈篤に克ち、太祖の字合喇に向へると大抵同時にして、三路の軍は、各その使命を畢へたる後、大軍に會して共に、撒馬兒罕を圍めり。親征錄集史は、誤りて此等の戦を太祖十六年辛巳の事としたれども、多遜は主吠尼に據り、一二二〇年(十五年)庚辰の事とせり。元史は十五年庚辰春三月、帝克蒲華城、夏五月、克尋思干城と云ひ、又十六年辛巳春、帝攻卜哈兒薛迷思干等城、皇子赤赤攻、養吉千八兒眞等城、竝下之と云へり。庚辰の蒲華尋思干は、前年己卯の訛荅刺と共に、西游録と譯字全く同じければ、蓋西游録の原本に據りて書けるならん。今の西游録は、盛如梓の節録したるにて、全本に非ざれば、此等の記事なし。辛巳の卜哈兒薛迷思干、養吉千八兒眞は、庚辰の也石的石也兒的の誤寫、幹脫羅兒と共に、親征錄に據れること甚明なり。そこに成吉思合罕は、巴刺を待たんこ、この一句は、不都合極まり。取りて避暑したるは、十五年庚辰の夏なり。巴嚙安原(金の寨の嶺なる莎)に避暑して、巴刺を待ちたるは、十七年壬午の夏なり。金の寨の嶺なる莎勒壇の避暑處に避暑して、(金の寨阿勒壇豁兒罕)土人は何と云ひ、錄には、是夏、上駐軍於西域速里壇避暑之地と云ひて、その秋、三皇子を玉龍傑赤に派遣したることを敘べ、於是上進兵過鐵門關と云ひ、喇失惕はその夏、成吉思汗は、撒馬兒罕の境内に駐まり、者別速不台、脫噶察兒を速勒壇を追ひに遣り、三皇子を兀兒堅只に遣り、その秋、拖雷汗と共に、納黑舍卜に往き、路路游牧して、帖

鐵門關の地理

喀施

木兒合魯噶を過ぎたりと云ひ、多遜は撒馬兒罕に駐まれる時、徹別速不台を派遣せり、二二〇年の夏、皆を撒馬兒罕と納黑舍トとの間に過し、その秋、三皇子を合魯噶は鐵門關の蒙語なり、元史に、夏四月、駐蹕鐵門關と云へるは、誤れり、この鐵門關は撒馬兒罕の南にある峽路にして、西南に向ひ、納黑舍トに廻れば、遠し、太祖は金の寨に避暑したる故に、納黑舍トの路を通れり、喀施は、魏書西域傳の伽色尼國にして、隋書西域傳に、史國、獨莫水、南云、俗同、康國、北去、康國、二百四十里、南去、吐火羅、五百里、西去、那色波、國、二百里、唐西域記に、從、颯秣建、國、西南行、三百餘里、至、羯霜、那、國、唐、曰、史、國、土、宜、風、俗、同、颯、秣、建、國、新、唐、書、西、域、傳、に、史、或、曰、佉、沙、曰、羯、霜、那、居、獨、莫、水、南、西、百、五、十、里、距、那、色、波、南、四、百、里、吐、火、羅、也、隋、大、業、中、築、乞、史、城、那、色波は、即、納、黑、舍、ト、なり、伽、色、尼、羯、霜、那、佉、沙、乞、史、は、皆、一、音、の、轉、に、し、て、喀、施、な、る、名の原なり、亦、奔、好、喀、勒、は、北、宋、の、初、に、始、め、て、喀、施、の、名、を、記、し、西、游、記、に、は、碣、石、明史西域傳には、渴石と書けり、元の時に、巴嚕刺思氏世世この地を領し、駙馬帖木兒こゝに生れたり、その山川清麗なるが故に、舍里薛ト思、即、綠、城、の、名、あり、今、は、略きて、舍、勒、と、云、ふ、城、の、傍、を、流、る、小、河、即、隋、書、新、唐、書、の、獨、莫、水、を、今、喀、施、喀、答、哩牙と云ふは、古、名、喀、施、の、遺、れ、る、な、り、納、黑、舍、ト、は、魏、書、の、那、識、波、國、に、し、て、新、唐、書に、那、色、波、亦、曰、小、史、蓋、爲、史、所、役、屬、と、あり、亦、奔、好、喀、勒、は、納、黑、舍、ト、は、喀、施、の、山、より二日路離れたる野に在りと云へり、元史地理志に、那黑沙不とあり、察合台の五世の孫、客珀克汗、そこに宮殿、即、喀、兒、失、を、築、き、た、る、故、に、後、世、は、そ、の、地、を、喀、兒失と云ふ、鐵門關は、喀施の南、五十五英里にあり、唐西域記、羯霜那國の條に曰く、從、此、西、南、行、二、百、餘、里、入、山、山、路、崎、嶇、難、經、危、險、既、絕、入、里、又、少、水、草、東、南、山、行、三、百餘里、入、鐵、門、鐵、門、者、左、右、帶、山、山、極、峭、峻、雖、有、狹、徑、加、之、險、阻、兩、傍、石、壁、其、色、如、鐵、既設、門、扉、又、以、鐵、鋼、多、有、鐵、鈴、懸、諸、戶、扇、因、其、險、固、遂、以、爲、名、出、鐵、門、至、視、貨、邏、國、新、唐書史國の條に、有、鐵、門、山、左、右、峻、峭、石、色、如、鐵、爲、關、以、限、二、國、以、金、鋼、鑿、と、云、へ、る、は、西域記の文を約めたるなり、阿喇必亞の地理家、牙庫必、唐の末の人は、鐵門を珀兒沙語にて、答哩阿漢と云ひ、城市の名とせり、亦、奔、好、喀、勒、の、納、黑、舍、ト、より、帖、兒蔑惕に至る紀行の中にも、鐵門あり、額篤哩昔、南宋の初の人は、鐵門に一小邑ありと云へり、西游記に、壬午の年、長春は、撒馬兒罕より、三月十有五日、啓行、四日、即十八日、過、碣、石、城、云、過、鐵、門、東、南、度、山、山、勢、高、大、亂、石、縱、橫、軍、輦、挽、車、兩、日、即、二十日、方、至、前、山、沿、流、南、行、五、日、即、二、十、五、日、至、小、河、亦、船、渡、七、日、即、二、十、七、日、舟、濟、大、河、即、阿、母、沒、聲、也、二、三、九、八、年、明、の、洪、武、三、十、一、年、の、春、駙、馬、帖、木、兒、印、度、より、師、を、班せる行程を、舍哩甫額丁の敘べたるに據れば、帖木兒は、阿木河を渡りて、帖兒蔑惕に二日駐まり、三日行きて、科魯噶、即、鐵、門、を、過、ぎ、巴、哩、克、河、の、邊、に、宿、り、又、五、日行きて、喀施に入りたり、速勒壇、巴別兒も、鐵門を科魯噶と云へり、歐羅巴人にて鐵門の事を記せるは、克刺腓卓より始め、一四〇四年、明の永樂二年、克刺腓卓は、喀思提勒の王、顯哩第三の命を奉じて、帖木兒の朝に使せり、西曆八月二十二日、帖兒蔑惕を發し、二十四日、河の岸に近き野に宿り、二十五日、高山の下に至れり、その山に鐵門と云ふ峽路あり、路傍の石壁は、人工にて削りたるが如く見え、山は、兩、方、と、も、に、甚、高、く、路、は、平、に、し、て、甚、深、し、峽、路、の、半、に、村、あり、村、の、後、の、山、甚高し、鐵門の外に、通路なき故に、この路は、撒馬兒罕の南方の要害なり、印度より來る商人は、皆こゝを通る故に、帖木兒伯克は、こゝにて關稅を多く收め得るなり、土人曰く、昔はこの峽路に、鐵もて塞め、大門ありきと云へり、それより三日行きて、二十八日に、喀施の大城に達したり、明史西域傳に、渴石、西、南、の、誤、三、百、里、大

納黑舍ト

支那の鐵門の記

舍哩弗丁の紀行
克刺腓卓の紀行

門なき鐵門

馬也甫の記

牙佛兒思奇の紀行

山屹立、中有石峽、行二三里、出峽口、有石門、色如鐵、番人號爲鐵門關、蓋元明以來、鐵門是峽路之名、となり、眞の關門、なくなれるなり、克刺腓卓の後、四百七十一年、の西、歐羅巴人、この地に入らざりしが、一八七五年、清の光緒元年、我が明治八年、噶拜孫に赴ける時、察克刺河の廣き、溪を過ぎたれば、名高き鐵門の口に、近き所にて、沙現れたり、土人は、今、不、自、果、刺、合、納、山、羊、の、舍、と、呼、ぶ、峽、の、北、の、口、に、近、き、所、に、て、沙、勒、撒、卜、思、喀、施、よ、り、の、路、と、喀、兒、失、よ、り、の、路、と、合、ふ、一、八、七、八、年、明、治、十、一、年、噶、西、亞、の、將、軍、思、喀、列、脫、甫、は、阿、富、噶、尼、思、壇、の、額、米、兒、に、使、す、る、路、に、鐵、門、を、過、ぎ、隨、行、せ、る、軍、醫、牙、佛、兒、思、奇、は、其、思、壇、大、圖、に、據、れ、ば、峽、路、の、長、は、一、半、英、里、に、し、て、西、北、よ、り、東、南、に、向、ひ、分、水、嶺、を、橫、斷、せ、り、畫、の、如、き、懸、崖、は、路、を、挾、み、峽、の、廣、三、十、步、或、る、處、に、て、は、たゞ、五、步、な、り、察、克、刺、河、は、西、北、に、流、れ、北、の、口、を、出、で、て、北、に、曲、る、南、の、口、の、外、に、擲、喇、卜、小、河、あ、り、そ、こ、に、て、路、分、れ、本、道、は、東、に、曲、り、口、よ、り、五、英、里、ば、か、り、離、れ、た、る、所、に、送、兒、邊、篤、あ、り、そ、れ、よ、り、拜、孫、希、撒、兒、に、至、る、險、し、き、細、路、は、南、の、方、に、別、れ、失、喇、巴、) 拖、雷、の、處、に、使、を、遣、り、ぬ、(この事も、前の事と續かず、
 揚、阿、木、河、に、至、る、) 拖、雷、の、處、に、使、を、遣、り、ぬ、(速、勒、壇、の、避、暑、處、に、避、暑、し、
 たるは、拖、雷、も、一、處、に、て、十、五、年、庚、辰、の、夏、な、り、拖、雷、を、召、し、歸、し、) 一、年、熱、く、な、
 り、ぬ、別、の、軍、ご、も、は、下、馬、す、る、ぞ、汝、は、我、等、の、處、に、會、せ、よ、と、宣、
 ひ、て、遣、り、た、れ、ば、拖、雷、は、亦、噶、亦、薛、不、兒、等、の、城、ご、も、を、取、り、て、

拖雷の凱旋

親征錄喇失揚多遜三書の異同

昔、思、田、の、城、を、破、り、て、出、黑、扯、噠、の、城、を、破、り、居、る、時、使、は、こ、の、
 言、を、致、し、た、れ、ば、拖、雷、は、出、黑、扯、噠、の、城、を、破、る、こ、回、り、下、馬、し、
 て、來、て、成、吉、思、合、罕、に、會、し、ぬ、(親、征、錄、に、曰、く、上、進、兵、過、鐵、門、遣、四、太、子、
 兵、又、破、班、勒、紇、城、圍、守、塔、里、寒、冬、四、太、子、又、克、馬、魯、察、葉、可、馬、盧、昔、刺、思、等、城、復、進、
 兵、壬、午、春、又、克、徒、思、懸、察、兀、兒、等、城、上、以、著、氣、方、隆、遣、使、招、四、太、子、速、還、因、經、木、刺、夷、
 國、大、掠、之、渡、擲、蘭、河、克、野、里、等、城、上、方、攻、塔、里、寒、朝、觀、畢、并、兵、攻、之、喇、失、揚、曰、く、
 一、蛇、の、年、の、秋、成、吉、思、汗、は、帖、木、兒、合、魯、噶、を、過、ぎ、拖、雷、罕、を、闊、喇、散、を、平、げ、に、遣、り、自、
 ら、帖、兒、篋、似、を、攻、め、破、り、撒、曼、に、至、り、軍、を、分、け、遣、り、て、巴、答、黑、商、を、收、め、只、渾、河、を、
 渡、り、翌、年、の、春、巴、勒、黑、を、屠、り、塔、列、干、の、寨、を、取、り、又、奴、思、喇、惕、庫、を、攻、め、た、れ、ど、も、
 七、月、の、間、下、ら、ず、拖、雷、罕、は、篋、噶、察、克、の、路、を、經、て、篋、噶、を、取、り、你、沙、不、兒、に、至、り、薛、
 喇、黑、思、捏、撒、秃、思、札、只、囉、等、を、取、り、你、沙、不、兒、を、取、れ、り、成、吉、思、汗、は、塔、列、干、よ、り、拖、
 雷、罕、に、大、著、の、前、に、回、れ、と、云、ひ、遣、り、ぬ、拖、雷、罕、は、庫、希、思、壇、よ、り、庫、姆、者、囉、河、を、過、
 ぎ、赫、喇、惕、を、取、り、て、回、り、て、成、吉、思、汗、に、見、え、兵、を、合、せ、て、塔、列、干、の、堅、き、寨、を、攻、め、
 下、し、こ、の、夏、全、軍、塔、列、干、に、駐、ま、れ、り、多、遜、曰、く、一、二、二、〇、年、の、秋、成、吉、思、汗、は、帖、兒、
 篋、惕、を、攻、め、破、り、薛、曼、に、至、り、軍、を、分、け、遣、り、て、巴、答、黑、商、を、收、め、拖、雷、を、闊、喇、散、を、
 平、げ、に、遣、り、一、二、二、一、年、の、春、只、渾、河、を、渡、り、巴、勒、黑、を、屠、り、塔、列、干、の、山、地、に、入、り、
 奴、思、喇、惕、庫、の、寨、を、攻、む、こ、の、寨、は、先、に、將、を、遣、り、攻、め、さ、せ、た、れ、ど、も、六、月、の、間、下、
 兒、を、前、鋒、と、し、て、闊、喇、散、に、入、り、たり、脱、噶、察、兒、は、捏、撒、を、屠、り、一、二、二、〇、年、の、十、一、

帖兒篋揚

月、你沙不兒を攻めて戦死せり。一二二一年の二月、拖雷は、安篤核を下し、馬嚕沙
 希展を屠り、薛兒主克の速勒壇散札兒の墓を發き、你沙不兒を砲擊して、その民
 を屠り、別軍を遣り、秃思に近き合里發哈喻、阿勒喇失惕の墓を毀り、拖雷は、庫希
 思壇を荒し、赫喇惕を破り、塔列干に往き、父に會せり。録の迭兒密は、喇失惕の帖
 兒篋似、多遜の帖兒篋揚にして、漢書西域傳の都密、唐西域記新唐書西域傳の咀
 蜜なり。元史地理志に忒耳迷、薛塔刺海の傳に帖里麻通鑑綱目に帖力迷とあり。
 帖兒篋揚の名は、費兒都昔の詩史に見え、亦思塔黑哩は、李合喇撒馬兒罕より鐵
 門を經、巴勒黑に往く路にありと云へり。駙馬帖木兒は、撒馬兒罕より巴勒黑に
 往く時、常に帖兒篋似にて、阿木河を渡れり。今鐵門より巴勒黑に往く路の渡津
 は、それより西に移れり。嚕西亞の地圖に、帖兒篋似の遺址は、阿木河の北岸にて
 速兒合卜河の西の西北十一英里ばかりにあり、巴勒黑の東北に當れり。録の班
 勒紇は、西史の巴勒黑にして、西游記に班里、西游錄に班城、元史地理志に巴里黑、
 察罕の傳に板勒紇、明史西域傳に把力黑とあり。速不台の傳なる必里罕、曷思麥
 里の傳なる阿刺黑も、巴勒黑の訛なるべし。この地は、いと古き名城にして、希臘
 の史家に據れば、古は巴克惕喇と名づけ、その州を巴克惕哩牙納と云へり。漢書
 の撲挑後漢書の漢達、魏書の薄羅薄提は、皆巴克惕喇の訛略、周書の拔底延、新唐
 書の縛底野は、皆巴克惕哩牙納の訛略なり。唐西域記に、縛喝國、北臨縛喝河、國大
 都城、周二十餘里、人皆謂之小王舍城也とあり。縛喝は、即巴勒黑にして、巴勒黑の
 名の物に見えたる始なり。巴勒黑の落城は、喇失惕も多遜も、河間征服の年の翌
 年とすれども、下文に塔列干を落すに六七月かゝれりとあるに據れば、阿木河
 を渡り、巴勒黑を取るは、その前年にあらざるべからず。親征錄に、破班勒紇城圍
 守塔里寒寨を河間征服の年辛巳は、庚辰の誤の秋の内に書きたるは、全く事實

巴勒黑

塔列干

なるを、喇失惕は偶誤りて翌春に移せり。察罕の傳に、察罕、西域板勒紇人也、父伯
 德那歲、庚辰、國兵下西域、擧族來歸とあるも、庚辰の年、巴勒黑落ちたる時、擧族歸
 附したるなり。録の塔里寒は、西史の塔列干にして、巴勒黑の東に當れる、坤都似
 の東邊にあり。古は、泰干とも呼び、亦思塔黑哩の地理書に、巴勒黑の東、巴峇黑商
 に近く、脫合理思壇の都、泰干ありと云へり。中世の阿喇必亞地理家は、巴勒黑の
 西、巴勒黑と篋嚕阿勒嚕篤篋嚕察克との間に、塔里干ありて、篋嚕阿勒嚕篤に
 屬せりと云ひ、脫合理思壇にあるを、ば塔亦干と云ひたれども、領篤哩昔は、二つ
 ともに、塔里干と云へり。唐西域記の咀刺健、元史地理志、經世大典の圖にある塔
 里干は、西にあるものなり。東にある塔里干は、地理志にも見えざれども、馬兒科
 保羅は、巴勒黑より東に十二日行きたる時、泰干と云ふ寨に至れりと云へるは、
 この寨なり。一八三八年、天保九年、烏篤そこを尋ねて、さびしき村なりと云へり。
 喇失惕、別喇津の譯せるに據れば、塔列干の寨の外に、堅き寨ありしが、如くなれ
 ども、多遜に據れば、奴思喇惕庫は、即塔列干の寨なり。録に、只塔里寒寨とあれば、
 恐らくは、別喇津の誤れるならん。録の馬魯察葉可は、喇失惕の篋嚕察克にして、
 古くは、篋嚕阿勒嚕篤と云へり。阿喇必亞の地理家に據れば、馬嚕又は、篋嚕と云
 ふ所二所あり。大なるを、篋嚕沙希展と云ひ、その屬邑を、篋嚕阿勒嚕篤と云ひ、共
 に、篋嚕嚕篤、木兒嘴卜、河の濱に在りき。今も、篋嚕察克と云ひて、篋兒甫の東南百
 十英里、嚕西亞、阿富汗の界に近き所に在り。録の馬盧は、西史の、篋嚕即、馬嚕沙希
 展にして、今の、篋兒甫なり。篋嚕は、古き名城にして、漢書西域傳に、安息、東界、木鹿
 城、號爲、小安息とあり。中世は、闊喇散、四大城の一となれり。新唐書、大食の傳に、呼
 羅珊、木鹿とあるは、闊喇散の、篋嚕なり。録の昔刺思は、西史の、薛喇黑思、又は、撒喇
 黑思にして、元史地理志に、撒刺哈西とあり。遺址は、篋兒甫の西南、赫哩嚕篤、河の

篋嚕察克

篋嚕

撒喇黑思

東岸に在り、嚙西亞に屬せり。西岸に新撒喇黑思と云ふ堡あり、珙兒沙に屬せり。西史の捏撒は薛喇黑思の西北、兇思の東北に在り。錄の徒思は西史の兇思にして、元史地理志に途思とあり。兇思は名高き古城にして、名君哈噲阿喇失惕はこゝに崩じ、詩人費兒都昔星學の大家納思喇丁はこゝの人なりき。遺址は篋舍揚の西北十七英里にあり。錄の泥沙兀兒匿察兀兒は、秘史の亦薛不兒、西史の你沙不兒前の注に見えたり。秘史の昔思田は、西史の昔思壇又薛亦思壇なり。然れども昔思壇に入りたるは、拖雷の兄幹歌歹明年壬午の事なれば、この昔思田は、庫希思壇の誤なるべし。錄の木刺夷は、元史太祖紀は同じく太宗紀に木羅夷憲宗紀に沒里奚郭侃の傳に木乃兮常徳の西使記に木乃奚とあり。正しくは木刺希苔にして、國の名に非ず、抹哈篋惕教徒の一派より成れる部落の名なり。亦思馬額勒を祖とするが故に、亦思馬額勒宗徒とも云ふ。元史譯文證補に木刺夷補傳ありて、その興亡を委しく述べたり。裏海の南なる額勒不兒思連山の城寨に據り、その領土は庫希思壇の地に及べり。故に拖雷の庫希思壇を荒せることを録に木刺夷を掠むと云へり。出黑扯噠の城は喇失惕の札只囉なり。錄の擲擲關河は舍哩弗丁の咱弗兒納篋に見えたるものなるべし。咱弗兒納篋に據れば、この河は你沙不兒より安篤依に往く路にて、木兒噶卜河の西にあり。然らば赫哩嚙篤河の異名なるべし。喇失惕の庫姆者囉河も赫哩嚙篤河の外にはあるまじ名亦嚙西史の赫哩嚙前の注に見えたり。

拙赤察阿歹幹歌歹三人の子だちは、幹囉格赤の城を降し

て、三人にて城の民を分け合ひて、成吉思合罕に分前を出さざりき。(喇失惕曰く、幹歌台は軍を統ぶることを命ぜられ、二人の兄に和解ありて、太祖に民を分たすとはなし。)この三人の子だち下馬して來ぬれば、成吉思合罕は、拙赤察阿歹幹歌歹三人の子だちを咎めて三日見えさせざりき。(親征錄に、三太子克玉龍傑赤城、大太子還營所寨塔里寒破後、二太子三太子始歸朝覲と云ひ、喇失惕も、察合台幹歌台は、闊喇自姆より來て成吉思汗に見え、拙赤は、闊喇自姆より行李を挈へて去れり、と云ひて、拙赤の去れる所明ならざるを、多遜は、昔渾河の北なる地方に残れりと云へり。然れども拙赤いかに狼戾なりとも、軍に擁して外に駐まり太祖に會せざること、は事情に於てあるべからざることなれば、原本秘史の非にし。)そこに孛幹兒出木合黎失吉忽都忽(この三人の内、失吉忽秃忽の軍中に居りしことは、論なし。孛幹兒出は、外十八日碣石城を過ぎたる時、預傳聖旨、令萬戶播魯只領蒙古回紇軍一千護送、過鐵門とあり。播魯只は、即孛幹兒出なり。只木合里は、太祖十二年八月、太行以南、經略の命を蒙りてより、十三年には河東に入り、十四年も河東に戰ひ、十五年河北を定め、十六年河西に入り、十七年鳳翔を攻め、十八年三月薨じ、西征の師には

從はざれば、こゝに木合里（ミカエリ）三人奏さく服はざりし撒兒塔兀勒の
 を加へたるは、誤りなり。民の莎勒壇を平けて、彼が城ごもの民を取れり、我等分けて
 取らるゝ、斡囉格赤の城も、分け合ひて取る子だちも、都て成
 吉思合罕のものなり。皇天后土に力を添へられて、撒兒塔兀
 勒の民をかく平けたる時、我等爾のあまたの男驢馬歡びて
 馬孩（動詞なれども）譯する能はず。てあり。合罕は何ぞかく怒りて在せる子だ
 ちは、過を悟りて畏れたるぞ。後を戒めよ。然らずば、子だちは、
 性行を怠らん。恩賜せば見えさせば可からん。と奏したれば、
 成吉思合罕怒息みて、拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちを見
 えさせて聲を出し、翁等の辭を引きて、舊き辭を尋ねて、立ち
 たる地に仆るゝまで、額の汗を拭ひ、敢へぬまで陳べて、譴責

太祖の訓誡

巴黑塔阿勒答
蘇麻
阿兒臣
斡歌古思
斡兒乞惕
合九臣
合答勒
巴亦黑三

斡兒赤三人の建

により教訓により諭して在せる時、晃孩豁兒赤、晃塔合兒豁
 兒赤、擲兒馬罕豁兒赤、この三人の箭筒士は、成吉思合罕に奏
 さく、雛なる鷹の調習にやつこ入りたる如く、子だちはやつ
 ごかく征伐を學び居る時、子だちを退くるが如くい、かんぞ
 かく叱りませる。子だちは懼れて心を落さん。日の没る處よ
 り出づる處に至るまで、敵の民あり。我等を脱孛都惕の狗ご
 もを嗽けて遣らば、敵の民を、我等は皇天后土に力を添へら
 れて、金銀段物財民住具を爾に持ち來ん。（脱孛都惕は脱孛惕の複
稱にして、明譯に西蕃と

脱孛惕の名稱

成吉思汗實錄卷の十一

あり。脱孛惕は、唐書の吐蕃今の圖伯特即西藏の民なり。吐蕃は、蓋秃孛篤篤は、惕
 の濁音を音譯せり。宋遼金元の諸史皆吐蕃又は土蕃の字を用ふれども、遼
 の興宗重熙十七年鐵不得國遣使來、乞以本部軍助攻夏國、不許と云へること、遼
 史本紀兵衛志屬國表の三所に見えたり。この鐵不得は、即秃孛篤篤の轉なり。又道
 宗紀に見えたる陳王塗孛特遊幸表に見えたる圖不得泉を、殿本は皆圖伯特と
 改めたり。國の名を取りて人の名泉の名としたるにやあらん。經世大典の圖に

巴固答篤の合里

は士伯特とあり、全く今の音に同じ。嚙卜嚙克馬兒科保羅は、帖別惕と云ひ、喇失
 惕は、禿卜別惕と云へり。亦奔忽兒答惕必馬速的を始として阿喇必亞の地理家
 は、大抵梯別惕と云ひし故に、今もその名にて世に聞ゆ。されどもその國人は禿
 李篤の名を忘れて今は自ら李篤の國と云ふ。脱李都惕の狗は蒙古人の雄雄し
 く猛きに譬へたるなり。禿別惕の國に驢馬ほど大なる猛き狗ありて、野牛を捕
 へ、豹と鬪ふことは大佐裕勒の馬兒科保羅紀行の第四十六章とその證注とに
 見ゆ。その民と云へば、この西に巴黑塔惕の民の合里伯莎勒壇
 と云へるありと云へり。(巴黑塔惕は、巴固答篤の訛にして、抹哈篋惕致
 志に白達、元史憲宗紀に八哈塔、地理志に八吉打とあり。郭侃の傳常徳の西使記
 に報達とあるは、馬兒科保羅の巴兀答思と呼べるに音近し。合里伯は合里發の
 訛にして、西使記に哈里法とあり。憲宗紀に三年六月命諸王旭烈兀及兀良合台
 等帥師征西域哈里發八哈塔等國、八年二月諸王旭烈兀討回回哈里發平之、禽其
 王とあるは、哈里發を國の名と誤りたるが如く聞ゆ。合里發は英吉利思語に略
 里甫と云ふ。莎勒壇は、即速勒壇にて合里發の冊封を受けたる諸侯王の號なれ
 ば、合里發の下に附けたるは誤れり。然れどもこの誤りは、秘史のみならず、元史
 郭侃の傳にも合里法筭灘とあり。蒙古人は、速勒壇の號を西域の君長誰にも附
 くものと思へり。と見えて、郭侃の傳に、木乃分(木刺希答)の將忽都答而兀朱筭灘、
 乞都卜(吉兒篤庫)の兀魯兀乃筭灘、囉克捏丁、兀里兒の海牙筭灘、阿刺汀、阿刺額丁
 の領地の禡撻答而筭灘、乞石迷略什米兒、忽里筭灘、天房、阿喇必亞の巴兒筭灘、
 (額只魄惕)の將別伊巴兒、密昔兒、米思兒、即額只魄惕、可乃筭灘、可刀の誤か、速

速勒壇の號の流用

擲兒馬罕の出征

勒壇屈突思、富浪、富囉克の兀都筭灘、石羅子(發兒思)の都失喇思、の換斯干、阿答畢
 筭灘、西使記、機思、阿塔卑、阿塔卑は發兒思の君の尊寶、鐵國の名に非ず、印度の産
 物の加葉、筭灘、兀林の阿必丁、筭灘、乞里、彎彎は蠻の誤、客兒曼の忽都馬丁、それ
 筭灘、科惕別丁などあり。巴固答篤の興亡の事は、洪鈞の報達補傳に見ゆ。それ
 らの處に我等出征せん、と奏しければ、合罕悟りて、この言に
 怒息みて、成吉思合罕は可しとして勅あり、見孩、見塔合兒、擲
 兒馬罕三人の箭筒士を恩賞して、阿答兒斤の見孩、朶龍吉兒
 の見塔合兒二人を我が前に居れ、とて留めて、幹帖格歹の擲
 兒馬罕を巴黑塔惕の民の處に合里伯莎勒壇の處に出征せ
 しめたり。(朶龍吉兒の姓始めてこゝに見ゆ。親征錄元史十三翼の戰の後に
 部朶郎吉と云ひて者刺亦兒十部の一とし、錄の朶郎吉札刺兒部もその意なる
 を元史に若朶郎吉若札刺兒と二部に分けたるは非なり。幹帖格歹の姓は、外に
 見えず。較、耕錄蒙古七十二種の中に合忒乞歹とあるは、やゝ似たり。擲兒馬罕は、
 次の卷に綽兒馬罕とあり。多遜は察兒抹昆と云ふ。親征錄元史本紀には、この人
 見えざれども、葛思麥里の傳に西域の大帥察罕とあるは、列傳第七なる唐兀惕
 の察罕に非ずして、察兒馬罕の中略なり。又續通鑑綱目宋の理宗寶祐六年憲宗

八年の條に初蒙古遣宗王旭烈伐西域至是以抄馬那顏郭侃總統諸軍前後平西域乞石迷十餘國轉鬪萬里とある抄馬那顏をト咧惕施乃迭兒は察兒抹昆なりと云ひたれども察兒抹昆は旭烈兀西征の前太宗十三年に死したれば旭烈兀の下に働くべき由なし續綱目は何に據れりやと郭侃の傳を見れば壬子迭兒兵仗至和林改抄馬那顏從宗王旭烈兀西征とありこの抄馬は人の名に非ず侃の祖父郭寶玉の傳に寶玉はもと金の將にて野狐嶺の大敗の時軍を率ゐて蒙古に降りて授抄馬都鎮撫太祖八年復帥抄馬從錦州出燕靉の父郭德海の傳に大軍至乃出降爲抄馬彈壓從先鋒柘栢西征などありて抄馬は降附の軍の名抄馬都鎮撫抄馬彈壓抄馬那顏即抄馬の長官となれり續綱目の文は郭侃の上に官名を冠したるなりけり多遜に據れば察兒抹昆の西征は太宗二年の事なれども太祖の時にも徹別速不台の高喀速山を越えたる後又蒙古の軍三千人東より來て關喇自姆の潰兵の聚れる喇亦の城を破り撒哇庫姆喀山を荒し西は哈馬丹を焚き阿在兒拜展に入り喇亦の逃眾を敗りその帖卜哩似に逃れたる者をば阿在兒拜展の會長に命じて縛り送らしめて東に返れりと云ひてその將の名なし祕史なる綽兒馬罕の西征は或は即この軍ならんと洪鈞も云へり

梁兒伯梁黑申の出征

印度の名稱

又欣都思の民巴黑塔惕の民二つの閒なる阿嚕馬嚕馬答撒里の民の阿卜禿の城に梁兒別惕の梁兒伯梁黑申を出征せしめたり欣都思は欣都の蒙語複稱なり古名は信度と云ひ信度河より出でたり後轉じて欣都となり又轉じて印度となれり史記漢

書の身毒は即信度高僧傳の捐毒賢豆は即欣都なり天竺も信度の轉訛にして山海經には天毒漢書には天篤ともあり後漢書以後は天竺の字多く用ひられたり竺も古音は篤なり珀兒沙人の欣都思壇と云ふは欣都の國と云ふことなり歐囉巴人の因的亞と云ふは印度の喇旬語なり親征錄には忻都元史憲宗紀には身毒とも欣都思ともあり阿嚕は前文の亦嚕にして今の赫喇惕は中世赫哩とも哈哩とも云ひ赫哩は額哩とも亦嚕とも訛りたれば阿嚕は哈哩の訛れるなるべし馬嚕は篋嚕沙希展今の篋兒甫なり馬答撒哩阿卜禿は考へ得ず地は三つにして城一つなるも異むべし梁兒伯梁黑申は禿馬惕を平げたる人にて卷十に見えたりこの西征の役には親征錄にその名見えざれども集史には梁兒伯とありて巴刺那顏と同じく者刺列丁を追ひに印度に入りたりとなせり又多遜曰く者刺列丁の敗れたる後亦勒赤喀歹は命を受けて叛きたる赫喇惕を討じ六月圍みて一二二年太祖十七年の六月始めて攻め落してその眾を屠りこの外に篋嚕も再侵掠せられたりと云へり本書に依れば梁兒伯は印度に入りたるに非ずして赫喇惕篋嚕を攻めたるは即梁兒伯なるに似たり

又速別額台巴阿禿兒を北なる康鄰康鄰は漢代の康居の遺種にして抹哈篋惕教徒の記

錄には康喀里又は康克里と呼び第十三世紀の初には牙亦克兀喇勒河の東關喇自姆の湖鹹海の北なる廣き荒野に住めりと云ひ阿不勒噶資に據れば成吉思汗の即位の頃康克里の領地は逸昔郭勒の湖楚河塔刺施塔喇思河まで東に及べり第十三世紀の中ごろに歐囉巴の高僧二人その地を過ぎて紀行に載せその民の名を普刺諾喀兒關尼は康吉台と云ひ嚕卜嚕克は康勒と云へり嚕西亞の史に珀徹捏固と云へるは即康克里なりと信ぜらる元史には康里と云ふ

薛兒客速惕即ち
微兒客思

客失米兒即ち喀
施米兒

屬賓の誤認

撒克新とあり。撒克新は、亦提勒(佛勒噶)河の下流にありし城の名にて、その民を
 もしか呼べり。抹哈篋惕教徒の書には既に第十二世紀にその名見え、主吠尼は、
 撒略新と云へり。普刺諾略兒(關)薛兒客速惕(阿蘭)の南高喀速山の東に居た
 尼の撒克昔も、それなるべし。薛兒客速惕(阿蘭)の部族にして、嚕西亞の古史に
 は、微兒喀失、阿不勒、弗答は、者兒客思、普刺諾略兒、關尼は、客兒乞思、又は乞兒喀昔、
 嚕下嚕克、微兒乞思、喇失惕は、微兒客思、元史地理志には、撒耳柯思とあり。嚕西
 亞の史に、蒙古人の高喀速山を踰えたる時、征服せる部族の中に、喀思、瑛、吉の名
 あるにつきて、克刺普囉惕は、微兒客思の古名は、喀思、撒黑なりき。今も、幹思、薛惕
 人、明喇勒人は、微兒客思を(客)失米兒(傳)客失米兒は、漢書以下歴代の史と高僧
 喀思、撒黑と呼ぶと云へり。客失米兒(傳)客失米兒は、漢書以下歴代の史と高僧
 の喀施米兒にして、唐西域記に、迦溼彌邏、舊曰屬賓、訛也と云へり。後漢の初に健
 馱邏の迦賦色、迦王、五百の阿羅漢を集めて三藏を結集したる所は、即ちこの國な
 り。哩惕帖兒は、屬賓を希臘史家の科弗捏即今の喀不勒に當て、喇繆咱は、堪答哈
 兒に當てたるは、いづれも隋書西域傳に、漕國在葱嶺之北(南)の誤、漢時屬賓國也、
 新唐書西域傳に、屬賓、隋漕國也、居葱嶺南、あるに誤られたるなり。新唐書の屬
 賓の傳は、全く舊唐書の屬賓の傳に據り、迦溼彌邏の事を述べたるに、隋漕國也、
 を加へたるは、蛇足なり。隋の煬帝の時、西域諸國を招きたれども、屬賓、天竺は至
 らざりし故に、隋書には、屬賓、天竺の傳なし。隋書の漕國は、唐西域記の漕矩吒國
 にて、鶴悉那(即嚕自納)を都とし、弗栗特、薩儂、那國、今の喀不勒の南に在り、屬賓即
 迦溼彌邏と異なり、隋書に、漢時屬賓國也と云へるは、唐の史臣の臆度の誤なり。
 新唐書は、既に屬賓の傳に、隋漕國也と斷りながら、その下に更に漕國の傳あり
 て、謝觀、居吐火羅西南本曰漕矩吒、或曰漕矩云云、東、距屬賓云云、其王居鶴悉那城、
 と云ひ、又その次に更に屬賓の傳ありて、箇失蜜、或曰迦溼彌邏云云と云へり。新
 唐書の疏謬、複查は、元史にも譲らず。元史憲宗紀に、怯失迷兒、經世大典の圖に、乞
 失迷兒、郭侃の傳、常德の西使記に、乞石迷、普刺諾略兒、關尼は、喀思米(李)刺兒
 兒、馬兒科保羅は、喀失木兒、喇失惕は、今の如く、喀施米兒と云へり。李刺兒
 (李)刺兒は、次の卷に、不刺兒ともあり、元史地理志には、不里阿耳とあり、即佛勒
 (嚕)河の東に居りし、不勒噶兒、又は李勒噶兒なり。大典の圖に、不里阿耳とある
 は、里を思と書き誤れるなり。抹哈篋惕教徒の記者は、不刺兒とも、李刺兒とも、
 へるは、正に、秘史に同じ。不勒噶兒は、早くより東西二部に分れて、東部は、即佛勒噶
 不勒噶兒にして、普刺諾略兒、關尼、嚕下嚕克は、その國を大不勒噶兒、哩亞と云へり。
 こゝなる李刺兒は、この東不勒噶兒なり。西部は、東部より分れて、第五世紀の末
 に、蒼紐ト河を渡りて、今の不勒噶兒、哩亞、額勒佛勒噶兒、河の東に、李兒噶兒と記せり。東不
 勒噶兒、その河の北に、不兒噶兒、額勒佛勒噶兒、河の東に、李兒噶兒と記せり。東不
 勒噶兒、その事を委しく述べたる舊記は、第十世紀の初に、その國に到れる亦奔拂
 自關なり。その地は、佛勒噶兒、河の東岸と、喀馬河の濱とに廣がり、その都をも不勒
 噶兒と云へり。蒙古に取られてより、不勒噶兒の國は、亡びたれども、不勒噶兒城
 は、商業學術の要地たることを失はずして、金、幹兒朶の諸汗の宮所とさへなり
 し。が、第十五世紀の初に、その城廢れて、喀散城、代り興れり。遺址は、佛勒噶兒、河の東
 四英里、喀散より八十三英里、ほどなる、喀散州、思帕思、克郡にあり。喇(次)勒(卷)に
 りて、今兀思、片思、科頁、また、李勒噶兒、思科頁と云ふ村となれり。喇(次)勒(卷)に
 二たびこの十一部の名を擧げたる時、この喇喇勒の代りに、乞喇喇勒とあれば、蓋
 の喇は、客の誤なるべし。客喇勒は、洪噶兒語にて、王の義なるに、乞喇喇勒に似たり。蓋

李刺兒即ち李勒
噶兒

客喇勒即ち客刺
兒

多遜の史

在兒拜展に入り、帖卜哩自を降し、幾喇嘴を破り、哈馬丹の叛民を討じて回り、阿兒囉に入り、古兒只の兵を破り、失兒彎に入り、迭兒邊篤の關門を破り、阿關の地に入り、多遜に據れば、幾喇嘴を破れるは、一二二一年、太祖十六年、迭兒邊篤を破れるは、一二二二年、太祖十七年なり。迭兒邊篤は、高喀速山の東端に在りて、亞細亞歐羅巴の界を爲せり。者別速別額台の歐羅巴に入りたることは、喇失惕の史には委しからざる故に、多遜は、亦奔阿勒阿提兒の喀米勒兀惕帖哇哩克全き歴史に據りて記せり。その略に曰く、蒙古人は、高喀速山を踰え、阿關列思吉徹兒客思乞魄察克兵を連ねて禦ぎ戦ひ、勝敗決せず。蒙古人は、甘言を用ひて乞魄察克人を誘ひ、その同盟を棄てさせ、然る後に阿關等の眾を破り、帖兒乞の城を取り、遂に乞魄察克の地を襲ひて、その眾を追ひ散らし、大なる曠野を過ぎて、速蒼克まで進みたり。乞魄察克の大眾は、嚙西亞に遁げ入りたれば、嚙西亞人に攻め入らんとして、嚙西亞乞魄察克連合の兵に遇ひ、伴り負けて遁げ走り、十二日の間敵に逐はれて、伏を設けて、遽に起り、七日、烈しく戦ひて、遂に勝を決し、嚙西亞乞魄察克は、全く敗れたり。それより蒙古人は、嚙西亞に入りて、焚掠を逞せり。一二二三年の末に、蒙古人は、嚙西亞を去りて、不勒嘴兒の地を侵し、その兵を破り、撒喀新を過ぎて、大軍に會せり。喀喇姆津の嚙西亞史に曰く、その時嚙西亞は、あまたの小國に分れ、その中に速思蒼勒兀刺的米兒は、重要な國にて、その大公は、列國の宗主の如く見られたり。大公の宮所は、もと乞額甫にありしが、一一六九年に兀刺的米兒に遷れり。嚙西亞に遁げ入りたる、玻羅物次乞魄察克人の内に、嚙里赤の君、姆思提思刺甫の妻の父なる部長科提安洪嘴兒の史には、庫壇と云ふ人あり、塔塔兒蒙古人を禦ぐ手段を取ることに必要なるを、その塔

喀喇姆津の嚙西亞史

速不台の傳

姆思提思刺甫に説き、勧めたれば、姆思提思刺甫は、南嚙西亞の諸侯と乞額甫に會して、玻羅物次を援けて、塔塔兒に當らんことを議決せり。乞額甫徹兒尼郭甫に軍を聚めたる所に、塔塔兒の使十人至りたれば、それらを皆殺して、然る後に軍を進め、闊兒提擦河額帖哩諾思刺甫の南五十英里ばかりにある、尼珀兒河の深水に、近く塔塔兒の軍に遇へり。勝を得たれば、嚙西亞人は、篤聶珀兒河を渡りて、塔塔兒を九日逐ひて、喀勒河に至れり。嚙里赤の姆思提思刺甫は、北軍に居り、玻羅物次と共に河を渡りて、塔塔兒の中軍を衝かんとして、打破られ、塔塔兒人は、勢に乗じて河を渡り、嚙西亞の南軍を襲ひて、その眾を殲滅せり。これは、名高き喀勒喀河の戦なり。喀勒喀河は、他の書には、喀刺克河ともあり。喀喇姆津は、馬柳玻勒の傍にて、阿索甫の海に入る、喀勒繆思河の深水なる、喀列租河に當てたり。元史速不台の傳に、只別者別と共に、回回國主を追ひたる事を、敘べたる後に、癸未、速不台上奏請討欽察許之。遂引兵繞寬定吉思海、展轉至太和嶺、鑿石開道出、其不意至、則遇其酋長玉里吉及塔塔兒方聚於不租河、縱兵奮擊、其眾潰走。云云。遂收其境。又至阿里吉河、與斡羅思部大小密赤思老遇、一戰降之。略阿速部而還。とあり。癸未は、太祖十八年にして、喀勒喀河の大戦の年なり。二將の歐羅巴に入りたるは、その前年壬午なれば、癸未の書き所や、違へり。寬定吉思海は、後文に、寬田吉思海ともあり、裏海を云へるなり。突兒克語に、顛吉思は、海の義にして、それより裏海巴勒喀施の如き、大湖の名となれり。寬即庫安は、委古兒語に、湖なり。顛吉思は、名となれる故に、その上に湖を冠せたるなり。太和嶺は、高喀速山を指せるなり。玉里吉塔塔兒は、洪鈞の哲別補傳の自注に、西域書に、玉兒格塔伊兒とありと云へり。ト咧惕施乃迭兒曰く、嚙西亞の史に據れば、玻羅物次乞魄

葛思麥里傳

十一部の内八部の征伐

察克の汗の一人、名は玉哩晃察喀威赤と云へるもの、一二三年蒙古人に殺されたり。阿里吉河は喀勒喀河の訛なるべし。大小密赤思老は、乞額甫の君と徹兒尼郭甫の君となり。又葛思麥里の傳に、帝遣使趣哲伯疾馳以討欽察、云云。進圍幹羅思於鐵兒山、克之、獲其國主密只思臘、哲伯命葛思麥里獻諸朮赤太子、誅之。尋征康里、至孛子八里城、與其主霍脫思罕戰、又敗其軍。進至欽察、亦平之。軍還、哲伯卒、あり。鐵兒山は、哲別補傳に孩耳桑と書き、嚕西亞の北軍大敗の地とし、その自注に、鐵兒山、乃地名、非山名と云へり。この密只思臘は、徹兒尼郭甫の君なり。康里を征したるは、不勒噶兒より回れる時の事なるべければ、進至欽察とあるは非なり。さて本書に列ねたる十一部落、馬札兒と客喇勒とは同國なりとして、十部落の内、乞卜察兀惕即乞魄察克、玻璃物次幹嚕速惕即嚕西亞、阿速惕即阿蘭、撒速惕即撒喀新、薛兒客速惕即徹兒客思、孛刺兒即不勒噶兒の六部の名は、珀兒沙嚕西亞の舊史なる二將西征の條に見え、巴只吉惕即巴施客兒篤の名は、そこに見えざれども、不勒噶兒と康克里との間にあれば、不勒噶兒より回れる時從へたる馬札兒の國、即洪噶哩亞は、二將の至らざるのみならず、出征の目的の中に加へられたりとも思はれざれば、太宗八年の西征の時、事と混じて誤り加へたるに似たり。又客失米兒即喀施米兒は、二將出征の路とは遙に隔たれ、これ誤りならん。

荅嚕合赤の設け

又撒兒塔兀勒の民を取り畢へて、成吉思合罕勅あり、城城に荅嚕合臣を置きて、(親征錄癸未の夏、八魯灣川避暑の處に、時上既定西域置達魯花赤於各城、監治之、と云ひ元史も同)

忽嚕姆石姓の父子

じ。荅嚕合臣は荅嚕合赤とも云ひ、元史は常に達魯花赤と書き、明譯には鎮守官とあり。蒙語荅嚕忽は、壓ふる鎮むるの義あるより、その語尾を變へて、一州一局を統ぶる官の名とせり。趙翼の二十二史劄記に曰く、達魯花赤、掌印辦事之官、不論職之文武大小、或路府或州縣、皆設此官。太祖時、授札八兒、黃河以北、鐵門以南、天下都達魯花赤、木華黎以谷里夾打爲元帥、達魯花赤、又帖木兒補化爲鞏昌都總帥、達魯花赤、世祖以別、的因爲屯田府、達魯花赤、唵木海爲隨路砲手、達魯花赤、多蒙古人為之、漢人亦有官、此者劉好禮爲永熙路、達魯花赤、張炤爲鎮江路、達魯花赤、張君佐爲黃州、達魯花赤、張賁亨爲處州、達魯花赤、珀兒沙にては、荅魯合赤の赤を略きて呼びたりと見えて、喇失惕の史には、荅兒噶とあり。珀兒沙の亦勒罕すら自ら荅嚕噶と稱し、その頃鑄たる貨幣に、大汗即元帝の名を書きて、その下に荅嚕噶の稱を加へた。兀嚕格赤の城より、牙刺哇赤馬思忽惕と云ふ父子二人、忽嚕木石の姓ある撒兒塔兀勒來て、城の緣故體例を成吉思合罕に奏して、緣故に遵ひ知らせと云はれて、その子を馬思忽惕、忽嚕木石を我等の荅嚕合思(荅嚕合赤の複稱)と共に不

兀丹即ち和闐

合兒薛米思堅兀嚕格赤兀丹(兀丹は、史記の于寔、漢書以來、歷代史志の名を擧げて、翟薩旦那國、唐言地、乳即其俗之雅言也、俗語謂之渙那國、匈奴謂之于遁、諸胡謂之豁旦、印度謂之屈丹、舊曰于闐、譌也、と云ひ、耶律楚材の西游錄には

成りたる翌年の所に記したれども、こゝに明に中都の城を知らしめに伴れ來たりとあれば、太祖の時より燕京の財政に與り居たるならん。

七年の遠征

撒兒塔兀兒の民の處に七年行きて、そこに札刺亦兒の巴

刺を待ちて居る時に、(太祖の西征は十四年己卯より二十年乙酉まで

七年目にはあらず、四年目なる十七年壬午の夏巴魯安原にて避暑) 巴刺は、

巴刺の印度侵掠

申木噠を渡りて、札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人を欣都思の

地に到るまで追ひて、札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人を失ひ

て、欣都思の中に到るまで尋ねて得かねて回りて、欣都思の

傍邊の民を虜へて、多き駱駝多き薛兒客思(勢を去り)を取り

て來ぬ。(親征錄に曰く、遂遣八刺那顏將兵急追之、不獲、因大擄忻都人民之半

追ひて印度に入りたれども、ゆくへ知れず、必亞の城を取り、木勒壇まで進み

爲に捨て去り、刺和兒珀沙兀兒篋里克普兒を侵掠して、羊の年の夏成吉

必亞

木勒壇

るべし。木勒壇は、唐西域記の茂羅三部盧にして、微納ト河の左邊にあり。印度の

刺和兒

を攻め落す時、阿歴散迭兒は重傷を受けたり。城内に莊嚴なる日天の祠あり

珀沙兀兒

莫不於此捨施珍寶、建立福舍とありしが、その祠堂は、木噠勒帝與郎在トに廢せ

印度の奴隸王朝

磔迦國より至那僕底國に往く時、磔迦の東界なる大城に一月留まれりと、慈恩

都となれるは、木噠勒朝の時なり。珀沙兀兒は、健駄羅の迦賦色迦王の故都なる

一八六年、誥兒の沙哈ト兀丁は、噶自尼朝を滅し、遂に邊噶勒までも平げたれ

ば、印度の過半は、抹哈篋惕教の國となり。二〇六年、沙哈ト兀丁死し、その將

兒克人にして、もと奴隸なりし故に、この朝を世に奴隸王朝と云ふ。者刺列丁の

迭勒希に遁げ入りたるは、奴隸王朝の三世阿勒塔姆施庫塔下の壻の時なり

そここち成吉思合罕回りて、(親征錄に、甲申、班師とあるは、八魯灣川

欣都思壇より唐古惕の路に出でて還らんと思ひしが、山深く路險しく行き難

しと聞きて、回りて、珀沙兀兒に至り、來る時、經たる路に循ひて還れり。猴の年、巴

來安の山路を踰え、巴喀關に留め置きたりし、輜重を取り、秋、只渾河を渡り、冬、撒

西游記なる壬午の同駕

馬兒罕に至れり。とあり。親征錄集史は己卯より壬午まで四年の間の事を一年づつ後れさせて庚辰より癸未までとしたれば、こゝの甲申も癸未の誤りと見ざるべからず。然らば太祖の師を班して撒馬兒罕に至れるは癸未の年なりやと云ふに、また然らず。實は壬午の年に師を班して、その年の内に撒馬兒罕に至れるなり。西游記に、長春は壬午の四月、欣都庫施山中の行在所より還り、五月五日、邪米思干に達し、八月八日、二たび往き、十五日、阿沒河を濟り、二十二日、行宮に至り、上に見え、二十七日、車駕北に回り、九月、朔河橋阿沒河を渡り、十五日、十九日、二十三、日途に在り、幄を設けて道を説き、それより扈從して行き、時、道化を敷奏し、又數日にして、邪米思干大城の西南三十里に至り、十月、朔奏して、舊居に還り、上は大城の東二十里に駐まれり。六日、上に見えて、自此或在先或在後、任意而行を許され、十一月二十六日、即行き、十二月二十三日、雪寒く、又三日、霍闌河を過ぎ、二十八日、行在所に至り、震雷の間に對へたりとあり。この記に據れば、太祖は壬午の八月二十七日、山中の行宮を發し、九月の末に撒馬兒罕に至れり。太祖の撒馬兒罕を發したる日は、確ならねども、長春の失兒河を過ぎて後に、行在所に至れるを見れば、太祖は蓋長春より先に發し、その年の内に失兒河の東に至りたること明なり。又元史太祖紀十九年甲申の條に、是歲、帝至東印度國、角端見、班師と云ひ、耶律楚材の傳に、甲申、帝至東印度、駐鐵門關。有一角獸、形如鹿、而馬尾、其色綠、作人言、謂侍衛者曰、汝主宜早還、帝以問楚材、對曰、此瑞獸也、其名角端、能言、四方語、好生惡殺、此天降符、以告陛下、陛下、天之元子、天下之人、皆陛下之子、願承天心、以全民命、帝即日班師、とあるにつきて、程同文曰く、蓋本於宋子貞所作神道碑、極以歸美文、正然、非實錄也。唐書、東竺際海、與扶南林邑接、太祖西征、無由至彼、角端能言、書契所無、晉卿何自知之、讀湛然集、晉卿在西域七年、惟及尋思于止耳、未嘗出鐵門

角端の奇談

禿別揚の方に進みたりと云ふ説

也。今讀此西游記、則太祖追算端、惟過大雪山數程、其地應爲北印度、昔卿實未從征、無由備顧問、且願師爲壬午之春、非甲申也、と云へり。この角端の事は、楚材の孫なる宜慰柳溪の詩集、庶齋老學叢談に引けるに、角端呈瑞、移御營、益充問罪、西域平とありて、その自注に、角端、日行萬八千里、能言、曉四夷之語、昔我聖祖皇帝出師、問罪西域、辛巳歲夏、駐蹕鐵門關、先祖中書令奏曰、五月二十日、晚近侍人登山、見異獸、二目如炬、鱗身五色、頂有一角、能人言、此角端也、當於見所、備禮祭之、仍依所言、則吉とありて、宋子貞の耶律公神道碑、元文類卷五十七の文とは、稍異なり。又綴耕錄にも、太祖皇帝駐蹕西印度、忽有大獸、其高數十丈、一角如犀、牛然、能作人語、云「此非帝世界、宜速還、左右皆震懼、耶律文正王進曰、此名角端、乃旄星之精也、聖人在位、則斯獸奉書而至、且能日馳萬八千里、靈異如鬼神、不可犯也、帝即回駁」と云ひて、至正庚寅、江浙の郷試に、角端を賦の題とせることを載せ、又白湛淵先生の續演雅十詩の發揮を引きて、西狩獲白麟、至死意不吐、代北有角端、能通諸國語、者角端北地異獸也、能人言、其高如浮圖、と云へり。然らば、角端の奇談は、元人の評判となるに、宋子貞の誤れるなり。角端は、司馬相如の上林の賦に、角觶とありて、郭璞の説に「角觶音端、角在鼻上」と云へるに據れば、角端と名づけられたる一角獸は、印度の犀牛なるに似たり。又浮圖の如く高しとあるに據れば、西亞細亞の駝豹を指せるにも似たり。いづれにしても、蒙古人の見慣れざる獸にして、洪鈞の曰へる如く、或者當日軍行見此、詫爲異獸、其後展轉傳訛、遂至鋪張符瑞に過ぎざるなり。又多遜の史は、二一九年己卯より一二二二年壬午までの紀年は、正しけれども、別嚙安駐夏の後は、喇失惕に本づきてや、その文を易へ、蒙古人は、信度河の上遊なる不牙客惕沃兒に駐冬し、一二二三年癸未の春、成吉思汗は、印度禿別揚の上

額兒的失の駐夏

長春の歸路

經て蒙古に還らんと欲し、實にその方に進みたれども、路險しくして行き難く、
 珀沙兀兒に回れりと云ひ、餘は集史に同じく、只途上の日數は、集史より一年長
 く、西游記より一年短し、禿別惕通過は、多遜の臆度に出でたりと見ゆるが故に、
 洪鈞曰く、考其自注、未言本自何人、但引元史謂成吉思汗至東印度、角端見、乃班師、
 玩其詞意、蓋爲元史所誤、而二十年正月、還宮、則拉施特與他書所紀年分相同、在途
 歲月過多、無事可敘、乃牽引元史、以意附會、不知元史此說、固不足憑也、多桑著書時、
 元史已有譯本、西游記時尙未譯、故有此誤、と云へり、
 途に額兒的失に駐夏して、
 夏したることは他の書に見えず、こは、必ず出征の初十四年己卯の事を誤りた
 るなり、西游記に據れば、十八年癸未の正月、元日には、長春行在に留まりて、將帥
 醫卜等官の賀を受け、十一日大軍に先だちて發し、二十一日、至一大川、東北去賽
 藍約三程とあるは、塔什肯篤に近き赤兒赤克河の邊なるべし、水草豐茂、可飽牛
 馬に因りて、そこに盤桓したる間に、太祖も至りたれば、二月七日、長春入りて見
 えたり、その時太祖は、朕已東矣、同途可乎と云へるに、長春固く辭みなければ、太祖
 曰く、少俟、三五日太子來、前來道話所有未解者、朕悟即行と云へり、八日太祖東山
 の下に獵して、馬より墜ちたりと聞き、長春入りて獵を諫めたれば、太祖は我蒙
 古人、騎射少所習、未能遽已、雖然、神仙之言在衷焉と云ひて、それより兩月は獵に
 出でざりき、かくて二十四日、再朝を辭し、三月七日又辭し、十日遂に辭し去り、そ
 の年七月雲中に至れり、太祖は猶留まりていつ出發したるか、は記に見えず、親
 征錄には、たゞ甲申、班師、住冬、避暑、且止且行とあり、多遜の史はやゝ委しく、二二
 二四年甲申の春、大軍再動き、昔渾河を渡れり、蔡合台幹歌台は、李合喇の邊に獵
 して來て、あまたの獲物を上れり、拙赤は呼べども至らず、たゞ昔渾河の北より

赤兒赤克河癸未の駐夏

阿勒馬里克甲申の駐夏

額米勒河甲申の駐冬

獸を驅りて行在に向はしめ、圍獵の便に供へたり、その夏、成吉思汗は、喀闐塔失
 の地に駐まりて、遊獵を以て日を送れりとあり、大軍再動き、昔渾河を渡るは、西
 游記に據れば、壬午の冬なり、蔡合台幹歌台の獲物を上れるは、三五日太子來と
 云へる時にて、癸未の二月なり、喀闐塔失は、即塔什肯篤にして、謂はゆる、水草豐
 茂の地は、その近郊なり、太祖は、諫を容れて、兩月獵を罷めたれども、蒙古人の習
 は、遽に已め難く、癸未の夏は、遊獵を以て送りたるなり、さて癸未の駐冬は、いつ
 こなりしか知るべからず、湛然居士集に、從容菴錄の序あり、甲申中元、序於西域
 阿里馬城と云へり、阿里馬は、即阿勒馬里克なれば、耶律楚材は、太祖に從ひ十九
 年甲申七月十五日、阿勒馬里克に居たるなり、また丁亥九月望日に、作れる過夏
 國新安縣の詩ありて、昔年今日度松關の句あり、その原注に、西域陰山有松關と
 云へり、陰山は、即天山なり、松關は、賽喇姆諾兒の西南に在り、西游記に、左右峰巒
 峭拔、松樅陰森、高踰百尺、自巔及麓、何啻萬株と云へる所なり、西域水道記に、賽喇
 木淖爾、當惠遠城正北二百里、在松樹頭嶺下、また果子溝、谷長七十里、北有峻嶺、扼
 之、嶺上多松、名曰松樹頭嶺とありて、松樹頭嶺は、山にして、關に非ざれども、その
 險隘なるに由り、詩には、松關と云へるなり、昔年今日とは、丁亥の三年前なる甲
 申の九月十五日を云へるなり、阿勒馬里克より松樹頭嶺までは、二日路に過ぎ
 ざれば、楚材等の阿勒馬里克を發したるは、早くとも九月望日の三四日前にし
 て、九月上旬までは、阿勒馬里克に留まれるならん、然らば阿勒馬里克は、即甲申
 の駐夏の地なるべし、又多遜の史に、皇孫二人、十一歳なる忽必來、九歳なる忽刺
 古は、額米勒河まで迎へに出で、忽必來は、兔を殺し、忽刺古は、鹿を殺して上れり
 とあり、額米勒河は、今の塔兒巴哈台城の南にあり、西に流れて、阿刺克庫勒の湖
 に入る、その溪は、牧場として、名高し、元史憲宗紀の葉密立地、耶律希亮の傳なる

者別速不台の大軍に追ひ付き

葉密里城は額米勒河の邊なり。西域水道記は、額敏河と書き、額敏者回語清淨平安之謂。音轉爲額密爾と云へり。忽必來は即世祖にて、太祖十年乙亥に生れたれば、十一歳なる時は、二十年乙酉なり。松樹頭嶺より額米勒の地までは、千數日の路程なるに、甲申の九月十五日松樹頭嶺を踰えて、翌年猶額米勒に留れるは、蓋甲申の冬額米勒に駐冬して、翌年の春未だ出發せざるに、二皇孫の至れるならん。又者別速不台の軍は、乞魄察克康克里的地より還り、いづこにて大軍に會せしか、東西の諸史に明文なし。者別は、多遜の史に途にて死にたりと云ひ、曷思麥里の傳にも、軍選哲伯卒とあれば、大軍に會してまもなく歿したるなり。速不台の傳に、西征より還りて後略也。迷里霍只部、獲馬萬匹以獻とあれば、二將は甲申の額米勒駐冬の前に大軍に會したるにて、庚辰の夏速勒壇追討の命を受けたる時、抹古里思壇に會せんと宣へる勅旨に適合せり。但三年の期限は後れたり。かくて太祖は、壬午の冬、失兒河を渡りてより、甲辰の冬、額米勒河に駐まるまで二年の間、徐行したるは、何故ぞ。洪鈞曰く、太祖東歸之時、正哲別速不台入欽察、敗俄羅斯之時、豈因二將暴師於遠故、遲行以俟軍信耶と云へるは、さきもあるべし。

七年に當る雞の年の秋、禿剌河の合喇屯に斡兒朶の處に下馬せり。雞の年は、後堀河天皇嘉祿元年乙酉、宋の理宗寶慶元年、金の哀宗正征錄に、乙酉春、上歸國、自出師至此、凡七年。元史に、二十年乙酉春正月、還行宮、喇失惕は雞の年の春と云ひ、親征錄に同じ。多遜は、一二二五年乙酉春正月、還行宮、喇失惕は、即東曆の正月なり。この春、額米勒を發したりとすれば、元史の正月は早きに過ぎ、祕史の秋は遲きに過ぎたり。親征錄の春に従ふべし。合喇屯、即黒林の斡

乙酉の歸國

四皇子の分封

兒朶は、王罕の舊營なり。多遜は、この處に四皇子分封の事を敘べて、成吉思汗東に歸り、四子の分地を定め、喀喇科嚕姆の山と斡難河の源との間を拖雷に與へ、額米勒河の邊を斡歌台に與へ、昔渾河の東を察合台に與へ、喀思關の海の北關喇自姆の湖、阿喇勒海の周圍を拙赤に與へたりと云ひ、額兒篤曼は、斡歌台の分地を亦米勒孫、噶哩亞の地とし、察合台の分地を委古兒の境より、孛合哩亞まで、蒙古の馬の蹄の跡を任せられたりとし、拖雷は、蒙古の本國を領する外に、帳殿家族國の記録の保管を任せられたりとし、今これを短く言ひ換ふれば、拖雷は、蒙古の地を得、斡歌台は、乃蠻の故地を得、察合台は、西遼の故地を得、拙赤は、關喇自姆、康克里、乞卜察克の地を得たり。祕史の太祖西征の條は、親征錄、元史より委しけれども、敘事の顛倒錯亂多きは、惜むべし。今尙書の(今)考定武成の例に倣ひ、試にその次序を左の如く考へ正せり。

今考定西征之役

兔の年、撒兒塔兀勒の民の處に阿喇亦に依り、越え出馬するに、成吉思合罕は、合屯より忽蘭合屯を伴れ、進み、弟だちより、斡惕赤斤、那顏を大老營に畱守せしめて、出馬せり。途に額兒的失に駐夏して、成吉思合罕は、自兀的喇兒の城に下營せり。かくて成吉思合罕は、龍の年の春、兀都喇兒の

戰の始まり

城を下して兀都喇兒の城より動きて不合兒の城に下營せり。その夏不合兒の城より動きて薛米思加卜の城に下營せり。そこに成吉思合罕は、**巴刺を待たん**。金の寨の嶺なる莎勒壇の避暑處に避暑して者別を先鋒に遣りぬ。者別の後援に速別額台を遣りぬ。速別額台の後援に脱忽察兒を遣りぬ。この三人を遣るに、外面に往きて速勒壇の彼方に出でて我等を到らしめて夾攻めん。と宣ひて遣りぬ。者別はかく往きて罕篋里克の城ごもを経て動さず外面を過ぎけり。その後より速別額台もその理由に依り動さず過ぎけり。その後より脱忽察兒は罕篋里克の傍の城ごもを侵して彼の田禾を掠めき。罕篋里克は城ごもを侵

三將の速勒壇追撃

三將の賞罰

されたりとて背き動きてその後札刺勒丁莎勒壇に合ひけり。成吉思合罕は、者別速別額台二人を甚く恩賞して、者別汝は只兒豁阿歹と云ふ名なりき。台赤兀惕より來て、者別となりたるぞ。汝脱忽察兒は罕篋里克の傍の城ごもを己が心に依り侵して罕篋里克を叛かせたり。法に當て斬らしめん。と云ひ畢へて却て斬らしめず、甚く責めて彼の軍を知るこそより罰ひて下せり。

かくて成吉思合罕は、その年の秋拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちを右手の軍にて阿梅木噠を渡りて兀嚨格赤の城に下營せよと遣りぬ。拖雷をば亦魯亦薛不兒を始ごせる多き城ごもに下營せよと遣りぬ。蛇の年の春拙

三皇子の兀嚨格赤せめ

赤察阿歹斡歌歹三人の子だち奏して遣るには「我等の軍
ごも揃へり。兀囉格赤の城に到れり。誰の言に依り行はん、
我等」奏して遣りたれば成吉思合罕勅あり「斡歌歹の言
に依り行へ」ご宣ひて遣りぬ。

〔又その春成吉思合罕は塔里罕に在して、拖雷の處に使
を遣りぬ。年熱くなりぬ。別の軍ごもは下馬するぞ。汝は、我
等の處に會せよ〕ご宣ひて遣りたれば、拖雷は亦嚕亦薛不
兒等の城ごもを取りて、昔思田の城を破りて、出黑扯噠の
城を破り居る時、使はこの言を致したれば、拖雷は、出黑扯
噠の城を破るご、回り下馬して來て、成吉思合罕に會しぬ。
〔その夏、拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちは、斡囉格赤の

拖雷の凱旋

三皇子の叱られ

城を降して、三人にて城ごもの民を分け合ひて、成吉思合
罕に分前を出さざりき。この三人の子だち下馬して來ぬ
れば成吉思合罕は拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちを咎
めて、三日見えさせざりき。そこに孛斡兒出〔木合黎〕失吉
忽都忽三人奏さく「服はざりし撒兒塔兀勒の民の莎勒壇
を平けて、彼が城ごもの民を取り、我等分けて取らるゝ
斡囉格赤の城も、分け合ひて取る子だちも、都て成吉思合
罕のものなり。皇天后土に力を添へられて、撒兒塔兀勒の
民をかく平けたる時、我等爾のあまたの男驢馬歡びて馬
孩してあり。合罕は、何ぞかく怒りて在せる。子だちは過を
悟りて畏れたるぞ。後を戒めよ。然らずば、子だちは、性行を

又者別那顏速別額台巴阿禿兒二人を北なる康鄰乞卜
 察兀惕巴只吉惕斡速惕馬札喇阿速惕撒速惕薛兒客速
 惕客失米兒孛刺兒客喇勒この十一部落なる外國の民の
 處に到るまで亦的兒札牙黑なる水ある河を渡り乞瓦綿
 客兒綿の城の處に到るまで者別那顏速別額台巴阿禿兒
 二人を出征せさせたり。

〔蛇の年の秋成吉思合罕は塔里罕より南に動きたれば、
 その冬札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人は成吉思合罕の迎
 に出馬せり。成吉思合罕の前に失吉忽禿忽先鋒に行きけ
 り。失吉忽禿忽對陣して札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人
 は失吉忽禿忽を敗りて成吉思合罕の處に到るまで勝ち

札刺勒丁罕蔑里
 克の追ひ捲くら
 れ

て來つるに者別速別額台脱忽察兒三人は札刺勒丁莎
 勒壇罕篋里克二人の後より入りて却て彼等を敗りて殺
 して不合兒薛米思加卜兀荅喇兒の城に彼等を會せしめ
 ず勝ちて申木噠に到るまで追ひて行かれ申木噠に跳込
 みて入るこなり多き撒兒塔兀勒をそこに申木噠の處に
 滅したるぞ。札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人は命を助かり
 て申木噠に浜り逃れたり。成吉思合罕は札刺亦兒の巴刺
 を札刺勒丁莎兒壇罕篋里克二人を追はしめに遣りて馬
 の年の春申木噠に浜り往きて巴惕客先を掠めて去りて、
 〔その夏〕母小河牝馬小河に到りて巴魯安原に下馬してそ
 こに札刺亦兒の巴刺を待ちて居る時巴刺は申木噠を渡

りて、札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人を欣都思の地に到るまで追ひて、札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人を失ひて、欣都思の中に到るまで尋ねて得かねて回りて、欣都思の傍の民を掠めて、多き駱駝多き羯羊を取りて來けり。

荅魯合臣の設け

又撒兒塔兀勒の民を取り畢へて、成吉思合罕あり、城に荅魯合臣を置きて、兀嚨格赤の城より牙刺哇赤馬思忽惕と云へる父子二人、忽魯木石の姓ある撒兒塔兀勒來て、城の緣故體例を成吉思合罕に奏して、緣故に遵ひ知らせと云はれて、その子を馬思忽惕忽魯木石を、我等の荅魯合思と共に不合兒薛米思堅兀嚨格赤兀丹乞思合兒兀哩罕、古先荅哩勒なごの城ごもを知らしめに任して、その父

を牙刺哇赤を伴れ來て、乞塔惕の中都の城を知らしめに伴れ來ぬ。撒兒塔黒の人より牙刺哇赤馬思忽惕二人の、城の體例緣故に通じたるの故に、乞塔惕の民を知らしめに、荅魯合思と共に任したり。

大凱旋

かくて成吉思合罕は、馬の年の秋、巴魯安原より回りて、その冬、薛米思堅に下馬して、羊猴の二年は、駐夏、駐冬して、徐に動きて、者別速別額合二人を待ち合はせ、撒兒塔兀勒の民の處に七年行きて、七年に當る雞の年の秋、秃刺河の合喇屯に斡兒朶の處に下馬せり。

成吉思汗實錄卷の十一終り。

成吉思汗實錄卷の十二

唐兀惕最後の征伐

乙酉丙戌兩説の可否

その冬冬籠して唐兀惕の民の處に出馬せんさて新しき
 數(兵)を數へて、狗の年(我が嘉祿二年丙戌、宋の寶慶二年、金の正大三年、元の太祖二十一年、西紀一二二六年、太祖六十五年)
 時(秋)成吉思合罕は、唐兀惕の民の處に出馬せり。合敦より
 也遂合敦を伴れて往けり。(この出陣を、親征錄集史は乙酉の秋とし、元史本紀は丙戌の正月とし、皆本書と異なり。)
 湛然居士集なる辨邪論の序に「乙酉、南至、彼於瀚海軍之高昌城」とあり。瀚海軍の高昌城は、西游錄に「回鶻城名、別石把、有唐碑、所謂瀚海軍城之南、五百里有和州、即唐之高昌」とありて、畏兀兒に屬する和州の城を唐の名にて呼べるなり。その地は今の哈喇和卓にして、西域水道記に吐魯番の東七十里にありと云ひ、一八七九年にその地に至りし、嚕西亞の博士喇格勒は、名を喀喇古札と書き、秃兒番の東南四十嚕里に在りと云へり。この征夏の役に楚材の從へることは、楚材の

試みの詰問

言を是として、成吉思合罕に奏しければ、成吉思合罕宣はく「唐兀惕の民は、我等を心怯ちて回れり。云はん。我等は、使をまづ遣りて、使をすぐ此の撾斡兒合惕にて試みて、彼の言を察して退かば可からん」と宣ひて、そこに使を命持ちて遣るに「先年不兒罕汝言く我等唐兀惕の民は、爾が右の手ならん」と云ひき。汝にかく云はれて、撒兒塔兀勒の民に協議に入られずして、出馬せん」とて、索めて遣れば、汝不兒罕は、言(東約)に遵はず、軍をも與へず、言にて侵して來てありき。別に向へる時、後に折證せん」とて、撒兒塔兀勒の民の處に出馬して、長生の上帝に祐護せられて、撒兒塔兀勒の民を正路に入らしめて、今不兒罕の處に言を折證せん」とて來ぬ」と云ひて遣りたれ

阿沙敢不の暴言

阿刺篩即ち賀蘭山

額哩合牙即ち中興府

ば、不兒罕言く「侵せる言は、我言はざりき」と云ひき。(太祖十四年軍を興さんが爲に使を遣りて兵を徴したる時の唐兀惕の不兒罕は、夏の神宗李遵頊なりき。十八年癸未遵頊はその子獻宗徳旺に位を遷りたれば、この不兒罕は、即ち)阿沙敢不言く「侵せる言は、我言ひき。今も有らば、汝徳旺なり。」阿沙敢不言く「侵せる言は、我言ひき。今も有らば、汝等忙豁勒は、戰に慣れて戰はん」と云はば、我こそは阿刺篩の山に營盤あり、天幕の家あり、駱駝の馱くるあるなれ。阿刺篩指して、我が處に來よ。そこに戰はん。金銀織物財用ふるあらば、額哩合牙額哩折兀に向へ」と云ひて遣りき。(阿刺篩は、明譯に和郡縣志、賀蘭山、在靈州保靜縣西九十三里。山有樹木、青白如駿馬。北人呼駿爲賀蘭。從首至尾、有像月形。南北約長五百餘里。真邊城之鉅防。河套志、上有廢寺百餘。多元昊故宮遺址。清一統志、賀蘭山在河套以西、與甯夏府邊接界。土人名曰阿拉善山。阿拉善額魯特部和碩親王的領地は、この山の西にありて、その駐牧の處を定遠營と云ふ。蒙古游牧記、嚙西亞の普兒在哇勒思奇は、一八七一年に定遠營の地に至れり。額哩合牙は、明語譯に寧夏とあり。寧夏の城は、元史地理志に寧夏府路唐屬靈州。宋初廢爲鎮。蕃部自唐末有拓拔思恭者、鎮夏州。有銀夏綏宥靜五州之地。宋天禧間、傳至其孫徳明、城懷遠鎮爲興州。以居。後升興慶府。又改中興府。元至元二

十五年置寧夏路總管府領州三とある處にて夏の時は國都となり至元以後は寧夏府路と稱し甘肅行中書省に屬し明の世は寧夏衛と稱し陝西省に屬し今は又甯夏府となり甘肅省の東界の要會なり元史太祖紀四年己巳には中興府二十二年丁亥には夏王城と云へり額哩合牙は蓋中興府の舊き土名にして土人蒙古人は後後までもその名を用ひたるならん明譯に寧夏としたるは至元以後の名に改めたるなり馬兒科保羅の紀行に額兒傀兀勒より東に八日馬行して額固哩噶牙の州に至る屬する市邑多く首府を喀刺昌と云ふその民は駱駝の毛より世界にて最も美しき緞子を夥しく織出すと云ひ多遜は喇失惕に據りて唐古惕の王失迭兒古の都亦兒該を蒙古人は亦兒喀牙と云ふと云へり保羅の額固哩噶牙も喇失惕の亦兒喀牙も蒙古源流に屢見えたる亦兒該も皆即ち本書の額哩合牙なり喀刺昌は即阿拉善即賀刺山にて賀蘭山の麓にある故にその城をもしか云ひしならん裕勒は保羅の額固哩噶牙喇失惕の亦兒喀牙を迭邁刺即元史の兀刺海に當てて喇失惕の亦兒喀牙を都と云へるを誤れりとし隨て克刺魄囉惕のそれを甯夏に當てたるを非なりとし額固哩噶牙は今の阿拉善親王の地に於てその都喀刺昌は今の定遠營ならんと云へるは甚じき誤なり又曷思麥里の傳に會帝親征河西曷思麥里云云命常居左右至也吉里海牙又討平失的兒威とある也吉里海牙は即額哩合牙にて保羅の額固哩噶牙に最も音近し失的兒威は即喇失惕の失迭兒古にて威は忽の字などの誤なり額哩折兀は明譯に西涼とあり西涼の城は元史地理志に永昌路唐涼州宋初爲西涼府景德中陷入西夏元初仍爲西涼府至元十五年以永昌王諸王只必帖木兒宮殿所在立永昌路降西涼府爲州隸焉とある處にて至元以後は永昌路西涼州と稱して甘肅行中書省に屬し明は陝西涼州衛となり今は甘肅涼州府となり

額哩折兀即ち西涼府

阿刺篩の戰

れり今の平涼府とは異なりその永昌路治のありし所は明に陝西永昌衛となり今は甘肅涼州府永昌縣となり涼州府治武威縣の西北百六十清里に在り馬兒科保羅の紀行に曰く甘肅出即甘州より出でて東に五日旅すれば額兒傀兀勒と云ふ王國に至るそれは唐古惕の大州をなせるあまたの王國の一つなり額兒傀兀勒は即額哩折兀なり甘州より五日路にして甯夏までは八日馬行せりと云へば今の涼州府の位置にほゞ合へり保塞兒は永昌にあてて永昌王の地なるが故に王國と云へるならんと云ひたれども馬兒科の王國は額兒傀兀勒に限りて云ひたるにもあらざれば王國の字は拘るにも及ぶまじ額兒傀兀勒は太祖南征の時の額哩折兀にして永昌王の住まざりし前よりあこの處なれば永昌路治にはあらずして宋夏元初の西涼府なるべしこの言を成吉思合罕に致したれば成吉思合罕は膚熱りてあるに宣はく罷めんその事を(罷むべし)かゝる大言を言はせて、いかんぞ退かれん死ぬとも大言に靠りて行かん三宣ひて、長生の上帝爾知しめせとて成吉思合罕は阿刺篩指して到りて阿沙敢不と戰ひて阿沙敢不を敗りて阿刺篩の上に楯籠らせて阿沙敢不を捕へて天幕の房ある駱駝の馱くるあ

帖兒籠

帖籠延

る彼の民を灰の如く刮拂ふまで虜へさせたり。雄雄しく猛
き男風好き唐兀都惕(唐兀惕の複稱)を殺して、かくしかく唐兀都惕
を軍の人拏へたるに依り得たるに依り取れと勅ありき。

雪山の駐夏

成吉思合罕は、雪ある山(雪山)の上に駐夏して、阿沙敢不と共に
山に上りたる抗ひたる天幕(天幕)の房ある駱駝(駱駝)の馱たくるある唐
兀都惕を軍を遣りて算へたるに依り盡つくるまで虜へさせ

黒水城の所在

たり。雪あるは蒙語察速禿の譯なり。明譯に雪山とあるに由り、施世杰は甘肅
處處にあり、又察速禿は漢名の雪山を譯したりとも限られざれば、山の所在は
確ならず。但本文前後の續きに依りて考ふれば、賀蘭山龍頭山の羣峯の内なる
に似たり。太祖紀二十一年正月親征の續に、二月取黒水等城、夏避暑於渾垂山、取
甘肅等州とあり。蒙古游牧記に、肅州境有黒水、其一即張掖河、別名黒河、其一黒
水、在州西北一百二十里、源出黒水泉、合清水、東流入討來河、下流與張掖河合、と云
ひ、その張掖河即黒河は、北流五百清里、額濟納の地に至り、額濟納河と云ひ、未は
居延海に入る。額濟納は、元史地理志の亦集乃路、馬兒科保羅の額次納城、今の額
濟納舊土爾扈特部の牧地にして、西夏にてはそこに威福軍を置きたり。黒水等

元勳の恩賞

城は、その威福軍の界内の地なるべし。耶律希亮の傳に、潛匿甘州北黒水東沙陀
中とある。黒水も甘州の北なり。渾垂山は、西夏書事に、在肅州北とあれば、秘史
の雪山駐夏とは説異なるに似たり。そのそれより、李幹兒出木合黎
是非は知らざれども、強ひて牽合せ難し。それより、李幹兒出木合黎
二人に恩賜するに、力に知るまで取れと勅ありき。元史の紀傳
合黎は、今より三年前、太祖十八年に薨じたり。こゝに出また成吉思合罕勅
したるは非なり。もしくは木合黎の遺族の誤りならん。又成吉思合罕勅
あるには、李幹兒出木合黎二人に恩賞を與ふるに、乞塔惕の
民より與へざりきとて、乞塔惕の民の主因(主因)を汝等二人均し
く分け合ひて取れ。彼等の好き子とどもを鷹を執らせて隨へ
て行け。彼等の好き女とどもを育ひて、妻とどもを襟整へさせよ。
乞塔惕の民の阿勒壇罕の信任せる寵臣は、忙豁勒の祖なる
父君を失ひたる合喇乞塔惕主因の民にてありしぞ。今我が
信任する寵臣は、李幹兒出木合黎汝等二人なるぞと勅あり

き。(卷一なる俺巴孩合罕を撃へたる塔塔兒の主因の民は塔塔兒諸部の中の猛なる軍とあるを見れば主因は契丹女真と並べ稱せらるゝ大部族なるが如し。今こゝに也速該を殺せる塔塔兒の民を合喇乞塔惕主因の民と云ひ又乞塔惕の民の主因とも云へるに、この伴侶となり塔塔兒亡びて後は金に事へてその親軍となりたるならん。契丹の別部なるが故に合喇乞塔惕主因の民と云ひ、塔塔兒の地に住みてその伴侶となれる故に塔塔兒の主因の民と云ひ、金を事へたる故に乞塔惕の民の主因と云へり。輟耕錄に蒙古七十二種色目三十一種を擧げたる後に漢人八種と云ひて契丹高麗女直竹因歹朮里闊歹竹溫歹竹亦歹渤海を擧げたり。鎮海の傳に征伐したる諸國を擧げたる中に只溫あるにつきて錢大昕の考異に輟耕錄の竹溫歹は疑はくは即只溫ならんと云ひ又李文田は輟耕錄の竹因は即主因の對音なりと云へり。今考ふるに輟耕錄の氏族は、蒙古にも色目にも重複せるものあれば竹因歹竹溫歹も一種の重複したるにて、即主因の只溫又即)。

成吉思合罕は、察速禿(雪あ)より動きて、兀喇孩の城に下營

して、兀喇孩の城より動きて、朶兒篋該の城を破りて在せる

時、不兒罕は成吉思合罕に見えに來ぬ。(兀喇孩は親征錄元史太祖

不兒罕の來降

兀喇孩即ち阿喇克城

元史四年己巳の條に兀刺海城とあり。地理志甘肅等處行中書省七路二州の末に兀刺海路ありてその建置沿革は闕けたれども原注に太祖四年由黑水城北兀刺海西關口入河西獲西夏將高令公克兀刺海城とあれば甘肅等州の東にあることだけは推し量らる。喇失惕の額哩喀又額兒刺喀額兒篤曼の讀みたる阿嚕克奇は即兀喇孩にして國都なる亦兒該また亦兒喀牙と異なり。然るに裕勒は迭邁刺(即元史)の兀刺海を馬兒科の額固哩嚕牙寧夏に當てたるは誤なり。又克刺魄羅惕は庫ト來時代の亞細亞の地圖に兀刺孩を寧夏の北なる黄河の大口の邊に書き入れたれども何に據りたるにや。蒙古游牧記阿拉善額魯特部の條に康熙年中兵部督捕理事官拉都琥の奏を引きて龍頭山蒙古謂之阿拉克鄂拉乃甘州城北東大山脈縣延邊境山口即邊關建夏口城距湫川堡五里。山盡爲甯遠堡距龍頭山許有昌甯湖界之。又清一統志に龍首山在旌西南與甘州府山丹縣接界蒙古名阿喇克鄂拉縣互廣遠東大山之脈絡也。距甘州城三十里とあり。施世杰はこれに據りて兀刺孩即阿喇克鄂拉之對音。元太祖由今張掖縣起程東攻靈州定須踰此山也。是兀刺孩城必在今阿喇克鄂拉之中矣と云ひ高寶銓は今山口即邊關建夏口城疑兀刺孩城即在其次處と云へり。阿喇克鄂拉は即阿喇克の山なれば阿喇克の音は兀喇孩また阿嚕克奇にやゝ似たり。朶兒篋該は明譯に靈州とあり。靈州の城は元史地理志寧夏府路の下に靈州唐爲靈州又爲靈武郡宋初陷於夏國改爲翔慶軍とあり。明の陝西寧夏衛靈州所はそのやゝ東北に移り、今は甘肅甯夏府靈州となりたれば夏の靈州の遺趾は今の靈州の西南に在り。蒙古源流に圖爾墨格依城とあるは即朶兒篋該なり。喇失惕の迭兒薛孩は篋を薛と誤れり。こゝの不兒罕は前に見えたる獻宗德旺に非ず。德旺の弟清平郡王の子末帝現なり。續通鑑綱目丙戌寶慶二年(太祖二十一年)の條に蒙古主入夏城

朶兒篋該即ち靈州

元史の征夏の師

甘州

邑多降。七月、夏主德旺憂悸而卒。國人立現。元史太祖紀には二十二年丁亥六月夏主李現降とあり。太祖紀二十一年夏、避暑渾垂山の續きに曰く取甘肅等州。秋取西涼府、擲羅河、羅等縣、遂踰沙陀、至黃河九渡、取應里等縣。冬十一月庚申、帝攻靈州。十二年丁亥春、帝畱兵攻夏王城。自率師渡河、攻積石州。二月、破臨洮府。三月、破洮河西寧二州。夏四月、帝次龍德、拔德順等州。德順節度使愛申進士馬肩龍死焉。これらの征戰の路順を考ふるに、まづ甘州は馬兒科保羅の甘肅州府なり。肅州は馬兒科保羅の甘肅行省甘州路明の陝西甘州衛、今の甘肅甘州府なり。肅州は馬兒科保羅の速克出、喇失惕の昔出、元の甘肅肅州路明の陝西肅州衛、今の甘肅肅州なり。この二州は甘州東にありて、肅州西にあれば、蒙古の軍はまづ肅州を取りて、次に甘州を取りたり。肅州の西に沙州あり、夏國の西端なり。この役に察罕の父にして、その副將に殺されたること、察罕の傳に見ゆ。西涼府は前に注せり。西涼の圍みに拈合、重山の指揮したること、重山の傳に見ゆ。擲羅河羅は、夏人の置きたる西涼府の屬縣なるべし。元には無し。沙陀は、沙漠なり。涼州より直に甯夏に赴くには、必ず沙漠を渉る。黃河九渡は、河源附録にある上流の九渡に非ず。應里縣の南にて、河流いくつにも分れたる故に、九渡と云ふ。應里縣は、元史地理志寧夏府路の下に、應里州、與蘭州接壤、東阻大河、西據沙山とあり。河源附録に、至蘭州過北下渡、至

沙州

鳴沙河、過應吉里州、正東行至寧夏府、南耶律希亮の傳に、自靈武過應吉里城、至西涼甘州とある。應吉里も、即應理なり。應理は、夏の時縣なりしが、元の世に州となり、明は陝西寧夏中衛となり、今は甘肅甯夏府中衛縣となり。靈州は、即柔兒篋該、前に注せり。靈州を下せる時、諸將は子女金帛を貪れる中に、耶律楚材は藥材

黃河九渡

應里縣

を收めて、後に士卒の疫を愈やしたること、楚材の碑と傳とに見ゆ。鹽州は、唐以來の州にして、元廢せり。故城は今の靈州の東南に在り。鹽州川とは、清水河の河邊を云ふ。夏王城は、即中興府、今の甯夏なり。積石州は、金史地理志臨洮路の下にあり。本宋積石軍溪哥城、大定二十二年爲州と云ひ。河源附録に、上流より下りて、至貴德州、地名必赤里、始有州治、官府又四五日至積石州、即禹貢積石。五日至河州、安鄉關と云へり。故城は今の甘肅蘭州府河州の西に在り。これより下太祖の過

鹽州

ざたる所は、大抵金の地なり。臨洮府は、宋の熙州、金元明の臨洮府、今の甘肅蘭州府狄道州なり。洮河西寧は、二州にあらず。三州なり。皆金の臨洮路にして、今は甘肅の地なり。洮州の故城は、今の鞏昌府洮州廳の西南七十清里に在り。河州は、今肅州府に屬せり。西寧州は、今西甯府となり。龍德は、即金の鳳翔路德順州、隆德縣、今は甘肅平涼府の屬縣なり。德順州の故城は、平涼府靜甯州の東に在り。積石

積石州

河州、臨洮、德順にて、按竺邇の功ありしこと、按竺邇の傳に見ゆ。臨洮、德順の戰は、金史哀宗紀正大四年三月、大元兵平德順府、節度使愛申、攝府判馬肩龍死之。夏五月、大元兵平臨洮府、總管陀滿胡土門死之とありて、德順の拔けたるは前にあり。臨洮の破れたるは後にあり。陀滿胡土門、愛申、馬肩龍の事は、金史忠義傳に詳か

臨洮府

隆德縣

德順州

幣于金とあるは、全く聲文なり。この年南京の圍まれたること、無ければ、太宗紀に見えず。窩闊台、察罕は、この時太祖に従ひて、遠く離れたること、無ければ、太宗紀にも、察罕の傳に記したるか。又唐慶の使せることは、翌年五月にあり。唐慶の傳に

南京の圍唐慶の使の誤

集史の記事

も、歲丁亥、賜虎符、授龍虎衛上將軍、使金とありて、甲戌に使せることなし。これは、元史の持病なる例の重複なり。喇失惕曰く、蒙古の軍、唐古惕に入り、喀米出、昔出

不兒罕の獻上物

略出額哩略を取り、迭兒薛孩を圍みたる時、合申の君失迭兒古は、五十營の兵を率ゐて援ひに來ぬ。成吉思汗は軍を移して往き迎へ、黃河の支流の氷の上の戦ひ、矢に虚發なく、合申の兵夥しく死し、失迭兒古は都に逃げ歸れり。成吉思汗は、かれの弱れるを見て、その都を過ぎ去りて他の城を攻め下し、遂に乞台の地に入りき。略出は、瓜州にして、肅州と沙州との間にあり。瓜州は、今の甘肅安西州治、沙州は、安西州敦煌縣なり。靈州の戦に李覲自出でたるは、元史の嵬名令公と説異なり。又察罕の傳に、進攻靈州、夏人以十萬眾赴援、帝親與戰、大敗之とあるは、兵數の多きこと集史に似たり。乞台の地に入るは、臨洮路の諸城を取れることを云へ。そこに不兒罕見ゆるに、黄金の佛を首として、金銀の器皿九つ九つ、男兒女兒九つ九つ、騾馬駱駝九つ九つ、種種にて九つ九つを表して見ゆる時、不兒罕を門暗く（門をあけ）見えさせたり。（明令門外行禮と云ふことなり。蒙古人は九の數を尙ぶゆゑに、贈物にも九を用ふとは、阿不勒騰資の書にも見えたるが、元史にも、遼王耶律留哥の寡婦姚里氏の太祖に謁したる時、人馬金幣みな九つづつ賜はれることを載せ、また高麗史金就礪の傳にも、蒙古の元帥哈真より高麗の趙冲、金就礪二將に少女九人づつ、駿馬九匹づつを遣れることを載せたり。今譯者のこゝに姚里氏の美談を引くことを許してよ。耶律留哥の傳に曰く、庚辰、太祖十五年、留哥卒、妻姚里氏入奏、會帝征西域、皇太弟幹惕赤斤承制、以姚里氏佩虎符、權領其眾

九を尙ぶ蒙古の俗

者七年、丙戌、太祖二十一年、姚里氏攜次子善哥、鐵哥、永安及從子塔塔兒、孫收國奴、見帝于河西、阿里湫城、平涼府、帝曰、健鷹飛不到之地、爾婦人乃能來耶、賜之酒、慰勞甚至、姚里氏奏曰、留哥既沒、官民乏主、其長子薛閣、扈從有年、願以次子善哥代之、使歸襲爵、帝曰、薛閣舍爲蒙古人矣、其從朕之征西域也、回回圍太子、拙赤於合迷城、薛閣引千軍救出之、身中槩、又於蒲華、掃思干城、與回格戰、傷於流矢、以是積功、爲拔都魯、不可遺當、令善哥襲其父爵、姚里氏拜且泣曰、薛閣者、留哥前妻所出、嫡子也、宜立、善哥者、婢子所出、若立之、是私己而蔑天倫、婢子竊以爲不可、帝歎其賢、給驛騎四十、從征河西、賜河西俘人九口、馬九匹、白金九錠、幣器皆以爲九計、許以薛閣襲爵、而留哥善哥塔塔兒、收國奴於朝、惟遣其季子永安、從姚里氏東歸、阿里湫は、祕史の額哩折兀、馬兒科保羅の額兒、傀兀勒にて、卽夏の平涼府なり。回回圍太子於合迷城、は、西征の役の始まりに、蒙古の兵、篋兒乞惕の餘眾を逐へるもの、合赤河の邊にて、闊喇自姆の兵と衝突せる戰、多遜の史を指せるに似たり。又蒙古人の九を尙ぶ白を尙ぶ風俗は、後世までも變はらずと見えて、蒙古游牧記に、崇徳三年、略爾喀三汗、竝遣使來朝、各貢白馬八、白駝一、謂之九白之貢、歲以爲常とあり。かく見ゆる時、成吉思合罕は、心惡かりき。第三の日に、成吉思合罕勅あり、亦魯忽不兒罕に、失都兒忽の名を賜ひて、亦魯忽不兒罕失都兒忽に來られて、そこに成吉思合罕は、亦魯忽を逝なせん（死な）とて、脫命扯兒必に手に掛けて逝なせよと勅あり。

不兒罕の殺され

脱命の恩賞

りき。そこに脱命扯兒必は亦魯忽を手に掛けて事畢へたり」
 と奏しければ成吉思合罕勅あるに「唐兀惕の民の處に言を
 折證せんご來つるに、路にて阿兒不合の野馬を圍獵したれ
 ば、痛めたる我が膚を痊やせごて、我が命體を愛みて、言を陳
 べたるは、脱命なるぞ。對手の人のなめしき言の處に來て、長
 生の上帝に力を添へられて、手に入れて、怨を報いたるぞ、我
 等亦魯忽の此の持ち來つる、起てたる行宮は、器皿ごめに脱
 命取れ」と勅ありき。（亦魯忽は、李峴の國語の名にして、安全の國語の名に
 同し。蒙古にも色目にも、同じ名の人多し。失都兒忽は、
 蒙語正直の義なり。唐古惕人の正直ならざるを辱めんが爲に、わざと正直と云
 ふ名を賜へるなるべし。喇失惕の額兒篤曼の譯せる失迭兒古蒙古源流の錫都
 爾郭は、皆この賜はれる名を以て記したるなり。親征錄に李安全を失都兒忽と
 書けるは、安全の國語の名亦魯忽は、李峴と同じきを失都兒忽の名同じと思ひ
 誤れる。）

失都兒忽

唐兀惕の殲滅

太祖の昇遐

唐兀惕の民を虜へて、亦魯忽不兒罕を失都兒忽ごなして、
 彼を片附けて、唐兀惕の民の母父を子孫の子孫に至るまで
 木忽里木思忽里を無くなし、食物を食ふ間に、木忽里木思忽
 里無しごて、死なしめ滅せりご言ひ居れご勅ありき。（木忽里
 里無しは、予遺無しなど云ふ意ならん）唐兀惕の民は、言を言ひて、言
 と思はるれども譯すること能はず。（唐兀惕の民は、言を言ひて、言
 に違はざる故に、唐兀惕の民の處に成吉思合罕は二たび出
 征して、唐兀惕の民を窮めて來て、猪の年（後堀河天皇安貞元年丁
 酉の哀宗正大四年、元の太祖二十二年）成吉思合罕は、上天に昇り給ひ
 ぬ。昇り給へる後、也遂合敦に唐兀惕の民より「分民を多く與
 へたり。」（親征錄は、甚簡略にして、乙酉歸國の年、是夏避暑、秋復總兵征西夏、丙
 戌春至西夏、一歲間盡克其城、時上年六十五矣。丁亥滅其國以還、と云
 へるのみなり。元史には、二十二年丁亥四月、德順の戰の次に、五月、遣唐慶等使金。
 閏月、避暑六盤山、六月、金遣完顏合周、奧屯阿虎來請和。帝謂羣臣曰、朕自去冬、五星

六盤山

清水縣

薩里川哈老徒の
行宮

集史の記事

聚時已嘗許不殺掠遽忘下詔耶。今可布告中外令彼行人亦知朕意。是月夏主李璣降。帝次清水縣西江。秋七月壬午不豫。己丑崩于薩里川哈老徒之行宮。六盤山は甘肅平涼府隆德縣の東二十清里平涼府固原州の西南三十清里に在り。方輿紀要に曲折險峻盤旋有六が故に名づく。と云ひその上に六盤關ありて隆徳と固原との界をなせり。喇失惕は主兒只(女直)即金南乞牙思南朝即宋(河)西即夏三國の界なり。と云へども三國の界に非ず。金夏二國の界なり。清水縣は金の鳳翔路秦州の屬縣今の甘肅秦州の屬縣にして隆徳縣の南隣なり。西江は地圖に見えざる小河なり。六盤山を遠くは離れざるべし。金史愛申の傳に「正大四年春大兵西來擬以徳順爲坐夏之所」とあるは六盤山に暑を避けんとするを云ふ。按竺邇の傳に「駐兵秦川」とあるは西江に駐まれるを云ふ。薩里川は卷四以來屢見たる撒阿里客額兒なり。哈老徒は今の噶老台泊の邊ならん。行宮は斡兒台嶺噶老台河噶老台泊あり。行宮のありしは噶老台泊の邊ならん。行宮は斡兒台嶺の譯語にして行幸さきの宮殿にあらず。行動自在の宮殿なり。集史別喇津の時諸子の内側に居たるは也松格兒拙赤合撒兒の子のみなり。と云へり。次に「このいづくにか居る。遠ざかれるか」と問へば「只二三里離れた」と申し。呼び寄せて次の朝諸將侍從を退けて諸子に向ひ我が命終らんとする時至れり。われ汝等の爲にこの大業を肇め東西にても南北にてもはてよりはてまで一年の路程あり。我が遺言はたゞ汝等敵を禦ぎ民を保ちて永く祚を享けんには必ず眾人の心を一つに合はせよとなり。我が死にたる後は汝等斡歌台を君に戴け。また汝等は各歸りて事を治むべし。われこの大名を享けたれば死ぬとも憾なし。

元史姚天福の傳に古謎を引きて一蛇九尾首動尾隨一蛇二首不能寸進とあり

太祖の崩じたる地

われは故土に歸らん(葬られん)ことを望む。察合台は側に居ざれども我が遺言に背きて亂を起すには至るまじと云へり。額兒篤曼は太祖の遺言として眾人一心の譬に東箭の談と多頭蛇の談とを引けり。東箭の談は秘史の阿闐豁阿の教訓に同じ。多頭蛇の談はある寒き夜穴を索めたるに多頭蛇の頭ども互に争ひて遂に凍え死に。一頭多尾の蛇は安らかに穴に隠れきと云へるなり。集史の續きに遺言畢りて諸子を出し遣り自ら兵を率ゐて南乞牙思(南朝)に入りたれば至る所皆迎へ降れり。とあり。この年蒙古の遊兵は金の鳳翔京兆に入り。又南は關外の諸隘を破りて宋の武州階州に入りたれども太祖自ら宋の地を踏みたることなし。又續きに六盤山に至れば主兒只聞きて使を遣り眞珠を山盛にして贈れり。と云へるは金史元史の議和使完顔合周等にしてこの年六月の事なり。また失迭兒古は力竭きて使を以て降服を願ひたれば成吉思汗はその請を允し。また貢物を備へ民戸を遷さんが爲に一月の猶豫を得て自ら來朝せんと云へるをも允し。かつ今われ病あれば暫くくるなと告げて脱命扯兒必を遣りて失迭兒古を慰撫せり。成吉思汗はこれより病日に重く今はのきはに大臣に告ぐるに「われ死なば喪を發せず。敵に知れざらしめ。合申の君のこんを待ちて殺せ」と云ひ八月十五日に死にたり。諸將は遺命に遵ひて喪を秘し。合申の君朝謁に來つるを執へ殺し。密に柩を奉じて老營に歸り。然る後に喪を發せり。と云へり。脱命扯兒必の役目は秘史と稍異なり。又察罕の傳に「還次六盤山。夏主堅守中興。帝遣察罕入城諭以禍福。眾方議降。會帝崩。諸將擒夏主殺之。復議屠中興。察罕力諫止之。馳入安集遣民」とあるは秘史とも集史とも事情異なり。察罕を褒め過ぎたるに似たり。太祖の崩じたる地は陳桎の通鑑續編に六盤山とし。集史と察罕の傳とに合へり。蒙古源流に「青吉斯汗以丁亥年七月十二日歿於圖爾墨格

依城年六十六とある七月十二日は即元史の己丑、圖爾墨格依は即秘史の朶兒
 篋該、即靈州なり。靈州としても秦州としても、つまり六盤山より遠くは離れず。
 然るを元史に薩里川と書けるは、喪を秘して老營に歸りて後にしか發表した
 りしならん。七月五日壬午秦州にて病作り、それより僅に七日を経たる十二日
 己丑に蒙古にて崩すは、有られざるに從ひ、蒙古に崩じたりとしながら、その日附
 實錄などは當時發表したる布告に從ひ、蒙古に崩じたりとしながら、その日附
 は、發表したる日を用ひず、漢地に崩じたる眞の忌日を録したるならん。太祖二
 十二年丁亥の七月十二日己丑は、主里安曆の一二二七年八月廿五日なれば、集
 史の譯文に八月十五日とあるに合はず。佐久間信恭曰く十五日は、必廿五日の
 誤寫ならん。太祖紀に曰く臨崩謂左右曰金之精兵在潼關南據連山北限大河難
 以遽破若假道于宋宋金世讎必能許我則下兵唐鄧直擣大梁金急必徵兵潼關然
 以數萬之眾千里赴援人馬疲弊雖至弗能戰破之必矣言訖而崩壽六十六葬起輦
 谷西史に載せたる太祖の遺言は諸子を訓ふる辭と喪を秘することとのみに
 して南伐の謀に及ばず、黑韃事略徐霆の疏證に王楸の言を引きて某向隨成吉
 思攻西夏西夏國俗自其主以下皆敬事國師凡有女子必先以薦國師而後適人成
 吉思既滅其國先斿國師國師者比丘僧也其後隨成吉思攻金國鳳翔府城破而成
 吉思死嗣主兀窟解含哀云金國守潼關黃河卒未可破我思量鳳翔通西川西川
 投南必有路可通黃河後來遂自西川進遷入金房出汝光徑造黃河之裏竟滅金國
 とあり兀窟解は即太宗幹歌歹なりこの言に據れば西南の路より汴京に逼る
 の謀は太祖より出でずして太宗より出でたるに似たり起輦谷の所在は確な
 らず黑韃事略に其墓無塚以馬踐蹂使平如平地若武沒眞之墓則挿矢以爲垣原
 注闕隘三十里邏騎以爲衛徐霆の疏證に霆見武沒眞之墓在瀘溝河之側山水環

太祖臨終の言

起輦谷の所在

繞相傳云武沒眞生於此故死葬於此未可知果否瀘溝河の溝の字洪鈞引きて渚の
 字とし羅豐祿の藏本には局の字とせりいづれにしても客嚕倫河なり帖木真
 そこに生れたりと云へるは傳聞の誤なり馬兒科保羅の紀行にあらゆる大汗
 太祖成吉思のありと云へる子孫は阿勒泰と云ふ山に運びて葬らる汗はいづこに
 死ぬとも死にたる所は百日路隔たりとも必ず先祖の居るその山の昔別哩亞
 ばるとあり阿勒泰と云へるは誤れり大佐裕勒はこの阿勒泰を今の昔別哩亞
 界の大山脈に非ず兀兒嘴に近き汗譯刺即汗山ならんと云ひたれども汗山と
 しても客嚕倫河より隔たれり喇失惕曰く成吉思汗は不兒勒略勒敦神の山即
 也客庫嚕克天靈地また大禁地と云ふ所に葬られきまた曰く嘗て獵に出でて
 樹の下にたくすみその樹を愛してわれ死なばこゝに葬れと云へることあり
 しにより遂にそこに葬れりその樹は著しかりしが後にまはりの樹木速に生
 ひ立ち茂き林は地を蔽ひて墓のありか分らなくなり葬りを送りたる人にて
 も識ること能はざりき禿里汗曼古汗庫必來汗阿里不略は皆こゝに葬られ他
 の子孫は別の所に葬らる墓守は兀喰乞惕千人なりと云へり不兒勒略勒敦は
 今の肯特山にして即客嚕倫河の源なり元史本紀に據れば憲宗紀に葬地を脱
 したる外寧宗までの諸帝みな葬起輦谷とあり又明の葉子奇の草木子に曰く
 一歷代送終之禮元朝宮裏用梳木二片鑿空其中類人形大小合爲棺置遺體其中加
 髮漆畢則以黃金爲圈三圈定送至其直北園寢之地深埋之國制不起墳壙葬畢以
 萬馬蹂之使平殺駝子其上以千騎守之來歲春草鳴既生則移帳散去彌望平衍人
 莫知也欲祭時則以所殺駝之母爲導視其躑躅悲鳴之處則知葬所矣駝の說
 は信じ難けれども葬埋の制を云へる所は黑韃事略の以馬踐蹂喇失惕の茂林
 蔽地と參考すべしまた蒙古源流に曰く以輦奉柩至穆納之淖爾處所車輪挺然

太祖紀の末段

不動。蘇尼特之吉爾根巴圖爾鄂嫩の德里袞布勒塔克、克嚕倫等地を歷舉して、謂、「汗何戀唐古特、反將昔日屬眾蒙古等棄擲。言畢、柩因徐轉動、遂至所卜久安之地。因不能請出金身、遂造長陵、共仰庇護於彼處。立白屋八間、在阿勒坦山陰、哈岱山陽、之大譌特克地方、建立陵寢、號爲索多博克達大明青吉斯汗源流の原文を獨逸文に譯せるの施米惕の撒難薛禪には、その久安の地を阿勒泰汗の陰と肯帖依汗の陽との間の也客兀帖克の地方と譯せり。この汗は山の義にして、肯帖依汗は、即肯特山なれば、この阿勒泰山は、肯特山より分れ出でて、客嚕倫河の源を挾める一峯の名なるべし。馬兒科保羅の阿勒泰も、この山の事を聞き傳へたるにやあらん。諸書を合せ考ふるに、起輦谷は、客嚕倫河の源肯特山の陽に在りて、撒阿里原の幹兒朶より遠くは離れざるべし。今太祖の實錄全く終り、太宗の事に移らんとするに臨み、こゝに太祖紀の末段を引かす。至元三年冬十月、追諡聖武皇帝。至大二年冬十一月庚辰、加諡法天啓運聖武皇帝、廟號太祖。在位二十二年。帝深沈有大略、用兵如神。故能滅國四十、遂平西夏。其奇勳偉跡甚眾、惜乎當時史官不備、或多失於紀載。云、謂はゆる滅國四十は、いかに數へたるかを知らざれども、試に數へ見ん。こゝに國と云へるは、王國のみに非ず、部落をも指せるならん。滅と云へるは、撃ち滅されたるのみならず、撃たれて降りたるもの、自ら服屬したるものをも込めたるならん。まづ蒙古の別部にて滅されたるは、主兒勤、合塔斤、撒勒只兀惕、朶兒別惕、泰赤兀惕、札只喇惕の六部なり。蒙古の外にて滅され又は降りたるは、塔塔兒四部、篋兒乞惕三部、客喇亦惕部、乃蠻二部、乃蠻の古出魯克罕の據れる合喇乞塔惕、豁哩秃馬惕、撒兒塔兀勒、即關喇自姆沙の領地、康鄰、即康克新、薛兒客速惕、即徹兒客思、孛刺兒、即不勒噶兒の二十部にして、前の六部と合

滅國四十

せて二十六部なり。自ら服屬したるものは、亦乞喇思、翁吉喇惕、豁囉刺思、幹赤喇惕、汪古惕、委兀惕、合兒魯兀惕、七部の外に、不哩牙惕、巴兒渾、即巴兒古惕、兀兒速惕、合ト合納思、乞兒吉速惕、失必兒客思、的音、即客思、的米帖良古惕、即帖連郭惕、脫幹列思、即秃刺思、なる九部の林の民あり。前の二十六部と合せて四十二部となる。林の民は、この外にも、康合思、秃巴思、巴亦惕、秃合思、塔思などありて、いづれも服屬せり。されども、林の民は、皆小き部落にして、不哩牙惕、巴兒古惕、乞兒吉速惕、などの外は、一部として數ふるに足らざるに似たり。この外に、阿勒馬里克の君、幹咱兒は、秘史には見えざれども、これも服屬せる部落の内なるべし。欣都思、惕幹瞻思、惕の國にも、蒙古の兵入りたれども、荒したるのみなり。金の地は、已に十分の七八を取りたれども、滅せる數には入らざらん。つまり元史の四十と云へる數は、大概を示せる辭なるべし。明の史臣は、奇勳偉跡の記載に漏れたるを惜み、たれども、幸に蒙文秘史の世に存して、本紀に數十倍する實錄詳傳を知るを得たれば、史家はこゝに満足すべし。

太宗の即位

巴秃

鼠の年（我が安貞二年戊子、宋の理宗紹定元年金の正大）、察阿歹巴秃を首（都忙哥撒兒の傳に宗王八都罕とあり、世系表に拔都大王を朮赤太子の長子とすれども、多遜の系圖に據れば、朮赤の第二子にして、幹兒朶の弟なり。太宗紀八年の處に、幹魯朶拔都とあるは、即幹兒朶巴秃なり。朮赤は太祖より先に）、幹惕赤斤那顔也古也孫格を首（都忙哥撒兒の傳に宗王八都罕とあり、世系表に拔都大王を朮赤太子の長子とすれども、多遜の系圖に據れば、朮赤の第二子にして、幹兒朶の弟なり。太宗紀八年の處に、幹魯朶拔都とあるは、即幹兒朶巴秃なり。朮赤は太祖より先に）せり。

左手の諸王、(太祖の第四人の封地は、皆東方に在り也古)拖雷を首とせり内地の諸王公主駙馬萬戶千戶の官人等眾となりて、客魯噠の闊迭兀阿喇勒に咸く聚りて、成吉思合罕の名ざし給へるその勅に依り、幹歌歹合罕を罕に戴けり。(闊迭兀阿喇勒は、阿喇勒、客魯噠河の中洲なり。太宗紀に曲雕阿蘭之地、また庫鐵烏阿刺里、憲宗紀に闊帖兀阿蘭之地、明宗紀に闊朶傑阿刺倫とある皆この地なり。多遜曰く成吉思汗の葬りの後皇子諸王は、各その領地に散り去り、二年の間彼等の中に主宰するもの有らざりき。季子なる拖雷は、蒙古の俗に従ひ、父の遺産を保ち、特に蒙古本部と客喇亦惕の地とを領して、國事を攝し居たりしが、一二二九年の春、大罕を選ばんが爲に庫哩勒台即總會を召び集めたり。三日饗宴したる後、集會の事務に取懸れり。察合台は、成吉思汗の生き残れる最長子にして、蒙古の相續法に従へば、この語誤れり。下の阿不勒噶資の言を見よ。相續すべき人なりしに、多數の發言は、拖雷を推さんとせり。然れども、幹歌台を名ざしたる成吉思汗の遺言は、力ありき。四十日の猶豫の後、幹歌台の辭退は引かせられて、兄察合台と叔父兀出肯とは、幹歌台を高位に導き、拖雷は蓋を捧げ、残りの人は天幕の内外にて、幅を脱ぎ、支那の古禮に違ひ九たび額突き合罕の號を呼びて、祝聲を擧げたり。その時、幹歌台は、天幕より出でて、目に向ひ三たび嚴かに拜み、諸人皆それらに倣ひ、その日は宴會にて畢れり。諸王の誓の辭は、我等はながみことの子孫に、草

多遜の述べたる
推戴の禮

親征錄の書法

父の遺産を受くる
幹赤斤

の上に投げて、も牝牛に喫はれざる膏の中に置きて、も狗に取られざる一塊の肉残れる限りは、他の皇族の王を皇位に置かざらんことを誓ふと云へり。この牛狗に喫はれざる譬は、本書の前卷にあるとは意味全く違へり。かれは不才なるに譬へ、これは威靈あるに譬へたるが如し。親征錄に曰く、太祖聖武皇帝昇遐之後、太宗皇帝即大位以前、太上皇帝爲太子、戊子、西紀一二二八年、避暑於斡兒罕、金主遣使來朝。太宗皇帝與太上皇共議、擲力暨復征西域。秋、太宗皇帝自虎八會於先太祖皇帝之宮。己丑、西紀一二二九年、八月二十四日、諸王駙馬百官大會法祿連河曲雕阿蘭共册太宗皇帝登極。太上皇帝とは、睿宗拖雷を云ふ。拖雷は、憲宗世祖の皇考なるが故に、しつか云へり。錢大昕曰く、紀太宗事、而加太上之稱、於其弟所謂名不正而言不順者矣。阿不勒噶資の書に、蒙古の俗子どもの大きなものは、皆外に居て、幼子は父の遺産を受く。故に、幹赤斤の號は、幼子のみ稱し、その義は、竈の主なりと云へり。蓋、游牧の民は、一帳の内に羣兒と同じく居ること能はず。故に、大兒は次第に出でて外に牧し、留まる者は、幼子のみなり。金史世紀に、生女直之俗、生子年長、即異居とあるも、即その事にして、北狄の俗皆然り。太祖の四皇子を分封するに至り、拙赤最も遠く、察合台は次に遠く、幹歌歹はや、近く、拖雷のみ内に居るは、羣兒分牧の舊俗を大じかけに實行したるなり。故に、蒙古源流には、幼子圖類守產と云ひ、西史に、父の遺産を保つと云へるなり。洪鈞の太祖本紀譯證に、雞の年合申を征する時、帝在途、閑窩闊台之子庫延古由克歸。二孫求賞。賽帝曰、所有之物、已盡歸拖雷。彼係家主。其後拖雷汗以衣物分餽之。譯して、自注に、拖雷以幼子從父儼如家主。其後帝崩、遂監國。親征錄謂、太上皇帝時爲太子、皆即斯義。未可斥其誣妄と云へり。然れども、家産を承くると罕の位を襲ぐとは同じからず。蒙古の俗國に大事あれば、部眾集り議して定む。これを庫哩勒台と云ふ。

侍衛(即)我が皇考の身に親く行き居たる内臣彼の萬の番士を察阿歹兄拖雷二人は幹歌歹合罕に交せり内地の國民をもその道理に依り交せり。

巴黑塔揚の再征

幹歌歹合罕は己を罕に戴かして内裏に行く萬の番士を内地の國民を己の物に爲さしめ畢へてまづ察阿歹兄の處に謀りて成吉思合罕額赤格の爲掛け置きたる民なる巴黑塔揚の民の合里伯莎勒壇の處に出征したる綽兒馬罕豁兒赤(馬罕豁兒赤)の後援に幹豁秃兒蒙格秃二人を出征せさせたり。(幹豁秃兒は外に見えず蒙格秃は即篋格秃八十八功臣の第六十二なり)親征錄に太宗と拖雷と共議擲力蠻復征西域とあるはこの事を云へる)また先に速別額台巴阿秃兒を康鄰乞卜察兀惕巴只吉惕幹魯速惕阿速惕薛速惕(前卷の)馬札兒(馬札喇)客失米兒薛

西方十一部の再征

篋客秃の城

兒格速惕(前卷の薛)不刺兒(前卷にも後文にも李刺兒とありこゝの原文ひなければ)客喇勒(前卷誤り)の民の處に到るまで阿的勒(前卷の)改めたり)客喇勒(前卷誤り)の民の處に到るまで阿的勒(前卷の)札牙黑なる水ある河を渡り篋客秃(後文に蔑格惕の城憲宗本紀昔土土哈の傳に麥怯斯拔都兒の傳に麥各思城とありそのありかは確ならず阿卜勒弗答は亦奔賽篤を引きて阿蘭の主要なる寨は世界の堅城の一なりと云ひ馬速的もこの寨を阿蘭の國と略ト克高略速山との間に大河の畔にありと云ひたれども寨の名を云はずト喇惕施乃迭兒曰くこの城は蓋帖喇克河の上遊にて略自別克山に近き名高き答哩額勒の峽にありて抹哈篋惕教徒)綿客兒綿客亦別(前卷の乞瓦)を首こせる城ごもの處に出征したる(出征せし)速別額台巴阿秃兒はそれらの民に艱まされて速別額台の後援に巴秃不哩(多遜の世系表に察合台の長子木阿秃干歹の子不哩と云へり元史憲宗紀元年即位の條に不里と書きて察合台の子なる也速忙可と並び擧げたり下文なる長子出征の語に據るに察阿歹の長子なること明なり不哩の兄木阿秃干は太祖の西征に従ひ巴米安城)古余克(宗太

不哩

定宗古余克

憲宗蒙格

の長子貴由、蒙古源流庫裕克、多遜も同じ。太宗紀八年の處には、古與と書けり。太宗崩じて後合罕に立てられ、元史に本紀あり。定宗簡平皇帝、諱貴由、太宗長子也。母曰六皇后乃馬真氏、以丙寅年生帝とあれば、太宗八年丙子、蒙格を(拖雷の長申の歲、歐囉巴征伐に出陣したるは、三十一歳の時なり)蒙格を(子にして、定宗崩じて後合罕となれ)蒙客。元史本紀に、憲宗桓肅皇帝、諱蒙哥、睿宗拖雷之弟。蒙古源流、拖雷額駝の子蒙客、長子也。母曰莊獻太后怯烈氏、諱唆魯禾帖尼、歲戊辰十二月三日生帝。時有黃忽答部知天象者、言帝後必大貴、故以蒙哥爲名とありて、原注に、蒙哥、華言長生也と云へれば、蒙哥のモンゴと讀むべきことは甚確なり。普刺諾合兒、關尼のメンゴと云ひ、喇失惕以下西人の蒙古史に、首としマングとあるは、皆音訛れり。蒙格は、この出征の時二十九歳なりき。首としてあまたの諸王を出征せさせたり。(この文や、事實に違へり。速別額台の者別と共に乞卜察克斡噶思諸國を征して苦戦したるは事實なれども、その苦戦を救はんが爲に巴禿等諸王の出征したるに非ず。速別額台は諸國を撃ち破りて還りたれども、その地いまだ平定せざりし故に、太宗は更にその地を悉く征服せんが爲に、巴禿等諸王を遣し、速別額台を參謀として、再征を企てたるなり。委しくは下の注に述ぶべし)この出征したる諸の王等に、巴禿長となれ、勅ありき。内地より出でたるものには、古余克長となれ、勅ありき。「い

長子出征の定め

の出征する部眾を統ぶる諸王は、その子ごもも大子に出征せさせよ。部眾を統べざる諸王、萬戸千戸百戸十戸(即牌)の官人等、あまたの人、誰なりごも、その子ごもより兄を出征せさせよ。公主駙馬も、同じ理由により、その子ごもより兄を出征せさせよ。公、主、駙馬、も、同じ理由により、その子ごもより兄を出征せさせよ。この亦子ごもの兄を出征せさせる理由は、察阿歹兄より起りしぞ。察阿歹兄言ひて來ぬるに、速別額台の後援に子ごもより兄不哩を出征せしめたり。子ごもの兄出征すれば、軍盛なり。出づる軍多くなれば、顔色高く、勢よく行くなり。彼方の敵人は、あまたの國あり。その鋒は剛く、彼等の民怒れば、己が器械に死に、彼等の民は器械銳利なり。云はれたり。云ひて來ぬ。斡歌歹合罕宣はく、その言につき、我等の(考)にも、察阿歹兄の著實なる

西征の諸王十一人

力に依り、子ごもの兄を出さんこて、處處に宣布して巴秃、不哩、古余克、蒙格を首ごせる諸王を出征せしむる理由かくありしぞ、「ご宣へり。」(この名を擧げたり。ト咧惕施乃迭兒曰く塔哩黑只杭庫沙亦札米兀惕帖伐哩黑に據るに原注。多遜第二第六九頁以下、幹歌台汗の諸國に集められたる第二太宗七年の大會にて、阿昔不勒、嘴兒乞、魄察克、嚕西亞の諸國を征服せんが爲に大軍を興さんことを議決したり。この征伐に巴秃を助けんことを、長の子拙赤の子巴秃の領地に接せり。幹歌台は、この征伐に巴秃を助けんことを、次の諸王、即幹歌台の子ども庫余克、喀丹、拖雷の子ども曼古不者克、察合台の子ども不哩、拜苔兒、幹歌台の弟庫勒堪、巴秃の兄弟幹兒、苔兒、唐古惕失班に命じたり。勇武なる速不台、巴哈都兒も、この出征に加はり、一三三六年(太宗八年)二月進軍、始まれり。喀丹は、元史世系表に太宗の第六子合丹大王、速不台の傳に諸王哈丹とあり。不者克は、世系表に睿宗の第八子撥綽大王、牙忽都の傳に諸王哈撥綽とあり。不者克の名は、本書下の文にも見ゆ。庫勒堪、また古勒干は、世系表に太祖の第六子闊列堅太子、太宗紀に果魯干、輟耕錄に果里干、缺劉堅、通鑑續編に郭列干など書けり。古勒干の母を、ト咧惕施乃迭兒は、喇失惕を引きて金帝の女古克主、即岐國公主なりとし、別咧津は、忽闌合屯なりとして、金帝の女昆主合屯には子なしと云へり。古勒干は、嚕西亞にて戦死せり。幹兒、苔兒は、巴秃の兄なり。太宗紀に幹魯朶とあり。世系表には漏れたり。唐古惕失班は、皆巴秃の弟なり。失班は、速不台の傳に諸王昔班とあり。世系表には無し。拜苔兒、唐古惕の名は、元史に

金國征伐の議

見えす。

又幹歌歹合罕は、察阿歹兄の處に謀りて遣るには、成吉思合罕額赤格の見成の大位に坐れり。いかなる才能に依りてか坐れると言はれたり。我、察阿歹兄可せば、我等の皇考は、乞塔惕の民の阿勒壇罕を遣掛けて(事をし)置きたり。今我乞塔惕の民の處に出馬せん。ご謀りて遣れば、察阿歹兄可して何の妨か有らん。老營の裏は好き人に委ねて出馬せよ。我は、ごより軍を出して遣らん。ご云ひて遣りき。大幹兒朶思(幹兒朶の複稱)の裏は、幹勒苔合兒豁兒赤に委ねて、

太宗の親征

免の年(我が後堀河天皇寛喜三年辛卯、宋の紹定四年金の正大八年、元の宗紀に據るに、太宗の親征は、この年の前年、太宗二年庚寅より始まりたり。本書の紀年は誤れり。免の年は、虎の年に作るべし。)幹歌歹合

罕は、乞塔惕の民の處に出馬して、者別を先鋒に遣りぬ。かくて乞塔惕の軍を敗りて、爛木の積れる如く殺して、察卜赤牙勒を越えて、處處に彼等の郡城をも攻めさせに軍を行かしめて、斡歌歹合罕は失喇迭克(龍虎)に下馬(駐)せり。(者別は太祖の時西征より還りて、閑もなく歿したるに、その幽霊の今こゝに現れたるは笑ふべし。すべり者別の先鋒居庸の攻め破り、三道の侵掠龍虎臺の駐蹕は皆太祖南征の時の事なれども、その事甚名高くして、人口に膾炙したる故に、太宗の南征にもふと誤りて書き加へたるならん。この南征の役は、元史太宗紀睿宗の傳金史哀宗紀、その外金元兩史の將相の諸傳に甚委しければ、今金元兩紀の文を節録して、太宗の武功の概略を示し、本書の簡陋遺脱を補はん。元史太宗紀二年庚寅秋七月、帝自將南伐、皇弟拖雷、皇姪蒙哥、率師從、拔天威等堡、遂渡河、攻鳳翔。金史哀宗紀正、大七年冬十月、平章政事完顏合達、樞密副使移剌蒲阿、同行、尙書省事于閔、鄧以備潼關。元史十一月、師攻潼關、藍關不克。十二月、拔天勝寨及韓城、蒲城。金史正大八年春正月、大元兵圍鳳翔、府道樞密院判官白華等、諭閔、鄧、蒲、阿、進兵。合達、蒲、阿、以未見機會不行。復遣白華、諭合達、蒲、阿、出關、以解鳳翔之圍。又不行。元史三年辛卯春二月、克鳳翔、攻洛陽、河中諸城、下之。この文誤れり。鳳翔の落ちたるは、四月に在り、河中の事にあらず。金史夏四月、大元兵平鳳翔、府兩行省、乘京兆、遷居民於河南、舊完顏慶山奴守之。元史五月、避著于九十九泉、命拖雷出師寶鷄、遣不罕使宋假道、宋殺之。この擱不罕の事につき異説あり、前卷の第四四七頁に見えたり。復遣李國昌使宋、需糧。秋八月、辛、雲中。金史九月、大元兵駐河中府、慶山奴棄京兆、東還。召合達、蒲、阿、赴汴、議引兵趨河中、懼不敢行。還陝州、出師至冷水谷、而歸。大元兵攻河中府。合達、蒲、阿、遣元帥王敢、率兵萬人救之。元史冬十月、乙酉、帝圍河中。金史十一月、丁未、大元進兵、峽關、由金州而樞密院議、以逸待勞、未可與戰。上諭之云云。乃詔諸將屯軍襄、鄧。金州より進めるは、睿宗拖雷なり。この奇兵の事は、睿宗の傳に詳かなり。元史十二月、己未、拔河中。金史十二月、河中府破。權簽樞密院事、草火訛可死之。元帥板子訛可、提敗卒三千、走閔、鄧。詔將佐以下、杖訛可二百、以死。合達、蒲、阿、率諸軍入鄧州。元帥左監軍楊沃衍、忠孝軍總領完顏陳和尚、恆山、公武仙、皆引兵來會。出屯順陽。戊辰、大元兵渡漢江而北。丙子、畢渡。合達、蒲、阿、將兵禦于禹山之前。大元兵分道趨汴京。京師戒嚴。是夜二鼓、合達、蒲、阿、引軍還鄧州。大元兵躡其後、盡獲其輜重。天興元年春正月、大元兵道唐州。元帥完顏兩婁室與戰、襄城之汝墳、敗績。兩婁室走汴京。癸未、合達、蒲、阿、引軍自鄧州赴汴京。丙戌、大元兵既定河中。由河清縣白坡渡河。元史四年壬辰、春正月、戊子、帝由白坡渡河。丙戌、是正月五日、戊子、是七日なり。五日に渡り始めて七日に渡り終へたるにや。元史庚寅拖雷渡漢江、遣使來報。即詔諸軍進發。拖雷の漢江を渡れるは、去年十二月中旬なれども、正月九日庚寅に至り、太宗の所にその報告達したるなり。元史甲午、次鄭州。金防城提控馬伯堅降。授伯堅金符、使守之。金史甲午、修京城樓櫓及守禦備。大元兵薄鄭州。與白坡兵合。屯軍元帥馬伯堅以城降。防禦使烏林荅咬住死之。乙未、大元游騎至汴城。元史丙申、大雪。丁酉、又雪。次新鄭。是日、拖雷及金師戰于鈞州之三峯。大敗之。獲金將蒲阿。戊戌、帝至三峯。壬寅、攻鈞州。克之。獲金將合達。遂下商、虢、嵩、陝。洛許、鄧、陳、亳、潁、壽、睢、永等州。金史丁酉、大雪。大

金元兩紀の摘録

成吉思汗實錄卷の十二

元兵及兩省軍戰鈞州之三峯山兩省軍大潰合達陳和尚楊沃行走鈞州城破皆死之蒲阿就執尋亦死武仙走密縣自是兵不復振辛丑潼關守將李平以關降大元庚戌許州軍變以城降大元二月甲寅大元兵徇臨渙攝縣令張若愚死之戊午次盧氏關陝行省總帥兩軍及秦藍帥府軍棄潼關而東與之遇天又大雪未戰而潰行省徒單兀典總帥納合間敗死完顏重喜降斬于馬前大元兵下睢州乙丑大元兵攻歸德三月丁亥大元軍平中京圍守撤合輦投水死平中京是誤れり中京は即洛陽にして元史下せる諸州の名を列記したるの中に洛の字あるも非なり撤合輦強伸の傳に據るにこの時洛陽は圍まれたるのみにて下らざりき殊に強伸の苦戰して守りおほせたる忠勇の働きは名高き談なりしをや元史三月命速不台等圍南京金主遣其弟曹王訛可入質帝還速不台守河南夏四月出居庸避暑官山曹王訛可は哀宗の弟に非ず哀宗の弟荆王守純の子なり金史大元遣使自鄭州來諭降庚子封荆王子訛可為曹王議以為質王寅尙書左丞李蹊送曹王出質諫議大夫裴滿阿虎帶太府監國世榮為講和使戶部侍郎楊慥權參知政事分軍防守四城大元兵攻汴城上出承天門撫西面將士癸卯上復出撫東面將士親傳戰傷者藥夏四月丁巳遣戶部侍郎楊仁奉金帛詣大元兵乞和戊午又以珍異往謝許和乙丑百官初起居于隆德殿前丁卯汴京解嚴步軍始出封丘門采薪蔬己巳建威都尉完顏兀論同大元使沒忒入城庚午見使臣於隆德殿六月乙亥左丞李蹊送曹王與其子全俱還）そこに韓歌歹合罕は病に取附かれて口舌の用を失ふほど艱まされたるを師巫の占者に占はせられたれば乞塔惕の民の地水の主王だち(地主の神)

出川の神の祟り

の神だち(即)は人民住具を掠められ城ごも郡ごもを壊られて、
 厳しく崇れるなり。人民住具金銀馬羣糧食を身替に與へん
 ごと禳へば、釋さずして愈厳しく崇れり。親族の人より身替
 せば可からんかごと禳へば、釋したり。合罕目を開きて、水を
 索めて飲みて、いかに爲れる。問はれて、師巫奏さく乞塔惕
 の民の地水の主王だちは、地水を壞られ、人民住具を掠めら
 れて、厳しく崇れるなり。別に何にても身替に與へんごと禳
 へば、愈厳しく漸みたり。親族の人より身替せば可からんか
 ごと云へば、釋したり。今聖旨知しめせ。奏せば、勅ありて、御前
 に諸王より誰かある。宣へば、拖雷の王御前に居て申さく
 「福ある成吉思合罕我等の父は、上に兄だち下に弟だちある

拖雷の身替り

に合罕兄を爾を駟馬の如く選びて、羯羊の如く揃りて、大位に爾が身を名指して、多き國民を爾が上に擔はせて與へたるぞ。我をこそは、合罕兄の御前に居て、忘れたるを心附けて、兀馬兒塔黑散睡りたるを喚覺して行けと仰せられたりき。今合罕兄を爾を失はば、我は誰の忘れたるを心附け、誰の睡りたるを喚覺さん。實に亦合罕兄吉からずならば、多き忙豁勒の國民は孤兒兀馬兒塔黑散ならん。乞塔惕の民は喜ばん。合罕兄の代に我爲らん。秃魯兀馬兒塔黑散（名魚）の脊を我割きたり。乞列篋兀馬兒塔黑散（名魚）の脊を我斷ちたり。面を我打てり。外面を我刺せり。輕古勒（譯は節約して有的罪業、都是我造來）顔美しく脊長く我もあるぞ。輕古勒（譯我又生得好可以事神。尚書の金縢に、武王疾ありて、周公身を以て代らんことを祈れる）師巫呪へ辭に予仁若考能多材多藝能事鬼神と云へるも、この意に同じ。）師巫呪へ

詛へと云ひて、師巫詛へば、詛へる水を拖雷の王飲めり。暫く坐りて言く、醉ひたり。我が醉を覺せる内に（我が醉のまゝ、孤兒兀馬兒塔黑散も幼兒兀馬兒塔黑散も弟兀馬兒塔黑散も寡なる婦別嚙迭翰因兀馬兒塔黑散に（譯語を）至るまで養ふことを合罕兄知しめせ。その言を言ひ畢へ、我醉ひたりと云ひて、出でて去りて、吉からず爲れる理由かくあり。

（元史太宗紀に據れば、拖雷の薨じたるは、太宗四年九月なり。睿宗の傳に、三峯山鈞州許州の戰の後に、遂從太宗收定河南諸郡。四月、由半渡入真定。過中都。出北口。住夏于官山。五月、太宗不豫。六月、疾甚。拖雷禱于天地。請以身代之。又取巫覡祓除。灤之水飲焉。居數日、太宗疾愈。拖雷從之北還。至阿剌合的思之地。遇疾而薨。壽四十有兀馬兒塔黑散。喇失惕の史に四十歳と云へるに據れば、この闕字は、必ず一の字なるべし。妃怯烈氏、子十一人。長憲宗。次四則世祖也。憲宗立、追諡曰英武皇帝。廟號睿宗。二年、合祭昊天。后土。以太祖睿宗配享。世祖至元二年、改諡景襄皇帝。祭祀志一。憲宗之二年、秋八月八日、始以冕服拜天於日月山。其十二日、合祭昊天。后土。始大合樂。作牌位。以太祖睿宗配享。祭祀志三。武宗至大二年十月、以將加諡太祖睿宗。擇日請太祖睿宗尊諡于天。改製金表神主。題寫尊諡。廟號十二月乙卯、親享太廟。奉玉冊玉寶。加上太祖聖武皇帝尊諡。曰法天啓運。加上睿宗景襄皇帝曰仁聖。拖雷の身替りの事は、喇失惕の史にも記せり。只禱りの辭は、秘史と稍異なり。拖里は、幹歌台の床

に近づき、師巫の聖水を盛れる木の器を捧げて、神に白さく、常世の大神よ。もし爾は人の罪に隨ひて罰なふならば、我は幹歌台よりも多く罰なはるべきことを爾は知り給はん。我は軍にて多くの民を殺せり。我は多くの女ども兒どもを驅り立てたり。我は多くの父ども母どもに涙を流させたり。もし爾は爾の羣僕の中よりその美好の爲に召し上げんとならば、我は又幹歌台よりも立派なるを主張せん。幹歌台の代りに我を取りて、彼の病を我に移し給へ」と祈りたれば、幹歌台は疾愈えて、拖里は久しからず歿りぬとあり。

金國の平定

かくて阿勒壇罕を窮めて、薛兀薛(明譯小厮)と云ふ名を與

へて、彼の金銀金あり紋ある織物財阿刺沙思(明譯准馬)薛兀薛

思(小者)を收めて、先手の探馬臣を置きて、南京中都の處處に

城の裏に荅嚕合臣を置きて、平けく回りに合喇豁嚕木に下

馬せり。(探馬臣は探馬赤とも云ふ。荅嚕合臣を荅嚕合赤とも云ふが如し。元

探馬赤軍の五部の將

軍則諸部族也。兵志二鎮戌の條に、世祖之時、海宇混一、然後命宗王將兵鎮邊徼、襟喉之地、河洛山東、據天下腹心、則以蒙古探馬赤軍列大府以屯之、とあれば、探馬赤軍は、藩地に鎮戌する諸部族の兵にして、探馬臣の官は、その將帥なり。闊闕不花の傳に、歲庚寅、太祖命太師木華黎伐金、分探馬赤爲五部、各置將一人、闊闕不花爲

探馬臣

五部、前鋒都元帥云、歲丙申、太宗命五部將分鎮中原、闊闕不花鎮益都、濟南、按察兒鎮平陽、太原、李羅鎮眞定、肖乃台鎮大名、怯烈台鎮東平、庚寅は、戊寅、太祖十三年の誤なり。木華黎の傳に、丁丑、太祖十二年八月、詔封太師國王、云云、分弘吉刺、赤

烈思兀魯兀忙兀等十軍、及吾也而契丹、蕃漢等軍、並屬麾下、とある。契丹、蕃漢等軍は、即探馬赤軍にて、親征錄集史は、皆この事を、戊寅の年、即西紀一二一八年の事は、とせり。丙申、太宗八年、命五部將分鎮中原、は、即本書探馬臣を置くの事なり。この

五部將の名は、兵志一世祖中統三年三月の詔に、眞定彰德邢州洺磁東平大名平陽太原衛輝懷孟等路各處有舊屬、按札兒、李羅、笑乃、解、闊闕、不花、不里合、拔都、兒等、官所管探馬赤軍人、乙卯、歲、憲宗五年、籍爲民戶、云云、石高山の傳に、昔太祖皇帝所

集、按察兒、李羅、窟里台、李羅、海、拔都、闊闕、不花、五部探馬赤軍、金亡之後、散居牧地、每多有入民籍者、とありて、名互に異なり。按察兒は、即按札兒にて、元史に傳あり、歲己卯、太祖十四年、兵北還、以按札兒統所部兵屯平陽、以備金、歲甲午、太宗六年、金亡、詔封功臣、賜平陽戶六百有餘、とあり。李羅は、木華黎の子、李魯なるべし。肖乃台は、

即笑乃解にして、元史肖乃台の傳に、木華黎に従ひ、金を伐ち、大名、東平を定め、太宗賜東平戶三百、俾食其賦、以老病卒于東平、とあり。錢大昕の諸史拾遺に曰く、怯烈台、即窟里台、不里合、拔都、兒、即李羅、海、拔都、或有肖乃台、而無不里合、或有窟里台、而無肖乃台、似當以兵志爲正、蓋肖乃台、本禿伯怯烈氏、故又有怯烈台之稱、或稱肖乃台、或稱怯烈台、其實即一人耳。史家疑李羅、海、與李羅、爲重出、故闊闕、不花、傳誤分

、怯烈台、以當五人、之數、今依兵志、作不里合、則太宗の金を平げたることは、元史、鞏然有別矣、不里合、拔都、兒、は、元史に傳なし。太宗紀四年壬辰、秋七月、遣唐慶使、等三十餘人、于館、詔貫其罪、和議遂絶、乙未、宿州帥、取僧奴、稱國、安用降、遣近侍直長

金元兩紀の摘錄の續き

因世英等持詔封安用爲寇王行京東等路尚書省事賜姓完顏改名用安丙午參知政事完顏思烈恆山公武仙率諸將兵自汝州入援以合喜爲樞密使將兵一萬應之元史八月金參政完顏思烈恆山公武仙救南京諸軍與戰敗之金史八月辛亥完顏思烈遇大元兵于京水遂潰武仙退保雷山思烈走御寨合喜棄輜重奔入甲寅免合喜爲庶人元史九月拖雷薨帝還龍庭冬十一月獵于納蘭赤刺溫之野十二月如太祖行宮金史十二月甲申以事勢危急詔議親出乙酉再議於大慶殿除拜扈從及雷守京城官庚子上發南京二年正月丙午朔濟河辛亥平章政事白撒引兵攻衛州不克乙卯聞大元兵自河南渡河至衛之西南遂退師丁巳戰于白公廟白撒敗績棄軍東遁己未上以白撒謀夜棄六軍渡河走歸德壬戌召白撒數其罪下之獄七日死獄中元史五年癸巳春正月庚申金主奔歸德戊辰金西面元帥崔立殺雷守完顏奴申顏習捏阿不以南京降金史戊辰京城西面元帥崔立舉兵爲亂殺參知政事完顏完顏習捏阿不以南京降金史戊辰京城西面元帥崔立舉兵爲亂殺參知政事完顏夏四月速不台遣送行在遂入南京金史夏四月癸巳崔立以梁王從恪荆王守純等至宗室男女五百餘人至青城皆及於難甲午兩宮北遷任大椿曰按金史哀宗紀及劉祁歸潛志荆王梁王皆遇害于青城其北遷者止兩宮耳此紀元史太宗紀所載似二王亦與兩宮同送行在矣又金史作梁王從恪荆王守純此稱荆王從恪梁王守純或傳寫之誤金史六月壬午中京破雷守強伸死之元史本紀はこの事を書き漏せり元史六月金主奔蔡塔察兒率師圍之金史六月辛卯上發歸德己亥入蔡州九月甲戌大元使王楸諭宋還宋以軍護其行乙酉大元召宋兵攻唐州破之九月癸卯朔遣內族阿虎帶使宋借糧宋不許辛亥大元兵築長壘圍蔡城元史冬十一月宋遣荆鄂都統孟珙以兵糧來助金史十一月宋遣其將江海孟珙帥兵萬人獻糧三十萬石

合喇豁嚙木即ち和林の建置沿革

助大元兵攻蔡元史十二月諸軍與宋兵合攻蔡金史十二月丁丑大元兵決練江宋兵決柴潭入汝水己卯大元兵破外城己丑墮西城元史六年甲午春正月金主傳位于宗室子承麟遂自經而焚城拔獲承麟殺之宋兵取金主餘骨以歸金史三年正月戊申夜上集百官傳位于東面元帥承麟己酉承麟即皇帝位百官稱賀禮畢亟出捍敵而南面已立宋幟俄頃四面呼聲震天地南面守者棄門大軍入與城中軍巷戰城中軍不能禦帝自縊于幽蘭軒末帝退保子城開帝崩率羣臣入哭謚曰哀宗哭奠未畢城潰諸禁近舉火焚之奉御絳山收哀宗骨瘞之汝水上末帝爲亂兵所害金亡その月金の息州の行省抹撚兀典は宋に降らんとして蒙古の兵に追殺され二月完顏用安は徐州を取られ明年十月鞏昌の總帥汪世顯は蒙古に降り金の餘れ六月崔立は部下に殺され明年十月鞏昌の總帥汪世顯は蒙古に降り金の餘黨全く盡合喇豁嚙木はハ刺和林常には略きて和林城和林河と云へりきたり漢人の口にはハ刺和林常には略きて和林城和林河と云へり親征録に乙未太宗七年建和林城宮殿丙申八年入慶和林城宮元史太宗紀に七年乙未春城和林作萬安宮八年丙申春正月諸王各治具來會宴萬安宮落成耶律楚材の湛然居士集に和林城建行宮上梁の文あり乙未年三月祭姪女文の後に載せたり又地理志にその建置沿革を述べて和寧路始名和林以西有哈刺和林河因以名城太祖十五年定河北諸郡建都於此初立元昌路後改轉運和林使司前後五朝都焉世祖中統元年遷都大興和林置宣慰司都元帥府後分都元帥府於金山之南和林止設宣慰司至元二十七年立和林等處都元帥府大德十一年立和林等處行中書省罷和林宣慰司都元帥府置和林總管府皇慶元年改嶺北等處行中書省改和林路總管府爲和寧路總管府とあり百官志六に國初太祖定都于哈刺和林河之西因名其城曰和林と云へるは東を西と誤れり又和林の建都を太祖

建都の年の誤り

十五年としたるも誤れり。沈堽の西遊記金山以東釋に曰く、按十五年太祖在西域、春三月克蒲華城、夏五月克尋思干城、駕未中回、安得有都城之建、又十五年歲次庚辰、正長春真人由燕京往德興之歲、西遊記云、師開行宮、漸西、春秋已高、欲待駕回、朝謁、則自前年征西域後、駕實未嘗中回也。且太祖所居之見於紀者、六年春帝居法綠連河、十一年春居廬胸河、行宮十九年、由西域班師、二十年春正月還行宮、二十二年秋七月崩于薩里川、哈老徒之行宮、本紀中不見有和林之名、安得謂和林爲太祖所建、亦不言和林、二年春帝與拖雷獵于幹兒寒河、夏避暑于塔密兒河、則始在和林、左右嗣是六年春會諸王宴射于幹兒寒河、而七年春遂城和林、作萬安宮、和林建都、實始太宗、非由太祖矣、然れども地理志の誤は偶然の事に非ず、元の世より已に太祖建都の説ありて、明宗紀に、天曆二年明宗潔察罕の地に駐まれる時、四月乙巳監察御史の上言に、嶺北行省控制一方、廣輪萬里、實爲太祖肇基之地、國家根本繫焉、方面之寄豈可輕任、云云とあり、また許有壬の至正集に見えたる勅賜興元閣碑の文には、太祖十五年奠都の事を明に記したれば、地理志は蓋それによりて誤れるなり、その文に曰く、太祖聖武皇帝之十五年歲在庚辰、定都和林、太宗皇帝始建宮闕、梵宇基而未屋、憲宗繼述歲丙辰、作大浮屠、覆以傑閣、閣五級、高三百尺、其下四面爲屋、各七間、環列諸佛、具如經旨、至正壬午、皇上敕怯憐府同知今武備卿普達失理暨嶺北行中書省右丞今宣政院使月魯帖木兒、專督重修、周塔塗金、閣中邊頂踵若城、平糝聖靡不堅麗、賜名曰興元之閣、和林の位置につきては、歐陽玄の高昌偃氏家傳に、和林有三水焉、一竝城南山東北流、曰幹耳汗、一經城西北流、曰和林河、一發西北東流、曰忽魯班達彌爾、三水距城北三十里合流、曰傑犖河、幹耳汗河は、即太宗紀の幹兒寒河にして、今の鄂兒坤河なり、和林河は、地理志の哈刺

和林の位置を示せる偃氏家傳

鄂兒坤河を渡れる二人の紀行

和林河にして、水道提綱の朱爾馬台河、蒙古遊牧記の濟爾瑪台河なり、提綱に曰く、朱爾馬台河源出額黑鐵木兒山南麓、東北流、曲曲二百餘里、潞爲池、曰察罕鄂模、廣數十里、又東北流、百里有布勒哈爾台河、南自達爾湖喀喇巴哈孫地之池、水東北流來會、又東北入鄂爾坤河、察罕鄂模の鄂模は、滿洲語の池にして、蒙古語にては察罕納兀兒と云ふ、即白き湖水なり、忽魯班達彌爾は、三つの塔米兒にして、即太宗紀の塔密兒河なり、それを三塔米兒としも云へるは、蓋三大源の合流せるか、三道に分流せる所あるかに因れるならん、偃氏家傳の文に據れば、和林の地は、塔米兒河の南に當り、鄂兒坤河と札兒曼台河との間に挿まりて、今の賽音諾顏部、附牧額魯特旗の北境にありしなり、三水距城北三十里合流とあるは、鄂兒坤河の札兒曼台河を并せ、又北に流れて、塔米兒河を并するを云ふ、沈堽曰く、三水會合の地、計去和林城約有三百里、而偃氏家傳謂三十里、傳寫誤耳、傑犖河は、今の色楞格河なり、鄂兒坤河は、塔米兒河を并せて後も、鄂兒坤と云ひて、色楞格と坤下合、色楞格河互受通稱矣、又西遊記に、長春は太祖十六年五月、陸局河客嶺倫河を離れて、より西に行くこと十日にして、漸見大山峭拔、從此以西、漸有山阜、人烟頗眾、云云、又四程、西北渡河、乃平野、其旁山川皆秀麗、水草且豐美、東西有故城、基趾若新、街衢巷陌可辨、制作類中州、歲月無碑、刻可考、或云契丹所建、既而地中得古瓦、上有契丹字、蓋遼亡土馬不降者、西行所建城邑也、張德輝の塞北紀行に云く、自黑山之陽、西南行九驛、復臨一河、北語云、渾獨刺、漢言兔兒也、遵河而西行一驛、有契丹所築故城、城方三里、背山面水、自是水北流矣、自故城西北行三驛、過畢兒紇都、乃工匠積養之地、又經一驛、過大澤泊、周廣約六七十里、水極澁、徹北語謂吾悞竭腦兒、自泊之南、而西分道入和林城、相去約百餘里、泊之正西、有小故城、亦契丹所築也、蘇

城四望地勢平曠可百里外皆有山山之陰多松林瀕水則青楊叢柳而已中卽和林川也居人多事耕稼悉引水灌之開亦有蔬圃繇川之西北行一驛過馬頭山人云「上有大馬首故名之」自馬頭山之陰轉而復西南行過忽蘭赤斤乃奉部曲民匠種藝之所有水曰塌米河注之東北又經一驛過石墩云云自墩之西南行三驛過一河曰唐古其水亦東北流水之西有峻嶺之石皆鐵如也嶺陰多松林其陽帳殿在焉乃避夏之所也忽蘭赤斤之自注に山名以其形似紅耳也とあり渾獨刺河は卽渾れも蒙古語に免を禿來と云ふ沈壺曰く過免兒河而西又行一驛然後至契丹故城則城當在喀魯哈河之西土謝圖汗本旗之東北又曰く眞人所渡之河當是鄂勒昆河也云山川秀麗故城地中得古瓦有契丹字則已在和林側近而不言和林者是時實未建都故無和林之目也又曰く西游記言東西有故城東故城卽紀行過河而西行一驛之契丹故城西故城卽紀行腦兒正西之小故城蓋東西之言所兼頗廣秀麗之云實兼指今鄂勒昆河東西兩岸矣紀行の吾悞竭腦兒は喇篤羅甫の蒙古考古圖の第八十二幅腦兒歡河東申鄂兒歡地圖の兀格依諾兒なりこの湖水は鄂兒歡河の東三英里に在りその水西に出で南より流れる處は塔米兒河の鄂兒歡河に入る處より西に流れて鄂兒歡河に入る處は塔米兒河の鄂兒歡河に入る處より一英里餘南卽上流に在り沈壺は吾悞竭腦兒卽今察罕池池西南百餘里實元和林城所在矣と云ひて張穆高寶銓は皆それに從ひたれどもその考は誤れり吾悞竭と察罕と音の似ざるのみならず察罕池の西南に和林ありとすれば和林は札兒曼台河卽和林河の西に在ることとなりて偃氏家傳の和林河經城西北流の文に合はず察罕池の事は太宗紀に九年春獵于揭揭察哈之澤夏四月作迦堅茶寒殿十一年春十三年春二月にも獵于揭揭察哈之澤憲

察罕諸兒

兀格依諾兒

峻嶺の陽なる帳殿

宗紀三年四年の春帝獵于怯蹇又罕之地明宗紀天曆二年三月戊午朔次潔堅察罕之地などありて地理志和寧路の原注に迦堅茶寒殿在和林北七十餘里と見えたり錢大昕の考異に揭揭察哈卽迦堅茶寒也譯音無定字と云ひ怯蹇又罕も潔堅察罕も皆同音の異譯なれば沈壺は殿以澤得名殿在和林城北七十餘里澤亦當相近察罕池之卽揭揭察哈澤無可疑矣と云へり蓋今の察罕は揭揭察罕の上略ならん然らば和林城は察罕池の南に在りけんこと地理志に由りて證すべし猶精しく云へば察罕池の上流なる和林河の東にありしこと偃氏家傳に由りて明なればむしろ察罕池の東南に在りしなり唐古河の西に峻嶺ありて嶺陰多松林と云へるは西游記の至長松嶺後宿松檜森于雲蔽日多生山陰湖道閉山陽極少とあるに善く似たれば張德輝の見たる峻嶺は卽長松嶺なるが如しされども其陽帳殿在焉乃避夏之所也とあるは長春の到りし乃滿國の窩里朶とは異なり沈壺曰く紀行繇和林川往避夏處但行五驛而記自六月十三日宿長松嶺至二十八日方泊窩里朶之東凡行十五六日是時窩里朶亦是駐夏處而遠近不同者蓋張參議于定宗丁未年應世祖潛邸之招所往者定宗駐夏之地眞人當太祖時所往者太祖皇后駐夏之地故不同矣更に西人の記載を考ふるに和林の名を喇失惕は合喇闊嚙木と云ひ元史巴而朮阿而忒的斤の傳に和林山とあるも哈刺和科保羅は合喇闊嚙と云へり喇失惕は合喇闊嚙木は山の名にしてその山より林山の上略にして卽合喇闊嚙木の山なり合喇闊嚙木は黒き徑の義卽樹木茂りて路闊きことにて我國のくらやみ坂などに似たる語なれば山の名は本にしてそれより河の名となり遂に都の名となれるならん訶倭兒思の蒙古史に舊史の説を引きて韓歌台の新しき宮殿は支那風の雕刻繪畫を以て精しく飾

合喇闊嚙木の山

和林の景況

遊幸の地

られ、周圍に園ありて、門四つあり、合罕と皇族と宮女と公衆との出入を分てり。皇宮の外に大臣の宅あり、又その外に大なる市街あり、合罕はそれを幹兒都巴里克(幹兒朶朶)の城と名づけたれども、普通には喀喇科嚕木と呼べり。一二三五年(太宗七年)その周圍に半リীগほどの壁を廻せり。皇室の需用と給與との爲に、帝國の諸處より貨車五百輛づつ毎日そこに到着せり。三十七の驛亭の傳馬は、その城を支那に結び附けたり。幹兒都巴里克(幹兒朶朶)の城にたゞ春の一月だけ住み、餘の二月は一日路隔たれる客兒惕察干に住めり。そこには珀兒沙の工匠ども、支那人の築ける喀喇科嚕木の宮殿に劣らざる宮殿を築きたりき。夏は幹兒朶朶(克禿阿)に到り、金欄にて縁取りたる白き毛氈より成れる支那風の假屋に住めり。この天幕は、千人を容れらるゝほど大きくして、昔喇幹兒都即失喇幹兒朶朶なる行宮と名づけられたり。秋は科衣揭の湖の畔に一月を送れり。冬は天に獵する季節にて、幹兒都巴里克(幹兒朶朶)の宮殿は、即迦堅茶寒殿にして、察罕諾兒の邊に設けたる、離宮なりき。幹兒朶朶(克禿阿)の避暑は、憲宗紀にも、四年夏、幸月兒滅怯之地、五年夏、帝幸月兒滅怯土、七年夏、六月、謁太祖行宮、還幸月兒滅怯土、などあり。又六年春、帝會諸王百官于欲兒陌哥都之地、設宴六十餘日、賜金帛有差、とある。欲兒陌哥都も、欲兒滅怯土の訛ならん。その年、夏四月、駐蹕于答密兒、五月、幸昔刺兀魯朶、とある。昔刺兀魯朶は、即失喇幹兒朶朶にして、天幕の名はその天幕の毎年設けらるゝ所の名とも爲れるなり。郝和尚拔都の傳に、甲辰、朝定宗於宿斡都之行宮、とある。宿斡都も、失喇幹兒朶朶の訛ならん。張德輝の紀せるべし。唐古河の西なる峻嶺の陽に在りし避暑の帳殿は、即欲兒滅怯土の黄帳なるべし。科衣揭の湖は、揭揭察哈澤の揭揭にも似たれども、その澤の事は前に客

失喇幹兒朶

關關諸兒

兒惕察干とあれば、これは、憲宗紀四年の所に、是歲、會諸王子于額爾騰兒之西、乃祭天子日月山、とある。額爾騰兒の訛なるべし。額爾騰兒即關關納兀兒は、青き湖の義にして、察罕兀兒即白湖と同じく、處處に同じ名の湖あり。不兒罕嶽の南麓にも青湖あり、甘肅の西境の外にある青海も、即青湖なれども、皆これとは異なる。王禱の日月山祀天頌に、日月山、國語云、阿刺溫山、在和林之北、と云へれば、この青湖も和林の北に在るべし。又憲宗紀に、七年秋、駐蹕于軍腦兒、醜馬乳祭天、とある。軍腦兒の軍は、關關と音異なれども、同じく祭天の所なるを見れば、額爾騰兒と同じきかとも思はる。三年の所にも、秋、幸軍腦兒、とありて、軍腦兒の行幸は、いづれも秋なれば、含篋兒の秋は、科衣揭の湖の畔に、と云へるにも合へり。又冬の獵場なる翁奇は、憲宗紀に、三年冬、十二月、帝駐蹕汪吉地、とある地なり。定宗紀に、元年秋七月、即皇帝位于汪吉宿滅禿里之地、とあるは、汪吉の宿滅禿里の地なるべし。耶律鑄の雙溪醉隱集に、三月到汪結河有感、の詩あり、清一統志に、朔漠圖を引きて、和林南有旺吉河、と云へり。旺結河、汪吉河は、即今の翁金河にして、蒙古遊牧記に、翁金亦作翁吉、と云ひ、平定準噶爾方略には、翁吉地方ともあり。然らば多遜の翁奇、元史の汪吉は、今の翁金河の濱、むしろ翁金河の上流の山地なるべし。歐囉巴人にて和林の事を始めて記したるは、普刺諾喀兒關尼なり。この旅僧は、馬教主因諾昔惕第四の命を奉じて、一二四六年(定宗元年)西曆七月二十二日、蒙古の昔喇幹兒都に達し、そこに開かれたる定宗即位の大會に、參列し、紀行を著して、王會の盛況を述べたり。喀兒關尼は、和林の地をば踏まざれども、その地の事を、傳聞に依りて記せり。大會の開かれたる昔喇幹兒都は、欲兒滅怯土の黄帳とすれば、定宗紀に汪吉宿滅禿里とあるに合はず。喀兒關尼は、目に睹たる事を述べて誤なかるべければ、定宗紀の地名は誤れるにや。又はこの時、失喇幹兒

翁吉の獵場

普刺諾喀兒關尼の傳聞

朶即黃帳を汪吉の地に設けて、即汪吉の地をも失喇幹朶と云へるにや。猶考ふべし。嚙ト嚙克は、佛囉思王路易第九の命を奉じて、一二五三年憲宗三年の末に和林に至れり。その紀行に云く、合喇闊囉の都は、聖迭尼思の町ほど好くはあらず。その宮殿に較ぶれば、聖迭尼思の寺は十倍好し。そこに大街二つあり。一つには撒喇先人住み、その中に市場あり。一つには支那人住み、それらは皆工匠なり。二街の外に朝貴の大なる邸宅あり。又諸宗の佛堂十二、抹哈篋惕教の寺二つ、町のはてに基督教の寺一つあり。町は土の壁にて取圍まれ、門四つあり。東の門にては黍雜穀を賣れども、供給豊ならず。西の壁にては羊山、羊南の門にては牛車北の門にては馬を賣る。城壁の傍に大なる離宮あり。輒の壁にて取捲かれ、内に大殿あり。一年に二たびそこに酒宴を催さる。又倉廩の如き長き建物、幾棟もありて、合喇闊囉は周圍三英里ほどの城なり。そこに石少き故に堅固なる土の壁にて取捲かる。城の傍に大なる出城あり。その中に美なる宮殿ありて、そこに太守住めり」と云へり。出城と云へるは嚙ト嚙克の離宮なるべし。太守は、元史地理志の和林等處都元帥なり。馬兒科の蒙古に到れるは、元の世祖の大都に都を遷せる後なれば、その頃は合罕の離宮を都元帥の官舎に用ひたるならん。嚙ト嚙克の後四百五十餘年の間、この名高き都の遺址ある地方を歐囉巴の旅人にて通りたるもの一人も無かりしが、一七一三年康熙五十二年の頃、耶蘇亦惕派の傳道師等、始めて鄂兒坤河の盆地を訪へり。その後、夏至暑景長三尺二寸四分、は、元史天文志の四海測驗に、和林北極出地四十五度、夏至暑景長三尺二寸四分、晝六十四刻、夜三十六刻とあるに由りて、和林の位置を推測したりしに、阿別勒喇繆咱はその測算を誤れりとし、一八二五年道光五年、喀喇科嚙木城の探究と

和林位置の問題

馬兒科保羅の傳聞

帕迭嚙の發見せる喀喇巴勒噶孫

云へる面白き論文を著し、支那の舊籍に依りて、この古城の位置を考定せんと試みたり。これより和林の位置は、歐囉巴の東洋學者の間にてやかましき問題となれり。一八七三年同治十二年、明治六年、庫倫に駐れる嚙西亞の領事帕迭嚙は、實地の探檢に由り、この問題を解決せんと思ひ、張德輝の紀行を道しるべとし、まづ兀格依諾兒に至り、諾兒の東南とあれども、東の字は衍なり。三四十英里、鄂兒坤河の西四五英里の處にて古城の址を見出せり。その地を蒙古人は喀喇巴勒噶孫、黒き城、また喀喇合喇木、黒き郭と呼べり。城壁は、四角にて、土と輒とより成り、邊の長さは五百歩ほどづつ、高きは今九尺ほどあり。東の端、東南の隅には高き塔の址あり。方形の内側には南北の邊に平行せる低き壁の址あり。蒙古人は何の塔の趾とも確には知らず。只刺麻一人進み出でてこゝは、脱歡帖木兒汗の城なりきと云へり。この喀喇巴勒噶孫は、清一統圖に達拉爾和哈拉巴爾噶遜とあり。耶蘇亦惕派の傳道師等は、北緯四十七度三十二分二十四秒と測定したりし所なり。水道提綱に達爾湖喀喇巴哈孫とあるも、その地なり。帕迭嚙は、そこを去りて西に進み、抹嚙脱羅果依山、兀闌赤希山を過ぎて、塔米兒河を渡れり。抹嚙脱羅果依は、馬の頭にして、張德輝の馬頭山なり。兀闌赤希は、赤き耳にして、即由蘭赤斤山、其形似紅耳とある山なり。前後の地名皆善く紀行の文に合へるに由り。帕迭嚙はその古城を和林の遺址と認定し、その旅行發見の記をその年の嚙西亞の地學協會の錄事に載せ、又その記を弗篤禪科夫人の英文に譯して、大佐裕勒の旁注したるもの、一八七四年明治七年の地學馬噶津の一三七頁以下に見えたり。然るに教授玻自捏也甫は、蒙古の編年史額兒迭初額哩客と云ふ書を得て、その中に、喀喇科嚙木の城は、幹歌台汗の命にて一たび築かれ、都と定められ、又蒙古人の支那より逐出されたる後、脱歡帖木兒、惠宗は、再そこに蒙古の朝

玻自捏也甫の發見せる額兒迭尼租

廷を定めたりしが、一五八五年(明の神宗萬曆十三年)額兒迭尼租の大寺は、その故址に建てられたりと明に記載せるを見て、一八七七年(明治十年)遂に蒙古探檢の路に上り、額兒迭尼租の地に至り、寺を繞れる周一英里ほどある方形の土壁は、即古の喀喇科嚕木の城壁の遺址ならんと認定せり。こゝに於て和林問題は、二たびむづかしくなれり。玻自捏也甫は、その後一八八三年(明治十六年)額兒迭尼租哩客を嚕西亞文に譯出せり。額兒迭尼租の地は、土謝圖汗の本旗の界内に在り。耶蘇亦惕派の傳道師等は、夙くその地の經緯度を測定し、清一統圖には額兒迭尼招また西庫倫と記入せり。蒙古遊牧記額兒迭尼招の注に、廟在西十三度、北極出地四十六度、西爾哈爾罕山之西麓、蒙古謂佛寺曰招蓋、大刺麻寺之在鄂爾坤河側者、又方觀承の松漠草從軍雜紀の詩の注に、厄爾得尼招在喀爾喀王策令部內、厄爾得尼寶也。招乃招提省文、地產金銀、故稱寶寺。寺前有元至正年梵書碑、文猶可辨とあり。芬蘭の海客兒は、一八九〇年(明治二十三年)八月、幹兒歡河の盆地に至り、古碑三基を見出し、委しく寫真に取りて還れり。その一は突厥の闕特勤の碑、その二は突厥の默棘連可汗の碑にして、二つとも、兀格依諾兒の南、額兒迭尼租の北、喀喇巴勒哩孫の東北、鄂兒歡河の東なる科克申鄂兒歡河の右岸、才峇木の地にて、才峇木湖の西南に當れる所において、二碑の相去ること八町ばかりなり。その三は回紇の毗伽可汗の碑にして、喀喇巴勒哩孫の地にあたり。海客兒は、遂にそれらの碑銘に説明を加へ、鄂兒歡の碑銘と云へる書を出版せり。その頃歐羅巴の東洋學者は、蒙古の古碑舊跡を研究する興味を生じ、殊に闕特勤の碑は、表面の漢文、裏面兩側面の突厥文、共に殆完好なるが故に、その譯解を試みたる人甚多し。されども西洋の學者は、漢文の解釋に拙くして、誤謬も

海客兒の寫し取れる三石碑

少からざれば、白鳥博士は、更に突厥闕特勤碑銘考を著して、史學雜誌第八編第十一號に載せ、又その考を獨逸文に書き、て彼の地の學者なかに頌たり。この闕特勤の碑は、昔より名高き碑なり。耶律鑄の雙溪醉隱集に、凱樂歌の詞曲九首の中に取、和林の詩ありて、その自注に、和林城、茲伽可汗之故地也。聖朝太宗皇帝壬申御製御書闕特勤碑。案唐史、突厥傳、闕特勤、骨咄祿可汗之子、茲伽可汗之弟也。城此、起萬安宮、城北七十里有、茲伽可汗宮城遺址。城北七十里有、唐明皇開元壬申御製御書闕特勤碑。開元十九年、闕特勤卒、詔金吾將軍張去逸、都官郎中呂名、闕可汗之子、弟、謂之特勤。開元十九年、闕特勤卒、詔金吾將軍張去逸、都官郎中呂向、齋醮書、使北弔祭、并爲立碑。上自爲文、別立祠廟、刻石爲像。其像迄今存焉。其碑額及碑文、特勤、皆是殷勤之勤字。唐新舊史、凡書特勤、皆作衙勒之勒字。誤也。諸突厥部之遺俗、猶呼其可汗之子、弟、爲特勤。特勤、謹字也。則與碑文符矣。碑云、特勤、茲伽可汗之令弟也。可汗、猶朕之子也。唐新舊史、竝作毗伽可汗。勤、茲二字、當以碑文爲正とあり。その祠廟、石像は、已に存せざれども、闕特勤の墓にも、默棘連可汗の墓にも、碑の外に立形坐形の石人石婦など、今猶有り。この文の中に、茲伽可汗の字四所あり。初の二つは回紇の毗伽可汗、後の二つは突厥の毗伽可汗なり。混すべからず。突厥にも回紇にも、毗伽可汗ありしことは、唐書の突厥回紇の傳に明なり。回紇の毗伽可汗は、唐書に見えたる骨咄祿毗伽闕可汗のみならず、海客兒の寫せる回紇の毗伽可汗の碑文に據れば、回紇の可汗は、大抵世世毗伽と稱したるが如し。この文の初に、和林城、茲伽可汗之故地也と云ひながら、次に、城西北七十里有、茲伽可汗宮城遺址と云ひ、和林城と回紇の故城と同じ所に非ざるが如し。これは和林の位置を定むるに、最注意すべき事なり。一八九一年(明治二十四年)嚕西亞の翰林學士喇篤羅甫は、大規模なる蒙古考古地方の探檢を企て、匈奴突厥回紇蒙古四朝の古碑舊跡を搜索檢討して、蒙古考古圖を作れり。その書は、殘碑荒墳廢

喇篤羅甫の新舊和林の認定

墟遺物などを影寫せるもの七十五幅、それらの所在と地形とを示せる地圖七幅、凡て八十二幅に序論目錄解說數十枚と蒙古探訪地圖二幅とを添へて、一八九三年明治二十六年全部世に出で、關黑なる漠北の古史に大なる光明を與へたり。その探究に據れば、鄂兒歡河の盆地に喀喇科嚕木と云ひし所二所あり。第一は回紇の喀喇科嚕木にして、鄂兒歡河の左岸即西岸に在り、回紇の遺物に非ず。蒙古人の支那より逐出されたる後、回紇の右岸即東岸喀喇巴勒嘎孫の東南に在り、即元の和林城にして、今の額兒迭尼租なり。蓋太宗の和林地方に都を定むる時、和林の近傍にて地を擇び、新に宮城を作りて、幹兒朶巴里克と名づけたるを、和林は五百餘年の舊都にして、合喇豁嚕木の名は殆どと云ふに同じく聞ゆるが故に、蒙古人は幹兒朶巴里克を合喇豁嚕木と呼びて、遂に同名の地二所あることとなれるならん。元史昔都兒の傳に「黑城哈刺和林之地」とあり、黑城は蒙語合喇巴勒嘎孫を譯したるなれば、この名は已に元の時より有りしなり。黑城は城即合喇巴勒嘎孫は、舊城廢墟の義なれば、その名を哈刺和林の上冠したるは、新しき哈刺和林に別たんが爲なり。僕氏家傳は、回紇の國相の後裔の事を述べたるものなれば、その和林は、回紇の和林即喀喇巴勒嘎孫を指せること論なし。張德輝は塔米兒河の西北なる世祖の潛邸の地に赴きて、和林の都には立寄らずと見ゆれば、自泊之南而西、分道入和林城、相去約百餘里とある。和林城も、回紇の和林なるべし。耶律鑄は、元の和林の地に成長したれば、その和林と云へるは、皆元の和林にして、記載最精確なり。その和林城、茲伽可汗之故地也と云へるは、元の和林は回紇の和林の近郊なるが故にして、茲伽可汗の故宮とは異なり。

その城西北七十里、有苾伽可汗宮城遺址と云へるは、方位も距離も善く合へり。城東北七十里、有闕特勤碑と云へるは、距離も近すぎで、方位も稍違へり。喇篤羅甫の鄂兒歡地圖に據れば、東北に非ずして、殆ど正北なり。又雙溪醉隱集に騎吹曲の辭なる白霞の詩の注に、白霞在和林西、後の凱歌の詞なる崑崙の詩の注に、崑崙地名在和林之西南、伯哩行の詩の注に、伯哩、山名也。遜多伯哩者、即此。遜多、亦是山名。皆在和林之西南、崑崙亦在其南。丁丑冬、弄邊者、軍敗之地也。などあるは、今のいづこなるか知らず。戊辰己酉、北中大風の詩、富貴城西畔の注に、和林東北斜連柯河、有古城、唐賈耽地志所謂仙娥河、富貴城者是也。仙娥河、今聲轉爲錫蘭河とある。斜連柯河は、今の色楞格河なり。寬甸、有感の詩の序に、和林城有遠碑、號和林北河外一舍地、爲寬甸、廣輪可數十里、列聖春夏遊幸所也とある。寬甸は、怯堅察罕の地の雅名なるべし。和林北河は、和林河の下流のことか。和林城の北には、近き所に河なし。達蘭河の詩の注に、河名也。在和林北百餘里とあるも、確ならず。金蓮花甸の詩の注に、和林西百餘里、有金蓮花甸、金河界其中、東匯爲龍渦、陰岳千尺、松石窳巒、俯視龍渦、環繞平野、是僕平時往來漁獵遊息之地也と云ひ、又金蓮川の詩もあり、紅叱撥の詩の注に、余避暑所、川野無非金蓮、金蓮川由是得名ともあり。金河は、鄂兒坤河の雅名ならん。和林の西百餘里は、正しくは西南にして、鄂兒坤河の上流の地なるべし。大獵の詩に、禁地圍場、自和林南越沙地、皆浚以暫、上羅以網、名札什、實古之虎落也。比歲大獵、特詔先殄滅虎狼とあるは、多遜の翁奇の圍場と作り方は異なる様なれども、必同じ處ならん。この外、和林又は和林の近傍の事に涉れる詩甚多く、蒙古の古史を考ふる人の參考すべき書なり。また太宗紀六年甲午の條、是春會諸王宴射于幹兒寒河の下に、夏五月、帝在達蘭達葩之地、大會諸王百僚、諭條令云云、又秋帝在八里里峇關峇八思之地、議自將伐宋云云とあり。

て、明年春は和林城の建築に取掛れり。親征錄にも、甲午の年五月、於蒼蘭苔八思
始建行宮大會諸王百官宣布憲章とあり。唐兀の察罕の傳に、太宗即位從略河南
北還清水蒼蘭苔八思之地、賜馬三百、珠衣金帶鞍勒とあるも、太宗の蒼蘭苔八思に
駐まれる時の事にして、清水は八里里を譯したる名ならん。又定宗紀にも、太宗
崩皇后臨朝會諸王百官於蒼蘭苔八思之地、遂議立帝とあり。八里里また清水は、
附きても附かでも同じ處にて、和林の近傍なるべし。雙溪集の詩に、達蘭河あれ
ば蒼蘭苔八思、即蒼蘭峙は蒼蘭河に沿へる小山にて、もあらん。その
ありかも確ならざれども、後の考古探訪家の爲に言ひ置くなり。

綽兒馬罕の巴黑
塔惕征服

綽兒馬罕豁兒赤は、巴黑塔惕の民を降らせき。多遜の史に據
れば、出兒馬昆
は、珀兒沙征伐の命を受け、三萬の兵を率ゐて、一二三〇年、太宗二年、闊喇散に至
れり。速勒壇者、刺列丁は、太祖凱旋の後、印度より客兒蠻を経て、亦思帖木兒に入
り、亦喇克闊喇散馬贊迭囉を徇へ、合里發の領地を侵し、阿在兒拜展を取り、古兒只
の軍を敗り、一二二六年、太祖二十一年、三月、その都提甫里思を取り、その十月、阿
卜合實部を襲ひて、回里、翌年八月二十七日、蒙古の軍と亦思帖木兒の近傍に戦ひ
て、大敗せしが、蒙古の死傷も甚多くして、速に退けり。倭勒甫は、この軍を指揮し
たるは、闊喇散の總督成帖木兒なりと云へり。又蒙古の速に退けるは、太祖の凶
報達したるが爲なりと云へれども、いかゞあらん。者、刺列丁は、二たび古兒只に
逼り、高喀速山南北の諸部聯合の兵を敗り、合里發、木思壇、昔兒と和を講じ、珀兒
沙汗の封冊を受けたり。一二二九年、太宗元年の末に、者、刺列丁は、客兒蠻を圍み、
翌年四月、遂に落したれども、蒼馬思庫思、嚙姆、阿列玻、抹速勒、錢鎖、玻塔米、亞聯合
の兵に擊破られて、帖卜里自に回りに、時出兒馬昆の軍至れり。一二三一年、太

巴黑塔惕の歲貢

宗三年、阿兒囉阿在兒拜展諸州に叛かれ、者、刺列丁は、蒙古を禦ぐこと能はず、逃
れて、庫兒篤の山中に入り、土人に殺されたり。蒙古人は、錢鎖、玻塔米、亞額兒、必勒
客、刺惕の地を蹂躪するに、敢て抗するものなし。翌年、阿在兒拜展に入り、帖卜里
自を降し、歲貢の額を定め、一二三五、一二三六の二年、太宗七年、八年の間に、復額兒
必勒に入り、阿兒囉の甘札を取り、古兒只の諸城を侵し、一二三七年、太宗九年、亦
喇克阿喇必に入り、巴固、蒼惕の兵に敗られ、翌年、再亦喇克阿喇必に入り、七千の
敵を皆殺にせり。諸將兵を分けて、古兒只に屬する諸部、落、阿勒、巴尼亞、大、阿兒、篋
尼亞の諸城を取り、一二三九年、太宗十一年、裏海、黑海の間に、全境皆定まり、翌年、出
兒馬昆卒し、副帥拜住、その任を繼ぎたり。出兒馬昆、即綽兒馬罕は、一たびは、巴固
蒼惕の軍を擊破りたれども、その國を平げたるに非ず。その國の亡びたるは、旭
烈兀西征の時にして、憲宗八年の事なり。祕史に、綽兒馬罕は、巴黑塔惕の民を
降せりと云へるは、珀兒沙又は、西亞細亞の諸部を平げたるを指せるなり。
その地、好く物好しと云はれたり。こ知りて、
城冠宮殿皆沈檀烏木、壁白黑玉、產大珠曰、太歲、彈、蘭石、瑟瑟、金、
剛鑽之類、帶有值千金者、人物頗秀於諸國、所產馬名、脫必察、
あるには、綽兒馬罕豁兒赤を、すぐそこに、探馬に坐ゑて、
馬臣の語原にして、探馬にすうるは、探馬臣とすることなり。故に、明譯には、就令
綽兒馬罕等、爲探馬赤官、爾鎮其地と譯せり。等の字は、衍なり。原文には、蓋探
馬は、鎮戍の義にして、探馬臣は、鎮戍の官、探馬赤軍は、鎮戍の兵なり。元史、兵志に
「探馬赤軍、則諸部族也」とあるは、鎮戍の兵に、諸部族を用ひたるが故に、しか云へ

るなり。趙翼の二十二史劄記に「探馬赤軍名謂兵之矯捷者」とあるは恐らくは探馬の原義にあらじ。黄なる金、黄ばめる金ある。納忽惕（納忽惕は器物か。明本旁譯）金欄、總金欄、眞珠、東珠、頸長く、脚高き脱必察兀惕（西使記に見えたる脱必察の複稱なり。明譯に「西馬ト喇惕施乃迭兒曰くこの書方は、西亞細亞にて今も大に貴ばるゝ謂はゆる秃兒科曼馬の種類にあてはまれり。第十五世紀の委古兒支那字引に、脱必察は大西馬と譯せられたり。沙兀の秃兒奇語の語）古零額劣兀惕、答兀昔乞你都惕（二つともに明本旁譯に駝名とあり。西南亞細亞の特）馱くる合赤都惕、老撒速惕を（明本合赤都惕の旁譯駝名、老撒速惕の旁譯駝とあれば、語か考）年ごとに送らしめておこせ居れ、こ宣へり。速別額台巴阿秃兒の後援に出征したる巴秃不里古余克蒙格を首こせるあまたの諸王は、康鄰を乞卜察兀惕を巴只吉惕を收めて、額只勒（前卷の亦的勒）札牙黑なる水ある河を渡り、篋格惕

西方十一部の平定

太宗紀の西域征伐

西史の巴秃西征の摘録

（上文の）の城を破りて、幹嚕速惕を殺して、盡くるまで掠めたり。（幹嚕速惕の嚕を前卷も上）阿速惕薛速惕（前卷の）孛刺兒（上文の）蠻客兒蠻乞瓦（前卷の乞瓦綿客兒綿上）を首こせる城ごもの民を虜へて、降らしめて、譯惟阿速惕等城百姓虜得虜了、歸附得歸附了。答魯合臣探馬臣を置きて回れり。（巴秃の西征は、本書の記録には一語もなく、元史太宗紀には、七年乙未春遣諸王拔都及皇子貴由皇姪蒙哥征西域。九年丁酉春蒙哥征欽察部破之、擒其酋八赤蠻。十一年己亥冬十一月蒙哥率師圍阿速蔑怯思城、閏三月拔之。十二年庚子春、皇子貴由克西域、未下諸部遣使奏捷。冬十二月詔貴由班師とあるのみにして、その外定宗憲宗本紀、速不台昔里鈴部等の傳に、答魯合臣探馬臣の敘事あるに過ぎざるに、主吠尼喇失惕の舊史、合篋兒の金帳史、倭勒甫の蒙古史、喀喇姆津の嚕西亞史などに由りて、今はその事蹟を補ひく明かになりたれば、こゝにト喇惕施乃迭兒に據りてその事蹟の概略を補ひ述べん、抹哈惕教徒の記述に依れば、多遜第二第六一九頁以下、蒙古の軍は、一赤三年の全夏の閒進みて、秋には不勒噶兒の國の近傍、佛勒噶兒の國を撃たしめ、速不台を遣り、速不台は、不勒噶兒の都に進みて攻め落し、その民を屠り又は奴隸として引き去れり。その時、酋長二人自ら來て諸王に降り、赦されし

が、その後叛きて速不台は再平げに遣られたり。嚙西亞の史略喇姆津第三第二七〇頁には、巴提即巴秃は一二三六年の冬佛勒嚙河に近く不勒嚙兒の都より遠からざる處に多遜二六二三、蒙古の諸王は軍議の後、その軍を擴げて圍獵の時失暢に依るに、進まんとして決したり。蒙古は海裏海に近く左軍を率ゐ、乞魄察克の如く廣がりて進まんとして決したり。蒙古は海裏海に近く左軍を率ゐ、乞魄察克の豪會の一人なる巴出曼と阿薛の民に屬する喀察兒幹果刺とを擒にせり。巴出曼は久しく追兵を避けて、盜賊逃民の軍を聚め、常に蒙古の軍を苦めて、時時掠奪を行ひたりき。その住所を屢變へて阿提勒河の畔の林に身を匿せる故に、それを捕ふること難かりき。曼古は小船二百艘を作らしめて、一艘に百人づつ載せ、弟不者克と二人各船隊の半を以て兩岸の林を搜したり。ある處にて蒙古人は、新に棄てたる陣營の遺物を見出し、一人の老婦は、巴出曼の鳥に入りたることを告げたり。その處に舟一艘も無かりし故に、巴出曼を追ふこと能はざる折しも、俄に強風起りて、水を吹き去れり。蒙古の軍は、河を徒涉りして、巴出曼を不意に捕へ、その眾を溺らし又は殺せり。巴出曼は、曼古の手に殺されんことを願ひたれども、曼古は、不者克に命じて斬らしめたり。阿薛の酋長の一人なる喀察兒幹果刺も斬られたり。蒙古の諸王は一二三七年の夏をその國にて過し、その年に巴秃幹兒答巴兒孩、喀丹、不哩庫勒、李克沙、不兒塔思を攻めき。巴兒孩は、喇失暢に依るに巴秃の弟なり。普刺諾喀兒闊尼は、別兒喀と云ひ元史憲宗紀には西方諸王別兒哥とあり。李克沙は、蓋抹克沙にして、今佛勒嚙河の中流の西に住める部族にその名あり。嚙卜嚙克は、額提里亞河の邊なる抹克薛勒と云ふ民のことを言へり。不兒塔思は、馬速の亦思塔黑哩の巴兒塔思別兒塔思にて、第十世紀には阿帖勒河の畔合咱兒の鄰に住めり。巴出曼擒殺の事は、憲宗紀に嘗

元史に見えたる
八赤蠻

嚙西亞史の記載

攻欽察部其酋八赤蠻逃于海島帝聞亟進師至其地適大風刮海水去其淺可渡帝喜曰此天開道與我也遂進屠其眾擒八赤蠻命之跪八赤蠻曰我爲一國主豈苟求生且身非駝何以跪爲乃命囚之八赤蠻謂守者曰我之竄入于海與魚何異然終見擒天也今水廻期且至軍宜早還帝聞之即班師而水已至後軍有浮渡者」とあり。速不台の傳には、乙未太宗七年、太宗命諸王拔都西征八赤蠻、且曰聞八赤蠻有膽氣、速不台亦有膽勇、可以勝之。遂命爲先鋒、與八赤蠻戰。繼又令統大軍、遂虜八赤蠻妻、子於寬田吉思海。八赤蠻聞速不台至、大懼、逃入海中、とありて、擒殺と云はず。蓋八赤蠻を先に破りたるは速不台にて、後に擒にしたるは憲宗ならん。昔里斡部の傳に、乙未、定宗憲宗皆以親王、與速不台帶征西域。明年啓行、斡部亦在行中。又明年至寬田吉思海、とあるは、年序正に合へり。喀喇姆津の嚙西亞史(三、二七二以下)に依れば、不勒嚙兒の都を破壞せる後、塔兒人(即蒙古人)は一二三七年の末に、嚙西亞の境に入り、普嚙思克別勒果囉惕等の城を取りて、哩牙贊に至り、十二月二十一日に攻め落して、その民を屠り、その君裕哩は家族と共に殺されたり。喇失暢も哩牙贊と同じ禍に罹れり。喇失暢の史に、亦客の城を攻むる時、庫勒勤傷つけられて死せり。遂にその城を破りて、嚙西亞の君長の一人なる兀兒曼を殺せり。とあり。亦客の城は、幹喀河の畔にある科羅姆納を云ひ、兀兒曼は、囉曼を云へるならん。兀刺的米兒の大公裕哩第二の子兀刺的米兒は、抹思克哇を守り居たりしが、蒙古に破られ、擒となれり。主吠尼の史に、抹闊思の城攻の事あるを、多遜は抹思科に當てたり。又喇失暢の史に、不思略甫の城は、五日攻められて落ち、額米兒兀來提木兒殺されたり」とあるは、兀刺的米兒の擒となれるを誤れるなり。大

元史なる斡羅思
征伐
昔里鈐部の傳
に鈐部從諸王
拔都征兀魯思
至也里魯城大
戰七日拔之と
あり替は贊の
誤なり
斡客思城の攻め
取り

公裕哩はその子兀薛佛羅惕木思提思刺甫を留めて兀刺的米兒を守らしめ兵を率ゐて昔提河抹羅噶河の支河の濱に陣してその弟奇額甫の牙囉思刺甫珀喇思刺甫勒の思委阿脫思刺甫の約束せる援兵を待てり。一二三八年二月二日、蒙古人は兀刺的米兒を圍み、八日に城破れ、住民は屠られ、大公の一家は皆死せり。喇失惕の史に「大裕兒奇の城を取るに八日かゝれり」とあるは、大公裕哩の都なる兀刺的米兒を云へるならん。その後蒙古の軍は數隊に分れて諸方に動き、城を破り邑を荒して殺掠を肆にせり。大公裕哩は猶昔提河の濱に居て、三月四日に攻められ、その兵の多數と共に殺されたり。巴提は諸物果囉惕に向ひしが、一百噶里計の處に到りし時、遽に降りて科在勒思克に向へり。その城の民勇にして善く禦ぎ七週に到りて始めて降りて、巴提はその民を屠りて、その城を卵巴里克惡き城と名づけたり。この後蒙古人は、玻羅物次(即奇魄察克の國に還り、兒尼果甫の米海勒は、奇額甫の君となれり)憲宗紀に「復與諸王拔都征斡羅思部、至也烈贊城、躬自搏戰、破之」とあるは、哩牙贊の戰を云へるなり。速不台の傳に「辛丑、太宗命諸王拔都等討兀魯思部主也烈班爲其所敗、圍禿里思哥城、不克、拔都奏遣速不台督戰、速不台選哈必赤軍怯憐口等五十人赴之、一戰獲也烈班、進攻禿里思哥城、三日克之、盡取兀魯思所部而還」とあり。也烈班は、噶西亞諸侯の宗主なる裕哩大公を云へるに似たり。洪鈞曰く「俄史謂錫第河之戰、蒙古軍亦受創、或係先敗後勝、禿里思哥は、科在勒思克の訛なるべし。但此等の戰は、喇失惕に依れば一二三七年即太宗十年、喀喇姆津に依れば一二三八年即太宗十一年の事なるを、傳に「辛丑、太宗十三年」と云へるは、誤れり。喇失惕に依れば一二三八年の秋、喀丹は昔兒略思を征し、その冬會長禿勤(か)を殺せり。失班不者克不哩は臣察克

の一部分なる篋哩姆の國を侵せり。巴兒孩は、奇魄察克を取り、篋哩惕の會長を擒にせり。その冬、□□は蓋曼古ならん。不哩喀丹と共に曼噶思の(米客思とも讀まる)城を攻めて、六週の圍の後に取れり。一二三九年の春、庫克歹は、提木兒略哈里亞鐵門を抜き、近傍の諸國を取れり。曼噶思また米客思の攻撃の事は、元史に屢見えたり。太宗紀に「十一年己亥冬十一月、蒙古師圍阿速篋怯思城、閏三月、拔之」とあるは、春を冬とせり。昔里鈐部の傳に「己亥冬十一月、至阿速篋怯思城、負固、久而不下。明年春正月、鈐部率敢死士十人、躡雲梯先登、俘十一人、大呼曰、城破矣。眾蟻附而上、遂拔之」とあるは、甚委し。但落城の時序は、集史より一年後れたり。土土哈の傳に「父班都察、從征麥怯斯有功、拔都兒の傳に「兄馬塔兒沙、從憲宗征麥各思城、爲前鋒、將身中二矢、奮戰拔其城」などあり。噶西亞の史に依れば、喀喇姆津四六頁以下、巴提は、玻羅物次を平げたる後、再噶西亞を侵し、大公の國を嚇し、俄に南に轉じて珀喇思刺甫勒を破り、徹兒尼果甫を破り、奇額甫に使を遣り、降服を勸めたるに、その使殺されたり。蒙古人の大軍は、四方より圍み攻めて、遂に奇額甫の大城を抜き、篤米惕哩を擒にせり。蒙古の大軍は、四方より圍み攻めて、遂に奇額甫の大城を抜き、篤米惕哩を擒にせり。巴提は、篤米惕哩を殺さずして、伴へり。篤米惕哩は、巴提に勸めて、富饒なる洪噶哩に攻め入らしめて、噶西亞の蹂躪を緩めたり。と云はる。喇失惕に依れば、諸王庫裕克曼古は、幹歌台汗より歸朝の命を受けて、一二三九年の秋に軍を去り、巴秃の王はその兄弟等と諸王喀丹不哩木者克と共に、噶西亞人と喀喇喀勒帕克(黑帽)人とを征伐し、九日に民格兒勒の大城を、その後兀刺的米兒の諸城を攻め取れり。到る處に地を荒し、城を破れる後、軍を合せて兀刺的米兒の子兀徹思刺甫の城を攻めて三日に取れり。別喇津は、喀篋捏惕の君亦匝思刺甫兀刺的米囉委赤を云へりと考へたり。民格兒勒の

大城は、即本書の蠻客兒蠻乞瓦にして、即奇額甫の城なり。本書に「答嚕合臣探馬臣を置きて回れり」とあるは、全軍回れるに非ず、喇失惕の庫裕克蒙古即古余克蒙格等の回れるを云へるなり。然れども元史太宗紀に「十二年庚子春、皇子貴由克西域未下諸部遣使奏捷。冬十二月詔貴由班師」とあれば、二王の回りたるは、奇額甫を平げたる後にして、十二月に蒙古に歸着したるならん。この後巴禿速不台等は、一二四〇年太宗十二年の末別軍を遣り波蘭に入らしめ、一二四一年太宗十三年全軍洪噶哩に入りたるが大侵略あり。先に主兒扯惕莎郎合思の處に出征したる札刺亦兒台豁兒赤の後援に、也速迭兒豁兒赤を出征せさせたり。探馬に居れり勅ありき。(この主兒扯惕は、萬奴の國を云ふ。莎郎合思は高麗人を呼べる蒙古語。莎郎合の複稱なり。元史忠義傳四に朴賽因不花、字德中、肅良合台人」とある。肅良合は即莎郎合台はの義にして、即高麗の人と云ふに同じ。后妃傳に「順帝完者忽都皇后奇氏、高麗人」とありてその冊文に「香爾肅良合氏」とあり。錢大昕曰く「元人稱高麗爲肅良合。肅良合氏者高麗氏也。猶河西人稱兀氏、擧其部不擧其族。或謂改奇氏曰肅良合者蓋未通于國語。普刺諾喀兒關尼の鎖闌格思と云ひ、嚙卜嚙克の鎖闌噶と云ひ、中世抹哈篋惕教徒の記録に速郎略と云へるは、皆高麗を指せるなり。然るに喇失惕は、蒙古の十二行省を記して出兒扯即女直と鎖郎略とを第二行省とし、高麗を第三行省とし、高麗の外に鎖郎略ありて別の行省をなせるが如く書きたることにつきては、白鳥博士嘗て歴史地理第八卷第五號新羅の國號に就てと云へる

論文にその誤を辨ぜり。擲米惕の蒙古字引には、鎖龍豁思は、北高麗人又は索倫人」とあり。高麗の上は北の字を加へたるは、喇失惕の文に泥みて斟酌したるに非ずや。又今の索倫人は、契丹の遺種にして、黑龍江省の地に住み、韓人とは關係なきものなるをその音の近きに由りて附會したるに似たり。果勒思屯思奇の蒙古字引には、鎖樂果思鎖樂果惕は、高麗、高麗人」とありて、北の字を加へず。蒙古と女真高麗との關係は、元史の紀傳と高麗史の世家列傳とに見ゆれば、今二書の文を節約して、その大要をこゝに述べん。元太祖七年壬申、契丹耶律留哥聚眾于隆安、自爲都元帥。太祖命按陳那衍行軍至遼、留哥降之。既而帝召按陳還、而以可特哥副留哥屯其地。八年癸酉春、眾以遼東未定、推留哥爲遼王。耶律留哥傳、改元元統(太祖紀)九年甲戌、金遣使青狗誘留哥以重祿、使降不從。青狗度其勢不可、反臣之。宣宗怒、留哥傳、以招討蒲鮮萬奴爲威平路宣撫、親征、錄、領眾四十餘萬攻之。留哥逆戰于歸仁縣北河上、金兵大潰。萬奴收散卒奔東京。留哥盡有遼東州郡、遂都咸平。號爲中京。十年乙亥、留哥破東京。可特哥娶萬奴之妻李儂娥。留哥不直之、有隙。既而其屬耶斯不、勸留哥稱帝。留哥不從。潛與其子薛閣奔蒙古(留哥傳)十月、萬奴據遼東、稱天王。國號大真。改元天泰。太祖紀。十一月、留哥入覲。太祖諭以三千人爲質。遣蒙古掙法尤甚、使拘繫以來。可特哥懼與耶斯不、以其眾叛、殺所遣三百人。惟三人逃歸。十一年丙子、高麗高宗安孝王三年、乞奴金山青狗統古與等推耶斯不稱帝于澄州。國號遼。改元天威。以留哥兄獨刺爲平章。置百官。方閱月、其元帥青狗叛歸于金。耶斯不爲其下所殺。僭號僅七十餘日。眾推其丞相乞奴監國。與其行元帥鴉兒分兵民爲左右翼。屯開保州。關金開州守將完顏眾奴引兵攻之。留哥引蒙古軍數千適至、得兒獨刺并妻姚里氏戶二千鴉兒引敗軍東走。留哥追擊之。留哥傳、鴉兒高麗史作

鵝兒高麗史金就礪傳云高宗三年契丹遣種金山金始齊河朔民自稱大遼收國王
 建元天成蒙古大舉伐之金山等席卷而東與金兵三萬戰于開州館金兵不克退守
 大夫營高麗史金就礪傳閏七月金東京總管府移牒高麗告蒲鮮萬奴契丹餘黨之
 亂八月金山始鵝兒乞奴等引兵數萬渡鴨綠江侵高麗寧朔定戎之境高麗史高
 宗世家數萬元史高麗傳作九萬餘金山自稱國王改元天德爾哥還度遼河招撫懿
 州廣寧移居臨潢府爾哥傳是時木華黎平錦州誅張致拔蘇復海三州斬完顏眾家
 奴萬奴等率眾十餘萬遁入海島木華黎傳十月萬奴降蒙古以其子帖哥入侍既而
 復叛僭稱東夏太祖紀東夏高麗史作東真十一月契丹賊履冰渡大同江遂入西海
 道十二月屠黃州十二年丁丑四月萬奴兵破大夫營又有女真黃旗子軍叛金九月
 自婆速府渡鴨綠江屯古義州城十月高麗將趙冲擊逐之高麗史契丹乞奴爲金山
 所殺統古與復殺金山而自立喊舍又殺之亦自立爾哥傳喊舍高麗史作喊捨太祖
 紀高麗傳作六哥十三年戊寅九月契丹賊保江東城高麗史太祖命哈真札刺率師
 追討太祖紀哈真札刺高麗傳作哈只吉劊刺遼王爾哥將契丹兵爾哥傳與東真國
 元帥完顏子淵兵二萬皆屬之高麗史兵凡十萬爾哥傳冬入高麗破和孟順德四城
 高麗史麟州都領洪大宜迎降洪福源傳十二月蒙古使至高麗營求糧徵兵高麗輸
 米一千石十四年己卯正月蒙古東真與高麗將趙冲金就礪合兵平契丹賊賊捨自
 縊死哈真等還高麗史劊刺與趙冲約爲兄弟弟請歲輸貢賦劊刺曰爾國道遠難於
 往來每歲可遣使十人取之高麗傳取之原文作入貢然太宗四年十一月高麗王上
 皇帝狀引蒙古元帥語曰道路甚梗爾國必難於來往每年我國遣使佐不過十人可
 資持以去然則是往取而非來貢也高宗遣尹公就崔逸以結和牒文送劊刺行營劊
 刺遣使報之太祖又遣蒲里爺也持詔往諭之高麗傳是歲太祖西征皇弟幹赤斤居
 守蒙古秘史九月幹赤斤及元帥合臣即哈真副元帥劊刺等各以書遣使十人往索

方物自是蒙古使者每歲至高麗或歲再至焉高麗傳十五年庚辰爾哥卒妻姚里氏
 權領其眾爾哥傳十七年壬午十月蒙古使着古歟等至高麗察其納款之實十九年
 甲辰二月着古歟復使高麗十二月又使焉盜殺之于途自是連七歲絕信使矣高麗
 傳二十一年丙戌爾哥長子薛闌歸臨潢襲父爵爾哥傳時金平章葛不哥行省於遼
 東與蒲鮮萬奴相依太宗元年己丑命撒里答火兒赤與吾也而薛闌王榮祖等征遼
 東吾也而王珣傳薛闌據爾哥傳拔蓋州宣城石城等十餘城葛不哥走死王珣傳薛
 闌行收其父遺民移鎮廣寧府行廣寧路都元帥事爾哥傳三年辛卯八月以高麗殺
 使者命撤禮塔率師東征太宗紀吾也而薛闌王榮祖移刺買奴等從之吾也而爾哥
 王珣移刺捏兒傳圍咸新鎮屠鐵州高麗史西京郎將洪福源九月過西京入黃鳳州陷
 率編民千五百戶導撤禮塔攻州郡未附者洪福源高麗傳九月過西京入黃鳳州陷
 宣郭州高麗史取城凡四十餘太宗紀使阿兒赤與福源抵王京招諭高宗遣弟懷安
 公王挺請和高麗傳十一月庚戌蒙古兵屠平州辛亥元帥蒲桃她巨唐古等領兵至
 京郊王遣御史閣曠犒師十二月壬子朔蒙古軍分屯京城門外閣曠復犒之癸丑撤
 禮塔遣使入闕付文牒諭降丙辰遣淮安公即懷安公挺以土物遣撤禮塔甲戌撤禮
 塔復送牒徵索甚鉅庚辰王獻國驢遣使上表辨疏高麗史撤禮塔遂承制置京府及
 州縣達魯花赤七十二人以鎮之太宗紀洪福源傳四年壬辰正月撤禮塔班師高麗
 史太宗遣使以靈書諭王高麗傳高麗史云都旦等二十四人來三月王遣中郎將池
 義深錄事洪巨源金謙等賈國驢牒文送撤禮塔屯所高麗傳四月遣上將軍趙叔昌
 侍御史薛慎如蒙古上表稱臣獻方物高麗史五月太宗復下詔諭之高麗傳高麗史
 云七月蒙古使人來以將征萬奴徵兵太宗四年十一月高麗陳情表六月高麗權
 臣崔瑀齊王遷都以避蒙古之亂七月王發開京入江華島遣使于諸道徙民山城海
 島高麗史八月太宗復遣撤禮塔領兵討之高麗傳高麗傳云六月噶高宗盡殺朝廷

所置達魯花赤七十二人以叛。然高麗史所載唯有七月王遣內侍尹復昌往北界諸城奪達魯花赤弓矢却被達魯花赤射殺。及八月朔西京巡撫使閔曦使將校等謀殺達魯花赤不成二事而無盡殺七十二人之事。觀所載九月答蒙古官人書十一月答蒙古沙打官人書上皇帝陳情表又狀答撒禮塔書十二月寄蒙古官人書又答大官人書皆極辨疏竄海島闕朝觀數事出不得已而無一語及盡殺朝官之事。高麗傳載太宗五年詔數高麗五罪亦唯摘舉鎖事而不及是事。然則是事之爲妄傳無可疑矣。十月王遣將軍金寶鼎郎中趙瑞章上表陳情高麗傳十二月撒禮塔攻處仁城有一僧射殺之王嘉其功授官高麗史別將鐵哥以軍還令洪福源領已降之人留屯西京高麗傳西京據高麗史五年癸巳二月詔諸王議伐蒲鮮萬奴遂命皇子貴由諸王按赤帶國王塔思將左翼軍討之太宗紀塔思據木華黎傳兀良合台速不台子札忽兒臣孛孫屬貴由移刺買奴捏兒子屬按赤台石抹查刺也先子石抹孛迭兒屬塔思王榮祖不知所屬皆從征速不台孛孫移刺捏兒王珣石抹也先子石抹孛迭兒諸傳四月詔諭高麗王悔過來朝且數其五罪高麗傳蒙古軍至遼東圍南京(即東京)城堅如立鐵九月石抹查刺奮先登眾軍乘之而進遂克之擒萬奴遼東平石抹也先石抹阿辛傳西京人畢賢甫與洪福源等謀殺高麗宣諭使鄭毅十月崔瑀遣家兵三千與北界兵馬使閔曦攻西京獲賢甫斬之福源逃擒其父大純(即大宜弟)百壽悉徒餘民於海島西京遂爲丘墟高麗史福源以所招集北界之眾歸蒙古處於遼陽瀋陽之閒洪福源傳六年甲午春蒙古兵引還高麗史五月帝以福源爲管領歸附高麗軍民長官仍令招本國未附人民洪福源傳七年乙未命唐古拔都兒與福源領兵征高麗拔十餘城高麗傳侵掠連年不已高麗史十年戊戌薛閣卒子收國奴襲爵易名石刺亦從征高麗有功雷哥傳五月高麗人趙玄習李元祐等率二千人降蒙古命居東京受福源節制十二月高宗遣將軍金寶鼎御史宋彥琦等奉表朝蒙古高麗傳十一年

撒兒台を誤れる
札剌亦兒台

己亥四月蒙古兵還高麗史五月詔徵王入朝王以母喪辭六月乃遣使奉表入朝十月諭王徵其親朝十二月王遣使入貢十二年庚子三月又入貢五月復詔諭之十二月入貢高麗傳十三年辛丑四月以族子永寧公綽爲己子入蒙古充魯花(高麗史)秃魯花は蒙語質子なり定宗憲宗の世歲貢入らずして四たび征伐せられしが憲宗九年に世子僖元宗順孝王を質子としてより永く元の東藩となりき秘史の札剌亦兒台豁兒赤は撒兒台豁兒赤の誤寫又は誤譯ならん撒兒台は親征錄に撒兒塔火兒赤太宗紀高麗傳高麗史に撒禮塔洪福源の傳に撒里塔吾也而のこと多ければこれも正しくは耶律雷哥の傳に見えたる如く撒兒台なるべくして親征錄吾也而の傳なる火兒赤は即豁兒赤なり也速迭兒豁兒赤は何人なるか東征の役に與れる諸將の誰なるか考へ得ず蒙古の朝には也速迭兒と云へる人甚多く康里の也速解兒は元史に傳ありその外康里の艾兒拔都の子也速答兒珊竹帶の紐隣の子也速答兒札剌兒の阿刺罕の子也速迭兒阿速の玉哇失の兒也速歹兒氏族志には兀良合の速不台の從孫也速解兒達達兒の忙兀台の叔父也速歹兒などあれどもいづれも時代稍後れてこゝの也速迭兒豁兒赤とは思はれず耶律薛閣吾也而唐古などの別名には非ずや

不哩古余克を訴
ふる巴秃の使

巴秃は乞卜察黑惕(察兀惕)の征伐の上より幹歌歹合罕に
使より奏して遣るには長生の上帝の力にて合罕叔父の福
にて篋格惕の城を破りて幹嚕速惕の民を虜へて十一國の

民を正ただしに入いらしめて金の縻繩ひづなを退そけ扯ひきて別わかるゝ筵會うたげに筵會うたげせんご云いひ合あひて大おほなる天幕てんまくを起たてゝ筵會うたげする時とき我われはこゝに居をる諸王みこの兄君あにきみ（蒙語蒙語阿合阿合）こなれるごなりて一二ひとふた蓋さかづきの喝蓋あひざんを先さきに飲のみたりこて我われに不ぶ理り古余克ぐよく二人怒いかりて、筵會うたげに筵會うたげせず上馬じやうばせられたり上馬じやうばして不ぶ理り言いはく巴禿はともご齊等ひしなみになりて居をるに先さきにいかんぞ飲のみたりし髻ひげある姫おんなもご齊等ひしなみになりては踵くびすにて壓おして足掌あしのひらにて踏ふまんご云いひき古余古言ぐよくごいく彼等かれら箭筒やなびある姫おんなごもをその胸前むなを柴打しばうたん我等われらは彼等かれらをこ云いひき額勒えらく只吉歹ぢぢの子哈兒合孫がすん言いはく木きの尾おしを接つがん彼等かれらを（明明他後頭接かれのうなじにつが與他箇木尾子かのひとのきのを）ご云いひき我等われらこそは別ことなる肝きもある敵てきの民たみの處ところに出馬しやうばせさせられて善よ

古余克等を太宗の怒り

くか宜よろしくかなりになれる（明明爲俺每征たのむ了ら這異種いしゆ的の百姓たみ恐おそ事こと有あ合あ宜い不ふ合あ宜い處ところ）ご云いひて居をるに不ぶ理り古余克ぐよく二人ふたりにかく云いはれて相談さうだんなく散さんぜられたり今合罕いまかかん叔父ぢふの聖旨せいし知しめせご奏まうして遣やりき。巴禿はとの此この言ことに合罕かかん甚いたく怒いかりて古余克ぐよくを見まえさせずして宣のりたまはくこの下郎げぢやうは誰たれの言ことに從したがひてか兄人あにびとを口一杯くち一杯に言いへる獨ひとの卵腐たまごくれ（明明捨すつるごはなんぢをこしつるがひつものたまごを）即すなはち兄人あにびとの胸前むなに逆さかひたりき先驅さきに放はなりてその十じゆの指ゆびの爪磨つめ盡つくるまで山やまの如ごとき城しろごもに爬は登のぼらしめん探馬たんばに放はなりてその五ごの指ゆびの爪つめ剝はぐるまで築きづける堅かたき城しろごもに爬は登のぼらしめん汝なんぢに歹あしき下郎げぢやう哈兒合孫がすんは誰たれに學まなびてか我等われらの親みうちを口一杯くち一杯に大言たいげん言いひた

りし。古余克哈兒合孫二人を共に遣らん。哈兒合孫をば斬らしむべきなりき。偏頗したり云はん。汝等(明)譯罪本當殺若殺了阿人必說我偏心。不哩をこそは云へば、巴秃に言ひ、察阿歹兄に言ひて遣れ。察阿歹兄知れ(明)譯不哩是察阿歹兄の子。教巴秃對察阿歹兄處說將去(明)譯去。宣へり。

忙該阿勒赤歹等の奏議

諸王より忙該(蒙)格、官人等より阿勒赤歹(亦魯該の親族に長となれる人。卷九に見えたり)、晃豁兒台(下文に依れば札撒兀掌吉を(功臣の第五十)に居る人なり)、成吉思合罕爾が父の聖旨首こせる官人等建議して奏さく、成吉思合罕爾が父の聖旨に、野の事は、野にてのみ裁くなりき。家の事は、家の内にてのみ裁くなりき。(野の事家の事は、關外關合罕恩賜せば、合罕は古余克に怒りておはせり。おはす)野の事なり。(ば)巴秃に委ねて

古余克等を太宗の叱り

遣らば宜しからんか」と奏せば、この言を合罕は可とし怒息みて、古余克を見えさせて、教訓にて言に聲立て、出征して往く間に、譬ある人の譬を剩さざりき(明)譯將軍人都打偏。云はれたり、汝軍の人の顔色を挫きて行けり(明)譯挫了威氣。云はれたり、汝、斡、魯、速、惕の民をかゝる。汝の勢怒に怕れて降られたり。汝、斡、魯、速、惕の民を、獨にて降したるが如く思ひて、猛き心を持ちて、兄人に逆ひ來ぬ。汝、成吉思合罕我等の父の聖旨にあり。眾は懼れしむ。深は死なしむ(明)譯。人多則人懼。水深則人死。云へる。ここあらざりしか。獨にて爲果せたるが如く(思ひ)、速別額台不者克(蒙)格の弟世系表の大王。二人の蔭に行きて、多き眾にて力を合せて、斡、魯、速、惕乞

ト察兀惕を降して、一二の斡魯速惕をト察兀惕を得て、粘邏粘邏兀勒の蹄をも得置かざるに丈夫振りて、一たび家より出でて、何も獨にて爲果せたるが如く、言聲を惹きて來ぬ。汝來ぬは、原文に來てとあれども、てはぬの誤ならん。你自己粘邏の蹄子不會置得、逞好男子、初出門、便惹是非はじめて、粘邏はもんやなほひくよし、忙該阿勒赤歹晃豁兒台掌吉等に、兀りたる心を前の伴となりて止めて、沸きたる鍋を寛き柄杓選兒格となり水を、静選兒格まらせられたるぞ。これは野の事なれば、巴秃をして裁かしめん、と云へり。古余克哈兒合孫二人を巴秃知れ、と宣ひて遣りぬ。不哩をば察阿歹兄知れ、と宣へり。古余克

和 巴秃古余克の不

り、乞魄察克の殘黨と戦へり。喇失惕の史に據れば、途にて一夏一冬を過したる後、諸王は一二三年、朶唎格捏合屯稱制の二年癸卯に、各その領地に歸れりとありて、その諸王の内には、庫余克も加はれり。されども、巴秃と古余克との不和は、解けざりしと見えて、古余克の母なる攝政合屯大會を開きて、合罕を擇び立てんとしたる時、巴秃は、合屯の意、古余克を立てんことを欲すと聞き、馬の足弱れりと稱して、出發を延引せり。この時、巴秃は、諸王の中に、威望ある人なりし故に、朶唎格捏合屯は、巴秃を待ちて大會を延ばし居たれども、巴秃竟に至らざるに由り、一二四年、合屯稱制の五年丙午の春、巴秃なしに大會を開きて、古余克を合罕に戴けり。一二四八年、古余克合罕の三年、戊申の春、古余克疾ありて、潛邸の時より領し居たる額米兒の地方に赴きたるに、拖雷の寡婦莎兒合黑塔尼は、西巡の目的は、巴秃を襲ふにあらんと疑ひて、使を遣りて、巴秃に注意を與へたれば、巴秃は、みづから朝謁せんと思ひ、阿刺克塔山に至れる時、偶古余克合罕は、途のみにて崩じたり。この巴秃古余克の不和の事は、喇失惕の史に由りて傳はれるのみにて、元史本紀には無し。不哩の事は、元史憲宗紀元年即位の大會の條に、諸王也速忙可不里火者等、後期不至、遣不憐吉解率兵備之とあり。也速忙可は、世系表なる察合台太子の子也速蒙哥王、火者は世系表なる定宗の子忽察大王なり。喇失惕に據れば、失喇門定宗の姪失烈門又昔列門關札幹古勒即忽察納古忽察の弟、忽忽三王の謀反せる時、不哩も謀に與りたれば、一二五二年、憲宗二年に、巴秃の處に送られ、巴秃の命にて斬られき。かくて、巴秃は、不哩が嘗て、爛醉の狀にて吐ける惡口に對し、復讐を爲せり。多遜二、三、六、九の事に、つきて、嚙下嚙克は、又次の如く言へり。この旅僧は、一二五四年、憲宗四年に、突兒其思壇を通りて還りし時、我また不哩の獨逸奴隸ども、の居りし塔刺思の町にて、問ひき。不哩

巴秃不哩の不和

の事につき、兄弟教會の同僚安篤列亞思語れり。安篤列亞思に、又我は會議所に
て撒兒塔黑と巴禿との事を問ひき。彼等の主人なる不哩のある折に殺されたり
しかば、ある日酔ひて居りし時、その臣屬に語りて我は巴禿の如く、成吉思汗の
子孫ならずや。原注。不哩は巴禿の姪又は從弟なりき。いかで巴禿の如くも、額提
里河の岸に徘徊して、そこに遊牧すべからざらんや」と云ひき。それらの言は、巴
禿に告げられき。その時巴禿は、みづから不哩の臣屬に書を贈りて、その主人を
縛りて送ること命じければ、その事を臣屬は爲しけり。その時巴禿は、かゝる
言を言ひしかと不哩に問ひ、不哩はみづから承服せり。然れども不哩は、その時
酔ひて居りしから、醉人を寛恕する習ひなるからとて分疏せり。然るに巴禿は、
「いかんぞ汝は、酔へる時に敢て我が名を、
呼びし」と答へて、その頭を斬らしめけり。」

親衛の制の申筋

又幹歌歹合罕勅ありて、成吉思合罕我が父の處に行き（お
ひ）たる宿衛箭筒士侍衛なる眾の番士の行を新にせん」と諭
し給ふ聖旨を傳へけらく、合罕額赤格の聖旨に依り前にい
かにか行ひたりし。今その（盡の）法に依り行へて勅あるに
は、箭筒士侍衛は前の法に依り、晝その道道を行ひて、日ある

宿衛の勤方

に宿衛に譲りて、外に宿れ」と勅ありき。夜は我等の處に宿衛
宿れ。門の處に家の周に宿衛立て。幹兒朶の後に前に宿衛巡
れ。日落ちたる後、夜行く人を宿衛拏へて宿れ。眾散りたる後、
宿れる宿衛より外に、内裏を指して入る人を拏へたる宿
衛は、その頭を割るゝ程斫りて去けよ。夜急の話ある人來な
ば、宿衛に話して、帳房の北より宿衛一處に立ちて話し合
へ。幹兒朶の房に入り出づるをば、晃豁兒台失喇罕等の札撒
兀は、宿衛と共に治めよ。（札撒兀は、官の名にて、札撒を掌る官なり。札撒
大法官に非ず、只殿中の取締役にて、その名はこゝに始めて出でたれども、その
職務は、卷十に見えたる朶歹扯兒必の殿中を監視せると同じ類なるべし。札
撒兀は、今の蒙古語に札薩克と云ひ、内蒙古四十九旗の旗長の官となれり。）
額勒只吉歹は、信任ある人なるに、夕に宿衛の上を行くこな

宿衛の威殿

り宿衛に拏へられきこ云ふ聖旨に違ひ爲さず宿衛は信任あるものなるぞ」勅ありて宿衛の數を勿問ひそ宿衛の坐の上を勿行きそ宿衛の閒を勿行きそ宿衛の上を行く閒を行く人を宿衛は拏へよ宿衛の數を問ふ人のその日の乗れる驢馬鞍あり轡あるを被たる衣服ごめに宿衛は取れ宿衛の坐の上に誰も勿坐りそ宿衛は纛鼓朶囉鎗器皿を調へよ。飲物食物を稠き肉を宿衛支度せよ」勅ありき。幹兒朶の房車を宿衛調へよ。我等の身軍に出でずば、我等より外に別に宿衛は軍に勿出でそ。我等鷹使ひ圍獵する時、その半を幹兒朶の房車の處に斟酌ひて置き、我等と共に半の宿衛は行け。その半は宿衛の半なり。卷十三三四頁にも、こゝと同じ意味の文ありて「車を(の處に半を斟酌ひて置け」と譯すべき所を「半の上に獲物のを補ひたるは

宿衛の掌る雜務

千宿衛の長合苔安

宿衛四班の長八人

合苔安不刺合苔兒

阿馬勒察納兒

合歹豁哩合察兒

牙勒巴黑合喇兀
苔兒

誤解なりき。斟酌ひて譯すべき宿衛より營盤官語嫩秃兀臣。又嫩秃史兵志三に玉你伯牙の奴秃赤なる火。行き、て幹兒朶の房を下せ。門你赤とある奴秃赤は嫩秃黑赤の訛也。行きて幹兒朶の房を下せ。門に倚りて宿衛の門者立て。眾の宿衛を合苔安千戸知れ」と勅ありき。今太祖の朝の也客捏兀嚙に代れり。又宿衛の班班の官人を任して、合苔安不刺合苔兒二人は、一班となりて議り合ひて、番直に入りて、幹兒朶の右左の邊に分れ居て整へよ。阿馬勒察納兒二人は、議り合ひて一班となりて、番直に入りて、幹兒朶の右左の邊に分れ居て整へよ。合歹(八十八功臣の内)豁哩合察兒二人は、議り合ひて一班となりて、番直に入りて、幹兒朶の右左の邊に分れ居て整へよ。牙勒巴黑合喇兀苔兒二人は、議り合ひて一班となりて、番直に入りて、幹兒朶の(右左の

邊はたに分わかれ居ゐて整ととのへよ。(太祖即位の處には、箭筒士の四班の長四人と八宿衛は總長也客捏兀嚙客捏兀嚙のみを擧げて、四班の)合か答だ安あん不ぶ勒る合か答だ兒る(即前長をば擧げざりしが、これはそれより委し。)合か答だ安あん不ぶ勒る合か答だ兒る(即前合)の班、阿馬勒察納兒阿馬勒察納兒の班、この二班は、斡兒朶斡兒朶の左の邊に營盤して番直番直に入れ、合か歹たい豁こり哩り合か察ちや兒る二人の班、牙勒巴黑合牙勒巴黑合喇兀答兒喇兀答兒二人の班、この二班は、斡兒朶斡兒朶の右の邊に營盤して番直番直に入れ、宣のりたまへり。(太祖即位の處には、諸の營盤を定めて「宿衛」の四班の宿衛を合か答だ安あん知しれ。又「宿衛は、我が身に貼つきて、斡兒朶の周まわりに立ちて、門かどを壓おさへて臥ふせ、宿衛宿衛より斡兒朶斡兒朶に入りて、二人の人酒局ひとしゆきぐを執とれ、勅みことありき。又「箭筒士を也孫脫額不乞歹豁兒忽答黑刺巴勒合也孫脫額不乞歹豁兒忽答黑刺巴勒合は、四の班よふみとなり、箭筒帶せんくびおびたるを、侍衛侍衛の四の班よふみの處ところに列つらなる、箭筒士せんとうしを整ととのへて入れ、」勅みことあり

箭筒士四班の長也孫脫額不乞歹豁兒忽答黑刺巴勒合

侍衛の四班の宿老八人

阿勒赤歹晃豁兒塔孩

帖木迭兒者古

某甲某乙

某丙忙忽台

百官の長額勒只吉歹

直ちよくの宿老おきなを前まへに知しりたりしもの親族しんぞくより任よさして、前まへに知しりたる阿勒赤歹晃豁兒塔孩阿勒赤歹晃豁兒塔孩二人は、議はかり合あひて、一班ひとくみの侍衛侍衛を整ととのへて入れ。(前段の初に官人阿勒赤歹晃豁兒台と並なべ擧あげたれ)帖て木迭兒者古帖木迭兒者古二人は、議はかり合あひて、一班ひとくみの侍衛侍衛を整ととのへて入れ。(こ間まに脱文あらん。二班の宿老足らず。今試に補はば)「某甲某乙は、議はかり合あひて、一班ひとくみの侍衛侍衛を整ととのへて入れ。某丙は、」忙忽台忙忽台に輔たすけさせ知しりて、一班ひとくみの侍衛侍衛を整ととのへて入れ。(太祖即位の時、八千の侍衛の長八人ありて、その八人のなりしが、今は一千ごとの長は無くて、四班の宿老は、一班に二人づつ八人あることとなれり。この八人は、前に知しりたりし者の親族なるに、阿勒赤歹のみは、前に知しりたりし儘なれば、殊ことに斷ことれり。晃豁兒塔孩以下七人は、不合あ斡あ朶あ朶あ豁あ兒あ忽あ兒あ等あの親族なるべけれども、その關係少しも分らず。元史列傳に忙兀台あれども、世祖の朝の「人にて、こ)又合罕あかはん勅あかはんあるには、眾もろくの官人くわんじんごもは、額勒只

缺勤の罰

吉歹を長として、額勒只吉歹の言に依り行へし宣ひて、又勅あるには、番直ある人、番直に入る時、脱さば、前の聖旨の理に依り、三の筈を與へよ。その番直ある人、又再番直を脱さば、七の筈を與へよ。又その人、病理由なく、番直の宿老に相談なく、三たび番直を脱さば、我等の處に行く(勤む)ことを難しししたるなり。三十七の筈を與へて、遠き地に眼の陰に遣らん。又番直の宿老は、番直する番士を點檢せずして、番士番直を脱さば、番直の宿老を罰はん。又番直の宿老は、第三第三に(三日)番直に入る時代り合ふ時、この勅を番士に聽かせよ。勅を聽きてあるに、番士番直を脱さば、勅の理に依り罰はん。この勅を番士に聽かせずば、番直の宿老罪あるこなれ。又番直の

勅の言ひ聽かせ

宿老番士の同等

千戸より上にあ
る番士

宿老は、同等に入りたる我が番士を、我等に相談なく、長こせられたりこのみ云ひて勿責めそ。法度を動かさば、我等に告げよ。死なしめらるゝ理あるならば、我等は斬らしむるぞ。懲さるゝ理あるならば、我等は訓ふるぞ。長こせられたりして、我等に告げず、手足を致さば、拳の報に、拳を、筈の報に、筈を、回さん。宣へり。又外に居る千戸の官人より我が番士は上に在るぞ。外に居る百戸十戸の官人より我が番士の家人は上に在るぞ。外に居る千戸ごも、我が番士に殴ち合はば、千戸の人を罰はん。勅ありき。(これらの勅は、殆皆卷九卷十に跨れる太祖の諭せられたれば、これも太宗即位の初の事ならん。然らば、元史太宗紀元年即位の處に、頒大札撒華言大法令也とあるは、これらの勅を云へるなり。大法令と云へば、國法民法の類かと思ひたりしに、かくの如きも、一幹歌歹皇帝將成吉のなりき。又明譯は重複を厭ひて全文を略きたゞ、一幹歌歹皇帝將成吉

太宗六年の札撒

思時守衛的并眾散班每名各職掌照依舊制再宣諭了一遍書きたれども、さるにては、宿衛箭筒士侍衛の官人等の名も分らぬこととなり、あまりに筆無性なりき。又これらの勅とは異なれども、太宗紀六年甲午の處に法令の如きもの十一章を載せたり。夷狄の法律、實に面白ければ、こゝに引き出して、參考に供せん。まづ夏五月、帝在達蘭達葩之地、大會諸王百僚、諭條令曰と書き出して、第一に「凡當會不赴而私宴者斬」第二に「諸出入宮禁各有從者、男女止以十人為朋、出入毋得相雜」第三に「軍中凡十人置甲長、聽其指揮、專擅者論罪」第四に「其甲長以事來宮中、即置權攝一人」第五に「甲外一人二人不得擅自往來、違者罪之」第六に「諸公事非當言而言者、拳其耳、再犯笞三犯杖四犯論死」第七に「諸千戶越萬戶前行者、隨以木鏃射之」百戶甲長諸軍有犯其罪同、不遵此法者、斥罷」第八に「今後來會諸軍、甲內數不足、於近翼抽捕足之」第九に「諸人或居室或在軍、毋敢喧呼」第十に「凡來會用善馬五十匹、為一羈守者五人、飼羸馬三人、守乞烈思三人、但盜馬一二者、即論死」諸人馬不應絆於乞烈思內者、輒沒與畜虎豹人」第十一に「諸婦人製質孫燕服、不如法者及妬者、乘以騾牛、徇部中論罪、即聚財為更娶とあり。

羊の賦

又幹歌歹合罕宣はく、成吉思合罕額赤格の艱難して立て給へる國民を勿苦めそ、彼等の足を土に、彼等の手を地に置かせて樂ません。皇考の成就せる位に坐りて、民を苦めず、湯

牝馬の賦

(蒙語) 暑連、本義は湯にして、湯より肉汁となり、肉汁湯羊に(湯羊と)此等の國民より羊羣の二歳の羊を、年年に奉れ。百の羊より一羊を出して、その間の貧しく乏しきに與へよ。(明)百姓羊羣裏、可毎年只出一箇二歲羯羊、做湯羊、每一百羊內、可只出一箇羊、接濟本部、落之窮乏者、百者輸牝馬一、牛百者輸牝牛一、羊百者輸粉羊一、爲永制とあるは、)又兄弟(諸の皇族)あまたの男駟馬番士聚らば、彼等の飲物を毎に民よりいかでか征らるべき處處の千戸千戸より、騾馬ごもを出して、擠り、乳擠に牧せしめ、營盤官を常に替へ出して、乳馬飼ひなれ。(明)一諸王駟馬等聚會時、毎每於百姓處、科斂不便、當可教千戸、每年出騾馬并牧擠的人、其人馬以時常川交替、乳馬飼は、兀納忽赤地、兀奴忽赤なる忙兀解

倉庫の設け

とあるも、それなり。然るを元史語解は、この兀奴忽赤を狐捕りなる兀捏格赤と
 間違へ、元史の本文を烏訥格齊と改めたるは、いづもながら亂暴の至りなり。
 又兄弟聚らば給與賞賜を與へん織物貨幣箭筒弓甲武器ご
 もを倉ごもに入れて、財ごもを守らせん。處處より財守穀守
 を擇びて守らせよ。(財ども財守、巴喇合惕巴喇合惕巴喇合惕の單稱は、巴
 喇干なり。原本には巴刺合惕巴刺合惕と書きて、巴刺合惕の旁譯は庫每、巴刺合
 臣は管城的とあれども譯文には倉庫等掌守の人とありて、城守と云はざれば、
 二つの刺は、喇の誤なることうつなし。巴喇干は、擲米惕の蒙古字引に巴兒干と
 書きて家具と譯せり。巴喇合臣は、巴喇合赤とも云ふ。元史世祖紀至元十七年九
 月の處に「守庫軍盜庫鈔八刺合赤分其贓縱盜遁去詔誅之」とあり。元史語解は、八
 刺合赤を巴喇嘴齊と改めて「管理什物入也」と注したるは、即この財守なり。明譯
 は、一賞賜的金帛器械倉庫等掌守の人、可教各處起人來看守。
 太宗紀元年即位の續に始置倉廩)又國の民に營盤の水を分けて與
 へん。營盤に營盤せしめん。千戸千戸より營盤官を擇びて出
 さば可からん。(明譯一百姓行分與他地方做營盤住其分派之人、

營盤の分與

徹勒地方の井掘

可於各千戸内選人做。水草を逐ふ遊牧の民には、水は甚大切にして、
 水あれば草あり。この譯文に水の字を脱した
 るは疎)又徹勒の地(卷七に見えたる桑昆の通げ)には、獸より外は住
 まざりき。民に寛げんご。察乃(卷九に見えたる主兒扯歹の族に)委兀
 兒台二人の營盤官を頭ごして、井ごもを掘らせて甃せよ。(明譯
 一川勒地面先因無水、止有野獸、無人住。如今要散開百姓住坐、
 可教察乃畏兀兒台兩箇去踏驗中做營盤的地方教穿井者)
 又我等の使走るに、國民に倚らしめて走らせたり。走る使の
 も行程遅れたり。國の民にも苦ませたり。今我等全く定むる
 には、處處の千戸千戸より札木臣(驛の事務)兀刺阿臣(驛馬を)
 出して、坐ごも坐ごもに(站を坐る置く)站(驛)を置きて、使を要事
 なく國民に倚らせず、站に依り走らせば可からん。(明譯一使臣

站の設け

往來沿百姓處經過事也。遲了百姓也。生受。如今可教各千戶每
 出人馬立定站赤。不是緊要事務。須要乘坐站馬。不許沿百姓處
 經過。札木臣は、站赤とも云ふ。その制は、元史に委し。後に云ふべし。兀刺阿臣は、
 齊と改めて、司驛站人也と注せり。又親征錄に、助貧乏置倉戍、勸驛站とあるは、こ
 の新制の第一第三第六の三章を略記したるなり。元史太宗紀は、親征錄に本づ
 きて、「始置倉廩立驛傳」と記し。これらのごもを察乃孛勒合答兒
 (即前の不勒合答兒) 二人考へて、我等に建議したれば、可からんかと思
 ひて(思はる)察阿歹兄知れ。この言はるゝ事ごも宜しければ、
 可ごせば、察阿歹兄より爲せと宣ひて遣りたれば、察阿歹兄
 は、問ひて遣りたるこれらの事ごもを都てを可ごして、「かく
 便爲せ」と云ひて來ぬ。又察阿歹兄言ひて來ぬるに、我は、こゝ
 より札木惕(複稱)を迎へ接合せん。又こゝより巴禿の處に使

察阿歹の協贊

を遣らん。巴禿も迎へて札木惕を接合せよと云ひて、又言ひ
 て來ぬるには、都てより札木惕を置かする事は善きよりも
 善しと提説せり。と云ひて來ぬ。

内外大同

それより韓歌歹合罕宣はく(以下的一段は、未なる驛舍の驢馬ど
 き處なるを、太宗の言として記せり。蓋史臣は、これら)「察阿歹兄巴禿を
 の政令を太宗の口より聞きて筆記したるなるべし。」察阿歹兄巴禿を
 首ごせる右手の諸王兄だち弟だち眾韓惕赤斤那顔也古を
 首ごせる左手の兄だち弟だち眾の諸王内地の公主だち駙
 馬だち、萬戶千戶百戶十戶の官人だち眾にて可ごしけり。可
 ごするは、海の合罕(四海の主)の湯羊に年(年)に羊羣の一の二歳の
 驢羊を出さば、何かあらん。百の羊より一の一歳の羊を出し
 て、貧しく乏しきに與ふるは、好くあり。站を置かしめて、札木

亦驗數應付車牛とあり。以下は、世祖成宗仁宗泰定四朝の站に關する沿革法令と各省の站赤船車人畜の數とを載せたり。

四つの功

幹歌^{かんか}歹合罕^{たいがはん}宣^{せん}はく皇考^{すめらみか}の大位^{たかみくら}に坐^まて、皇考^{すめらみか}の後に勤^{いそ}みたることは、我が札忽惕^{ちゃくよくと}（明^{めい}旁^{ぼう}譯^{やく}）の民^{たみ}の處^{ところ}に出征^{しゆつせい}して、札忽惕^{ちゃくよくと}の民^{たみ}を平^{たい}げたり、我^{われ}次に我^{われ}が事業^{じぎふ}は、我等^{われら}の使路^{しゆふみち}に快^はく走^はり又^{また}用^{もち}ふる品物^{しなぶつ}を搬^はばするに、站^{じやく}ごもを置^おかせたり、又^{また}次の事業^{じぎふ}は、水^{みづ}なき地^ちに井^いごもを掘^ほらせて、出^いださしめて、國^{くに}の民^{たみ}を水草^{みづくさ}に有^{あり}附^つかしめたり、又^{また}處^{ところ}處^{ところ}の城^{しろ}ごもの民^{たみ}の處^{ところ}に斥^も候^み探^{たん}馬^ま臣^{ちん}を置^おきて、國^{くに}の民^{たみ}の足^{あし}を土^{つち}に手^てを地^ぢに置^おかせて住^すませたり、我^{われ}皇考^{すめらみか}に後^{のち}に四^{しよ}の事業^{じぎふ}を添^そへたるぞ、又^{また}皇考^{すめらみか}の大位^{たかみくら}にも居^ゐられて、あまたの國民^{こくたみ}を我^{われ}が上^{うへ}に擔^{にな}ひて往^ゆかれて、便^{すなはち}葡萄^{ぶどう}萄^{たう}酒^{しゆ}の酒^{さけ}に我^{われ}が勝^かたれたるは、過^{あやまち}ごなれり、一^{ひとつ}の我^{われ}が過^{あやまち}ごこれは

四つの過ち

酒の飲み過ぎ

女の取上げ

なれるぞ、（耶律楚材の傳に帝素嗜酒且與大臣酣飲楚材屢諫不聽乃持酒槽鐵口進曰麴蘖能廢物鐵尚如此況五臟乎帝悟語近臣曰汝曹愛君憂國之心豈有如吾圖撒合里者耶賈以金帛勅近臣曰進酒三鍾而止とあるに據れば太宗のみづから過を知れるは楚材の諫に因れるなり然れども又傳の後文に楚材嘗與諸王宴醉臥車中帝臨平野見之直至其營登車手撼之楚材熟睡未醒方怒其擾己忽開目視始知帝至驚起謝帝曰有酒獨醉不與朕同樂耶笑而去楚材不及冠帶馳詣行宮帝爲置酒極歡而罷とあるを見れば楚材もなかなかの酒好きにして太宗の節飲も厲行せられざるに似たりかくて太宗紀十三年辛丑（本書の成りし翌年）十一月丁亥大獵庚寅還至訛鐵鐘胡蘭山與都刺合蠻進酒帝歡飲極夜乃罷辛卯遲明帝崩于行殿壽五十有六とありさよなかまで酒飲みて翌朝崩じたるは、必卒中にて斃れたるならん然らば太宗は酒の害を悟りながら終に節すること能はずして少し命を縮め太祖より十歳短く本書の譯者の今年の齡にて遽に）次^{つぎ}の過^{あやまち}は、故^{ゆゑ}なく女^{をんな}の言^{ことば}に入りて、幹^{かん}惕^{よく}赤斤^{ちやくしん}叔父^{しやくふ}の部眾^{ぶしゆ}の女^{をんな}ごもを取り來^こさせたるは、非^ひ違^{ちが}ひなれるぞ、國民^{こくたみ}の主^{うし}合^か罕^{はん}なるに、故^{ゆゑ}なく非^ひ違^{ちが}ひの事業^{じぎふ}に我^{われ}が趁^しれるは、一^{ひとつ}の過^{あやまち}ごこれはなれるぞ、（太宗紀に九年丁酉六月左翼諸部訛言を怒らば括せずして訛言の訛なることを明にすべき筈なるに怒に因りて括すと云へるは怪むべし今秘史なる太宗の懺悔に據れば婦人の言に従ひてこ

朶豁兒忽の殺され

の事を爲せるにて、謂はゆる訛言は、訛言に非ずして預言なりき。幹惕赤斤の領地は左翼の大部を占め居たる故に、左翼諸部にて譟きたるなり。多遜の史には「幹亦喇惕人は、その女どもを合罕は他の部落に嫁がせんとすと云ふ噂を聞きて、直に縁附けき。幹歌台この事を聞き、その部落の七歳以上の女どももその年に嫁ぎたる女ども、凡て摘み出し、その次に竝べて、その中に最良しきものを己と官人等との分として、摘み出し、その次は娼家に送り、残りみなは兵士どもに掴み取せしめけり。この事を彼等の父兄弟の前にてせしに、一人もぶつぶつ言はざりきと云ふとあり。これも同事の異聞なるべけれども、左翼の諸部を北方の幹亦喇惕部とし、女を取るを他の部落に嫁がするとし、人数もあまりに多く、淫暴もあまりに甚しければ、疑はくは傳への誤りにて、話の大きくなり過ぎたるならん。又耶律楚材の傳に「侍臣脱歡奏簡天下室女、詔下楚材尼之不行。帝怒、楚材進曰、向擇美女二十八人、足備使令。今復選拔、臣恐擾民、欲覆奏耳。帝良久曰、可罷之」とあり。この事は、傳に八年丙申天下の賦税を定むるの續にて、工匠の糜費を考覈する次に載せたれども、類似の事を丙申の法令の後に述べ、工匠の糜費をその實は九年丁酉左翼の女を括したる後の事なるべし。謂はゆる美女二十八人は、幹惕赤斤の領地より取れるものなるべし。然らば室女を括するの非なることを悟れるも、楚材の「又朶豁兒忽を害したるは、一の過いかに諫に因れるに似たり。」又朶豁兒忽を害したるは、一の過いかに害したるは過てる非違。今我が前に誰かしか働きてくれん。

獸の圍ひ

我が皇考の眾の前に道理を慎める人を察せず、圖り合ひたるを己を過せり。我（太宗紀に二年夏朶豁兒魯及金兵戰敗績、命速不台豁勒忽罪を得る一因となりしならん。然れども太宗）又天地より命ありて生れたる獸を兄弟の處に往かんごとて貪りて圍の圍を築かせて止めて居たるに、兄弟より怨言を聽きたり。我過（この事は他の書に見えず。この圍の圍は、文の儘に解すれば、雙溪集に禁地圍場と云へる多遜の翁奇の圍ひとは、目的異にして、それよりは規模大きく、例へば東方は拖雷の諸子の）皇考に後領地の界、西方は察阿歹の領地の界などに、圍を築きたるが如し。皇考に後に四の事業を添へたるぞ、我四の事業は過こなりけるぞ。三（古人曰く、人誰無過、能知過爲貴。太宗自らその四功を知り、又自らその宣へり。）の四過を知りて、功を匿さず、過を諱まず。その自知の明あるは、古來の帝王に類希なる事なり。過を改むるの效は、未至らざる所あるに似たれども、悍然として過を飾り、その非を知らざるものに賢れること遠し。清の高宗は、十たび武功を立てたりとて、自ら十全の記を作りて、一過一失をも言はざるは、太宗に慙ぶること無からんや。又太宗紀の末に「帝有寬弘之量、忠恕之心、量時度力、

舉無過事。華夏富庶。羊馬成羣。旅不賣糧。時稱治平。とあるは、元の史臣の作れる太宗實錄の頌讚の語をそのまゝに寫したるにて、「舉無過事」の諛詞は、太宗の自ら承くるを屑しとせざる事なるべし。詞倭兒思の蒙古史に曰く、「幹歌台は、寛仁大度の君なりき。常に曰く、人人はこの世の旅客なれば、人の記憶にその名を永かれざる故に、我等の財を我等の民の心に置くべきなり。喀喇科噶木を築ける頃ある日、庫に入りて、貨幣の満ちたるを見て、この貨幣は、我に何の用かあらん。之を守るは、困みなり」と云ひて、銀貨を要むるものは誰にても來て取れと命じけり。商人どもを勵まして來させんと、の主意にて、買物の價を高く拂ひ、又給與に用ひんが爲に、ある商人より貨物を残らず買ひたりき。大氣(惠施)の出來心にて、巴固答惕より來つる乞食に、銀貨千巴里施を與へ、それを運ぶに馬を與へ、長旅に護衛を附けて還したることありき。その老人路にて死にたれば、その貨幣をその女に送らしめき。多遜二、九〇。ある日獵せる時、貧しき人水瓜三つを幹歌台に與へたるに、貨幣をもたざりしかば、合屯蒙噶に、(元史)后妃表の正宮孛剌合眞皇后か、その耳に懸れる大眞珠二つを與へよと云ひき。蒙噶答へて、彼は眞珠の價を知らず。明日拂ふ方善からんと云へば、合罕は、貧しき人は、明日まで待たるものか」と云ひて、眞珠をすぐに與へさせけり。それを直ちに安く賣りければ、買へる人眞珠の來歴を知らず、合罕に獻上し、合罕はそれを蒙噶に返しき。發兒思の使、眞珠二瓶を獻りし時、幹歌台はその一函を出し、夜會の客どもに進物として杯に入れて出さしめき。成吉思の法にては、春夏に流水に浴する者は、死刑に當てられき。ある日兒札噶台と獵より回る時、貧しき木速勒蠻の浴するを見て、札噶台は直ちに斬らせんとしければ、幹歌台は窃に銀貨を流れに投げ入

れて、木速勒蠻に教へて、「貧しきものにて、貨幣を流れに落したれば、御赦下され」と言譯せしめけり。多遜二、九三。木速勒蠻を惡める人、幹歌台の處に來て、木速勒蠻を絶やすべきことを申さんが爲に、成吉思より遣されたりし事を云ひき。幹歌台は、しばし考へて、成吉思汗は、譯人を用ひしか」と問へば、「否」と云ひき。然して汝は、蒙古語を知れるか。たゞ秃兒古語を知れり」と云ひき。然らば、汝は、うそつきなり。成吉思汗は、蒙古語のみを知れるから」と云ひて、その人を死に處しけり。多遜二、九四。ある日支那の見せ物師ども、幹歌台の前にて、彼の名高き影繪を見せ、て、その繪の一つに、馬の尾にて頸を曳かれ行く白髯の老人あるを、支那人は誇りかに指さして、蒙古の騎兵に、木速勒蠻のさいなまる、圖なりと云ひき。幹歌台は、彼等に罷めさせて、支那製琥珀兒沙製の貴き品物を、庫より出して、支那製の劣れることを示し、且曰く、「富める木速勒蠻の多くは、支那奴隸を多くもてども、支那人に、木速勒蠻の奴隸をもてるものなし。成吉思の法にて、木速勒蠻の命は、四十巴里施の價あれども、支那人のは、驢と價同じきことを、汝等知らん。然らば、汝等は、何ぞ敢て、木速勒蠻を辱むる。幹歌台は、相撲を甚好み、琥珀兒沙より名高き力士どもを呼び寄せたる中にも、鬪勒は、殊に賞せられき。合罕は、美女を妻として與へしに、鬪勒は、それと寝ねざりき。何故と問はれて、朝廷にてかゝる大名を得たれば、力を保ちて、合罕の寵を失はざらんことを願ふと答へければ、合罕は、「我は、汝の種族を増さんことを願ふ。將來の爲に、汝の力を分つべし」と云ひき。多遜二、九六。幹歌台の正妻は、秃喇奇納にして、庫由克庫壇庫出喀喇兒略失の五子を生みけり。他の二子、喀丹幹古勒と、篋里克とは、妻よりなりき。多遜二、九九。秃喇奇納は、祕史卷八の朶喇格捏后妃表の脫列哥那六皇后乃馬眞氏追諡昭慈皇后なり。庫由克は、祕史の古由克本紀の定宗簡平皇帝貴由なり。庫壇は、世系表

巴禿の西征に對する歐囉巴人の批評

の闊端太子、憲宗紀の哈刺察兒王、喀失は合失大王、喀丹、幹古、勒は合丹大王、篋里克喇札兒は世系表の哈刺察兒王、喀失は合失大王、喀丹、幹古、勒は合丹大王、篋里克評を下せり。その批評は甚面白ければ、こゝに引かん。里固尼慈の戦とそれに續ける殺掠とは、驢馬帝國に恐怖の心を満たしめられたれば、教主古喇果哩第九は十に頌ちたる書は、悲哀恐怖の辭にて、次の如く陳べられけり。あまたの事ども、靈地(基督の墓のある所)の悲しき状態、驢馬帝國の衰れなる事情は、我等の注意を要む。然れども我等は、それらを言はざらん。塔兒塔兒どもより起れる禍の前にては、それらを忘れん。彼等は基督教徒の名を根こぎ倒すらんことを想へば、我等の骨は皆碎け、我等の髓は涸れ、云云……いかになり往くかを我等は知らず。〇荒えびすのむれの恐ろしき出現に遇ひ、輪を掛けたる(法螺吹ける)記載多く著れたり。褒吠の微音先、惕曰く、巴禿は、洪噶哩亞を襲ふ前に、惡魔の神だちを祭りたれば、その中の一柱は偶像の中より辭を掛けて、汝は心強く進め、我、汝の前が果して三柱の神を送らん。その神だちの前には、敵は立つこと能はざらんと云ひし二八七。納兒奔の愛佛は、愕くべき事を記せり。蒙古の諸王は、狗の頭をもち、死人の體を食ひたゞ骨を残して、鷹に與ふ。然れども鷹どもは、その残りを嫌ひて食はず。老いたる後に、醜き女は、竝の民どもに、毎日の食料として分たれ、美しき少女は、淫けたる後に、その胸を切り割き、軟き肉として、貴人に供へらる。倭勒甫三四得べし。伐撒甫は、蒙古人の書ける此等の輪掛けたる談に、珀兒沙人の如く、猛く、狗の如く耐

へ忍び、鶴の如く注意届き、狐の如く狡猾に、鳥の如く遠目き、狼の如く貪り、雄雞の如く鬪に鋭く、雌雞の如く子を憐み、猫の如くこつそり寄り、猪の如く餌を取るに烈しと云へり。倭勒甫一二六。又は含篋兒の云へる如く、蒙古にて用ふる十二支の動物の種種なる性質を集めて、蒙古人の徳を數へ、鼠の如く竊み上手に、牛の如く強く、豹の如く物に動じ易く、羊の如く柔順に、猴の如く恐ろしく、蛇の如くたくらみあり、馬の如く物に動じ易く、羊の如く柔順に、猴の如く恐ろしく、蛇の如く家(馴れ)の如く、忠信に、豕の如く穢し、とも云ひ得べし。含篋兒の亦兒罕四四。吉奔、驢馬、衰滅史には、蒙古の侵寇の恐れは、歐囉巴の遠き隅まで廣まり、一三八年、果昔、亞瑞典の果昔、亞甫哩沙の漁人は、彼等を畏れて、英吉利沖に鮮取に往きかねて、それが爲に鮮の價は大に騰りきと云へり。吉奔八、一五注。〇その時、皇帝甫咧迭哩克第二と教主との大なる確執は、一つの原因となり、封建の念の極度まで發展したる諸侯の専横なることは、今一つの原因となりて、歐囉巴は分裂し居たる故に、洪噶哩亞の如き禍をその免れたるは、多遜の言へる如く、蓋只幹歌台合罕のをりよき死に因りてなり。重き鎧に身を堅むれども、身動きならぬ、僅の騎士の一騎打の武勇と、その從者なる農民の訓練なき羣集とに對ひては、蒙古人の嚴しき訓練は、對敵以上の效を著せり。その訓練の上に、又他の軍人の徳、即工夫を善く運らすこと、其堪能なる軍略兵法ありき。實に蒙古人は、亞細亞の荒遠なる隅より出で、國の地圖をも、又その地形を學ぶべきままれる方便すらもたざりし事、彼等は、歐囉巴にのみならず、西の人の考へ方などにも全く他國人(不知案内)なりし事、彼等は、實験の長き續きにて、戦の爲に自ら用意したるに非ずして、雪なだれの如く人の國に突進したる事、彼等の衣食の供給運送のしかたは、亞細亞の曠野、沙漠に適すれども、歐囉巴の事物の甚異

太宗に對する詞
倭兒思の稱揚

なる状態に適せざりし事、これらの事をのみ考へなば、彼等のしか成功したるのみならず、その軍略上の計畫は、理學に依りたるが如く立てられたる事は、殆ど神異不測に近しと思はざるべからず。疑なく、彼等の皆殺しと殘酷との恐るしき方法は、その敵人の膽を破りて、神經を痺れさせき、疑なく又彼等は、科曼人、嚙西亞人などの如き、いかなる寇にても掠奪を許さるれば嚮導先鋒として十分働かんとする雇はれ根性の浪人どもを、使ひさるれば、然れどもこの事ありとも、我等は猶この偉勳に驚き、軍の成功として世界の歴史の何れにも之を較ぶることを辭せざらん。詞倭兒思は、又太宗の事業を、殘らす述べたる後に、我等は、幹歌台を最運好き征服者と見ても、納坡列翁阿歴散迭兒の帝國も較ぶれば、甚小きほどの大國を支配する強盛なる君主と見ても、夥しき民衆を長き時代に涉りて結び固めたる帝王の一人たる人格を、彼に與へざるべからず。事業の多く現れたる最大なる帝王の一人たる人格を、彼に與へざるべからず。事業の多くは人の手にて、彼に代りて爲されしことは、彼の位置より價を減ぜず。大國の君屢誤るは、能臣の選擇にあり。成吉思思の大名は、少くとも英吉利文學にては、その子のそれを蝕し蔽ひたり。この論は、これまでより多く注意を彼に引かんとする甚穩當なる企望に外ならずと云ひて、太宗の篇を結べり。

太宗十二年の大
會

大忽哩勒塔に會して、鼠の年七月に客魯噠河の闊迭額阿喇勒の朶羅安孛勒答黑失勒斤扯克兩の閒なる幹兒朶思に下馬して居る時、書きて畢へたり。（鼠の年は、我が四條天皇仁治元年庚子、宋の理宗嘉熙四年、元の太宗

太祖の大幹兒朶

十二年、西紀一二四〇年なること、序論に云へるが如くにて、太宗昇遐の前年なり。闊迭額阿喇勒は卷四一八頁とこの卷五一〇頁とに注せり。朶羅安孛勒答黑は、卷四一八頁に朶羅安孛勒答兀惕とありて、そこに注せり。朶羅安孛勒答兀惕は、七つの孤山にして、孛勒答兀惕は、孛勒答黑の複稱なり。孤山七つあれば、複稱に云ふべきを、こゝに單稱に書けるは、恐らくは誤ならん。又原文に孛勒答合とあり。孛勒答合は、孛勒答黑に「なり」とは、「に」の字の入るべき所に非ざる故に、誤寫ならんと見て刪れり。幹兒朶思は、幹兒朶の複稱なり。こゝは、太祖の大幹兒朶にして、帳殿の設けも、一二に止まらざる故に、複稱に呼べり。上文五一九頁に大幹兒朶思、親征錄に、戊子の年、秋、太宗皇帝自虎八會於先太祖皇帝之大宮、太祖紀に、十一年丙子春、還廬胸河行宮、太宗紀元年己丑、即位の處に、曲雕阿蘭の地、また庫鐵烏阿刺里、四年壬辰十二月、如太祖行宮、憲宗紀元年辛亥、即位の處に、闊帖兀阿蘭の地、七年丁巳夏六月、謁太祖行宮、祭旗鼓、明宗紀天曆二年六月、戊申、次朶朶傑阿刺倫、とあるは、皆この幹兒朶思なり。后妃表を案するに、太祖の幹兒朶は、四所にあり。第一の幹兒朶を大幹兒朶と云ひ、孛兒台旭真大皇后孛兒帖兀真大合屯と皇后六人と妃子一人とそれに住み、第二の幹兒朶には、忽蘭皇后忽蘭合屯以下皇后四人と妃子四人と住み、第三の幹兒朶には、也速皇后也速合屯以下皇后七人と妃子三人と住み、第四の幹兒朶を合せて、大皇后一人、皇后二十二人、妃子十五人なり。外に幹兒朶の知れざる妃子一人ありて、后妃すべて三十九人なり。表の皇后妃子は、蒙古語の合屯、妃、額、孛、妻をしか譯したるにて、支那の后妃よりは、軽く、大皇后即大合屯のみは、眞の皇后なり。洪鈞曰く、拉施特書曰く、成吉思婦有五、真、案、五百、恐、是五十之訛、四の幹兒朶のありかは、諸史に明文なけれども、

四つの幹兒朶

遊牧諸國の聚會

大幹兒朶は、こゝの幹兒朶思なること論なし。他の三は意をもて推すに、第二は、薩里川撒阿里客額兒の哈老徒の行宮、金幼孜の北征錄なる撒里怯兒の宮殿なるべし。第三は、王罕の舊營なる秃刺河の合喇屯の幹兒朶なるべし。前卷の四七四頁に見えたり。第四は、西遊記なる乃滿國の窩里朶、即乃蠻の塔陽罕の舊營なる額帖兒河の幹兒朶にして、前卷の四一、二、四一、三頁を見よ。その「皇后」と云へるは也速干合屯なるべく、漢夏公主と云へるは、金の衛紹王の女岐國公主と云へるの襄宗の女察合となるべし。忽哩勒塔は、即忽哩勒台にして、「に」なる後置詞を踏む時は、亦の音を略く。忽哩勒台即聚會は、遊牧の諸部落には大抵有れども、その部族大くなく、君權強くなるに隨ひて、聚會の勢力衰ふるは常の事なるに蒙古にては、國はいやが上に太りたれども、聚會は中廢れずして、永く少くとも世祖の即位の頃までは、その勢力を保てり。百戸内外の部落ならば、相談の必要ある時、酋長は、小山などに登りて、相談あるから聚れ」と大音に呼はりても、部眾残らずを即刻に聚め得らるべし。しかるに、亞細亞歐羅巴に跨れる大國となりては、召集の使を發してより、會員の揃ふまでに一年餘りを費やし、又その會員は、聚まり得る人數に限ありて、平民は參列することを得ず、代議の制などは夢にも知らざれば、おのづから皇族貴族重官大帥の聚會となれり。かくて一むれりのむらびとの總寄合は、四海に薄れる大帝國の國會となり、牛飼羊飼どもの寄り聚ひたる平民の相談會は、王侯將相の列れる威儀堂堂たる貴族議院となり、迭抹克喇西は、阿哩思脱克喇西に變じたり。太宗の崩じたる後、五年目丙午の年、(定宗元年、西紀一二四四年)に、攝政秃喇奇納合屯、秘史朶喇格捏、元史脱列哥那の召集に由りて聚れる大會の時、囉馬教主の命を受けて蒙古に使せる普刺諾略兒關尼、その處に居て記録を世に遺したれば、漢文の書には更に見えざる蒙古

定宗即位の大會の盛況

の大會の盛況も、我等に知らるゝに至れり。詞倭兒思の蒙古史に曰く、「大忽哩勒台は幹歌台の常に夏を過せる科依掲の湖に近き地に聚るべく召集せられき。」幹歌台の常に夏を過したる所は、多遜の史に幹兒篋克秃阿の昔喇幹兒都なりとあれば、科依掲の湖に近き地は、何かの誤ならん。今巴秃罕は蒙古にて最重要なる人なりしが、この王の來會遲きに由りて、大會は延び延びになりき。巴秃の口實は、その馬どもの足弱しと云へるなれども、實の理由は、攝政とその子庫由克とを惡めるなりき。巴秃は、竟に會せずして、大會は、一二四四年の春、巴秃なしにて開かれき。大會の開かれたる昔、喇幹兒都まで、亞細亞のあらゆる所より輻輳せるかなたこなたの道路に、旅人羣集しけり。成吉思の弟兀出肯は、その子孫四十八人を伴れて來ぬ。拖雷の寡婦とその諸子と、幹歌台拙只札噶台の子孫ち、支那の蒙古領の文武長官、珀兒沙の牧長、阿兒昆、突兒其、思壇、河開、地方、牧長馬思速惕、嚕姆の薛勒、主克種、の速勒壇、囉古訥、丁嚕西亞の大公牙囉思喇甫、古兒只の王位の競争者にて二人共に名は、蒼吡惕、阿列坡の速勒壇の弟、巴固、蒼惕、合里發の使、亦思馬額、宗派なる阿刺木惕の君の使、抹速勒發兒思、客兒曼、掃帖惕の使ども、昔里沙の王海團の弟、この人人は、皆立派なる獻上物をもちて來ぬ。「この大人だちの中に、人に知られざる出家二人は、その衣服の卑しきと、その使命の大なると、著しかりき。この二人は、教主と里翁の僧會との命にて、蒙古人を正教に導かんが爲に至れるにて、その一人なる都普喇諾略兒關諾は、即位の盛禮を記載せり。二千の白き天幕は、貴人の爲に設けられ、その貴人は夥しき故に、頭を曲げて行き過ぐる機會あるのみなりき。會談する機會を得ざりき。平民の大眾は、その人だちの外の方に、天幕を張りき。皇族大帥の會合する大なる天幕は、二千人を容るゝ程にて、その周圍はやゝ離れて繪もて蔽はれたる欄干

をまはしき。その天幕に、入口二つあり。一は合罕の爲にて、それより入らんとす。大膽者のあるべき筈なれば、そこには守兵もなく、他の入口は弓と劍とを持てる兵士守衛しけり。毎朝會眾は會の事務を議し、午後は馬乳酒を飲みて日を送りき。毎日會員は種種なる色の衣服、第一の日は白き、第二は赤き、第三は紫の、第四は紅の衣服を着ぬ。ある貴人だちの乗れる馬の轡は銀貨二十巴里施以上の價ありき。選舉の前より、庫由克は大なる尊敬をもて取扱はれき。迭邁刺の引ける略兒關、諸九、二、四、三、外に往けば、讚美の歌を歌はれ、頭に紅の毛附きたる。權力の仗を己の方に傾けられき。選舉の日來つる時に、攝政と會員とは、昔喇幹兒都より二三禮古離れたる金の天幕に赴きて、合罕の選擇の事を討議しけり。金の天幕は金の釘にて金の板を柱に捲き附けたるが故に、しか名づけられ、紅の毛氈を敷き、帷幔をもて蔽はれき。幹歌台は、初にその第三子庫由克を立てんことを願ひ、失喇門はまだ年少きことを言ひて、庫由克を選舉せんことを會眾に勧めき。庫由克は、通例の習慣に隨ひ、一時はうはべの辭退して、竟には皇位をその子孫に保たんことを諸王羣臣の誓へる上にて、幹歌台のなせるが如く承諾しけり。昔蒙迭散寬壇と阿兒篋尼亞の海圍とに據れば、朝廷の大人だちは庫由克とそ呼び上げけり。これは明に甚古き廣く廣がれる習慣なりき。原注、阿提刺の、また洪噶哩の諸王の選舉の談を引きくらべよ。會眾は九たび拜伏して敬禮を行ひ、會場の外に居たる大衆は同時に頰を地に垂れき。その時庫由克は從者を伴れ

て天幕より出でて、日を三たび禮拜しけり。禮式畢りて、祝宴に移り、その間なりたての合罕は高御座に坐り、右に諸王、諸王駙馬、左に諸女王、公主、王妃を列ね、飲食は夜半まで續き、音樂軍歌は室内に響き渡りき。宴會は七日の閑引續き、然る後に總花はまき散らされ、人人その位に隨ひて賜物を受けき。庫由克はその父の、大氣なるにも勝らんことを願ひ、商品を七萬巴里施の價ほど買ひ、その拂しには、征服したる國に當てたる命令、手形を渡しきと云へり。それらの品は、惜しげもなく、羣眾に分配せられ、兒ども奴どもすら賜物を受け取りけり。二度目の分配までなしたるに、夥しき貯藏は盡きざりしかば、庫由克は、残りをば勝手に掠奪せよと命じて、畢へけり。多遜二、一九七、二〇三、荷車五百輛あまりに積みたる金銀絹衣物は、皇居より遠からざる小山の上に置かれて、悉く分配せられきと略兒關諸は云へり。

成吉思汗實錄卷の十二終り。

元朝祕史關係文獻簡目 (*印は編者未見)

石濱純太郎——蒙文元朝祕史札記(一一三) 東亞研究六ノ六、七、八(大正五年六、七、九月)

一巴と必答 二亦納と阿訥 三亦と宜 四語頭の母音が伴ふ父音 五eと兀 六阿行とb, m 七察罕と合罕 八埃 因

九秃 綿 十蒙 格 十一語頭の也 十二阿速、額速

——元朝祕史考 龍谷史壇第十五號(昭和十年)

稻葉岩吉——元朝祕史漢譯の年代辨疑 東洋學報一ノ三(明治四十年十月)

金井保三——元朝祕史漢譯の年代、同上補考 東洋學報一ノ二、三(明治四十年五、十月)

小林高四郎——服部四郎 都隱衛札布兩氏共編「蒙文元朝祕史」卷一を讀む 蒙古第九二號(昭和十五年一月)

——蒙古の祕史 昭和十五年二月生活社刊(初版)

——再び「蒙文元朝祕史」卷一について ——服部學士の示教に答ふ—— 蒙古第九四號(昭和十五年三月)

——「みたび」「蒙文元朝祕史」卷一に就いて 蒙古第九五號(昭和十五年四月)

——ブヘクシク氏著現代蒙古語譯「元朝祕史」を讀む 蒙古第一一一號(昭和十六年十月)

——漢字 音譯「元朝祕史」八思巴字本原典說に就いて 加藤博士還曆記念東洋史集說(昭和十六年十二月)

白鳥庫吉——音譯蒙文元朝祕史(東洋文庫叢刊第八) 昭和十八年一月東洋文庫刊

那珂通世——成吉思汗實錄 明治四十年一月大日本圖書株式會社刊

——那珂通世遺書 大正四年八月大日本圖書株式會社刊

内藤虎次郎——蒙文元朝秘史 史學雜誌第十三篇三號（明治三十五年三月）

服部四郎——「蒙文元朝秘史」卷一 昭和十四年十月文求堂刊

服部四郎——「蒙文元朝秘史」卷一について——小林高四郎氏に答ふ——蒙古第九三號（昭和十五年二月）

羽田 亨——再び小林高四郎氏へのお答として 藝文第八卷第十二號（大正六年十二月）

羽田 亨——元朝秘史に見ゆる蒙古の文化 藝文第八卷第十二號（大正六年十二月）
——華夷譯語の編者馬沙亦黑 東洋學報七ノ三（大正六年九月）

元秘史略一卷 萬光泰錄 楊復吉輯 道光十三年刊（昭代叢書戊集續編）

元朝秘史十五卷 道光二十七年楊尙文刊（遼海叢書），又、光緒二十年上海復古書局石印本

元秘史潤文 王仁山撰（沈家本「枕碧樓偶存稿」卷五著錄）

元朝秘史十卷續集二卷 光緒三十四年葉德輝刊（單行本，又、思賢書局刊書所收本）

元朝秘史十卷續集二卷 民國二十五年上海商務印書館刊（四部叢刊三編）

元朝秘史不分卷 陳彬龢選註 民國十八年初版上海商務印書館刊（學生國學叢書）

元秘史提要 阮元撰（四庫未收書目提要、學經室經進書錄、葉刻秘史卷首等）

影元槧鈔本元朝秘史跋 顧廣圻撰（思適齋文集卷十四、葉刻及四部三編本秘史卷首等）

跋元朝秘史 錢大昕撰（潛研堂文集卷二十八、揚刻秘史卷末、葉刻秘史卷首等）

元朝秘史譯文鈔本題詞 張穆撰（烏齊文集卷三）

元朝秘史跋 同右（揚刻秘史卷末、葉刻秘史卷首）

元秘史潤文序 沈家本撰（枕碧樓偶存稿卷五）

蒙文元朝秘史跋 王國維撰（學衡第四十九期、觀堂別集）

元朝秘史注十五卷 李文田撰（浙西村舍彙刻 光緒二十二年刊、石印本、皇朝藩屬輿地叢書第五集本、大正六年朝鮮研究會和譯本）

元秘史李注補正十五卷 高寶銓撰（光緒二十八年羅振玉刊）

元秘史山川地名考十二卷 施世杰撰（家刻本、郵傳學廬叢刊本、皇朝藩屬輿地叢書第六集本）

元朝秘史疏證十五卷 黃丕烈撰（烏田翰「訪餘錄」北京再版「古文舊書考」附刊）著錄。T'oung Pao, XXVIII, 1921, p. 379

元秘史地名考證十五卷 丁謙撰（浙江圖書館叢書）

秘史地理今釋 阮惟和撰（簡內博士「蒙古史研究」附錄著錄）

〔聖武親征錄校注一卷 王國維撰（蒙古史料校注四種ノ中、清華學校刊本、王忠愍公遺書本）〕

元秘史譯音用字攷 陳垣撰（民國二十三年二月國立中央研究院歷史語言研究所刊）

Bühkesig, Moŋγol-un niγuča tiguzi

康德八年三月、滿洲國開魯、蒙文學會刊 pp. 297（小林高四郎氏の批評参照のこと）

Gasibatū, Moŋγol niγuča-in Yuwan ulus-un niγuča tobčiya.

成吉思汗紀元七三五年九月，張家口，蒙文研究會刊 pp. 72 (但少第五卷「チ」蒙譯)

[Blochet, E.—Introduction à l'histoire des Mongols. Leyden 1910, pp. 272—298]
Haenisch, E.—Untersuchungen über das Yüan-ch'ao pi-shi, Die geheime Geschichte der Mongolen. Abhandlungen der philologisch-historischen Klasse der Sächsischen Akademie der Wissenschaften, Bd. XLI, Leipzig 1931, SS. 100.

I. Vorwort—II. Mongolischer Text, N. T. in transkribierter chinesischer Umschreibung und Retranskription—III. Anmerkungen zu II.—IV. Deutsche Übersetzung von N. T. und Y. P.—V. Zum Titel—VI. Sachliches—VII. Technisches—VIII. Sprachliches. A) Mongolisch, B) Chinesisch—IX. Literaturangaben—X. Tafelanhang, photographische Wiedergabe des Textblattes I ss.
[RC.—T. P., XXVIII, 1931, pp. 156—157 (P. Pelliot); Mitteil. d. S. f. O. Spr., XXXIV, 1931, SS. 177—180 (E. Haenisch).]

Haenisch, E.—Manghol un niuca Tobca'an (Yüan-ch'ao pi-shi), Die geheime Geschichte der Mongolen aus der chinesischen Transkription (Ausgabe Ye Têh-hui) im mongolische Wortlaut wiederhergestellt von E. H. Leijzig 1937, SS. XII + 140 mit 1 Tafel.

Vorwort—Erläuterung—Transkription—Anmerkungen—Nachtrag. Die wichtigsten Textabweichungen in den Überlieferungen des Manghol un niuca Tobca'an (Yüan-ch'ao pi-shi)—Textvarianten der Yüan-ch'ao pi-shi-Handschriften.

[RC.—T. P., XXXII, 1936, pp. 355—359 (P. Pelliot); J. R. A. S., 1938, pp. 571—572 (G. L. M. Clauson); R. E. F. E. O., XXXVII, 1937, p. 545 (G. Coedes); Z. D. M. G., NF, 19, XCIV, 1940, SS. 431—435 (K. Grönbeck); 言語研究, 第三號, 昭和十四年九月, pp. 89—96 (野村正良); 東洋史研究, 第三卷第五號, 昭和十三年六月, pp. 453—464 (石濱純太郎)]

Haenisch, E.—Bemerkungen zur Textwiederherstellung des Manghol un Niuca Tobca'an (Yüan-ch'ao pi-shi). Z. D. M. G., NF, 17, XCII, 1938, SS. 244—254.

Haenisch, E.—Wörterbuch zu Manghol un Niuca Tobca'an (Yüan-ch'ao pi-shi), geheime Geschichte der Mongolen. Leipzig 1939, SS. VII + 191.

Vorwort—Wörterbuch—Namenliste—Silbenliste—Zeichenliste.
[RC.—Z. D. M. G., NF, 19, XCIV, 1940, SS. 431—435 (K. Grönbeck)]

Howorth, H. H.—Two Early Sources for Mongol History. J. R. A. S., NS, XV, 1883, pp. 346—356.

*Kovčič (Kotwicz), V. L.—K izdaniju Yuan'-čao-bi-si. Zapiski Kollegii Vostočkovedov pri Aziatskom Muzei Akademii Nauk SSSR, T. I (1932), S. 233—241.

Lanfer, B.—Skizze der mongolischen Literatur. Keleti Szemle, VIII, 1907, SS. 210—213.

[Lanfer, B.—Očerki mongol'skoj literatury. Pervod V. A. Kazakeviča. Leningrad 1927, S. XIII, 45—48]
Palladius (Palladij, Archimandrit)—Starinnoe mongol'skoe skazanie o Čingiskhané. Irdny članov Rossijskoj Duhovnoj missii v Pekině. T. IV, St. Petersburg 1866, S. 3—258. (Izdanie vtoroe, Peking 1910)

Pelliot, P.—Le livre mongol du Yuan tai'ao pi che. Toung Pao, XIV, 1913, pp. 131—132.

Pelliot, P.—Un passage aléché dans le texte mongol ancien de l'histoire secrète des mongols. Toung Pao, XXVII, 1930, pp. 199—202.

[ここに書及せられたる氏の所謂 U'gan 本元朝秘史—cf. aussi T. P., XXVII, 1930, pp. 29—24 note—に就いては, Ligeti, I.,

Rapport préliminaire d'un voyage d'exploration fait en Mongolie chinoise, 1928—1931, Budapest 1933, pp. 24—25 を見よ]

* Pozdněv, A. M.—O drevnijem kitajsko-mongol'skom istoričeskom pamjatnikē "Yuan'-čao-mi-ši". Izvestiya Imperatorskago Russkago Arheologičeskago Otděleniya T. X. (1882), vip. 3—4, S. 245—259.
【本書發行の年を 1883 年、1884 年とするものあれど、殆く Vladimirtsov, Otděskavennij stroj Mongolov, Leningrad 1934, S. 7, 205 の所記に従ふ】

* Pozdněv, A. M.—Transkriptsija paleografičeskago teksta Yuan'-čao-mi-ši. St. Petersburg, 1887 (6?), S. 112.
[cf. Blochet, E., Introduction, pp. 272—298; Kamsiedt 氏に據れば刊年の記載無しと云ふ。cf. Kalmitšisches Wörterbuch, S. XXX.]

* Pozdněv, A. M.—Izskisi po istorii mongol'skoj literatury, v 1897/98 akad. godu, S. 46—69, Vladivostok 1899.

追加

青木富太郎——元朝秘史 東洋歴史大辭典

張元濟——元朝秘史跋 四部三編本秘史卷末

〔徳永康元氏將來の書籍中に、ロシア人某氏の秘史蒙文選譯ありと聞けども、未だ見ず。又、ダフール人メルセ (Morse) 氏にも同様の譯蒙文ありと云ふ (Jamsaranov, Ts. J., Mongol'skie Ietopisi XVII veka. Tрудy Instituta Vostočkovedeniya, T. XVI. Moskva-Leningrad 1936, S. 88) 前「雜」〕

497, 507

【ラ】

喇失揚額丁の蒙古集史 [Rashid-eddin, Djami ut Tewarikh.] 5, 43, 108, 139, 146, 199, 201, 272, 276, 281, 295, 337, 338, 339, 341, 342, 344, 345, 347, 348, 377, 379, 397, 398, 402, 412, 418, 419, 421, 424, 426, 428, 432, 433, 434, 438, 439, 443, 445, 447, 450, 461, 468, 469, 487, 488, 499, 504, 507, 525, 547, 548, 561
喇篤羅甫, 蒙古考古圖 [W. Radloff, Atlas der Altertümer der Mongolei.] 532, 539

【リ】

李文田, 元朝秘史注 序14, 220, 496
柳溪の詩集 471
劉郁, 西使記 158
劉郁, 北使記 422
道史 27
興宗紀 449
天祚紀 339, 437
道宗紀 449
兵衛志 449
屬國表 449

【ル】

嚕卜嚕克の紀行 [The Journey of William of Rubruquis.] 51, 337, 450, 456, 536, 561

【レ】

咧格勒 [A. Regel, Ueber s. Reise nach Turfan.] 487
列兒出 [Lerch, Archaeological Journey in Turkestan.] 432, 438
咧繆咱 [Abel-Rémusat, Recherches sur la Ville de Karakorum.] 536

【ロ】

嚕西亞の地圖 34, 76, 117, 118, 151, 163, 237, 256, 341, 416, 430, 432, 444

【ワ】

淮黎 [A. Wylie, The Introduction to Br-etschneider's Mediaeval Researches.] 422
王禕, 日月山祀天頌 535

【ヲ】

倭勒甫 [C. O. Wolf, Geschichte der Mongolen.] 349, 424

沈曾植, 親征錄校注 376, 377

【ス】

隋書西域傳 435, 440, 458

【セ】

〔盛如梓〕, 庶齋老學叢談 471

〔西清〕, 黑龍江外紀 58, 200, 395

〔齊召南〕, 水道提綱 57, 77, 151, 168, 395, 397, 531

〔邵遠平〕, 元史類編 258, 345

葉子奇, 草木子 507

〔葉隆禮〕 契丹國志 27

山海經 453

錢大昕, 廿二史考異 274, 281, 340, 398, 496, 517, 533

元史氏族表 276, 313, 348

諸史拾遺 397, 511—2, 527, 550—2

秘史跋 序17, 序19, 270

【ソ】

孫子 242

孫承澤, 元朝典故編年考 (15), 序17

宋子貞, 耶律公神道碑 471, 499

【タ】

〔太祖實錄〕 247, 251

唐書 回鶻傳 65

室韋傳 27

鐵勒傳 65

西域傳 399, 436, 437, 440, 441, 458

陶宗儀, 輟耕錄 128, 160, 222, 315, 325, 471

【チ】

中俄分界圖 125

〔張皓〕, 松漠紀聞 27

〔張自烈〕, 正字通 161

張德輝, 塞北紀行 65, 531

張穆, 蒙古游牧記 19, 159, 491, 494, 497, 501, 538

陳經, 通鑑續編 387, 389, 396, 505

〔陳邦瞻〕, 元史記事本末 288

〔陳履中〕, 河套志 491

【テ】

鄭曉, 今言 序6, 序10

程同文, 西游記跋 414, 470

趙汝适, 諸蕃志 450

趙翼, 二十二史劄記 465, 544

【ト】

多遜の史 [Baron C. D'Ohsson, Histoire des Mongols depuis Tchinguiz-khan jusqu'à Timour-bey.] 150, 278, 281, 283, 337, 339, 345, 346, 411, 417, 420, 421, 424, 426, 428, 430, 432, 439, 440, 443, 452, 453, 462, 465, 471, 472, 473, 475, 492, 501, 510, 542, 580, 582, 583

【ナ】

内府輿圖 57, 79

【ニ】

任大椿 528

【ハ】

海國の紀行 [The Journey of Haithon, King of Little Armenia, to Mongolia and back.] 438

海客兒 [Ouseley, Oriental Geographie of Ebn Haukal.] 538

彭大雅—徐霆, 黑韃事略 216, 229, 244, 288, 271, 287, 312, 506

茅元儀, 武備志 161

〔博明〕, 西齋偶得 19

帕迭麟 [Visit of Mr. F. Paderin to the Site of Karakrum. By H. Yule (The Geographical Magazine, July 1874)] 537

舍篋兒 [Hammer-Purgstall, Geschichte der Ilchane.] 535, 585

【ヒ】

〔畢沅〕, 續資治通鑑 370, 391, 397

【フ】

費兒都昔 [Firdusi of Tus, Shahnameh.] 444

普刺諾喀兒關尼の紀行 [John of Plano Carpini] 337, 456, 535, 588

卜論 [Ph. Bruhn, on the ancient names of Kiev (Memoirs of the Third Archaeol. Congress at Kiev)] 461

卜喇惕施乃迭兒 [E. Bretschneider, Mediaeval Researches, from Eastern Asiatic Sources.] 347, 413, 416, 417, 422, 427, 452, 454, 463, 515, 518, 535, 544, 545

【ヘ】

平定準噶爾方略 535

赫兒別羅惕 [D'Herbelot, Bibliothèque Orientale, ou Dictionnaire universel.] 417

【ホ】

方觀承, 松漠草詩の注 129, 538

〔方式濟〕, 龍沙紀略 125

瑛自捏也甫 [Pozdnyeff, Erdenin Erihe.] 537

珈塔初 [N. W. Potanin, Mongolia.] 413

訶渥兒斯 [H. H. Howorth, History of the Mongols from the 9th to the 19th Century.] 160, 228, 270, 491, 582, 584, 586, 589

【マ】

馬速的 [Barbier et Meynard, Mas'udi, Les Prairie d'or.] 450

馬祖常, 月合乃の碑 288

馬兒科保羅 [H. Yule, The Book of Ser Marco Polo.] 437, 445, 450, 492, 493, 498, 507, 536

【ミ】

明史 西域傳 431, 441, 466

韃靼傳 168

【メ】

錢撒列克阿刺卜撒兒 [Messalek Alabsar (in Quatremère, Notice, et Extraits etc.)] 347

【モ】

孟瑛, 蒙韃備錄 27, 229, 234, 268, 280, 281, 282, 283, 577

【ヤ】

楊賓, 柳邊紀略 200

牙庫必 [Barbier et Meynard, Yakut, Dictionnaire géographique... de la Perse.] 441, 445, 455

耶律楚材, 西游錄 340, 400, 411, 413—417, 430, 437, 454, 465, 487

浩然居士集 371, 437, 473, 487, 529

耶律鐸, 雙溪醉隱集 77, 535, 539, 541

牙佛兒思奇 [Yavorsky, Travels into Afghanistan and Bukhara.] 442

【ユ】

〔俞希魯〕, 至順鎮江府志 161

裕勒の馬兒科保羅紀行注 [H. Yule, The Book of Ser Marco Polo.] 338, 450, 492,

博爾朮傳	59, 292
博爾忽傳	278, 417
塔察兒傳	99, 236
卷120 察罕傳	371, 498, 499, 500, 505
札八兒大者傳	208, 209, 374
朮赤台傳	21, 22, 108—109, 178, 208, 210, 299
鎖海傳	208, 211, 279
育乃台傳	527
育也而傳	397, 553
葛思麥里傳	146, 280, 340, 464, 492
卷121 速不台傳	208, 210, 277, 279, 338, 463, 547, 548, 554
按竺遜傳	499, 504
畏峇兒傳	21, 65, 182, 219, 278
抄思傳	240
卷122 巴而朮阿而忒的斤傳	65, 258, 343
拔札兒傳	527
雪不台傳	207
昔里鈴部傳	498, 547, 549
哈散納傳	208, 211
卷123 布智兒傳	276
召烈台抄兀兒傳	125
闊闕不花傳	277, 526
阿朮魯傳	208, 211
紹古兒傳	208, 211
哈八兒禿傳	234
卷124 哈刺亦哈赤北魯傳	146, 341
塔塔統阿傳	序4
岳璘帖穆爾傳	341
速哥傳	212
忙哥撒兒傳	119
卷127 伯顏傳	57, 275
卷128 土土哈傳	212, 339, 549
卷129 阿塔海傳	212, 275

卷130 完澤傳	145, 224
卷131 奧魯赤傳	277
懷都傳	211
卷132 玉哇失傳	347
麥里傳	212, 274
拔都兒傳	549
哈刺得傳	337
沙全傳	337
卷133 也罕的斤傳	337
孛闐奚傳	276
卷134 撒吉思傳	274
闊闕傳	2, 277
也先不花傳	279
卷135 忽都傳	277
忽林失傳	275, 278
卷136 哈喇哈孫傳	73, 174
卷137 察罕傳	序6, 445
卷138 康里脫脫傳	240
卷140 別兒怯不花傳	279
卷144 月魯帖木兒傳	374
卷146 耶律楚材傳	268, 411, 467, 470, 498, 513, 579, 580
粘舍重山傳	498
卷147 史天祥傳	397
卷149 耶律留哥傳	379, 398, 500, 551
劉伯林傳	281
郭寶玉傳	341, 418, 452
郭侃傳	418, 450
移剌捏兒傳	553
耶律禿花傳	212
玉珣傳	553
卷150 石抹也先傳	234, 379, 396, 397, 554
耶律阿海傳	373, 374, 379
郝和尚拔都傳	534
卷151 薛塔刺海傳	433
石抹李迭兒傳	234, 554

賈塔刺渾傳	432
卷152 唐慶傳	499
趙柔傳	376
卷151 洪福源傳	552
卷166 石高山傳	527
卷168 姚天福傳	505
卷169 劉哈刺拔都魯傳	345
卷180 耶律希亮傳	414, 495, 498
卷181 虞集傳	序6, 序7
卷190 儒學傳(伯顏)	337
卷193 忠義傳(伯八)	24, 171
卷197 孝友傳(徹徹)	313
卷208 高麗傳	552, 553
元史語解	58
[玄奘], 唐西域記	435, 440, 444, 458, 465, 466, 469
慈恩寺三藏法師傳	469
元和郡縣志	491
元明善, 東平忠憲王碑	280
【コ】	
輝炎武, 日邦錄	序11
昌平山水記	374, 376
顧慶坻, 元朝秘史跋	序14
[顧祖禹], 讀史方輿紀要	504
洪鈞, 元史譯文證補	序33, 160, 201, 213, 229, 234, 259, 270, 272, 281, 283, 303, 344, 396, 400, 402, 412, 415, 432, 446, 452, 463, 464, 471, 472, 474, 511
[吳廣成], 西夏書事	385, 488, 495
諸必勒 [P. Gaubil, Histoire de Gentchean et de toute la Dynastie des Mongous, ses successeurs, Conquerans de la hinc.]	536
果勒思屯思奇 蒙古字引 [C. Golstunski, Mongol'sko-russkij Slowary.]	160

【サ】

佐久間信恭	506
[撒囊色辰台吉], 蒙古源流 1—2, 270, 271, 284	
三國志 東夷傳	457

【シ】

爾雅	161, 471
史記大宛傳	435, 457
施世杰, [元秘史山川地名考]	494, 497
周詩	267
商輅, 續通鑑綱目 370, 390, 397, 451, 488, 497	
常德, 西使記	543
捌米揚 蒙古字引 [I. J. Schmidt, Mongol'sko-nemetzko-russkij slowar.]	160
施密特 [I. J. Schmidt, Geschichte der Ost-mongolen und ihres Fürstenhauses, verfasst von Sanang Ssetsen.]	508
主峽尼の史 [Alai-eddin Atta mulk Djuveni, Tarikh Djihan Kushai.]	337, 399, 340
舍哩弗丁の咱弗兒納篋 [Maulana Sherif-eddin Ali of Yezd, Zafer nameh.]	441, 446, 461
徐松, 西域水道記	148, 256, 414, 415
白鳥庫吉 突厥門特勤碑銘考	539
新羅の國號について	550
清一統志	129, 395, 491, 497
沈達, [西游記金山以東釋]	530, 531, 532, 533
親征錄	108, 110, 139, 160, 172, 178, 199, 201, 203, 209, 228, 231, 242, 251, 252, 259, 270, 272, 281, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 346, 347, 352, 370, 372, 373, 375, 376, 377, 378, 382, 384, 388, 389, 393, 395, 396, 397, 411, 412, 418, 419, 421, 423, 425, 429, 431, 433, 439, 443, 447, 451, 467, 468, 487, 503, 511, 529, 551

【ア】
 阿不勒嘎資 [Abu l'-Ghazi Bahadour Khan, Shadjare-i Turk] 270, 402, 453, 511
 阿不勒費答 [Géographie d'Aboul-féda par Reinand et Guyard] 431, 456, 457

【イ】
 亦思塔黑哩 [Istakhri, Das Buch der Länder (Mordtmann)] 337, 444, 445, 460
 亦奔阿喇卜沙 [Ibn Arab Shah, Ajaib al Mukhlkat.] 347
 亦達好喀勒 [Ouseley, Oriental Geography of Ebn Haukel] 440, 441
 亦達忽兒答揚必 [Ibn Khurdadbih, Roads and Kingdoms (in A. Sprenger, Post. u. Reiserouten des Orients, Abh. d. Kunde d. Morgenlandes, iii)] 450, 460
 亦奔拂自蘭 [C. M. Fraehn, Ibn Fozlan und anderer araber Berichte.] 455, 459

【ウ】
 烏古孫仲端, 北使記 337
 宇文懋昭, 金國志 27, 370, 372, 385, 390, 488

【エ】
 姚燾, 平章忙兀公博羅觀碑 (牧庵文集) 219
 額篤哩昔の地誌 [Géographie d'Edrisi, traduit de l'arabe par P. A. Jaubert.] 429, 441, 454
 額兒忒曼 [Franz von Erdmann, Vollständige Uebersicht der aeltesten tuerkischen und mongolischen Voelkerschaften nach Rashid-ud-din's Vorgange.] 5, 43, 150, 475, 505
 闕復, 駙馬高唐王闕里吉思碑 284
 廣平王玉昔帖木兒碑 60, 231, 291, 292, 294

【オ】
 歐陽玄, 高昌僕氏家傳 77, 530, 532, 533

【カ】
 艾約瑟, 職方外紀 456
 高寶鎰, [元秘史李注補正] 5, 77, 195, 220, 387, 395, 497, 531
 高麗史 551—555
 何秋濤, 朔方備乘 260
 合塔蘭地圖 347, 459
 喀喇姆津, 嚕西亞の史 [Karamzin,] 456, 462, 547
 [清, 無名氏], 瀚海集 77
 漢書 陳湯傳 457
 西域傳 435, 445
 堪察哈姆 [A. Cunningham, The Ancient Geography of India.] 469

【キ】
 丘處機 (長春真人), 西遊記 63, 148, 279, 340, 399, 412, 413—416, 417, 421, 427, 428, 437, 441, 447, 470, 472, 473, 531, 533
 魏書 西域傳 435
 畿輔通志 372, 376
 吉奔 [Gibbon, Decline and Fall of Roman Empire] 585
 許有壬, 賜與元閣碑 (至正集) 530
 金幼孜, 北征錄 63, 106, 128
 金史 卷9—12 章宗紀 112
 卷13 衛紹王本紀 370, 372, 373, 392
 卷14 宣宗本紀 377, 389, 422, 513
 卷17 哀宗紀 499, 520—522, 528
 卷20 天文志 422
 卷24—26 地理志 499
 卷93 獨吉思忠傳 370
 承裕傳 370, 372, 373

卷94 內族裏傳 112
 卷98 完顏綱傳 375
 卷99 徒單鑑傳 375
 卷101 完顏承暉傳 380, 392
 抹撚諶忠傳 392
 李英傳 378, 392
 烏古論慶壽傳 392
 卷102 必蘭阿魯帶傳 389
 卷103 完顏仲元傳 389
 奧屯裏傳 398
 卷106 求虎高琪傳 375, 382
 卷108 胥鼎傳 389
 卷111 撤合筵傳 522
 弧仲傳 522
 卷115 完顏奴申傳 513
 卷121 粘割魯奴傳 340, 454
 卷122 尼龍古浦魯虎傳 389
 卷123 陀滿胡土門傳 499
 愛申傳 504
 卷124 烏古孫忠端傳 422

【ク】
 虞集, 句容郡王世績碑 77
 克刺腓卓 [Narrative of Clavijo's Embassy to Timur, translated by R. Markham.] 441
 克刺餓羅揚 Klaproth, Mémoires relatif à l'Asie. 419, 458, 497
 黃震, 古今紀要逸編 229

【ケ】
 經世大典の圖 337
 元好問, 大丞相劉氏先塋の碑 341
 [阮葵生], 蒙古吉林風土記 89
 阮元, 西庫宋收書目提要 序15, 序16, 序18
 元史 卷1 太祖紀 106, 110, 160, 180, 203, 207, 208, 251, 270, 338,

346, 352, 369, 371, 375,
 377, 379, 382, 385, 387,
 388, 389, 391, 394, 395,
 396, 397, 411, 421, 422,
 434, 451, 470, 487, 488,
 494, 498, 499, 503, 505,
 506, 508, 512, 551
 卷2 太宗紀 77, 386, 467, 512, 513,
 520—522, 527—529,
 532, 541, 545, 550, 553,
 563, 570, 574, 581
 定宗紀 516, 535
 卷3 憲宗紀 256, 276, 279, 321, 337,
 356, 450, 467, 516, 534,
 535, 546, 548
 卷4—17 世祖紀 276, 467
 卷22—23 武宗紀 256
 卷31 明宗紀 77, 106, 533
 卷48—49 天文志 536
 卷58—63 地理志 257, 378, 491, 492,
 497, 498, 499, 529, 533
 卷72—77 祭祀志 525
 卷85—92 百官志 272, 288, 529
 卷93—97 食貨志 93, 347
 卷98—101 兵志 5, 100, 101, 163, 234,
 236, 325, 333, 574, 577
 卷106 后妃表 383
 卷107 宗室世系表 353, 417
 卷109 公主表 281, 282, 338, 344, 348
 卷115 睿宗傳 386, 512, 521, 525
 卷117 朮赤傳 303
 卷118 特薛禪傳 34, 281—282, 323, 377
 李禿傳 95, 282
 阿刺兀思剔吉忽里傳 231, 282
 卷119 木華黎傳 119, 163, 272, 273,
 302, 369, 373, 396, 397,
 495, 527, 552

わんかん 王罕(とおりのかん) 序37, 75, 78, 221, 265, 289	
てむちんの訪ね	65—66
てむちんの救ひを求め	73—75
めるきと出征	79—87
ちんぎすかんに賀辭	103
たたる夾撃	113—114
王の名	115
こいてんの戦	126
ぢやむかを追ひ	130
えすがいとあんだの交り	145, 194
えすがいの救ひ	192
けれいとの内亂	146
の漂泊	147—149
ちんぎすかんの厚遇	147, 195
部下の怨言	147—148
部下を處罰	150
めるきと征伐	157, 196
ないまんに襲はれ	162, 197

ちんぎすかんに救を求め	163
四傑の助け	163—164, 198
ちんぎすかんと父子の盟約	164—166, 191
の優柔	169
からかるちとの戦	177—188
ぢやむかとの問答	179
子の負傷をいたみ	187
の背信をちんぎすかんの責め	190—200
金帳の筵	215
の逃がれ	218
の殺され	224
の頭蓋	226
わんきんしょうじやう 王京丞相	112—115, 380—381

【を】

をるぢげ 完勤只格

4

那珂博士引用書索引

1. 排列は原則として著者名五十音順によれり。
2. 官撰書、支那正史、其他普通に著者名の行はれざるものは書名のみ標出す。
3. []内の書名、著者名は編者の補ふ所なり。
4. 西文書は概ねト咧惕施乃迭兒の中世史地研究に見ゆる所に従ひて西文を補ひたり。
5. 引用書のうち譯音の異同を云ひたるのみのものは初出のもののみ標出し他は出さず。

【む】

むかり 木合黎, 模合里 156, 198, 286, 322, 401, 403, 479, 495

來屬 119

わんかんを救ひ 163, 198

の玉號 272, 293

功臣表 273

の神告 293

の恩賞 293, 495

四駿 163, 301

の諫 350, 354, 447

むげ 木格(もんげ) 276, 355

むらひだ Mulahida 木刺希荅 序31, 446

むるかるく 木勒合勒忽 97, 101, 317

むるけとたく 木勒客脱塔黑 107

むるちえせうの戦 木魯徹薛兀勒 196

【め】

明宗 序7

牝馬小河(げうん・ごろかん) 424, 483

牝馬の賦 571

めぐちん・せうと 篋古眞薛兀勒圖 112—115

めけす城の攻め取り 548

めげと 篋客秃 515, 555

めげと 篋格秃(功臣) 279

めげと 篋格惕 544

めねん・とどん 篋年土敦 20

めねん・ばありん 篋年巴阿鄰 18

めるきと 篋兒乞惕 28, 84, 85, 87, 88, 145, 255, 314, 341, 402

三つのめるきと 70, 73, 133, 262, 291

ぼるて掠奪 67, 71

てむちんの出征 79—83

えすがいへの怨 83

の勦滅 86

ちやむか推戴 125

こいてんの戦 128—129

けれいととの戦 148, 157

の勦討 251—252

峯の寨の攻撃 255

の誅滅 258

の遺孥の勦滅 338

めるげん(善射者) 2, 44

めるちやく 篋嚕察克 445

めるぶ 篋兒甫 445

めんけるめん・けいべ 綿客兒綿客亦別
→きわ・めんけるめん 515

滅國四十 515

【も】

蒙古源流 序16, 序46, 序47, 1—2

蒙古語 序55

蒙古新字 序6

蒙古字 序69—71

蒙古集史 →らしつど・えつちんの集史

蒙古の酋長 26

蒙古の臣道 202

蒙古の俗 269, 312, 500, 501

もち・べどうん 抹赤別都温 94, 302

もろか 抹囉合 279

もんがい 忙該 →もんげ

もんくたい 忙忽台 22, 567

もんくと 忙忽惕 22, 93, 109, 179, 181, 182, 189, 246, 302

の歸附 109

の戦ひぶり 179, 246

からかるちとの戦 183

もんけうる 蒙客兀兒(もんぐうる) 277, 355

もんげ 蒙格, 蒙該(とるいの子) 516

の西征 516, 544

の凱旋 550

の奏議 558, 560

もんけ 蒙客(→むげ) 355

もんげときやん 忙格秃乞顔 25, 93, 305

もんこはるぢや 蒙可哈勒札 278

もんごる 忙格勒 序1, 序12, 26, 31, 103, 127, 188, 229, 230, 238, 247, 380

の名 27

たやんかんの言 228, 240

黒きもんごる 229

もんごるちん・ごあ 忙格勒眞・密阿 3

もんごるん・にうちや・とぶちやん 忙格
命紐察脱卜察安 序1

の譯名 序46

もんりく・えちげ 蒙力克額赤格 38, 39, 41, 273, 321, 355, 364

てむちんを迎へ 41

の歸附 109

の警告 172

功臣表 273

の功 289

てぶてんげりの死 363—364

の責められ 365—366

【や】

箭の喩へ 10, 505

野狐嶺 →くねげん・だば

やぢる 牙的兒 178

やらわち 牙刺哇赤 465, 467, 484

やるかんど 葉爾羌 466

【ゆ】

ゆるき 禹兒乞 25

ゆくなん 月忽難 230, 232

ゆるかん 余嚕罕 277

【よ】

四つのおると 587

【ら】

老勇士 332

老宿衛 331

らおきすと 老撒速惕 544

駱駝が原 →てめえん・けえる

駱駝貢獻の顯ひ(たんぐと) 383

らしつどえつちん Rashid eddin 序25, 序28—29

の集史 序25—46

の集史の露譯 序31

の集史と修正秘史 序32—46

らぶらか 刺卜刺合(らばるか) 322, 335, 566

らぼる 刺和兒 469

ららる 喇喇勒 459

【り】

李文田 序14, 序21, 序27

龍虎臺 ←しらてく

隆德縣 499

龍鳳鏢 序27

遼金元史語解 序78, 序81

りんこん 領昆(令公) 序59

臨洮府 499

【る】

るす人 嚕思 序59

【れ】

靈州(どるめがい) 497

【ろ】

六盤山 504

ろしあ 嚕西亞 →おるすと

【わ】

わやん・まきんちゆ 完顏麻斤出 512

文淵閣書目	序15
文宗	序8
文廷式	序21—22
分芳郭	序27
ぶらつど丞相 Pulad	序29, 序33

【へ・べ】

へらと 赫喇揚	431
べき 別乞(族長)	81, 311—312
べくてる 别克帖兒	46, 47
べぐ Beg	序29
べすたい 別速台	23
べすと 別速揚	23, 92, 94
べせんごる・どくしん 伯升豁兒・多黑申	23
べでる・ごしうん 別迭兒豁失温	57
べどうん 別都温 →もち・べとうん	
べるぐぬたい 別勒古訥台	6, 9, 10, 12, 19
べるぐぬと姓 別勒古訥揚	19
べるぐたい 別勒古台	26, 47, 50, 58, 68, 71, 117, 291
魚釣り	46
ぼるてを迎へ	63
ぼおるちゆを迎へ	64
の母探し	85—86
馬官	101
ぶりぼこに切られ	110—111
ぶりぼこを殺し	122
密議洩らし	153—154
ないまん征伐の評議	232
の分前	353
の子孫	409
べるぐたいの母	65, 85
べるけえれと 別兒客額列揚	168
べれじん Berezin	序31
津梁(→南京)	序12
べしやうる 珀沙兀兒	469
べるしや征伐	序30

【ほ・ぼ】

ほえるん・うちん 訶額訥兀眞	序35, 29
夫別れ	29
の泣言	30
えすがいに來り	28—31
子産み	32—33
の四子一女	34
たいちうとに棄てられ	43—44
艱難な子育て	44—45, 405—406
兄弟を誑め	46
てむちんを叱り	48
の奪はれ	71, 84
くちゆを養ひ	87
ここちゆを養ひ	92
しきくとくを養ひ	116
ぼるうるを養ひ	120
の養ひ子四人	120, 306
かつきるを救ひ	357—359
の分前	352—353
ちんぎすかんの叱り	357
(金)北京	394
北平(→中都)	序12
ほこると・ちゆるぶ 訶闕兒禿主兒不	88
滿鮮萬奴	750
ほんがりあ 洪鳴啞亞	455
謀臣二人	303
ぼおるちゆ 李翰兒出	序35, 59, 68, 71, 156, 286, 401, 495
てむちんを援け	59
の廉潔	61
の來屬	64
ちんぎすかんの勞ひ	102
わんかんを救ひ	163, 198
からかるちとの戰	184—185
功臣表	273
の功	290—293

四駿	163, 301
の諫	350, 354
喧嘩のひきわけ	403
の諫言	447, 479
の恩賞	459
の弟	93, 99, 322
ほからの職 李合刺	434
の異稱	437
の沿革	437
の落城	438
穆麟德 Möllendorf	序82
ぼげん 李堅	277
ぼとかん・ぼおるち 李脱罕李翰兒只	78, 80, 81
ほとくいたるくん 李脱灰塔兒渾	349, 352
ぼどんちやる・もんかく 李端察兒・蒙合	序19, 9, 10, 14, 16, 20, 95
燕	
の漂泊	12—15
黃鷹の育て	13
の歸り	15
婦人を捕へ	17
の子孫	19
ぼらる 李刺兒	459, 482, 515, 545
ぼるかだる 李勒合答兒	→ぶらかだる
ぼるが河 佛勒噶	460
ぼるちぎだい・めるげん 李兒只吉歹・篋	兒干 3
ぼるちぎん姓 李兒只斤	19
ぼるだうと 李勒答兀揚	191
ぼるちんしよな 李兒臣沙那	263
ぼるて・うちん 李兒帖・兀眞	序35, 37, 69, 74, 76
許嫁の約	37
てむちんの迎へ	63
めるきとに捕はれ	68
救はれ	82
の顯悟	92

の四子	353
の概み言	361
ぼろ 李羅	3
ぼるうる, ぼるくる 李羅兀(忽)勒	120, 352
の捨はれ	120
わんかんを救ひ	163, 198
おごだいを救ひ	184, 310
功臣表	274
四駿	163, 301
厨官	306
とまと征伐	349
戦死	350
ぼるくちん・ごあ 李羅黑臣豁阿	3
ぼるるだい 李羅勒歹	107
ぼるるだい・すやるび 李羅勒歹・速牙勒	必 3

【ま】

まありく 馬阿里黑	8, 9
まうらんどる 卯温都兒	177, 178, 186
まいちく 馬懿赤黑	序68
ますくと 馬思忽揚	465, 467, 484
まちゆ 莫州	382
まちやら 馬札喇(まちやる)	455, 514, 482
まらる 馬喇勒	277
萬の番士	332
まんけるまん・きわ 蠻客兒蠻乞兀	→きわ・めしけるめん
まんごる 忙豁兒(→もんごる)	81
滿洲字	序70—81

【み】

勅をこゆる罪	320
右手の萬戸	293
南るしあゝの征服	549
峯の菜(たいかる・ごるか)	255, 258

はるがすん 哈兒合孫	556, 560	ばやうだい 伯牙兀歹	8
ばありだい 巴阿哩歹	18	ばやうと 巴牙兀揚	93, 308
ばありん 巴阿嚨	18, 95, 295, 311	ばやん (長者)	3
ばいだらく・べるちる 巴亦荅喇黑別勒赤	159, 197	ばらおるなるたい 巴刺斡羅納兒台	246
兒	346	ばら・ちえるび 巴刺扯兒必	94, 277, 425, 439, 463, 476, 483
ばいと 巴亦揚	100, 236	とるいの傳	355
ばうるちん 巴兀兒臣 (厨官)	327	ちやらるつちん追擊	425
の勤方	194	印度侵掠	468
ばかぢ 巴合只	124	ばらかちん 巴喇合臣 (財守)	572
ばくしゆるぎ 巴忽擲羅吉	450, 451, 452, 481, 543	ばりんしいらとかがぢ 巴唎失亦喇禿合必	19
ばくとと 巴黑塔揚	450	赤	421, 424—425, 429, 483, 485
のかりふあ	454	ばるあん原 巴嚕安 (べるあん)	427—428, 468, 471
ばしけろど 巴施客兒篤	序6	の駐夏	444
ばすば 八思巴	2	ばるく 巴勒黑	5
ばたちかん 巴塔赤罕	416	ばるくだい・めるげん 巴兒忽歹・篋兒干	5
ばたん城 巴摺	416	ばるくぢん・ごあ 巴兒忽眞・豁阿	82, 157, 196, 359
巴旦杏	26, 173, 315	ばるくぢん・とぐむ 巴兒忽眞脫窩木	345
ばだい 巴歹	173—174	ばるくん 巴兒渾	24, 25, 123, 201
の急報	278	ばるたん・ばあとる 巴兒壇巴阿禿兒	21, 22, 93, 95
功臣表	222—223	ばるらす姓 巴嚕刺思	21
の恩賞	547	ばるらたい 巴嚕刺台	207, 214, 215, 296
ばちまん 八赤蠻	346, 347, 454, 482, 514, 544	の位置	207—208
ばちぎと 巴只吉揚	454—455	の水飲みひ誓	208—213
即ばしけろど	225—226	ばるちゆ・あると・ちぎん 巴而朮阿而或	584
馬丁 (さんぐんの)	225	的斤 →いどうと	555
馬丁の妻	509, 515, 516, 544, 574	ばるちゆん・あら 巴勒諱阿喇	293
ばと 巴禿	545—547	萬戸	513
の西征 (西史の摘録)	584	番直 →けしくてん	序11, 序23, 序27
歐人の評	555	番士國民の交付	序23
の評	561	ばらぢうす Palladius	序24
ぐゆくととの不和	561	ばらぢうす本	
ぶりととの不和	424, 483	ばすねえふ Pozdneyeff	
ばとけせん 巴揚客先	序30		
ばはいれつちん・もはめつど・ちゆべに	序8		
Bahalleddin Mohammed Juveni			
ばぶしや皇后, 八不沙			

【ひ・ひ】

髀石 (しあ)	33, 89
左手の萬戸	293
羊の賦	570
ひんどす 欣都思	序59, 468
びあ 必亞	468
びしゆぱりく 必什巴里克	414
びるうと 備嚕兀揚	27
びるげ・べき 必勒格別乞	126, 205
びるどうる (告天雀)	160

【ふ・ぶ】

回回	序12
ふいん・いるげん 桃因亦兒堅 (林の民)	285, 295, 344, 346
の萬戸	295
夫人	序59
ふすん 許孫	274
ふらぐ Hulagu	序29, 序31
ぶいるく・かん 不亦嚕黑罕	序13
ちやむか推戴	124
こいてんの戦ひ	127—129
ちんぎすかんとの戦	158—159, 197
の死	159
ぶうらけえる 不兀喇答額兒	76, 81, 148
ぶうるぢやる (許親酒)	171
ぶか 不合	119, 280, 322, 324, 335, 344
ぶかたい 不合台	172
ぶかとさるぢ 不合禿撒勒只	9, 10, 12, 19
ぶかぬ 夫合訥	394, 396
ぶかる 不合兒	序53, 423, 435, 437, 465, 476, 483, 484
ぶぎだい 不吉歹	321—322, 332, 335, 566
ぶくかたぎ 不忽合塔吉	9, 10, 12, 14—19
ぶくどるま河 不黑都兒麻	256
ぶぐぬたい 不古訥台	6, 9—12, 19

ぶぐぬと姓 不古訥揚	19
撫州	369, 382
ぶだあと 不荅阿揚	22
ぶちやらん・ちえるび 不察喇	234
ぶぢえく 不者克	559
ぶぢる 不只兒	276
ぶと・ぐれげん 不禿古唎堅 (不圖)	95, 282
ぶは・てむる 不花帖木兒	193
ぶらかだる 不刺合荅兒	565, 566, 574
ぶらる 不刺兒 →ばうる	
ぶゆる・なうる 不余兒納兀兒	27, 189
ぶり 不哩	515, 544, 556, 557, 560
ぶりぶるちる 不哩不勒赤嚕	18
ぶりぼこ 不哩孛闊	28, 123
べるぐたいを切り	110, 111
べるぐたいに殺され	122
ぶりやと 不哩牙揚	345
ぶるかん 不魯罕 (功臣)	275
ぶるかん 襄宗	383
駱駝貢獻の願ひ	383—384
ぶるかん 神宗	410, 411
ぶるかん 獻宗	490, 491
ちんぎんかがんの詰問	490
來降	496
の獻上物	500
の殺され	501, 502
ぶるかん・ぼすかくさん・しんち・ばやん・うりやんかい 不見罕・李思合黑三・晒赤・伯顔・兀曷孩	6
ぶるかん嶽 不見罕 序63, 2, 4, 6, 57, 66, 68, 70, 79, 80, 84, 85, 86, 88, 304	
の三繞り	70, 133, 262, 291
てむちんの感謝	71
ぶるぎ・えるぎ 不見吉額兒吉	64, 66, 79
ぶるてちゆ・ばあとる 不勒帖出・巴阿禿兒	24
ぶれつとしゆないでる Bretschneider	序38

ちえるめ 者勒箋	68, 71, 94
の來屬	66
を勞ひ	102
ちんぎすかんに看護	130
の三つの思	133
の殿軍	177
四狗	246, 301
功臣表	273
の功	304
盗人殺し	308

ちえね・かぶちかい 哲刺捏合ト赤孩
108, 269

ちよしよとぼる 勺莎秃李囉	489
ちよるかるくんざん 勺兒合勒渾山	191
ちるぎん 只兒斤	179, 182, 183, 221, 296
ちるどあん 只兒裕安	95
ちるどあだい 只兒裕阿歹 (即ちえべ)	137, 428

【て・で】

鄭曉	序6, 序10
貞觀政要	序6
定宗 (→ぐゆく)	序29
帝範	序6
趙官	序59, 386
朝議の始り	513
鐵車の勅	259—263
鐵門關 (てむる・かるが)	439—442
てぶ・てんげり 帖ト騰格哩 →ここちゆ・	
てぶてんげり	
てむげ・おつちぎん 帖木格幹揚赤斤	
→おつちぎん	
てむちん 帖木眞 (參看ちんぎす・かがん)	
の命名	33
兄弟の歳	33
おんぎらと行き	34
の約婚	37

おんぎらとより還り	41
ちやらか翁を見舞ひ	43
兄弟の魚取り	45
兄弟の不和	46
べくてるを射殺	47
たいちうとに襲はれ	49—52
森のやどり	51
の虜はれ	51
の脱走	52
そるかんしらに救はれ	52—55
馬盗人を跡つけ	58—62
ぼおるちゆの授け	59—62
ぼるてを迎へ	63
わんかんに見え	65—68
めるきとに襲はれ	67—71, 133
ぶるかん獄に感謝	71—72
わんかんに救ひを求め	73
ちやむかに救ひを求め	75
めるきと出征	78—87
ぼるてと再會	82
めるきと勤減	86
ちやむかとあんだの盟ひ	88
二たびのあんだ	89
三たびのあんだ	89
ちやむかと別れ	92
諸部の來屬	93—98, 108—109
かがんに推戴	99, 271
ちやむかのいやみ	105
の幼時	141
わんかんを厚遇	149
四狗	245—246
の形容	247
の乳飲み	358
てむちんうげ 帖木眞兀格	32
てむてる 帖木迭兒	567
てむる 帖木兒	278
てむる・かるが →鐵門關	

てむるん 帖木命	33, 34, 50
てめえちん 帖箋額臣 (駱駝飼)	333
てめえん・けえる 帖箋延客額兒 (駱駝ケ原)	231
の圍獵	231
てりやんぐと 帖良古揚	295
てるぐね・うんどる 帖兒古捏温都兒	50
てるげあめる 帖兒格阿篋兒	189
てるすと 帖兒速揚	144
てるめと 帖兒篋揚	444
てれげと・ばやん 帖列格秃伯顏	119
てれげと口 帖列格秃	118, 162, 198
てんぎす 騰吉思 (海)	2
てんげり 騰格哩 (もんりくの子) →てぶ・	
てんげり	
てんげり 騰格哩 (金の質子)	394
てんげり・ごろかん 騰格里裕羅罕	68
てんれく 田列克	346
てい・せちえん 德薛禪	序35
えずがいと出遇ひ	34
の吉夢	35
ぼるて許嫁の約	37
てむちんと再會	63—64
てがい 迭該	100, 303, 311
の來屬	94
功臣表	273
の忠直	303
の封戸	317
おごだいの傳	355
でりうん・ぼるだく 迭里温李勒答黑	32, 66, 304
でるげく・えめる 迭兒格克額篋勒	序13, 124

【と・ど】

とらら 土兀刺	65, 73, 88, 165, 194
とえれす 脱額列思	346

頭功の争ひ (あるたに等)	309
東昌	378
とおりる・かん 脱幹哩勒罕 →わんかん	
とおりる 脱幹哩勒 (えがい・こんだがるの子)	167, 169, 204, 207
とおれす 脱幹列思	295
とかす 秃合思	346
とがい 秃該	255
とく 秃忽	214
とく 秃黑 (藤)	44
徳興	373—374
徳順州	499
とくらうと 脱忽喇兀揚	305
とくちやる 脱忽察兒	序52
の軍令違犯	418
の處罰	428, 477
の死	428
とくとあ 脱黑脱阿	76, 193
ほえるんの仕返し	70, 83
遁走	81, 82
黄金の帶	90
てむちんととの戦	196
ちんぎすかんに追はれ	251
戦死	257
とくとあの子	125, 127, 129, 163, 198, 261, 338
とくとあの子	157
とくとあ師巫	206
とぐす・べき 脱吉思別乞	157
とげ 秃格	273, 321
とげうだい 土古兀歹	18
とげまか 土格馬合	124
とごちやく・うんどる 脱豁察黑温都兒	7
とごん 脱鞞	278
とさか 秃撒合 (きんぐんの子)	166
とさか 脱撒合 (功臣)	279
とす 秃思	446
とでげ 脱迭格	315

狗の年のきたと再征	386—394
西域征伐	398—494
ちやあだいを諭し	406
西域行留の年月	427
三皇子を怒り	447
三皇子を訓誡	448
西域より凱旋	469
の負傷	489
の昇退	503, 504
の崩地	505
臨終の言	506
の大おど	587
ちんぎすかん賞録の命名	序54
ちんぎすかんの古き蒙古物語	序23
ちんべ 沈白	54—55, 255, 258, 314
ちちくさかる 的的克撒合勒	224, 225
ちやうとくり 札兀揚忽哩(百戸長)	115, 203
ちやうれいと 沼喇亦揚(ちやうれだい)	序36, 19, 20, 214
ちやかがんぶ 札合敢不	80
こいてんの戦	126
の來降	144, 146
のないまん入り	150
の二女	221
に恩命	222
の最後	297
ちやくと 札忽惕	578
ちやさ 札撒	513, 563, 569—570
ちやさう 札撒兀	563
ちやだ 札答	128—129
ちやだらん 札答蘭	18, 97, 107, 125, 250, 317
ちやぢらだい 札只喇歹	17
ちやみ・うと・てわりく Jami ut Tevarikh	
→らしつど・えぢんの集史	
ちやむか 札木合 序35, 序37, 18, 74, 95, 102, 188, 293, 312, 365	
てむぢんを救ひ	75—77

わんかんを咎め	30
めるきと打破り	30
てむぢんの感謝	86
てむぢんと安答の盟	88—90
てむぢんと別れ	91
ごるちの神告	91
諸部の離れ	97
あるたん, くちやるにいやみ	105
の弟の殺され	106
だらんばるちゆとの戦	107—108
十一部の推戴	125
こいてんの戦	126—130
わんかんに追はれ	129
てむぢんを讒言	159
等の協議	167—168
わんかんのなせる評	169
わんかんとの間答	179
ちんぎすかんへ密告	180
ちんぎすかんの離	200—201
たやんかんとの間答	245—249
ちんぎすかんに密告	250
捕はれ	263
ちんぎすかんとの對話	263—268
の慚悔	265
の善言	267
の死	269
ちやむ(站)の設け	573
ちやむち(站赤)の制	577
ちやむちん 札木臣	573
ちややく 札牙黑	460, 482, 515, 544
ちやらいる 札刺亦兒(ちやりやる)	93, 94, 425
ちやらいるたい・ごるち 札刺亦兒台監兒	
赤	550
ちやらま 札刺麻	106
ちやらるつちん・しよるたん 札刺勒丁・莎勒壇	418—423, 468, 477, 483

ちやり・ぶは 札里不花	32
ちやりやるのばら 札里牙兒の巴刺	425
ちやりん・ぶか 札隣不合	序13, 124
ちやるく 札兒忽	287—288
ちやるもうだい翁 札兒赤兀歹	66, 304
ちやるもうと 札兒赤兀惕	17
ちゆいん 主因	27, 375, 380, 496
ちゆげり 主格黎	20
ちゆち 拙赤(くとらんの子)	26
ちゆち・かつさる 拙赤合撒兒(てむぢんの弟) 序35, 33, 46, 50, 58, 62, 68, 101, 109, 163, 244, 248, 249, 358, 361, 377, 409	
ちえぶけを貰ひ	120
逃げ還り	213—214
の分前	353
に従へる三將	396
東略の命	394
東略	396
東略についての疑ひ	398
の傳	355
の民を取上げ	359
の打たれ	356
ちゆち(ちんぎすかんの子)	166, 346, 433
北征	344
初陣の功	349
の分前	353
の傳	303, 354
の生れ	402
ちやあだいの争ひ	402—407
うるけんち攻め	429, 477
ちゆちだるまら 拙赤答兒馬刺	106—107
ちゆぶかん 主不罕	序52, 386—387
ちゆるきん 主兒勤(ゆるき) 序36, 97, 113, 119—120, 293	
ちんぎすかんとの争ひ	109—112
ちんぎすかんの出征	116—119
の民の緣由	121

ちゆるちえだい 主兒拙歹	109, 215, 273, 323, 377, 396
からかるちとの戦	182
おんぎらと降附	189
ちえちえる山の戦	217
戦	295—297
いばかべきを賜ひ	297
ちゆるちえと 主兒拙惕(女眞)	375, 380, 394, 396, 550
の征定	550—555
ちえがいこんだごる 者該晃答魯勤	94
ちえぐ 者古	567
ちえちえる山 者者額兒	168
の戦	217
ちえでる 者迭兒	280
ちえたい 哲台	93, 99, 275, 308, 355
ちえぶけ 者不答	119, 277, 355, 359
ちえべ 者別 序52, 135, 137, 277, 387, 476, 482, 485, 520	
の來屬	135, 136—137
あるたん處罰	152
ないまん征伐	237
四狗	246, 301
ないまん再征	272, 336—341
功臣表	277
の封戸	317
野狐嶺, 居庸關の戦	373—376
東昌を取り	380
潼關の戦	387
居庸關の破り	391
ちえらるつちん追撃	417, 420, 423—424, 476
の恩賞	428, 477
の遠征	461—464
の歸還	474
の死	474
ちえるかぶちかい 折兒合卜赤後	217

だうしきにどと 荅兀昔乞你都揚 544
 だうん 倒温 279
 濁水の誓 →ばるぢゆな
 だらん・ねむるげす 荅蘭捏木兒格思 150,
 186, 188, 292
 の戦 151, 292
 だらん・ばるぢゆと 荅蘭巴勒主揚 107—
 108, 269, 312
 だりたい・おつちぎん 荅哩台幹揚赤斤 26,
 29, 30
 の來屬 97
 こいてんの戦 126
 軍法違犯 152
 の處分 353
 だりる 荅哩勒 →ぐせん・だりる
 だるがちん 荅囉合臣 467, 526
 の設け 464, 484
 だるかん 荅兒罕 26, 315
 だるべ 荅兒伯 342
 【ち・ぢ】
 ちぎだい 赤吉歹 178
 ちぐ・ぐれげん 赤古古喇堅 序52, 281, 388
 ちくるぐ 赤忽兒古 34, 63
 ちくるく山 赤忽兒忽 127
 ちどくる・ぼこ 赤都忽勒李闊 18
 ちのす 赤那思 108
 ちやあだい 蔡阿歹 353, 519, 560
 の分前 353
 の傳 355
 ちゆちとの争ひ 402—403, 406
 うるけんち攻め 433, 477
 おごだい推戴 509
 番士の交附 514
 の協贊 574—575
 ちやあるん 蔡阿論 157
 長子出征の定め 516

長春真人 序21
 張敏仁 序21
 張穆 序20, 序21, 序27
 ちやうぢん・おるてがい 抄眞幹兒帖該 23
 ちやうとくり 蔡兀惕忽哩→ちやうとくり
 ちやうま・のやん 抄馬那顔 452
 ちやうるかい 蔡兀兒孩 278, 355
 ちやうるかん 蔡兀兒罕(ちやくるかん)
 94, 101, 105, 214, 215, 217
 ちやうる・べき 蔡兀兒別乞 166, 171
 ちやか 蔡合 383
 ちやかあん 蔡合安 124
 ちやかあん・ごあ 蔡合安恰阿 →ねうだ
 い・ちやかあん・うわ
 ちやくるかん 蔡忽兒罕 →ちやうるかん
 ちやがん・たたる 蔡阿安塔塔兒 150, 152
 ちやがん・のーる 蔡罕諾兒 532
 ちやきるまうと 蔡乞兒馬兀揚 243, 244
 ちやすと 蔡速禿(雪ある山) 494, 496
 ちやない 蔡乃 323, 335, 573, 574
 ちやなる 蔡納兒 565
 ちやはん 蔡罕 序6, 序9
 ちやぶちやる 蔡ト赤牙勒(居庸關) 序59,
 374, 375, 380, 387, 391, 394
 の禦ぎ 374
 の攻め破り 375—376
 ちやらかい・りんく 蔡喇孩領忽 23, 204
 ちやらか翁 蔡喇合 38, 43
 ちゆい河 垂 148, 195, 257, 338
 忠直なる四臣 303
 中都 序12, 376, 466, 485, 526
 ちゆく・ちえれん 出黑扯噠 443, 446, 478
 ちゆぐ 出古 →ちぐ・ぐれげん
 ちゆぐ・ぐりげん →ちぐ・ぐれげん
 ちゆらか 出喇合
 ちゆるげたい 出勒格台 274
 ちゆんそ 種索(ちゆんさい) 95, 276, 354

ちえくちえる 扯克徹兒 34, 38, 63, 127
 ちえちえいげん 扯扯赤干 348
 ちえる 徹勒 225
 ちえる地方の井掘り 573
 ちえるびん 扯兒必(侍從) 234, 303, 305, 334
 ちえるびん・おきと(侍女) 333
 ちえれん 扯噠 →えけ・ちえれん
 ちよなく 綽納黑 124
 ちよるまかん・ごるち 綽兒馬罕 514
 ばくたつと征服 542
 ちらうん 赤刺温(そるかんしらの子)
 54—55, 163, 198, 301, 313
 ちらうん 赤刺温(とくとあの子) 157, 198
 てれげとの戦 163
 の逃れ 252, 256
 かんぐりん入り 258
 すべえたいの追討 259
 の末路 338
 ちらうんかいち 赤刺温孩赤 119
 ちるぎだい・ばあとる 赤兒吉歹巴阿禿兒
 124
 ちるぐたい 赤勒古台 100
 ちるげる・ぼこ 赤勒格兒李闊 84—85
 ちるちく河 赤兒赤克 473
 ちれど 赤列都 →えけ・ちれど
 ちんぎすかがん 成吉思合罕(參見てむぢ
 ん) 序36, 32
 の根源 1
 の生誕 32
 推戴の盟 98—99
 一次即位 99, 271
 新庭の政務 99—103
 だらんばるぢゆとの戦 107—108
 諸部の來屬 93, 108—109
 ちゆるきんと相争ひ 序40, 111—112
 わんかんとたたる夾撃 113—116, 117
 ちゆるきん討伐 117—119

こいてんの戦 126—128
 たいちうと追撃 130—139
 重傷 130
 ちえるめの看護 130—134
 かだあんを救ひ 134
 たいちうと誅滅 139
 ちえべ來降 137
 ちやかがんぶの來降 145
 めるきとと戦ひ 145
 わんかんに對する厚遇 147
 ないまん征伐 158
 わんかんより離れ還り 161
 ばだい, きしりくの急報 175
 逃げ走り 177
 からかるちとの戦 177—188
 かるか河の行軍 188
 わんかんを責むる辭 190—199
 ちやむかを責むる辭 200—201
 あるたん, くちやるを責むる辭 201—203
 とおりにやる辭 204
 きんぐんにやる辭 205
 ばるぢゆなの駐營, 水飲み 207—213
 ちえちええる山の戦 217—218
 ないまん征伐 232—251, 272, 336
 軍の整備 234—237
 めるきと討滅 251—262
 ちやむかを捕へ殺し 263—269
 二次即位 269—272
 功臣の恩賞 272—318
 國制 318—336
 母・子弟に民の分配 352—355
 母の怒り 357
 かつさるを縛り 355—359
 もんりくを責め 365—366
 羊の年のきたと征伐 370—382, 385—386
 かしん征伐 382—385, 386

するどす 連勒都思	52, 94
【せ・ぜ】	
西域征伐・太祖	398—474, 475—485
太宗	514—518, 542—560
西征の諸王十一人	518
今考西征の役	475—485
の路順	413
盛基	序21
西夏(→たんと)	序59
清水縣	504
聖武開天記	序6, 序9, 序26
聖武親征記	序26
聖武親征錄	序9, 序25, 序27
西方十一部	453—459
の征伐	453—464
の再征	514
の平定	544
西游記	序21
西遊 →から・きたと	
邵遠平	序26
せうせ 薛兀薛	526
招討	115
せすと 薛速揚	514, 545
積石州	499
雪山の駐夏	493
せちうる 薛赤兀兒	94
せちやうる 薛潮兀兒	280
せちえ・どもく 薛扯朵抹黒	94
せちえ・べき 薛扯別乞 →さちや・べき	
せみすかぶ 薛米思加卜	423, 427, 435, 465, 476, 483, 484
の名稱地理	435
の沿革	437
の攻城	434
の落城	438—439
せみすげん 薛米思堅 →せみすかぶ	

せむせちゆれ 掃薛出列	24
せむそち 掃鎮赤	2
せるけすと 薛兒客速揚	458, 482, 514
せるけす 薛兒客思	468
せれんげ河 薛涼格	77, 82, 88, 129, 148, 163, 314
巖裘の雨覆ひ(ほおるちゆ)	292
千頃堂書目	序15
千戸	285
錢大昕	序16—19, 序27
箭筒士 →ごるち	
宣德府	373, 375
ぜぶげかだら 折不格合答喇	45

【そ】

宋	序59
倉庫の設け	572
相續の約	409
搜討の誓	260
宋濂	序8
そごく・うすん 鎖谿黒兀孫	158, 197
そごすん 鎖谿孫	46
そるかん・しら 鎖兒罕失喇	52, 134—136, 255, 275
てむちんを救ひ	52—56
の女(かだあん)	134
の舊恩	313
の願ひ	314
だるかんとなる	315
孫承澤	序15

【た・だ】

たいかる・ごるか →峯の寨	
たいし 大石	序59, 25
太祖(→ちんぎすかんと・てむちん)	序4
	序29, 序59
太祖實錄	序9

太宗(→おごだい)	序29
たいちゆ 台出・泰出	25, 113, 202
の來屬	97
おなんの林の宴	109
の捕はれ	118
たいちうだい 泰赤兀歹	94, 101
たいちうと 泰赤兀揚	序35, 序36, 23, 31, 46, 92, 315
ほえるんを棄て	43
てむちんを捕へ	49—52
てむちんを誘ね搜し	52—56
ぢやむか推戴	125
ちんぎすかがんの追撃	130
の誅滅	139
の降服	251
たいちやる 台察兒	106—107, 269
たいてむる・たいし 台帖木兒大石	193
大凱旋	485
大寧	序12
大法令(大札撒)	569
大老營	395
たうる河 塔兀兒	394, 395, 396
たかい 塔孩, 塔乞	94, 101, 103, 147, 212, 221, 275, 295
たす 塔思	346
たたとんが 塔塔統阿	序4—5
たたる 塔塔兒	27, 28, 32, 116, 292, 307
てむちん, わんかんの夾撃	113—114, 117
征伐	序37, 150—152
人	序35
屠戮の密議	152
生熟雜觀	229
の主因	496
たなごるごん 塔内斡兒斡	79
たまち 塔馬赤	279
たまちや 塔馬察	2

たみる河 塔米兒	243, 250
たやんかん 塔陽罕	序4, 序37, 168, 226
の大言	228
老将の諫	230
の協議	239—240
の奮進	243
ぢやむかとの問答	245
の腐れ	250
たらす城 塔刺思	413
たりかん 塔里罕	478, 482
たりく・ぢはんくしやい Tarikh Jihankushai	序30
たるくと 塔兒忽惕	93, 305
たるくたい・きりるとく 塔兒忽台乞哩勒	
禿黑	43, 51, 313, 316
てむちんを襲ひ	49
ぢやむか推戴	125
しるぐえとに捕へられ	140, 141
なやあにに救はれ	143
たるくん・あらる 塔勒渾阿喇勒	77, 88
たるばかん(土撥鼠)	57, 58
たれかん 塔列干	445
たんと 唐兀揚(たんと) 146, 147, 149, 150, 488, 490, 494	
城	146
征伐	383—384
の徵發	410—411
最後の征伐	487—502
の殲滅	503
たんま 探馬	543
たんまちん 探馬臣	520—527
たんる山 儂魯	263
だありたい →だりたい・おつちぎん	
だいる(馬) 蒼亦兒	3
だいる・うすん 蒼亦兒兀孫	70, 77, 82, 83, 90, 252, 276
だいどくるしよごる 歹都忽勒莎魯兒	349

藤里川の行宮	504	の冥頑	206
さいかん・とでえん 撒亦罕脱逃延	169	の逃走	218
さいらむ・のーる 賽喇姆諾兒	414	馬丁にすてられ	225
さかいと 撒合亦揚	97	さんぐる・ごろかん 桑古兒豁囉罕	57
さくしん 撒克新	457		
沙州	498		
さすと 撒速揚	457, 482		
さちや・べき 撒察別乞	29, 97, 98, 109, 113, 202		
の殺され	118		
さまるかんど 撒馬兒罕篤→せみすかぶ			
さむか 撒木合	序52		
佐命の功臣	272—285		
さらくす 撒喇黑思	445		
さりかちやう 撒里合察兀	2		
さりくぐん 撒哩黑昆	339		
さるたるる 撒兒塔兀兒 序12, 序59, 148, 195, 257, 398, 411, 423, 464, 475			
にわんかんの逃れ	148		
征伐	389, 411		
さるたきたい 撒兒塔黑台	206, 208		
さるちうと 撒勒只兀揚	19, 124		
の降服	250		
三皇子のうるけんち攻め	429, 477		
の我儘	446		
の叱られ	447		
三將(ちえべ等)			
のちやらるつちん追撃	418, 420		
の賞罰	428, 477		
三ごるち(こんかい等)の建議	449, 480		
三太子(おごだい)	426		
三大臣(ぼおるちゆ等)の諫言	448		
三十妻の舊約(ごるち・うすん)	294		
さんぐん 桑昆 126, 127, 162, 164, 165, 166, 169, 170, 198, 199, 225, 289, 296			
の陰謀	171		
の負傷	183		

【し・じ】

しあ 失阿(鞮石)	33
四狗	245—246, 273, 277, 301
四傑 →どるべん・くるうと	
四庫未收書目提要	序15
四駿 →どるべん・くるうと	
修正蒙古秘史	序32
鹿の肉と子との交易	8
しきうる 失乞兀兒	110, 117
しきけんくどく 失乞刊忽都忽	116, 120
しきくとく 失吉忽秃忽	274, 306, 335, 447, 479
の愛だれ	286
の譚議	288
の諫	354
の廉直	392
の欺北	420, 482
しくしと 失黑失揚	344
しすぎす 失思吉思	129
しすてん 昔思田	427, 443, 446, 478
七十の待衛	235
しちゆうだい 失主兀歹	22
しとくる 失惕忽勒(引出物)	65
しどるく 失都兒忽	501, 503
支那人	序59
しびる(失必兒)の降附	346
集史 →らしど・えちん	
しべりあ 昔別哩亞	347
燒飯	41, 161
しやんぎ 撃吉	558, 560
しやんぐん・びるげ 想昆必勒格	23, 27
しやんしうと 徹失兀揚	93, 305

しゆおす・ちやがん 捌斡思察罕	208	親征錄證注	序40, 序45
しゆおるかと 捌斡兒合揚	489	しん・むれん 申木噠(しんど河)	序53, 423, 483
しゆたん 捌壇	64	の戦	423—424
しゆぢだるまら 捌只答兒馬刺	269	實錄	序51
しゆるまかん・ごるち 捌兒馬罕	449, 451, 480	十功臣	302
の出征	451	十一部	序36
しゆみつと Schmidt	序71	の亂	124—130
しえいけとちえるび 雪亦客秃徹兒必	94, 100, 234	→西方十一部	
しえげえたい 雪格額台	167	侍衛 →とるかうと	
しえにと 雪你揚	24	十三翼の戦	序35, 107—108
しよかたい 莎合台	41, 42	十七頭項	283
しよごく・うすん 莎魯黑兀孫	197	徐松	序27
しよごる 莎魯兒	359, 360, 361	女眞の征定	550
諸子分封の端	407		
しよらんがす 莎郎合思(高麗)	序59, 550		
の征定	550—555		
しよるかかたに・べき 莎兒合黑塔泥別乞	221		
しよるかちちゆるき 莎兒合秃主兒乞(しとくと・ゆるき)	25, 97, 121		
しら・おるど 失喇斡兒朵	534		
しらくる 失喇忽勒	279		
しら・けえる 失喇客額兒	38, 59, 391		
しらてく 失喇迭克(龍虎台)	序59, 376, 520		
しら・むれん 失喇木噠(黃河)	序59		
しりあ文字 Syria	序74		
しるかい 失魯孩	274		
しるぎんちえく 失勒斤扯克	序2, 586		
しるぐえと・えぶげん 失兒古額秃額不堅	140—144, 316		
白を尙ぶ俗	312, 501		
四皇子の分封	475		
親衛の制	562		
親衛の數	318		
羅山の戦	374, 496		

【す】

すいけと 速亦客秃	275
すくせちえん 速忽薛禪	95
すけけん 速客虔	94
すげがい・ちえうん 速客該者温	94, 101, 103, 147, 190, 206, 207
の來屬	94
わんかんを迎へ	147
わんかんに使ひ	190
すべえたい・ばあとる 速別額台巴阿秃兒	序52, 94, 101, 246, 259, 282, 277, 301, 317, 338, 453, 476, 482, 485, 514, 515, 544, 559
の來屬	94
の形容	245—246
とくとあ道窮	259—262, 338
鐵車の勅	259—262
西方十一部征伐	453—464
再征	514, 544
すべがい 速別該	204
するたん 速勒壇	417
の異文	418
の號の濫用	450

けしこん・おとく(番直の宿老)	324
けしゆ 喀施	440
けしみる 客失米兒	458, 482, 514
けすちいむ 客思的步	34.
けたい 客音	278
缺勤の罰	324, 568
けて 客帖	277, 355
けぶてうる(宿衛)	235, 562
の威嚴	328, 563
老宿衛	331—332
の不出	334
の雑務	333—336, 564
の勤方	327, 563
協韻の法	序64
けらる 客刺兒	459, 482
けるれん河 客魯哇	序2, 63, 64, 79, 118, 126, 147, 215, 237, 510
けれいと 客喇亦揚	序53, 65, 73, 103, 145, 265, 296
の内亂	146
の屈服	221
の民の分配	223
けれる 客喇勒	515
けん・むれん 刊木哩	125
げうん・ごるかん →牝馬小河	
げにげす 格泥格思	24, 97
の部長	303
元勳の恩賞	495
げんごうと(家の子)	333
院元	序15, 序18, 序19
元史考異	序17
元史語解	序2
元史氏族表	序17
元史類編	序26
元朝典故編年考	序15
元朝秘史	序14
の來歴	序1

の原本	序1
の原名	序1
の實名と稱號	序34
の音譯法	序68
の漢譯	序10
修正秘史	序32

【こ・ご】

こいてん 關亦田	128
の戰	序37, 126—136
洪鈞	序42
こうぎ 苟吉	278
功臣の恩賞	285
功臣の列擧	272—285
校正元親征錄	序27
こーたん 和關	465
皇天の御子	11
洪武實錄	序11
顧炎武	序68
金の寨(あるたん・ごるかん)	439, 476
黒木城	494
こくせうきぶらく 古克薛兀撒卜喇黑	159, 162, 163, 197, 230, 242
わんかんを襲ひ	163, 197
の慨言	227
の諫	230
告天雀	160
顧廣圻	序14, 序17, 序19
ここ 關關	277
ここしゆす 關關捌思	275, 303, 311, 355, 403
ここちゆ 關關出	92, 120, 274, 307, 354, 357
の捨はれ	99, 307
かつきを捕へ	357
ここちゆ馬丁 關關出	225
ここちゆ・きるきあん 關關出乞兒撒安	204
ここちゆ・てぶてんげり 關關出・帖卜騰	
格哩	356, 363, 366

の讒言	356—357
の横暴	359—362
を打取り	362—365
の死體の消失せ	365
ここ・なうる 關關納兀兒	57, 98, 535
こぜんど河 關罷篤	417
こでえ・あらる 關迭額河喇勒(こどえあ らる)	序2, 118, 510, 586
こどん・ばらか 關端巴刺合	32
こらさん四大城	431
こらずむ 關喇自姆	序30, 399, 431
の異稱	399
の興亡	399
の侵略	431
こるばるくちん 關喇巴兒忽眞	5
これん・なうる 關連納兀兒	27
こんかいごるち 晃孩豁兒赤	449, 451, 480
こんごたん 晃豁壇	23, 38, 94, 109
のちやらか翁 察喇合	43
のかつきを打ち	355
こんごるたい 晃豁兒台	560
こんたかる・ごるち 晃塔合兒豁兒赤	449, 451, 480
ごあい・まらる(慘白き牝鹿)	2
ごあす・めるきと 豁阿思・麓兒乞揚	252
ごあくちん・えめげん 豁阿黒臣額麓堅	67, 68, 69, 82
の功	67
ごおちやく 豁幹察克	101
ごちん・べき 豁眞別乞	166
ごどん・おるちやん 豁敦幹兒長	125, 130, 139
ごにち 豁你赤(羊飼)	100, 336
ごぼげとる 豁字格禿兒	388, 390
ごり・かちやる 豁哩合察兒	565
ごりしれむんたいし 豁哩失列門太石	180
ごりとまと 豁哩禿馬揚	5, 6, 349

征伐	349—352
ごりすべち 豁哩速別赤	224, 236
わんかんを殺し	224
たやんかんを罵り	242
ごりだい 豁哩歹	126
の急報	126
ごりちやる・めるげん 豁哩察兒麓兒干	2
ごりちん・かこん 豁哩眞	110, 112, 117
ごりぶは 豁哩不花	32
ごりらる姓 豁哩刺兒 →ごるらす	
ごりらるたい・めるげん 豁哩刺兒台	5, 6
ごるいかん 豁雷罕	348
ごるかすん 豁兒合孫(ごるごすん)	274, 354
ごるくたく 豁兒忽答黒	322, 355, 566
ごるごなく・ぢゆぶる 豁兒豁納黒主不見	31, 32, 74, 88, 90, 265, 293
ごるち 豁兒赤(箭筒士)	99, 235, 236, 335, 562
の勤方	326
大ごるち	332
の屯營	335
三ごるち	449
四班	566
ごるち・うすん 豁兒赤兀孫	95, 273, 303, 311
の讒言	95, 294
の欲望	96
の恩賞	294—295
のとまと征伐	351
ごるちゆくい・ぼるだく 豁兒出恢李勒答 黒	57
ごるらす 豁囉刺思(ごるらす)	6, 94, 124, 126, 208

【こ】

さあり・けえる 撒阿哩客額兒	106, 162, 197, 237, 239, 251, 386
----------------	--------------------------------------

金國征伐 (→きたと)	序3
の始り	369
の議	519
金築嶺の懸壺	439
金徳興本	序17
今本の來歴	序20
きるまう 吉兒馬兀	26

【く・ぐ】

くいるだる・せちえん 忽亦勒答兒薛禪	100, 182, 302
の負傷	183
の死	189
の遺族の恩賞	219, 312
の恩賞	274
丸を荷ぶ俗	500
丸脚の白藤	270
くうるちん・かんとん 忽兀兒臣合屯	110, 112, 117
くだ 忽答 (親家)	34
くすと・しとえん 忽速禿失禿延	114
くけちん 忽客臣 (牛飼)	333
くちやる 忽察兒	188, 204, 206, 365, 407
ちんぎすかん推戴	98
ぢやむかの言ひやり	105
こいてんの戦	126, 127
軍法違犯	152
ぢやむかと協議	167, 168
の背信	201
くちやる・べき 忽察兒別乞	97
くちゆ 曲出 →くちゆ	
くちゆぐる 窟出古兒 →くちゆぐる	
くぢやうる・うぢん 忽札兀兒・兀眞	193
くと 忽禿	125, 129, 157, 255
こいてんの戦	128
これげとの戦	163
の末路	333

くとくたい 忽禿黑台	157
くとくと・もんぐる 忽禿黑禿蒙古兒 (くとくと・もんれる)	24, 26, 123
くとくと・ゆるき 忽禿黑禿禹兒乞 (→しよるがと・ぢゆるき)	25
くとくる 忽禿忽勒	142, 316
くどもりち 忽圖抹哩赤	101
くとら・かがん 忽圖刺合罕	24, 28, 97, 201, 293
の三子	26
の即位	31—32
たたる出征	32
くど 忽都	198, 252, 256, 258, 259
くどうだる 忽都兀答兒	139
くどか・べき 忽都合別乞	125, 347
の呪	128
こいてんの戦	128, 129
の降附	344
とまと征伐	351, 352
くどす・かるちえん 忽都思合勒澤	93, 235, 424
くなん 忽難	194, 273, 303, 311, 355
の來屬	97
ぢゆちの傳	303
の忠勤	302
くねげん・だば 忽捏堅答巴 (狐峠)	序59, 372
くばかや 忽巴合牙	139, 147
くばりくり 忽巴哩忽哩	199
くびらい 忽必來	93, 100, 152, 237, 246, 273, 301
軍事の司	302
かるるうと征服	336
くむせんぎる 忽木升古兒	158
くゆるだる 忽余勒答兒 (→くいるだる)	
くらあぬうと 忽刺阿訥兀惕	191

くらあん・くと 忽刺安忽惕	164, 198
の戦	序36, 164
の盟	164—166, 191
くらあん・でげれん 忽刺安迭格連	388
くらあん・ぶるかと 忽刺安不噶合惕 (くらあん・ぼるかと)	178, 186
くらど 忽刺都	84, 263
くらんがとん 忽蘭合屯	252, 253, 411, 475
の審べ	254
くらん・ばあとる 忽蘭巴阿禿兒	24, 26
くり・しれむん 忽哩失列門	296
くりやとすぶちと 忽里牙禿速不赤惕	88
くりる 忽哩勒	280
くりりたい 忽哩勒塔	511, 586
くるだかる 忽勒答合兒	90
くるちやくす 忽兒察忽思	278
くるちやくす・ぶいるくかん 忽兒察忽思・不亦噶黑罕	145, 148, 170, 192
くるばり 忽勒巴哩	149
くるぼんでれすと 忽兒班帖列速惕	194
くるむし (忽噶木石) 姓の父子	465
くろがねの車	259
黒きもんごる	229
同紇 →ういうる	
華夷譯語	序10—12
火原潔	序14, 序68
黄河九渡	498
黄虞稷	序15
灌貸祈禱	72
ぐらん・ぐあ 古溫兀阿	119, 293
ぐいぐねく・ばあとる 古亦古捏克巴阿禿兒	374
虞集	序7
ぐせうる・なるる 古薛兀兒納兀兒	147, 195
ぐせん・だりる 古先答哩勒	466, 484
ぐちゆ 古出	120, 274, 307, 354, 357
の拾はれ	87

かつさるを捕へ	357
ぐちゆうと・ないまん 古出兀惕乃蠻	124
ぐちゆぐと 古出古惕 (ぐちゆぐるたい)	158, 197
ぐちゆぐる 古出古兒	100, 101, 276
の封戸	317
ぐちゆるく・かん 古出魯克罕	240
父を罵り	241
の走り	250
の奔竄	257
とくとあとの連合	256
の西遼箕奪	339
の勦滅	339
ぐなん 忽難	194
ぐゆく 古余克	515, 544, 556, 557, 580
の西征	515
の凱旋	550
の即位の大會	588
ぐりえん (圈子)	60
ぐりんえれうと 古嚙額劣兀惕	544
ぐりん・ばあとる 古嚙巴阿禿兒	161
ぐるかん 古兒罕 (わんかんの叔父)	145, 146, 193, 194
わんかんとの争ひ	145—148
ぐるかん 古兒罕 (西遼可汗)	146, 148, 195, 258, 340—341
ぐるべす 古兒別速	226, 228, 229
わんかんの頭蓋	226
の召され	251
ぐれげん 古咧堅 (駙馬)	280, 282, 285
ぐれるぐ 古咧勒古	57, 64, 98, 107, 126

【け・げ】

經世大典	序7
けいべ →きわ・めんけるめん	
けしくてん 客失克田 (番士)	235, 236
の點檢	324—325

の勅方 327
 かしみる 喀施米兒 →けしみる
 かしゆがる 喀什噶爾 466
 かしん 合申 序59, 146, 194, 383, 385
 河西務 391
 かだ 合苔 388, 391, 393
 かだあん 合苔安(かぶるかんの子) 24, 26
 かだあんたいし(あんばかいの子) 28, 31, 32
 かだあん(だるどるかん) 93, 100, 187, 279, 565
 かだあん(そるかんしらの子) 55, 134, 313
 かだい 合歹 281, 565
 かだく・ばあとる 合苔黒巴阿秃兒 179, 218
 かたぎん 合塔斤 19, 110, 124, 250
 かちう 合赤兀 20
 かちうん 合赤温(めねんの子) 21
 かちうん(こむぢんの弟) 33, 50, 68, 358
 かちうん・とくらうん 合赤温脱忽喇温 93, 99
 かちうん・べき 合只温別乞 124, 167, 169, 206
 かちくるく 合赤曲魯克 20, 21
 かちどと 合赤都揚 544
 かちる(合池兒)の水 243
 かちる・うすん 合池兒兀孫 240
 かちやうらと・すぶちと 合察兀喇秃速ト 赤揚 88
 かちやる 合察兒 565
 かちゆら 合出刺 20
 かちん 合臣 20
 かちくりくにるうん 合迪黒里黒你嚕温 196
 かつきる(狗)合撒兒 48
 かつきる →あるかい・かつきる
 かつきる →ちゆち・かつきる
 かと 合揚 258
 かどもり 門者 →えうてち 樺植 200

かびち・ばあとる 合必赤巴阿秃兒 19, 20
 かぶかなす 合ト合納思 345
 かぶとるかす 合ト秃兒合思 24
 かぶらん 合ト蘭 48
 かぶるかがん 合不勒合罕 24, 26, 121, 123
 の七子 24, 28
 河北, 山西, 山東の侵掠 377—379
 かむくんかがん 合木渾合罕 11, 28
 海青 35
 かいど 海都 21, 23
 かゆるがな(白翎雀) 160
 からうん・かぶちやる 合喇温合ト察勃 145, 193
 からうん・ちどん 合喇温只敦 214, 293
 からかい・とくらうん 合喇孩脱忽刺温 93
 からかだあん 合喇合苔安 18
 會河堡の戦 373
 からかるちと(合刺合勒只揚)の沙漠 177—178, 310
 の戦 177—186, 265
 からきたい Karakhitai 序30
 からきだと 合喇乞苔揚 27, 146, 148, 250, 375, 380
 の故都 415
 からごるむ 合喇豁曠木 526
 の建置沿革 529—530
 の位置 530—533, 536—542
 の景況 533—536
 三石碑 538
 からせうる河 合喇薛兀勒 159, 197
 からだる・くちやうる 合喇苔勒忽札兀兒 251
 からちやる 合喇察兒 95, 275, 355
 からち・けえる 合喇只 77
 からちるげん 合喇只嚕堅(からちゆるげん) 57, 98
 から・ばるがすん 喀喇巴勒曠孫 537

からるだい 合喇歹 21
 からるだい・とくらうん 合喇勒歹・脱忽喇温 93, 101
 かりうだる 合里兀答兒 214—215, 217
 かりふあ 合里發 450
 かりべ・しよるたん 合里伯・莎勒壇 450, 451, 481
 かる 合勒(かと) 259
 かるか河 合勒合 188, 189, 233
 かるかい・とくらうん 合兒孩・脱忽喇温 93, 101
 かるぎるしら 合兒吉勒失喇 307—310
 かるたあと 合兒塔阿揚 168
 かるだきだい 合兒苔乞歹 167
 かるちゆ 合兒出 3
 かるるうと 合兒魯兀揚 146, 257, 337
 の降附 336—338
 かんかい山 康孩 239
 かんかす(康合思)の降附 345
 かんかるかん山 康合兒罕 237
 かんぐりん 康鄰(かんぐり, かんぐり) 258, 430, 453, 482, 514, 544
 かんし 韓氏 序20
 かんしう 甘州 498
 かんだすん 罕答孫 72
 かんめりく 罕蔑里克 序13, 418, 420, 423, 468, 476, 483
 がいるかん 該兒罕 434
 がざん・かん 合贊 Ghazan Khan 序25, 序28
 がずに 曷自納 426
 がらん山 賀蘭 →あらしやい

【き・ぎ】

きえふ 乞額甫 461
 起居注 序51
 きしりく 乞失黎黑 26, 173, 177, 223, 278

の注進 174
 の恩賞 222
 だるかんとなる 315
 きしるばし・なうる 乞失勒巴失納兀兒 158, 197
 の戦 序30, 158
 きすがる 乞思合兒 466, 484
 きたと 乞塔揚 序59, 27, 112, 369, 385, 485
 征伐 序3, 369—398
 の軍士 375
 のだるかち 466
 の平定 526
 きたん 乞壇 序59
 きちるばし・なうる 乞赤勒巴石納兀兒 →きしるばし・なうる
 きつたん 契丹 27
 きつねたうげ 狐樟 372
 きぶちやうと 乞卜察兀揚 序59, 258, 454, 482, 514, 544, 555, 559
 きぶちやく 乞魄察克 →きぶちやうと
 己卯の西征 411
 きむちやうと 欽察兀揚 →きぶちやうと
 きむるか・ごるかん 乞木兒合密囉羅 57, 80, 97, 98
 きやと 乞牙揚 36
 居庸關 →ちやぶちやる
 許婚の襲 171
 きらたい 乞喇台 172
 きるご・むれん 乞勒豁木哩 77, 81, 82
 きるえす 乞魯額思 110
 きるぎすと 乞兒吉速揚 344, 346, 347
 の降附 345—346
 起筆谷 506
 きわ・めんけるめん 乞兀綿客兒綿 460, 482, 515, 545
 きんぎやだい 輕吉牙歹 94, 280
 金國皇帝(→あるたん・かん) 序59

【え】

影鈔原本	序20	えぢる 額以勒	544
營盤の分與	572	えでいなる 也迪亦納勒	345
永樂大典	序14	えで・とぶるく 也迪土ト魯黒	158
姚子達	序27	えでる・あるたい 額迭兒阿勒台	162, 197
えうでち 額兀顯赤(門者)	236, 333	えねげん・くいと 額捏堅歸列禿	127
えがいこんたがる 也該晃塔合兒	204	えぶげぢん 額不格眞	167, 168
えぐ 也古	214, 509, 575	ゑぶげん 額不堅(翁)	38
えけ・ごろかん →母小河		えべがい 額別該	110
えけ・ちえれん 也客扯唵	26, 153, 154, 156, 315	えみる(額米勒) 河の駐冬	473
の輕率	173	えめ・めるげん 額蔑蔑兒干	44
えけ・ちれど 也客赤列都	28—31, 71, 83—84	えりがや 額哩合牙	491—492
えけ・にどん 也客你敦	2	えりう・ちゆうつあい 耶律楚材	467
えけ・のやん →とるい		えるくとる 額勒忽禿兒	149
えけ・ばらら 也客巴嚕刺	21	えるぐね河 額兒古捏	125, 129, 130, 208
えけ・ねうりん 也客捏兀嚕	321	えるけから 額兒客合刺	146, 193
えずがい・ばあとる 也速該巴阿禿兒		えるちぎだい 額勒只吉歹	328, 567
序35, 25, 37, 38, 41, 73, 75, 84, 110, 123, 147, 164		えるちし河 額兒失	257, 295, 475
妻狩	28—31	の解	256
たたる出征	32	の駐夏	472
四子一女	33	えるでに・ず 額兒迭尼租	537
ていせちえんとの出遇	34	えるでんとばらら 額兒點圖巴嚕刺	22
毒害	38	鹽州	499
遺言	39	遠征の心得	260
わんかんとあんだの盟約	65, 165, 194		
えずげん・かとん 也速干合屯	154—156		
えずでる・ごるち 也速迭兒	550		
えずぬ・かとん 也迭合屯	155, 487, 503		
塔の殺され	156		
建議	400		
えずんげ 也松格	214, 509		
えずんでえ 也孫帖額(えずんとえ)	321, 332, 335, 566		

【お】

の負傷	185	おいらと 幹亦喇揚	125, 128
の分前	353	の降附	345
の傳	355	翁方綱	序27
相續のうけがひ	407, 408	應里縣	498
うるんげち攻め	433	おきん・ばらかく 幹勤巴兒合黒	24, 121, 123
の即位	509	おくだ 幹黒峯	204
の金國親征	519—522, 527—529	おげれん・ちえるび 幹歌連徹兒必	93, 99, 235, 322, 323
ぐゆく等を怒り	557, 559	おげれ 幹歌列	335
四功四過	序3, 578—581	おごだい 幹歌歹	184, 255, 310, 426, 477, 514, 517, 519, 555
逸事	582		
おごとる 幹裕禿兒	514		
おつちぎん 幹楊赤斤	24, 33, 50, 68, 232, 244, 358, 409, 411, 475, 509, 511, 579		
の形容	249		
の分前	353		
の民のとられ	359		
の泣訴	360		
てぶてんげりを捕ふ	363		
父の遺産を受く	511		
おとく 幹脫克(喝達)	222—223, 227, 314, 556		
おとらる 幹楊喇兒 →うどらる			
おどら 幹多喇	101		
おなん河 幹難	2, 12, 15, 23, 30, 31, 43, 44, 54, 57, 78, 79, 80, 108, 129, 270, 304		
の氷	89		
おなんの林	26, 109		
の人探し	52		
の筵會	序40, 109—110, 117		
おらる・ぐれげん 幹刺兒古喇堅	280		
おるくぬうと 幹勒忽訥兀揚	23, 34, 35, 94		
おるこん河 幹兒桓	77, 83, 243		
おるすと 幹魯速揚	序59, 455, 482, 514, 545, 555, 559		
征伐	545—550		
おるだかる・ごるち 幹勒峇合兒	519		
おるちやいと 幹勒齋禿 Oljaitu Khan			

【か・が】

おるど 幹兒朶	序3	かあたひ・だるまら 合阿台峇兒麻刺	70, 77, 83, 85
四つのおると	587	かあと(合阿揚)・めるきと	70, 76, 78, 83
おるぬう山 幹兒訥兀	189	高昌	序11, 380
の半崖の駐營	233	高麗 →しよらんがす	
おるべ 幹兒伯	41, 42	かうらん 合兀嚕	279
おれがい・ぶらく 幹列該不刺黒	106	かうるか 合兀魯合	44
おれべく・ちぎん 幹列別克的斤	345	かがん 合罕	31
おろなる 幹囉納兒	23, 95	角端	序10, 470
おるんげち 幹囉格赤 →うるけんち		何秋濤	序14, 序27
おるん・どんがいと 幹鑾畫合亦揚	145, 179, 224, 296	がし 合失	119
おんぎ(翁吉)の獵場	535	かしはで 厨官	236
おんぎらと 翁吉喇揚	34, 124, 189, 281—282		
の女子	36		
の降服	251		
おんぎらん 翁吉嚕	278		
おんごちと・けれいと 汪豁只揚答喇亦揚	222		
おんぐと 汪古揚	208, 230, 282, 349		
おんぐる 翁古兒	93, 100, 274, 392		
ばやうと支配	305		
の功	305		

の來屬	94	324, 409
ちやむかに使ひ	105	分前 353
わんかんに使ひ	190, 206, 207	の傳 355
恩賞	235	あるちだい 阿勒赤歹 (亦魯該の親族)
侍衛の長	323	323, 335, 558, 560, 567
老勇士	332	の奏議 558—560
中都に使ひ	392	あるち・たたる 阿勒赤塔塔兒 124, 150
あるすらん・かん 阿兒思蘭罕	336—337	あるとん・あしゆく 阿勒屯阿侯黑 149
あるかい・たたる 阿魯孩塔塔兒	150, 152	あるたん・おつちぎん 阿勒壇赫揚赤斤
あるかるかうぎ 阿兒合勒苟吉	215	→あるたん
あるくい 阿勒灰	124	あるたん・ごるかん →金の寨
あるくい・ぶらく 阿勒灰泉	125	あるでえる 阿勒迪額兒 345
あるたい山 129, 158, 197, 240, 241, 250, 256, 293		あるぶか 阿兒不合 502
あるたい語族 序55, 序64		あるまりく 阿勒馬里克 415
あるたに 阿勒塔泥 308		駐夏 473
あるたん 阿勒壇 26, 97, 173, 188, 206, 365, 407		あるまるまださり 阿囉馬囉馬答撒里 452
もんぎすかん推戴 98—99		あるちと 阿囉刺楊 24, 93
ちやむかのいやみ 105—106		あんだ 安答 序41, 65, 88, 145, 182, 267
こいてんの戦 126—127		あんばかい・かがん 俺巴孩合罕 23, 31, 41
軍法違犯 152		虜はれ 27
ちやむかと協談 167—168		云ひやり 28
ちんぎすかんの責め 201—204		復讐 32
あるたんかん 阿勒壇罕 序59		
(金, 廢帝亮) 27		
(金, 章宗) 112, 113, 115		
(金, 宣宗) 380, 381, 386, 393		
の屈服 381—382		
の弔慰の使 513		
あるたん・てめる (金の天幕) 215		
あるたん・てぶくる 阿勒壇逃ト帖兒 序29, 序33		
あるち 阿勒赤 (阿里出) 279		
あるち 阿勒赤 (按陳) 396		
あるちく 阿勒赤黑 299		
あるちだい 阿勒赤歹 (哈赤温の子) 178,		

【い】

いばか・べき 亦巴合別乞 221, 297, 298	
いり河 伊黎 415	
いる 亦囉 431, 442, 477, 478	
いるかん Ilkhan 序29	
いるがい 亦魯孩 273, 323	
いるく・ぶるかん 亦魯忽不兒罕 386, 501	
いるげ 亦魯格 355	
いれ 亦列 388—390	
いんぢえす 引者思 (監臣) 298	
印度の名稱 452	
韻文の例 序61	
【う】	
ういうと 委兀揚 (ういうる人) 序3, 序5, 146, 148, 257	
ういうと降附の使 341	
ういうる文 序4—5, 序11, 序74	
ういうるたい →ういうと	
ういうるたい 委兀兒台 573	
ういくと 畏忽惕 →ういうと	
の城 146	
ういぐる Uigur 序30	
うくな 兀忽納 398	
うぐすん 烏古孫仲端 422	
うぐるん 烏古倫 397	
うげえ・のーる 兀格依諾兒 532	
うすん・えぶげん 兀孫額不干 →ごるち	
うすん	
うすん翁 →ごるちうすん	
うだらる 兀答喇兒 (→うどらる) 423, 483	
うちゆげん・ばら 兀出干巴囉刺 21	
うぢらる 兀的喇兒 (→うどらる) 432, 475	
うぢん 兀眞 (夫人) 序59, 29	
うどいと・めるきと 兀都亦揚 70, 76, 78, 83, 87, 262	
うときや 兀惕乞牙 127	
うどたい 兀都台 277	
うどらる 兀都喇兒 序53, 序59, 423, 432, 434, 475, 483	
の城攻め 432	
の落城 434	
うぬくち 兀納忽赤 (乳馬飼) 571	
うぶちくたい 兀卜赤黑台 161	
うまづかさ 馬官 (あくたち) 236	
うらあちん 兀喇阿臣 573	
うらかい 兀喇孩 496	
うら河 兀刺 394, 395	
うらくちえる 兀喇黑啜勒 64	
うらる河 兀喇勒 460	
うりかん 兀哩罕 484	
うりやん 兀哩羊 466	
うりやんかん 兀哩罕 7, 17, 20, 66, 94	
うるうだい 兀囉兀歹 22	
うるうと 兀囉兀揚 22, 108, 109, 179, 182, 189, 246, 299, 302	
の歸附 109	
の戦ひぶり 179, 246	
からかるちとの戦 183	
うるくたく 兀魯黑塔黑 129, 158, 197	
うるくい・しるげるちと河 兀勒灰失魯格	
勒只揚 151, 186	
うるけんち 兀兒堅只 序59, 429, 465, 484	
の永持ち 433	
の所在 429	
うるしうん・むれん 兀兒失温木噠 27	
うるすと 兀兒速揚 345	
うるぢや河 兀勒札 112, 113, 114	
うるどち 兀勒都赤 (帶刀者) 101	
うると・きはる 兀兒禿撒哈勒 467	
うるんぐ河 兀囉古 158, 197	
うるんげち 兀囉格赤 →うるけんち	
うわす・めるきと 兀洼思 70, 76, 78, 82, 83	
うんちん 温眞 97	

年 表

皇紀	西紀	干支	太祖(歳)		頁
1822	1162	壬午	(1)	ちんぎすかんの生誕	33
1830	1170	庚寅	(9)	てむちん9歳	34
1838	1178	戊戌	(17)	てむちん, ぼるての婚	63
1849	1189	己酉	(28)	即位	99
1856	1196	丙辰	(35)	たたる出征	112
1861	1201	辛酉	(40)	十一部の亂	124
1862	1202	壬戌	(41)	たたる征伐	150
1863	1203	癸亥	(42)	けれいと征伐	167
1864	1204	甲子	(43)	ないまん征伐	237
1866	1206	丙寅	1(45)	二次即位	269
1867	1207	丁卯	2(46)	ちゆちの北征	344
1868	1208	戊辰	3(47)	ぐちゆるくの西遷篡奪	339
1870	1210	庚午	5(49)	金國出兵	369
1871	1211	辛未	6(50)	金國親征	369
1874	1214	甲戌	9(53)	金國再征	386
1876	1216	丙子	11(55)	めるきとの勦滅	338
1879	1219	己卯	14(58)	西域出征	411
1880	1220	庚辰	15(59)	とらざん攻略	432
1882	1222	壬午	17(61)	ばるあん原駐夏	427
1885	1225	乙酉	20(64)	歸還	474
1886	1226	丙戌	21(65)	西夏征伐	487
1887	1227	丁亥	22(66)	崩御	503
1889	1229	己丑	太宗 1	太宗の即位	509
1891	1231	辛卯	太宗 3	金國親征	519
1900	1240	庚子	太宗12	秘史の成立	586

索 引

	頁
(あぶちかこでける)	224, 233
あぶと 阿卜秃	452
あまる 阿馬勒	565
あむい・むれん 阿梅木唎	477
あむ・だりや 阿木荅哩牙	429
あらい嶺 阿唎	256, 258, 411, 475
あらいえつちん・あつたむるく・ちゆべに Alai eddin Attamulk Juveni	序29
あらう・うと 阿刺兀兀揚	107
あらか・べき 阿刺合別乞	349
再醮三醮の説	283, 285
あらく 阿刺黑	140, 142, 144, 316
あらくいと 阿刺黑亦揚	173
あらくし・ちぎとくり 阿刺忽失的吉揚忽 里	208, 230, 282, 349
あらしやい 阿刺篩(賀蘭山)	491, 493
あらしやす 阿刺沙思	526
あらつえんとくちやる 阿喇淺脫忽察兒	576
あらり 阿刺里	275
あらる 阿喇勒	序2
あらん 阿蘭(→あすと)	456
あらん(阿蘭)びめ	4, 5, 6, 9, 46
三子	9
辯解	10
和合の訓	11
ありく・うすん 阿里黑兀孫	5, 6
ありん・たいし 阿隣大石	149
あるあるとん 阿勒阿勒屯	343
あるかい 阿兒孩	215, 217
あるかい →へ・かつさる	
あるかい・かつさる 阿兒孩合撒兒	序1, 94, 101, 105, 190-335
【あ】	
喝達 →おとく	
あいりうと 阿亦里兀揚	27
あいるからかな 阿亦勒合喇合納	80, 97, 98
あうちやん・ぼろうる 阿兀站孛囉兀勒	2
あうちゆ・ばあとる 阿兀出巴阿秃兒	125, 127, 129, 139
蒼き狼(ぼるて・ちの)	1
青きでぶてる 迭卜帖兒	288
あくたい 阿忽台	323, 335, 386
あくなち 阿黑塔赤(馬官)	101, 236
あさん・さるたくたい 阿三撒兒塔黑台	208
あし 阿昔	序59
あしく・ぐれげん 阿失黑古唎堅	280, 295
あしくてむる 阿失黑帖木兒	298
あしやがんぶ 阿沙敢不	493, 494
大言	410
暴言	491
あすと 阿速揚	序59, 456, 482, 514, 545
あだるきだい 阿答兒乞歹	22
あだるぎん 阿答兒斤	22
のちのす 赤那思	295
あだんかんうりやんか 阿當罕兀唎合	17, 20
あちくしるん 阿赤黑失唎	179, 183, 187, 206
あぢえいかん 阿澤罕	148
あぢない 阿只乃	279
あぢる 阿的勒	515
あときらく 阿揚乞喇黑	342
あどうち 阿都兀赤(馬飼)	101, 336
あぶさいどかん Abu Said Khan	序28
あぶちあ・こでける 阿卜只阿闊迭格兒	

おるぢと ちるきたい 慎あとなる

しやんしと

すけけん おんがいのん だるゝすけ 派いおえらん

するどす

そんかんしら ちらん ちん

なかい 慎あとなる

たいちうだい

なき なくくれけん

たいちうと

くなん ぼかち

たるくたい きりるとく、ごん 知るちやん、あうち物 慎あとなる

ただる(ちやかん、あるち、あるかい、とちうと、びるとし)

てむちん ちけ、ごり 派性、あちえいかん、ぬくちんせうと

えけちえけん たりん けえん

えすけんかたん(女) えすけんかたん(女)

しぎくとく、おちる、ちやらん 派性

たると かだあん だるどるかん 宛辨

ちやうれいと

ちやうれい

ちやん ちか、むる かるく

ちやらいる

てれけと 慎あん ちらん かい ち

かちらん、とくちらん ちらん かい、とくちらん

むちえともく ちらん ちらん

おゆるきん

しよる かくたに へき たい ちゆ

おゆるきん

とめんと へいん ちちくしるん

おるぎん くだく

ちるべん ちちらん へき、もちとらん、とるどくしん

とめんと へいん ちちくしるん

とんがいと

ないまん びん けかん ちやん かん へく ちゆるく かん

くるべす ちん いるく かん

ねぐす ちやかん ちや ちらん ちや

のちきん ちゆん ちや

慎あらん ちるちや ちん、ごとしゆす、ちとく ちん 慎あ

しるべえと ちや ちや

慎あんと ちん ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

慎あす ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

へすと ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

めるきと ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん、ちん ちん

後記

- 本書は有高巖先生監修のもとに那珂通世博士の名著成吉思汗實錄を翻刻したものである。
- 以下に記す二三の點をのぞいては、一字一句忠實に原本を復原したこと言ふまでもない。
- 原本のふりがなは片假名であるが本書に於ては平假名を用ひた。
- 「元朝」のふりがなが、原本に於ては「げんてう」げんてふ」の二通りになつてゐる。本書に於ては之を「げんてう」に統一した。此の如きもの二三。
- 原本には無いが本書卷末には索引、引用文獻、年表、功臣表、諸部の人々を添へた。之は東大物理學教室岩田義一氏の並ならぬ御盡力によつて先づ成り、東方文化研究所の藤枝晃先生の綿密な校閲を経た。更に東洋文庫榎一雄先生の「元朝祕史關係文獻簡目」の執筆に與る。
- 本書の翻刻に當つては、右諸先生のほか、安倍能成先生、和田清先生の御助力を蒙ることが出来、よつて、ここにこの名著を普及し得ることを深い喜びとする。

昭和十七年十月二十一日

筑摩書房編輯部

昭和十八年九月十五日 印刷
昭和十八年九月二十日 發行 (二〇〇部)

成吉思汗實錄

定價 拾圓
特別行爲 五拾錢
合計 金拾圓五拾錢

譯者 那珂通世

發行者 古田 晁
東京都京橋區銀座西六ノ四

印刷者 高田 壬午郎
瀧松市元城町一七三

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

(出文協承認)
あ 40060



發行所

東京都京橋區銀座西六ノ四
振替口座東京一六五七六八
電話銀座(52)二〇五六番

株式會社 筑摩書房
會員番號一七五二七番

株式會社開明堂(印刷甲五五) 矢島製本

